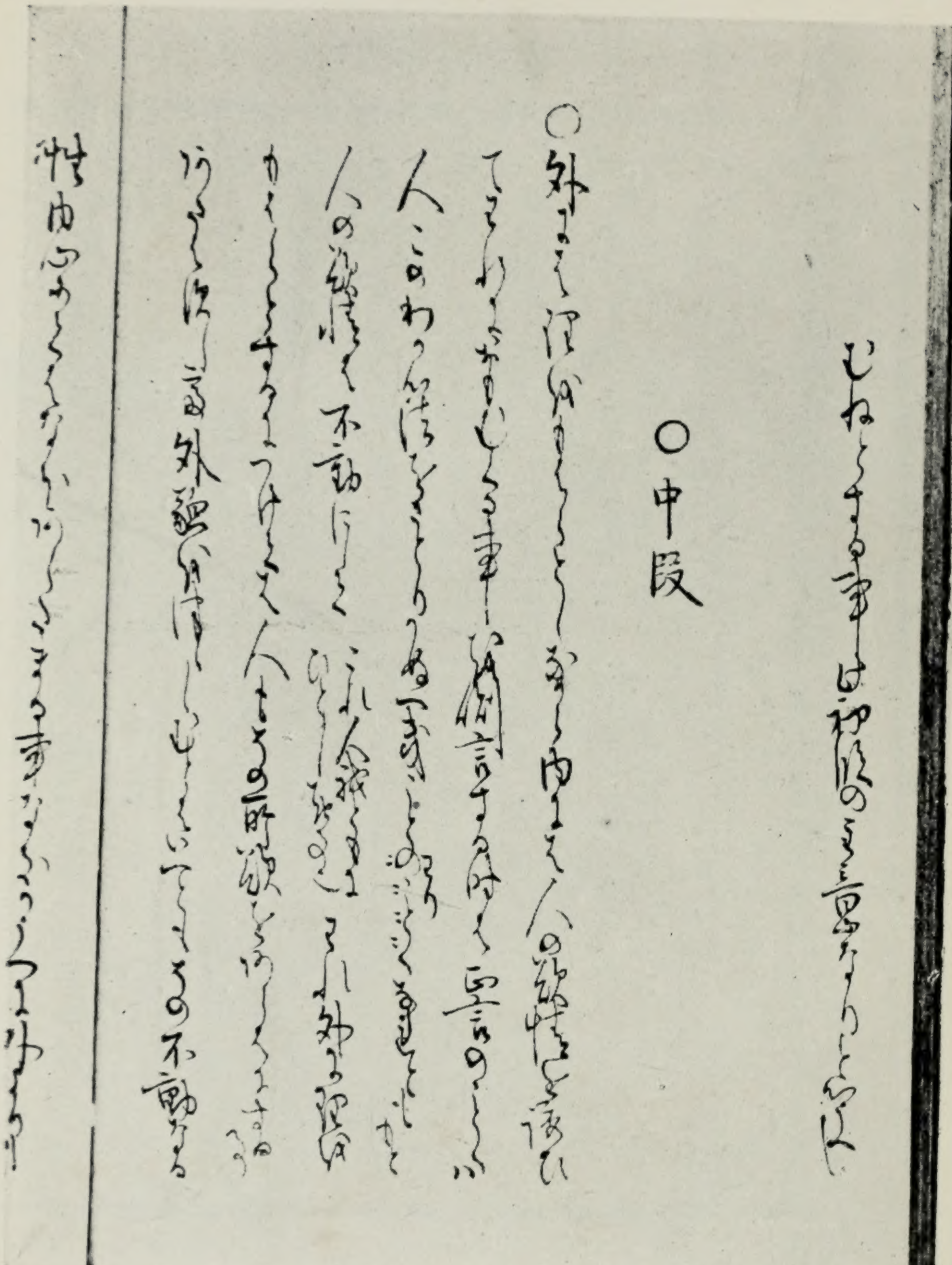
國民精神文化文獻七

富士谷御杖集

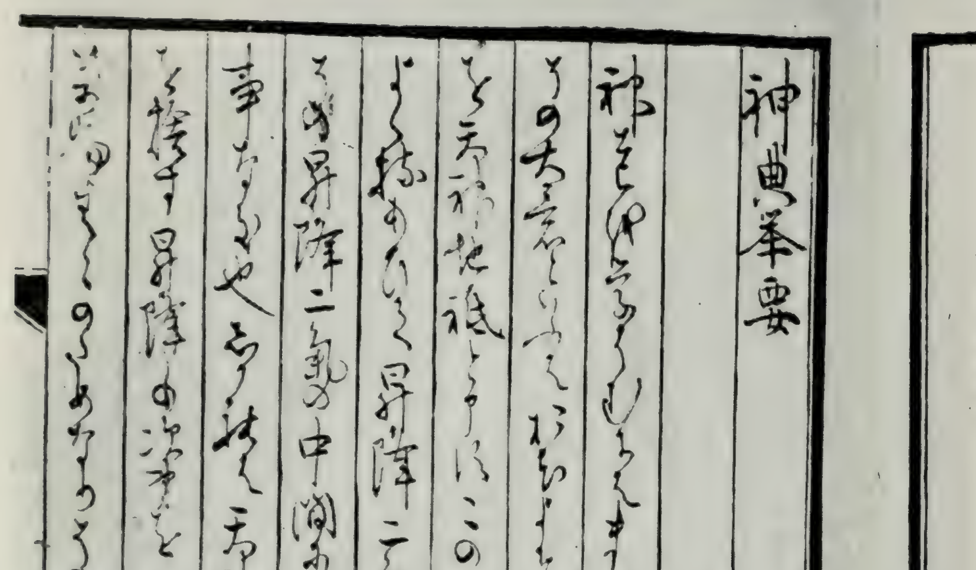
第二巻

國民精神文化研究所

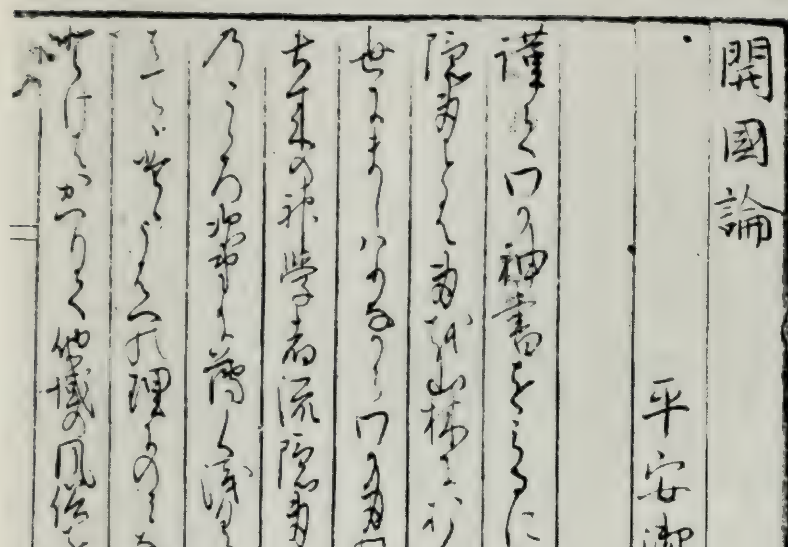


神典言靈（自筆）

（澤瀉久孝氏所藏）



神典學要（自筆）
（本所所藏）

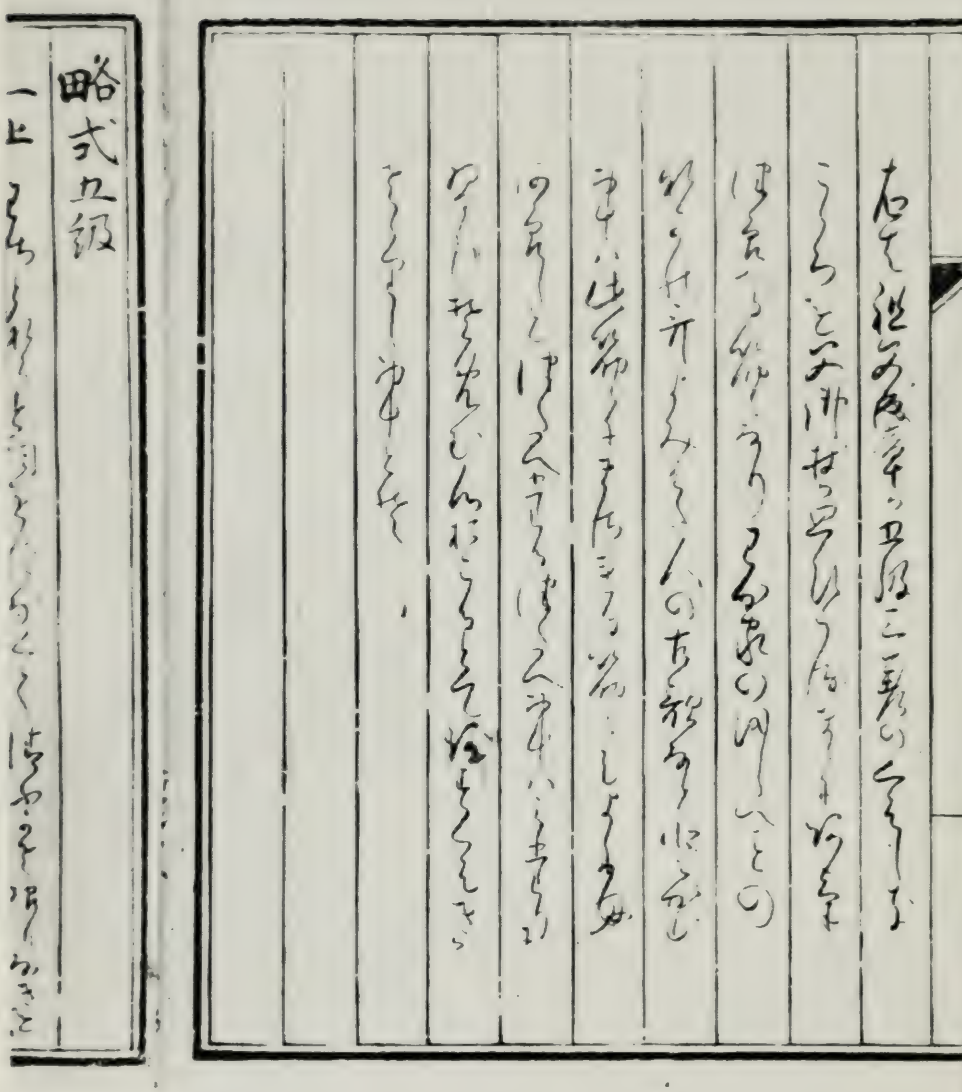


開國論

平安御民中宮成元謹録

開國論（自筆）

（本所所藏）



五級三差辨
（佐佐木信綱氏所藏）

富士谷御杖集 第二巻 目次

富士谷御杖集第二巻解題 …… 解一

富士谷御杖著述一覧 …… 解一八

凡例 …… 解二七

一 神典七神三段奥呂 …… 一

奥呂 …… 四

二 神典言霊 …… 一九

神典言霊大旨 …… 二三

神典言霊巻之一 …… 二六

七神三段神世七代 …… 二六

初段 …… 二六

中段 …… 四五

神典言霊巻之二 …… 五六

第一 淤能碁呂嶋之作 …… 五六

第二　先言之件……六〇
第三　改言之件……六三
第四　河海之件……六五
第五　山野之件……六七
三　神典擧要……七三
七神三段神世七代……八二
淤能基呂嶋之件……八七
先言之件……九二
改言之件……九八
河海之件……一〇一
四　開國論イ……一〇五
五　開國論ロ……一〇八
六　五級三差辨……一一三
五級三差……一一五
五級三差辨……一二〇
略式五級……一二六

九品和哥……一三一
十躰和哥……一三四
七　哆南辨乃異則……一三七
撰集次第……一五四
八　歌道非唯抄……一五七
九　（源氏物語に關する序）……一八四
一〇　三和讃ともしひ……一八五
一一　眞言辯……一八七
上巻……一八九
下巻……二一一
一二　北邊隨腦……二三三
上篇……二三五
下篇……二六五
一三　百人一首燈　草稿……二八五
一四　百人一首燈……三四五
おほむね……三四七

上巻……三六一
下巻……三九七
一五　神樂催馬樂燈……四三九
大旨……四四二
神樂目錄……四五一
神樂名義……四五七
神樂被行處……四六一
神樂興廢……四六二
神樂主意……四六四
注釋……四六七
一六　大祓燈……五〇三
卷頭圖版
神典言靈（澤瀉久孝氏所藏）
神典學要（本所所藏）
開國論（本所所藏）
五級三差辨（佐佐木信綱氏所藏）
歌道非唯抄（佐佐木信綱氏所藏）

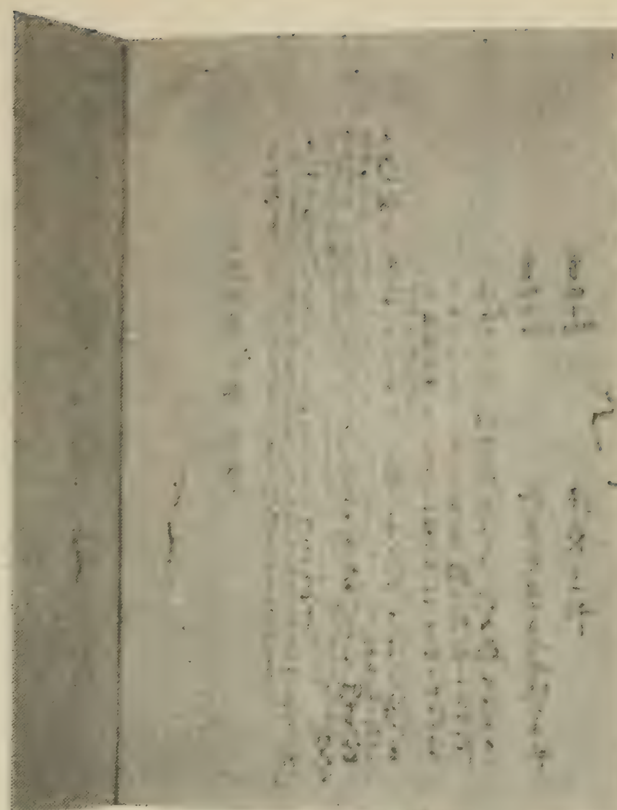
富士谷御杖集第二卷解題

志田延義
三宅清

第一卷に記した富士谷御杖小傳に就いて、之を補ひ得る資料は捜査につれて見出して來てゐるのであるが、夫等は後の卷に於いて取り纏めて報告したいと思ふ。たゞ「成元」を自ら「成はる」と示した例は右小傳に擧げたところであるが、『古今集奔述』（井河基廣筆本福井正滿氏所藏）おほむねに「なりはる」と記してゐることが明かになつた。

古事記燈　古事記燈と『古事記傳』との關係に就いては、第一卷解題に於いて『古事記傳』初帙の刊行が寛政二年である事を基として考へておいたが、成壽がそれよりも多少なりと溯る時期に於いて『古事記傳』の一部分を見得たかも知れないと想はれるので、暫くその餘地を存しておきたいと思ふ。

本卷には第一卷に引き續いて古事記燈の外篇とも云ふべきものを收めるが、古事記燈に就いてはなほ大旨の刊本となる直前の稿本を紹介し得るやうになつた。即ち古事記燈の大旨の稿本には、（一）文化四年五月に原稿を改稿せるもの、（二）同年仲冬に改稿せるもの、二本の存在することを述べ、これらと刊本との三者の推敲改變の模樣を掲げたのであるが、此の上に加へられるものは、（三）右仲冬改稿の形のものを略刊本の如くに稿を成した自筆稿本一



冊（福井正滿氏所藏）であつて、朱墨を以て改稿してゐる。最後の「文化四年丁卯仲冬」の一行を其の儘に存してゐるところより見れば、第二のものに引き續いて筆を加へたものとしていゝ（寫眞參照）。此の稿本を見出したからは、第一卷に於いて便宜脫稿本と呼んだ第二のものは第二改稿本とし、此の第三の稿本を以て脫稿本とすべきであり、之を刊本の前に加へ掲げることが出來る。

古事記燈外篇として數ふべきものは、第一卷に擧げたものに新たに「神典七神三段奧呂」（「七神三段奧呂」とせる本あり。）を加へて、

（大　量（古事記燈大旨による、「大量之件」を指すものならば除くべし））

神典七神三段奧呂　藤原成元謹述　寫一冊　加藤竹男氏所藏

神典言靈　天兒屋命庶裔成元識文化五年　稿二冊　澤瀉久孝氏所藏

古事記首、七神三段　中臣庶裔成元識　稿一冊　倉野憲司氏所藏

神典擧要　中臣御杖著　稿一册　本所所藏

とすることが出來るであらう。『古事記首、七神三段』は第一卷に收めたので、本卷には他の三者を載せるが、是等に接續する意味のものとしては、口授本風のものであるが『古事記神典之略註俚話』（寫一册、無窮會所藏）等を擧げていゝと思ふ。

要するに第一卷及び本卷に收める是等のものによつて、御杖の古事記解釋の作業が晩年に至るまで倦まず續けられたことを明かにし得るのである。

神典七神三段奥呂　赤松祐以の家集たる『葛紘風響』（大正元年刊）の「赤松祐以先生小傳」には『七神三段奥旨』とあり、其の本が現存する由であるが、本卷を編むまでに見ることを得なかつたので、奥書に「嘉永元年戊申霜降月書寫之　大掘所藏」とある加藤竹男氏所藏の寫本によつて此處に收めた。此の稿に於ける「藤原成元謹述」に近い署名としては、『古事記燈大旨』の刊本に「平安　藤原成元」と見えるが、大旨と略前後して成つたものであらうか。

『古事記燈大旨』をはじめとして繰り返して論じてゐる如く、神典一部の大綱肝要は冐頭の七神三段神世七代に盡されてゐると云ふのであつて、奥呂は此の見解に基いて天地のはじめの時に成りませる三神に示されたる奥義を説いたものである。

此の寫本の裏表紙内面なる奥書に

嘉永元年
　戊申霜降月書寫之
　　　　　　　　　　　　　　大掘（堀）所藏

と記せる大堀氏は、京都帝國大學國文學研究室所藏『北邊家月次和歌』一冊を文久元年に寫して居り、同じく研究室所藏『北邊御杖大人家集』一冊と共に所藏せる人で、福田美楯の門人で『神道大意』『伊勢兩大神宮辨』を寫して架藏せる由の知られる大堀有忠であらう。

神典言靈　自筆稿本二冊（澤瀉久孝氏所藏）。『古事記燈大旨』の稿を完成して之を梓に附してゐる間に成つたものと云ふべきで、大旨の發行が「文化五年戊辰初秋」とあるのに對して、『神典言靈』はその大旨に「文化五年戊辰五月」とあり、古事記燈の初期の諸稿本に見る如く「天兒屋命庶裔成元識」及び「天兒屋命庶裔成元述」と署名してゐるのである。

稿本の一は表紙に「自初段至中段」とあり、「神典言靈大旨」「神典言靈卷之一」、七神三段神世七代（初段・中段）」を收めて卷之一とし、二は表紙に「自淤能碁呂島至山野」とあり、「第一　淤能碁呂島之件」「第二　先言之件」「第三　改言之件」「第四　河海之件」「第五　山野之件」を收めて卷之二としてゐる。此の書の著された意圖並びに內容は、大旨の冒頭に次の如く記してゐる。

われ古事記燈をあらはして神典の意趣くはしくのへおきたれと詞の表をとける事繁雑にして實事にかけんにか

へりてまとはしかるへけれは今その言靈はかりを述て衆人實事に切ならしむされとこれ神典の詞をはなれてわたくしにいふにあらねはくだりを低くして本文をしるし神典に照らしみつへき便とせり言靈とは神典のうちにこめ置たまへる教旨これなり

段・件の尾には夫々其の大意を要約してゐるが、實事に切ならしめると云ふ角度から扱つてゐる點に於いて、此の書に先んずると思はれる『開國論』の處世實踐の方途を說く態度に近づくものである。

神典擧要　稿本一冊（本所所藏）。古事記燈の成稿の時期の明かな稿本中最も遲く成つたと思はれる『古事記燈神典』（淤能碁呂島、先言、改言）と同じく「中臣御杖著」と署名してゐる。敍法も『神典言靈』等と同樣であつて、初めに神典に示されたる神道の大意を概說して後、「七神三段神世七代」「淤能碁呂島之件」「先言之件」「改言之件」「河海之件」に亙つて、其の趣意を要約してゐるのである。「河海之件」は中途で筆が絕たれてゐるが、なほ此の稿を續けるつもりであつたと見え、罫紙は十枚ばかり其の儘に綴られてあつたと思はれる。（尤も書店が修繕に際してさかしらに最後の一枚を扉に廻してゐる。）

御杖は此の『神典擧要』に並んで、歌道に就いて文化十四年に『謌道擧要』を著してゐるのであつて、かく相前後して神典及び歌道の擧要を著したことは、晩年の作業として注意すべき意味を有すると思ふ。

開國論　寫本・自筆稿本各一部。何れも未定稿のもので、殊に『歌道非唯抄』・『三和讃ともしび』と共に一冊に合せ綴られた寫本(竹柏園文庫所藏、便宜ロ本とする。本册の末には明治四十二年五月小杉榲邨博士の跋がある。)は、其の後半の稿が覺書風の箇條書をなしてゐる。自筆稿本の方(本所所藏、便宜イ本とする。)も表紙に「開國論　全」とあるけれども、柱に橘仙堂板とある罫紙三丁の表に止まる零篇で、やはり成元時代のものであり、『俳諧』及び『十經本義』以下の經緯に關するものと合せ綴られてゐる。

開國創業の論は古事記燈の中にも言及してゐるが、神典の教へに眼を開いて我が身の世に處すべき「隱身」の道理に就くことが開國であつて、之によつて國家的經營とか國の歷史とかを物語らうと企圖してゐるのではない。從つて『神典言靈』等に說くところを更に處世實踐の具體的な方途として取り扱はうとするものと云ふべきである。此の論は御杖の著述の中で最も心學的な色彩を帶びたものであるが、わけてもロ本の第二部の末は、開國創業の原理としての「隱身」の「仕方」を箇條書にして示してゐるのである。

五級三差辨　本書の寫本二部、半紙本、小本共に竹柏園文庫の所藏になるものであるが、本集に底本とした半紙本の方が帝國圖書館所藏の古事記燈稿本中唯一の自筆ならざるものと同筆の本であつて、御杖の學統を繼いだ福田美楯の筆に成るかと思はれ、本書中の「五級三差辨」の部分に「右は祖父成章か五級三差のくはしきこゝろを父御杖か思ひうるまゝにあけつらへる筋々なり」云々の跋を加へたのも美楯ではなからうかと考へられる。小本は此の

本を寫したものかに見え、附錄の「九品和哥」「十躰和哥」の部分がない。小本の筆蹟、本の體裁、並びに奥に「合田文庫」の所藏印を有する事等は『哆南辨乃異則』の寫本と一致するのであつて、合田とあるのは成章の姉の嫁した儒者合田如玉（名は溫）の家ではないかと思ふ。小本の方では本書の表紙に

成章大人遺傳

五級三差　　辨御杖大人　全

と記し、半紙本の方では本集に收めたやうに朱書してゐる。

本書は和歌に對する父成章の五級三差の傳に御杖が辨を加へたものである。第一に「五級三差」が收められ、第二に「五級三差辨」があるが、第一と第二との關係は必ずしも內容的に傳と辨として峻別すべきものではなからうと思はれ、且つ第一には「壽按」と見える如く成壽時代に於ける御杖の祖述が見出され、之に對して第二には、成元時代に入つてからの著述として、多少の時間的經過と內容的發展とが存すると云へる。

五級三差は「歌の體」の品級であつて、一の級以下夫々にも上中下を分つて下つてゆくが、五の級は難があつてけぢめを立てる埒外にあるものである。而して此の風體的な「歌の體」を差別する要素となるものが、境(さかひ)・旨趣(おもむき)・體(かた)・上(あげ)・影(かげ)である。かゝる修練に必要なる批評の標準を確立することによつて、私の好む好まぬと云ふところを超えて公なる價値判斷が下されるのであつて、是等は武術に於ける形（手）の如く、現實に直面する時、一の級ならずとも所謂時宜を全うするものとしての價値を生ずるとしたのである。而して此の解釋として『歌道非唯抄』等に

も出てゐる「表裏境」を說くところには、御杖の倒語の說への途が開けてゐることを觀るであらう。「略式五級」は實地に歌の弟子を指導するために定めたもので、傳授の形式になつてゐる。藤原公任の「九品和哥」に次いで出してゐる「十躰和哥」は藤原定家の十體であつて、『三五記』等と各體歌に於いて一致するものであるが、かうした抄出の形のものも既に存在したやうである。此の附錄二篇は書寫に際して添へられたものでもあらうか。

哆南辨乃異則　御杖の弟成孚が詠歌の法を問うたのに答へたものである。

「哆南辨乃異則」と言ふ書名は『古今六帖』の

　いつくとてふみまとはせるたまづさぞこゝはたなへのいそならなくに

と言ふ歌に因つたもので、歌道にくらくして踏み惑へる謂の遜稱である。

福田美楯の序に「六運は經にして五級は緯也一運ことに五級三差のけぢめとしなのさだめありてたてぬきにおりなせる綾にしきのごとくになむ」とあるが如く、成章以來、北邊塾では古來和歌に六運とて六期に分たるべき歷史的變遷がある事並びに凡そ歌には五つの品級がある事を說くのであり、六運の何れの時代にもそれ〴〵五級の別が認められ、何れの時代にも一ふし好みに適する風體が存するが、その好みに偏する事なく詠歌の正風を庶幾修練すべき方法心構へを概說したのが本書の內容である。

まづ和歌の風體の歷史的變遷、所謂六運を概觀して其の史的變遷の理法を考へ、次に各撰集各時代の風體の得失

を眺めて、中心として庶幾すべきは中昔所謂三代集の姿であるとし、

　志は三代集にすゑもとづくに萬葉をもてしたすくるに後拾遺より後のよゝの集をもてし補ぬふに諸家の集等をもてし

と言ふ目標を立ててゐる。さうして後に附せられた「撰集次第」は本書に概觀した和歌六運の各運に當る歌集を擧示したものである。

本書は本文の奥の識語によると、寛政六年の五月廿一日に弟成孚の爲に書き示したもので、『歌袋』や『和歌いれひも』などと共に御杖の早い頃の和歌觀並びに和歌史觀を見るべきものである。

因に弟成孚と言ふのも歌道に相當の造詣を有し、此の書の成つたと同じ頃に『和歌梯』の著がある。

本集に收めた竹柏園文庫所藏の寫本は、『五級三差辨』の小本と一類をなす合田文庫舊藏本である。

歌道非唯抄　本卷に收めたものは『三和讃ともしひ』『開國論』ロ本と合册になつた寫本（竹柏園文庫所藏、赤松祐以の筆になるかとも見得るもの。）であつて、これは「平安　富士谷成元述」とあり、成元時代の著述に加ふべく、寛政四年の序跋（皆川愿序、成壽跋）を有する刊本とは全然其の內容を異にするものである。卽ち刊本は、先づ總論があつて、七法（轉法二十法）なるものに及び、假名遣以下の注意すべきことを問答風に掲げた。之に對して、本書は專ら五典を說いてゐるのであるが、修行稽古を力說してゐるところにも、父を通じて中世歌學を繼承せるものなる

ことがよく窺はれるのであつて、御杖の歌論の發展を辿り、其の早い頃の歌論を見る上に注意すべきものである。書名は中に引用し據所としてゐる『貫之髄腦』（新撰和歌序）の文によるものであつて、其の文によつて非唯の道理とも云つてゐるのである。

なほ次の『三和讃ともしひ』との間に收められた一葉は、『源氏物語』に關する作業に添へる序をなすものと見え、「寛政癸丑四月　きたのへのふたよのぬし成のふ」とあることは既に小傳に指摘したところである。

三和讃ともしひ　御杖の所説に淨土眞宗の教義に對する相當の關心が示されてゐることは、第一卷解題に言及したところであるが、本書の如きは此の點に就いて重要なる手掛りを提供するものではないかと思ふ。「三和讃」とは淨土眞宗の開祖親鸞の述作になる『淨土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』の「三帖和讃」の謂である。此の「三帖和讃」の流布刊本の組織に於いては『淨土和讃』の最初に獨立して二首の和讃が揭げられてあるが、それが即ち本書に著手せられた部分であつて、これより刊本の和讃の組織に從つて注釋を進めようと志したものと見られる。注釋の態度としては『百人一首燈』等と同樣に其の歌論を適用したまでのものであり、而も僅かに著手した一葉に止まる零篇に過ぎないが、成元時代に於いて既に淨土眞宗の教義に對する明瞭なる關心を示すものとして注目すべきものである。

眞言辨 二卷は『歌道非唯抄』『北邊髓腦』などと共に成元時代の歌論を見るべきもので、而もその最も代表的なものである。

御杖の考によれば、人の所欲のまゝに之を爲に出す時は時宜を破る、卽ち偏心や一向心卽ち私心をばそのまゝ行爲に表現する私爲は固く斥けられなければならない。さうしてその私心を制して爲に出させないためには神道によつて偏心を和めるべきであるが、而も倘神道によつても慰め難い一向心は、之を歌にうたふ事によつて慰めるのであり、かくして、眞心の境に到り、時宜を全うするのである。要するに「眞言とは眞心となりかねたる時やむことをえずうたひすつる歌を云」ふのである。『眞言辨』は此の意味に於ける眞言卽ち歌について、そのあるべきさまを辨じたものである。

初めに「これはさいつころ成元か友なにかし哥道の意趣をとひおこせたりしに答へつかはしつる也」とあつて全篇消息體を以て綴られてゐる事、『歌道非唯抄』と同じ體裁である。

內容は「歌道の旨趣幷戀哥の論 賢愚の則」、「神道の旨趣」、を上卷とし、「時の弁幷言詠哥の別教悔の論 五典の說」、「眞の辨幷五級の辨表裏境の弁」、「感の辨」を下卷としてゐる。いづれも部分的には御杖の他の著述、『古事記燈』『百人一首燈』『五級三差辨』其の他に說かれてゐる所であるが、それらを綜合してその要點を簡潔に說述してゐる點に於いて、御杖の歌論の中心は本書に盡されてゐると言つてもよいのである。

本書の成立年時に就いては識語の徵すべきものはないが、書中に五典を說いて「猶百人一首燈をあはせてわきま

へ知るへし」とあるから、刊本『百人一首燈』（文化元年刊）の成立以後の作なるは明らかであり、又「文化十二年乙亥臘月念六」の序ある『神樂催馬樂燈』にも、又文化十三・十四年頃に成つたと思はれる『土佐日記燈』にも其の名が見えてゐる。さうして、本書に自ら「成元」と言ひ奥にも藤原成元とあるから成元時代の著であると考へると、「御杖」と名を改めた文化八年以前に成つたと言ふことが出來る。

本書の傳本で編者の調査したものは竹柏園文庫藏本と帝國圖書館藏本とであるが、いづれも誤寫脱字と認められる點があつて完全な本文ではないが、竹柏園文庫藏本の方が比較的善本である。此の二本の傳寫系統は明らかでないが、二本を比較すると墨附・體裁・各行の字配りに到るまで數箇所の微細な差異を除いて殆ど全く一致するのであつて、いづれも相當正實に原本の俤を殘してゐるものではないかと思はれる。今は竹柏園文庫藏本を底本とし、帝國圖書館藏本を以て校合した。本行に立てたのが竹柏園文庫本の本文であり、傍に黒點を附し其の下に括弧を以て示したのが夫に該當する帝國圖書館本の本文である。黒點を附せずに括弧を以て挿入したのは竹柏園文庫本には缺けて居り帝國圖書館本にのみ存する本文である。（但し（ママ）と記した分はその誤植に非ざる事を示さんが爲に今新たに附したのである。）

北邊髄腦　『眞言辨』と共に、成元時代に成つた歌論書として代表的な著述であつて、歌道の概論をなしてゐるのである。上篇には理論的な方面として「歌道」と「神道」とを說き、兩者の關係を明かにし兩者を統一する立場を

示してゐる。下篇には實際的な方面として「詠歌心得」を說き、「哥の時」「詠歌と言語との差別」「五級の事」「體の新古」「三具」「經緯」「よせ哥冠の事」「表裏境」「五典」に分つて扱つてゐる。本書の書名にも、歌道の概說として重要なる問題が盡されてゐることが知られるのである。さうしてかうした髓腦の體制には成壽時代に成つた「歌道非唯抄」（刊本）・「歌袋」や「五級三差辨」からの發展を考へる事が出來る。尚本書の內容は『眞言辨』と共通する部分が少くない。

本書は竹柏園文庫所藏の寫本によつて收めたのであるが、これは『歌道非唯抄』等の合冊本と共に赤松祐以の書寫本ではないかと推測せられるものである。

百人一首燈　文化元年の刊本が流布してゐるが、本集に收めたものは此の刊本と刊本以前の御杖の自筆稿本の一とである。

『百人一首燈』刊本二卷は、御杖の仕へた柳川藩侯の補助によつて刊行せられたものであつて、御杖の「燈」の最初に位するものである。

本書は「おほむね」と歌の注釋とから成つてゐるが、まづ「おほむね」に於いて歌の詠み出される過程に就いて解說し、歌の釋義に就いて本書の試みる形式を概說してゐる。各歌の釋義は語句そのものの解釋は極めて少く、歌の傍に俚言を添へた程度であつて、主とする所は歌の詠まれた環境や事情に就いての說明である。即ち、歌は止み

難き一向心を言行に出さじが爲の道であるとの見解から、此の百首の歌が如何なる作者の一向心から生れたものかを說く點に重點を置いてゐるのである。

釋義の形式は大體其の歌の詠まれた環境と其の心の概略を述べ、作者の一向心の性質を說き、終に作者がよく歌に逸して一向心を慰め時宜を全うした心ばへを賞讃すると言ふ殆ど同じ形式に於いて記されてゐる。中に注意すべきは題詠の歌をまことならずとして斥けた點であり、兼覽や忠岑の歌の如きは題詠としても眞に迫つてゐるので、御杖も甚だ之を惜んだのであるが、もと、歌は止み難き一向心を慰める道であると解する御杖に於いては、歌合の歌や題詠の歌の如きは正道として許されないのであり、隨つて、百首中、題詠の歌に就いては前記の如き說明を略してゐるのである。歌の成立年時の考證も、僅かに順德院の御歌を「もゝしきや」とあるによつて佐渡御幸以前と推した外は殆ど考證らしいものを見ない。

今日の言葉で言へば、本書に於いて御杖の企てた所は文學の生れ出づる環境と作品との關係に注目したものと言はるべく、心中の欝情が歌となり文學となる過程を主として說いたのが本書であると言ふことが出來る。勿論、御杖に於いては文學となるべき心の率直なる表現は取らない所であり、欝情を逸らす、言ひ換へれば時宜を全うすると言ふ根本的立場に限定せられてゐる所に、表現への研究としてはなほ一面的なるは免れない。しかし、古來、數多い百人一首の注釋の中にあつて、斯くの如き釋義を試みたのは特筆すべき本書の特色である。

『百人一首登蓑新備』草稿一冊は御杖の自筆稿本であつて本所の藏する所である。刊本『百人一首燈』の「おほむね」によると、

この年比この百首にかゝづらひて、注の詞をさま〲にかき試み、おほよそはじめより草稿五百かへりばかりに及べり、さるは十首二十首にしてあらため、又は五十首七十首にてもとにかへりき、(凡ノ六オ)

とある如く、刊本の如き『百人一首燈』の脫稿以前には數多の草稿が存したと考へられるのであるが、今本集に收めた草稿も其の中の一であらうと考へられる。

此の草稿本は百首の中、第八十一の後德大寺左大臣の歌までの注であつて、刊本に比較すると草稿には「おほむね」が無く、又歌の釋義も刊本よりは語句の解釋に多くの紙面を費してゐる。さうして「表」「裏」「境」「神」などの項を立てて歌の心の全貌を說き現さうとしてゐるのであつて、場所によつては刊本に於けるよりも遙かに詳細なるものがある。たゞ刊本に於いては各歌の釋義の形式が一定してゐるのに對して、草稿本に於いては區々であり未完成である。又刊本に於いては全く御杖の獨創說が全面を覆つてゐるに對し、草稿本には契沖の『百人一首改觀抄』が相當廣く投影してゐる。草稿本を刊本に合せ讀むことによつて御杖の學的體系の發展を理解すべきである。

神樂催馬樂燈 一卷は御杖の神樂催馬樂に關する研究の一端を示したものであつて、未完の零篇である。

本書の內容は、まづ「大旨」として神樂・催馬樂の成立年代を考察し、次に「神樂目錄」として宸筆本・絲管抄・

内侍所御神樂式・拾芥抄・躰源抄・梁塵愚案抄・簾中抄などによつて異同を擧げ、以下「神樂名義」「神樂被行處」「神樂興廢」「神樂主意」の總論がある。注釋としては「庭燎」から「幣」までの分のみであつて、夫以下及び催馬樂の注は無い。

神樂催馬樂の注釋は、御杖以前のものとしては『梁塵愚案抄』と眞淵の『考』、及び部分的なものとして長流の『愚問雜記』、契沖の『河社』、今井似閑の『萬葉緯』などがあり、御杖以後のものとしては本居大平の『新釋』、橘守部の『入綾』、熊谷直好の『梁塵後抄』、吉田蕃敎の『辨解』などを主要なものとするが、本書に於いて御杖は『愚案抄』（注秘抄とも）と似閑の研究とを參照してゐる。本書が右の諸注に對して有する大きな特色は、注釋自體よりもその大旨や神樂に就いての神道的な解釋に存する。即ち御杖は神樂・催馬樂の時代を考證して、其の歌詞に見える地名や歌語の形態や、音便や、音語・佛語などの使用、他の文獻との比較などによつて、長岡久邇の京の頃より平安京の初頃のものであらうとし、神樂の主意に就いては其の濫觴である天磐戸前の俳優の意を神道的に解釋し、素戔嗚尊の勝佐備によつて生じた「あづなひの罪」（『古事記燈』などに所謂「混沌」に當る。）を除き天照大神を招き奉る意であると解する。そこには古事記神典の解釋に於ける御杖の立場をそのまま反映してゐるのである。

本書の名は『土佐日記燈』『北邊隨筆』などに見え、又「大旨」の終の識語によると「文化十二年乙亥臘月念六」とあつて『古事記燈』後期の諸稿と略同期に屬すべき述作である。

本書は注釋書としては甚だ僅かな零篇であり『新釋』や『入綾』の整備せるには比すべくもなく、殆ど流布しな

かつたものの如くであつて、傳本も今までのところ本集に收めた倉野憲司氏所藏の傳寫本の外に傳聞しない。此の傳寫本は、杜鵑花園文庫舊藏本であつて、五十嵐篤好の傳へたものではないかと推測せられる。明治四十二年十二月、佐佐木信綱博士が跋を添へられて本書を評して居られる。

なほ催馬樂に就いては御杖に『催馬樂三歌の事』の著がある。

大祓燈 刊本一冊。御杖の講義の聞書によつて其の學統を承ける赤松祐以が上梓したものであつて、明治六年の刊本があり、又明治十二年刊の異版もある。福田美楯筆の『北邊大祓祝詞』(河野省三氏所藏)はこれと一類のものであつて、刊本に存しない多くの注記を見る。

本書は延喜式祝詞の中の大祓詞の釋義であるが、單なる訓詁注釋の書ではなく、むしろ御杖の神道説を此の大祓詞の上に演繹したとも言ふべき性質の書である。其の解釋は隨つて言語の注釋ではなく字句文章を象徴的に解する點に於いて、賀茂眞淵の『祝詞考』以下の文獻學的な注釋書とは其の撰を異にする。

御杖が大祓詞の釋を書いた事は『古事記燈』に見えてゐるが、今、本集に收めた『大祓燈』は門人の聞書編成に係るもので、嚴密な意味では御杖の著述とは言はれないかも知れない。たゞ之によつて御杖の大祓詞の釋の大體を知ることは出來るであらう。

本集には明治六年刊本によつて收めた。

富士谷御杖著述一覽

富士谷御杖の著述に關して本卷の編成までに調査せるところを掲げ、御杖が研究の方面乃至範圍を觀るよすがたらしめると共に、編者の見聞の及ばざるものに就いて大方の教示を得て「富士谷御杖集」を大成したいと思ふ。

（＊本集既收）

成壽時代

詞葉新雅　刊一　寛政四年壬子秋九月（刊記）

歌道非唯抄　刊一　寛政四年序跋、富士谷成壽口傳、門人榎並隆璉等筆授、弟成基・成胤校

歌　袋　刊六　寛政五年癸丑秋（刊記）。「近代名家著述目錄」に八卷とあるは不可なるべし。「日本歌學全書」第十二册・「歌學文庫」第三册・「和歌叢書」第七册（和歌作法集）に第一卷の大部分を收む

百家類葉　刊二　薄葉本一册

成元時代

＊五級三差辨　寫一　竹柏園文庫藏本。同合田文庫舊藏本。成壽時代に始まる。福井正滿氏藏「歌學隨筆」（赤松祐以編）所收本

＊哆南辨乃異則　寫一　寛政六年皐月（識語）

和歌いれひも　刊一　寛政六年十二月序。寛政七年乙卯五月（刊記）

＊百人一首登裳新備　稿一　本所藏本

＊百人一首燈　刊二　文化元年甲子冬（刊記）

＊開國論（イ本）
俳　諧
十經本義・各義・經緯本義
經緯各義・五十音各義
　　稿一　本所藏本。「俳諧」の内題の下に「如蓮華道人著」とあり

＊歌道非唯抄
＊（源氏物語に關する序）
＊三和讃ともしひ
＊開國論（ロ本）
　　寫一　竹柏園文庫藏本

＊北邊髓腦　寫一　竹柏園文庫藏本

＊眞言辨　寫二　竹柏園文庫藏本。帝國圖書館藏本。「土佐日記燈」刊本に「直言辨」とあるは此の誤植か。「隨筆文學集」所收

古今集序述　寫一　文化二年九月序。福井正滿氏藏本

＊古事記燈（古事記）　稿一　文化二年頃成れるなるべし。帝國圖書館藏本

＊古事記燈第三十七大御寶之件（古事記燈　之卷）稿一　帝國圖書館藏本

＊古事記卷一　七神三段神世七代（第一）（上卷神典第一）稿一　帝國圖書館藏本

古事記燈大旨　稿一　文化四年丁卯五月（識語）、京都帝國大學國文學研究室藏本

古事記燈大旨　稿一　文化四年丁卯仲冬（識語）。帝國圖書館藏本

古事記燈大旨　稿一　文化四年丁卯仲冬（識語）。福井正滿氏藏本

＊古事記燈大旨　刊二　文化四年丁卯仲冬（識語）、文化五年戊辰初秋發行（刊記）。大正十四年刊本あり

俳諧天爾波抄　刊六　文化四年丁卯仲冬（刊記）

＊神典言靈　稿二　文化五年戊辰五月（識語）。澤瀉久孝氏藏本

＊古事記首　七神三段　稿一　倉野憲司氏藏本

神紀通俗　稿一　竹柏園文庫藏本

＊古事記神典燈（古事記燈卷之一、上卷神典第一）寫一　帝國圖書館藏本

＊神典七神三段奧呂　寫一　加藤竹男氏藏本。「七神三段奧宮」とせるものあり

御杖時代

＊古事記燈神典（天地初發）第一（古事記燈第一、神典一）稿一　文化八年辛未臘月廿九日（識語）。京都帝國大學國文學研究室藏本

＊古事記燈卷之一（上卷神典第一）稿一　帝國圖書館藏本

＊古事記燈卷之一（上卷神典　七神三段神世七代）稿一　加賀豐三郎氏藏本

戀歌合（序・判詞）　自筆　文化甲戌四月序。福井正滿氏藏本

＊神樂催馬樂燈（神樂燈）寫一　文化十二年乙亥臘月念六（識語）。倉野憲司氏藏本

＊神典學要　稿一　本所藏本

*（古事記燈）國神生の段　稿一　帝國圖書館藏本

北邊隨筆　刊四　文化十三年丙子三月序。「百家說林」・「日本隨筆大成」所收

北邊三十番歌合（判詞）　寫一　文化十四年丁丑仲冬。京都帝國大學國文學研究室藏本

*古事記燈神典（淤能碁呂島、先言、改言）　稿一　文化十四年丁丑十一月廿八日始援筆云々（識語）。上田萬年氏藏本

土佐日記燈　刊三　文化十三年丙子三月廿一日（大旨識語）、文化十四年丁丑五月二十日（識語）、明治三十一年十月刊

神道大意
伊勢兩大神宮辨　寫一　「神道大意」の識語に「文政二年己卯八月門人のためにしるす」とあり。河野省三氏藏本

經緯畧辨　一枚　文政四年辛巳十月（識語）。（「立命館文學」第二卷第十一號）

萬葉集燈　刊五　文政五年壬午正月序。「萬葉集叢書」所收

神明憑談　（一）　文政五年。竹柏園文庫藏本

伊勢兩大神宮辨　稿一　南大曹氏藏本。「伊勢兩大神宮辨」は文化八年以前成か

兩宮辨（伊勢兩大神宮辨）　寫一　福井正滿氏藏本

伊勢物語燈
北邊消息　稿一　竹柏園文庫藏本。「伊勢物語燈」は「古事記燈大旨」に其の名見えたれば文化四年以前に成りしもいなるべし

脚結變例　稿一　本所藏本

催馬樂三歌の事　「立命館文學」第二卷第七號「富士谷御杖の著書二部に就いて」

五體辨（和歌五體辨）　同前

脚結抄翼　稿二

詞道擧要

富士谷御杖大人家集　寫五　靜嘉堂文庫藏本。竹柏園文庫藏本は零本なり

北邊御杖大人家集　寫一　京都帝國大學國文學研究室藏本

富士谷御杖家集　寫二　福井正滿氏藏本

富士谷御杖大人歌文　寫三　帝國圖書館藏本

遺問兼　文政七年三月五十嵐篤好編（「國學院雜誌」第廿五卷第六號「富士谷御杖大人の生活下」による）

さかき（二上り）　富士谷御杖述、藤崎撿校・八重崎撿校調（「新うたのはやし」）

常夜のきよく　富士谷何某調、哥のさくも仝也（「歌謠集」）

口授本

裝　抄　刊　富士谷御杖口授、門人福田美楯筆受。昭和九年七月刊「かざし抄」附錄

北邊大祓祝詞　寫一　北邊家口授　福田美楯（識語）。河野省三氏藏本

＊大祓燈　刊一　赤松祐以跋、明治六年十二月(刊記)。明治十二年刊本もあり

古事記神典之略註俚話　寫一　北邊門人の編なるべし。無窮會神習文庫藏本

筆寫本・書入本

唐王右丞詩集　自筆　福井正滿氏藏本。成壽の訓注あり

堤中納言書入本　寫一　以北邊藏書官暇書寫如本加朱畢文化元年八月八日中務少輔泰行(奥書)。成元

狹衣書入本　自筆　文化十三年丙子九月(識語)。福井正滿氏藏本。承應三年刊本に朱墨の書入あり。成元。御杖

あゆひ抄書入本　廣島高等師範學校藏本。御杖

神樂解催馬樂解　寫三　倉野憲司氏藏本。彥根義兄著

うつぼ物語書入本　松井簡治氏舊藏本。壽按。元案。元云。延寶五年刊本に書入あり。東京文理科大學國語研究室藏本。(「國語・國文」第七卷第二號「宇津保物語傳本考」)

編書

兼豐詠草(序)　自筆　文化十一年十一月序。福井正滿氏藏本

北邊百首　自筆　文化十三年十一月當坐認(識語)。福井正滿氏藏本

北邊成章家集　刊二　弘化三年年刊(刊記)

北邊成章家集　刊一　歌文珍書保存會刊本

北邊成章家集　寫一　福井正滿氏藏本

北邊成章家集　寫二　靜嘉堂文庫藏本
北邊歌集(上・中・下　雜)寫一　福井正満氏藏本
七體七百首　刊一　寛政九年九月跋

未詳

新隨腦　刊本「歌道非唯抄」に見ゆ
永言功用　「歌袋」巻一「五則」に見ゆ
冠の本抄　「歌袋」巻二に見ゆ。冠詞を注したるものなるへし
古今集の抄　「歌袋」巻二に見ゆ
亘豆美　「神樂催馬樂燈」に見ゆ
大量　「古事燈大旨」に見ゆ
經緯弁　「俳諧天爾波抄」に見ゆ。刊本「歌道非唯抄」にも「たてぬきの弁」とあり
古歌脚結　「俳諧天爾波抄」に見ゆ
禊祓正式　「北邊隨腦」に見ゆ
萬葉集燈百餘巻　「富士谷御杖大人歌文」所載、篤好識略傳。刊本「萬葉集燈」大旨に見ゆ
大祓の釋　加賀豊三郎氏藏「古事記燈」巻之一に見ゆ

言靈辨　「俳諧天爾波抄」「土佐日記燈」に見ゆ。「古事記燈」大旨の「言靈辨」とは別か

あゆひ玄義　「富士谷御杖大人歌文」所載、篤好識略傳に見ゆ。文政四年成

古事記燈畧　右同略傳に見ゆ

天地初發等之圖　右同略傳に見ゆ。文政五年刊

哥の五級　右同略傳に見ゆ。寫折本一枚

催馬樂ともし火　右同略傳に見ゆ

俳諧七部集注　右同略傳に見ゆ

箏曲の譜　右同略傳に見ゆ

百首抄　「慶長以來諸家著述目錄」に見ゆ

假名訓纂追考　右同目錄に見ゆ

土佐日記燈廿四卷　右同目錄に見ゆ

北野文集　右同目錄に見ゆ。「慶長以來國學家略傳」に「北邊文集」とあるは是か

和歌梯北邊成元四季之部二　「水玉堂藏板和歌連俳書目」に見ゆ。刊本には寛政六年成孚の序ありて文化十一年刊

同後編同上　戀雜之部　五　右同書目に見ゆ

歌道てには祕藏錄增補北邊成元　一　右同書目に見ゆ

詞葉新雅二編　右同書目並に「近代名家著述目錄」に見ゆ

百家部類抄北邊成壽　同前

五十音聲妙　「百人一首燈裳新備」稿本に見ゆ

書簡・幅物

自作歌注　東京帝國大學國文學研究室藏

五十嵐篤好其他宛書簡三卷　五十嵐氏藏

香川景樹宛書簡一通　小西大東氏藏

幸丸勘介宛書簡十二通（「國學院雜誌」第廿五卷第四號「富士谷御杖大人の生活下」）

畫贊二幅・和歌四幅・書一幅　福井正滿氏藏

凡例

一、本卷は第一卷に引き續いて『古事記燈』の外篇とも云ふべき諸篇を收め、併せ見るべき『開國論』『大祓燈』を之に次いで、歌論及びこれが適用としての燈の若干を以て後半を編成した。

二、所收の諸本中、本所所藏本並びに刊本の外は夫々所藏者各位の好意によるものである。研究資料の調査蒐集に就いては第一卷序に識せる外、文學博士佐佐木信綱氏、福井正滿氏、其の他の方より教示を得てゐる。共に深謝する次第である。

三、編纂の方針は解題に斷る外は第一卷に同じい。

四、本卷の校訂は國文學科所員志田延義、編輯事務囑託三宅清、同青柳秋生が之に當り、解題は志田延義、三宅清が之に當つた。

神典七神三段奥呂

七神三段

藤原成元謹述

天地初發之時於高天原成
あめつちのはしめのときたかまのはらになりませる
神名天之御中主神次高御
かみのみなはあめのみなかぬしのかみつきにたかみ
産巣日神次神産巣日神此三柱
むすひの神つきにかみむすひの神このみはし
神者並獨神成坐而隱
らのかみはなへてひとりかみなりましてみゝ

身也

をかくしたまひき

奥呂

天地のはしめの時といふは天成り地定りはしむる時と云也此書さま甚意味あり天地開闢する時分に此神のなりませるといふにはあらす此神の御徳によりて天地も開闢したるなからさやうにいへは何そ此神の御わさありて天地をひらかせ給ひしやうに聞ゆへしそれにては惣躰神道の意に大にたかふ也かやうにせむかやうになさんとおもひてするは神道の教にあらすたゝなにとなくする事の其功廣大なるか我國のをしへの正面なり此故に此詞天地よりさき歟神からさきかまた同時歟いつれとも定めぬ書さま也これは惣体此下文へまてもかけていへる也下の天之常立神國之常立神のなりませるか実には天地定まれるをいふ也されはこゝにたゝへはしめの時とはかりかけるをよく〳〵おもひて神道の本意をさとるへし天地開闢といふ事世人大にその意を得す今みゆる蒼々たる天この厚き地のなかりしか出來はしめたる事とおもふは神道の意にあらす凡神書のみやうは一語一句も記事とはかり心えてはつひに神道の意を見る事あたはさる事なりたゝ一句一字もみな神の妙用をさとしたる物な

れはたゝの記錄のことく物にいたく拘りて見るましき也これ神書を學ふものゝ第一の心得なりされは天地開闢といふも天は天の用をほとこして地の用をたすけ地は天の用を受て万物を生々する其妙用のはしめて出來たるをは開闢とはいふなりものゝ用にもたゝぬものはたとひありてもなしとし物の用にたてはなくてもありとするか神道の見やう也されは天地といふものもいつよりかやうにありしかはしらすたとひありても天のとき地の用そなはらさるはいかてかありといはむされは天地開闢はたゝ此神世のみにあらす今の世にもその國その家その人の神道あるとなきとにて天地とちたるもひらける所もあるなり神道の修行をしゆけはとちたる天地もやかてひらくへき事此末々を見てさとるへし天を上にいたゝき地を下にふみなからその天の時其地の用國家をたすけぬは天地のとちたるなりへ於高天原此たかまのはらといふ事あまくたり給ふなといふからは天に屬したる所なりしかれとも天地の定まるか定まらぬかの時の事なれは後世よりなつけて高天原とさしたる物にはあれとも畢竟の所は此神たちのおはします所をたかまのはらといふなりもとよりいきても見られぬ處の事なれは天にある歟いつかたにあるかつよく吟味に及はぬ事なりつよく吟味したりともたしかにこゝと人に示す事もならぬ所なりされともいきてもみられぬ所にしてあるに相違なき所なるからはなにゝもふれありとせてかなはぬ事也この故に高天原はいつくいつかたといふ事はしらねとたゝ此神たち

のおはしますへき所をさしていふ也としるへしこれ又神書の見やう也さりなからたゝ大やうにはかりもいはれぬ事なれはそのいつくいつかたといふ事こそしられねいかなる所をは高天原といふそといふ事を思ひしるへしこれをいかにといふに三國はいふに及はす日本の内にてすら何の國々とわかれていふ所は必その土地の風俗といふものかある也されは此高天原にも風俗かありて此今のわれらかをる所のあしはらの中津國の風俗とはたかふ事あるなりあり所のせんさくをやめてこれをしるか神道の全体の身のするゑ所なりこの高天原に身をするゑねはなに事の學問修行もみな理のうへになりて我身かぬける也扨此高天原の風俗をしるやうに法あり勿論後には次第にさかりになりて神も多くなり男神女神も出來御子なとも出來たれとも此高天原に御身をするゑたまひし元祖は天之御中主神なりされは此神の御ありさまを能見こみて此高天原の風土のさまをしるへき也此天之御中主神ふとこゝになりいてさせたまひし時は君なく臣なく父なく母なく兄なく弟なく妻なく子なく民もなく朋友もなし勿論衣食住財宝器用ともになかりし也かく何もなき所に我身はかりありとするか高天原也されはかゝる風俗なる故に次々の神々男女なともおひ／＼出き給ひさま／＼の物も出きたれとひとりもひとつもありとたのまぬか高天原の風俗也此後々の神の此高天原におはしましたるはみな此御風俗也さてかく人も物も何もなき所かすへて人の肝要の事にて天地萬物の生してめてたくかくなれるは

此なにもなき所よりなり出たる也これは無をたふとふにあらす有の本へかへるをいふ也人事にていはゝ仁義忠孝のおのつからおこるは卽此高天原よりおこるなりその故は仁義忠孝をさまたくる物は人を損し我を利せむとする心なりその利せむとするに物なくまたむかふにたつ人なければ我身をすつる我慾を斷するなとゝこと〳〵しくいはてももとよりさやうの心はなき也さやうの心なくして人事をおこなへはするほとの事仁義忠孝ならすといふ事なかるへしこれをもて仁義忠孝の本也とはいふなりへ隱身の事つまひらかに此下文にいふを見てしるへけれといま其端をいはむ此隱身といふ事すへて人の言行のうへにての仕方をいふなりこれ卽かの仁義忠孝をおもはすなさむか爲にして身をかくすとは其仁義をさまたくる心をなからむやうにわか身を高天原にすゑおくを隱身とはいふなりされは人の身をかくすは世間へおし出しての上の事也その身はいつかたにかくすそといふに高天原にすうるなれは高天原はすへて人の第一身をおくへき場所也此故に人としては今ある所の君も臣も父も母も妻も子も兄も弟も朋友なとも其外衣食器財の類もひとつもたのみに思はぬ心をとくと決定するを高天原に身をすうるとはいふなりすへて君も臣も乃至朋友なとも器財なとも此高天原よりなり出たるにはあらすならひに人事のしらす〳〵仁義となる事もたゝこゝよりいつるにあらては皆形はかりのつくりものしひことなりしかと此高天原にたに身のすわれは人物共に願はすしておのつか

らなり出思はすして言行仁義となる事神の御教格別なる所なりかつてうたかふへきにあらすいかにとなれは我たのむ所をのこりなくさりてあれは必ほかよりあはれむ物となるか故なりそのあはれむ所よりなにこともしらす〳〵なりいつる也こゝよりなりいつるにあらねはたとひ何ヶ國の君となり何百万億のたからをもてりともたゝ無きにひとしきこと也世にさかりにある人のうへを見もてゆくにおのつから此高天原より得たるもあれとおほくは此所より出ぬか十に八九也いとあやふき事に我神學の眼よりは見ゆるなり仁義忠孝をおこなふ人とても亦かくのことしされとも老子かいはゆる無爲といふには事たかへりまかはすへからす中庸の道なとも似て非なり又佛のいはゆる羅漢なとの見のたくひにもあらすこれらの差別下の隱身を辨したる所にておもひうへしなにゝもあれ身をかくすひとの身をかくしておく場所にして万事万物の出くる源なりとしれはよき也さてかくのことく我身をしかとすゑたる所はとりもなほさす高天原也されはいつくいつかたにありともしれぬはすなり身をしかとすうれは高天原眼前なり身のすゑやうたしかならねはいつくいつかたまてたつぬともこゝとしる事あたはさる所そかし下文におひ〳〵天神の御もとなといへる所こゝかしこにみゆるを思ひあはすへし全躰神學者なとこれを天の事とする故に天安河原あり天眞名井ありその外天若日子か射あけたる矢をそのあなよりつきかへし給ふなとことやうなることゝもありてひとの信せぬもことわ

りなり宣長その信せぬをから心として何にもあれ神のおはします國なりとしれといひしはかゆき所に手（ゝ）とつかぬ心ちすこれらのことも今わかいふ所をもて見れは眞名井も安河原もあるはすの事也則此身此まゝ此居所のなりか高天原なれは川井其外宮室なとある事うたかふにたらすすなはち末に至りて伊邪那伎命此國つくりをへ給ひて近江の多賀にしつまりませりとも一説には天にかへり給ひて日之少宮におはしますといふをみるへしすなはち日之少宮といふは神の御境界にての名にてやかて近江の多賀をいふ也これらをもても高天原のありかを心にさとり知へき也「猶證とすへきことは其所々にいへり」なりませるといふ事ふとそこになり出給へるやうにてものゝ天よりふりたるか地より生したるかのやうに化し出させ給へるかことし但文の表はたゝふとそこへ出させ給ふやうにかけるなからこれ又見やうある事也すへての人身をかくし身を高天原にしかとするたる其時をなり出たるともうまれ出たるともいふ也されは此神も父母おはしましてうまれ給ひしにやあらむそれはしりかたしたとひしれたりとも何の證かあらんたゝ〳〵高天原に御身をおきするかくし給ふ元祖にておはします故にへ於高天原成神とはいふなり後世の人のくせとして肝心の所は心をも用ひすしてたゝかやうの高天原の有所又なり出ませるやうなとを是非する也垂躰神道のみやうにあらさる事也「猶後々にも其所々にて此證をいふへし」たゝ何事も活たる所斗をみる事肝要也されはなりませるとい

ふ事実事にもたれては神道の意趣いつまでも見る事あたはす古來の神學者みな外國の書籍をみる心もちにて神書をみられたりし故に其說みな理におちて今まて神道うつもれたり宣長すこしそこをみあきらみ（ママ）たれとしひて儒佛にたかひめをあらせむとせられたるひかみよりこれ又其說近きに似て猶とほしたゝ言葉はそのいける所に指南するまてなれは表にもたるれは甚つねの理にたかへる事ともある物也常の書籍すらかくのことしまして神のみうへの妙用靈妙の場を書とらむにいかゝは記事のことくかゝるへからむされは神書は上下のうちあひ詞のいひさまを照應して活たる所を察しるへき也此末々の神次に〳〵とかけるも化成し給へるにもあらて此高天原に身をすゑたまへるをいふなり兄のつきに弟のうまるゝやうになり出給へるにはあらす此くたりの神々はすへて感應してなり出ませるもの也ちかくたとへていはゝ奉公人の目見に來るかこときもの也それもえらひてかゝゆるは神道にあらすおのつからわか志をたすくる物になりて來るをいふなり「猶其所々にいふへし」○神名おほよそ神の御名はみな後よりたゝへ奉りたるもの也されはその御德のほとを見奉りて名つけ奉るなれは神名はすなはちその御德を表したる物なり此故によく〳〵吟味すへき事なり宣長古事記傳に例のかきり引出て考證したりされとも中にはしひたる事もみゆるはしられかたきをしひてしらむとして牽强せし故也此故にしらては叶はぬ事なから誣たることをして眞に叶はさらむも中々神道の

旨趣に妨くる事もあらむによりて大かたはたてぬきによりはた宣長か說ともを正したる中にしりかたきはえしらぬにしておきぬ天の常立神國之常立神なとは卽天を司とり給ふ神地を司とり給ふ神のいてさせ給ひしなれは卽天なり（成）地定まれる事を此ふたつの神にてさとされたる物也かゝることあれは神名はゆめ〳〵おろそかに見るましき事なれとも惣体の文意にてくはしくおさてもよき所もあるへししれるにしくはなししらさるを許すにはあらす成元か管見及はさるか故にかくいふなり

天之御中主神此神の御事古來神學者宣長たにこれに目をつけられすして此神の御德ならひなき事をいふ人なしいとかしこき御事也けり其故を思ふに高御產巢日神產巢日神はすゑ〳〵までも御事跡たしかにおはしましてなに事の命をも出させたまひし神たちなれは萬物の生するはたゝ此神のむすひの御たまによれりと宣長もいへりけにさる事にてみな此二神の御たまによる事也宣長かくいひて天之御中主神はさまて論なくたゝよそ事のやうにいへりそれも理なるに神名帳をみるにむすひの二神の御社は諸國にもいと多く天之御中主神の御社は一所もおはしまさすこれをみれは宣長か今あやまれる事にあらす上古以來神書の活たる所を見る人のふる（述）人なかりし事此御社のなきにあきらか也いとも〳〵かしこき事そかし何事もはたらきあるものは賞翫しはたらきなきものは捨てよからんやはしかる時はたゝはなのさきにて物ことをすますになりぬへしこれらの事を見るに此神の御社なきを

みれは神道のうつもれたる事まことに千二千の年數を過たる事とおほえたりまつ此神さるいふかひなき神にましまさは此むすひの神二柱より前にかくおはしまさむやうなしもしはしめは事もひらけす後は物事ひらけたる故に此神よりはむすひの神を尊ふ也といはゝ舜をたふとひて堯をすてむ歟成元か見る所は天地定まり人物生々したるはひとへに天之御中主神の神魂にうたかひなし産巣日の二神はその御魂をうけて事を行ひ給ひし神也されはむすひの二神は万物をむすひ給ふ御わさせさせ給ふ神也万物をむすひ給はむ事を御心に決定ましまししは天之御中主神にておはしますなりかく成元私の慮にあらす下文に曰へ此三柱神者並獨神成坐而隱身也とある此隱身といふ事神道修行の大規摸也くはしくは下にいふへし此隱身といふを規として見れは天地萬物のかならすなりいてむ御工夫をこらし給ひて灵妙の境にいりふし給ひしは天之御中主神也其御志をうけてすへての御おこなひせさせ給ひしも高御産灵神神産巣日神なる事鏡にかけて見るよりも明白也その故は身を隱し給ふとあるからは何の益あるたはかりもせすしてしかも何の益ある御ふるまひもせぬは身は顯はるゝ也しかるに此三柱神並獨神成坐而隱身といかてかかゝれむもし古來神學者の說のことくならは天之御中主神は御身あらはれておはしますをそれを隱身也とつたへ給ひし天武天皇の御あやまりとやいはん

阿禮かならひ損したりとやいはん安麿か錄しあやまれりとやいふへきいかにしてもいふかひなき眼とも也扨産巢日の二神ももしみつから萬物をむすはんとおほしめしつきたるをやかてみつから御ふるまひにかけて取あつかはせたまはゝこれ又御身あらはるへしこれをいかにといふにわかおもひよれることをわかすれはたとひ私ならぬ事も私におつる也此故に身はあらはるゝ也しかるをいかてかこれまた隱身なりとしるさむもし此産巢日の二神古來神學者の說宣長か說のことくたゝ此神の御德に歸し奉るは此神をかしこみ尊ひ奉れりとおもひたるへけれとまことは此神をいふかひなき神になし奉る也これ全隱身といふ事を神道の大規摸としらさりし故の見損し也上にもいふかことく隱身といふ事神道の大旨にして神といふ神のこれを規とし給はぬはなししかるにこゝに心つかすして神典をとくはあつまにくたるに伏見にむかふかことく出たつ足もとはたゝ一歩のたかひのやうなれとすへての說始終懸隔万里たるへしされは天之御中主神は天地万物のかならすむすひいてむ灵妙のみたまおはしなから一言一行もその事をなし給はす高御産巢日。神産巢日神はよろつの指揮命令なともし給ひしかとひとへに天之御中主の御志をうけ施し給ふにて露はかりも御みつからの御志はなき也こゝをもてたかひに御身はかくれたる也猶下の隱身の条下にて心うへしされは天之御中主神の御德は心も詞もおよはぬ御事也されと畢竟していはゝ隱身をのりとし給ひて御身をしかと高天原にするゑ

はしめ給ひし也これ必天地万物の生しいつへき理をきはめたまひし物也天地万物のみならすはや此二柱の產巣日神をはしめ奉りもろ〳〵の神たちのかくなり出給ひしもたゝ〳〵此御神の御德におはしますなり今世のいふかひなき人々とても此神の靈妙の御德をおもひて此御をしへにしたかひなは國家のひらけむ事うたかひなき事也かしこれ卽此神の御魂いまにさきくおはしましていかて人をこゝに至らせてさかえを得せしめむとおほしこらせ給へる御たまのふゆによる事也偏にあふきかしこみ奉るへきは此天之御中主神におはしますそかし○次高御產巣日神神產巣日神此二柱の御神上にいふことく天之御中主神の御志のまゝをとりおこなはせたまひて天地万物をなし出させ給ひし御いさをおはします神也其御事跡こゝにいふに及はす夫々にいたりてこれを見しるへしもしたとひ天之御中主神さはかりの御志はおはしたりとも御わさに出し給へは御身あらはるゝか故に此二柱の神なくはいかてか御志をとけさせ給はん又此二柱神はかほとの妙用おはせともし天之御中主神の御志なくはいかてかこれをなし給はむ三柱神たかひに御身をかくしあひ給ひてそかく天地万物不變なる物にはなり出たりける上にもいふことく身をあらはしてなし出たる事物はつひにひさしかるへからす誠に此三柱の神のたがひに御身をかくし給ひしこと其境灵妙にして拙き筆に書とることあたはさる事なりさて此二柱神その妙用に差別おはしますなり卽高とたゝへ神とたゝへたるにて其けちめは明

白也その故は高御產巢日神はその御事跡を見るにいつれも制度法律のまつりことにあつかりたる事を始給ひし也

神產巢日神はもの〻活(ハタ)らく事をあつかりはしめ給ひし也末にも川海を持わけたまひし速秋津日子速秋津比賣神の御事もあり又大山津見神と野槌神と山野を持わけ給ひしと同しく此產巢日神二柱は顯事と幽事とを持わけてはしめ給ひし神におはします也天之御中主神は此幽事顯事をかね備へさせ給ひし御神なる事幽事をも顯事をもふるまはせ給はぬにしるき事也今の世人の上にたに顯事にかしこきは幽事にくらく幽事にかしこきは顯事にくらし其かしこきをみて顯にかたむけは幽ぬけ幽にかたふけは顯ぬくるもの也此二柱幽事と顯事とをもてかたみにたすけあひ給ひてつひに天之御中主神のとほしろき御志をとけさせ奉り給へる事誠にかきりなき御いさを也此二柱の神をもて幽事顯事勝劣ありては大業なりかたき事をよく〳〵さとるへし古事記に

天孫を此あしはらの國にくたしまさむとするにあしき神多くしかも大國主神此國にうしはき給へはこれをなこししつめむ神をはかり給ふは高木神と（高御產巢日神の別名なり）天照大御神なり三たひ此時議り給へりこれは征伐の事にかゝれり又其後天若日子命にそむきて大國主神の御女をめとりてかへりこと申さゝりし時雉名鳴女をつかはされしに天若日子これを射るその矢高木神の御もとにいたれり此矢に血

つけるをみ給ひてもし天若日子あしき心あらは此矢にまかれとて其射上たりし矢の穴よりつきかへし給ふ其矢にあたりて天若日子うせたる事みゆこれは刑罰の事にかゝれり又猨田彦神をとひあらはしに宇受賣命をつかはされしに高木神と天照大御神の詔也これ又人を擧ると征伐の事にかゝれり又天忍穂耳命あまくたりをおほせ給ひしも天照大御神と高木神との詔也これは國君として國を治め給ふ事をは任したまへるなり此忍穂耳命は辞し給ひて御子の迩々藝命をあまくたし給へりその迩々藝命の御母萬播豊秋津師比賣命は高木神の御女也忍穂耳命も天照大御神の太子におはしませとも御みつからは辞し給ひて御子迩々藝命をあまくたし給ひしは高木神の御孫にして國を治め給はむにめてたくおはさむをしろしめしての事とおほしき事なり忍穂耳命の御身まことに高天原にしかとすゑ給ひて御身を隠し給へる御徳のほと申もなか〳〵なりかしたゝ〳〵國のやすからむ事をのみおもほせる事此高木神の御孫をしてゆつりくたし給へるにいとしるき事也これ又萬代不易の國君にましますへきはしめをおこし給へる御女の御徳即高木神の御徳そかしされは迩々藝命は高木神と天照大御神との御魂のうちあひたる神におはします也これらは就中いと尊き御事也以上みな高木神の御事跡は天下國家の政事にあつかりてもはら顯事をおこし定め給へるなりさて神產巣日神の御事跡はへ大國主神御兄弟の八十神たちにたしなめられ給ひてつひに大石をやきたるにて燒ころされ給ひしをその

御祖命神産巣日神になけき申給ひしかはキサカヒ比賣と蛤貝比賣とをつかはされて療せさせ給ひてふたゝひうるはしき壯夫となさせ給ひしことありこれ蘇生をせさせ給ひしものなりこれは大國主の神のたくひなき御事ともをあはれみ給ふ事ひとへに此國を經營して天下の民に安きを得せしめ給ふへき大國主神なれはふたゝひいかし給ひし物也またへ少名毗古那神は神産巣日神の御子にて手股よりくきし子也と仰られたりさて大國主神と兄弟となりて此國の經營をたすけよとおほせられし事ありこれ大國主神の經營の顯事の活るやうに少名毗古那神を兄弟とし給へるなり又大國主神天孫に此國をゆつり奉り給ひし時櫛八玉神膳夫となりてよと仰られし詞に我所燧火者高天原神産巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟之八拳垂摩弖燒擧とのたまひしはまへの蘇生ならひに少名毗古那神を此神にそへ給ひしなとの事によりてのたまへるなから食は人のいくへきものなれはわきて神産巣日神の御うへを申せるなりこれら皆幽事をつかさとりてはしめ給へり思金神と申は高木神の御子也此神思慮分別をおこし定むる妙用ある神にて石屋戸の件又あし原の國につかはすへき神を擧る時なといつも〳〵此神の思慮にしたかひ給へりこれ顯事の分別をなし給ふ神なれは也

（校者云裏表紙内面二）

嘉永元年

戊申霜降月書写之

大掘所藏

神典言霊

自初段至中段

神典言靈　一

神典言靈大旨

天兒屋命庶裔成元　識

われ古事記燈をあらはして神典の意趣くはしくのへおきたれと詞の表をとける事繁雜にして實事にかけんにかへりてまとはしかるへけれは今その言靈はかりを述て衆人實事に切ならしむされとこれ神典の詞をはなれてわたくしにいふにあらねはくだりを低くして本文をしるし神典に照らしみつへき便とせり言靈とは神典のうちにこめ置たまへる教旨これなり神名物名等の義は古事記燈にくはしくときおけるをみるへし

おほよそわか御教人をもていはす神をもてをしへ給へるは五倫の上下にもかゝはらす外様の進退にもあつからす天下の人を一に歸したるにてしかもその五倫等の外事は神道より生する所なれは神をしも教の主としよろつ人事の大本を握りたまへる也人事わかれてはかきりなしといへとも概するに悉く末也末にかゝつらへは煩にして功うすし本を握れは簡易にして功大なるへし天下古今の人情を

掌とせん事たゝ此大本を握るにあるへきそかし大かた本を握るは末をみこすにある事なるか故にわか御教すへて末を見こしてのみとき給へれは凡情には反したる事ともなる也

神道とは教の名にあらす人我の間を幽顯とたつるその幽の方をさす名也顯の方をは人道とはいふ也これを理欲に配すれは（理はあらはなるに宜しく欲はあらはなるましけれは也）幽路を欲の路とし顯路を理の路とすへしかの孝悌忠信等のわさ人倫の間にはやむことをえさる事なれともこれたゝ人道顯路の事にて神道幽路はすちをことにせるもの也かく神道は人道とすちをことにするものなるか故に人道重しといへとも神道にしたかはされは人道もたちかたき也こゝをもて神道にしたかふことを主としたまへるは即人道のおもきかゆゑなりとしるへし神道にたにしたかはゝこれを孝これを忠とみつからもしらすしておのつから忠行全かるへけれはわか御教忠孝等のをしへなき也されは畢竟神道とは人欲の路の名也としるへし

わか神道に抗するものは儒佛の二教そとみな人思へりこれ更にしからす人の渾沌の性か抗するなりいかにといふに儒佛の二教いまたわか御國に來らさりしさきにこの渾沌の神道にしたかふをうけさる事神典にみえたるをもて思ふへし儒佛の教といへともその言こそ渾沌のことくなれ本源をおもへは（本源といふは漢土にては堯舜等也泰西にては釈迦これなりいつれも外にみゆる所とはその心法はたかへりとおほゆる事とも多かれはなほこの二教もよそのものとはおもはれぬ事也しかるを儒佛の後學たゝその言の表を見いまた堯舜釈氏の心術をもしらすしてことくかゆゑにその説ひとへに渾沌におち入れるなるへしされはこの二教ともにあしくまよひたる人は固有なる渾沌の性をいよ〳〵さかりにするものなり）なほわか御教の心なるへけれとその經

其欲を制する事を詞としたるかゆゑにさなきたに渾沌なる性をはいよ〳〵この二教にてみかける也此故に畢竟はわか御國人にかきらす人の渾沌を性とするか故にわか御國人も儒佛の後學渾沌をとくとその性との相感して此二教かくさかりになれるものなりとしるへしされは此教旨のうけかたくおほゆるは儒佛の先入のみにあらす本來渾沌のうけえぬ也とはいふ也儒佛の菩といへともわか御教のことく理は外貌のおほひ物也としりてそのおほひ物のためにまなはゝ猶神道のたすけともなるへき物そかしこゝをもてわか御教のために儒佛をにくむへからすたゝにくむへくなけくへきは人々固有の渾沌なるをやされは人その渾沌をたにひらかは卽わか教旨をさとれるにそあるへき理を衣とし欲を主とするにいたりては君子之道成佛之道もおのつからその中に存すへきなり

理を衣とし欲を主とすへきわか御教實事のうへにてやむことを得さるにのみよりての私言にあらす悉く天地にあはせたるものなり此事くはしくは古事記燈にのへたるをみて私言ならさるをしるへしされと渾沌家の天地をみるかことく天地のかたちをみたるものにあらす天地の神(祇)をみたるものなるか故に天地のみやう凢見とはたかふこともあるなり天はもと理のおや地はもと欲のおやなるを天地ともに理中の物のことく思ふはひかこと也たとひ天地をのりとしたりとも理中の天地ならんには人事とゝこほる事必いてくへきをやされは理欲を幽顯に配しその幽顯を正側とたつる事わか御教の

要訣にしてこの心法明らかなれは天地の神祇（祇）その御心とひとつとなるかゆゑに繁昌長久もいかてか天地とともにあらさるへき

文化五年戊辰五月

神典言靈卷之一

天兒屋命庶裔成元　述

○七神三段神世七代

○初　段

○おほよそ人の言行さま〳〵なりといへともその源はたゝ理欲のふたつに歸すれは人は此理欲のふたつを明らかにせむ事肝要たるへき事也（理欲は人の心身より出る所にしてその心身は天地を親とす此故にわか御教すへて天地人をあはせたるものなるを知るへし）しかるに理欲のふたつ理は尊く欲は卑しけれは諸欲を制して理のことくせむとおもふ事大かた人のねかひなりしからは諸欲皆制しえられて言行こと〳〵く理のことくなるものかといふに欲といふものその性不動にして（不動は即地の性にてそれを人の身にうけさて欲にうくる所なりたとへはおもひそめし事改めかたく又しひて制すれはかたはらに路し又なほかたはらの路をさへとゝむれはその極つひに手におはす又一欲達すれは更にあとより一欲生するたくひみな不動の性のなす所なるを思ふへし）制するに制しかたくしかりとて理は重くしてしのくへからさるか故にほしきまゝに

はせられすして心中つねに理欲相たゝかふなりされとそれか中によく制しえて言行理のことくなる人もありまた制しえすして言行理をのみそむく人もありこの二種を賢愚といふこれによりてみれは理を以て欲を制せむと思ふは賢者のうへの事にして愚者にはさる心なきかことくなれと愚者とても猶理の尊く欲のいやしきことはよくしれる事盜人すら書は得入らぬにて思ふへし又諸欲不動なるは愚者のうへのみにして賢者にはなき事のことくなれと古人も諸欲制しかたきをうれへられたるをもて（經書ともにてしるき事也）諸欲制しかたき事は賢者とても猶愚者にひとしきを思ふへしされは畢竟賢愚の稱ははや外行にあらはれての後の稱にて今いふ所はいまた賢ともわかれ出さるさきの言行の本源をさしていふにて賢愚を一にしていふなりけに諸欲はいと制しかたき物なから理はしのくへからねはわぶ〳〵も理をもて欲をおさふる事ことわりなる事なり

以上渾沌如雞子と神代卷にある所の言靈なり（古事記には渾沌の事みえさるをいかて今まつこれをいふそといふに天地初發といふはやかて渾天地を質としての詞なれは古事記のはしめに渾沌の字はなけれとあるにひとしけれは也）

けに理をもつて諸欲をおさへ言行を理のことくせむと思ふ心いとことわりなる事は大かた所欲のまゝを言行に出せは人うけひかすひと承引かざれば彼我のもちあひよからねは也（山林に獨居する人のたくひは所欲をほしきまゝにすとも害あるましきをもと思ふへし）しからは人たにうけひかばおなしくは制しかたき欲をしも制せむ事このみたる事には

あらねとひろくもせはくもわれにさしむかふ人の思はくのためにこのまさる制欲はするなる事あきらかなるをやされともいさゝかにても放縱なる人はまのあたり人うけひかす諸欲を制する人にはまのあたり人こゝろをよするをみてはたとひこのますとも諸欲は理をもて制すへき事人としてはまぬかれかたき道なるかことき事なり（有智の人もその智こゝにかきりてとにかくに脩身を本とせされは人情をなほく得へからすとおもへり智こゝにかきるとかきらさるとは神道といふものあるをしらさるとしるとにある事なりなほこの下文ともをみて心うへし）しかるに凡智にては內に欲をやしなふによりて外その言行理にそむくことなりとのみおもふ事なれと外言行理にそむくはかへりて內に欲を制するよりの事にて欲をやしなふか故にはあらさる事なり（たとへは家業しもいとはしく齋日しも肉食のせまほしきかことし）これいかにといふに欲の性もと不動なるものをなか〳〵動かさむとする故にそのいきほひ激して理をやふるなりされは外に言行を理のことくせむとならは內において所欲に道をあたふへし所欲路をたに得れは言行に理は妨くましきものなり制すると路をあたふるとは相反したるわさなれは凡智にてはこれ甚決斷しかたきこととなるへしその決斷しかたき所以をたつぬれは欲といふもの制すれは制せらるゝものなるによりてその制せらるゝをたのむか故也けに理には克つましきか故に制すれはやむことをえす頭をもえもたけぬものなれとその極にいたる時はやかて理も制する事あたはさるばかりなるに及ふへきなり（極にいたりても猶つゝしみて言行をみたさぬはかりの人は必病を生すへし病軀は理のことく奔走する事あたはさるこれ言行をみたしたるにひとしきを思ふへし）されは理もはしめは欲に克カてどもつひには克つ事あたはさる事理欲をた

ゝかはしむるの所詮なれは制せらるゝをたのむ人は制しかたきに及ふへきをはりをしらさるか故也しからは極にいたさすして大抵に欲は制しをるべきかといふに制する事おろかなれは必あやまちありあやまちあれは人うけひきても人情を全く得てなかく我をわすれえさるまてには及ふましけれはこゝにおいてみれは理を以て欲をおすは欲も全からす理も全からさるわさにあらすや此故に所詮不動の性なる欲の事なれは人力してはとても全く制しおほすへからすかく制しおほせられぬ事かねて明らかなるをしりなから猶制するを事とするはいとも〳〵稚き事なるへしされは欲には道をあたふへしとはいふなり此欲に路をあたふる事いかにすへき事そといふに理とたゝかふへきはいまた欲の路にはあらす 理とたゝかふとは人の見聞する所の外貌にあつかるを云たとへはほしきまゝに財を散すれは家産をおもはさるの理にたゝかひみたりに淫欲をほしいまゝにすれは男女有別の理にたゝかふかことき をもて思ふへし 理もたゝかふ事あたはさる所において道をあたふへし 理もたゝかふ事あたはすとは外貌にあつからぬ所をいふ前にいふ所の反なるをもて思ふへし 大かた所欲の理をやぶるはもと理とたゝかふ所に路するかゆゑなるなりすへて小欲は理とたゝかふもの也大欲は理もたゝかふ事あたはさるもの也されは人々その所欲必小さきものなれはいかにも〳〵その欲を大にしその大欲を路とせはいかてか理もたゝかふ事をえむ 大欲には必小欲は存するものなれは大欲を存せむ事小欲をおもふにはまさるへし小欲理にたゝかふは欲小けれはかならす外に出るか故也大なれはやかて外にいたす事あたはさるか故に理もたゝかふ事あたはさる也大かた人の耳目のをよふ事外貌にとゝまりて内心まてには及はさるものなれは直に外にも出かたきはかりの大欲を存せむに理とたゝかふ事はあるへからすよく〳〵おもひはかるへし かく内心に大欲を存してそこを道と定むる時は小欲みなその内にこもるか故に欲情の分は

のこらすその路におもむきそれによりて外行思はす理の如くなるへき事うたかひなしこゝにおいて理欲ふたつなから全くなりぬへきにはあらすやかくわか欲情に理もたゝかふ事あたはさるはかりの路をあたふれは理はおのつからまつたくなるものともしらてみたりに欲を制する人はおのれ〳〵人こそ見事にもあるへけれ人の爲となる事もなくしたかひてはわか爲となる事もあるましきなり渾沌にては人の爲ともならすしたかひては我爲ともならさる事この下文にてしるへし發天地のいさをはおほえす人の爲となりしたかひてはわか爲となり來るそかし　されは欲情に理をもてたゝかふ事しかるへからさる事を決定し欲に理外の路をあたへなは欲は内を路とし理は外を路として理欲長くたゝかふ事あるましかるへし　或問云しからは内心にては君をしのき國を奪はむとおもふはかりの欲を存してもくるしからぬ事にや答曰君をしのき國を奪ふなとはいまた欲の小さきものなり小欲なる謎は人これを見聞てはゆるさぬこれ理とたゝかふか故なり君はしのかすとも國は奪はすとも君をしのき國を奪へるかことき事は必あるへしこれをは大欲理もたゝかふ事あたはすとはいふ也すへて外貌のさたまれる所をかへあらたむれはやかて理とたゝかふへしわか御をしへ神を以てをしへ給ふ事ひとへに外貌にかゝはらぬ所あるかゆゑなりされはたゝ臣は臣たるへし子は子たるへし臣も君のことく子も父のこときは神氣のうへにそ有へきと答へき返々わか所欲を大にし外貌にかゝはらさる所に路をあたふへき事也　もと外行の美事は内にこの理外の欲を養ふよりおもはす生するものなるを或はしひて内をあらひ　これ佛の後學のする所なり　或はつとめて外を正しくすれとも　これ儒の後學のするところなり　よに寶とする物をはしめ有用の物いまた天より降たるを聞かす天にくらふれは地はいやしきを　天地はすなはち理欲の本源也　こと〳〵く地より生すこれにあやかりて家國を繼くへき子は女これをうみ　男にくらふれはいやしき方なり　家産を増すへき子錢（リソク）は貧人これをうむたくひ　富者にくらふれはいやしきかたなり　皆その母はいやしき方なるをやしかるに理を母として美事をうまむとするはいかなるつたなさそやし

かのみならす內と外とは必相反するものなるに 內外相反する本源は地上晝なれは地下夜なり地下晝なれは地上夜なりまた地上暖なれは地中冷なり地中暖なれは地上冷なるこれなりこれにあやかりて人他に適くには衣服をあらたむるたくひおもふへし 心にも理をおもひ行にも理をつくさむとするはしひわさならすやかゝることわり眼前なるを美事生すへき田地を瘦地とする事いとも〳〵おろかなる事なり勉强は大抵かきりあり大欲のためにおし出さるゝ言行は勉强にまさる事はるかなるへし 義にのそみて命をすつるたくひ也 されとも渾沌家のこゝろにては 內外をひとつにする人のことなり前をあはせてこゝろうへし 欲より生する美事は美事とするにたらすとおもふものなれとそれひとへに萬物地を母とする理にくらきか故也わか御教內に大欲を存しそれを田地として美事豐稔のことくおのつから生せんことを要とするよりみれは孝悌忠信といへとも勉めてなすはかへりて無味なるものをや以上のことわりをもて外行の美事理を母とはすへからぬ事を發悟しそれにつけてまた知るへき事ありいかにといふに諸欲は大かた外にて達せされはやまさるものなれは欲情に理外の道をあたふるもたゝわか內心ばかりの事にては欲情やみぬへき期もあるましきことなりしかりとて小欲こそわれと達しもすへけれ大欲はみつから達すへき方もなきものなり たとへていはゝ人の倉庫なる金をぬすまむとするに二千金三千金のほとはおのれ一人してもぬすみ出つへし二十萬三十萬にをよふ金はおのれひとりぬすみいつる事あたはさるかことくその欲二千三千ならはようせすは人の垣をも踰へけれと二十萬三十萬の欲ならむにはとてもわれ一人のちからのをよひにあらねは垣を踰むのこゝろもかつて出ましきを思ふへし しからは大欲を內に存したるはかりにて達すへき道はなき事かといふにしからすいかはかり理をはづれたる所欲にても人かなたより得意してゆるさばすなはち成りぬべきなり

堯の天下を舜にゆつられたるか如し　されは内に存する所のわか大欲の成りぬへきはもはら人の得意にある事なれは人たに得意せはいかなる大欲とても成らすといふ事なしと疑をひらきてわか大欲をは内に安置すへきこれ肝要の心得なる也されは此初中段の御をしへはもはら人を得意せしむへき神術ををしへたまへるなる事おもふへし大欲成らさるは全く此初中段のふるまひのつたなきか故にて初中段たにつたなからすは大欲とても成らすといふ事さらに〱あるましき事也世の創業の人々をみるにその智おのつから發天地に決定して初中段のふるまひいとしたゝかなりおの〱身内にある所の神なれは此御をしへをまなはねともその智初中段にをよふもひとへに内に大欲を安置するよりおし出さるゝ所なり此故に此御教をまなはむ人渾沌をさとりひらかはその大欲おのつからわか智を導きて初段をかけ中段をほとこすへきすちは心にうつり來るへきなり　されとも小欲すら達すへき道はあるへからぬをまして大欲いかてか達せんと誰も〱おもへる事なりこれ人をして得意せしむる心法くはしからぬ故なれは此初中段の御をしへつひに神世七代を得む事必然のいきほひなることを明らめなは大欲も自楽すへきにあらさる事決斷せらるへしおほかた理欲の尊卑を論するも人の中心を得てみれは無益のわさなる也もと人と白眼あふか故ににらみあふとは人我をいはれじときそひあふを云也　たかひにわか非理欲の穿鑿もせらるゝ事なれはもはら人情をえむことを要とするにまさる事あるましき也人情をもえすして理欲の尊卑を穿鑿する事いたつらなるへき所以はたとへは庖丁のその日の賓の口に叶ふへき所をもおもはすたゝおのか手際をむねとするかことくみたる所こそえもいはれぬうまき事はあるましきなりされはわか御教わか方にて理欲の可不可を穿鑿する事をいたつらわざなりとはする也これを善解除悪解除といふ此記には手足の爪をぬかしむと千位置戸之件にあるこれなり　たとひいかばかり理をつくしたりとも人得意せすはなにかは尊からんたとひ大欲たり

とも人得意せは何かは卑しからん所詮わか理欲の尊卑を可否するは人の心にありとし人情をたに得なは大欲といへとも必達すへきものなりと決定しわか所欲を理もたゝかふ事あたはさる所に安置すへきなりしかる時は人情をえむ事專務となるか故におのつから內は欲外は理となり理欲の道はるかにわかれてたかひにおしあふ事あるましきなり人は貴賤にかゝはらす職常にあつからすおのか所欲を理外に安置して言行の毋とするの一決斷にとゝまれる事なりひろくは天下國家せはくは一人二人の間も如意滿足して長く久しからむ事たゝこの一決斷よりいつる所なれはもし此決斷よわからはなにこともいたつらなるへし脩身をもはらとする事めてたき事のことくにしてその弊大なる事をわきまふる人よにすくなしかならすその學力つより躬行いさきよくなりゆくにしたかひてしらす〳〵自負の心生しそれより人に及ひて人の非をのみみる事となりぬへし猶これ人をして恥さするわさなるか故に人よりも必わか非をのみ見出んとすべけれは人我ともにあやふき地にたつわさならすやこれ渾沌のひらくへき所以なる也わか御教は內に大欲をやしなふか故に自負する事あたはす人情をえむ事を要務とするにつけては人の非をあくる事能はすしたかひて人も理欲の道をひらくへきか故にわか非をみむのこゝろもあるましけれはさる弊とも更にあるましきをやされはなにことにもあれわか心に所欲おこらばそれ理の歪かるへき端そと知りてわすれてもそれを制せすその欲を肥大になしつ

ひに理もたゝかふ事あたはさる所をあたふへしもしその肥大になす事吝あらは外行の美事も生すましけれはかへす〳〵人情をえてのうへをあらかしめさとりていかにも〳〵欲を大になすへきなり

以上天地初發之時とある言靈なりわか御教の簡易なる事みつへきはおほよそ我身のうへの學ひはたゝ此發天地の一決斷はかりの事にて以下の五神は大欲おのつからおしいつる所をとき示したまひしものなりされは理欲をたゝかはせさる決斷一大事たることなれと制欲を是とする心よりはいと危ふかるへきことのことくにて決斷しかたかるへしけに諸欲はみつからゆるすにはえてあく事をしらすつひに放縱無愧の人ともなるかことときものなれともみつから所欲をゆるすに吝すれはその欲情適することなく欲情適せされは外行美事を生する事なきものなりされはわか外行美ならさるはみつから欲情を適せしめさるあやまりなれはみつからゆるすにいさゝかも躑躅の心なく（躑躅するにをよはさる事は人情をたにえはやすかりぬへけれはなりされは畢竟わか所欲を制し又はゆるしても吝する人は人情をえは易かりぬへき事をしらさるか故也）欲底とおもふ所をあたふへき也此故にゆるすに吝するはかへりて欲情をして放縱無愧の地に走らしむるわさたるへけれはましてこれを制せむは外行の不美をこひねかふわさなるをやたとひ此ことわりをさとりてわか所欲を理のたゝかふ事あたはさる所にすゑたる人もその達する期のいたる事まちとほなる時はやかて理とたゝかふ所にみつから引もとすこともあるへしその待遠なるはひとへに人に

對しての美事つたなきか故にてしか美事拙きは全く大欲に安んぜざるによりてなりされはたゝ〳〵わか所欲小なれはかならす言行の肘（ヒヂ）を引て美事を妨くへきことわりをよく〳〵おもひ明らめわか欲をは理もよりつく事能はさる所に安置しおのつから美事生する母とはすへき事也この初中段すなはち此發天地のおのつからおしいたす所の美事をときたまふなれは返々人としては此發天地一大事たることをおもふへし

わか大欲を達せむ事人得意してかなたよりゆるすにある事なれはもはら人をしてわか大欲をゆるし來るへき美事をおこさしめむ事急務たるへきなり 前にも人のための美事をいひこゝにもわかための美事といふ事凡情には心えかたき事なるへしその故は凡情にてはわか欲のためにせさるを美事とは心得たるか故なりされとまへにもいひしかことく勉強にまさりたる美事は欲のためならては自生すましきものなれは人のためのわか美事はわか欲のおしいたす所なりわかため人の美事は人の欲のおしいたす所なりとする事わか教旨也おの〳〵まけじ心をとりおきて顧（カヘリミ）ば必しかりとはしらるべき也 さて人をして美事を生せしめむ事まつその美事を生すへき母を人の中心に置かしむへき事肝要たるへしその母となるものはなにそといふに即わか美事の母とおなしく人の大欲これなり欲は大かた小欲たに達するに道なしまして大欲に道あるへきやうなけれは欲情の強きをうれふる事人もまた我にひとしきものなるか故にわか大欲のための美事を生せしめむには人の大欲を達せしむへき事ならすや小欲すらゆるさぬ事人の常情なるにその大欲をさへゆるさは我ならて誰かこれをゆるさむと人われをよになきたのもし人とおもひなりてわれにむかひて美事生し來らむ事疑

なき事なりかく長く我をわするゝ事あたはさる心を人に生せしめむ事その欲情を適せしむるにある事なるを人の得意は信義にありと心え信義はわか所欲を制するにありとおもひてもはらわか身を脩するはいとも〱迂遠なるわさなり信義の尊き事いふも更なれと勉強したる信義はいとあやふきことなり（危ふしといふはもしあやまりて信義かけたらんときはたちまち我たのもしめる人情もうしなふへけれはいふなり）信義をわか大欲よりうみ出し人のたのもしむ心をも人の大欲よりうみ出しめされは彼我の間はなちてもはなれかたきにいたる事はえらるましきそかしされはたゝ〱人の大欲を達せしめむ事肝要たるに大かた人欲の性として小欲すらゆるせはあまえつきあがりて飽くことをしらぬものなれはまして大欲をゆるさはその人やかて放縦無愧の人ゝなりぬへきなりされはいかにしてか人の大欲は達せしむへきそといふにしか人あまえて飽くことをしらぬは問ふもゆるすもあらはなるか故の弊にて更に人欲の性にはあらさる事人の所欲をして乞ふとなくて乞はせ我もゆるすとなくてゆるしたらむにはさる弊かつてあるましきをもておもふへしされは乞ふとなくて乞はせゆるすとなくてゆるさむとには人より乞はむにもその所欲に衣をかけ（衣をかくるとはその實はその所欲を乞ふなれと言のうへにはたゝ理をもつて乞ひ來るを云）理のうへの事を乞ふになさせて乞はしむへくわれよりゆるすにもその理のうへをゆるすになしてゆるすへき事なるか故にわれも人もまつその衣にかくへき理をたてん事第一のわさなるなり理をたつとは天下國家のひろきには制度を以てし一人二人に接するせはきには

言語をたゝ理のうへにのみつけてかりにも人の所欲のすちに言をつけさるこれ也しかる時は人我の間たゝ理のみ通して欲のすちは通する所なきかことくなりぬへけれは人その所欲をもつてわれになれ近つく事あたはすなりぬへき也［俗に人に白き歯をみせぬといふ是也］これ大かた人の大欲を達せしむへき前構にて［人の大欲を達せしむるは即中段の終なる天之常立神の事也そこをあはせてこゝの文氣をもしるへくこゝをあはせてそこの言靈をも思ふへき也こゝを第一の前構として中段の天之常立神にをはる也と心うへし］まつその乞ひゆるすに衣とかくへきその衣を織るなりと心うへしなにことも人にわか心法を見透（ミスカ）されては神算におち來るましけれは理を衣としてその衣のうちを機關とすへしされはこの衣を織る事人の所欲を極めしめむかための前構なる事よく〳〵わきまふへし

以上於高天原とある言靈也人の大欲にむかふにはまつかく衣を織ることを第一とせで叶はぬ事［衣といふはすなはち外理のことなり神典中に衣とあるはみなこの言靈なる事くはしくは古事記燈にいふをみるへし］理外にすゑたるわか大欲母となりておのつからうみ出る所也されはかの信義のたくひもおのつからこの高天原のうちにこもる事にて勉むとなくて信義つよくなりぬへき義なり内に大欲を存しなから外には高天原をたつる事これ理の重くしてしのくへからさるかゆゑなり理を衣として往來せはいつくとてもさしつかふる所あるましけれはなり此故にこの高天原といふは人のわれをみる所の目をうくる所也としるへし［此高天原のうちにての機關を大事とするか故に祝詞なとにまつはしめに高天原をいふ也と知るべし］

かく人の所欲をあらはになし來る事あたはざらしむるはひとへに人の大欲を達せしめむの前構なるをあしく心えて前構なる事を忘れ制度を一途とする人もあるへしもし制度一途とならはうはへこそ嚴重堅固にもみゆへけれ人の所欲の行さき心もとなきわさなれはまづ人にむかひて幽顯(カクレヒナタ)の二路をたて（此幽顯といふ字神代卷一書にみえて此記にはなきかことくなれと日月の二神をときたまへるは卽此幽顯を言靈としたるもの也これ晝夜の主神なれは也禊祓之件に左右の目を日月の神にあて給へる事今いふ所のこゝろにて片目にては幽を見片目にては顯をみよとの御をしへ也この幽顯目にみる所と目に見さる所をいふ事勿論にてたとひ目にみる所とても見さるになさは幽たるへく又みざる所にても見たるになさは顯たるへき事としるへしくはしくは古事記燈にいへり）その幽(カクレ)の方を所欲の路とさための顯(ヒナタ)の方を理の路とさだめおきさてその幽路をは彼我の間の正路としその顯路をは側路とし此幽顯正側の間をはわか心の所置とさたむへきなり（幽路を正路とすとは我も人も大欲か美事の母たれは大欲を達することを詮とたつるを云ふにてこの事あらはにすましきか故に幽を路とする也顯路を側路とすとは人より乞ふもわれよりゆるすも理を衣とすへくその理はかへりて欲のための衣なるか故に側路とはいふにてすへて言語は理にのみつくへけれは顯を側路とすへしといふ也されは主意は欲の方にありて理の方はいはゝ思はぬ方なり此思はぬ方を顯路とし思ふ方を幽路とする事わか御をしへの一大事也）この心法かたくさたまる時は顯に理をたつる事かへりて主意にあらす幽に欲を思ふ事かへりて主意となるか故に理をたつるに一途なる事おのつからあるましきなりよに制度の永續せるとしはらくにして崩るゝとのあるをみるにその崩るゝは必理を詮としてたてたる制度なるか故也永續せるは必欲を詮としてたてたる制度なるか故也こゝをもてみれはその永續せる制度をたてたる人は必この幽顯正側の中間を心としたる人なる事明らかなるをやされは理を表とする事肝要の前構なりとはいへとも幽顯二路を正側とたてゝその中間を心の所置とせてかなはさ

る事なるを思ふへし

以上成神名天之御中主神とある言靈なりこの神氣をはまつ高天原にすうる事大規矩となる事なれはかろ〳〵しく思ふましき事也

顯路理をもはらとたつれともかへりて側にて正はかへりて幽路なるわか心法定まる時は人もとその所欲不動にして顯路の理に堪ざるの餘りおのつから心つきてその所欲に理を衣とかけ理を乞ふを表として實には所欲を乞ひ來るへき事必然のいきほひなれとかく内欲外理にしてわれに乞ひ來らしむる事わか御教の初段ある所以なりこの乞をは中段に如葦牙萌騰之物と說給へる也大かた人の目はわか外貌にのみとゞまりて内心には及ばざるものなれはわか外貌理を專とするに恐りて内欲外理には心もつかでしひてその所欲を我に隱すへししからはその所欲は放下したりやといふに更にしからすして内心その所欲の道なきをつねにうれへていかてよき透間もあらはとうかゝふ心やまさるへきなり人の所欲をはかくうれへさせ透間をうかゝはせ置ては天下國家めのまへにはたとひ嚴重なりともたのもしかるましき事なるかうへにもしそのうかゝひをおもむけて此透間をうかゝふといふは中段に久羅下那洲多陀用弊琉とある言靈也幽路をあたへむ人あらは人情こと〳〵くその人に歸すへけれはたゝ幽顯二路を正側とたつるわか心法さたまりたるはかりにてはようせすは人情他におもむきて我をおそるへきなりされは此心法さたまりての要務は人情われをそれさらんやうに内欲外理の乞われにのみうちかゝ

り來らんことをつねに誘ふへきなりこれいかにせは人情を誘ひその乞をわれにおもむけむそといふにかの側路を言としてわれ外貌理をもはらとはすとも理重きか故のやむごとなきわざにて內心にはひとへに所欲をたすくることを主としてありといふわか心法をはその人にさしつけすしてその人のさとるへくいふこれ也されはその人其所その時にしたかひて側言すへきやうはさま〳〵なるへきことなれはその機に應して側をは言とすへき也もと言にはいふへき言いふましき言ある物なれはよくえらひていふましき言はいふましき事也と誰も〳〵おもへるものなれと（されは多言をいましめて不言なるにしかすとも古人をしへおきたるなり）もと言の路とはすましき正面に言をつけんとするか故にしか言に可不可はいでくる事なりたとひいふへしとする言とても（いふへしとするはわれに私なき事からなれはいふに害なしと思ふか故也）正面につくれはなほ人の神氣にはあたるものなれは（直諫するたくひおもひ合すへし）不言にしかすと心うるもうべなる事なりしかれとも大かた言には可不可はなきものにてたとひいかはかりいふましきかことき言たりともいはむに害あるものにはあらさる事はもとよりわか所思の正面をは正面とする人にさしつけていふにあらねはなり言に可不可なきは側路につくるかゆゑそかしもし此言はいふへし此言はいふへからすとしそのいふへきをのみいはては人つねに害のみありとならは言の可不可をえらふに日も暮ぬへきわさなるへしもと言となりて世にあるからはえらひ捨つへき言あらんやうなし正面にはつくましく側にのみつくへきものとしりて心に正側た

にあきらかならは言の可不可はえらふに及ふましきことなるをや 言の可不可といふはたとへははめはすへくそしりはすましきなといふこれなり正路よりあながちにいはむとするよりかゝるえらひある事なれと正言ならははほむるも然るへからす側言ならはそしるもくるしからすと知るへきなり 正言はもとわか心法も人に速に達し人も我に乞はむに心配なかるへき事なれともしかる時は双方の神氣活用せさるか故にそのをはり遂に神算にはづれゆくへきなり その終といふは神世七代のことなり彼我ともに大欲達せされは理全からねはたかひに大欲を達して理を全うせむのあらましこれをは神算とはいふ也 おほよそ正言は神を殺すものなる事もとかの正とする幽路は神の道にして人の道にあらす 神道と称するはこの幽路の方をいふなる事こゝにておもひしるへし 側とする顯路は人の道にして神の道にあらさるか故に正路を言とするは人力して神力を覆ふによりて也 人こそ口ありて物はいへ神に口なしいかてか神道を言とすへからん されは言は必側につくへきものにしてその言はわか正路とする所のさとしのためはかりを用とするものなる事をしるへし 予つね哥道をとくに言靈をむねといふ事即言はこの側路に屬し靈はこの正路に屬するをいふにて詠哥もまた神道に乗りおのれも神道あるわさなりされと哥道は此側言の道たえたる時の必用にてこれ此産巣日のたすけなる事思ふへし かく正路はもとより言のつくへき道にあらさる事なれはこの側言にわか心法をさとす事 心法といふは高天原のうちに天之御中主神をすゑたるをいふなり いかにも〱遙ならんを本意とはすへきなり側言の功正言にまさるはかなたより知るとこなたよりしらするとのたかひめあれはなり此故に理をたに衣とせは所欲の幽路は必ゆるさるへしと人かなたより知りて內欲外理の乞われにしもうちかゝり來るへくのみ側言すへしもしこれにつたなからは人の所欲の情をわれにおもむくる事をえすしてかならすわれをそれゆくへきそかし

以上次高御産巣日神次神御産巣日神とある言靈也（此二神の次序すなはち理を言としなから其内に欲をたすくるわか心法なる事をさとせとの御をしへなり）たとへは魚を釣るにわかおろしたる鈎（ツリハリ）に魚の心からつくか如く此側言に人情かなたよりつき來らんことをむねとするなれは畢竟内欲外理の乞を釣る鈎（ツリハリ）なりとしるへしよに天命因果運不運の說ありてわか身を脩むるに自來するものと思へる事似て非なる事也いかにといふに外貌こそ理をふまで叶はぬ事なれ内心には人我ともに欲を主とせされは運は來るものにあらすされは運の自來するもみな幽路の機關による事なれはそこのけぢめよく〳〵おもふへきなりもし幽路を正とするにあらすは運はこと〳〵く我をそるへきものをや人外貌をふかくつゝしめは必その内心にはかのたゞよひ（たゝよひとは路なき所欲人目の透間を伺ふをいふなる事前にいへたるかことし）つよかるへき事なれは運は眼前に届してあるものそかしされは此二神の鈎をもてつらんにはいかなる運か來らさるへき（わか御國ふりにて恩賞に人にあたふるには必女の装束なり男に女の装束をあたふる事あたらぬことのやうなれとその功勞を賞するは顯路の理をたつるにていひこそせねその實はおもふ女もあらはそれにあたへよとの心にて女の装束をあたふるなりこれこのふたつの産巣日なりこのひとつにてもこの側言のやうなをもしるへく幽顯正側のことわりもおもひさとるへし大かたの賞罰なともみな此産巣日のために側に用ふへきに渾沌の性にまとはされては幽顯正側たらさるものなりかへす〳〵言行を思はぬかたにつけておもふ方は幽とする事一大事たるへし）

かく人の欲情をさそひてわれにおもむくるを心としなからおもはぬ方の理を言とする事ひとへにかなたよりおもむき來らんをまつへけれは也されとも欲をさそふために理を言とするはわざと人のさとりがたきやうになすわざなれはいと迂遠（マハリトホ*）のわさのごとくおほゆる事凡情のつねなりけに人の欲情

をわれにおもむくるに正言する時はもとより透間をうかゝふ人の欲情なれはたちまちわれにおもむき我をたのもし人とおもひならん事も端的なるへけれはわさと悟りかたく側言するはまはりとほきわざにはあれともその一時こそしかなれその事はてゝ後人われを思ふ心あまえはてゝかれか所欲増長しあたふれと〱飽かざるものと成ぬへししかる時はつひにはわか力も堪すなりてやむことをえすその人を避るにいたるへししかゝる弊生する事、ひとへに正言してしひて人の欲情をわれにおもむくる無理より生する事ならすや これ神道にしたかはすその神道の事を人力してなせはなりよに勞を思はずして人のうへをあつかふことをわさとする人あるもの也これ人のうれひにかはり人の勞をたすくるわさなれはいとめてたき事にはあれともさやうの人は世話やきずきと稱して世話をやかすればよろこぶ人なりと心得おのかせで叶はぬことまでをあつらふるものなりそのはしめ一時はその人の恩もふかく感荷したるへけれともと我より事をはしめたるあやまりよりつひに世話やきずきといふ名目を蒙るをおもひて正言は無理なる事をさとるへし されはわれを忘るゝ事能はす恩を荷ふ事長く久しき事をえむにはそのはしめわれにその情をおもむけ來る事人の心からおこるにあらては得かたき事ならすや此故に側言といへとも正に近きは人に速に聞ゆまじくやとおもふより正に近くはなる也 なほ正言にひとしかるへけれは 此正に近き側言は俗に壁訴訟といふ是也その壁訴訟なるものをわれにうけたる時のこゝちを思ひて正に近き側言然るへからざる事をしるへし いかにも〱幽路にはとりのきて遙なるを尊ぶべきなりしかれともこゝにひとつの疑かならすあるべきはわざと人に聞えがたきやうにいふはいはぬも同前の事なるへきかことくおほゆるこれなりこれけにいはぬも同前のことくなれともいはではかのわか心法を人のさとる期あるまましく 不言にして行ふはかりにては人いよ〱さとりえましきものなり しかる時はいつまてもわれにその欲情をおもむけ來

る事もあるましけれはいはてはあるましき事ならすやされはいはてはあるましくいひては弊ありこのふたつをのかるゝにはいひていはすいはすしていひたるになさむより外なき事にあらすやされは不言にしかすとはいふましき事なれはいかにも〳〵正面に遠く側言はすへき事也たとひえさとらさる人ありとも正面にはるかなるよりの事とはおもふへからすその人の透をうかゝふ欲情の勢の強きとよわきとによりて悟不悟はある事そかしされはおほよそひろき國家ををさめむひともその國のうち家の内なる人をのこさずしたかはしめむ事あたはさる所なれとわか側言をかしこくさとれる人ありてその欲情をわれにおもむけ來りつひにわれを忘るゝ事能はさるに及ふ時はそれよりひろく蕃息せん事うたかひなき事なれは我はたゝ人の聞えむことをおもはすして幽顯正側の心法をは人の心からさとるへき側言を一途とすへき也人もとかのたゝよひあるからはいかにもして幽路をえむとうかゝふものをなにかは此側言迂遠なるへき（人おのれか欲情に引まはされてわか心法はさとるへきなり大かた窮する時にはおもはぬ智も生するもの也たゝ席上の論をもつてこの側言を人のさとりさとらぬけちめを思ふへからすおもひよらさる智の生するはたゝ〳〵欲情そ母となるものなるをや）いとたのもしく思ひていかにも〳〵人のとく聞えさらんやうに側言すへき也とく聞ゆれは弊ありいはされは期なしと決斷せはこの側言いかにも〳〵とく聞えかたきやうにのみせらるへきそかし（哥をよむにもこの決斷第一の事なりさならては哥さへ正言とはなりぬへき也）

以上此三柱神者竝獨神成坐而隱身也とある言靈なり

○以上三神を初段といふこの初段の大意はわか大欲を達せむには人の大欲を達せしむへき事肝要なれとも正言して人の欲情をわれにおもむけてはその弊大なるか故に人の心から心をおこして內欲外理の乞われにうちかゝり來るへき神術ををしへ給ひしもの也されは所詮は人の欲情をさそひて內欲外理の乞を釣ることをむねとする事此初段の主意なりと心うへし

○中　段

○外には理をもはらとしなから內には人の欲情を誘ひてわれにおもむくる事を側言する時は正言のことくは人このわか心法をさとりかぬへきことわりなれともと人の欲情は不動にして（これ人我ともにひとしき事也）われ外に理をもはらとするにつけては人もその所欲をあらはにする事あたはすして外貌をつゝしむとはいへともその不動なる性內心にてはなほあらたまる事なきかうへに外より制せらるゝにつけてはいよ／＼かへりてその欲情のいきほひまさり所欲路なきをうれふるよりいかて／＼よき透間もあらはその皺をのべむとつねにその內心に透間をうかゞふものなりこれ衆人の外をつゝしめるその內心のかたちなるを外をはよくつゝしむ人にはこのうかゝひはたえてなきもののことくおもふこれ凡情なり（かの山林に獨居するたぐひは人のおもはくをはゝかるに及はねとも世にある人は人の思はくを憚らで叶はぬ事なるか故に心から外貌をつゝしむ人もあり猶內心までもあらひてこのうかゝひなき人もよにはあるもの也しかれともそれもと人の思

はくに制せられての事にておなしくは所欲のまゝを成して人のおもはくにもかゝはらすはいかてかしからんことをもて此うかゝひはたとひ内心まてをあらひたる人とても猶必あるへきを思ふへし　猶人として不動の欲情を具せざる人なき事なれは　これ身に屬したる情なるか故也　よをはゝかるにつけていよ〳〵此うかゝひさかりなる事貴賤男女にわたりて一般なる中心のかたちなるへきなり此うかゝひ人の中心に必あるか故にこれが導きてわか側言のうちの心法をは必さとるへき事なれはわれよりはいかにも〳〵正に遙に側言せむにさとる人ならんかとのあやぶみに及はさる事思ふへし　いはゆるあきたる口へ餅といふかことき ものなるをや　此うかゝひつよからぬ人はわか側言をさとる事鈍かるへけれとさる人は世にすくなくてうかゝひつよき人多かるものなれは必わか鈎（ツリハリ）にはつき來るへきをやされは側言をあやふかるは人の内心このうかゝひ必せるをしらざるかゆゑなるをしるへしおほかた解しかたき事は智なくては解し得かたきもの也と誰も〳〵思ふ事なれとそれは理のうへの事こそしかなれ所欲のすちは智おのつから生するものなるなり

以上國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉之時とある言靈なり人の欲情をしてかくうかゝはせおきてのちそのうかゝひに路を極めしむへき事なるか故に初段高天原をはまつたつへしとはをしへたまへるなり人の欲情にはしめより親しめは此うかゝひもあるましくしかる時はその欲情を極めしめむる（ママ）にもよしなかるへきなりされは此うかゝひは外貌をつゝしめる人にかならすある物そとしるへき也

理は外より來りて重く欲は內よりおして强きよりわか側言に心法をさとりかしこき路をもえたるかなとその所欲に理の衣をかけ暗に幽路をわれに乞ひ來るへしこれ側言のいさをのあらはれ來れる所也かく理を衣とせすしてたゝあらはに乞はせてもよかるへき事のやうなれと前にいひしかことく彼もわれも神道たゝさるか故に大なる弊とはなりゆくなれはわれはたゝ側言のみして人の頓悟をこひねかはすかくかなたよりわか心法をさとりて內欲外理の乞われに來らんをは端とはすへき事なり此乞を得てその內欲をはしらすがほしたゝその外理をゆるすへき也しかる時は實はその所欲をゆるしたるにはあれとまのあたりゆるしたるはたゝ外理をゆるしたるなれは人の中心にわれを思ふ所津々として味はひ深くおほゆへきなりたとへは人難波に所欲の事あらんにその所欲の筋はいはて難波にゆくへき使あるをゆかむと乞ふかことき（これを內欲外理といふ也）その實は難波のおのか所欲を達せんかために使を乞ふなれは畢竟われを欺くにてにくむへきことの如きわさなるか故によにこれをあばき又はあばかねともその者の心ぎたなさを見あさむ人もあるものなれとこれ大なる誤にて公務に勞をわするゝは此內欲のうむ所ならては得かたき事なる也しかるにわれを欺くとていきとほりいかる人はいはゝ人の公務に勞を忘るゝことを禁するにひとしかるへきなりかく人の外理は內欲のうむ所也ともしらて或は理をとき道ををしへ罪をせめあやまちを改めしむる事いとも〳〵おろかなる事ならすやいさ

めす令せすして人を公務に周旋せしめむとには人をしてわれを欺かしむへき事なりかしされは畢竟側言は人をしてわれを欺けとをしふるかことき もの也としるへし

以上因如葦牙萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遅神とある言靈也この因の字眼字にてはしめよりかへす〳〵われより端をおこすましきことをいふは是也

公務をしも勞をわすれて人のつとめむにはよろつ事足りたることのやうなれとしからすいかにといふに人その内欲のために勞をわするとはいへともその所欲に便ある公務ならては勞は忘るましきなりたとへは難波に所欲の事ある者をして江都にゆかしめむとする時は忽勞をいとふへきかことくありては萬事足りぬとはいひかたき事也たとひ陸奥にもあれ笠(筑)紫にもあれわかおもむくるにしたかひて人勞をしらす周旋するにあらては叶はさる事なれは内欲をさぐらず外理を衣としてゆるすばかりにては人情は全く得かたき事也されともと所欲は世のゆるさゞる所なればかく幽に路をあたへたらんにはふかくわか恩を感荷して意の如くにも人周旋すへきことわりなるを猶しかあらぬはなにの故そといふにたゞかく幽に路を得たるはかりにては人の欲情いまた極にいたらさるか故也（此欲情の極といふはまへにいはゆる大欲の事なり幽に路をえたるはたゞその小欲ならては達しかたき事はもと外理によりてゆるされたるなれは内欲路をえたりといへともその情なほ外理におされて大欲までを達する事をえさるか故なり）されは内欲をゆるすに外理をもてするかうへに今一段その所欲の筋の極とすへき所をはわか心もて察しこれまたその

極をゆるすとあらはになきやうにその外様に理を表として（これ又おもはぬ理を言としてその欲極をあたふる正路を幽とする事也）ゆるすへきなりかく内欲をゆるすかうへに今一段その極をあたへされは人の欲情いつまでも適する事なきか故に人の中心をしてわか大欲を達し來らしめその極わか意のことく周旋せしむるにいたる神算にはおつましきなりされは此人の大欲を達せしむる事わか神術の所詮とすへき事なれと人おほよそ吝嗇あるものにて人の小欲たに達しえすまして大欲を達せしめむ事吝甚しかるへきなりしかれともこゝに吝ありては人の欲情適して安堵すましけれはいさゝかも吝すましき事也（これわか發天地に同しくこゝに吝すれは人そゐ欲情理にたゝかふか故にわれにむかひて人理を全うする事をえさるへきなり發天地の下をあはせてさとるへし）しからは吝あるものもしひて勉强して吝すへからぬ事かといふに勉强するに及はさる事ありその故は前にもいひしかことく人の欲情とにかくに飽くことをしらぬは吝するか故にてもしこゝを極まていたらしむる時はかへりて欲情適して取らでも取りたるこゝ地に必なるもの也されはこゝに躊躇すれは費ましきものをも費すへく躊躇なくして極をあたふれは費へきものも費さるへけれはこの心算に決定せはかつて勉强なく吝はわすらるへきなり此故に畢竟は物の多きによりて欲のあくにはあらすたゝその欲情をして適せしむるわさなるそかし（物によらされは情を適すへからねと物は側にて情は正なりとこゝろえたはこの理明らかなるへし）もし物すくなくは此極を人にあたふる事あたはすとならは貧人は神道をふるまふ事あたはさるへし更に〳〵さることにはあらすその身の分際〳〵は人もよくしれるものな

れはたとひ貧人たりともわれにひとつものこすものなくは人の欲情はたちところに適すへきなり大かた人われにむかひてわか意のことくなきはひとへにその大欲を達せしめさるか故なれは（欲情はゆかむと思ふ所まではゆかではやまさるものなりこれ不動の性たる所以也しかれともその極をたに得れはとゝまる事これ又欲の性なりこれ私にいふにあらす夜極れは晝となるを半夜にして夜をあかさむ事はあたはさるを思ふへしすへてわか御教天地の神祇を人身中の神祇にあはせたるものなれはかつて／＼私ならさる事也）こゝに寄せすは人の中心必一變すへき也大欲たに達せしむれは小欲はその中に存するものなれはとても欲情適すましき小欲をのみ達せんはかへりていたつらわざとなりぬへき所をよく／＼心算すへし人の欲情適したらんには今まておのかうへをのみおもへりし心一變しわかうへをおもふ心かならす人に生すへきをうたかふ事なかれ

以上次天之常立神とある言靈也比古遅神のうへに又此神をほとこす事（淤能碁呂嶋之件に累積成島とある累積の字此二神をかさぬるを云島といふはすなはちこの次なる下段の源をいふ也）神道を正とする一大事なれは上にいふ所をよく／＼思惟しいさゝかも踟躊の心なく快く欲極をあたふへき也

大かた人欲を達する事小欲をゆるすたにあまえつきあがるものなるにまして大欲を達せは人をして放縱無愧に走らしむるわさたるへしとおもふ人あるべしけに顯路をもてゆるさは人放縱におちいるへき也この故にはしめ人の幽路を乞ふ時もたゝその衣とし來れる理のうへにてゆるしそのうへにその欲極をあたへむにもかりにも幽路に言をつけすなにとなりとも理をつけておしつゝみ理を衣とし

てあたふへきなりしかるときはよく味はへは幽路をゆるし欲極をさへあたへたるわさなれともその外貌はたゝ理のうへなるか故にわか中心をはかりかねてあまえつきあかる事かつてあるましきなりされはこのふたつの神術も理を衣とする事大事なれとも大かた美事のあらはならぬは無益のわさなりとして美事は必あらはになす事凡庸のつねなり（美事をあらはにせぬを椽下の舞と俗にいふなり又俗に死金をつかふなといふもこれ也これ大なるあやまりにて椽下は即神道なれは椽下にてまはされは人の中心に入らすしかも後おほいなる弊をとりいつへきなり死金はすなはち活金なる事をしらむは神道の正とすへきを弁ふるにある事也）されは理を衣とする事とにかくにあやまたるへき事なれはよく〳〵神道の正たるへきことを思ひて此ふたつをも衣のうちの機關とすへきなり（印をむすぶに衣のうちにてすることわりなることなり）好事の門を出す惡事の千里に聞ゆるは好事とたにいへはあらはにし惡事とたにいへは幽にするか故也好事を幽にするにいかてか千里に達せさらんと決定すへきことなり凡庸美事をあらはにのみするは畢竟頓報をこひねかふか故なり頓に報なきはけにおほつかなきかことくものなれと頓報ある事はかならすその一時にて恩光消るもの也（此事下の下段にくはしくいふをあはせて思ふへし）たゝ〳〵理を衣として此二神はかくすへき事なりかし

以上此二柱神是亦獨神成坐而隱身也とある言靈なり

○以上二神を中段といふ此中段の主意は人の欲情を極めしむへき心法をなしへ給へる也されともこの二神葦牙を得てのうへならては施すへき地なけれはまつ初段をかけて葦牙を萌騰らせさ

てのち中段はほとこすへしと也これ初中段を次序し給へる心也されは中段は要たりといへとも初段また重き事をしるへし

ひろくは天下國家せはくは一人二人の間その所詮は人情をえて人わか意のまゝに周旋せは足りぬへきことなるか故に以上五神を初中段とたてゝをしへたまへるは人事の小大にかゝはらす人の人に接する心法たゝ此初中段にて事たれりとの御をしへなりさしもかきりなき人事といへともたゝ此初中段をのみ心法とせはおのつから全かるへきその簡易おもふへしこれひとへに末にかゝらすして本を握るか故なる也されはいかに下根の人たりともたゝ此初中段はかりの事なれは學ひ得ぬ事やはあるへきされとこの初中段のことわりいとその意味深長なるか故に遲鈍なる人は解しかたくやと思ふ人もあるへけれとまへにもいひしかことくすへて道理のうへの事には智力はたらきかたきものなれと理學こそあれこれは欲を主にしたる物にて欲に路をえむとすれはこの初中段より外の道なきをいかはかり遲鈍の人たりとも解し得さる事あらんや（童といふとも猶それ／＼の欲はあれはさとさは即解しぬへし）もし解しえさる人あらはその人は寡欲なる人としるへし欲たにあらはこれか解しかたき事あるへからす元來欲を主とするわか御教なるか故に渾沌なる性の人は教旨のこゝろえかたきもことわりなる事なから欲を主とせされは理全からさる事よく／＼わきまへておの／＼天地をひらき此初中段をまなひ得へき也人より先（セン）をか

けてこの初中段を人にふるまひたらん人は上より下下より上の差別をいはす人われをたのむ事婦の夫におけるかことくなりぬへけれは上下とは君臣父子のたくひ也かゝるわかれは人にありて神にはなきものなれは外にては上下ありとも中心にては上下の別なく臣より君子より父たりともさきに初中段をふるまはむ方は夫のことくなるへし人におくれさらむやうに人々以上の初中段をまなひほとこすへき也

以上上件五柱神者別天神と中段下段の間をわけたまへる言靈也されは下段以下は初中段のいきをなり猶委しくは下を見て心うへし

神典言靈卷之一 終

自淤能碁呂島至山野

神典言靈　二

神典言靈卷之二

天兒屋命庶裔成元 述

○第一　淤能碁呂嶋之作

七神三段神世七代の言靈にて神道やむことを得ぬものなれはわか力をすて丶神力に乘るへき理つまひらかなれと大かた人の心ぐせにてわかちからをたのもしくおもふか故に此理了解しかたきなりされはまつ此件をときて神道に乘るちから人力にまさる事を決定せしめたまひしものなり大かた人力もみかけはいとした丶かにもなるものなるか故に人これをたのむことなれとつひに神道には克つへからさるものなりされは人情をえてわか意のことく周旋せしめむ事長く久しかるへき事はわかちからのをよふ所にあらすしからはいかにせは長くわれをわすれえぬはかり人情をうへきそといふにさる心は人の欲情を源として生するものなる事神道のなす所なれはわれはた丶〱ひとへに人の欲情を適せしめむことをわさとはすへきことなりされと人の所欲を逹せん事われより端をおこしてはな

ほわか力となるへきか故にまつ人よりその所欲をわれにおもむけ來らむことを急務とすへきなりこれ初段にいふ所の側言のことにて（側言をはこゝには天沼矛とときたまへりこれは陽物に配せんための名なり）側を路として人の欲情をさそひわれにその幽路をこひ來らむことをつねに懇にふるまふへき也

以上於是天神諸命以乃至賜天沼矛而言依賜也とある大意なり

人おほよそ理を貸はさるものなけれはわれをもそのつらにおもひなして人われに隔意しその欲情をふかく隱ししかも内心にはその欲に路なきをうれへをるへきなりされはとてその隔意したる所の欲情をは正言して問ふときはわか力となるへきか故にまつわか神氣を橋のことくかけその橋のうへにつねにわか心を置きさて側をもつてその人のかくしたる欲情をは我におもむけ來らんことをさそふへしかれこゝろとわか心をしりて暗に幽路を乞ひ來らはそれすなはち神力のたすくる所なりとするへし

以上故二柱神立天浮橋而指下其沼矛以畫者とある大意也

その側言のさそひによりてわか心法を察しその欲情に理の衣をかけて暗にわれに幽路をこひ來るへしこの乞われにうちかゝり來るをは側言のさそひの功成れる時としそれより中段のわさにかゝるへきなりされは人より内欲外理の乞われにうちかゝり來らんは初段のをはり中段のはしめなりと心う

へし

以上塩許袁呂許袁呂迩畫鳴而引上時とある大意也　鳴とは聲あるをいふにて即中段の如葦牙萠騰といふに同し

その時その期をはづさずその幽路をゆるすに理を以てし更に暗にその幽路の極をさへあたふへし　これ中段一神の心にて比古遅神のうへに天之常立神をはとこすを云こゝに累積といふこれなり　しかる時は人の中心にながくわれをわするゝ事あたはざる一塊カタマリ出來へきなりこの一塊の生する事ひとへにかれか欲情のおのれとなす所にて全く幽事のいさをなれはもしわかちからたのみとなりて顯を路とせはいかてか長くわすれえぬはかり人情をえんこれ即わか力をたのみとすましき所以なるなり　この一塊淤能碁呂嶋といふは人力にてはなさでおのつから凝ることをさとさむための名也としるへし　されともわか所欲たに思ひ捨なばさるもどかしわざをせむにも及ふましきかことくなるか故に幽事のたつときことをおもひえぬもことわりなから顯事のちからはつよきに似ていとよわき事しひて人情をえたるとおのつから人情をえたるとの差別あれは也されは人情をおのつからえて後こそ顯路の妙事もおのつから生すへき事なるに凡情とにかくに解し得かたきはいと稚き事也されと此教旨人の通情に反したるにはあらで人としてこれやむことをえさる明證ある事也その明證といふは人といふ人そのうまれし始はまつ父の春情を本とし　これ天地をひらきわか所欲をとけむと初中段の神術にかゝる人の志にあはせてその源をさとす也　房中にして　房中は天浮橋に配して幽路をいふなり人皆房事は人のみる所にてはえせぬをもておもふへし　陽物をは母の陰中にさしいれ　天沼矛を指下とあるこゝろ即この意なり　する程に　これ以畫とある心なり　母の惣

身に遍滿したる所の精氣〔女はつねに容貌をのみつくる事その氣惣身に遍滿せるか故也人大かたつねに外貌をかざる事女のかたちつくるにごとしければ也〕漸をもつて陰所に凝り寄り來りつひに容貌をみだすにいたる〔これ塩許袁呂々々迩畫鳴とある心也俗に房事のうへの諺に曰本國が一所へよるといふ事もと神道諺なりしか傳はれるにこそ〕その時父の精を母の陰中に施す事數滴にして〔塩は父母の精に配したるもの也數滴は即累積の字のこゝろなり〕つひにその精を母の子宮のうちにうけて子となるへき一塊おのつから生すこの一塊かくのごとく生する事父かちからにあらさる事これ房中のわざなるにあきらかなる事ならすやされはおのか力をたのますして人に接せむにはひろきもせはきもすへて幽中たるへき教旨に合したるを人この父の房中のわさよりうまれさるはなき身にしてこの教旨に反しわか力をたのみて顯路を路とするはいかなるはかなさそや人の中心になかくわれをわすれえぬ一塊の生する事もし顯事より生すへしとならは人も房事よりはうまるるましき理なるをや

以上自其矛末垂落之塩乃至是淤能碁呂島とある大意也

おほよそ人と人とのしたしき事夫婦にまさるものなしその夫婦の間も子をえてのちはたかひにたのもしむ心いとかたきものなりこれたかひに幽顯二路のたのもし人となるか故にしてその基はこの一塊たるへけれは天下國家といへとも人われをはかなくわすれえぬ一塊をは彼我のより所とすへくそのより所となる一塊のはしめはわか力を用ひぬ幽事よりおこる事なれはかへす／＼わかちからをたのみて顯を路とはすましき事ならすやこの一塊を基とせされは人我たかひに幽顯二路はたつましく

此二路たゝされは長久なるましき事この件を證として悟るへしと也

以上於其島天降坐而見立天之御柱見立八尋殿とある大意也

○

（）以上を淤能碁呂嶋之件と名つくこの件の大意は七神三段神世七代の言靈幽事を主とすへき眞理をときつくしたまへれと人みな渾沌の性ひらけかたきものなるか故に人我うまれ出たる本然に配してわか力をたのます神力を重んすへきことわりを證したまひしなりされはいはゝ七神三段神世七代は教なりこの件は卽その教のことわりの人々のうへに活たるをしめしたまへるなりとしるへし此次なる先言之件より山野之件まてあはせて四件は神道やむことをえさることをときてわか教旨のたゝたる所以をあかしたまへるにてその四件のいつる所この件の眞理に戻るよりなれはまつ此件をはしめに說たまひしもの也

○第二　先言之件

おほよそ天下國家のひろきも一人二人に接するせはきもその所詮わかちからをたのみてはよろつ全からさる事なれはさしも靈妙なる神道のちからを借るへくわかちからを用ひぬときは順路はたえた

る事なるかゆゑに幽より外に路とすへき方なき事也此理前件にてしるき事なれともと我欲する事を人に乞はむにこそ幽をも路とせめ人の所欲を達せしめむかためなるを何かはもどかしく幽を路とせんとおもふ惑かならす生すへしさる人はあらはに人の所欲を問ひいでそれを達せしむるもあらはになすへしけに正言して問ひゆるすときは人も内欲外理とする心労もなく我も恩光速にかゝやくへければ幽を路とするは迂遠のわさのことくおもはるゝ事也

以上於是問其妹伊邪那美命曰乃至伊邪那美命答曰然善とある大意なり

しかるにまつ初段をかけその顕によりて幽に乞ひゆるさすしてはその後いかはかり厳密なる制度をたて号令をなすともそのはしめのしたしみを重くうけあとの厳密を軽くうくへきか故にかく人のうくる所はしめの方を重く後い方をかろくうくる事ひとへにそのわさ幽中ならさるか故なりともに幽中にてなす時は人その中心にて味はひ外には理を重んすれとも内には欲を主とするわか心法をさとり厳慈のふたつをかなたにてよきほとにつりあはすへき也たとひその制度を堅くまもり号令にしたかはむと口にはいふともおのつから心にあまえられておのつから制度を犯し号令にそむく事必あるへきなり

以上佘伊邪那岐命詔然者吾与汝乃至後伊邪那岐命言阿那迩夜志愛袁登賣袁とある大意なり

しかれともその制度を守らす號令にしたかはぬも横着にはあらてたゝあまえてのわさなれはさしも路なきなうれへなりし所欲を達せられたるなれはこれをよろこはゝ人とてはあるましき也かならす恩はしりてあるへきなりしからはその恩をしれる心かの

我を忘れえぬ一塊かといふにたゝ恩をしれるはかりにて周旋はせぬと周旋はしても報恩一時にてやむとの二種たるへし（これ水蛭子と淡島のふたつなり第一巻の下段の所にいふかことく報恩一時なるは行末までたのもしからすこれ豊雲野神の反なるを云なり）人皆かくのことく恩をしりなから周旋せぬと周旋しなからたゝ一時なるとの二種にては行末なかくたのもし人とするには足らさるものなれは人を得さるも同前の事たるへし（たとひ百万億兆の人わか恩をしれりとてたゝ當前の事にてその神氣この二種たらはなほ一人もなきにひとしかるへきを思ふへし）されは所詮はわかほとこしつるわざも悉くいたつら事とは成ぬへきをや

以上各言竟之後乃至是亦不入子之列とある大意也

○

○以上を先言之件と名つくこの件の大意は中段尊しといへとも初段をかけて幽とせされはいたつらわざとなる事をときたまひて初中段の次序やむことをえさることをさとしたまひしもの也かく中段のわさわか所欲のためにあらねは幽を路とするにをよはすと思ふ惑は中段尊しとする所より必生すへきか故に淤能碁呂島之件に繼きてまつ此件はときたまへる也

○第三　改言之件

おほよそ人われにあまえては法令おこなはれす法令たゝすしては天下國家たもつへからす一人二人

の間も久しかるましき事也（久しからさる所以はかの恩はしりなから周旋せぬと周旋はすれとも一時なるとの二種行する爲のたのもし人とはせられぬものなれはなり）こゝにおいて翻案するに人欲を達する事人情をえむの要務たりとはいへともまつ理をたておきてその後所欲をたすくとも遅からじとおもひなりて此たひは心法をあらため中段のわざはかたくなさずたゝ人の所欲を制することをのみむねとするに（理をさきとする事はわか御教初段を第一としたまへるに同し事なれと初段をさきとするは中段を主として中段のための初段なりこれは中段のための初段にはあらで初段一途となるまとひなりされは先言をは翻案すといへともこれなほ凡案にて神智にはあらす神智にあらさる事はこの末々の件をみておもひしるへきなり）欲もと不動を性としたるものなれとも理には克つ事あたはさるものなるか故にやむことをえすその所欲をせばむへきなりこの所欲をせばむといふは人身もと八所ありて（八所とは頭胸腹陰左右の手足これなり佛のいはゆる六根のことし人ひとりの身をも百萬億兆の人を引まとめたる一天下もたゝひとしとみてたてたまへる御をしへなれは一身をも八所一天下をも八島とはしたまへるなりくはしくは古事記燈にみるへし）その八所ごとに屬したる所欲かならすあるものなり人おほかたおの〳〵すきひがむ所の物事は所欲が中の私欲にてひろく貴賤にわたりたる所欲といふは飲食男女の二欲これ也されはこのふたつの欲は所欲か中の公欲にて人々やむことをえさる所也この故に制度を嚴密にせらるれはその各すきひがめる所欲はつゝしみて人みな飲食男女の二欲ばかりとなるこれをは所欲せばまるとはいふなりよに飯をくらひ妻をもてるを私とやはいふされとこれも身の分際にこえて美食し酒色にもふけりなはこの二欲とてもなほ理はやぶるへけれとたゝ大かたの事ならは飲食男女の二欲は理中のものいたるへきなり（此故に第一卷發天地の所にいふかことくこの二欲は欲なからもなほ發天地の種にはならさる也理も制する事あたはさるほとの所欲ならては所欲とはいひかたくさならては天地はひらくましき事）

この件をもておもひさとるへきなり　人みなこの二欲をのみのこし餘のすきひかめる所の欲はふかくつゝしみたるかたちは一人二人の間にもあれ一國一天下のうへにもあれ無事長久のかたちとは見ゆへきことなり

以上於是二柱神議云乃至故因此八島先所生謂大八島國とある大意なり

かく八所の欲せばまりて飲食男女の二欲となる時は制ゆきとゝきていと嚴重堅固みゆるものなりされとこれをは嚴重堅固なりとみるはたゝひとわたりの事にてなほよく／＼穿鑿すれはかく二欲にせばめたるは制内ばかりの事にて制外にてはなほ八所の欲の數を全うしてあるへきなり　八所の欲数を全うすしにたとへば酒をこのむ人は八所のこらす酒にゆたねたるかことしされは制外にて酒をのむは八所の欲数を全うする也　此制内といふは天下にては制のをよふかぎりを云家にしては耳目のをよふかきりを云一人のうへにては外貌をいふなり制外とはこれに反して天下にては制のをよはぬ所家にては耳目のをよはぬ所一人にてはその內心をいふ也と心うへし制内はいと嚴重にして堅固長久のかたちなれとも猶制外まては制とゝかすしてはいと行末心もとなき事なりかく制外にてはなほ八所の欲を全うする事これ欲の不動なる所以にてたとへは東の間をはらへはその塵西の間にゆき西の間を掃へはその塵またひがしの間にゆくことくその性やむことをえさるところ也しかりとはいへとも制内の制きびしけれは制外とても心はゆるさすおそれをるへけれはあらはに所欲をほしきまゝにすとはみえさるやうにするものなりされは制外までは制をよはすとはいふまじき事な

から制内のことくにはあらぬ事不動の性のなす所そかし

以上然後還坐之時乃至次生兩兒島亦名謂天兩屋とある大意なり

○

○以上を改言之件と名つくこの件の大意は中段を主とすれはその終いたつらわさとなるか故に初段を尊しとおもひなりぬる凡情をときその制なほ制外まては全くをよはさる人の不動の欲の性をときしめしたまひしものなり初段に偏なる惑は中段に偏なるより必生すへけれはかく先言改言と次序したまへる也顯路はいと重き事なれとも幽路のためにたつる顯路ならては萬全のわさにあらさる事この六島におもふへし

○第四　河海之件

大かた制内ばかり嚴重にみえても制外なほ殘欲ありてはなほ行すゑ心もとなき事なるか故に制外まて殘欲いさゝかもなくなさむこそいたりなるへけれとてそれよりわか耳目のをよはさる所まて制ををよほしたとひかくしてもおほひても陳しかたきやうに手をとゞかせば目付目あかしなとやうのものをおきさらでも耳目とゞかさる所も明らかにわれ告べき人を設くるたくひ也人かくしおほふへき方なくなるか故にやむことをえす制外においてもいさゝかの殘欲

なきまてなりぬへしこゝにおいて制内制外の別なく制ゆきとゝき人にいさゝかの殘欲もなけれはこれをいたりと心うる人も多きものなりけに制外までも制のをよひたらんはいと愉快なるわさにはあれとも人の神氣のつねとして（神氣のつねとはすなはち神道をいふ也）制外までいささかの殘欲もなきまて潔くて長く久しく堪へきものにあらさる也しかれとも制をたにとかすれは制外までも廉潔きはまるものなるか故に人この久しく堪ましき神道をさとらすして制せらるゝをたのむなりかく制せらるゝをたのみて制しとげがたきをしらさるこれを凡智とはいふなりかし

以上既生國竟更生神乃至次國之久比奢母智神とある大意なり（はしめを十神後を八神としもわかちたまへるは十神は内よりいつる所をとゝむるなり八神は外をいさきよくするなり制外までをつゝしませむ事その根をたつにあれはなり）

○

○以上を河海之件と名つくこの件の大意は制外までも制をとゝかすれは制せらるゝものなる事をときたまひしなり此惑は制内の制せらるゝより勝に乘るわざなれはかく改言之件に繼たまへるなり理もと欲をもつてはおすへからさるか故に理を以ておせは無欲の極にもいたれとも長く堪へからぬ神道やむことをえさる事なりされと凡智そこに悟りいたりかたき所なるか故にこの次の山野之件をときたまひしものなりされは人々凡智をすてこの河海より山野にうつる必然の

いきほひをさとるへき也

○第五 山野之件

おほよそ諸欲は理に克つ事あたはさるものなるか故に理をもつて制すれは制內はいふに及はす制外までも克たるゝものなりしからはながくかちとげらるゝ物かといふにその根氣のつゝくほとこそあれもと不動を性としたるものなれは限あれはつひにはえしのびあへすなりて今までふかくつゝしめるかへりかならす來るへしこれその人のつゝしみふかゝらぬか故のことくなれとその人のにくむへき所にはあらて人欲の本然たる不動のなす所なる也たとへはから臼をふむかことく釣瓶を引くかことく片方さかれは片方あかり片方あかれは片方さかるものなるをしはらく制しかちたりとてさる性なるものゝことく心得制しおほせ克ちおほせむとのみするはいとをさなきわさなりかし

以上次生風神名志那都比古神乃至次大戸惑女神とある大意なり（こゝははしめを四神のちを八神にわかちたまへりこれまへの河海之作なる十神八神のかへりにて外へいつる所と外とをいさきよくせる神氣をおしかへす神氣を云也）

かく根氣かきりありてつゝしめる神氣おしかへさるゝにいたりては內よりおさるゝと外より制せらるゝとのいきほひやむことをえすして外を理になしかさりて內のむきおほはむの心おのつから生

しすへて虚誕をかまへて欺かむことをむねとすることゝなりそれにつけては元來われに幽路をあたへらるへきおのか所欲も（わか欲は人これを達し人の欲はわれこれを達すれは大かた欲の路なきも路はえらるゝ事第一卷にいへり）人みつからゆるしてほしきまゝをせむの心となりはてぬへきなりかくまてなりはつる事これまたにくむへきにあらすやむことをえねは也

以上次生神名鳥之石楠船神乃至亦名謂火之迦具土神とある大意なり

人おのか所欲をみつからゆるさむとおもひなるにいたりては向後われに幽路を乞はむの心もなくわか力を借らんのかまへたえてなくなりぬへし（これ美蕃登見灸而病臥在とある心也理を一途として根氣たへさるかなはしいて堪る人なとは必病をとりいつるもの也たとへにも主と病にはかたれすといふかことく病者はいかてか理をもてあつかふへきされはかく美蕃登やけて病こやせる人は理もかつ事あたはさるへきをや）しかるときはさしも停き理なれとも理をもておす事もあたはすなり制する事あたはさるか故にその人の言行おのかほしきまゝになりて全くけかれはつへき也かゝる時とても猶制をつよくせはふたゝひふせかるへくもおほゆる事なれと制したるをはりのこゝにいたれるはたとへはせきたる水の溢れたるかことく今更そのいきほひふせくへからさるものなりこゝをもていはゝ理停しといへとも欲にはまた克つへからぬにはあらすやかく理もかつ事あたはさるはかり無愧なる人を神道やむことをえさるよりのことゝ弁へすはあるひは絶口し或は籠居せしめあるひは流しあるひは刑せむより外の事あるましかるへしされとも最初よりのわか心法つ

たなからさる時は（つたなからさる心法とは即わか御教をさせる也）人かくまて手におはすなる事あるましきことなりもと人情をえてわか意のことく周旋せしめむとてこそ制しもするにあらすやしかるに所欲の路をわれに借らんの心なくおのれみつからゆるさむとおもひなるにいたりては人の中心われをはなれはてゝつひに人情をえて意の如く周旋せしむへきかたたえてなくなりぬへきをや

以上因生此子美蕃登見灸而病卧在乃至故伊邪那美神者因生火神遂神避坐也とある大意なり

○

○以上を山野之件と名つくこの件の大意は人欲を制する事極にいたれは必その愼長からすしてそのをはり遂に人情をえむ道たゆるにをよふことをとき示したまひしなり大かた有智といふきはも其智河海之件にかきりて此件には及はさるもの也されとも河海あれは必山野ある事地の天然のかたちなれは（地は人欲のおやなる也）この神道やむことをえさることをあらかしめ見こさゝるはいまた神智といふへからさるきはならすかし（この件を見こす神智をは思金神と末に名つけたまへり）

おほよそ人を得むはその欲情を適せしむるにしかさる事なれともその極人情たのもしからす（これ淤能碁呂嶋之件より先言之件までのこゝろ也）されは理をむねとせむとすれはその極人情われを避る（これ改言之件より山野之件までの心也）こゝにおいて智きはまれるかことき事なれとも理はたてしむへく欲は達せしむへきか中に欲情をたに適せしむれは

理はおのつから全き事なり（これ山野之件の本文のをはりに和久產巢日神豐宇氣毘賣神をときたまひしこゝろ也）されは外には理を重んし內には欲を主とすへき事大かた天下國家乃至一人にましはるにもこれより外の心法あるましく此心法のことくふるまへはその極人わか意のことく周旋すへきことなるか故に七神三段神世七代の御をしへはたれさせたまひしものなりされは此御をしへの出たる所以はすなはち以上五件の神道の人力にをよはさるより出たる事なれは以上五件は我御をしへ建立の礎なりとしるへし此故にわか御教をまなはむ人もこの五件の神道やむことをえさる事を實に心肝に徹してさとらされは折にふれ事に臨みては必まどひ生すへきなり大かた人理を尊く欲をいやしとせさる人なきものなれは理をもつて欲をおすをめてたき事にのみおもふもの也けに理は欲をもつておすへからさるか故に理のためには制せらるへけれと理の欲に克つはたゝはしめはかりにてつひには理も欲にはかちかたき事欲の不動の性たる所以なりされは當座克ちたるをかちたりとはすへからねは長くかちおほせむとすれは克つ事あたはさるこれ神道のやむことを得さる所なるからはその極はしめより明らかなる事なるをなほ欲を制することをのみむねとするはいかなるをさなさそやさるは天下國家一人二人をひきうるにもおのか力をもてせむとするか故なり大かた此やむことなき神道は天地の容間ならひに人身中の容間にもみち〳〵たるをいかてか人力その神力にかつへきされは人力をたのますたゝ此神道にたに乘らは舟車にものつ

めるかことくわか力を用ひすしておのつから人情われに歸して周旋自在なることをうへきにあらすや（これ淤能碁呂といへるこゝろなり）こゝをもてわか御教には善解除（ヨシハラヒ）悪解除（アシハラヒ）とて（此事末の千位置戸之件にありそこの言靈をみてしるへし）わか智力をたのむことをいさめたまへるなりたとへはねふたきに書をよみ空腹なるにあるくに睡りてのち物くひて後ははしめよりはそのわさいたくはかとるかことくたゝわれも所欲をとけむの志をかたくし人も所欲を達せしむることを主として幽を路とせは大かた天下國家の顯事はいさめす鞭ずして全かるへき也されは顯事の重きか故こそ人我ともに所欲を主とはするを理をのみ尊がりてかへりて人情をうしなふ事かへす〱あさましきわさ也されともこれ凡情に反したる事なるか故に悟入する人すくなかるへけれはたゝ〱ひとへに此五件の神道をは實事のうへに到底せむ事まつわか御教の初門なれは以上の五件はことにおろかに見なかすましき事なり

以上凡伊邪那岐伊邪那美二神共所生島壹拾肆島神參拾伍神とことさらに以上をつかねてしめしたまひし所以なる也

神典言靈卷之二 終

神典學要

中臣御杖著

神典學要

中臣御杖著

神道を學はむにはまつ神道の大意をしるへしその大意といふはおほよそ神は天地にましますこれを天神地祗(祇)と申すこの天神地祗(祇)次第を乱さすよく持あひて昇降二氣をつかさとり給ふかゆゑにその昇降二氣の中間にして萬物生々してやむ事なき也しかれは天神地祗(祇)なにの爲に晝夜を捨す昇降の次第（次第をみたし給はぬ證は晝夜寒暑の次序にしるへし）をみたし給はぬそといふに專萬物生々のためなりその次第をさして神道とはいふにて卽神典一部はしめより終にいたるまて次といふ字をもて次第をしめしさならても一部の神々悉く次序ありて前の件を後にもおくへからす後の件を前にも置へからぬこれなり此故に神典一部は全くこの天神地祗(祇)の次序のやむことを得さることをときしめし給へるより外の事なくしか次序をしもとき示したまへる所以は人としては貴賤長幼となく此神道にしたかへとてなり孝德天皇の御紀に惟神といふことを舍人皇子自註し給ひて惟神者謂隨神道亦自有神道也とあるかことく神道は隨ふを本とはする事なりこれを以て證とすへしさて此隨ふといふ事くはしくしらすはあるへからすすへて人のさかとしてなに事をするにもたゝわか力をみかきおのか力を以て事を成さむと

するもの也けに力をみかけは莫大の功をもなさるゝ物にてはあれとも一己のちからは山を拔くほとの功はありとも甚小さきものなりたとへは物を荷ふにいかほとの怪力なりとも二三拾貫目には過さるへしこれを舟につみ車に乘する時はその斤量數十人の功を□（一）人してなすへきかことしかの流水に車をかけて米穀を舂き粉をはたくに車ひとつに臼七ツをたつる時は卽七人の功なれともそれを人にせは夜を通して舂く事あたはす甚とても飯を喫し茶を飲み或は時々必憩ふへししはらくも憩はす夜もいねすして舂かむ事いかはかり精神さかりなる人とても堪へき事にあらすされは七人の功の如くにして三四十人の功にもあたるへきかことし又大舟の數日湊にありて風をまつは何のためそ數十人の水手はあれとも手を揃へて櫓をおす十日の路程はたゝ一日の風にしかさるへけれはいたつらに手をつかねて數日風をまつなり又深山に良材あれと谷川せはくしてなかす事能はすましてや人力にてはいかはかり數日を勞すともとり出かたきを霖雨の時をまち水漲るに乘してなかす時は人力のあたはさる所の功をうへしかやうの類大小の事に眼前にいと多きをおもひはかるへき也されは神道は隨ふへきゆゑはふかき道理ある事にはあらすたとへは人なみの力拾貳貫目の斤量なるものをもつに貳拾〆目を荷はむとするにはその力まさるまての修行なみ／＼の事にてはまさらすまさり得てのちとてもその貳拾〆目を荷ふはくるしさ甚しかるへししかるに流水に車をかくるは時々そのしらかりたる

米をとりかへ或は車に油をひきなとするはかりの力にて數十人の舂く功を得るかことくおのれはちからをも尽すに及はすしてしかもその功廣大なるへけれはわか
神武天皇この神道に隨ふ妙路をさとり給ひて九御代の間は天子のみ傳へさせたまひしに第十代　崇神天皇の御時はしめて民間にこの御教をしきたまへりし也　天照大御神を倭の笠縫邑にまつりたまひしとあるこれなりくるしみてたにその効は得かたきをくるしますしておのか力の及はぬ所をも得へきはまことに凡庸の智のをよふ所にあらねは却てこれを信する人よになくなりたゝおのれをくるしめてそのくるしみたる分量ほとの功を得るを當然の理と心えて人皆勞して効なきことをのみするはいといとをしく心くるしき事也しかれとも人もとうまれえて一己の力をたのむ心くせあるかうへに他域の教來りていよ〳〵その性をすゝめひたふるにおのか力をみかくを人の道と心えたるより孝といへはおのか孝をつくさむとてかへりて親の事をも思はす兄弟の不孝におつる事もいとはすたゝおのか孝をかゝやかす事となり忠といへはおのか忠をつくさむとてかへりて君の事をも思はす同僚の不忠におつるをもいとはすその外信義のたくひもこれに同しくたゝおのれを尽さむとて思はす人のうへをいとはぬに落るを弁へさるなりたとへは此席を淨くせむとてはらふ時はその塵必次の席にかゝるかことしされは世のさまをみるに忠孝とこそいへ畢竟は力くらへにてたとひかたはらの人は

いかになるにもあれおのれか力をつくさむとする事所詮をいはゝたゝきそひあらそひか主となる故にうはへにてこそうつくしくましはりたれ内心はたゝまけし〱とする心より外にはなきなりこの故に國といふ國家といふ家よく治まりとゝのひたるかことくみゆるも内にいりてみれはつねに事たえすしつかなるはなき也かくのことくにして治まれり齊(闕畫)へりとおもへるはいと危からすや概するに一己をみかく心得は干戈の源といふともおそらくはたかふましきそかしその證みつへきものは訴なとの月日にそへて多きこれなりされは人をよくするをしへのことくにしてかへりて爭ひを誨るかことくなるへし鳩巣小説に嶋田幽也の　日光の御塔の事にて豊國の御社を修理すへしといはれたるまことに天下の民心をして天下を寧からしめられつといふへしかく神道に隨ふ時はあらそひの心露はかりもなくて忠はまことの忠孝はまことの孝となるへき也黒田如水の病末に長政かために近侍をからくせられしかことくならは天下國家もまことにやすく人倫の間もまことにうるはしとはいふへきなり神道のちからの無量にして不測なるいかてか人力のをよふ所ならん人力にまさる事はるかなる神力ある事をしらさるかゆゑか又はしりても猶信せさるかゆゑか予年比この隨神道をとけとも信受の人なき事いともとかしきわさなり神道はもと萬物生々のためにある物なれはその萬物の長たる人なれは人のためになりぬへき事のみをつねになし給ふものなりしかれとも神はめにもみえ給はす

手にもとられ給はさるか故にさる御心也とは人しらさるもことわりなれと今そのうたかひなき事をいはゝ房州は石乏しき國なるに年々正月に海上より石をよせ越後新方のわたりは草木乏しき所なるに海濱の砂もゆるを思ふへし又邊鄙には醫乏しけれは病を得る人は悉く死するかといふに思ひかけぬ草根木皮のその病を治するかことしゝかのみならすあつきには水ありさむきには火あり海魚野菜をとり來て賣る者あるか故にゐなからこれを食ひゐなからこれを買ふ者あるか故にとり來てひさく者よを渡る類神道の人をたすくる事自然のものにおいて心をとゝめはあけてかそへかたかるへしかはかりかたしけなき神慮といひその御力無量なることをさとり人の一己のちからは勞大なれとも功小さきことを會得せは隨ふにまさる道なき事はおのつからしらるへきなりこの隨の益はたとへはたとひわれは孤獨たりとも天下の人こと〳〵くわか手足のことくつかはるへく又貧しくとも天下の金錢悉くわか有のことくにもなりぬへしかはかりの大益たゝ神道にしたかふにある事なるを誰かはしたかはさるへきされはそのしたかふに益大なるよし又したかふへきさまはくはしく神典一部にとかれたれとも今その大要をいはゝたゝ人の言語のうへにある事にてなに事にもあれ言を用ふれはやかてそのかたちあらはなるか故に神はもと無形にましますにたかひて人力となる也不言にして事をなす時はやかて神にひとし（これかの孝德紀の惟神なり）この故に萬葉集卷□（十三）（校者云三トアリテ消シタリ）にへしきしまのやまとの國は

神なからことあけせぬ國とよみその餘にもいと多く言擧せぬ國とよめり中にも同集卷（六）に へ千萬のいくさなりとも言擧せすとりて來ぬへきをのことそ思ふとよめるはなにの苦勞もなくてといはんはとの心に言擧せすとは用ひられたるにてもと言語といふもの甚弊多かる物なれはいはむにもいたく心の勞せらるゝ物なりその勞せらるゝは全くおのか一己の力して物事をなさむとするかゆゑなり默して功あらはさはかり勞なき事はあるましくその默してえらるゝ功は卽神力のたすくれはなりすへて言語に弊ある事はから國にもしりて老子は多言不如少言不如不言ともいはれたりしかれともいかに不言にしかすとてよろつたゝ不言にてのみあるへきものにあらす此故に　神武天皇の御時はしめて倒語といふ事起れり　此記　垂仁天皇の御卷に へ物言如思尒而無物云とあるかことくおもふかことく直にいふは物いふといふものにあらすとの御をしへにておもふすちはいはて思はぬすちに言をつくるその思ふと思はぬとのすちを倒とはいふなり倒語はいはされともいひいひたれともいはさる言にていはて叶はぬ時いひなから猶神道のちからは敝はさるか故に神道のちから卽來りたすけてその人の志をなさしめしかもその一己のちからのをよはぬ功をえせしめ給ふなりこの故に萬葉集第□（校者云三トアリテ消シタリ）に へしきしまのやまとの國はことたまのたすくる國そまさきくあれこそ同集卷　に へすめ神のいつくしき國こと靈のさきはふ國と云々　續日本後紀に へことゝたまのまさき國とそともよみてかの

思ふすちをいはす思はぬすちをのみいふ時は言をつかさとり給ふ神の（言代主神なりくはしくは青柴垣之件にいへり）力をくはへたすけさきはひ給ふよしなるをもても思ふへしおもふかことく直にいふ時は即神道の力をたのます一已の力もて事を成さむとするわさとなるか故に神これをたすくる事なしたとへはいとさかしく差略ある人は人すらこれをたすけんの心なしまして神をやされは神道の力をたのまぬはやかて神道を妨くるわさなるか故に此記祓禊之件に禍津日神直毗神をときたまへり禍は神道を拒む時はその神道おのつから曲る神道曲る時は即禍となりくるを云也これを直さむとて直毗神をうみ給ふとは即神道のまゝに直はするをいふなりこれひとへに随はさると随ふとの別をときたるにて曲直は即神道をまくると直はすとの義なるをこれを人心の曲直と心えしより正直の説おこりて神道は正直をもとゝすと人皆きゝならへりされとももし正直をもとゝせはかの倒語といふ事はいかにとくへき正直の説もたゝもはら一已をつくすわさにて神道に随ふ道にはあらさるをやたゝ神道の次第のまゝに妨されはやかて神道は來りたすけむ事これらの證にてうたかひなきをやしかれとも火も薪を設されはわか用とする事あたはす水も溝をほらされはわか用とする事あたはさるかことく神道とわか用とその間はなれたる時は來りたすけむとおほせとも來るに道なしこゝをもて倒語の教は神道にしたかひてその神力をわか用にかり奉るへき教也と心うへしこれによりて随神道の肝要はたゝ言語にあるなりと心う

へしかしこき哉わか御敎勞すくなくして功大なることを主としたるか故に賢愚の別なくこれを得へし世人大小となくうれひにしつみ無益の慮を費し日月をむなしく經甚しくしては病を發し身をほろほすもたゝこの隨神道の道をしらさるか故也天地の神力やかてわか力のことくなりなむに何事かはならさらむ神道といふもの別にあるにあらすすへて人事のうへには神道にまぬかるゝ物なき事まへにいへるかことく升降の二氣のうちをもれさるか故なりされは儒佛といへともなほ神道をまぬかれすましてその餘のわさ〳〵をや神道に隨はさらはいかはかりの力あることゝてもその功いかてか大ならん返々この御をしへのかたしけなさを思ふへしある人予にとふかはかりの大議論今千歳餘よに湮沒せるをみいてなから御杖か身のあさましさはいかにといふ答へて曰その故をくはしくいひとかむとすれは神道をまくへしたとひいかにいはるとも神道のためには身を反故としておもひえたれはうらみなし造酒家は必貧しくうけてひさく酒店は必富めり御杖か造酒の穿鑿をやめて酒店のことく富みたまへとてうちわらひき

○七神三段神世七代

此分はわか神典一部の大要にして天神地祇（祇）のもちあひ給ふ次序をとかれたりされはこれ大

かた神典の本源なれはこれをたにしらは一部をしれるにひとしかるへしされとたゝ天地のうへはかりにてはその妙理を心えかたけれは淤能碁呂嶋以下はこの天地神祇(祇)の次序を人にかけてとかれたる也此故にこの分はわか門の口授とすしかれとも天地渾發のことは隨神道の要訣なれは今天地渾發には注を加ふ

○天地初發之時

初發といふ字は即渾沌をふみていふ也神代卷にはまつ渾沌をとき給へるに此記はいかてまつ初發よりはしめられたるそといふに淤能碁呂嶋の件人はしめてうまれ出たることをときて淤能碁呂は即渾沌の義なれはそこにゆつれる也しかのみならす渾沌は質にて初發は教のうへなれは也神代卷上云 へ古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬(涬)而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合摶易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉これ渾沌をとかれたるなり此渾沌天地のうへにてとかれたれは古來たゝ此天地のはしめ渾沌したりしかわかれたりしと心えたり此天地さやうに渾發すへきものにあらすもしはしめ渾したりしかわかれたるならは又渾する時あらんもはかりかたし天文家の説に度數漸々たかふといふ事聞ゆれは又渾する期もあらんかとうたかふ人もあるへけれと夏も冷やかに冬も暖なる事ある事つねにてそれ

淹
摶
揭其謁切堰也堆水爲埭

はたゝ當前のうこきのみにてつひには夏は著く冬は寒きに同しく度數も又もとに復して常を改むる事さらにあるましき也されは此渾發も天地の事にはあらす人の意の渾發にて人の意渾すれは天地もやかて渾す人の意發(ワカ)るれは天地もやかてわかるゝか故に天地には渾發なしといへとも猶渾發あるか如しこゝをもて天地にして渾沌初發をとかれしもの也天地にもとなき渾發をあるか如くかゝれたるは人意のうへの渾發なりとさとれとての書さま也しかのみならすかくいふ所謂は人の心身はもと天地の化成なる事うまるゝ時は母胎のうちにして心身具すれはいつかたより來るともしられねと死する時心は天に歸り身は地に歸るをもてあきらかなり卽神代卷にとかれたる清陽は天の性重濁は地の性にてすへて人の淨き心は心に屬し穢しき心は身に屬せるは卽天地の二性を心身に禀たる所以也このふたつの心を他教にて善惡二性といふ孔子(マヽ)は性は善也といひ荀子は性は惡也といへりこの二說各より所ありていつれを是ともいひかたきはもと心身に善惡の二性は兼(闕畫)そなへたる物なるか故に孔荀(マヽ)の二子かた方に着したるもの也しかれとも所詮は二子か說ともに片よりたり此二性を兼(闕畫)そなへたるか人の本然なる也されはたとひ善事の人たりとも惡性はかねたりたとひ惡事の人たりとも善性はかねたりとさとる事卽天地わかれたる本然に合ひ清陽重濁の二性具したる所以なるを善事の人とみれは善にかたつけ惡事の人とみれは惡にかたつくる

▽天地燎しといへとも人に隨ふ所以とくへし

これを人意の渾沌といふにてさる人の天地をみる時は天地卽渾沌せるをはやかて天地渾沌したりしとはときたるもの也人意は渾を本とするか故に渾に發をかけてとかれたるにてこれ卽學者の發をさとる時をは之時とはいふ也人意此二性わかるゝ時は天地もやかてわかるれは也今この渾を人事にかけていはゝ大かた人意はふたつを乖(闕畫)てもつ事心よからぬ性なる物にて何事も一方へかたつけ置て安心したくおもふか常也たとへはおのか好み嗜むものを飮食するに過れは必あしき事をしりて少食する事能はさるかことく又しれる事も猶いたらぬ所もあるならひなれとしらさる所もあるかことくいはんは恥也と思ひてよくしれるかことくいふか如く又恩を施すも吝なる所あることを乖(闕畫)る事能はす又人との交りもいはゆる口の物をくひあふかことくせては厚からす親しからすとするたくひ皆渾なりかの

有德院君の鯉の庖丁いとよくつかふまつりしをほめき(さ)せ給はさりしなとまことに有かたき御事とも也七月十四日

大樹は御佛參まし〳〵　西御丸は川狩におはしますなと天地發れたる妙理おもふへく此　御代の御長久天地とひとしかるへき事をも思ふへしおほかた世にあらゆる物ふたつならてはそなはらぬ物なる事たとへは男女（肥後天草の事いふへし女のみ多けれは必その女身をはふらす也）水火寤寐著寒貧富生死賞罰飮食二便勞逸賢愚貴賤

小大長幼巧拙なとの類あけてかそふへからす此故に世人なに事にもあれ定まりぬかたまりぬなとおもへる所は皆定まらすかたからぬ所にてさたまらすかたからすと思へるそまことに定まりかたき所なりとしるへしかく人意渾沌すれは天地渾沌し天地渾沌すれは天地間のもの皆渾沌するかゆゑに賢は賢にてやみ愚は愚にてやみ富は富にてやみ貧は貧にてやむか故によに廢るゝ物いと多くなりぬへししかのみならすその賢も富ももとより渾沌にして天地發れたる本然にそむきたる事なれはその終つひに全き事あたはさる也上古より賢といはれし人の末今に賢なるをきかすこれ漢土の天子の如し上古よりとめる者の末今に富たるを聞かす陶朱公といへともその終をしらさるかことし此故に渾は必わけて叶はぬ事にて清陽重濁をわくるは卽ふたつ（闕書）を兼そなふるをいふ也これ卽天地の本然に歸するなりけり人賢なりとてひたすらにそれをあかむれは後必慢心生すへく富めりとてひたすらへつらへはのちかならす奢侈を生すへしわかしれりし西光寺の律師の律僧の病は多くは脾胃の患なりわかきほとは必一度に二度の食をもくらへは也老ゆけはやゝそのならひ性となりてやむ事なしといはれきもと二齋は一齋を減して法界のためとする律なるを常人の二たひを一たひにくらふはかへりて法界をぬすむといふへしもと人には清陽重濁具したる物なれはたとひその理は高尚なりとて無理なる事はせらるゝ物にあらすすへてよひとの貴ひあかむる事ことに此律

師の語にておもひあきらむへきなりいやしきものはひたふるに人いやしめとも卑しきものもなくては尊きものもたつ所なきなりたとはゝ女は男に對すれはいやしけれと家系をつくへき子孫は女これをうみ貧者は富者に對すれはいやしけれとも家産をますへき子錢は貧人これを生するかことくすへて天は尊しといへともよに有用のもの穀物をはしめ金銀珠玉いまた天より降ける事をきかすたゝこれ重濁なる地の性にて卑しむへき物にあらす清陽は父重濁は母なるをやおのれすこし清陽の方による所ある時はやかて重濁の性の具したる事をわすれ重濁の方による所ある時はやかて清陽の性の具したることをわするゝならひ也又人に對しても清陽なる人は重濁の心なきかことく思ひ重濁なる人は清陽なる心なきかことく思ふ故にすへての事片よりかたよるか故によろつ歪き事なきなりたゝ人も我も清陽の性五分重濁の性五分ありて五分〳〵なりとさとる時はその妙用はかりしるへからす此渾發の事他教にいまたいはさる所わか御教のたてる大規範なれは人としてはまつこれをさとらん事第一也神典一部すへて此規矩をいてされはまつはしめにこの天地渾發をときたまへる也（火水を以て渾すへからすわかつへき事をさとすへし）

前にいへるかことく七神三段神世七代はしはらくさしおきつ

○淤能基呂嶋之件

此件は母胎のうちにて心身具足しはしめて人とうまれいつるを云天地はもとわかれたるを本然とするをその化成にありなから天地ふたつよりあひて一人となりたるか故に人心みな渾沌するそれ人々の私にはあらす自然の事なるよしをとかれたるなり淤能は卽自然の義なり碁呂は凝の義にて天地の二性おのつからよりあひ凝りて人一人となり卽心くせとなるよしをもて名つけられたる也

○於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美二柱神脩理固成是多陀用弊流之國賜天沼矛而言依賜也

此一件はすへて父母の交接して子をうむことをあらはにいはすして倒語にかゝれたるなりしかれとも此書さま故なきにはあらす凡人の子をうむ事父母のなす事也とはいへともたとへは密なる中にて姙(妊)身を恐るゝに孕みまた嗣なくて神佛にさへいのるにはらまさる類父母の心にまかせぬもの也これ天神地祗(祇)の妙工なる證なれはかくその父母の交接するよりまへに天神の此二神に命し給ひて子をやとし給ふよしをもてかゝれたる也此文意を思ふにすへて子を生しめ給ふ事その主意は多陀用弊流之國の脩理固成のためとあれは人としてはこれか身の任也と心えよとの御さとし也たゝよへる國とは早竟人身の所置勝手にあし方(ママ)につけは人の為にはよけれとわか勝手にあしく又勝手

のよき方につけはわか爲にはよけれと人の勝手にあしくいかゝ定めてよからんかと人々その決定のならぬを云也そのふら〱したるをすちをたてて決定せしむるを脩理固成といふ也これはひろく天下の人の身のうへにかけていへる語なれとその本源はわか身の事也としるへし漢土の教いたれりといへとも事煩にして學ひかたしそれも或は忠恕のみなとも說かれたれと大かた煩なりわか國の御教は忠恕仁義なとの標目もなくてたゝ此たゝよへる國をつくりかたむる一つにて萬の德行も治國平天下もこのうちにそなはれりとのをしへ也としるへしその故は國治まらす天下平ならさるもその本源はみな人の得手勝手のしたくはありせられはせぬ所より種々の奸智奸策のおこるか故也萬の事こゝにいひつくしかたしよく思ひわたして知るへし（これをさとらしむるたとへ物には家をたつるに便處を設くる事をいふへし便所定まりたる故に家内みな淸淨なりもし便所なくは便氣しきりならんにはいかなる所をけかさんもはかりかたしわか國の御をしへはたゝ便所を定むれは家内のこらす淸淨なるかことく孝悌忠信のたくひつとめすして出來んことをいふなりとしるへし）この反をもてみれはその種々の奸智奸策人にあらすは卽治國平天下たるへきを思ふへし天沼矛は陽物のたとへなり二神は卽そのやとる子の心身に屬し給ふ二神をいふなれとそれもと天神の命にて人身中に天くたり給ふなれはやかてこの二神に沼矛をたまふとはかきたりされとこれは卽父の陽物の事也としるへし天下の男子の春氣うこくは卽この二神に天神の命し給ふ時なるへし

○故二柱神乃至是淤能碁呂嶋

これより父母交接のかたちを云也天浮橋とは天より地にかよふ道を云名なりこの故に呉竟をいはゝ父の身をさすかことし父なけれは母の胎に天くたり給ふ事あたはされは也母の胎中にいたり給ふまての間は父の身内にまつたゝせ給ふを云也塩は男女の精にたとふ成蔦とははしめて胎内に子のかたちのいてきたるを云おのころはまへにいへるかことくもと此二神いさなきの命は天に属しいさなき（み）の命は地に属す（男女は即天地の位也）されはこの二神はもと性をことにし給ふに自ら凝りて一人の人となり給ふよしを云也發天地の下にくはしくいへれはそこをあはせて心うへし（島はせまの義にて（校者云以下ナシ））

○於其島乃至見八尋殿

天降とはすへて神の人身にやとり給ふを云也されは天降とある処よりは人事のうへと心えてみるへし天之御柱とは柱は古は皆ほりこみ柱なれは人身のうちへ天の氣のかよひて呼吸となりたるその良柱の土中にほりたるに似たれは也しかのみならすかくいふ所以は龍田の神は風神にてその御名を天之御柱國之御柱と申す風は即人にては呼吸なれはなりいにしへ人をいくたりとかそふるにいく柱といふもこれによりてなりとしるへし凡人の活たるは呼吸に身のすかりたるか故なりその呼吸は即天地升降の二氣にて升降の二氣は天地の活物の本にて晝夜うこきて万世たえさる物なり此故に人身はもと死物なれと活て種々の妙用をなすは皆天地の活氣すかりたれはなり此故にこれ

はかの胎內の人身のはしめて活たる所をいふ也と心うへし八尋殿の八は一身を八處にかそふる八なり頭胸腹陰左右の手足これ也火神の八ノ山津見いさなみの命の八雷神にかく一身をかそへられたり又大宜津比賣命の御身の八處をいふはこれとはその處ことなれとも倘八にかそへられたり佛の六根とかそふるかことし　よにからいみする人八卦なといひて西土にて八を尊ふか故にそれに似んことをきらひて八（ヤ）は弥（イヤ）の義ととけともしからす倘八の數にて八とたにいへは一身の事と聞かしむる符丁に末々にも多く八の字を用られたる也人みなこの八處ことに欲する所ありすへて諸欲は制すへき物なるに制するにをよはすやりはなしにするを尋とはいふにて尋は卽廣の義なりこの尋は卽島の反にてこの下改言の件に八島をいふはこの八尋の反對なる也されは成島といへるは身の外皮にていひこの八尋殿は身の內にていふ名也奥に五百引石之件に　へ內者富良々々外者須夫々々といへるに合して外はせはく內はひろくする事わか御教の一大事なるなりその故はたとへは身內に盜人根性ありても身外に手をいたして盜たにせねはやかて盜せぬ人なりたとひ盜人根性うちにありともそれを盜人なりとて官よりも捕給ふ事あたはさるかことし此故にすへて外皮こそ大事なれ身內にはいかなる所欲ありとていさゝかさはりある事にはあらす身內は人の耳目を及ほす事あたはさる所なれは也他教にては尤なる事思ふ心は正しき心也と心得たれとすへてなに事にもあれ正しからぬ事は

いふも更也正しき事とてもわかみつから思ふ事のかきりは詮してみれは皆わか勝手なりとたつるかわか御教の大規摸にてすへての諸念みな八の數にそなはりて悉く欲心也此故に内心を淨くするなと思へるはいまた精しからすとしるへししかく内外に廣狹をしめされたるはわか御教の正當をいへりおのころといへるは渾沌のやうを示されたるなれと此件は御教のまゝをのへたるもの也人のうまるゝはみなかくのことき道をそなへてうまるゝものそとしれとの御さとし也此次の件より渾沌の弊をときしめしたまへる也

○先言之件　此件の大意は人の心身の二性渾沌してはすへて所詮叶からさるよしをときしめし給ふそのはしめ也こゝより神避之件まては渾沌の弊をとき尾羽張之件御教の正當にもとしてとき黄泉之件は尚その上のまとひをときてつひに祓禊の件にて發天地の義をしめして渾沌のしかるへからぬをあかしたまへりされと渾沌は人の天然にていかていにをしへさとすともその性やことなき物なれは先言改言云々と次第するは人の常なる也此故におのころ嶋の件以下一部のをはりまて悉く次序してかける物也としるへしこれはしめにいはゆる神道なる也

○於是問其妹伊邪那美命曰乃至然善

身の成不合成餘処をたかひにとひ給ひしは陽處陰処のことをもてたとへとしたる物にて即神代巻

には雌元之處雄元之處とあり同書にへ或有所成或有不成是談也有幽深之致とあるもこゝの成不合成餘と同し事にて成餘れる物はわれに足らぬ所なけれは必もち出むとする心あり成不合ものはわれに足らぬ所あれは必とりこまむとする心ありこれ卽成餘れるは天の性なり成合はぬは地の性にて尊卑なりいさなきの命は心に屬し給ひいさなみの命は身に屬し給ふか故にその心身の二性をさとさむか我とわか所欲を達すとはねたしと思ふ時はわか心にてゆるしてねさせ行たき(ママ)と思ふ時はわか心にてゆるしてゆかせなとするをいふ早竟わか身の欲するまゝになすを云されは人に對してはいさゝかの斟酌も遠慮もせぬ事となるなりしかれとも此時はたゝ天下にたゝわれ一人の外には人もなきになしていへるなれは人に對しての義はかゝらぬ也

たゝおのころ嶋はかりにてわか身一身の上なれはこゝよりして次第に土地をひろめんといふ心にて土地をひろむるはその土人服せされはあたはさる事なれは土地をひろめむといふは卽人情をえむとの心にみるへしされは然善とはわれとわか所欲を達してすむ事ならは誰ありてか諾せさらんとて然善とは答給ひしとはいふ也これ卽人の心のはしめ也もとわれとわか所欲を達してすむへき理はなき事なれと事にふれ時に習ひあるひ(ママ)學ひなとしてこそわれとわか所欲は達すへからさる事をも弁ふれ人としてはそれにてすむへき事ならはわれとわか所欲は達したきか本となるなりいさ

ゝかもまけをしみなく一に此理をさとるへしいかにもしかりといふ人あらはつひに此道をうへき人からなりもしいかてかさる心はあらんなといふ人あらはもとより神慮にはもるゝ人からなりとしるへし

○佘伊邪那岐命詔然者乃至愛袁登賣袁

これよりの詞は古の婚礼の作法に夫婦柱をめくりあふ式ありしをかりたるなるへし末に葬礼のさまあるもよにあるかたちをかりたる物也これにかきらす一部のうちには世上にある事ともをかり用ひられたりとみゆる所多きに思ふへし天之御柱とは即まへのおのころ嶋にあると同物なり體内の空虚を天之御柱といへはこれをめくりますといふ事はこの二神一人の體内にての問答なる事をさとしたるなり柱を左右よりめくりあひてあなにやし云々なとたかひにとなふるはまへにいふか如く婚礼の古式なるへし二神なれは二人かと人おもふへきか故にめくりあふとはわかでにわか思ふ理屈をあはすことを云學問なとしてゐる人の心のうちはみなかくのことし　そこをさとし給へる也右旋左旋の事は升降二氣のめくりの事をもとゝしていふにてこの右よりめくれ左よりめくらんとは東西にしていはゝ西方の方なりもとと升降は升氣は東方にあり降氣は西方にありていつれも左旋してめくりあふといふ事はなきもの也しかるにこゝにめくりあはむとあるはもとより升降二氣の旋にたかへるを云也これ伺みつからわか所欲を逹すへからさるよしをくはしくとかれたる也しかるにいさなみの命先

あなにやし云々と仰られしはかくわれとわか所欲を達するをつねとする時はおのつからわか勝手のみさきとなるよしを云也としるへし

○各言竟之後乃至是亦不入子之列

おほよそ何事をいひするにもわか身勝手かさきとなりてはすへての人事くらやみに同ししかれとも此時たゝわれ一人にて外に人なき時にしていへるものなれは人との間の義なとはまつのけ置てみれは勿論國も人も世にはいと多き事なれと天地渾發よりいふは天地すら此時をはしめとしてとかれたるなれはまつ一人まへにての算用也かの心は尊く身は卑しき物なるか故に成餘成不合なりこの尊卑を役(役)にたつるにはわれとわか所欲を達するより外の事なしされはほかに仕方もなきかゆゑにそのなりにて人にはしめて對してみる事を久美度に興して云々とはいふ也雖然とはなに事をするにもわか身勝手かさきとなりては甚つまらぬ理屈なりとはおもへともとの心なりはしめて人に對するを子をうむといへるは今まで無かりしものゝそこへはしめて出來たるかたちを子をうみたるにたとへたるもの也下皆準之しかるにわれもと身勝手をさきとするか故に人たゝ水蛭のことくなりといふ也いまた國かたまらす泥のことくなる中より生したるか故に水蛭といふ也水蛭はたゝ泥土に生することしとなにの用にもたゝぬ事をさとすなるへし神代卷には至三歲脚不立とありこれは手をつめとも成人のしるしなくなにの用にもたつましき事をいふにて水蛭といふ名と同義なるへしされはかやうの子は子とするに足らさるか故に見かきるよしをは葦船云々とはいへる也葦をしもとられたるは泥土の所に生する物にて水蛭をのせむにその葉宜

しけれはとられたるまて也けにわか役にたゝぬものはありて詮なけれはみかきるへき事也されと水蛭かうへになりてみれは役にたゝぬも尤なる事にて身勝手はかりするものゝためにたれかは勞せむけにさる事也次にうみたまふ淡嶋は淡き心をとられたるにて淡しきは水くさき也水蛭兒はひたふるに用にたゝぬ人なりこれは用にはたつかことくなれと眞味になに事をもせぬを云これ又わか身勝手のさきになるよりなにことも眞味にはせぬ筈の事也かやうの人はいく人ありても無きも同前なりとおもひ捨たるを不入子之列とはいふ也（普通本に例とあるはあやまり也）こゝにおいてわれとわか所欲を達し身勝手の先となることは然るへからさる事これにて決せらるゝ心也そこより次の改言の件はおこれる也としるし（ママ）されは此先言之件はたとへは山中にわれ一人ゐるか如き算用也（道節か且那様の話）一人前にての算用にては人の世話にもならすわれかわか所欲を達すれは幸の事也しかれとも實はわか御教たゝ／＼神道に隨ふへきことを主とする事なれは是非この通にてはすまぬ事なれとたゝ一人前の上にてはこれか始なるへし

○改言之件　此件の大意はまへの件の如くなに事もわか身勝手か先となりては接する人のこらす水蛭子淡嶋のことくなれはたゝよへる國はかたまらぬ也その故はもとわれは苦勞なしにわれ一人の力にてしたるより大なる得物あるやうになくては國かたまりたりとはいひか

たけれは也此故に趣向を仕かへてわか身勝手を後にせは人皆わか手足となりて國かたまるへしとの心算をいふ也

於是二柱神議云乃至阿那迩夜志愛袁登古袁

人皆水蛭子淡嶋のこときはもとわか身勝手をさきとする故なれはあらためて身勝手を後にせよと天神の命し給ひしとはとんと趣向をかへてみるを云也俗にいふまき直しなり布斗麻迩とは麻迩は隨の意にて占の古名なりまに〱まにまゝに皆同し詞にてむかふの物次第に隨ひゆく心也されは占をしてその卜筮の表にしたかふをもて麻迩と名つくる也これもまことに卜筮し給ひしにはあらす卜筮を仮りたる也もと此改言はわか御教の本體にはあらねと人の常情やむことなきものなれはたとひいかほと尤なる事にても情に戻りては心から信服せさる物なれはまつ人の常情にしたかひて改言せよと仰られたるよしを思はせんかために布斗麻迩にうらへて云々とはいふなりされは布斗麻迩云々といふは此改言ももとわか御教の正道にはあらすとの心をさとされたる也と心うへし

如此言竟而乃至亦名謂天御虚空豊秋津根別故因此大八島先所生謂大八島國

身勝手を後とする時は人皆わか用にたちてひろく人服するものなるを以てこの大八洲をうむといふ也この國を生むといふ事古來說々あれと天地渾發をはしめ淤能碁呂島に人はしめてうまれたる

やうに昔たるも皆天地人のなきにはあらすもとよりあるをかりになきになしていふ也なきになす
はなにの故そといふにわか御教をしらぬ人はもとより人にあらすとするか故なり天地をみるも天
地わかれたりとみすとてはまことの天地にあらねは天地あれともなきに齊しけれはなりされは生
りとはもとよりある國なれと今はしめて出來たるになしていふにてはしめて神道に入るはしめな
るをいふ也先言にては水蛭子淡島より外うまれぬに改言には大八島のうまれたるひとへに身勝手
をさきとすると後とするとの効なるをてらし思ふへしさてこれを大八島國ともいふは上の淤能
ころ嶋之件なる八尋に對したる名なり八尋はそこにいへるかことく八所の所志みなひろき也
所志の事
なに事によらす達するか天地のつねなるを云也よにわか所志の達
せすしてなけくはその達せむとする道のたかひたるかゆゑなり
もとわか御教は八尋なるか本體なれと八尋にせ
むとする時はわか身勝手か先となりて先言之件となることゝをもて改言して後とすれは人皆感服す
る物なれはかの八所の所志をせはむるをもて八島とはいふ也
島は狭の義也今は海中河中なとにあるをのみ
島といへともと島はその一域のせはき所をい
ふ名なりされは大和國に磯城島島の宮島の——なといふ所もあ
る也八志をせはくすとは即儒教の愼獨なといふ心と同しきなり
大の字はすへて大凡なとの義にて大神なとの大
に同しくすへてにわたる心也されは此下の島々はいふに及はす伊邪那美命神避坐までにこの八島
の義をひろく及ほしかけてみよとのさとし也
そこまてを今いふはそこに島と神との數をかそへられた
れは也すへて神の數なとかそへられし所は一段落なり
先所生
によりて大八島國といふといふは第一番にうみませる物は此のちうみませる物の冠たる物にてた

とへは一役の役頭(役)のことしすへて上に冠れる物は下皆にかけていふ物なる事たとへは書籍の題号また小兒の胞衣また雨中に着たる笠なとのことく下みなそれを蒙れるを思ふへし先の字意かくのことし此國々とはその國々にをる人を引すへて名をつけたる物也一國の人の神氣を引からけてひとつの名としたる物也（されはみなよきほとに配してつけたる名也としるへしされとくはしくいはゝひとつ〳〵その義はある也）この國生の事中段に國稚云々下段に國之常立神なとあるにむかへてみるにもとより國なきを生ませるにあらさる事しるし古來註者こゝを國のはしめて出來たりとみるはあたらぬ事也前に國とあるにてその非をしるへしされはこゝに國を生むといふもとよりある所の國にていつれも多陀用弊流國なりとしるへしかの脩理固成は此卷末にいたりての事なりこゝを固成とおもひまかふましき也

然後還坐之時（乃至）亦名謂天兩屋（自吉備兒嶋至天兩屋嶋并六島）

還坐之時とは淡路よりうみはしめたまひしなれは又もとの淡路の所にもとりたまひしを云也これより六島はみなはなれ小島の分也これは大八島ののこりを拾（六島は八島のうへの落こほれたる所思までをせはくなすを云也）ひたるにてかの改言の功この小島までに及ふことをいふ也淡路よりはしまる事諸書みな同し此事古來注者論なし本居一派の說にてはなにゝてもありのまゝなりと隨ふなれは論なけれとそれはそれなり今案するにもと此神典はのちに出來て　神武紀の上に冠らせたるものなる事明らかにてわ

か大御國を　神武帝をはしめとし奉るへしされは此神典は　神武帝のこの國を一統し給ひて今二千年の後迄皇統めてたくましします程の固成をなし給ひしその御心法をときたまひしものなり此故に此　帝もと笠(筑)紫よりおこらせたまひし事なれは笠(筑)紫よりまつ淡路は海路のあたり先なれはなるへしとそおほゆるかつかく八島六島をとき給ふは此分にて日本總國なり此時この八島六島は御手に屬したれとも猶禽獸をはなち飼にしたるやうにはなき也卷末にいたりてはしめて放飼となれるにてそれを固成とはいふ也と心うへしさて以上を改言之件といひてその主意はわか身勝手を後とするによりて八島六島みな服してわか手足のことくなれるをいふなりしかれともこゝに議論あり儒教のむねとする所は此改言之件までを至として此後々の件には心及はさる也その故はさしも堯舜禹湯文武の末もつひには韃人の所有となりたるを證とすへしこれたゝ八島六島にてやむにて固成にあらされは也けに八島六島は人の尤に思ふものなれともよき時はさしてそれともそれよりよき事出來れは他に心うつりあしき事あれは弥はなるゝもの也されはこれにて枕を高くし足をのへてはねかたき事也下に毛々那賀之件をとかれたるに思ふへし　此故にわか御教は八尋をもとゝする也しかれともわか所志をこと〳〵くみつからゆるし人に拘はらすなせといふ教にはあらすたゝ人の所志はこれは叶はすといふことはなしとしるを八尋とはいふなりさやうの事はあるましき道のことくたれとてもおもふ

へけれとそこか神道に隨ふ妙理にてこゝにはときつくしかたし卷末まてを聞て此妙理をさとるへしされはいはゝわれも身勝手をせぬ故に人もみな身勝手をつゝしみてゐるを天下泰平とするは實（校者云此以下貼紙）は危き事也いつ心かうつらうもしれぬ事也不安心なるもの也しかしまつこれにてはひとゝほり天下泰平とみゆるものなるか故にかやうにひとゝほりにてよしと（ママ）思はむ人ならは神道はいらぬ事也これにては氣のすまぬ不安心なる物也同しくはたしかに仕たきと思ふ心あらん人ならは神道は必定入るへし　神武帝の天下を治めたまひしは今二千年の後まてを毛々那賀に安心まし〳〵けるも改言にては不安心也とおほしめしける故なる事明らかなるをや（貼紙終リ）

○河海之件　此件の大意は上の改言之件まては國の事をいふこれより天地の中間の事をいふ也されは神生をいふ也その證は上の國々の名にひとつも神とは唱へす神とは神代卷にへ天先成地後定而後神聖生共中焉とあるか證にてこゝより中間の事となる故に皆神と唱へられたりまつひくき至極の海より河にいたる次件山野をとくその終神避之件に落るこれその始なりとしるへし

既生國竟更生神乃至次國之久比奢母智神――

これより天國の中間をとく也もと天國といへとも中間なる神といふもの肝要なる事たとへは中よ

き人もたゝ詞のいひやうより中たかふかことく中あしき人も詞のいひやうにて中なほる類又物事仲人あれはならぬ事なる類又酒の人を酔はす妙用は水と米との間にあり火の出るは臼杵の間にあるかことしすへて中間ほと大事の物はなし天地といへとも人氣にしたかふものなりしかるに天地を則とする教はたかへりされはわか御教中間なる神を主とはする也此故に天は七神三段神世七代になり國は改言に成りたるかことくなれとも猶たゝよひて固成にいたらさることをさとりそこを不安心におもへは中間をつくしてみるへき事なれはなり△（校者云此印アリテ挿入スベキ説ナシ）此大事忍男神より風木津別之忍男神まては海神まての次第にて畢竟は海河の神をうまむかための道行なりその次第まつ國の天に隨ふうへにての事なれは國の天をうくる方よりはしむる也大かた國の天をうくるかたちは地の凹まるこれなりその極は海なりこれを方に配していへは西方なり西方は降氣ある方なる事日月の西に落るをもてさとるへしその少し淺きは河なりしかれとも水あれは猶深からぬかことしその水まてをはして海の底をみたるこれ地の低き極也されは天たに身勝手を後としてゆけは地海底をあらはすまてにもいたることをしりましゝ事を此件にはとかれたる也けに人の身も制しに制してゆけは此海のことく（校者云以下説ナシ）

開國論

全

開國論

平安御民中臣成元謹録

謹てわか神書をみるにその要たゝ身を隱すにあり隱身とは身を山林におくにもあらす尋常のことく世にましはりなからわか身の人の耳目にあつからぬなり古來の神學者流隱身をとくものなかりしか故に人のこゝろ次第に薄く淺くなりて我國の風俗にたかひはてゝたゝうはへの理にのみなつみはてたれは今此隱身をとけはかへりて他域の風俗をきくやうに思ひてたれも〳〵信するものなきこそいとくちをしけれその信受せさる源をたつぬるに我神典あるひは高天原をはしめて根國天浮橋なほ國をうみ山川草木をうみ水火の神をうみあるひは母なくして父子をうみ父なくして母子をうみなとすへて今眼前にみる所の理とはこと〳〵くたかひたる事のみなれは信受する心なくしてすへて神書はよきほとにうや〳〵しくつくりなして書たるものゝやうに思ふ也さらに〳〵つくりたる物にあらすまことにその古傳一事も僞なき事なりかく眼前の理にたかひたるか故になにことも信しかたきをま

ことにさる事なり一事もつくりたる物にあらすと深く信用せらるゝ時は忽開國創業のはしめたるへし後世心なる人々今かくいふをきかは愚なりとも惑へりともいふへけれといかにも思へわれは信用いとふかきなりこれたゝ理なく漫に信するにはあらす信せてはかなはぬ事あるか故に信受したるにてわれを愚也まとへりと思ふ者はかへりてその淡薄なるかあさましくみえてみつから心からおのれか福をとほさけ開國創業のいてくへき身をわさと所せく持なしたるかいとも〳〵いとをしき也これによりて神典を奇しみてみつから福をとほさけたる後の世心をひらかむために今隱身の旨をのふ抑なに事にもあれ人我意をたてゝわれにむかふと我意なくしてわれにむかふとはいつれかあはれなるそおのれか心に問ふへしこれおそらくは我意ある者をあはれと思はむ人は天か下にあるましきものなり天か下國家の安くたひらけきはなにぞこれ人こと〳〵く我意なきが大本ならすやしかるにわか神典神の靈妙なるを傳へたるものなるをうたかはし奇しと思ひて信せさるはかの眼前の理をたのむ所より出くる事にてそれは我意にはあらさるにやこれ又おのか心に問ふへしそれもなほ理のうへにては惑とけかたかるへけれはまつ是非をはなれてさて我意か我意ならさるかを思ふへき也たとひ神典はいふかひなく後世心は尤なりとてもその是非にかゝはらす一方をたのみて一方をおさふるはなほ我意なるものをやさる我意ある心をもつて人にましはり國をも家をもをさめむとするは道理に伏

する者こそあるへけれ人心ひとつに歸して國ひらけ業創まらむことといとおほつかなし今こゝろみに
その我意をもて神典を信せさるものゝありさまひとつふたつをいふへし

開國論

平安　富士谷成元　述

富貴の本源と申すは天地にて候其故は天之常立神（即天なり）國之常立神（即地なり）この二神の靈妙の神氣うちあひ候て豊雲野神生したまふ此神男女の神を生し給ひ男女の神國土山川草木をはしめ萬物を生したまひたるにて候さすれは今の世かやうに足らぬ物なく富饒いたし候事ひとへに天地がもとにて候その富の本たる天地を生し給ひしは天地いまたわかれ申さぬ時高天之原（彼我の差なく我身を隠し人の爲に動止する境界を云）に御座なされし天之御中主神と申す神かその根元にて候此神の靈妙に感して高御産巣日神神御産巣日神二神出たまひて此天之御中主の神の御志をうけて天地を生し萬物を生育し給ひしにて候夫より此二神の靈妙感通して宇麻志阿斯訶備比古遲神生したまひ此神の上に天之常立神此下に國の常立神生し給ひしにてたゝ／＼天地を生し給ひし根元はかの天之御中主神の御心ひとつから出來候事に御座候これによつて國をひらき富まさむとおもふ人はまつ此神の御心をしるへきにて候

開國論

そも〲天下國家ともに乱れたる時はいふに及はす治世の上にても現在國産多く出來ても費用にあたらす剰借財なと多くていかほと數年の國産をつみてもなしかたきはまことに其國なきにひとしその外上下の風俗よからす上下和せす國民恨をいたくなとみな〲その人ありてなきにひとしからすやこれを小さくしていはゝ一年のはしめ一日のはしめも又かくのことしその一年一日いかやうになりゆかむもそのはしめにはしられぬ物なれはこれまたその一年一日の行末なきにひとしかくのごとく國家ありてもなきか如く人有てもなきか如く一年一日ありてもなきか如くして世を渡る事は世になき人も同前（然カ）なりとはしめて會得したる事あるはわか家ありてなきか如く人ありてなきか如くなる事にあひたるより會得したるなりさておよそ世上の有さまをみるにこれに心付たる人いとまれなり夫故に當世格別の創業の人をみす中にも創業する人あれはそれはわか思ふ所の神典によくかなへりこゝをもつて成元みつから創業せむの志にすちをたてむかために此開國論はかけり

まつ創業をせむとには「みつからの任（上か上は恐多けれはいはゝ先一國の上にていふへし）」といふはたとへは大名なれはその一國の

民安からむことを思ふ心一盃の事をする也しかのみならす」自分の身のつとめ事何によらすせねはならぬ事の分をのこらすぬけめなくする也さて少しも私なくせねはならぬ事斗をすれは心に必慢心おこる也その慢心といふもの全躰わか身に執着ふかきかなす所也此故に第一我心をもつて我身をかくすへしわか身をかくすといふは別の事にあらす人の目にも耳にも少しもたゝぬやうに斗もちなすなり 勿論あたりまへのすへき事は一心不乱にしてゐてさて我身の人の目につかぬやうにするなり これかまつ創業の第一の心得萬事万物の自然とむかふよりなり出る本源これより外なき事也人の身の上の事はとうもせひいはねはその者の爲にならすせねはそのものゝためにならぬ事のうちにもなるたけわか身の目にたゝぬやうに心かけていひもしもすへしこれ我と彼との心得なりこれをつゝむれはたゝ隠身といふ二字につゝまる也この隠身の二字神典第一の事創業第一の根本たり これは天地いまたならぬさきに高天之原に天之御中主神といふ神おはしましたりその神の妙用にて高御産巣日神神御産巣日神と申す神二神なり出給ひてより天地神人萬物まてなり出たるなりこの神ともに以下七神なにの言行も記録せられすされはとて何もせすいはすしておはしましたるにはあらさるへけれと人の目にも耳にもたゝぬ事はかりなりし故に記せさる也たゝ隠身といふ事はかりを録せられたりこれ隠身の創業の根元なる證なり此神の隠身よりおこりて天地なり出それより國土をうみ山川草木水火にいたるまてうみ給ふへき神をうみ出させ給ひしならすやくはしく神典にゆすりていはす こゝろみにその隠身の仕方をいふへし

○わかおもはくの事はひとつも言行に出さぬ事

かやうにいへは甚窮屈なる事なれと肝心の創業をたのしむ心からはなにゝてもなき事也これを倦みまたは窮屈なる事とおも

ふ時は直に創業のさはりになる也それにても窮屈と思はゝいつかう創業の志はやむるかよし

○我身の潔白さをおもふましき事

これを思ふ時はおほえす言行にいつる也言行にいつれは人のみる所にては自慢とうくる也さすれはなにも出てはこぬなり創業の心得はたゝ理屈算用なとの上からはものは格外には出てこぬ也それほとの事は出ても來へけれとそれも永くはこたへぬ也されはたゝ自然の造化をたのむへきに我か身を慢すれはその造化の道をふさくといふ物也

○我身につくる事をかりにも思ふましき事

これは大事のこと也我身につくといへは創業ももと我身につく事を思ふやうなる物なれと創業はさのみわか身の事にあらすそれにつけて天下の人を益する事廣大になる也さてつまりは世を益する事廣大なれはわか身を世よりたもたるゝ事又廣大なる也當前身に物をつけむとすれは必人氣背はなるゝ故に創業つひになりえす期あるましきなり大事なりといふは創業といふ事もとわか身のためと思はゝ創業にはならぬ也たゝ世に益する事ひろけれはその冥加かわか身に來る也すへて我身につく物はたゝ冥加にてつく也才智をもつてつくるは直にはなるゝ也これをよく思ひて身につくる事をかつてすましき也これをしたくは創業の志は捨へし

○是非を心につよく思ふましき事

これをふかく思へは必人氣をそこなふ也人氣をそこなふは人氣のみなりと思へともさにあらす人氣といふものはもとやはりかの天之御中主神の一氣より天下の人の氣とわかれてある物なれは人氣をそこなふにはあたらて創業の心をみつからふさく也ひとの是を賞する事はなるたけすへし非を罪する事もまことにそれか大破のもとゝなるへき事ならはよく／＼時宜をみあはせ少も我身ゝ人のめにつかぬやう我潔白をふるまひて罰するやうにあたらぬやうに罰すへしこれも人氣に隨ひて罰して我おもはくにて罰する時はかの神の心にたかふ也

○隨分人をあはれむへき事

これめつたに人に物をやる事にあらす人の安心するやうにしてやる事也これも術にてするは神慮にたかふ也たゝその安心といふも少しも此方の身の目にも耳にもたゝぬやうに斗してゐる事也たゝつとむへき事はかりをつとめてかりにもおもはくをせぬか人をあはれむといふものなり

○賞罰の事　○潔不潔の事　○得失の事　○欲情の事　○五常の事　○人をあはれむ事　○民を安んする事○

成章遺傳

五級三差

辨御杖

五級三差

境　曰景　曰情

題を見事にあたりてはやかてさかひにいる　へ壽按景情の二境は物にふれ事にのそみ目に感し心に感する事を心中におとしつくるをいふ凡さかひは哥となりいつへきかたちのたつなり此内より旨趣をいたす

旨趣　大旨　小旨

境をかたらむとて歌思ひして旨おもふきをう　へ壽按に心の象を諷詠すへき物にせんとするに思慮を本としてとりあつかふを旨趣とす

大旨は決定の主意也うこかさるもの也小旨は様々によみあらためらるゝ所にしてうこく也旨と趣と本一にして相應してなれる物也二字の義をいふ時は旨は心のあらはるゝ所趣は所のさまをいふへし又案するにさかひ旨趣のふたつは我心にあつかりていまた外にあらはれさる所なり

体

旨趣をやすからしめんとすれはかたさたまる〽壽按に決定しおきたる旨趣にてはしめのさかひの浮ふか浮まぬかの所也心の淺深歌の善悪顯焉

上

あけは旨趣をえてやかて定まるもあり又かたをさためて後にさたまるもあり〽壽按にあけは哥になしたつるをいふなりこれは上下のする処をいへり旨趣の定まりたる所にてあけさたまるはかたをいまたさためさるまへをいへり姿はへちの事也

影乃事

歌にかならす影あり古人もよめることあり所詮題詠の心得なれとも耳に近く心得らるゝは此事也此影の事すこし歌よみつらむ人是は影也かれは影なりなとこそ思ひえて常によむ処なり凡影によみつけてさたまれる影有り歌よくよみ得さるほとは此定まれる影のみをよみける也たとへは連哥師のれんかしらんかことし定まれる影といふはたとへは雲に風雨花に色香なと常のこと也また哥をとるにもおのつから影ありいはゝ宮城野をよむに木の下露影となり又雨に勝るなとかけとなれるかことし此外名所によみつけたる景物なと大かた影となる物也されはたとへは月といふ題をえて姨捨山をよみ山吹をえて小嶋をよむときは景物主となり名所影となるへし疑ふへからす又し

のたの杜の千枝末の松山の波室の八蔦のけふりなと皆定まれる影也哥の珍敷といふは影のやかて珍ら敷也月をよめるにつもらぬ雪を払ふ秋風なと雪をかけとしたる類也哥よくよまさらん人のめつらしけなき姿のみ常にあるは此かけのさたまれるをのみ思ひうるまゝによみ出るゆゑなり古人はこゝに影をたてゝもよめり詞にも心にも影はあるもの也其理をひろくもふかくも思ひ見るへし

歌之体之事

一はいふもさら也二は上中下共もとめ出たるかたち也三はおのつからの姿なり四は哥といふものを心得さる也

（朱頭書）めさまし
二上いひかたき旨をものとかにいひ出たらむをいふ大方ちからなき人のいたりかたきさかひ也いはゝ櫻の直衣紫のさしぬきにていとをかしき朗詠なとをえんに打すしゐたらむかことし

是は堪能人のよむへき所也二中二下のむねをいまたをかしからすとしてひと詞にこれかれふくませなとして旨いとよく心えられんをいふへしさすかにおのつからなる姿にはあらす

二中旨をさしはへたらむやうにとゝしう思ひ入たるか内にも一きさみよき境あるをいふいはゝさかしき岨路を登るにふと興（キョウ）ある所の海のけしきなと見おろされたらむかことし此旨はをかしと作者の心に思ひ入て其旨のみに心を打よせつゝのとかにいふへきを忘れたるをいふなり

二下一ふしをかしき境をえんとてとゝしき物より思ひ入たるにさる筋はやゝとほりて詞はさのみちからあらさるをいふいはゝけしうある所を見んとほりして彼岨路をおほな〳〵（里ズイブン 父情々也）のほり果て終に興ある所をえたらむかことし

此はかくよまはをかしからむとてそれをのみねかひてよめるをいふへし二中は願はすして此さかひをよしと心得てよみ二下は其境をねかひてよみたるをけちめとす

（朱頭書）おのつからの姿
三上詞のこりたる様にて旨とゝのひたけ高くゆうにしてをかしくかすめいひたるをいふ四条大納言一の哥といはれたりしも此姿なるへしまた達磨宗なともいへりいはゝ直衣さしぬき花々しうて何ことをもせて打なかめゐたらむかことし

是は哥の本の姿にしておのつからなるさかひ也是に一ふしそはりてめさましき迹をかしきを二上とす何ことをもせての詞をけちめとす

三中旨も詞もやゝいひおほせたらむやうなるをいふいはゝいひやすき旨をちこの口とにあとさきものいひたるさすかにそれときこゆるかことし

三下むねいとよわ〳〵と詞つきもをさなくたゝ上へのみ心えられてなほさりなるをいふいはゝをさな子のこゝかしこ遣ありき物にとりつきてたちなんとしたらむかことし

(朱頭書)三具うたあはす神しるしなき也

四上旨もいひとげで詞もとゝのほらすあるをいふいははもえ出る春のみとりのいまた何の艸ともわかれぬかことし

是はよき哥のをかしきをよまんの心さきたちて旨の筋のとほらさるをいふ

四中　四下これらはけちめをたつへきゝはにもあらす

(朱頭書)けちめたにさたかならぬ也

五落題傍題なと難あるをいふ

右のいつゝのしなは哥よまん人のおのつからなるものなれはふかく〳〵思ひはかるへき事なり

五級三差辨

父成章歌となり出る筋をあきらめていつゝのしなをさたむ五級の事は詠哥のしなにして眞を弁するにはふさはしからぬ様なれは一の級は則眞のことわりをそなへたるものなれは眞といふ事のよく心えられんか爲にこゝに言也五級とはいはゆる一の上中下 二の上中下三の上中下 四の上中下 五これ也（五に上中下なきはわくるに及はぬ級なれは也至竟上中下をたつること哥よみならはん人の委しく心えられむか爲にかりにてそのしな／＼の正當たるはもと上なり中下は其級にしてたらはぬ所あるをさとす也所せん中下は上によみいたらさりしなりとしるへし） これ貫之か六くさにもあらす忠岑か十体にもあらす心詞のさかを見とりてたてたるしなゝり元來此五級は平生哥よみならふときの專用にて時宜によりて心をなくさむへき期にのそみてはいかなる級になりいてんもはかりかたきこと也されは昔より一の級にかきらす二の級なるも三の級なるも感動の幸ありし例も見ゆる事に候則かの風吹は沖つしら波とよめるは一の級にして男の異心やみ貫之かありとほしをはとよまれたるは二の級にして馬のあしたち能因かなはしろ水にせきくたせとなけかれしは三の級にしてふらさりし雨ふれりしからは五級は無益のつとめかと思ふに哥はもと公身私心の破りかたく捨かたきより出るものなれは詞のうへもまた公にもあらす私にもあらぬか眞の姿也されは一の級は感動の幸あるへき正面のすかたなれは平生一の級をのみ

願ひてよみならへはおのつから所欲のためによむこといやしまれて眞にすゝむ道ひらけ中へきにて候さらは又一の級ならては幸あるましき様なれと上に則中如く必しもさならすたとへは武術をならふにかたといふ物ありてこれによりてをしふ其かたといふ物もとその祖の妙手たりしか必勝の理をきはめて定置たる手なれは全く是に熟せはかたすといふ事あるましきことなれと形にのみ縛せらるれは必敗をとるへししかしからは形は無益なりといはんに平生これによらされは勝へき道もしられさるかことし其形に習熟せる人はたゝかひにのそみて變に應して眞の手いて不思議の勝もえらるへきに同しくつねに一の級に熟するときは機にのそみての二三の猶眞物なるへしされは一の級といへ共いたくねかひてよめは唯姿こそ眞なれ實に眞物にあらすかつ一の級に縛せらるゝ時は時にのそみてよむにもしひて一の級になさんとするより一のしなゝから眞物ともいひかたきこと也身心活さるは一の級なりとも貴ふへきにあらす身心活たらむには二三もいやしむへきにあらすしかはあれともと一の級の眞のことわりをそなへたる事誠にいけるか如し常に此級をのみねかはゝ眞を貴ふへき志かたくなりぬへく候此五級のことわりいひつくすへからねは今其かたはらを弁すへしまつ哥の表公にもあらす私にもあらす公身私心の間にありて我をしてやむことをえさらしむるは實況のもの事のうへをはすくよかにいひくたしして時破りかたく所思を定めかたき様言外

に活動せるこれを一の級とす表たくみにいと口さとくめさましき詞かさりなせるにひかれて公身私心のかたみにせむへきなき（衍）すへなきさまはかへりて深くかくれて無か如くなるを二の級とすたゝ物事の動止ふと心にうつる處をはためらひなくいとをさなけにいひ出て公身私心のやむことなききはゝ弁へさる如くなるこれを三の級とす四の級は思ふはかりのことの詞にもとほらぬをいふ五の級はふる哥をはあるひは本句あるひは末句なとさなから犯したるをいふ此しな〳〵よみなすは何の級にももるゝ物なけれと大方人の生質なにとなく一の級なる人からもありまた二のしなゝる三の級なるもまたは四五の級なるもありて其人の質によりてかく哥も五級にわかれ出るなり初に申つる如く一の級にもかきらす二三のしなにも幸あることは此質より出る所なれは也かく人さまさへ級わかれて見ゆるものなれはかへす〳〵一の級のみつねにねかはゝおのつから人さまもたちまさりてはえあるへきわさ也世に古哥をも論し今の哥をも制するよし悪をいふは大方はおのか好所このまぬ所によるいと公ならぬ事也父成章は常に此級によりてそのしな〳〵をわき歌のしなをまさらしめむと思ふのみならすおのれ〳〵か生質をもかへり見よとて成元にもをしへおかれつるなりこれによりて弁すれはおのか好む所にもほたされすいとおほやけに哥のしなは見ゆへしみつから好處にしたかふ時はよしといふも誠にやよからむあしと定むるもまことにやあしからむい

とおほつかなき事也此五級はさるわたくしわさにはあらす其級をたてたるやう人の生質にもとつきたるなれは生質をもてしなを論せは一の一たることはおのつからこゝろえしらるへしかし

表裏境

詞に表裏境といふものありこれは詞をつかふ專用にて眞を論するにはようなき事なれとおもてにのみ目をも心をもとゝむる人は眞をしる事あたはさるか故に今爰にこれを弁する也もと此表裡境といふ詞にはおのつからそなはれる事にてしらすよみによむとも猶かくることなきものなれはことさらに是を論しをしふるに及はさる事のやうなれと詞をきたふにその益かきりなき物にて我智の及はぬ所さへ此みつに導ひかれて心えらるゝ事あるものにて候されは古哥をとくにも其眞にいたることやすくおのか哥よむにも用なきをはふきたらぬを補ふわさこれにしく道あるましく候此三おのつから詞に備れりといふはたとへはかなしといふ表なるにかなしからすといふ裏をかけて見れはなくさむへきよしのあらまほしきさかひしらるゝかことしすへてひと詞にてもかゝり哥一首にても猶しかり凡表となるは時をなけく情裏となるはひとへに心の理境となるは偏心の達せぬ憤なりかくうらをかけて境をしれは其哥ぬしの時宜のために所欲をなくさめ誠にやむことをえさるより出たる眞言なることかゝみにかくるよりも猶あきらかなるへしされは此表裏境まなひしら

すはあるへからすしかれとも前にいふことくもとよりそなはるへき理なる物なれは哥よまむにこれにほたさるゝ時はかへりて誠をうしなふへし此故に詞はたゝなり出むにまかすへき也されとあまりなりいてむにまかすれは用なき所たらぬ所いてくへけれはこれ又心あるへきこと也裏境の力はひとり詞の上のみならす万事にも渡りて其事をつくさむにいさをあるへしかの少彦名神又大己貴の命にこたへ給ひし御言も成にのみ御心をとゝめ給ひて不成には御心いたらさりしをいさめて成不成をもて諭し給ひしもの也これをもて表裏境のはかなきわさならぬ事しるへし表をのみ目をも心をもとゝむへからさる事則神の御心なれは今私にいふことにはあらすされは此みをしへにしたかひて返々も表のみかゝはるましき事にて候しかりとて表を捨よとにはあらす此三はたかひに具しあひたる物なれはいつれを重くいつれを輕しとも申難したゝ後の世の人の表にのみもはらなるさかをはいさめまほしさにかくはいふなり世に古歌の餘情をとくに其一首の大かたのさまを見とりていふなれはけに覺ゆるもありわりなしと見ゆるもあり此表裏境の力をかりておもひいるゝ時は私のたはかりにあらすして實に其ぬしの衷にあふこゝ地すへし五級にいへるか如くこれ又わたくしに餘情をとくことといとおほつかなきわさならすや

右は祖父成章か五級三差のくはしきこゝろを父御杖か思ひうるまゝにあけつらへる筋々なりわ

か家のをしへことのなかの哥よみはた人の古歌なとゝかむ事は此筋々にまされる筋々はよにも
あらしとつたへたるつたへ事はみたりに習ひそめむ心おこるとてやすくはきかさゝりし事とそ

略式五級

一上　わさとならす詞をさなくて情ふかさ限りなきを云
〃中　詞のをさなきにちからのある所見ゆるをいふ
〃下　詞のちからを包みてをさなくなせるをいふ
二上　心も詞もつくして上なきをいふ
〃中　同し姿に詞少しちからつよきをいふ
〃下　心たくみに詞力ありてけやすきをいふ
三上　詞をみかきてめつらしく上なきすかたをいふ
〃中　すこし詞にはたらきあるをいふ
〃下　からくしてよみいてたるをいふ
四上　詞の條理をつくさぬをいふ
〃中　詞をあやまれるをいふ
〃下　古哥をさなからにをかしたるをいふ

五　落題傍題なとをいふされは上中下の別もたゝす

右

又

一　不盡の高根の如し　　江海

二　たゝなはれる山の如し　　瀑泉

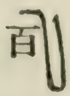
三　里近き麓丘の如し　　流水

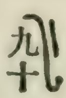
四　野へに生る草木の如し　　池水

五　はひおほとれるかつらの如し　　濁沼

右畧式といふは上のいつゝのしな〳〵のけちめをはかりさとせるものなり

點例

一上　　いとも〳〵めてたく社承侍れ

〃中　　いとも〳〵ゆほひかにそ承侍る

〃下　　いとも〳〵おいらかに南承侍る

二上　　めつらし

略式五級

〃中	六十	すか〳〵し
二下	五十	をかし
三上	四十五	やすらかに南
〃中	四十	よろし
〃下	三十五	調れり
四上	二十五	
〃中	二十	
〃下	十五	

又

一上　いとも〳〵めてたく社承り侍れ

——————そ承り侍る

——————なん承侍る

——————承り侍る

——————こそはへれ

――――そはへる

――――なんはへる

――――なん

――――めてたし

一中　いとも〳〵ゆほひかに祉承侍れ

　　已下上におなし

一下〆二の上中下〆三上中下皆上におなしくすへし

すへて歌階級相考申候事は大事のことなり能々考候上四より思ひかけなく秀逸を出し中へく（き）事也是難中の難に候もとも四よりぬくといへとも中下にはかゝはるへからす四上より抜へきことなり左にしるせるを見へし

三上より一下を撰し出す

三下より三上を撰し出す

四上より二下を撰し出す

これいつれもかつ〳〵筆をくはふれは其級になれるよりかくぬきいつるなりこれらもとより其

級をそなへたれはつひに本の級にかへるものなりあやしむへからす上にいへる五級のところ〳〵あはせ見てかんかへしるへし

右之五級三差者雖爲成章相傳之秘中之秘事依志篤望切委令口授畢雖爲同志之者猥不可有言外者也

年号月日　　花押

何某　殿

九品和哥

四條大納言公任卿撰之

上々品 これは言葉もたえにしてあまりの心さへあるなり

ほの／＼とあかしの浦の朝きりに嶋かくれゆく船をしそおもふ

春たつといふ斗にやみよしのゝ山も霞てけさは見ゆ覧

上中品 程うるはしくしてあまりい心ある也

み山にはあられふるらし外山なるまさ木のかつら色付に鳬

あふ坂の關のしみつに影見えていまやひくらむ望月の駒

上中品 心ふかゝらねともおもしろき所あり

世中に絶てさくらのなかりせは春の心はのとけからまし

もち月の駒ひきわたす音す也せたの長道橋もとゝろに

中上品 心ことはとゝこほらすしておもしろき也

立とまり見てを渡らむ紅葉は雨とふる共水はまさらし

かの岡に艸かるをのこ繩をなみねるやねりそのくたけてそ思

中々品 すくれたる所もなくわろき所もなくてあるへき様をしれる也

春來ぬと人はいへ共鶯のなかぬかきりはあらしとそ思ふ

いにしとし根こして植し我宿の若木の梅は花咲にけり

中下品 すこし思ひたる所あれり〔マヽ〕

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよきて秋風のふく

われを思ふ人を思はぬむくいにやわか思ふ人のわれを思はぬ

下上品 わつかに一ふしある也

吹からに秋の艸木のしをるれはうへ山かせを嵐といふらむ

あらしほの塩のみちあひにやく塩のからくもわれは老にける哉

下中品 事心無下にしらぬにもあらす

今よりは植てたに見し花薄ほにいつる秋はわひしかりけり

わか駒ははやくゆきませまつら山待らむ妹をゆきて早みむ

下々品 ことはとゝこほりておもしろき所なき也

世中のうきたひ毎に身をすてはひとひに千たひ我やしにせむ

梓弓ひきみゆるへみこすはこすこはこそは猶こすはこはいかに

右 四條大納言公任卿ハ長德ノ比ノ人ニシテ拾遺集ノ撰者トイヒツタフ又拾遺集ハ華山院法皇ノ御自撰トモイフ公任卿一條院ノ時ノ人也

十躰和哥

幽玄躰

わひぬれは今はた同し難波なる身をつくしてもあはんとそ思ふ
思ひ川たえす流るゝ水の泡のうたかた人にあはてきえめや
有明のつれなく見えし別より曉斗うきものはなし

長高躰

おもふことなとゝふ人のなかるらむあふけは空に月そさやけき
よそにのみ見てやゝみ南かつらきや高間の山の峯のしらくも
うつりゆく雲にあらしの聲す也ちるかまさきのかつらきの山

有心躰

津國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風わたる也
此川のいりえの松は老にけりふるき御幸のことやとはまし
明石かた色なき人の袖を見よすゝろに月はやとるものかは

麗　躰

ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に嶋かくれゆく船をしそおもふ
なからへて猶君か代をまつ山の待とせしまに年そへにける
おもひかね妹かりゆけは冬の夜の川かせさむみ千鳥なく也

事可然躰

大方の秋のねさめのなかきよも君をそいのる身をおもふとて
いそかれぬとしの暮こそあはれなれむかしはよそに聞し春かは
限あれは今日ぬきすてつ藤衣はてなき物は涙なりけり

面白躰

山さとに浮世いとはん友もかなくやしく過しむかしかたらむ
うかりける人をはつせの山おろしはけしかれとはいのらぬ物を
いかにせむ賤かそのふ（本ノマヽ）のをきの竹かきこもる共世中そかし

濃　躰

散すなよしのゝは草のかりにても露かゝるへき袖のうへかは

なかめわひぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月やすむらむ
立いてゝ妻木こりにしかた岡のふかき山とも成にけるかな

見様躰

むら雨の露もまたひぬ槙の葉に霧立のほる秋の夕くれ
下もみちかつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらむ
かりくらしかたのゝましは折敷てよとの川せの月をみるかな

有一節躰

立かへりまたも來てみむ松嶌やをしまの笘や波にぬらすな
夢にても見ゆらむものをなけきつゝ打ぬるよひの袖のけしきは
君いなは月まつとてもなかめやらむあつまの方の夕くれの空

鬼拉躰

ぬれてほす玉くしのはの露霜に天照ひかり幾世へぬらむ
神風やいせの濱をき折敷てたひねやせましあらき濱廻に
おもひ出よ誰かかね言の末ならむきのふの雲の跡の山かせ
右

富士谷御杖大人著

哆南辨乃異則

全

哆南辨乃異則

六帖

いつくとてふみまとはせるたまづさぞ　フミ迷ノ処ガタナヘノ磯ノ数々也此ノ哥ヲ出メ哆南辨乃異則ノ標題トセル也
こゝはたなへのいそならなくに

六運は經にして五級は緯也一運ことに五級三差のけぢめとしなのさだめありてたてぬきにおりなせる綾にしきのごとくになむ

美　栖

哆(タ)南(ナ)辨(ベ)乃(ノ)異(イ)則(ソ)

弟成孚。われにたなべの磯をといへど。我だに見まどはせる道をといふに。なほ〳〵とそゝのかされて。夢のやうにいひ出たる事を。はじめをはりとなく。かきなめてみれば。われながら人の物いひさが（さがトハクセノヿニテ此ク下ヘ付ケテヨム）にくさよ。あはれ千早ぶる神代より。呉竹のよゝにうつり來ぬるすがたこそ。いとこちたけれ。上つよの哥は。心すなほにして。誠を思ふこと。いとせち（せちトハコセックヿ又セハシナキ処ニモ用フコヽニテハ急ナル意也）なりければ。いさゝかも詞をかざる事なく。詞のこゝろことわり。さだかなるまゝに。いたくことそぎ（そぎトハ省クヿ也殺也）がちなる。まことに此道の原としるし。しかありければ。教としのりとすべき事は。上つ世をもとゝすべければ。中昔にいたりて。延喜前後の哥仙。其のりにしたがひて。しかも詞もすぎ及ばざる事なく。心詞ともに。みなかをえ（中ニ下ヲ取レル処也ヨキ処ニテ程ナリ）て。神世よりのをしへにかなへり。貫之髄脳のはじめに。花實のさたせられたるに。かれのみならず。古今集まことに花實をかねたりといふべし。後撰集の時にいたりて。今ひとときは心ふかきをえられたるより。中にはすこしすがたのおくれざまなるもみゆれど。さすがに中頃などにはいたりけり。いにしへ人は花に過じ（不）とつねにつとめられけるより。心のいたりふかく。物のことわり。くま（クマナ）

なきかたにはあるがすてがたさに（イ方ニ也ハレ〳〵トシタル也）。いられたるなるべし（心ノイラ〳〵スルヿ也俗ニイラツクノ也）。さればおとれるとは。たはぶれにもいふべからねど。古今集にくらぶれば。おほかたのすがた。かみにたゝむ事かたくぞありける。かゝりければ花山の御世のころの哥仙は。またすこしうるはしからむ事をと。えらばれたりけむ。拾遺集はたけたかき哥ども多し。されども後撰にくらぶれば。すこし後のよにちかげなるやうなれど。猶後撰の下にたゝむことかたくなん有ける。後撰拾遺。かくたがひにえたる所ありて。古今かみなしといへど。此ふたつの集のたぐひなる事をのがれず。さるはかみつよのゝりをたがへず。三代集ともにたゝひたふるに花實をかねたるをとの。み（みハ必ス見也故ニ見撰ト見ルベシ）。えらばせ給へりけんもしるく。此いふけだめある哥は。とを（十ニ）がひとつ（一ツ）也。拾遺以後の人。三代集の。ものゝさかひゝろくとほしろき（言葉ツキ巧ニ面白クサヘアレバヨイ）を見て。まことへしる（トメ居ルノ也）べせんの機（き）なるをしらで。これより心ことわりをむねときそへり。此よにはじめて。道をわすれたる哥もおほくなりて。たま〳〵餘情有心の貴ぶべきに心つかれたるは。古倂部入道などだになほ幽玄とまどはれ。これ後の世に心ありなど思へる哥の親なり。しかはあれど。その頃哥人數をしらず。いとさかりなる世なりければ。さすがに中昔にも立ならぶべき哥もすくなからず。たゞよのひがめる所にて。すこしのけだめはいできけれど。三代集にほどなきけにや。中昔の余波にしるく。なべての哥はなかりけり。かゝりければ。詞と姿とはすこしおくれさまなるも有けるを。金葉集の

頃にいたりては。此ことさかりになれりとおぼえて。あなめざまし。いかでかゝる事をばたくみ出られつらんとまで。見ゆる旨をしもいとしたゝかに（したゝかトハタント也省カヌノ也詞ヲカザルユヱニヨケイニナル也打付ケニ云）。詞にいひふすることをむねとせられけり。俊頼朝臣（故ニウラノナイノ也）。心をさきとをしへられけるより。いよ〳〵世こぞりて。そこにちからをつくし。たくみをあらそひて。はてしはたはぶれめける哥どもも多くなりにたり。詞花集は。それが中にもすこしいうなるかたのみゆるは。かくしたゝかなる心詞。きはまりたる世なれば。金吾基俊などの。正しき姿をしたはれたるをしも。よにちりぼひて（ちりほひトハチラホウ也）。すこしはこゝろししか。のどやかなるかたはえらばれたるなるべし。されどさすがに。そのよのすがた。やごとなくて。こは〴〵しきやうなる哥どもゝうちまじれり。これを端として。五條三品。かの藤金吾にまなびて。たゞしきすがたに。よみかへしたまはんとし給へるもしるく。千載集の頃の人。この三位をしたひ。世ゆずり（すカ）て正風をまなびければ。後拾遺より此かた。心のたくみを。したゝかにいひふすることもうせて。花實をぐせんことをねがふ人も多かりき。圓位上人などは。ことにむかしを思はれつと見ゆる。猶此よのすがたのがれさりしは。いと口をしき事也。姿はかくすなほになれりけれど。此ころはや哥の詞の。心たど〳〵しくなれる世にて。すべてのいひさま。中昔にくらぶれば。いとよわげに見ゆ。よみかたとても。そのよにかはれるもあるは。題さかりになれる後の世のしるしなるべし。おほかた人のさえも心ば

せも。いにしへの人におとれるにはあらず。たゞわれと心をさゝやかにもてせばむるより。かみつ世。中むかしには。及ばさりけるなるべし。もと金葉などのすがたに。いハ頭也ソレニ心ノ付ヿ宜シカラヌト云処ニ氣ガ付ノ也いそはれてよみなほさむとせられけるより。おのづから詞すこしにほはしきかたに過て。かののりにはとほげに見ゆるも有けり。新古今集の頃は。このかたに心ざせるひとよにおほくなりて。詞のうへにひがみゆき。詞づくりのめづらかに。又よにもなからんをと。あらそはれき。えんにうるはしくよみたてられたる所は。及びがたけれど。おのがしじ（じゝ）。詞のたくみをきそひ。わりなくこゝに心をくだくほどに。いたく詞の上にのみ。たゞすぎにすぎ。たゞひがみにひがみゆきぬ。此時に。京極黄門さえも。テニハノさへもナレバヘトらうも人にほケドコレハ才智ノオノヿ也まさりよにこえ給ひければ。らうトハウックシキヿニモワタリ長シタルヿニモ用フ此卿にまつろはぬ者もなかりけり。まつろはぬとハ从ハヌモノハナイ皆从フト也げに此よの風におきては。心ことわりをきはめ。詞たくみをつくして。おもふ心をうちにほはし。おもふまゝによろづのすかたを少讀まぜたまへり。しかれども。此世のこのむ所にて。詞に一ふしあらむことをきそふより。打ぎゝにはたしかならぬやうなる哥どもいできぬれば。みつからも御心をせさせ給ひて。雨中吟。未來記などは。つくりおかせ給へりけり。さる御心おき掟てありければ。新古今の花がちにて。實すくなきをおほしいきどほりて。おほせごとをうけて。新勅撰をばひとりえらびて奉らせ給へり。されど猶その世のすがたやごとなくて。中むかしにはなすらふべくもあらず。その御子の爲家卿ゝ。父卿のをし

へをふかく味ひたまひて。ことさらに御志をおこし。かの詞にひがめるすがたをば。よみあらためさせ給ひて。詞をすなほに。旨とてもやすらかに。よみなし給へれば。世またこれにうつり。此卿をしたひて。すがたかはれり。これ今の世のもとゝするところ也。しかはあれど。すべて父卿のよにくらぶれば。心詞のはたらきもなくなりて。中にもおろかなるは。いとをさなくしく。よわげになりて。時ある事もやうくわすれゆきぬ。此後其御そうの堪能皆たゞ。此すがたのみよりまね(御曹トハ局ト云モ同ジ居ル処ノ名也コヽハ子息ノ事ニ取レリ)(曹カ)びたまひて。しばらく此すがたをかへずして。世をふりぬ。續後撰を千載にくらべていふに。又一(何ノ局(ツボネ)ト云ナ只局ト通ソ云ヘルト同ジキ也コヽハ父卿ニアテタルノ也)きざみはおとりにけり。おとれるは心も詞もさゝやかになりて。哥のかみしもをことさらにとゝなふるより。いと所(トコロ)せうなりそめたれば也。近むかしにたくみず(ママ)きにけるに。いそひで又ひとすがた(せうトハセマク也云ヒ過キテ来タユヱニ究屈ニナリテズラリトセヌ也)(すぎ)をよみたてたまひたれば。さらにその(か)がたに過たるなるべし。さすがに近昔まではいにしへのなごり。ちりほひのこりて。よみざますがたなども。うちふるまひ。何事をもふかく心をいれて。よみ(チラバフノ也)出られたりければ。おのづからいにしへにちかき事もうちまじれりけり。此後はたゞ哥としもいふものゝことにあるやうになりて。いといぶせげなる哥どもおほくなれり。これは近むかしに。哥合さかりにて。ふとおかしとおもひさわぐめる詞は。たれもくしばく。讀やうになりければ。此詞はなよみそ。かゝる詞ははゞかれなど。判者ののたまへりしなごりとおもぼ(ほ)ゆ。續古今。續拾

遺。新後撰。などは。皆此卿のをしへにしたがはれて。いといたくなよびゆけり。（姿ノヨハクナレルノ也）此のち玉葉集の頃は。そのほどの作者。この時のすがたあまりのどかにいひなりぬるに。いそひでみきく（見聞）ものに。さま〳〵のふしをつくりなして。うちの境をわすれて。たゞ外にのみ心をゆだね。またく誠をわすれはてぬ。これより又此姿さかりになり。詞もいたくかざりがちになりぬ。こゝをもて今にこれをはいやしまるゝ也。しかるに此頃頓阿法師。浄弁。慶運。等にむねとして。（中昔ニ返サン「チ旨トメ居ル）此すがたをあさみ。（嘲ケル「也）中むかしにかへさんことをねがひて。様々にこゝろをくだかれたれば。ひとりこのにごりにしまずに（一人ニハ非ス頓阿初三人ノミニテ外ナノ）ありける。（ケルト云ノテヒトリ也）しかはあれど。なほよにつるゝ勢（ヒ）。せんかたなきは。ことばも心も。いとよわく。哥のさまもうちふるまへる事すくなうみゆ。さすがに心ざしのかしこさにや。中には。いにしへにかなへる哥もまじれり。是又玉葉のすがたに。はげめる志なるべし。其なごりにや。玉葉の後。續千載。續後拾遺。などは。又いとやはらかになりて。やう〳〵をさなく。やすらかにすぎ。ふしなき所にひがみゆけり。またそれらにいそひでにや。（いそうに疑ノヤチソヘタルノ也）風雅集は。もとの玉葉のすがたにかへれり。しかれども。そのころ風雅のすがた。玉葉におなじきをもて。よ（世）に又これをいやしまれけむもしるく。又新千載。新拾遺。新後拾遺。などは。いとよわ〳〵しき哥どもおほかり。しかるに其後實隆公。世にうまれたまひて。あまりにしかなよび行て。たゞことわりは。ことのやうにみゆる哥さへ。（ことのやうニトハ常ノ事ノヤウニ見ユル）うちまじ

れるを。いきどほりおぼせるにや。たけき御心をふりたて。その頃のすがたをよみあらため給て。さえをよにふるひ。めづらしき旨をとめ。詞をたくみに。力をいだして。よませたまへりければ。世またこれにうつりて。新續古今の頃は。またすこしたかみなるけ。そひてみえたり。されど詞つき京極黄門などのさまには。又かはりて。詞のむかへをほど〴〵忘れ。たくみなるは。いとこゞし（こゞしき）（山のナト哥ニ詠ムハケハシキヿ也故ニスグナラヌヿ也ゴテ〴〵メヤスラカニナイノ也）う。おろかなるは。いとふてうに（不調）。うるはしきかた。すくなくぞ有ける。此後は。哥よむ人も。しばく〴〵ありけれど。させる事もなくて。たゞよみによみくだれるに。延寶（灵元院）のみかど（主上ノ御变故ニソシラレモセヌ故ニカク云ヘ圧皆同シキ也）。此みちの心をふかくしらせ給ひて。むかしを仰ぎふるごとをしのび。おほしめせる御心おきて。しるくいとありがたきおほみうたもみえたり。その御世にて（衍）あたりては。名たゝる人々いとおほくて。みな此 みかどの御おして（オンシルシト云ヘル意璽ハ玉璽ニテシルシ也）（御おして（璽）神璽宝劔矢田鏡ナドナリ）をあふぎ奉り給ひけれども。新續古今より後。そのよのなごりをさまら（収）ずして。みかどおき奉りては（帝ナ除キ奉リテ也）。いとゞしくこまかなるかたに（口清テヨム）。心をよせられて。たゞ外の境にのみ心はせて。風雅。玉葉。にもちかく成にたり。詞つきなどはなほそれにもおとれるやうにさへみゆるも有けり。その後の哥人もなほ此姿をのみよめど。まことに心をいるゝ人もすくなくなりもてゆくまゝに。中にはいといたくをさなびはてたるに見ゆる（揣キ也オサナブルト云ヿ）。あはれ此道さるべきにや（ソウアルベキニヤ）。かみつ世より今のよにいたるまで。哥のすがたかたみにあひいそひで。うつり來ぬることかくのごとし。此故にわが

父成章六運をわかてり。おほよそかくうつりゆくさまをおもふに。一かたにすぐる所あれば。そのたらざるを補はんとては。又そのたらざるかた。いたくすぎつゝ。たがひに花實のかねがたかりしなり。これをもて見れば。世々の哥仙。たゞねがひあふがれたるは。花實相兼るより。あだし心なき事。疑ひなし。かくそこにえいたらでのみありて。かみつ世。中むかし。のみ。ひとり教にかなへるは。よのくだれるにつれて。後の集どもの。及ばざるやうなれど。たゞよのひとのよゝにひがむ所あればも也。そのひがみをときたらむに。いつの世かは中昔に及ばざらん。みつね。貫之。らとても。心のみつよつありけるにもあらざるべければ。たれかは道のえがたからん。人の心おほよそかたき事をば。うとみとほざけ。やすきにつきて。いたつかしと。（いたつかしト云フハ清テヨムカナハヌトスルヿ也痛也）にぐるさが（癖也）あれは。人みなおもしろく。（おもしろくトハ本面ナ合スヿヨリ云ヒ出シナリ）末の世となりて。人も皆おのづから心うすく成にたれば。いにしへの人のごとく。たけき志をたてんこともかたくて。後のよのおとり行なり。とても昔に及まじき成と。心うる事。いとも〳〵淺ましき事也。此道いかで中むかしの人とてもやすからん。後の世には詞つねのにかはりたれば。そのつとめのみ古よりはこと多きにて。後のよの人とていかでかかたからん。みづからやすきかたきもわかで。かたしとおもひすつるより。おほかたの世のくだるにはあらで。人の心して世をくだらする也。物始あれば終あることはりなれば。おのづからむかしに及ばず。なり行理なれど。またをはりあれ

ばはじめある事。あめの道なるをや。たゞ志はふかく昔にたてゝ。をはりて後のはじめをとねがふべし。よゝの哥仙。みなよゝの姿につれてもて。(ママ)ひがまれたるは。法の立ざりしが故也。法を規とせば。中昔もたゞきのふの心地せらるべし。さしもの先達。そのひがめる所をくはしくみづからおもひわき。神よゝりののりにしたがはゞ。いかでかかゝる姿はわかれ。いかでか中昔におとらん。いと口をしくねたき事ならずや。後のよはそのゝりをうしなへるのみならず。いにしへの詞の心。よゝにたどりまさるまゝに。詞づくりもおのづからよわくなりて。いにしへ今の哥をならべてみるに。たゞことものゝ如くみゆるぞかし。我父。詞にみつの位をわかてる。もはらいにしへにかへれとて也。今のよにもしれる人はしるべし。いふかひなきものは。古今集おほやけにひめ給て。おぼろげの人の。うかゞひしるべきことならねば。心をいれてもよまず。三代集といへば後撰。拾遺。もさるやうにこそあらめとて。これも古今集になずらへて。心もたどらて。共にすてたるが如く貴べば。うち見にはなにばかりのふかさもなきやうにみゆればなり。いかなるよしありてかくたゞごとのやうなる哥をしも。三代集といにしへより先達もあふぎしのばれつらんと。心しつかば。心(ソレニ心チヨセテユケバソノヨイ処ガシルヽト也只ケッカウトノミ聞テ居テモソコ迄)をいるゝ人も世に多くなり。此頃のみなかなるもおのづからあらはるべし。又後拾遺。金葉。詞花。

（付テユクヿナセヌ故ニシレヌソコ道學ビユケバ實ニヨキハスガシル、ナリ）なるをば。あしきやうに沙汰せられたるも。三代集にくらべての事なるに。ふるごとにまどひて。さしおくやうにすめり。いかでかそのよの哥に。後のよのなよひ哥。まされりといはん。千載集には。ふる哥なしとて。中むかしをもまねばぬ物から。いやしむめるは。いとかたはらいたし。新古今のすがたを。になう（无二ナリ）めづる人あるは。人の心色につく世なれば。詞のにほひにおどろかされて（表サヘカザルトコイトスル）也。（人氣ニナル物ユヱナリ）新勅撰は。黄門われはと。えらませ給へれど。猶新古今におほきたがひめなし。たがひめなしといふは。黄門だに猶よにつれて。そのよのすがたによませ給へるをや。續後撰をたふとぶは。かのやすきにつく人の心なれば也。げにすがたは。すなほにうるはしきやうなれど。詞もいうならんとするに過て。よわ〳〵しく。三代集にはなずらひだに安からず。玉葉。風雅。をいやしむるは。たゞいにしへの人の口まね也。今のよにくらぶれば。猶ちからいりて一ふしありといふべし。新續古今。このかたの堪能をば。かみなきやうにおもひなりて。もとを忘るゝにいたれど。そのよに哥仙ときこゆるだに。定家卿にはなほたちおとりたまへり。まして三代集比の人に。いかゞなずらひにもいふべからむ。後のよの堪能も。後のよにうまれたまへればこそあれ。もしさる哥の姿して。中昔にうまれたまはゞ。いかでか貫之らとひとしき。名はのこらん。頓阿をしたふぞ。かの濁にしまざりしこそ。いとかしこけれ。哥もおぼろげの口つぎ（き）にはあらねど。猶五條三品には。たちならぶべく

もあらず。むかしより今にいたるまで。その名だかき人々。たれかはむなしき名ならん。いづれも〳〵。なべてならねばこそ。ほまれもあれ。されどもとをすてゝ後にしたがはん事。かへす〳〵淺ましきわざ也。いかにとなれば。よゝの先達も。とほき所。たかき山とせられたる所は。堪能のうへにだに。猶三代集なるをや。此ひと言をもて。うたがひはとくべし。さればとて後のよの人たり共。其人をば嫌ふにあらず。ましてそしるにもあらず。おのづからいにしへにかなへるもあるべければ。よき哥はよしとあふぎ。かみつ世。中むかし。たり共。法を出たるは。よしとせざるをこそ。まことのことゞはすべけれ。かみつ世。中むかしを。あふぐべしといふは。我このみひがみてみづからわたくしゝ（自分ノ心チヨセルノ也）。そのよの人を。心よせに（心よせト云「ハイカヌト云「チ押込メテ上ツ世ト云テヨイトハイハヌト也故ニ）思ひて。柿本の神をはじめ。躬恒。貫之。らが。その人をしも。たふとぶにもあらず。のりたゞしく。道のほい（本意也）ふかくとけて。花をさへかねたれば也。たゞ道をこそたふとぶべきに。中昔たりともとりたてゝ。その人をしも心づきに思はゞ。あしきをもよしと思ふ。ひがことといできぬべし。これをまどふなとて。我父。五のしなををしへたり。おほよそ神のむかしより。拾遺集の比にいたるまでの人。つねにしらずしていへる法あり。そののりたる（か）はず。うしなはざるが故に。上つ世。中昔。又法とすべきにたれりとはいふ也。そのよゝの人は。かならず時をえて哥はよめり。よめどもつとめて言につくさず。つくさざれば神

來りしづまる、（鎭護也言灵ノサキハウト云ハ云ヒックサヌカラソレチ神ガアリテ向フヘウツスヿ也）さてこそあめつちはうごかし。人の力およぶまじき。しるしも見ゆべけれ。時をえて言に尽さじとするに。又法有、詞にはむかへといふ。物には境といひて。いはず。いはざるが如くにしていへる。これを餘情といふ也。よにつらゆきが哥のすがたを正風とするはさる事なれど。そのすがた詞。いとたしかにけさやかにみゆるより。餘情ある哥はこのまれざりしなど心うるは。れいの心をいれぬが故也、中頃に能因法師も。すでに餘情を幽玄とまどはれけるをはじめとて。近昔に到ては。わかなくいひのこせるをしかりとおもへり。餘情妖艶の体といへども。幽玄をはじめて。近昔のいひあまし哥こそ。妖艶の体とはいふべけれ。いかでか餘情を妖艶といはん。此けぢめわきえぬゆゑに。貫之がすがたにまどふのみならず。中昔のみなかとすべきをも。心えられぬなり。爲家卿を親としてことさらによみいで。ふりはへてつくりいづるもののごとくなりそめしより。おもふ心をおもふまゝに。よみいづるもののよめるは。たゞ（只）ひがものゝゑせごと（ゑせごとトハヨキヿニ非ズシユレゴトナリ）。うちさゆづりのやうにおもひあさめ（シヤベルヿ）。口さかしき人は（輕シメルヿ也アザケルノ也）。邪路などゝいひおとしむめれど。神よゝりの法によらんに。何かは正しからざらん。たまたまそのきはだちいでゝ。志ありがはなるも。新古今より上に。目及ぶ事なく（マヽ）、すゞろによゝの先達の名にのみおどろかされて。つひに道をなすことをえぬ人もあるべし。これぱかり。それはしかなりなどいふほどに。やうやう所（ト言）せうなりて。いとゞちからよわきがうへ

に。かしらおさへられたらむこゝちして。何の題をよめども。その物こそかはりたれ。たゞおなじことのみ。いづらむやうに見ゆるぞ。いとも〳〵口をしき。おほやけの御をきては。おしたち（オシ、ノブヿ）しのぐべき事ならず。もとよりたゞおもふことをのぶるものなるうへは。人しられずまねばんほどには。何事もよみならはずは。しることなくてやみなん。よむべきによみ。ゆるがすべからぬ。（ヨムベキニハヨミトユルガスベカラヌニハユルガサストニツニ）詞の心をえ（ナル）ての上は。よまじともよまんとも。たゞ心にまかすべし。はしらを（箸）はしにけづらんことはやすく。いぬにのりて千さとにゆかむは。かたき理（リ）をおもふべし。しかのみならずさとりなきほどにて。（ソレヲアキラメテノ上ナラデト云）身（ヘルノ也）をくだき。心をつくして。いかでむかしより見えざらん心詞。（昔シヨリ見エズアラウト云心也詞ヲナリ）よみいでんとすとも。みつね貫之らが。よみえざりしこと。何かはあらん。かばかりやすきにながれ入れる人。いかでか躬恒貫之らに及ばん。法にかゝまれんは。（法ニク、ラル、ハツタナキヿナレ圧及バザルニクラブレバ矢張リソノ方ガヨイト也）かひなき事なれど。及ばるに及ばんこと。のりにしくはなし。此故に境を内外にひろくし。時をひる（昼）よる（夜）まつべし。境といふもの。古の人もつくすべからず。時また。古の人よみのこさずとはいふべからねば。いかにも三のくらゐを。まねびあきらめて。中昔をのりとせんに。いかでかむかしに及ばざらん。よに哥こゝろさすもの。はしめよりたかくとほしろき所（トコロ）にはいかゞはとて。後の世のなよびかなる所（トコロ）より。よみのぼれとをしふるは。（自分ノ志ト云モノハ也）志のうへにあらざることをしらず。後の世にはことわりなるやうなれど。志といふものわがわざをしるべするに。いか

でかひきゝ所(トコロ)に志はすうべき。つとめと志とは。思ひまがふべからず。ひきゝかたよりすゝまむと。
（㝡(ワザ)ハ顯也　志ハ高キニスエテアレバソノ下地スル処高キニ自ラ進ム也幽ニアリテ下地スル也見エルト見エヌトノ違ヒナリ）
志をさへそこにするゑおかば。つひによみのぼるごなく。ねたくて身をへんものばかりなるべし。し
（ネイタク也心ニ思フヤウニナラヌヿナ云後世ニハ人ゝネタムヿニ云ヘリ自分ガ思フヤウニナラズメ身チオヘルモノバカリテ有フト也）
かるに哥よむほどの人。三代集いふがひなしとおもふ人なし。これたゞ先達の詞に聞おぢして。ま
ことにしかるかしからぬかをもしらで。後の世に志をするゑて。中むかしをさしおくは。ほうしにし
て。佛にならんを。ゆゝしと思ふがことし。かみつ世は。中昔の人だにこれをまなばれたれば。こ
とに心をくだきて。万葉等は。みしるべし。よに萬葉の姿を。ことさらにうつしてよむ人もあれど。
よむべきやうは。そのよのゝりにたがひて。詞のみ似たらんは。今の世の人に。神世のきぬきせた
らんが如きか。上にうたふをもととすべきものなればこそ。中むかしの人も。詞はかみつ世にえら
みまねばれたるをや。たゞそのゝりをそこふかく（底深）。味ひならひ。すがたをえらびまねびて。ゆめ〳〵
（置也オキブルシニセズ始終ツカヘト也）
おきふるすべからす。中昔は。詞もいにしへ。今をかね。此道をきはめたれば。かへす〴〵こゝを
（三代集也古モ今モカネタレバドチラヘモワタルト也）
みなかとして。つねに志はこゝにすうべし。いづれの集にもあれ。みるまゝにわがふとこのむ所(トコロ)あ
れば。やがてそこにひがむ事あるべければ。それひがませじとて。今此よゝの姿はあげつらふ也。
此けぢめよくみしり。おのづから志は三代集に。するゑ。もとづくに。萬葉をもてし。たすくるに。
後拾遺より。後のよゝの集をもてし。補ぬふ(なカ)に。諸家の集等をもてしつとめば。いつゝの級をあき

らめて。ふもとの塵(チリ)。いでたつ足もと。とひきゝ所(トコロ)よりよみのぼるべし。かみつよの法。とほしろ(ママ)
といへども。心にわすれざれば。しなとくすゝむべし。かゝればすべて。いづれの集をもすてよと
にはあらず。たゞ志たてつべき所(トコロ)をのへに(つか)。我に心同(ヲナ)じからん人あらば。ともにこのむ所(トコロ)にひがま(自分ノ心ニオハヌ一也フサハ)
し。ひきゝ所(トコロ)に志はするじ。あらぬ道にまどはゞ。法にいりて法をはなれ。おふけなく此みちに心
(シカラヌ一也)ざせるほい。つひにとけん事をおもふより外なし。我もはじめ。此みち教なしと心えしは。(此神ハ言)神のお
(哭の神也)ほしめさん事も。いと(恐ル、也)かしこくこそ。あはれ〳〵。(此レ上ノこそト云ヘ打合フベキナレド省ケルノ也)

寛政六年甲寅皐月念一夜

北辺二世成元書示弟成孚

撰集次第 委見拾芥抄 大畧拔茲

上世　日本記古㕝記(ママ)　神武天皇元年辛而(西)ヨリ 光仁天皇宝亀元年マテ

万葉 千四百卅年　奈良天皇御宇左大臣橘諸兄公撰之

私勘右大弁家持同撰之

聖武天皇勅云々

古今 中昔　延喜五年乙丑四月十五日奉詔御書所紀貫之爲棟梁奉之大内記紀友則前甲斐目凡河内躬恒右

衛門府生壬生忠岑等撰之

後撰 中昔　天暦五年辛亥十月於梨壺以藏人少將伊尹爲和歌別當

能宣　元輔　順　時文　望城等撰之

拾遺 中昔 貳百五年　長徳頃　大納言公任卿撰之

或　華山院法皇御自撰云々

後拾遺 中季　應徳三年丙寅九月十六日中納言通俊卿撰進之㕝次通俊卿所望撰云々

金葉　天治元年甲辰依　白河院綸言俊頼朝臣撰之

詞華（百七十二年）　天養元年甲子六月二日依　崇徳院勅　顯輔撰之

千載　壽永二年二月日被下　院宣

文治三年九月廿日依　後白河院宣入道俊成卿奏之

新古今　元久二年乙丑三月廿六日依　後鳥羽院院宣參議右衛門督通具大藏卿有家右近中將定家前上総介家隆右少將雅經等撰進

新勅撰（近昔八十四年）　貞永元年（寛喜二年被仰歟）壬辰十二月二日依　當代（後堀河）綸言前中納言定家卿奏之

續後撰　宝治二年七月日奉　勅詔　建長三年十月廿七日依　後嵯峨院院宣民部卿爲家卿奏之

續古今　文永二年乙丑十二月廿六日依　後嵯峨院院宣　前内大臣（基）入道民部卿藤原朝臣爲家侍從藤原行家入道右大弁藤原光俊朝臣奏覽之

續拾遺　文永十一年月日依　亀山院院宣前權大納言爲氏卿撰之　弘安二年十二月廿七日奏覽之

新後撰　正安三年辛丑十一月廿三日依　後宇多院院宣大納言爲世卿撰之　嘉元二年十二月十九日奏之

玉葉　正和二年癸丑八月日依　伏見院勅前大納言爲兼卿奏之

續千載　文保三年巳(己)未四月十九日依　後宇多院院宣前大納言爲世卿撰之

續後拾遺　元亨三年七月二日奉綸旨　民部卿爲藤卿撰之而不終篇　正中元年七月十七日薨去之間子息權中納言爲定卿相續　正中二年十二月八日奏覽之

風雅　萩原法皇御自撰之

新千載　後光嚴院御位之時　延文元年六月十日奉之依　綸旨入道大納言爲定卿撰之

新拾遺　貞治二年二月廿九日民部卿爲明卿奉　綸旨撰之

新後拾遺　永和元年綸旨　永徳元年八月廿七日撰者爲遠卿頓滅云々　同十一月日令相續可撰進之由被　仰爲重　同三年十二月終撰

新續古今　永亭(享)依　綸言　飛鳥井贈大納言雅世卿撰之

十二代　二百二十二年(ママ)

乙　世

今　世　後花薗天皇永亨(享)十年ヨリ安永二年マテ三百三十六年

六運ニ委クアリ

富士谷御杖翁稿本

歌道非唯抄

歌道非唯抄

平安　富士谷成元述

五典第一　哥は人の誠をたつる爲の物なれは修業稽古して時をまつ事第一にて時來り感すれはおほえすよまるゝ物にて歌ほと無造作なるものは候はすそのうへ全躰哥と申して別の物にても候はす歌も言葉ものいふも詞にてすこしの輕重ある斗の事に候その輕重と申すは物をいふには人の害にも妨にもならすはいひてくるしからぬ事もあるものにて候へとも歌にはいはてもよき事をよむ事歌の詮なきことにて候されは歌は物いふにはまさりて修行いたり時をえ候うへにてははからす天地をうこかし鬼神あはれひたまふほとの不思議あることに候しかるにかへつて人の爲にわろく人の氣にさはるへき事をも斟酌せすして物をいへはたちまちその人腹をたて又いふましき事理屈つよき事なとをいへはかならすひとりも得心する人なきによつていかほとおろかなる人にても物をいふにはすこしはつゝしむ心もある物にて候が歌はいかほとの僞をよみ出し候ても現在さやうの罸利生みえす候にまかせて我まゝはかりをよみ候事（わかまゝとは修行をもせすしていかめしきことをよみ道ならぬ心を詞に出しわか私の理屈をたてゝよむ哥ともをは申候）あさましき事にて候

物のいひやうをは歌にて試み哥の道をは物いひにて試み身もち心もち哥とは一枚になるやうにとひとへに御心かけあるへきにて候わか身持心もちを哥と別物に心得候ゆゑ中にもおろかなる人はたゝなくさみ物とおもふ事にまてなりゆき候事これも今はしまりたる事にてもなく上古とてもたま〳〵はこゝに混したる哥もみえ候が次第に人の心うすくなり行候につけて此心得ちかひをひ〳〵世にひろかりすてに中昔の時代にも此道たえ〳〵に成候によつて（そのころ道たえ〳〵なりし證據は古今集の序に色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝ成てまめなる所には花すゝきほにいたすへき事にもあらすなりにたるとある前後の詞をおもふへし）その時代の哥仙たちふかくこれを歎き自身稽古修行し時をえて大哥どもをのこされ候ひつれとも（大哥と申すは修行稽古つもり時來りておほえすよまれよまれての後誠いよ〳〵根つよくなり一生誠のこりたるか詞のうちにとゝまりたる歌を申候五級にて一ノ哥と申すはよみて得らるゝ位にて大哥にはおなしからす候）それも今ははや年ひさしく成てまた心得ちかひする人多くきこえ候ゆゑもたしかたく御たつねにまかせて古來髓腦に申したる此道のあらましを申のへ候貫之髓腦といふ書物（これは古今集成就の後紀貫之一人に別段におほせつけられてえらはせられたる集にて候へともいまたえらひはてられさりし間にみかとかくれたまひけるによつて奏覽をもへぬものに候ゆゑつくり物なりと申ふらし候さやうにても候はんなから實につくりものといふ證據もなきうへに此序は格別尤なるものに覺え候惣躰哥にても文章にても作者にかゝはる事にては候はす人丸とてもさまてなき歌も有申へし遊女なとの哥をも昔は勅撰に入られたるにても御合点あるへく候たとひ誰にてもよき事はよくわろき事はわろく候へはその人の高名に目をくらまされす名なき人のあなとられぬやうにと心得候が大事にて候へは此髓腦もたれにもせよよきをとり候事にて候）序を自身かゝれたる文章のうちに非唯春霞秋月潤艶流於言泉花色鳥聲鮮浮藻於詞露皆是以動天地感神祇厚人倫成孝敬上以風化下下以諷刺上雖誠文假於綺靡之下然復取義於教誡之中者也（二）とある心をよく〳〵御合点候はゝ此

道の本意は聞え申へく候哥にかやうの事ともあらんとは夢にもしらぬ人々歌をよめは何となく心やはらきて道を得ることやとおもふも尤なるやうにて何とやらん手こたへのせぬ心得やうにて候たゝ月くまなし花あかすなと斗なにの感もなきに歌よみ居候てつひに此道の本意をも遂候はん事おほつかなき事に候又は哥を案し候うちはさま〳〵の惡念もおこらすよに有かたき道そと物々しくいふ人もかゆき所へ手とゝかぬ心ちに候その外一段おろかなる人は哥をよめは何とやらんやさしきなとも心え又は上品なる藝とも心得候事これらはとるにもたらぬ事に候もしなくさみによむ心ならは哥よりは氣もはれ心ものひ候ておもしろき遊藝をもせんが哥にははるかにまさり申へく候俳諧なといふ物よりは哥は上品なる藝と諸人おもひ候につきて身からいやしき人はわれらがよむへき物にあらすととりかたつけふかき志なき人は至て手高き事とおもひてわれらがよまるへきものならすと遠さけ候は此道衰微のはしとなり申へくなけかしき事ともにて候此末にも申候ことく哥人と申すものはつね〳〵種々無量のもの事にふかく心をつけてわが修行稽古をはげみ哥の時をまつか第一の事にて候へはいやしきものゝ言爲(ことわざ)までをよくしりいかにも物事にひろく馴わたり人の心にもひろく通し候がます〳〵哥の時に感する程にてこそ候へ哥は身からによる事ならすさほととりつかれぬ道にてもなく候儒の道にてさしも第一とする易經六十四卦三百八十四爻もたゝ乾坤の道につゝまり易と簡とを

易はやすきにてむつかしからぬを申候簡はつゝまやかなるにて何ことも事すくなゝるを申候詮といたし又佛の大小乘をとかせたまへるも人の及びがたげに手だかくみゆる場所はかへつて小乘賢きも愚なるも一圓にしてさしぢかなる場所をは大乘とさためられもろこし天竺までも道の至極はかやうにて候にひとり我國我道はかり上品にして愚人下賤の及ひかたきものにてあらんやうなく廣大なる　神の御心にかなふべしともおほえす候貴人も下賤もたゝたゝ一途に　神の御恵をたのみ身からをもわすれてつとむへき事にて貴賤長幼古今遠近賢愚利鈍たゝ人の誠詞にとゝまる事を至極とするにいかてか差別の候はん差別ありとするは此道をせはむるにて候へしむかしより下賤のものにも哥仙すくなからす一生一首の人も多きはこのいはれにて候まつ歌道に志あらん人は第一志といふものをたしかにすゑらるへきにて候さしもはるかなる筑紫のはてまてもゆかんと思ふ志をはこゝにてかたくすゑ候ゆゑ海山の艱難をへてもつひには行つき候へはわろき方に志をたて候へはたま〳〵よき案内者を得てもやはりはしめ志たる所へ落着候へし志と申て餘の義にても候はすかの非唯の道理をよく〳〵合点いたし置候へは此五典より外に道なき事もさとられ候はんにつけて身持心持を哥にかなへむと信心をこらし候をは志の道にたちたるとは申すへく候しかるに世上にはたゝやすらかにすら〳〵とよむうちより力ある哥は自然と出來る也と教らるゝ人も聞え候初心の人これを聞てこれを志にたて候ゆゑ修行稽古のあることゝもしらす題を

（後筆）志

とりては作例の苦物ともをひきひろげそこゝを拾ひとりて哥とすこし數をよみなりても猶この
くせうせすかやうに多くよむうちには自然とよきうたも出來へしとあてもなき事をまち候事たとへ
は坐なから入唐せんとするか如く苦勞なしに妙所にいたらんとするにて候今成元かのべ候所は必あ
てありといふにてはなけれと修行の海をわたり稽古の山をこえてその功德をもつて入唐せんといふ
にて誠をうたにこらし決定往生の道を案內するにて候へは志のたち所大にたかひ時さへ來れは哥は
おほえすよまるゝ物なれその時をむかふる爲にはしめより誠をたつる事を教るにて候はしめより稽
古修行をして誠をたてんとするはむつかしきやうには候へともその苦勞ほとは行さき近かるへく候
へは初心よりまづ作例にかゝはらす俗語ましりになりともたゝ誠をめどと心えて思ふまゝをよみな
らふへきにて候詞のうるはしきも哥のたけ高きもわろしといふには候はすみな〳〵具足すへき事に
て候へともはしめよりそれにくせづけはいつまてもたゝ詞より心をひきまはすやうになりてその哥
誠あるやうにても猶つくり物たることをのかるましく候誠あれは詞も自然とひきまはされつくらす
して姿詞の優美もそなはるへく候へはとにかくに內を修行して外に及ぼすくせのつかねは歪躰この
道の本意にかなふへからす候誠を修行して時をまたむに人丸赤人いかて及はすといふ事の候へきか
やうに申せは垣やふりとやらん申やうに候へとも苦勞をもせすして聖に及はむとするこそけしから

ぬ事に候はめその場にいたり候事夜舟にのりて難波へくたるやうにはしなき物ゆゑに人丸赤人も聖とあかめたうとふ事にて候されとも此道すなはち　神の道にてこれにて人の道を成就せよとをしへおかせたまひたる事なれは人丸赤人にはこれをゆるしわれらはその御恵のうちにもらしたまはんやうもあるましく候へは歌にてこそいとはるかなる身なれ修行稽古の志あらむからには道におゐては人丸赤人もたゝ道つれにて候へしかやうの道理をもわきまへすわか心から跡しさりをせは折角かきおかれたる髄脳の序をも古今の序をも反古とするのみならすあたら月日を費す人となり申すへく候されは哥よむへき身分われは及はぬものなとゝいふものに候はぬ證據ははしめにも申候ことく哥も詞物いふも詞なれは一言にても物のいはるゝ人にて歌よまぬ事水をのみて酒をのまぬにひとしかるへく候されは我身かやうに物のいはるゝは此道まなへと　神のおほしめすなりと心えゆめ〳〵跡しさりをせす非唯の道を目さして御修行あるへきにて候骨をもをらすして人丸赤人に及はすとするは謙るにてはなくて逃るにて候これを自棄とてもろこしにてもいましめられ候自暴とてむかふみすなるも又罪ふかき事にて聖をないがしろにせよと申すにはあらす志たしかにすわり非唯の道を修行いたし候へは人丸赤人實にをよひかたき事は合点ゆくへき事にて候全躰まよひの種を考候に修行をもせす稽古をもせす哥はたゝ古人の口まねをして開眼せぬ佛像をは佛

と心え候よりの事に候稽古なければ詞道にかなはす（詞の道にかなはぬとは詞に理出たるを申候猶稽古の所にくはしく申て候）修行なければ誠のたつ期なく天地鬼神の感應もいかてか候はんされは稽古修行を兩の手の如くにして誠をみかき時をまつ人は今日たゝ今よみかゝりてもたゝ今大歌の出ましきとも申されす五級に（いつゝのしなとは一の上中下二の上中下三の上中下四の上中下五といふ五つにて候これは亡父成章すへての哥の心より出來て詞となるまての種姓をわかちて人の志をすゝむるためにをしへ置候位にて候此階級の意味ふかき事くはしくは書とりかたく候ゆゑもらし候まづ三上は功者二上は上手一上は名人と御心得あるへく候大哥といふをは聖の位とはさたむる事にて候）一の歌と申すは稽古の力の至極したる所大歌は修行の力の至極したる所（これはその主となる方をとりて申すにて一の歌とても修行をかね大哥とても稽古をかね申すへき事にて候）なれは一の歌はかたく大哥はかへつて無造作なるへく候しかれとも一の歌をよみ得るほとの人になり候ては大哥も隣のやうに思はるゝものにて候されはとて一の哥よみえぬうちは大歌必よまるましきにても候はす返々大歌はたゝ時をえて誠よりいつるにて候へはたれよむましともあなとられぬ事にて候されは修行稽古は兩の手のやうにあるへき事とは申なからむかしは哥の詞もものいふ詞も同し物にて聞えぬ詞もなく詞の道をはくはしくいはれたる事こそなけれこの兩の手をつかふ誠つよかりし故に自然と道にかなひて哥もよまれたるにて候へは此ふたつのうちにも修行おとりて稽古あるよりは稽古はうすくとも修行ある方哥の時に近かるへく候しかれとも萬葉集のうちにも大哥とみえなから詞に疵あるも候へは自身にもその疵をなほし古歌のうちにも大哥の大歌たる所をみしらんと思はゝ稽古もなくてはかなはぬ事に候むかしとても修行たらさり

し人もありしとみえて心得ちかひたる哥もたま／＼みえ後の世と申せとも修行みつれは時を得へき事必定にて候へは後の世とるにたらすとも申されぬ事にて候されと人の心うすく誠すくなくなりゆき候故後の世には大哥自然とすくなく成候事ひとへに志のたち所による事にて候たゝ／＼両の手と申すうちにも修行は左の手稽古は右の手と御心得ありて時をまつへき事より外なく候かの髄脳の自序に抑夫上代之篇義漸幽而文猶質下流之作文偏巧而義漸疎とかゝれて候をも御覧候へ上代とは神代以来万葉の比までをいはれたるにて下流とはその後より貫之時代までをいはれたるにて候この詞の心も上代の哥は修行を先とし稽古をかねたる事をいはれ下流の哥は稽古勝て修行たらぬことをさとされたるにて候古今集の假名序によの中にある人ことわさしけきものなれは心におもふ事をみる物きく物につけていひ出せるなりとかゝれたるも全く哥のよみかた後の世にはたかひて候今成元か申候心えひとへにこれらの心をまなひ古人の髄脳ともをあはせて考候までにていさゝかも私の量權なく候

第二　稽古とは詞の表をたゝし裏境をおす事に候これはいひ出す時の用にてはなく詞を練る時の用にて候大哥の思こみやう表裏境神と次第したる物にて裏境の稽古は詞に理をはふかん爲にて候この事歌の一大事なる事は理といふものもと天地自然の理にて候へとも詞にいつるときは理屈といふものに變し詞にかくるゝ時は無量の道理となる故にきく人の心屈服感服と申すたかひめある事にて候屈服と申すは詞にて理をつめらるれは心よからすはおもへともその理の當然なるがもたしかたさに無是非甲をぬぐを申候　感服と申すは詞いうちに道理ふくみたれはその理をふかくおもひやりその人の心中を察して涙をもこほしてそれにしたかふを申候　この上た

つをわきまへしるをこれを詞の道とは申すにて候　たゝ兩人應對するうへのみのことにあらす上たる人の一言はひろくはあめのしたせはくは家國にひろかるものに候へはこのふたつのわかれにてその福をも禍をも子孫までにのこし候事わか身ひとつの罪となる事に候へは啞ならぬ人として詞の道をまなはぬ事あるましき事に候

此ふたつの道理をしるをは詞の道と申すにて候

表とは詞の持まへの心を申候たとへはへみるとは物ごとの眼にふれ來るをいふ心なりとしるをは表をたゝすと申候そのたゝしやう　五十音の聲の妙義をもつておすより外なき事に候へともこれはしらすとても一とはりは事をかくはとの事もあるましく候　しかれともみの字るの字にていかてさやうの心にはなるそといふ事は聲妙をしらぬ人のしりかたき事に候へは　志ふかき人はこれを學ふ事肝要にて候　それのみならすへみるともへみれともへみらともかよふをたゝ五音相通とはかりにて責をふさき候へとも相通したるはかりにて心もなき事ならは　相通せすともよかるへき事に候　これらのわかれもかの聲妙ならては何をもつてしられ候はん聲妙をしらぬうちは　詞の心に安心はなりかたきものにて候　さてまた裏と申すはたとへはへみるといへはみざりし間の事をも裏にもち又へきくへ思ふたといふことをも裏にもつことをしるこれを　裏をおすと申候その故は天あれは地あり地ある故に天とも名つけ天ある故に地とも名つけたるにておよそ詞として　裏もたぬはあるましき事に候　されはこれをしらぬ人のいふ詞とても　自然に裏はあるものにてまなふに及はぬ事には候へとも　裏ありといふ事をしらぬ時はたとへはへ見たしとおもひし故に見に來たりといふやうの詞出候へしこれ裏なきにてはなく　裏の詞へ出たるにて詞に力なしとはこれをいふにて候へみに來たりとはかり申せはもとより見たく思し故の事なる事は　詞の裏にて聞ゆる事にて　すなはち理屈もかくれ候かやうのことさすか古人にも多き事にて候さてまた境と申すは詞の表と裏との間に　自然ともちたるこゝろにて　裏表に時をかけてしるをこれを境をおすと申候たとへはへみるといふ詞裏にきくといふ事を　持たりといふ事しらるれはその間にきくはかりにては不足なりしにといふ心自然といつるこれを境と申すにて候此裏表は面々の　身分時憂喜なとによる事にて　定まりたる事はなき物にてその一首の塩梅にてみとるへき事に候たゝ　へみるといふ　詞なれともよみ　人の時によりてはその裏境無量無辺にかはるものにて候へはこそむかしより哥のつくる事もなきにて候へ人丸かよまれたる哥の詞も成元かよみたる哥の詞も　詞はたゝひとつにて候へとも　裏と境とにわか修行ほとの心のこもりて　凡聖賢愚の分際は　裏境にてわかるゝ事にて候古今集の序に　へそのはしめをおもへはかゝるへくなむあらぬいにしへのよゝのみかと春の花のあした秋の月のよことにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ　哥をたてまつらしめ給ふあるは花をこふとてたよりなき所にまとひあるは　月を思ふとてしるへなきやみにたとれる　心々をみたまひさかしおろかなりとしろしめしけんとかゝれたるも詞の裏をみこみて賢愚をしらせたまひたるにて　哥のうへの上手下手の事ならは　此序の詞のまへにへ今の世の中色につき人のこゝろ花になりにけるよりあたなる　哥はかなきことのみいてくれは　色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝ成てまめなる所には花すゝきほにしいたすへき事にもあらすなりにたりとかゝれたるにつゝけて　かやうにかゝれおやうなき事にて候　たれかいひたりともみるはみるきくは聞とより外はいひやうあるましき事なるを　詞は表はかりとおもふことは　愚のいたりにてそれ故にあたなる哥はかなきことはかりをよみ非唯の道をもわすれたるにて候此裏境詞の外にある物なれは　餘情といふはこれかと思ふ人もあるへけれとこれは詞の道理と申すものにて餘情有心なと申すは　則感したる道のある所平生の誠のこりたる所なれはこれを

（頭註）神

神とも申候今神と名つけ候事餘情といひては裏境にまきらはしき故にて候されは裏境ともに此御への階梯にて古歌を解するにもこれをしらてはたゝ詞の表はかり聞え古人大哥の神もたつねあたりかたかるへく候しかれとも裏境の事は亡父成章み出して成元これをそしへ候より以前古人とりたてゝ沙汰しおかれぬ事なから全く心えられさりしにてもなくおほえ候事は臆脳ともにも哥合の判なとにもまついはれたる事みえて候家隆卿のへまたやみむまたやみさらんといふ哥を俊成卿の哥のへまたやみんかた野のみのゝさくらかりといふにはおとれりと評せられたるも裏出たりといはれたるにて候されと物をも事をもつくしていはんとする時はわさと裏をも出してかさねていふ事ふるくもある事にて候へは此下生二品の哥も一概にはいひかたき事なから裏出てはあしきといふ事古人も心えられたる事明白に候ある御方御かたはらの人に寒きほとにその障子たてよと仰られけるを父君きかせたまひてさやうの詞にては哥よみえむ事おほつかなし障子たてよとあらは寒からんといふ心はしるきものをと仰られけるとそこれは境の出たるといふものにて候その時節早春か又は暮秋の比かまたはさなくても雨風なとのしめ／＼しき折か父はその人やまひなとあるかなとの時をかけてみ候にいかにも障子たてよとあらは障子のあかりたるかいとはるゝ裏にて寒き故也といふ境は明らかなる事にて候さま／＼に變化すると申すは此御詞もその人物なとをかき居たまはんやうの折に風なとふく時ならは裏は障子のたちてくらきは好まねともといふ心となり哥なとかふきちらさるゝ事のくるしけれはといふ境となり候へしかやうにくはしくこそ考おはしまさゝらめ境の詞にいつるを力なしとおほしける事明らかに候唐にても胡元瑞といふ人の詩話に夕日赤團々といふ句つねにいはゝいふかひなし苦熱の句ならは力あるへしといはれたるも裏境に時かゝるへきことをいひたるにて候されとも成元か如く一言一字にこれを吟味せられたるにもあらす目たつ所斗をいはれたるにて候もそれも道理なる事にて上古には聲もくはしく候ひしゆゑ詞の心もしらす／＼くはしかりしにつけてたれも裏境なとの事はいひおかれす詞はまことよりいつる道をくはしく修行し得候はゝ裏境なとの事はしらすとも哥の時さへ來たらは自然とその詞これらの法もたゝしくなり出候へけれとわか詞の道にかなはぬ所をたゝし古人の哥も疵ある所をしる事においては此裏境にしくはなし非道をたゝし疵あるをしらされは大哥のまことに及かたき事も知かたく候へし猶それのみならす後世の目にては大哥はたゝたけ高くゆうなりとはかりみえ詞のうへにおもしろき理もなく候故それをは歌の本然と心得いよ／＼裏境をみこむ心もつかぬ事となりはて候もと時をえて感したる道理はひろくわたり遠くかよひて無常なるものなれは三百言三百言いふともつきましき物なれはその肝心はかりを一すちにいひおくより外なきものなるに聖の心詞をおろかなるわか心にひきあてゝおもふ故に何事もいひつくさねは聞えぬ事と心得候へとも惣体理はわかいはすても神人の心によく知たる事なれはたゝ端さへあれは今更いふに及はぬ事に候たとへは物の調味をいたし候にいかにもして家人の口にかなはんやうにと心をつくし調味して物にもりて出すにこれはかやう／＼にして調味しおきて候とはいひも出さねとその物家人の口に入て庖人のまこと骨折しは自然と口に覺えらるへき事に候へは修行さへつもり時をえて誠あらはれなはたゝその肝要たる一言にて甚深の道理は神の御心に通すへき事安心なる事に候これらの事いかほと申てもつくしかたき道理ある事にて候へはよく／＼御考あるへきにて候猶成元か百人一首ともしひと申ものにかき置たるを御覧あるへく候前にも申すことくもとより詞の持前なれは時に應して裏も境もおのつからふくみ候ものに候故哥よむ時はすこしもこれにかゝはらすしてよむへきことにて候まして時來りておほえすよまる

（後筆）百人一首燈の名見ゆ

ゝ大歌にこれらを糺す間も候べきやたゞ自身に自身心詞の非をしり古歌の是非をもわきまへん爲はかりにをしふるにて候　學問には哥書物かたり物記錄ものなとをはしめとしてあらゆる書物佛教からの書物にいたるまていかにもひろくよみ候事肝心の事に候へとも哥書ものかたりなとは猶さらの事其外の書物とても詞の道をまなひ候てその後によむとも遅からぬ事かと存し候その故はまつ詞の道を稽古いたし置候へはその後よむ書物ともみな識たる人にあふやうに思はれすら〳〵とはかゆきてしかもその哥その文の神までに及ひて心えられ候へし詞の道をもまなはぬさきに書物どもをよみ候へはみるに苦勞おほくてはかとらぬものなるにさま〳〵の書物をひきひろけ所またらに心をえめつらしき故事詞をも覺えて物しりかほしたくなり人をも下目にみくださん便はかりにまつ詞にはかゝらすして書物をさきによみ候事早きやうにて遅き稽古の爲方(しかた)なるへく候されはとて書物をよむかわろきと申すにてはなく候へともよみやうのわろきにてたゞうはべはかりをつら〳〵とみわたして　神を（神とは哥にもせよ文にもせよ詞のうちにふかくかくれてさま〳〵の妙を具したる魂を申候これは人の修行いたり時をまちえてふかく感ししかも詞道にかなひそれより後も生涯その道をははなれす誠こりたるその人の心のとゝまりたるにて候　人の心至極すればすなはち　神の御心おなし物にて候故とりもなほさす神とは名つけたるにて候すへてこれをは人の先途と心えすしてはなに事もたゞいたつらごとにて候へし　哥ならねと家國のあるしとしてその家の法國の法をいひつくるにそのあるしの誠その詞にこりてとゝまらされは三年をまたすしてその法みたれ候へし易經に精義入神と仰られたるもこゝの事にかなひて候これ又くはしくは申とりかたく候）　あふへき事を思はすさま〳〵の事をおほえこみて哥をよむ道具にせむとするまての事と成申候道具もなくては物のさかひもしられぬ事候へともひたすらそれ斗を心かけ候へは人のこゝろのあさましさはかの物しりかほ

いつとなく出來哥も物いふも口かしこくなりいよ〳〵修行をわすれ中へきかわろきにて候その上詞の道をさきにまなはねは苦勞おほきのみならすなにことともなき聞えなるへきに詞ひとつに打かゝり心をこまかにして思案はかりに隙をいれ書物をわきにするはまだるきこと也と思ふも人々の心のつねにて候へとも詞ひとつをあきらめ置く時はその後よむ書物にいくたひその詞ありても一旦骨ををりて我か物にし置たる詞の事なれは考るにも及はすじき（直）に聞えてしかもその力よりその哥の神にもたつねあたる事まことにわか力ならすして教らるゝやうに聞ゆるものにて候契沖阿闍梨はまことに古今の一人にてそれより後の哥學者口をきく人多く候へとも最初この阿闍梨袋のくちをときおかれたる故にこそ此袋のうちは廣し狹しなともいはるゝ事にて　我か國の書物にかきらす佛書儒書雜書にいたるまてひろく見心をつくされける事返々後のよの人の眼をあかせられたる人にて候されは古哥なとも自然と神にいられたる所もみゆるをさすかに詞の道亡父成章か如くくはしからさりしとみえて哥を注せられたるにうはへはかりなるが多く候改觀抄（契沖百人一首を注せられたる物に候）に赤人か〽田子の浦にうち出てみれはといふ哥なとはたゝ一言も歌の心は注しおかれす候これ此哥詞のうへにてはあまりに聞え過るやうにて注の爲方（しかた）もなき故とおほえ候（此哥の心は百人一首燈にくはしくいひ置候故又申さす候）　大歌はすへて此うたのやうなる物にて表はたゝ眞直につくろひもなくいひぬきたるやうに候へともよく思案すれは詞のうへに理屈

算用のあはぬ所必あるものにて候そこをは神に入る門として裏境と次第にたつねいれは神ある所のしらるゝ事大歌をみわか哥を正す掟にて候契沖阿闍梨さへかやうの事にて候へはとかく稽古はまつ詞の道を第一書物をよむを第二と心えてさて詞の道をまなふうちにも書物をよみ試み書物をよむうちにも猶さら詞の道をたつね入るへき事稽古の肝心たる事にて候此ゆゑに亡父成章すへての詞を三具にわけてその抄をあらはし詞の道をしふる便といたして候 三具とは挿頭 装 脚結いつれも抄を御覽して御心得あるへく候裏境は前にも申す如くその人の時にて變化かきりなきものなれは抄にはくはしくいはれす候へとも 部をわけ俗語をあてたるに專この心はこもりて候 まつ挿頭と申すものは一詞のうちにて上につく詞にてその一詞の心むけをさたむる詞に候たとへはへいかにみるへきといふ詞のうちへいかには挿頭へみるは装へへきは脚結にて候心むけとはへみるといふ装もへへきといふ脚結もへいかにといふ詞の心をふくむ詞となるにて候又装と申すは一詞の中ほとにたつ詞にてその一詞の体をさためてさとす 詞に候へいかにといふにてその心むけは定むれともその物事いかなることゝもしれす候にへみるといへはこれは 物事の目にふるゝことなりと聞ゆるが装の持前にて候 されは装なくては挿頭の正体をしらする事なりかたき物にて候又脚結と申すは世上に申すてにはにて一詞の下につき上の心むけに應して その正体のはたらきをさとす詞に候たとへは へいかにみるとはかりいへともへきといふにて そのさきの爲かたをあらましてしらんとする心也とは聞ゆるにて候 されは此三具かさしはよそひあゆひにもちあひよそひはかさしあゆひに 持あひあゆひはかさしよそひにもちあひて詞をなし一詞の心をもすちをもわさをもさとすにて候しかれともかさしよそひの心は 大躰にも聞ゆるものに候へともあゆひは 惣躰梵語唐音音をきくやうなるものに候へは中にも骨をゝりてくはしくすへきは 脚結にて候 その故は挿頭の へたれといふ詞をへこれといひそこなふ人もあるましく装の へしるといふ詞をへいるといひそこなふ 人もあるましく候へとも 脚結の へらむは へけむ へらしなともよみそこなふ事初心ならても多きを御覽候へ されは脚結の心をくはしくしらむと思ふには 五十音の靈妙ならては外におしはからむ爲方もなきものにて候五十音のこれにつけても 不思議なる事こと葉にも 心にも及かたき物にて へらむといふ脚結らの字むの字にてへらむの心をたせる事まことに天地の道理人の心に感してわれしらすいつろ靈の事なれはかほとの 不思議もあるへき事にては候へとも 五十音をもつて脚結の心をおし候へはあまりにをかしきほと聞ゆるものにて返々不思議なるものに候 五十音靈妙の事は亡父成章はしめてさとり成元これをひろく詞にあて試みていよ〳〵神變なる事のしられたるにて候 あらましにも申入たく候へとも 口授にてさへいひときかたく聞とりかたきほとの事にて候へは折あらは 傳へまいらすへく候秘するといふにてはなく候へとも 我國の學問の奥これとりはなく候故 不熟心なる人は心あらくてなましひに聞えそこなへはかへつて 靈妙をあなとるやうにもなる物にて候へ

はその人の執心をみて傳へよと亡父申おきて候 されは三具の持あふ所たとへて申さは 挿頭は先祖装はその家の當主脚結は家來のこときものにて先祖その家をおこし家風をたておけともその子孫家をつき 先祖の心をうけてつとめす候てはそのかひなく當主も 父先祖の志をつきて家をとゝのへむとおもへとそのはたらきをたすくる家來なくては成就しかたくされとも 當主も先祖なくてはつくへき志もなく家來も主人なけれははたらきをあらはす便もなきか如くなるものなれは よく〳〵ひとつ〳〵をくはしくして持あふ所を考しるへき事にて候人のいふを聞たる斗にて我まなひたる事のやうにいふほとの骨をしみなる人はとるにもたらす候へともまことに書物をもよまむとおもふ人はよく〳〵心をとめて此稽古のしかたを守るへき事に候たゝ一詞にていく萬首をも見通す爲方(しかた)にて候へはまたるきやうにて近路たるへく候人間一生わつかなる間にて候へはいかにも近路をゆかす候ては中ほとにて日暮申すへく候一日に路廿四五里をもありく人はおもひの外に足遲きものなれと路にてやすまぬかことく心をせけは早きやうにても久たるみつき候へしたゝ〳〵心をゆるりと持ち懈怠なく此近路をゆきたまはむに一生をいたつらになさす志したる所へとくゆきつかむ事なにの疑か候へきいそかはまはれ勢多の橋といふ俗諺の如く氣をせき書物はかりをなまがみにてのみこみたゝ多くみるを手からにおもひ候はゝ一生不實なる學者にてをはるへきに候詞の道をまなひ候ともその人の志非唯にたゝす候ては詞をいたはりかさる爲となり候はむ事これまた心得ちかひすましきことにて候詞の道の稽古は詞のかさりをとり捨むか爲に候事古人大哥ともの詞つきたゝ無事にすなほなるにて御合点候へし詞無事にすなほなれとも稽古修行なきをこれをはあたなる哥はかなきことゝ古今の序にいはれたるにて候されは稽古は非唯の志を

かたむる爲なりと御心得あるへく候

第三　修行とは歌の時をまつ爲方を申候平生たちふるまひ物いふにつけて内には　神にむかひ外には物をあなとらぬ事を二六時中わすれさるこれを修行と申候内とは心のうちを申し外とはわか身の外を申候かやうにふたつにたてゝ申すは聞えやすきか爲はかりにて　神にむかふ心になれは即ものをあなとるましき事もこもるにてたゝ内外のたかひめまてにて候佛の八相作佛といふに降魔成道轉法輪と次第したれと降魔すれは卽成道し成道すれは卽轉法輪となるにて候へは内外ふたつとわけて心えましきにて候まつ　神と申すは　國の常立の尊はしめ奉りてすへて明らかに正しき御心のとゝまりていつくとなくおはしますを申候天竺にては佛と申しもろこしにては鬼神と申すみなたゝ同し事にて候人の誠をおもふをみてめくみたまふ物なれは　神にもあれ佛にもあれたゝ面々信仰せらるゝをは二六時中目にこそみえたまはね目のまへにおはしましわか善惡是非をみしりたまふへしとつねに心に信し候はゝ自然と心のうち淸くたちふるまひ物いふも道にかなふへきにて候この事成元か考出したるにも候はす今更ことくしくいふに及はす人々心のうちをさへくはしくたつぬれはおのおの覺ある事にて候へともそれをは　神にむかふへき故とも弁へぬ人の爲に申すにて候わか理屈を人にいひはり物かけにて人をそしり人の物をかすめあるましきわさをするにわか十分の事ゆゑにこゝ

ろよくはおもへともあとにては何となく氣のすまぬ心あるものにて候その氣のすますおもふ所の心をは公心と名つけ候　人の心たゝひとつなりとみな人こゝろえ候へともくはしく思へはそのすち／＼あるものにて候まつ物をおほえ理をたくはふる心をは現心と名つけ候理にかゝはらすたゝわか料簡はかりをおしたてわかまゝなる心をは私心と名つけ候中にも人のおもはくをもいとはすわか勝手はかりにつよく一途なるはひたふる心とも申候さてこの私心より奥に我もしらすありて私心にまかせてはなにとなく心かゝりに氣のすまぬ事におもふ心これをは公心と申候猶また此公心より奥にふかくかくれてその公心をおこす心あるをは　これを神と名つけ候　これらの事くはしくはいひとりかたき事に候　此氣のすますおもはるゝはわか心中にふかくかくれて神ある故に候その神すなはちわか神にては候へとももとよりわか持たる神にはあらす　天神地祇日にはみえたまはねと人々の目のまへにおはしまし人々われと我儘に氣のつくやうにと御心を人の心のうちにやとして誠に導きたまふにて候その故はわか心のやうにてわか心にあらねはこそ氣すまぬは道なるへしとは知なから猶我まゝをもするにて候へはこれ心のうちより　神の導きたまふに疑なき事に候されと公心ある故に修行につけて次第に神あらはれ時をまち得れは歌にとゝまり人の力をはなれて神變不思議をなすにて候へはとりもなほさすわか神たるへく候されは　神にむかふとはすなはちわか此心中の神にむかふにて候しかれとも

神は御かたちもみえすまして御心はみゆへきやうもなき故におのつから人々わすれやすきによつて晝夜六根に　六根とは眼耳鼻舌身意を申候　ふるゝ物事に又御心をやとし置たまひものをあなとらすしてみきく人には甚深の道理をさとしたまふこれは外より人を導きたまふにて候よろつの物およそ國土をはしめ雷風

人畜山川草木にいたるまてこと〳〵く　神のうみおかせたまひけるより土にてつくり木にてつくりたる器なともみなそれによりて出來たる物なれは有情非情をいはすすへての物たゝ　神の御所爲御所領なること神書ともにくはしく猶また申すもかしこく候へとも　三種の御寶專この御心にていふかひなきわれらまてその御教をしれよとてつたへさせたまひしにても明らかなる事にては候はすや

神はかくの如く人を誠にみちひかむと　内外より御心をつくしたまふをわか心のうちも顧す外にても山は山川は川とのみ見る事内には　神をあなとり外には物をかろしめて　神の御心をは無にするといふ物にて候へしされはたゝ〳〵つねにものゝ動靜につけてうはへに心をとゝめすふかく見こみてその中にふくみたる甚深の道理を感し得る時はおほえす歌よみ出られて誠のたつ事我さへしらぬほとに成候事ひとへに　神の御恵にて候此つとめをわすれさるこれを修行とは申すにて候これまたすなはち時をまつにて歌の種にて候世上にて稽古をは歌の種と心得候へとも大なる心え違にて稽古は哥の道具にてこそ候へされとも修行ありて稽古なけれは詞に理いて稽古ありて修行なけれは歌はうるはしけれと虛言にて詞に理をあらはしたるよりは罪おもかるへく候されは前にも修行は左の手稽古右の手と心うへしとは申たるにて候稽古の方かちて修行たらぬはおほえす口かしこく又稽古たらぬも道にそむけはいつれもその科は候へともふたつをくらへて申さは稽古はすこしたらすとも

修行不足なきやうにありたく候修行いたらは詞も自然と道にかなふへきにて候たとへはきりて花瓶なとに活たる花と土にありなから其木に咲たる花を見るとの如くにてたとひ花形はすこしわろくてもきりたる花にはまことの色香はあるましく候人にみゆる所斗をとりつくろひ物かげにては我まゝなるこれを　神にもむかはす物をも侮ると申候論語に林放といふ人禮の本をたつねられけるに孔子大哉問と仰られたるも本をしれは礼義自然に成へきものなる故の事にて候表むきの行義作法はたゝうち捨てもくるしからすとおもふもこれ又　神の御心にはかなふましく候へともこれは修行いたらはおのつからにも出來候へしそのおのつから出來たる行義ならぬはつくり出せる行義は行義ともいふましき事にて候とかくおもひの外に人々心を用ゐぬはかけの所にて候あまり表をうち捨たるもならひそこなひたる禪學者のやうに候へは佛道に空假中の三諦いふをしへも候これを　我道にあてゝ申せは空は修行假は稽古中は誠にて誠より自然と空假のはたらくやうにとの修行肝要の事に候この三を具足せぬは片羽なる事天をいたゝき地をふまむほとの所いつくとてのかれ候へきされは　神を恐れぬ人は物事の我身にあつからぬはいふに及はすさしあたりてのかれかたき事にても骨をらぬやうにと逃る事をさきに考へたゝすら／＼と事をすますこれを物事を侮るとも申候毒にも藥にもならぬ人にて一生をすくさむとおもふ人はせむかたもなき事にて候へとももともとそれ無事をおもふにては

なくてわか勝手にわろき故に身をはつし遁るゝといふ物に候へし源氏物かたりは師なくしてみるなといはれたるも此こゝろにて候此物語をよむ人下分はさま〳〵なる好色を興し中分はこの中の事實又は詞のゆうにおもしろき所々をおほえ上分のみやうは詞を察して人情世態に感し知るにてこそ候へ物をかろしむる人は月は光さやかに花は色香えならぬものとみゆるまでにて　神を師として非唯の末座にもなほらむ事生涯あるましく候されは惣体心の持やうなにゝてもあれ何事にてもあれ日にも耳にもふれ候までにては安心せすして今一段ふかく察し入るへきにて候これわか心中とよろつの物の内とに　神の御心のやとりたる事しらるへき端にて候世にたれか我身の安樂ならむことをねかはす我身の勝手になる事をきらひわか物の衒る事をわふるものあらむやうまれ出たるほとこそあれ成人するにしたかひて次第心え皆違ひゆく事聖とてもはしめはかくの如きこと人のつねにて候へとも修行時いたりてこそ聖ともなるにて候へされは修行するにつけて時いたり誠たちたるに及ひてははしめの心得たかひもかへつて誠をたつる助となり候へしもとより修行の心なき人の私心をむねと心えたかひたるこそまことに心得たかひとも申すへけれ此故にははしめは私心にひかされたる事なれとも誠たてはこれを賞せられて後撰には賀朝法師か密通したる時の哥さへあり猶代々の集にもかやうの類多きはこれ人をも侮りたまはぬ故にて候これのみならす全体人しれぬ戀の哥ともをはあのは

れ〳〵しき　勅撰に入れさせたまひしをもみたまへかやうに申せは誠さへあれは惡行はくるしからすといふやうなれと誠のたつへき助とおもへはなかく惡行斗に身をほろほす事もあるましく候それもはしめより心えたかひなきにこすことあるましけれと前にも申す如く私心は人の生地にて聖とても私心よりおこりたる物なれはふとおほえす心えちかひしはしめたる事も惡きはわろきとしりなから誠のすてかたくて身をうちはめたるかあはれにて候私心至極すれは誠のたつもつよきもの愚なるも至極すれは信ふかきものにて候へはなま惡行なま賢きこそまことの惡行不實ものとは申すへけれこの故にむかしより戀のうたは多きにて候一日の間心えちかひする事いくらといふ事もなけれとなま心得違なるか故に誠たつほとの事にも及はす候それも修行の心あれはなま心得違なりとも段々ふかくおもひこむうちに時も來るへきにて候へはたゝ〳〵わき目をもふらすして修行すへき事にて候しかるに修行は窮屈にて身心を縛らるゝやうにおもふ人もあるへく候へとも私心にまかせてわか儘をふるまへはその後何となく氣のすまぬこそ其繩目のかゝる期なく窮屈なれわか神までに量權をつめて何事をも懶惰なくすれは心にかゝる事もなく候へし猶また修行の窮屈ならぬことはわか好む所の遊藝にもあれ繪をかき菲をうちふえをふく類なにゝても望にまかせてするにたゝはかなき藝なりと思ふ故にさはりになる事も候へし人の害にもならすわかつとめをもかゝぬ事ならはなに事かあたな

る藝ならむ修行の心さへある時ははかなき藝のうちよりも道のさとらるゝ事世にもその例おほき事に候鍛冶は終日かな床をたゝきて成道し乞食はものをこひて成道するにて世になに事か捨る事の候はむ物事につけて道をさとること我心にふかくもそまぬ月花よりも至て好なる遊藝をするははるかにまさりてはやく道のさとらるゝことある物にて候わか好む事には心ふかくかゝる物こゝろふかゝらねは道のさとらるゝ事もなく候ゆゑにこれまた人のすく所にしたかひて　神の御心をやとしたまふにて候人として好色はこのまぬものなきことなれはよき事にこそなけれこれによりて成道したる人むかしよりあけてかそへかたく候源氏物語も好色より誠に導かれたるものなる事ひとへにこれにかなひて候古今の序にへ色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝなりて（此序文前に出し置て候）なとかゝれたる心は非唯たる道をわすれて哥を男女のあひたの使としたるを歎かれたるにてこれによつて道をさとり誠のたちたるをもあしといはれたるにはあらす候この掟かたしけなくも即　神の御心にて候事は神書に素戔鳴尊（ママ）さま〴〵の惡行をしたまふによりて日神御いかりつよくつひに根國へをひやられたまふその時素戔鳴尊御心に誠たちたまひ　日神に御對面をねかひたまひしにははしめは疑ひおほしめしけれと素戔鳴尊の誠あらはれけれは御誓約の通に御子をとりかへて天原をまて治らせたまひしはひとへにはしめの心得たかひは誠のたつへき助となる事なりとの御教にて候もしこれ心淺き人なら

は一旦磐戸をさしこもりたまひしほとの御はらたちなりけれはその後いかほとのたまふとも對面する心もあるましきに素戔嗚尊先非を悔て誠たちたまひし御心をは無下にする事なく御對面ありしと凡人の心に引あてゝは心えかたきほとの事にて候もと　神にもむかはす物をもあなとる心のいはれを考候にみつから我を賢しとしてわか量權を尤とおもひわかまゝの城廓にたてこもる故に物事さしあたりてわか身の邪魔にもならすわか心にもかまはぬよりおこる事に候すでに人に對してふあひしらひなる事をすれはその人そのむくひをもしつよく恨をもいふか迷惑さにすこしわか身に不勝手なる事とおもひなから人にはこらへてするものにて候それももとよりうはへはかりの追從ゆゑこれもつて人をも悔るにては候へとも　神は御かたちもなくものをも仰られぬを幸にしてこれほとの事は御罸もあるましなとゝ勝手よき量權を出しておのつから麁末になりよく候いはんや花鳥風月の類なとはないがしろにおもひくだす事芥の如くに候これ大なる心得違なる故は詞爲方なとまことしやかに鼻をもうこかさすしてみすれは感するほとのことこそなけれ人はまだしもすかしもせらるへく候へし心中の善惡邪正をは明らかに知たまふものは　神にて候ものを盗人もこれよきわさ也とはおもふ心なけれはこそ白晝に垣を踰す候へ前にも申すことくうはへはかりの事をすれは何となく氣のすまぬ所のおこるはこれわか神のあるゆゑにて修行し時來れはすなはち神威あらはれ哥にも世にも

神とゝまるへきはしめにて人として修行わするへからぬ證據にて候有情のものはいふに及はす非情の物もみな道をさとれとて　神のみせきかせたまふ物なれはこれを侮る時はわれに道を教る事なく又あなとる心をは

神照覽したまふ故に　神われをめくみたまふ事なく候されは　神にむかはぬも物をあなとるもわか勝手はかりを思ひて　神の御慈悲を無にするといふ物にて修行をわするゝは聖ともすゝむへきわか身をみつから捨るといふものに候たゝなに事にも理をつたひてひたすらふかく入てみれはその奥の道理時ありてはわか公心を媒としてふとわか神におもひあたりすなはち道をさとり誠たつにいたるこれを內感と申候（感とは兩方おなしものなるか時ありておもひかけすゆきあふを申候もろこしにてある人笛をふきけるにその前にある池の中より鐵にてしたる物とびあがりしこと候これこの鐵も蕤賓の律ふきける笛の律も蕤賓なりける故のよしこれら感のなす所にて候されは哥には感をむねとする事にて候もとわか神はわれなから不思議にてありともなしともしらぬほとの物にて候に公心私心に克てもの事の道理にふとおもひあたるゝにてわか心のうちにあるも神物の奥にあるも神なれはおなし物の感するとは此いはれにて候それも時なくしては感なけれは感は時時は感と御心得あるへきにて候又哥よまれて後　天地神人の感應あるもこれ又同し神の時ありて行あふにてこれをは外感と申候たゝおなし道理にて候）感より外はたとひ道をさとりたるやうにても理屈の上の事にて誠のたつといふほとの事はあるましく候此ゆゑに哥には感を重んじ候されともたとへふかく思ひいりても時來らねは感する事なく候へはとりもなほさす感をは歌の時と申候時といふものゝ大事なることはたとへは著き頃にさむくせんとおもへとも人の力のをよふ所にあらす人の力の及はぬことにて自然と著きにて候ゆゑ著中さむしとおもふ人

天の下になく著中をしひて塞からしめんとおもふ人これ又四海になく候これ皆時のなすわさにて候へはたま／＼さとりたる道も時なけれは理はかりにてたゝわか身心のみならす天の下の人に感通して自然の誠のたつことあるましく候されは時來り感すれは哥おほえすよまれておほえす誠たち天地神人の感動するもひとへに時のなす事なれは哥の時をまつ事第一にて時をまつ爲に修行をするにて候感したるやうにても歌のよまれぬは時の來らぬ故にてたゝ人の量權のつまりたるといふものにて候此量權のつまりたると申すはわか量權の通にては氣のすまぬ故に物事につけてふかく理を案し物の神とわか心の神とうちあふまての道理に考つけたるにて時をえて感したるか如く自然なる事にてはなく候この自然に時をえて感したるをは誠のたちたると申候量權のつまりたるをは誠をまもると申候中庸に誠者天之道也誠レ之者人之道也誠者不レ勉而中不レ思而得從容中レ道聖人也誠レ之者擇レ善而固執レ之者也とあるか如く一旦時に感して誠たちて後はわさとつとめすわさと心かけねともすての言爲誠をいてぬものにて候これ歌は人としてよむへきいはれに候量權のつまりたるはかりにては固執といはれたるか如く誠をまもりてとりにかさぬまてにて甚危き事にて候おほえす歌のよまるゝ段になりては從容中道といふものになるにて候へは返々わか身をみすてぬやうに心かくへき事に候哥人の大事これにまさることなく候へともすこし怠る時は來るへき時もよけて行過へきにて候へ

はたゝ〳〵忘るましきは修行まつへきは時にて候（世上に修行もせすして詞の上やすらかなる哥をのみよみ其うちによき哥よまるへしと危き事をはたのみに思ふはこれ此時を待つ事の心え違に候）佛もはしめ華嚴をとかせたまひけれとも氣根熟せすとおほしめし時をまつ爲に阿含方等般若をときたまひしに時來りて法華涅槃に誠をたてさせたまひさはかりの御弟子もみな夢のさめたるやうに成佛しすなはち衆生をあはれひたまひし御心今二千年の後にまて經文のうちにとゝまりて濟度したまふ事佛の御修行いたり時のなせるわさにて候易經の六十四卦全く時をしるることに出さるにてもよく〳〵御合点あるへきにて候

あはれ物ことにみなかしこくことそきゆく世にもあるかないにしへの人はまさものにのみものちかいたなりといふもさうしはしまりてのちはあなわつらはしとうちおくめれとこの物かたりよむことにはしめをはりうちあへるところ〳〵見わたさむにはさうしいとわつらはしいかてかしこき事もかなとおもふほとに此ころえたるしろき經のうらおもてとなくかいゆきたれはふひむなるやうなれとさるかたに心そきぬわか父はやくまき〳〵のうちことのけちめにしたかひてみついつゝつゝになつけたりしをもはら此ふみののり心えむたよりにそかいわけたるさうしは歌のしうなとこそあれ今この事よしなきにしもあらす式部のおもといし山にこもりて經のうらにすまあかしのまきかきたまへりとなむまことにやあらむそらことにやあらむ

寛政癸丑四月

きたのへのふたよのぬし成のふ

三和讃ともしひ

平安　富士谷成元謹述

淨土和讃

弥陀の名號となへつゝ その一事のつゝきて息まさるをつゝといふされはしはらくの間斷もなく稱名するをのたまへる也古今集戀部へいたつらにゆきては來ぬるものゆゑにみまくほしさにいさなはれつゝとよめるも逢たきと思ふ心に誘れてゆき〳〵してやまさるを云これらをもてしるへし 信心まことにうる人は その物のありさま普通におもふとはことの外なる事をさとすをはと云されは信心をまことにえたるもえぬもさのみたかふ事はあるましと思ふ人情をふまへてはとはのたまへりさてそのことの外なるさまは此下の句意これなり 憶念の心常にして にしてとは事と事とをかねてする心なりされは憶念の心あるかうへに報恩の思あるをさとし給ふなり 佛恩報するおもひあり 佛恩のかたしけなきをおもふのみにあらすいかてむくひ奉らむとおもふ心あるをまことの信心をえたる人とはいふへしとの給ふ也凡情に思ふとは實の信心はことの外なる事ならすやと也

此章は信心の至極をのたまひて信心とても深淺あることをさとし給ふ也けに阿弥陀佛の恩をかたじけなしと思ふは猶淺しいかて報したてまつらむと思ふこそまことに信心の厚きにはあるへけれ

誓願不思議をうたかひてをとはすへて當然の理あるものを理（校者云以外のことにとりなすをいふされは下說ナシ）

眞言辯

富士谷御杖著

上

眞言辨　上巻

これはさいつころ成元か友なにかし哥道の意趣をとひおこせたりしに答へつかはしつる也

○歌道の旨趣并戀哥の論　賢愚の則

歌道いかにこゝろうへきと御たつねうけ給り候もと哥は時宜やふるへからすひたふる心おさふへからぬ時によみてひたふる心時宜ふたつなから全うする道にて候おほよそ人所思のまゝを爲にいたす時は爲にとは言行ともにつかねていふにて候かならす宜しきにたかふものなり此故に所思のまゝを爲にいでしかためにつねに　神道によりてその源たる偏心を制すへきなり

ひとへ心といふ名は源氏物語に〽をさなきほとの御ひとへ心にかゝりてとあるによれりひたふる心といふ名は同し物語に〽ぬす人なとやう(そ)れひたふる心とあるによれり此偏心に二筋あり非とはわきかた(万)へなから制しかねたると非を是にまとはれたるとなりたゝおしこめてひとへ心といふこの非といふに又二筋あり邪と正となりおほかたひとへ心となるやうを思ふに邪正善惡によらすこゝわりを含めるより惑とはなるもの也されは邪正となく(し)片方に心をゆたねてうちたのむ時は(と)しらす〳〵ひとへ心にはなるなり此故に邪もひたふるにうちたのまされは偏心となる事なし正といへともうちたのめはすなはちひとへ心なりされは邪正によらすたゝ一(とへ)すちにうちたのむ所あるをはひとへ心とはいふ也しかるをなま心得なる人はひとへに惡をすて善をとる事けにさる事にて善によりて身心をたて(く)むにはまさる事あるましき事なからひとへ心にまかすれは善たりとも猶しひわさなるをや邪のうへにたにすこし理をふくめる事にはうちたのむ心いてくるを正しき事のうへはましてたのむ心つきやすきものなれは邪よりもかへりてまとひ易きは正なりされはとて正をすて邪をとらんとにはあらす邪正ともにうちたのむ心をあくとはいふなりこれをいかにといふに時宜といふものもと一方なるものにあらすたとへはほめてよろしき時あり呵りてよろしき時ありつゝしみてよろしき時ありみたれてよろしき時ありこれ時宜のつね也されはほむるをよしとたのむ時は呵るへき時にかなはすつゝしむをよしとたのむ時

はみたるへき時にかなはさるへし古今集中にへゝまめなれとなにそはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなしとよめるこれ
正をたのみし人ハ時宜をおもへる哥なり所詮善はたつとひ一にたのむへからす悪はいやしみ一にいむへからす善はもと悪にむかひ悪は
もと善にむかへるわさなるまてにてたゝ人事のやむことをえさる事なりされはたゝ悪をもいましめ善をもたのむましなに事も眞にて
かひにいたるをは先途そとおもふへき也さてまたひたふる心といふは畢竟か(そ)のひとへ心のおさふるに激(ママ)したるなり　神道にま
つろひてをさまるはかりの心をは偏心とし　神道にもまつろはぬはかり
なる心をは一向心とす人の心におそるへきものは此ひたふる心なりかしもと(闕字)神道はことはりもてをさへ(ナシ)かたき
偏心をはこしらへすかす道にしあれはおほくはこれにてのとめ得つへししかれとも猶その偏心のお
さふるに激して一向（シ(ヒ)タフル）心となれるはすかすにもすかされすしてほと〳〵爲（ワサ）にいて時をやふりつへきも
のなりしかるに哥道をわきまへぬ人はひたふる心は實にやむことをえぬ事也とおもひて爲（ワサ）にもいた
すへけれとかくひたふるなる心もなくさみ爲（ワサ）にもいたさてやみぬへきいさをしなる哥道しもあるを
それを超てやかて爲（ワサ）にいたさむは眞爲（マワサ(ナシ)）とはいひかたきをやわさ眞爲（マワサ）ならねは義非義となくしひわさ
となりて　神人感し和する事つひにうへからすされは人として哥よまさるは心から爲を不眞になす
也　神道によりてひとへ心を制しなほやむことをえねは哥とうとふ事ひとへに爲（ワサ(ザ)）にいたさじか(ナシ)
爲なれは　神道により哥道にしたかへる人のうちふるまはむ爲（ワサ(ザ)）そまことにやむことをえさるか故の
眞爲にて理によりてふるまふたくひにはあらさるへきある人われにとへらく　神道によりて心を制
せむにひとへ心といへとものとめらるゝをいかてかひたふる心とまてはなりぬへき一向心たになく
は哥道も無益なるわさにはあらすやと成元これにこたへてけにさる理にては候へとも聖といふきは

にたに猶哥はよみたまへり理のうへにてこそたれも〳〵さはすくよかに思ひたれしらす〳〵ふと思ひしまるゝ筋のたえてなからむことは人としておそらくはあるましき事なり萬葉集に〳〵ますらを(ママ)はおもへるわれやなにすとかひとひと(ママ)夜もはなれゐてたけきこふらん上下界また〳〵ますらをとおもへる(り)われも草まくらたひにしあれはおもひやるたかき(ママ)をしらに上下界なしおほくよまれたるかことく(し)ことわりによりてすく(す〻)よかにおもふ事また猶ひとへ心なり　理のうへにしておもふ心をしはしとりおきておのか心をうちをはみつからかへり●見(み)は歌道なくはわひしかるへきこととおもひしらるへしとは●申(ま)き哥もと爲をとゝめ心をなしさ(ママ)めて時を全くせむかためなる道なるを所思を達せむかためによめる哥むかしよりたに見ゆ後世になりては題詠さかりになりて身にもか〻はらす心にもさのみおもはぬことをしひてかたふきいてそれか巧拙をあらさ(そ)ふわさとはなりにたり所思を達せんかためによむも此道にそむけるわさなれとかたふきいつるたくひは論の外なり題詠はたゝ哥よみならふためはかり也と父成章も申き　されとそれしかるへからすとむかし人もおもはれけんとおほしきは伊勢物語に〳〵むかし男女いとかしこくおもひかはしてこと心なかりけりさるをいかなることか有けんいさゝかなる事につけて世中をうしと思ひて出ていなむと思ひてかゝる哥をなんよみて物にかきつけけるいてゝいなは心かるしといひやせんよのありさまを人はしらねはとよみ●お(を)きて出ていにけり云々この女此哥にて恨をなくさめむかためならすして恨によりて家出するを怪みしといはむ人口をふせかんためなりすなはちおのか恨に身をまかせて時宜をやふりたるなれは記者●こ(そ)れをいやしみてしかかゝれたる事猶その下文にてもしるし古今集の序に〳〵哥をいひてそなくさめける哥にのみそ心をなくさめけるなとかゝれたるけに此道

の本意一言につくされたりといふへしよに物むつかりする人その憤(イキド(ト)ホリ)を發せは時宜かならすしかるへからすとおもひしれとなほ欝情おさへかたき時なにゝてもあれものひとつなけうち破却なとするに忽その欝情とけてむつかりを爲(ワザ)にいつへからぬ時を全うせらるゝことありこれそ能欝情のかたちの破却せし物に見ゆるか故にむつかりもなくさむなり哥すなはちこれにひとしく時をやふりなむとする一向心のかたちを哥に見る時は欝結せるいきほひくしけて時宜をも全うせらるへきなりされは神道はひとへ心をすかして時にたかはしとする教哥道はひたふる心をなくさめて時を全うせむとする教にて此ふたつの恩人の身心においていかはかりそや神代紀上卷に　伊弉諾(イサナギ)　伊弉冊(イザナミ)二はしらの神磤馭盧嶋(ヲノコロシマ)を國の中の柱として陽神(ヲガミ)は左より　陰神(メガミ)は右よりめくり給ふに　陰神まつとなへて憙(アナウレ)哉(シヤ)遇(アヒス)ニ可美(ウマシ)少男(ヲトコ(ニ))ニとのたまひけれは婦人言をさきたつる事すてに不祥(詳)とてまたあらためめくり給ふ此たひは　陽神よりとなへたまひ後に　陰神となへたまへりと見ゆ　此御言擧は卽詠歌の濫觴なりしかれともはしめのはよろこひにたへたまはぬ御ひたふる心にまかせて言をさきたつましき時宜をやふり給ひた(はさ)れは御言まつたく私なり後のは　陽神の後にとなへたまひたれは時宜にはかなひたれと御言眞ならす此ふたつの御言擧はしめのは私なり後のは不眞にしてともに此道の本意にあらさる所也されは時宜をやふらむとするひたふる心をは時のために哥になくさむるか此道の本意たるへき事此ふたつの御言擧の言外にありわか御國はしもものゝことわりは我よりさとさすして彼か心をもてあちはひしらむことをたつとふる(ママ)によりて哥道の御をしへかく(し)言外にはこもりたるものなり後のよの哥のよみさま此ふたつの御言擧のことしおほくは時をやふりて私なると時にはかなひて不言なるとのふたすちを出すしからは此道なにの詮かあらんたゝ〳〵まつ神道によりて　ひとへ心を制しひたふる心となれらむをは哥をもて制しなほやむことなきすちならむはやむことを得す爲にもいたすへき也されとたえて爲には所思を出すへからぬこと下の神道の弁にくはしくいふかことくかならすわさはひをまねく門なれは　一旦懈狀(愉快)なるやうなるもやかて百倍の欲をとりいつへ

し此故に　神道哥道ともに爲をうなかす心を制すへき道にしてすなはち爲を眞爲になさむかためのをしへなり　爲によつすちあり空爲私爲公爲眞爲これ也　さるはひと〻心にもあつからすしてなす爲とひたふる心にまかせてなすわさと道理のうへよりたまめ〳〵しくなす爲とひたふる心をなくさめわひてやむことをえすなす爲となり　第一のは可もなく不可もなし　これはいふかひなけれとかへりて事には害なかるへし第二のはとり所もなきさか(が)なわさなり　第三のはいと正しく道々しけれは人服せすといふ事あるましけれとしひてつゝりなせる所あるか故に感動の道徳絶たり第四のはいときたなけなれと　神道哥道もちから及はすして實に止事をえすせめてうち出たるわさなれは神人感せすといふ事あるましき也これ第三公爲のたくひにあらすよく〳〵思ひわきぬへき事也　よに辞世とて今はのきはに哥よむ事ありその哥よむこゝち此道の本意を見るにたれりおほかた人としてわひしくかなしきことは多かれとしぬるはかりかなしきことはなしされはのかれかたき命數せんかたなき物からいとも〳〵あきらめかたけれと死は決すへしいかまほしさはやる(す)かたなさにせめて哥にはなくさむる也　いかまほしきひたふる心をは哥に托して死をいさきよくしたらむ人はそのたましひ實に神とあふくにたれり佛者はこれを成佛と云佛教のうへにていへは(と)死を決せさる心のこる時はその魂中有なる(ナシ)らんを恐り成佛をねかふか故に臨終正念をたつとて辞世の偈をものこす也その心なほこれにひとし　在五中將は死にのそみてへつひにゆく道とはかねて聞しかときのふけふとは思はさりしをとよみたまひ紀貫之はへ手にむすふ水にやとれる月かけのあるかなきかのよにこそ有けれとよまれたるもみな命數はせんかたなくいかまほしさはやるかたなきせめてのわさなりかしかゝる用もある道なるを所思を達せんことをむねとして哥よむ事　神人いやしみにくむ所なれは哥いかはかり巧なりとも此道のせんいかてかあらん　詞をたくみにすれは不實も實のことく邪なるも正なるか如く見(み)ゆるものなれは也　さるは(と)此道時宜やふりかたく心なくさめかたきにせめてよむへきよしを弁へすたゝ我欝情のくるしさに堪へすみたりに功をもとめむとてよむにてかへりて　神人の憤をひくわさとなるをはし

らさる也伊勢物語にむさしなる女にあひて後男●京（京）にかへらんとする時〳〵くりはらのあねはの松の人ならは都のつとにいさといはましをとよまれたるもと此女哥さへひなひたるよし前にかゝれたるはかり男もとより心にもつかぬ女なるをかゝるせちなる哥よまれんやうなしされはこれまたく●（し）いつはり哥にて女に心あさからすと見えんとてよみたまへるなりさてこそ記者も此哥の左に〳〵といへりけれはよろこひておもひけらしとそいひをりけるとかゝれたりこれ男はいつはりおほせ女はいつは●（わ）られはてゝ男の方こそ志かなへるやうなれこのさまを見む人たれも〳〵女のいとをしさより男をにくまさるものあらさるへし哥の道にそむけるはふかく　神人いやしみにくむへき事これをもてもあちはひ知へきなり今古人感動をえられたりし哥ひとつふたつをあけて申すへし袋草子云紀貫之紀伊より上洛の時蟻通の神祟らせたまひてにはかに馬ふしたりし時〳〵かきくもりあやめもしらぬおほ空にありとほしをはおもふへきかはとなけかれけれは馬のあしやかてたちてつねよりもあしとくなりきと也この哥うち見にはもと御社もなき　神なれは下馬せさりしもことはりなるへき心をさしむかひて（闕字）神になけき申されたるやうなれと神罰をかうふりたる時宜はやふるへからすしかりとて實にわか不敬にはあらぬ理は申さまほしけれは●（と）せめて哥にうたひて其ひたふる心をなくさめられたるもの也されはこそ　神ふかくめてあはれみたまひて馬のあしを●（は）たてたまひ

つれ父おなし草子に能因法師ひてりにあひて伊豫のくにゝて〳〵あまの川なはしろ水にせきくたせ國まもります神ならは神となけかれけれは三日三日(シナ)まて雨ふりきと也此歌(哥)もうち見にはさはかり御惠なき神なれはうらみ奉らむも非義ならぬ心をさし向ひて　三嶋明神になけき申されたるやうなれと渇死すへき時宜はやふるへからすしかりとて渇死せんことのかなしさはのとむへからねはせめて哥にうたひて其ひたふる心をはなくさめられたるもの也されはこそ　神ふかくあはれみおほしめしてさはかりの雨をはふらせたまひつれすへて心はひたふるなから時宜をやふらしとてよむ哥は神これをあはれみたまふ事かくのことしある人われにとへらく此二首ももと所思のためになけかれたるにてその心ひとへに私なりしかるに(闕字)神その私に幸することいかなる理ぞ(こ)やと成元こたへてけに哥の表につきていへはさる事なりされとこれもと時宜に身をおかじとての歎にはあらて全く時宜をやふらしとするにかたき故のわさなれは心はわたくしにて身は公なり公身私心のやむことをえぬ所よりいて來る哥なれはこれを眞言(マコト)とはいふなりされはうつも撫るもとるもすつるもたゝ時宜を全うせむの本意なるを　神人いかてかこれを感せさらんとは申きかへす〳〵外よりは時身をせめ内よりはひたふる心身をせむるに哥ならてなにかはこれを全うせむ時をやふりやふらぬは卽身をあやまらぬさかひなれはいとも(よ)〳〵危きことそかしそのあやふきをすくふはすなはち此道の

本意なるにその心得うしなはれたるは世かはり時うつりて人の心次第に輕薄になり時宜を全うすれは　神人に感道（通）すへき理を迂遠のことくおもひ眼前の利をむさほりてかへりてその害ちかきをしらすなりぬるか故也すでに古今集の序にも〳〵今のよの中色につき人の心はなになりにけるより云々とかゝれたるはすなはちこれをなけかれたる也後世の哥はすへてわか欝情を利せむかためはかりによむことゝなりにたれはそのならひにほたされて古人の眞言をも見あやまり我よむ哥も眞をそむきおほかた此道の意趣をはうしなふましき事に候（時宜にかなへは身公なり哥にうたへは心わたくしなり身公にして心わたくしなるをくわしくおもへは外やふりかたく内おさへかたくやむことをえぬさまその間にしるしされは公かと見れは心は私也私かと見れは身は公なりこの故に不測の感をひく也たとへは酒をこのむ人の酒をいさめ心にくき人のうらむるはふかく心に感せらるゝかことし眞の妙用言をもてのふへからす）あはれ哥といふものなくはおさふへからぬ欝情なにかなくさまむやふり難き時宜なにゝか全からん欝情なくさますは人みな時宜をのみあやまつへきをや

●○(ナ)(シ)戀の歌の弁并賢愚の則

歌おほよそ前後をもかへり見すおのか貪欲のすちをのみすゝろにいひいてたるもののやうに見ゆるより眞言たるへき道つひにうしなはれたるにて候それはその詞を見こゝろを思ひてその哥ぬしの身を察せさるか故に候下の五級に申すことく一の級は眞の理の當然たりといへ共實况にのそみて自然の姿となりいつるには所欲のすちの詞にかくれたるもあらはれたるもかはる事はなくてたゝ私心は

公身をやふらむとし公身は私心をおさへむとするに公身はやふり難く(し)私心はおさへかたくてやむことをえすうたはるゝなれはかくれたるをしもあはれともいひかたくあらはれたるをしもいやしともいひかたし表の公私にはよらす歌とうたへは私心はせめてなくさみ身はかろうして公に所置せらるゝこと哥のいさをしにしあれは哥の表にのみ目をとゝめて其哥ぬしの身にいるゝことなければ此道の規矩準繩すへてたかひゆきてたゝいたつらなるもてなやみくさに落申す(は)へきにて候眞をたに準繩とせはほむるもそしるもたゝ哥の表にして言外にはやふりかねたる時宜おのつから見えていとせちにあはれなるより理外の幸をもえつへし世人哥の表にまとへるか中にも戀の哥は哥人もひそかにこれをうたかひ哥よまぬ人は此道のそしりくさとすけに哥のよみさま所欲のためと心うる心よりおもはゝうたかはしきもことわりなり好色はことに欲心甚しき物なれは後世のみならすむかし人も時宜の爲にはなけかすして所欲を達せむの心にてよめる戀の哥も見ゆ中むかしのはしめさるさかなき戀の歌さかりに成けらし古今集の序に〝今のよの中色につき人の心はなになりにけるよりあたなる哥はかなき言のみいてくれは色このみの家にうもれ木の人しれぬ事となりてまめなる所には花すゝきほにいたすへきことにもあらすなりにたりと貫之もなけかれきしかれともこれは戀の哥道ならすといはれたるにはあらす人情輕薄になりて時宜のためによむへき道を思はす所欲のための詠

哥となれるをはふかくなけかれたる也哥はたゝ眞ならんからには戀の哥も何の哥もかはる事あるましきなり眞ならすはひとり戀の哥のみ道にそむかんやひとへ心ならんに(と)は好色のすちとほかのすちと(も)いかにかわきていふへきさ(こ)れはこそ古今集中にも戀の部はことに歌の數おほくゑり出られなを他の部のうちにも戀の哥おほくましへられつれこれをもて貫之の本意を見あやまるへからす貫之髓腦の自序に

此書ふるき印本よに見ゆれと僞書なりといふ説ありこれは古今集　勅撰の後また貫之一人に精撰(一闕字)勅ありつるにて哥の數すへて三百六十首なりしかるに此書をゑらひはてられたりし時　帝崩したまひ猶この　勅をつたへられたり(る)兼輔の中納言もうせられけれはせんかたなく(し)てさなからむなしくさしおかれけるよし此自序にみえたりかく奏覽までへさりしものなれは公ならぬか故にうたかひて僞書なりといふ歟またはなほまことに僞書歟いつれにしもあれ哥のゑらひさまかつ春夏秋冬戀雜なと配しあはせて出されたるやうもいともの／＼しう見えならひに此自序の哥道をとかれたる心は(ば)え此道心えむにいとたよりありされは眞僞の論をはしはらくとりお(を)きて今これを用うるなりたとひ此書貫之ならすともその論正しからんにいかてかすてんや

非唯春霞秋月潤艶流於言泉花色鳥聲鮮浮藻於詞露皆是以動天地感神(祇)祇厚人倫成孝敎上以風化下下以風刺上雖假誠文於綺靡之下然復取義於敎誠之中者也　とかゝれたるはひとへに眞をたつとひたる論なり表にかゝはりて論せはつひに眞のさかひにいたる事をうへからす哥をとくにも古人のたましひいかゝは見ゆへからん所詮眞ならすはよむもよまさるに劣りぬへし哥もと　神道をもてすかしえらるへき所欲ならんには無用にして所欲のとめかたきに用ありその所欲おさへかたきか(シナ)中にも好色はかり心ひたふるなる事(と)はなし此故にむかしより好色のうへの時宜はことに含うしかたきものなれは戀の哥はすくれて多きことはりに

てうたかふへきことにはあらてかへりて此道の本意見つへき所なるをやむかし在五中將二条の后たゝうとにておはしけるにしのひてかよひ給ひける時たひかさなりけれはあるしその通路によことに人をすゑてまもらせられけれはいけともえあはてかへり來てへ人しれぬわかかよひちの關もりはよひ〳〵ことにうちもねなゝむとなけきたまひしにあるしの后ゆるしたまひつと伊勢物語に見ゆもとより五條后の御目をかすめてかよひたまへりけるなれはまもらるゝもことはりなる時宜はやふり難く(し)されはとてさしもおもひ入つる志を今はとてかくなからあはてやみなんも心のとめかたく●(し)●やむことをえす哥にうたひ出て心をなくさめつひに關をもやふらすなり給へるなりされはあるしの后ももとより御目をかすめつるとかをさる事にて所欲にまかせたる哥よめることゝ●(し)その表につきて御いきとほりもなくさはかり切なるひたふる心なるを猶時宜にはおもひかへたまはさりしをはふかくあはれみたまひてさはゆるし給ひつるにてそ有へきもとひたふる心のいと切なるものから時宜を全うするにあらされは感通もすか〳〵しからぬ物なれは好色のうへにてはかゝる感動よのつな(マヽ)り然らは好色いさむへからぬ事かといふにおほよそ色このむことはもとより惑なりされはたえてまとはさらんにしくことあるましけれはいかにもして(闕字ナシ)神道にすかしてまとはしとのみつとむへしされとまとひはおのれまとへりとしりてまとふことはいとまれなりおほくはしらす〳〵まとふな

り此故にしかおほえすまとへる上にてみれは好色ならぬまとひも猶同し罪なりその好色ならぬ●惑(感)と好色のまとひをくらへておもふに好色ならぬまとひはおもひかへされてひたふる心とまてはならぬこともおほかり好色のまとひはおもひかへさむにいとも〳〵かたき物なるか故に此道好色のうへにはもつはら功甚しきをや戀の哥の表にまとひて此道の本意をはふかくたつねもしらぬ●●こと(ことく)いと淺ましきこと也されはおほかた戀の歌よむは一向心なくさみかたき時のせめてのわさなれは好色は道にそむき戀の哥は道の正當なりよく〳〵わきまへしるへきことに候かへす〳〵まとひて偏心となるにも好色はかりせむかたなきことはなしされはいにしへより聖といふきは賢者といふ人たに戀の哥はおほし猶淨藏貴所かけさうしたる女の哥賀朝法師かぬしある女にけさうしたる歌なとさもおほやけなる撰集にのせられたるもつねよりつゝしみ深き人のひとへ心は實にせんかたなきことなれは好色をゆるすにはあらて好色のうへのさはかり切なるひたふる心をさる時宜にかなへられたるかあはれさに●(よ)ゑらひ出られたるもの也もと好色のみならすしかるへからすとしれる事にはまとふ事もあるましき理なれとはしめにも申す●●か(つる)ことく少し理をふくみたる事にはみつから偏心も弁へかたしことにおもひかへしかたき好色のうへの偏心はわきまへしりても猶こしらへすかすことあたはすましてはしめよりわきまへてむやはなにことも論はまとはぬさきのことにてはや戀ひて

のちはいかゝはせむされはまとはさらんさきにいかにもしてまとはさらんやうに●こ（と）そあらまほしけれ撰集に戀の哥おほく入られたるは好色のうへのひたふる心はことに切なるをは哥になくさめられたるを賞するにて好色しかるへしとおもはれたるにあらさる事は後撰集に〽人つまに心あやなくかけはしのあやふきものは戀にそ有けるといふ哥あるを見るへしこれ人のめなりともしらてふとおもひつかれたるかその女はぬしありと人のいふに驚きてよめる也むかしよりすへて歌となりにたる戀はその人の實にあやまちて色にまとひ來れる末なりされはしかあやまちたるかうへに又時宜をさへやふらはそれこそとる所なき人とはいはめしはらく理をとりおきてみつからおのか心をかへりみて偏心は實にしらす〳〵まとひなれるものなる事を弁へしらは戀に哥多きは此道のいさをしたることもさとられ又戀の哥に道ありて好色は道にそむけるよしもあきらめしらるへしかへす〳〵表にのみ目をも心をもとゝむるは身をたもつうへのみならす國家のためもあやまち多かるへきわさなり哥おほかた所欲をのみよみ出たるものなる事たとへは醜女（シコメ）しもかならす心さまなつかしきか如し表につきて此道を論せは賢愚の則としたまひけんこともいかゝはあらん古今集の序に〽そのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのみかと春の花のあした秋の月のよことにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ哥をたてまつらしめ給ふあるは花をこふとてたよりなき所にまとひあ

るは月をおもふとてしるへなきやみにたとれる心々を見たまひさかしおろかなりとしろしめしけん云々とあるを思ふへし 後世にては此賢愚をは哥の巧拙のことゝ(く)おもへりよしあしなとかくはこそあらめこれはなほ人からの賢愚を察し給ひし也 もし歌のうらみによらはたれをか賢しとせんたれか愚也とせむたゝ哥ぬしの身を察する所において賢愚はわかるゝ事にて候 賢とは物事行とゝかぬ所なきを云 愚とはこれか反にて行とゝかぬ所多きを云 哥にその賢愚を察するはいといたく(し)切なるひたふる心をなくさめいたりて堪かたかるへき時宜を全うしたるをは賢としたへばたへもせらるへき時なるをひたふる心をのとめかねて哥になくさめたるこれを愚とするなりその外いつわりてよむ哥所欲のためによむ哥ともは愚中の愚なるもの也と知へし しか賢愚の則とさへなるへき事ひとへに表に目をとゝむへからぬことわりいちしるきこと也この心をわきま(た)へ知らすは戀の哥にかきらすおほかたの哥みなうたかはしかるへきに戀の歌にのみ人うたかひをのこす事かへりて疑はしき事なり

○神道の旨趣

眞と不眞とひとへに心の所欲をおさふるとおさへぬとにあることにしあれはつねに心のひとへなるすちをたつねて畏愛の間に 畏愛とは此下文にいふ二神間(問)答の意をえていふ也猶そこを見るへし おくへき事肝要のつとめにて候 人うまれえて執着ふかきもあり執着する事なきもあり 執着なき人はよにありかたきものなからひたふるに執着なからんはなほひとへ心なり 又うまれえて多欲なる人もあり 無欲なる人もありこれ又上に同しく無欲なる人はいとありかたけれとあまりに無欲なる人は猶ひとへ心にして多欲なる人にその位ひとしかるへしされは(と)執無執無欲多欲をいはす片方によれる心をいすらひなす(ママ)ことく(ナシ)此一條にとく所の旨趣にて候はしめにも申つる邪正の論にあはせて心うへし しかるに道理をもてしひておさふるにはあらておほえすすかされて所欲所思おのつからうちのとめらるゝ道ありこれを 神の道と云神代紀上巻に〻廼生大日本豐秋津洲(ウムオホヤマトトヨアキツシマ)(二)(一)云々 なとあるかことし我國は國土をはしめとして萬のもの

ことくく神の御すゐならぬものなし此萬の（もの）といふには人をもこめていふなりその山川草木なとをうみたまへることうたかはしきことにおもふ人もおほかりそ（す）れはやかて山をうみやかて川をうみ（ナシ）ませたまへるなりとおもふか故にて　すなはち万に表にまとひてなりそもく國土山川なとはもとより有つるなるへけれと國土にも山川にも　神おはしまさねは死物なり死物なれはあるもなきかことくなる物なるか故に此　二神の時はしめてなり出（お）らんやうにかゝれたるは　すなはち山をはおのか有としたまふ　神川をはおのか有としたまふ　神たちをうみ出させたまへるよしをいふ也此御時よりよろつの死物みな　神しつまりまして今にその御たまのふゆをかうふり居る事とはなれるなり　されはいとはかなき物とても皆かくのことく神おはします物なれはあなとりかろしめおもふ時はかならすその御とかめあるへき事也　心ふかき人はよろつの物　神あることをもわきまへえつへし　いかにも心を精しくせすはそのさかひ心えか（ナシ）たか（ナシ）るへきこと也　たゝく物みな表にまとはすそれにしつまりおはします　神にのみむかひたてまつらんこと人の心の當然と御心得あるへきにて候　されは（ナシ）行住座臥にふるゝ所の物いつれにもく神おはしましてつねに人々の情態を見そなはし眞なるをあはれみ不眞なるをにくみたまふへき故に平生の情態ひたすら神の御惠あらんことをねかひひたすら　神の御とかめあらんことをおそりてのみあらはかなきことも猶眞に歸し申すへきにて候これ人の心のさるへき道にて此心たに露たかはすはすへての爲も時にかなはぬ事あるましきなれは（と）偏心といふものおほえすいて來てみつから心の趣をたかふる人心のつね也此故にまたそれをすかしこしらへてさらにもとの畏愛の間に心のたちかへるへき御をしへをはのみしたまへり同紀に一書のうちなりへ大己貴命與二少彦名命一戮レ力一レ心經二營天（一）下一復爲二顯一見蒼生及畜一産一則定二其療レ病之方一爲レ攘二鳥一獸昆虫之災（灾）異一則定二其禁厭之法一是以百性至レ今咸蒙恩頼嘗大（一）己（一）貴命謂二少（一）彦（一）名（一）命一曰吾一等所造之國豈（豊）謂二善成之一乎少彦名命對曰或有レ所レ成或有レ不レ成是談也蓋有幽深之

致(ムネ)焉云々とありこ(わ)れ此國經營のはしめにして此問答ありなほ百性(ママ)の日用ひとへにみなこの　二神の御恩による事なれは此幽深の致をもて人々情態の典とあふき(に)したかふへき心にて此一書の記者蓋有幽深之致とはかゝれたる物なりけにもと神書はすへて深き旨あるを此御ものかたりにしもわきてしかかゝれけん事かならす目をとゝむへき事にあらすや實にこれ少彦名命の御眞爲(マワサ)なれはその旨趣ふかしといふも猶なへて也されは詞のをよふ所にあらねともまつその大意を申さははしめ　大己貴命のとはせたまひしは此國やゝ成就しぬらんとおほして畏をいとひ愛をねかはせたまひし御ひたふる心なりしかるを少彦名命は愛をねかはせたまふ(闕字)大己貴命の御心しかるへからすとおほしけれと御心のまゝに諫たまはゝかの命(ミコト)の御心にさはりてかへりて此後經營の事やふるへきことをおほしとり 時宜のせんかたなき事こゝに見るへし人情おほよそ白しといへは白からじ(し)と思ひ黒からすといへは黒からんとおもふ事つねなり此故に理ある事もみたりに爲(ワサ)にいつれはしひわさとなるならひをおほしとり給へる御答にてよしとにもあらつ(す)あしとにもあらすよしあしはかなたにておもひし(ら)るへきやうにはのたまへるもの也すへての爲實にやむことをえすは爲にもいつへけれとかく(し)人の心に眞をもてうくへきやうにあるへしそれやかてやむことをえさるしるしなるをや此御答即眞爲の規範なり 成就せし所といまた成就せさる所と(と)をならへてさとしたまへる也されは(闕字)此命の畏愛を御心にそなへておはしけむ事明らかなりもと(闕字)大己貴命は經營に勞煩したまへる所よりとく安逸ならまほしくおほしめしゝ故に時をあやまらせたまへる也　少彦名命は今よくなせりと思はゝ忽身心に油斷出來て成就せる所もよくとゝな(ママ)ふましけれは更にうしなはむもはかりかたしくるしくはあ

れと猶油斷せすは成就せぬ所もつひに成就し成就せる所はいよ〳〵失ふ事なくなりて安逸ならんにも害なき期必來るへしこれを思へは今しはしの身心の勞にはかへかたしとおほしめしつる也もしかの御問のまゝにいかにもしかりなと御心をとりてのたまはゝ（闕字）大己貴命の御心はよろこはしくもおほすへけれとしかありてはつひに此國ををさめえたまふへからす又その御心しかるへからすとこたへ給はゝかの命の御心よろこひたまはぬより此後御心をひとつにしたまはむ神なくなりぬへしされは諫むへからさる時宜にかなひたまへる御答さまなりけるによりて（闕字）大己貴命もけにさる事とふかく感しおほしめしたりけらしつひにめてたく此國の經營なりて後天孫にゆつり奉りたまひしよりその御裔いまにいたるまてかくあめかしたをしろしめしをさめ給ふ事ひとへに此御ものかたりの中よりなり出たる事にて候へはたゝ一時の心の所置にて萬世の後まてをあやまる事なりかの漏刻（トケイ）といふもの上の錘をひときさみかけあやまれは終日時を告あやまるか如しあやふきかな此　少彦名命の御答眞ならすはつひに此國をつくりえたまふへからす猶この御答すなはちひとへ（ママ）心をこしらへすかすへき御教ともなりぬる事ひとへに（闕字ナシ）少彦名命の御うつくしみそかし（少彦名命は高皇彦（タカミムス）靈尊の御子なり）おほよそ人の常情樂をねかはす苦をいとはさるものなししかれとも苦をのみいとへは苦を招き樂をのみねかへは樂をうしなふものなり此故に樂に苦を思ひ苦に樂をおもふ時はおほかたの偏心もおほくはすか

しえつへき事也まへ申つるか如く萬物みな　神なる事を弁へしりその神にのみむかひて畏愛の間に身心をおかは畏愛といふもすなはち苦樂のことなりすへての時も全かるへけれと今此苦樂をおもひゆつらふへきことをかへす〳〵いふはひとへ心をたゝすへきかためなり萬物の（闕字）神にむかふはかねて畏愛をそなふる道にて愼也畏愛をゆつらひおもふはおのか心をあらたむる道にて練磨なりこれをおしこめて（闕字）神道とはいふ也かへす〳〵畏愛のいさをし至妙也といふへし人として時をあやまつ事第一のとか也しかるに樂に一途なるも苦に一途なるもかならす時をあやまつ事あるへき事也その一途なるとはすなはち上にいふ偏心なりもとひとへ心といふもの理をせめてしひておさへむとすれはいよ〳〵激していきほひをましつひにひたふる心ともなりゆくものなりしかるを此畏愛の御をしへにしたかふ時は畏にひとへなる心は愛にすかされ愛にひとへなる心は畏にすかさるへししかしもとより偏心なからんはさてあるへしもし偏心とみつから思ひしらるゝ時あらはたゝ此畏愛をもてすかさむに十に八九もまつろはすといふ事あるましき也しかるにそ（こ）の偏心いとしうねきは畏愛をもなほおもはれぬこともある事これ又人心のならひなれはさるひたふるなる心のために哥の道はあることにて候されとも歌道をたのむ時はかねて偏心をさとりあらたむることをうへからねはつねにひとへに　神道を修せむこと肝要なりたとひわれには偏心なしとおもへる人なりとも此　神道の畏愛をもてたゝ（ゞ）さは（ば）しらす〳〵心のひとへなりつる所もみつからおもひしらるへしまして偏心とみつからおもひえたらんにはそのいさをしはかりなき事也歌は實にやるかたなさのせめてのわさなれははしめよりたのむへからすもし　神道によらすして所思所欲をはやかて歌とよみいては（では）眞のさかひをはつるゝか故に哥道の詮もなき事なるへしされは　神道なけれは哥道も私もの也哥道なけれは

神道全からす　神道は歌道をたすけ哥道は神道をたすくいつれか輕くいつれか重からん畢竟　神道ありての哥道哥道ありての　神道と心えてまつつねに　神道を修する事須史(臾)もわするましき事にて候（なほくはしく申さは　神道は時にしたかふへきをしへなり哥道は時にしたかひかたき時の爲なりされは哥道は　神道を本とせされは不足なり　神道は哥道によらされは不足なりふたつなからかくへからすたとへは天と地とのこと(如)し天なけれは地の用おこなはれす地なけれは天の用見る所なしよく〳〵思惟すへき事にて候）ひとへ心　神道の所有ひたふる心は歌道の所有なれともひたふる心もとひとへ心のいきほひつよきよりなれる心なれはいかてひたふる心となるへき心の根をたゝむとおもふには　神道第一に修すへき也されは　神道は本なり哥道は末なり爲にいたすはその末のする也と心うへし萬葉集第十三卷柿本神詠にへ葦原水穗國者神在隨事擧不爲國雖然辭擧叙吾爲言幸眞福座跡恙無福座者荒磯浪有毛見登百重波千重浪尓敷言擧爲吾（言ノ假名）とみえ猶この神詠より前にもへ蜻嶋倭之國者神柄跡言擧不爲國雖然吾者事上爲天地之神毛甚吾念心不知哉（長哥なり下はこゝに用なけれははふけり）とも見ゆたゝ何ことも　神慮にまかせて爲にはいたすましきこと我御國ふりなる事あきらかに候もと一かたに心を決したることならねは人みな爲にはいたさぬものなりその一かたに決する心即ひとへ心なれは萬事おのか心をもて決定する事なけれはおのつから爲にいつる事もたえてなか(ナ)(シ)るへしされとおのか心に決する所なけれはなに事もいとおほつかなきやうにおほゆるか故にたれも〳〵　神慮にまかせ奉る事かたき也はしめに申つる如く萬物みな　神おはしまして人の情態をはつねに見そ

なはすゆゑにおのれ心を一かたに決して爲にいたさすともおのつから　神あはれみもとかめもしたまふものなれはよく〳〵思はゝおほつかなからぬことなりされはひとへに情態を　神慮にまかせて爲にいたさゝらんやうにつとむる事すなはち偏心のいてこさらん爲なり（これまたすなはち身心を畏愛の間にお(を)くなり）つねに情態を　神にまかせてまかせえさらん時はかの畏愛の道をもてこれを制しなほ制しかねたらん時は哥になくさむるこれみな概するに爲に(し)いた(さ)さしかためなれは　神道にしたかひ哥道によらさらん人はつねに爲をあやまつ事いとおほかるへしかし

眞言辨上卷終

眞言辯

富士谷御杖著

下

眞言辨下卷

○時の弁并言詠哥の別教悔の論　五典の説

歌の時あるはひとへ心の末ひたふる心のをはり也畢竟これまでの所思をあらため所欲をすつへきことにあふをは時とはいふなりくはしくいへは此時に彼我あり我とは今までの所置にたかひ來れる情態なり彼とはわか所思にたかへる事物也しかれともその所思よりみれは我と(は)いふもなほ彼なれは我にもあれ彼にもあれわか所思にまつろはぬことあるをは時とはいふなりと心うへしたゝ心えやすからんかために二すちをたてゝいふ也彼とはすへて我とするもののありてそれにむかへるものをいふ名なり我といふもまた彼とするものありての名なりされは我身よりいへは山川草木はかりなりその山川草木をはもし我としていふ時は我身は彼なりかくのことく山川草木たに我とすれは我なれは我身我心も(は)我とする心よりみれはなほ彼なり此故に時に彼我をたてたる也　さて其時に歪うしやすきと歪うしかたきとあり歪うしやすきはひとへ心なれは也歪うしかたきはひたふる心なれは也畢竟ひとへ心ひたふる心のけちめ也されは時は彼我となくひとへ心なる時はをさめもえつへしひたふる心なる時ははほと〳〵時をもやふりつへしたゝ危きはひたふる心の時にあへるなり此故にさるひたふる心をは我身のうちにさなからおくと哥のうちに托するとのけちめは時宜をあやまちあやまたぬのさかひに

しあれはたれかは歌よまてあるへからん古今集序にへはなになく鶯水にすむかはつの聲をきけはいきとしいけるものいつれか哥をよまさりけるとかゝれたるすなはち此こゝろなりうくひすかはつすら猶聲にたてゝ時をやふらぬをやもし歌をもよまてさる時をもやふらしとせはひたふる心のいきほひいよ〳〵つよくなりてます〳〵時を全うしかたかるへしこゝにおいて詠歌のいさをしまことにいちしろき事にて候

○言靈の弁

言靈（コトタマ）とは言のうちにこもりて活用（クハツヨウ）の妙をたもちたる物を申す也萬葉集第十三卷柿本神詠にへ志貴嶋（シキシマノ）倭（ヤマトノクニハ）國者事靈之所佐國叙眞福在與曾（コトタマノタスクルクニソマサキアレコソ）とあるをおもふに言に靈ある時はその靈おのつからわか所思をたすけて　神人に通し不思議の幸をもうへき事わか國詠歌の詮たる所なり（此不思議•(儀)の幸といふはすへて所欲のすちはかなふへき理なき事なるに猶かなふ事あるをもていふ也）古今集序にへちからをもいれすしてあめつちをうこかし云々とかゝれたるはすなはち此言靈の妙用人の力のをよひにあらぬよしをのへられたる也さてその靈となるはいかなる物そといふに所欲のすちは爲にいつへからぬ時宜のその時宜にかなへむことのかたさに•(ハ)せめて哥によみてひたふる心をなくさめむとする心これなりさる心より歌のなり出たるなれは言のうちにその時•やむ(ひ)ことをえさるとひたふる心のやむことをえさるさまおのつからとゝまりて靈とはなるにて

候されは所欲を達せんかためによむ哥は同日の論にあらすその靈の言にあるとなきとは哥よむ志の時宜を全うせむかためにすると所欲のためにするとのけちめすへて物ふたつうちあふはつみにおのつからなり出るものはかならす活て不測の妙用をなすものなりたとへは燧といふもの石とかねとをうちあはするにその間に火おのつからいつしかりとて石しても物はやけすかねしても物はやけすたゝそのふたつの間よりこそものをやきくらきをてらす妙用も出くれまた酒といふものもとよねと水とをうちあひたるにおのつからなれるものなりしかりとて水をのめともゑふ事なくよねをかめともゑふ事なしたゝそのふたつのあはひよりこそ人を醉せ氣血をめくらする妙用も出くれ此故に哥も公身にして私心なるかうちあふ間に靈は出來て言語の道たえたる(り)時をも感通せしむる妙用はもたるへく候これひとへに所欲のために時をやふらしとする心よりなりいつるものにしあれはまして所欲にまかせて爲にふるまはむことゆめ／＼あるましきことにて候

○言語詠哥の別

詠哥と言語との差別よく／＼心えわけつへきことなり世かはり時うつりてこそ哥の詞と言語とはこと物のやうになりにたれいにしへは哥にうたふも言語にいふもたゝひとつ詞なりきしかひとつ詞ならは哥によむへきを言語にいひても(し)ありぬへきことわりにてことさらひて歌によむにもをよは

すもとより歌も無益なるわさのやうなりしかるを古來歌といふものゝあり來れることかならす言語●と(に)はその用たかふ所なくて叶はぬことには候は(す)やもと言語はひとり言にいふ事●も(と)あれとひとり言は言語の專門にあらすして彼我の間の情を通はするを要とす哥は　神にたてまつり人におくることもあれとそれは歌の專門にあらすしてわか欝情を托するを要とす此故に言語には時やふれ詠哥には時歪したとへは言語にて人を誠るは人の心にあたる事勿論なりほむるといへとも實にやむことをえすしてほむるにあらすはなほ人のこゝろよろこひさるへし詠哥にてはほむるも追從におちす誠りても人の心にあたる事なきものなりこれは實事にこゝろむれは明らかなる事なり　伊勢物語に(闕字)紀有常まつしくして離別のめにおくるへ(へ)きものなけれは友たちにとはれたりしにその友よるのものまておくられけれは　言語なとも亡厚く謝を(ナシ)せむもなほ追從めきて　時宜しかるへからすと(して)〳〵これやこのあまのはころもうへしこそ君かみけしとたてまつりけれ　秋やくる露やまかふとおもふまであるは涙のふるにそ有けると二首の哥をよまれけん　かく(し)謝する事をたにむかし人はかく心を用ゐて哥によまれたり　ましてうらみいきとふ(ほ)る事なとは哥にのみ心をなくさめられたる　例ひく(ひゝ)にいとまなし　されは人としてはつねに神道を修し時ありて心ひたふるならは哥になくさめて　ひとへに言行に所思をいたさしとのみ心を用うへし　しかれともまことにかのふたつの道もかひなくてやむことをえすはせんかたなくさる時は爲にもいたすへけれとそれはいとせめてのわさなりとおもふへし　哥は彼我の間を通する事專用ならぬか故に言語にいふもひとつ詞なれとも身を時宜におかむ爲なれは害なきのみにあらすかへりて幸をうる事もあるもの也言語は專門彼我の間にあるか故に歌とひとつ詞なれとも身さへその言にたくひて人の心にさしあたる物なれは害あるのみならす所思つひにかなふ事あるましきなり詞はひとつなから言詞と詠哥とその用たかふ事これをもてしるへし詠哥の詞といへともおなし哥おなし詞にてその意味雲泥なる事あるもの也たとへは冬のよよひのほとにさむしとよむもふけてさむしとよむもその詞ひとつなりしかれとも宵のほとのは心を用ゐはたへもせらるへき時の詞なれはあはれときく人あるましき也よひより寒さをたへ來りて曉更にいたり(る)ことのは實にさむきたう(ふ)へからぬを慰めたる情　詞のうちにおのつからこもるか故に人みなあはれときくへきか如しこれさむきをわふる

心は同しくて堪かたさにのかれんためによむとなくさめむ爲によむと神人のきく所にておいつからかゝるけちめあるをや言語と詠哥のさまたゝこれにひとし　さいつころ此弁別をはある人にいへりしにその人われに問へらくもししからは言語のひとり言詠哥の法樂贈答はいかなる用そやひとりことならんには言語をもてひとり言せむに人の心にもさはるましくやかてわか欝情もなくさみぬへし又詠草（哥歟）（ナシ）といへとも法樂し贈答せむにはいかてか（闕字）神人の心にあたらさらむと成元答●へ（シナ）てけにさる理なりしかれともまへに申すか如く言語は彼我の間を通し詠哥はわか欝情を托するを専用とする物なれは法樂贈答もみな爲（ワサ）をつゝしめるよりのわさなり　後世にては法樂贈答もしひて所思を達せむかためにのみよめは此道の本意にはたかへるわさ也されとそれたに猶言語もてさしつけいふにはまされるものをや　此ゆへに詠哥は所思を達せむの志ならねは法樂するも贈答するも神人の心にさはる事なきもの也またわか欝情を托せむことは言語とてもその用足りぬへき事にはあれと元來言語は無形也詠歌は有形なり　形とは文字の數句の數なとある故に云長哥とても句數はかきりもなけれと猶もしの數はさたまりかつ短哥にひとしく上下首尾して一篇をなすもの也上古にはもしの數さたまらさりし哥も見えなほすかたもさま〳〵にはあれとそれたに言語のことくおもふまゝにはあらす此故に詠哥はかならす形ありとはいふ也　すへて形なきものには靈とゝまる事なし形あるものには靈そのうちにとゝまりて死せすたとへは宇治の網代木にいさよふ波を見て〳〵人生みな此波のことくつひには行へもしらすなりぬへしあらかなしなとたゝ言に●（有）うちなけかむに欝情なくさまぬにはあらねとしはしこそさもおほゆへけれその言形なき故にその欝情やかてまた我身にかへり來て時宜におくへき身をさらにせむへしこれをは〳〵（ママ）ものゝふは八十うち川のあしろ木にいさよふ浪のゆくへ

しらすも柿本の神詠也とうたひ出る時は欝情此哥の内にとゝまりて靈となり千載の後までも死せさるか故にわか身にあら●(り)する欝情は死しさりてさらにたちかへりわか身心をなやます事なかるへし我身のうちに爲を促す欝情を殺し言のうちに活しおきて身をせめ時をやふらせむとするをまぬかれむにいかてか無形の言語そのいさをしあらん哥にもあれ言語にもあれ詞は心をうつす器なれと無形と有形とにてかゝるけちめはある事なりと申きむかしより爲をつゝしむへきことはかの柿本神詠の〳〵神のまにことあけせぬ國云々又源氏物語にあふみの君をいやしめられたるなとおもひあはすへし

○教悔の論　并五典

歌に後悔せる心なると教喩せる心なるとありいはゆる萬葉集第三卷〳〵いなといへ●と(ど)しふるしひの●か(り)しひことを此ころき●か(り)てあれこひにけり又同集第一卷〳〵わかせこはかり庵つくらすかやなくは小まつか下のかやをからさねとある二首の類なり此二首はしめのは後悔の心の●ち(は)のは教喩のこゝろありこれはしめより後悔せむ教喩せむとてよむにはあらす哥もと欝情を托し時を●(は)余●う(み)する事専用の物なれは後悔と見ゆるも教喩と見ゆるもたゝその哥を見る人の心にて哥ぬしはひとへに時をやふらしの●欸(欲)なり此ゆへに後悔と見ゆる●歌(欲)は今の時宜これまでの所思をおしたてゝやふるへからさるか故によみ教喩と見ゆる哥も今の時宜教喩せまほしき心にまかせてやふるへからさるか故によむにて畢竟後

悔するに堪ぬ心をなくさめ教喩せまほしき心のひたふるなるをなくさむるなりもとより後悔せらるへくは哥よますともありぬへし教喩して時に宜しくは哥よまてもありなんもし後悔してよみ教喩せむとてよむ哥ならはこれ幸をもとむるわさにしてやかて眞をうしなふへし此故に詠歌五典にも感動は五典の外とせりこれひとへに眞をうしなはせしかためなり　所欲のすちをすくよかに哥によみいては幸をもとむるわさとなる理もさもとたれも思ふへし教喩とみえ後悔と見ゆる哥は此ことはり心えやすからぬか故に今教悔のふたつを論する也ことに貫之髄脳の自序に取ニ義ヲ教喩之中ノといふ語ありこれは哥なりてのうへの論にて詩經のおもかけ也今論する所は哥よむへき心をのふるにてとと（く）なりすへて哥は所欲のすちあらはれたるも教喩また後悔と見ゆるもたゝ時宜をやふらしかためはかりなれはその時から事からにてしふさま〱のおもむきとはなり出るにて自然のいきほひなりうたかふへからす　五典とはへ第一偏心へ第二知時へ第三一向心へ第四詠歌へ第五全時これなり哥はもと平生　神道によりて身心を修するほとにおほえす修しのこせる偏心根となるものなれは第一に偏心をたつさてそのひとへ心時宜にあふ時は必わさはひをまねくへきものなりされは畏愛の道をもてかの偏心をすかし時宜にかなへむとすへき事第二たるへきわさなるその偏心畏愛の道にすかしえて時宜を全うする事をえは哥に（は）よむまてもなくてこよなき幸なるへけれとその思ひしみたる事から物からによりて畏愛の道理はよくわきまへなかく（ママ）猶所欲の達せまほしきひたふる心すてむとするに激してほと〱時宜をやふらんとすることかならすあるへしこれ第三とする所謂なりされとも時宜をやふれはそのむくひ必來るへけれは爲（ワザ）にも出かたくさりとてまたさなからをさまるへき一向心にもあらさるか故にそのいはまほしくせま

ほしき爲にかへ〻哥とよみいつ此故に第四とす哥とよみいつる時はかの一向心いきほひく●し(じ)け
ていふへからすすへからぬ時宜をも歪うせらるへしこれ第五たる所謂なりこれいつ〻の典●は(と)詠
歌の大規範にしてその意趣言をもてつくすへからすさて〳〵第六に感動をたつこれその時宜をやふら
●じ●か(しが)爲にさはかりのひたふる心をもなくさめたるその哥ぬしの眞言なれは　神人おのつから
か(感)まけあはれみてかのおもひ捨たる所欲に●幸(達幸)する事ひとへに五典のそなはれるか故にて候猶百
人一首燈をあはせてわきまへ知るへし

○眞の辨并五級の辨表裏境の弁

眞不眞おもてにはかはる事なけれとその妙用あるとなきとにおいてはあらそふへからぬことなり眞
はもとやむことをえさる事あるとこ〻ろにおいてあらはる〻ものなりされは眞心(マコヽロ)とは外に時宜あり
内に欲情ありてやむことをえすおもひなれる心を云眞言(マコ(ゴ)ト)とは眞心となりかねたる時やむことをえす
うたひすつる哥を云眞爲とは眞言をもてなくさむれともなほ眞心となりかたき時まことにやむこと
をえすふるまふ言行を言●(云)すへてなに事も心たに眞心となれは時宜は歪きものにして眞言にも眞
爲にもをよはぬ事なれとそれ(ママ)かかたさに眞言はうたふなり眞爲は　神道哥道にてすかしなくさむれ
ともなほせむすへきにいとも〳〵やむことをえぬ故のわさなれは爲を欲する心をすかさむかために

（闕字）神のをしへあり哥道は　神道をたすくる道にてこれまた爲を欲する心のつよき時のためなり所詐爲（ワサ）は眞なるか眞ならすは人の心にあたるへきふしなきさるがうへのたくひはうちもふるまふへし所欲にまかせて爲をいたす時はかならす時宜やふるへきことうたかひなしもし時宜を侵（ヲカ）（ナシ）してふるまはゝことはりはありとも必眞は得かたき事なり時宜をやふらしかためにおもふ心よむ哥ふるまふ爲（ワサ）は私欲のすちなれとも眞物なりしからは眞は私にそへる名かといふに所欲のまゝの心言爲にはかはりてその用公なりさて（は）また公にそへる名かといふに公なるはみな智のなす所にて理のうへなり眞は公理にもよらす（まゝに）私欲にもかゝはらすたゝ時宜をおもんするよりの事也されは私心私言私爲は論のほかなり公心公言公爲は理ありても時にたかふ事あるものなれは　神これをたつとひ給はす眞心眞言眞爲は理なきことも時宜を思ふ心のあはれさに　神かならすこれを貴ひ給ふなり公と眞との差別をよく弁へて眞の徳たかきことをしるへきこと也神代紀上巻に天照太神（アマテラスオホカミ）月夜見尊（ツキヨミノミコト）をして（ママ）葦原（アシハラノ）中國（ナカツクニ）なる　保食神（ウケモチ）のさまをうかゝはせたまひしに（闕字）保食神口より飯ならひに　鰭廣（ハタノヒロモノ）鰭狹（ハタノサモノ）（これは魚の事なり）毛麁毛柔（これは獸のこと也）を出し百とりのつくゑものに貯へて奉りけるに口より吐れる物をもてわれに饗（タク）つへき事かはとて月夜見尊いかりおほしめしてやかて御劍をぬいてうちころしそのさまを（は）（ハ）つふさに申たまふ（闕字）天照太神甚いかりたまひて汝は惡神なり相見しとのたまひけるより（闕字）月夜見尊と一

口一夜へたてゝ住たまふとそけにおのか口より吐れる物をは　天つ神にたてまつりつる無禮のいたりなれはいきとほりてころしたまひしも理なる事なれとかの（闕字）保食神はその死して後も頂に牛馬顚上に粟眉上に蚕眼中に稗腹中に稻陰に麥をよひ大豆小豆なとなり出たりかはかり蒼生のとりくひて活へき物をもいたすへき神也ともおもひめくらしたまはて理によりて憤を散したまひしなれは無礼の罪をゆるしたまはさりしは理にはかなひて御爲は眞ならす此故に　天照太神御中をへてたまへるなり又同卷に（闕字）天照太神石窟にこもりたまひし時（闕字）天鈿女命たくみにわさをなしたまひけるをきこしめして磐戸をほそめにあけて御覧しけりその時　手力雄神　天照太神の御手をたまはりて引出したてまつりし事ありこれ　天照太神の御心つからいてさせたまはむやうにこそ心を用うへけれしひて引出し奉りしは礼にもそむき本意にもあらさるわさなれと葦原中國爲長夜をはふかくかなしめるよりの眞爲なれは　天照太神あはれみおほしめしてさる強爲をもとかめ給はすさなから世をなかくてらしおはしますなりこれ理なれとも眞ならねはこれを咎め理なけれと眞なれはこれをあはれみたまふ神の御心のしるしなり人おほよそ私をいやしみ公を先途とおもふものなれとことわりのうへにてはけにさもはへるへしもろこしにても孔子よにいましゝ時弟子ををしへたまひしは今の世の如く理をさきとして實況に切ならぬことはあらさりしとおほしき也論語に

父羊をぬすめるを子これを證すこれを直しとして葉公孔子にかたりたまひしに孔子こたへて我黨の身を直うするものはこれにことなり父は子のためにかくし子は父のためにかくすとのたまへるすなはち時宜をおもふ（シナ）へし眞をたつとひたまひけんことしるし眞の益實にかきりなき事也これ一身を脩するためのみならす國家ををさむるにもことに眞のたつとふへきことを辨へされは人心かならすそむく事あるへしおほよそ國にもあれ家にもあれみな父母のことくしたひまつろふはかりなら（く）されはまことによくをさむとはいひかたしもとよろつのわさ道理にしたかひてふるまへは人と人とのあはひめやすき事いふまてもなきことなれと道理のうへのふるまひのみしてありぬへき時こそあれ時宜によれは非義のふるまひもせてかなはぬ事かならすあるへしこれすゝしき夏あたゝかなる冬もあるか如ししかるをいと廉潔なるさかの人はさもあらん時もなほ公ならぬ爲はせしとしひてもつゝしむへけれと時宜に害なくはこそあらめしかる時はかならすその時宜にそむく事いてきて小事のためにかへりて大事をうしなふ事いてくへしされはつねに　神道にしたかひてもつはら身心を修し猶をさめかたくはやむことをえす哥に（の）なくさめそれなほなくさめかたくはまことに此事をえす爲にもいたしひとへに時宜をあやまたぬこと政をしる人の一大事にてこそ候へきまへにも返々申つることく欲情にまかするは詠哥のうへのみにしもあらす爲はことに悪行たるへし欲情のうへの

ことからなりともこなたにおもき時宜ありてそれをやふらしかための爲ならはたれかはこれを私なりとせむ私のことくにして人みな私とせさる事まつたく　神道哥道にすかしなくさめすかしなくさめもしかたさに是非なくふるまふ爲なれは也たとへは物多くつめる船の難風にあひておのか物ならぬ荷なれともおほかたに舟をわりしつめなとせしかために多く後に投いれ舟をかろむるよりからうしてのかるゝ事あり舟はてゝ後荷のぬしもその荷の半をもむなしくせられたれと猶これを憤ることなくかへりてその半たに恙なかりしをふかくよろこひかの舟人の爲をもあへて賞することあるか如しそのわさの(ナシ)時のために眞なる時はかく道理の外なるもの也此故に道理のうへの政はあしとにもあらねと害こ(と)そなけれ味はひなく無味の政は（無味とはわれも身心をつくさゞるに(た)よりて人また身心をつくしてうけあちはふ事なければ云々）民屈服して感服するにあらすこれすへての爲眞爲たるへき事を弁へすして表にのみまよふか故也つねに　神道哥道に身心をよする人ならは民またつねにそこに目をとゝめて爲みな眞爲なることを感ししるへし非義のわさせでありぬへく(し)はそれにまさる幸あるましきことなれとしひても私さまのことはせしとおもひお(を)きてたらんにいかにつゝしみいかに操(ミサホ)つくらむとすれともとてもかくてもせてかなはぬ時宜あらはいかゝはせんいく萬(ヨロス(ツ))ともしられぬ人なるをのこらす心をひとつにせむとするはいとわりなきことなりされは時宜もまた〳〵さま〳〵になり來るへき事勿論なるをたゝおほやけ

さまにのみ政をなさむとするはいとかたくなしきことならすやしかのみならすわれも民もかたみにひゝらきあひてうるはしき事つひになかるへしそれしからは國家をさまらすとならはその政を●(と)しれる人なくならん時かならす國家みた●(だ)るへしかく眞のかはかりたつとふへきことは弁へされともおのつからおほえす眞爲なるもうちましれはこそあれたゝ片かとも眞なる事なく●(り)道理のうへにてのみふるまはゝつひにはみたれをとりいつへきつまなるへし眞なる人上にあれは罪するをもよろこひ不眞なる人なれは賞すれともよろこひさるものなりされは道理によりて私を制する人と神道哥道に私を制する人とはその下にをる民の心いかはかりかはたかふへき道理をもて下にのそむに服せすといふ事はなけれと民もまたことわりをもて上にむかふへし眞をもて下にのそむはいとおほつかなきやうなれと民もまた赤心をもて上にむかふへし眞をしれる人の下にをれはたのしみ道理をたつとふ人の下にをれはつねにうしろめたきことこれ民の心のつねなりたとへは神につかふると人につかふるとのことし眞をおもふと眞をおもはさるとはかはかりのけちめある事なり一己の身たに眞をかたはらにして歪からすいはむや政をしる人をやわか國むかしより眞をたつとふ事は〽まくはし〽まつふさ〽ま玉手〽まかぢ〽まわかの浦また通ひて〽みよし野〽みくま野〽み山なと事にも物にも所にもそのよしともあしともいふへからぬにしかたとへられたるをみるへし（萬葉集中にまでといふ假名に左右とかゝ）

れたるは兩手といふ心はえにて左右にもあれ公私にもあれ善惡にもあれのこる所なく具足せるをは眞といふ事これに明らかなり

○五級の辨

父成章歌となりいつるすちをあきらめて五のしなをさたむ五級のことは詠哥のしなにして眞を弁するつひてにはふさはしからぬことのやうなれと一の級はすなはち眞のことわりをそなへたるものなれは眞といふごとのよく心えられむか爲にこゝにはいふなり五級とはいはゆる〽一の上中下〽二の上中下〽三の上中下〽四の上中下〽五これなり五に上中下なきはわくるに及はぬ級なれは也畢竟上中下をたつる事哥よみならはむ人のくはしく心えられんかためはかりにてそのしな〳〵の正當たるはもと上なり中下はその級にしてたらはぬ所あるをさとすなり所詮中下は上によみいたらさりし也としるへしこれは貫之か六くさにもあらす忠峯の十体にもあらす心詞のさかを見とりてたてたるしななり元來此五級は平生哥よみならふ時の專用にて時宜によりて心をなくさむへき期にのそみてはいかなる級になり出むもはかりかたき事也されはむかしより一の級にかきらす二のしななるも三の級なるも感動の幸ありし例も見ゆる事に候すなはちかの〽風ふけは沖つしら浪とよめるは一のしなにして男こと心やみ貫之か〽ありとほしをはとよまれたるは二の級にしてうまのあしたち能因か〽なはしろ水にせきくたせとなけかれしは三のしなにしてふらさりし雨ふれりしからは五級は無益のつとめかとおもふに哥もと公身私心のやふりかたく捨かたきよりいつる物なれは詞のうへもまた公にもあらす私にもあらぬか眞の姿なりされは一の級は感動の幸

あるへき正面のすかたなれは平生一のしなをのみねかひてよみならへはおのつから所欲のためによむ事いやしまれて眞にすゝむ道ひらけ申すへきにて候さらはまた一の級ならては幸あるましきやうなれと上に申すことくかならすしもさならすたとへは武術をならふにかたといふものありてこれ(されハ)によりてをしふそのかたといふ物もとその祖の妙手たりしか(マヽ)心勝の理をきはめてさため置たる手なれは全くこれに熟せはかたすといふ事あるましき事なれと形にのみ縛せらるれはかならす敗をとるへししからは形無益なりといはむに平生これによらされは勝へき道もしられさるか如しそのかたに習熟せる人はたゝかひにのそみて變に應して眞の手いて不思議の勝もえ(し)らるへきに同しくつねに一の級に熟する時は機にのそみての二三も猶眞物となるへしされは一の級といへともいたくねかひてよめはたゝすかたこそ眞なれ實に眞物にはあらすかつ一のしなに縛せらるゝ時は時にのそみてよむにもしひて一の級になさむとするより一のしななから眞物ともいひかたき事なり身心活(イキ)さるは一の級なりとも貴ふへきにあらす身心活たらんには二三もいやしむへきにもあらすしかはあれともと一の級の眞のことわりをそなへたる事まことにいけるか如しつねに此級をのみねかはゝ眞をたつとふ志かたくなりぬへく候この五級のことわりいひつくすへからねは今そのかたはしを弁すへしまづ哥の表公にもあらす私にもあらす公身私心の間にありて我と(を)てやむ事をえさらしむる

實況（況）のもの事のうへをはすくよかにいひくたして時やふりかたく所思をさめかたきさま言外に活動せるこれを一の級とす表たくみにいと口さとく（し）めさましきまてかさりなせるにひかれて公身私心のかたみにせむすへなきさまはかへりて深くかくれてなきか如くなるをは二の級とすたゝ物事の動止ふと心にうつる所をはためらひなくいとをさなけにいひ出て公身私心のやむことなききはは弁へさるかことくなるこれを三の級とす四の級はおもふはかりのことの詞にもとほらぬを云五はふる哥をはあるひは本句或は末句なとさなから犯したるを云此しな〳〵よみなせはなにの級にもよもるゝ（マゝ）物なれとおほかた人の生質なにとなく一のしなゝる人からもありまた二の級なるも三のしななるもまたは四五のしななるもありてその人の質によりてかた哥も五級にわかれいつるなりはしめに申つることく一の級にしもかきらす二三のしなにても幸あることは此質よりいつる所なれはなりかく人さまさへしなわかれて見ゆる物なれはかへす〳〵一の級のみつねにねかはゝおのつから人さまにたちまさりゆくへきわさなり世に古歌をも論し今の哥をも制するによしあしをいふはおほくはおのかこのむ所このまぬ所によるいとおほやけならぬ事なり父成章はつねに此級によりてそのしな〳〵をわき哥のしなをまさらせんとおもふのみならすおのれ〳〵か生質をもかへり見よとて成元にもをしへおかれるつる也これによりて弁すれはおのかこのむ所にもほたさるゝ事なくいとおほやけ

に歌のしなは見ゆへしみつからこのむ所にしたかふ時はよしといふもまことにやよからむあしとさたむるもまことにやあしからんいとおほつかなきことなり此五級はさるわたくしわさにはあらすそのしなをたてたるやう人の生質にもとつきたるなれは生質をもてしなを論せは一の一たることはおのつから心えしらるへしかし

○表裏境の弁

詞に表裏境といふものありこれは詞を治ふの専用にて眞を論するにはようなきことなれとおもてにのみ目をも心をもとゝむる人は眞をしる事あたはさるか故に今こゝにこれを弁する也もと此表裏境詞といふ詞にはおのつからそなはれることにてしらすよみによむとも猶かくる事なきものなれはこと更にこれを論しをしふるにもをよはさる事のやうなれと詞をきたふにその益かきりなきものにてわか智のをよはぬ所さへ此みつに導かれて心えらるゝ事あるものにて候されは古哥をとくにもその眞にいたる事やすくおのか哥よむにも用なきをはふきたらぬを補ふわさこれにしく道あるましく候此みつおのつから詞にそなはれりといふはたとへはかなしといふ表なるにかなしからすといふ裏をかけて見れはなくさむへきよしのあらまほしき境しらるゝかことしすへてひと詞にてもかゝり哥一首にてもなほしかりおほよそ表となるは時をなて(けく)情裏となるはひとへ心の理境となるは偏心

の達せぬ憤なりかく裏をかけて境をしれはその歌ぬしの時宜のために所欲をなくさめまことにやむことをえさるよりいてたる眞言なる事かゝみにかくるよりも猶明らかなるへしされは此表裏境まなひしらすはあるへからすしかれとも前にいふ如くもとよりそなはるへき理なる物なれは哥よまんにこれにほたさるゝ時はかへりて眞をうしなふへし此故に詞はたゝなり出むにまかすへき也されとまたあまりなり出るにまかすれはようなき所たらぬ所いてくへけ(シナ)れはこれまた心あるへき事なり裏境の力はひとり詞のうへのみならすよろすの事にもわたりてその事をつくさむにいさをしあるへしかの　少彦名命の大己貴命にこたへ給ひし御言も成にのみ御心をとゝめたまひて不成には御心いたらさりしをいさめて成不成をもてさとし給ひしものなりこれをもても表裏境のはかなきわさならぬ事しるへし表にのみ目をも心をもとゝむへからさる事すなはちかの　神の御心なれは今わたくしにいふことにはあらすされは此御をしへにしたかひて返〳〵表にのみかゝはるましき事に候しかりとて表をすてよとにはあらす此みつはたかひに具しあひたるものなれはいつれを重くいつれを輕しとも申かたしたゝ後の世の人の表にのみもはらなるさがをはいさめまほしさにかくはいふなり世に古哥の餘情をとくにその一首のおほかたのさまを見とりていふなれはけにとおほゆるもありわりなしと見ゆるもありこの表裏境のちからをかりておもひいるゝ時はわたくしのたはかりにあらすして

實にそのぬしの靈（タマシヒ）にあふこゝちすへし五級にいへるかことくこれまたわたくしに餘情をとく事いとおほつかなきわさならすや

○感の辨

感通感動まつたく言靈の妙用なれは感通をねかはむとならはひとへに言靈あらんことをねかふへしされは言靈はねかふへく感通はねかふへからす感通ねかふへからすといふは時宜をたつとふ心うすくなるへきか故也時宜をたつとふ志うすけれは所欲を達せんの心主となりて歌私におつへし哥眞ならされはかへりて（闕字）神人のいきとほりをひくわさとはなりぬへき事也たゝいはまほしくせまほしきを爲にいたすへからぬ理は弁へたれとなほ時宜にかなへかたきやむことなきに哥とうたはゝその言に靈あらすといふ事なかるへしこれ言靈をねかふの道なり言に靈あらは感通あらすといふ事なかるへし感通はかならす道ある事にてもとむとてもとめ得つへきことにあらす人のこゝろのをよふ所はたゝ言靈あらんことをねかふをかきりとすへし（す）言靈あらんとするはひとへに爲にいてしとするにありこれすなはち感通の道をひらくわさにして感通をもとむるにはあらすされとも感通得かたしとせは時宜に挑る事かたかるへしさりとて又感通得へしとせは前にいふかことく時宜をたつとふ志おろかになりぬへしやすきかと思へはかたくかたきかと思へはやすき事これ感通の本然なり所詮

感通のかたきは身の所置おろかなる所あれは也かたからぬは身の所置ねもころなれは也たとへは梅干といふものを人のくふを見れは我口たちまち酸氣生すこれ感通のちかきためし也さるはその人不言にして酸氣を堪つゝくふ故に見る人これに感するにて元來人に酸からせんとてくふにはあらぬをおもふへしかへす〳〵感通は堪へからぬ時宜を全うするに得へき事必せることなれはおほつかなきものゝいとたのもしきことならすや大和物語にいはゆるやまとの國なる女の〽かせふけは沖つしら浪たつた山よはにや君かひとりこゆらむとよめるはあまり嫉をおさへたることのねもころさに男かへりてこと男やあるとうたかひつるはかりの人さまをはさる事にて女の身としてわか夫のこと女にかよはむにたれかは不平におよ(も)はさらんされはすてにうらみむとせし折ふしも多かりつらんをさはかり心ふかき女なれはもしうらみはわか憤こそ散すへけれ男うとましくおもひはてゝつひにかへりすむこともあるへからす猶かくてあらはこと女もたるこそねたましけれさすかに我をもあはれとやおもはむと思ひ念しつゝのみありけらししかるに其夜は夜中といひさはかり山越する道のしかもたゝ一人なる心ほそさをもいとはぬ志のふかさにしかるへからぬことはりはよく弁へなから猶今はうらみもえしのひさるへくおほゆるよりやむことをえす此哥になくさめて時宜を全うしたるにこそ此哥よみてもかなまりに水をいれてむねをひやしたりしと見ゆれは全く嫉情なくさみたるとには

あらねとさすかにその夜の嫉妬のいきほひくしけたりしにそあるへきかくの如く時宜をたつとひたりし心やかて言靈となりつるか故にかの試むとてかくれゐたりし男きかせむともおもはぬをおもひかけす聞てふかく感したりしより河内にはたえてかよはすなりぬとそこれもと男の河内にかよふをとゝ(シナ)めむとてよめるにあらす男のかくれゐ(ぬ)る事をしりてあらはこそあらめひとへに男は河内へゆきつとおもひつめてたゝひとり言にさはしもなけかれたる事しるしこれをもて感通はもとむる事にあらぬを知へしたゝうらむへからぬ時宜を全うしたるか故にその歎自然と感通したるなれはひとへに愛のために畏をわすれす畏の爲に愛をおもひて身を時宜にをくへき事也いにしへより歌に感動ありし例ひくにいとまあらす哥もと爲にかふるものにしあれは哥には感動ある事は必せること也實にやむことをえすしての眞爲(マワザ)はこれまた感動哥にひとしかるへき事なれと歌にくらふれは爲のうへの感動はひときはかたきわさなり此ゆゑに神道にしたかひてつねに爲にいて(で)大じとすること第一にて歌道によりてなくさめ哥をわさにかふる事第二なりねかふへきにはあらねとこれみな感をいたりとするかゆゑのをしへなれはかつくるしみかつたのしむことわか國の道のとほしろさなりかしなほ〳〵おひ〳〵御たつねあらはこたへ申すへきにて候あなかしこ

月日　　藤原成元

貞言辨下卷終

富士谷御杖翁稿本

北邊髓腦

完本

北邊隨腦 上篇

歌道

「詠歌はもと時宜はやふるへからすひたふる心はおさふへからぬ時ふたつなから全ふする道なりかゝる廣大の道なるをいつの世よりか月花のもてあそひくさとして一坐の興をやり人の耳目を襲ふ種となりはてけむ事なけくにも猶餘りあり伊勢物語に〽むかし男有けり歌はよまさりけれと世中をおもひしりたりけりとかゝれたるをみれはその頃はなほ歌をよむは世中の道理をおもひしる爲なりしにそ有けらし」抑この道をは速にこゝろえむには萬葉集第十三卷柿本神詠に〽葦原水穗國者神在隨事（言ノ假名）擧不爲國　雖然辭擧叙吾爲言幸眞福座跡恙無福座者荒礒浪有毛見登百重波千重波尓敷言擧爲吾とみえ猶この　神詠の前にも〽蜻嶋倭之國者神柄跡言擧不爲國雖然吾者事上爲天地之神毛甚吾念心不知哉下器ともあるをよく〳〵思ふへし「歌はまづよむましきことわりをしれはよまてかなはぬことわり明らかにしらるへき也」すなはちこの　神詠にあるかことくまづ　神道によりてひとへ心をおさむれは萬事言に出さねとも事よく弁すへき道理をしるをこれを「よむましき理をしることはいふ

なりされとも心ひたふるなる時は不言にして萬事を　神にまかせたてまつりはつることかたき物なり（これ　神詠に雖然とある心なり）この故に歌をよみて一向心をなくさめ處しかたき時宜にしたかふへきことをしるを「これをよむへき道をしるとはいふなり」おほよそ人所思所欲のまゝを言行に出す時は（（熟）我熟のならひにて此言行をつかねて爲とはかりもいひならへりすへて所思所欲を爲にいたすは下の　神道の弁にいふかことくかならす禍をまねく門なれは一旦愉快なるもやかて百倍の數となるへきなりこの故に　神道歌道ともに所思所欲を　制すへき道にしてすなはち爲を眞爲になさむか爲にをしへなりさて此所思所欲に公私あり公私ともに爲にいたす時はみなしかり又爲に四のすちあり　空爲　私爲　公爲　眞爲　これなり空爲はさるかうのたくひを云私爲は所欲のまゝにたすをいふ公爲は理によりてたすをいふ眞爲はひたふる心をおさへて公私によらぬをいふ空爲は可もなく不可もなし私爲はまことにさかなわざなり公爲は理はあれとしひたる所あるか故に人感服することなし眞爲は神道歌道に心をねりて時宜にしたかひたるなれは　神人これをあはれますといふ事あるましきなりされは眞爲のきは、私なるやうなるも私爲のたくひにあらす公なるやうなるも公爲のたくひにあらすよく〱おもひわくへき事也）かならす時のよろしきにたかふものなり此故に所思所欲のまゝを爲にいてじか爲に　神御をしへをのこさせ給へり「されはつねに人々　神道をまなひてその源たるひとへ心を制すへきなりこれ哥道の基なり」（ひとへ心といふ名は源氏物語に〜をさなきほとの御ひとへ心にかゝりてとあるによれり一向心とは同物語に〜ぬす人なとやうのひたふる心なるものとあるによれり　眞心といふ名此末にもいへり　此名も萬葉にみえたるによりて也これをみつの心と我熟（熟）にていひつけたりさて此偏心に二筋あり非とはみつから弁へなから制しかねたると非とも弁へさると也これをつかねて偏心とはいふ也この非といふに又二ツあり公と私となりおほよそ偏心となるやうを思ふに　直不直いつれとなく理あるより惑とはなるもの也　いかはかりいふかひなき人とても理なき事にはまとはぬ也　さるは皆私に理を設る歟　或は公理に泥する歟まことの公理歟すへて理をたのむ所より惑ひて心ひとへにはなる事也邪正となく片方に心をゆたねてうちたのめは偏心となるか故に　不直もうちたのまされは偏心となる事なし直といへとうちたのめはひとへ心となる也　されは直不直によらすたゝ一筋にうちたのむ所あるをはひとへ心とはいふ也と知るへししかるをなま心得なる人はひとへに不直をすてゝ直をとる事げにさる事にて直く身心をたてむにまさる事あるましき事なから偏心なるときは時宜に害ある事ある物也　不直のうへにたにすこし理をふくめる事にはうちたのむ心つきやすきを　まして直なる事のうへにてはうちたのむ心ある事つねなれは不直よりもおそるへきは直なりされはとて　直をすてゝ不直をとれといふにはあらす　直不直にかきらす邪正善惡ともにうちたのむ心をつゝしむへき事　神の御をしへの眼目なりこれをいかにといふに　時宜といふものもと片よりなるも

のにあらすたとへははめてよろしき時ありそしりて宜しき時ありつゝしみてよろしき時ありみたれて宜しき時ありこれ時宜のつねなるをはむるをよしとたのまはそしるへき時にかなはすつゝしむをよしとたのまはみたるへき時にかなはさるへし古今集中に〽まめなれとなにそはよけくかる萱のみたれてあれとあしけくもなしとよめるこれ篤實をよしとたのみし人の乱行も時宜あるをなけきたる歌なり所詮直不直善惡邪正ともにたゝむかひたるわさのみにして世の中の人のわさと心うへしされは直善正はたつとみてたのむへからす不直惡邪はいやしみていむへからすたゝなに事も眞僞を先途とおもふへき事也一向心とは畢竟かのひとへ心のおさふるに激して一段いきはひつよくなりたるを云されは　神道にてをさめらるゝはかりの心をは偏心とし　神道にもまつろはさる勢なるをは一向心といふ也ひとへに恐るへきはこのひたふるこゝろなりかし もと　神道は畏愛をもておさへすかす道なれはおほかたの偏心はうちゆすらはれて爲(ワザ)眞爲(マワザ)となりぬへき事也しかれとも猶そのひとへ心執着ふかくしておさふるに激しすかすにたのしますつひにひたふる心となれるはほと〳〵(殆)爲(ワザ)にいでゝ時宜をやぶりつへきもの也しかるに歌道ある事をしらぬ人は一向心は實にせむすへなきものゝやうにもおもふへけれとかくひたふるなる心もなくさみ爲(ワザ)にもいたさでやみぬへくなすものは哥なり「哥道をもて一向心を慰め爲を時宜にしたがふる時はその爲(ワザ)直不直となくみな直(マヽ)爲となり出べし」おほよそ爲(ワザ)眞爲ならねば　神人感し和する事をうる事なきものなれは人として歌よまさらむは心からわさを不眞になすかことしとそおほゆる也或人予にとへらく　神道によりて心を制せむにいかてか心ひたふるには成なむ一向心たになくは哥道も無益なるわさにはあらすやと成元答へてけにさる理にはあれとも畢といふきはにたに猶歌はよみ給へり理のうへにてこそさはたれも〳〵すくよかにおもへしらす〳〵執着せらるゝ筋のたえてなからむことおそらくは人としてあるましき事也 萬葉集に〽ますらをとおもへるわれや何すとかひとり一夜もはなれゐてなけきこふらむ 上下略 また〽ますらをと

思へるわれも草まくらたひにしあれはおもひやるたつきをしらに 上下略 なとおほくよまれたるかことくことわりによれはたれもかくすくよかにおもふもの也これ偏心の制すへき所謂なり　理のうへにておもふ心をしはしとりおきておのか心のうちをみつからかへりみは歌道なくてはわひしかるへき事敎をまたすしてしらるへし疑の生するは心術の修行たらさるか故なりとはいひき歌もと爲をととめ心をなくさめて時を全うせむか爲の道なるを所思を達せむかためによめる歌むかしよりたに猶みゆかし　後世に成ては題詠さかりになりて身にもかゝはらす心にもさのみ思はれぬことをしひてかたふきいでゝそれか巧拙をあらそふわさとは成にたり所思を達せむかためによむは非道の事なれとかたふきいつるたくひは論の外なり題詠はたゝ哥よみならふためはかりなりと亡父成章も申き

されとそれ然るへからすとむかし人も思はれけむことしるきは伊勢物語に〽むかし男女いとかしこくおもひかはしてこと心なかりけりさるをいかなることの有けむいさゝかなる事につけて世中をうしと思ひて出ていなむと思ひてかゝる歌をなむよみてものにかきつけける〽いでていなは心かるしといひやせむよの有さまを人はしらねはとよみおきて出ていにけり云々この女此哥にて恨をなくさめたるならは家出は思ひとまるへきを猶家出しけるは全く人口を防かむかために此哥はよめる事しるしすなはちおのか恨に身を任せて時宜をやふりたるなれは記者これをいやしみて記せられけむ事猶その下文をみてもおもひしるへし古今集序に〽歌をいひてそなくさめける又〽哥にのみそ心をなくさめけると返々かゝれたるけに此道の本意一言につくされたりといふへし世に物むつかりする人その憤を發する時は時宜かならすしかるへからすとは思ひしれとなほ欝情おさへかたき時なにゝ

もあれ物ひとつなけうち破却なとすれは忽その欝結とけてむつかりなくさみて時を全うせらるゝ事ありこれ其欝情のかたちの破却せしものにみゆるか故にむつかりもなくさむ也「歌すなはちこれにひとしく時をやふりなむとする一向心のかたちを歌にみる時は欝結せる勢くじけて時宜をも全うせらるへきものなり」されは「神道は畏愛をもて偏心ををさめて時宜にたかふなとの教哥道は一向心をなくさめて時宜をやぶるなとのをしへにて此ふたつの道人の身心においてその思いかはかりそや」又世に辞世とて今はのきはに歌よむことありその哥よむこゝち此道の本意をみるにたれりおほかた人の身にわひしくかなしきことゝも多かる中に死ぬるはかり悲しきことはなしされは死は決断すへくなからへまほしさはやるかたなさにせめて哥にはなくさむるなり なからへまほしきひたふる心をはうたに托して死をいさきよくしたらむ 人はその意實に神とあふくにたれり佛者はこれを成佛と云佛教のうへにて臨終正念をたつとふ事この辞世の哥をよむ心にひとしきものなり 在五中將は死に臨みて〽つひにゆく道とはかねて聞しかときのふけふとは思はさりしをとよみ給ひ紀貫之は〽手にむすふ水にやとれる月かけのあるかなきかの世にこそ有けれとよまれたるもみな命數はせむかたなしといへともなからへまほしさのやるかたなきせめてのわさなりかゝるほいなる道なるを所欲のために哥よむ事　神人いやしみにくむもうへならすやされは歌いかはかり巧なりとも此道の詮いかてかあらむ 詞をたくみにすれは不實も實のことく邪も正なるかことくみゆるものなれはかくはいふ也 伊勢物語に〽むさしなる女にあひて後男京にかへらむとする時くりはらのあねはの

松の人ならは都のつとにいさといはましをとよまれたるもと此女歌さへ鄙びたりと前にかゝれたるはかり心にもつかぬ女なるをかくみやこのつとになとよまれむやうなしされはこれ全くいつわり歌にて心あさからすと女にみえむとてよみ給へるなりさてこそ記者も此哥の左に〽といへりけれはよろこぼひておもひけらしとそいひをりけるとかゝれたり女はいつはられはて男はいつわりおほせて所思は達せるかことくなれとたれかは女をいとをしと思はさらむ男のにくき事われたにつまはぢきしつへし哥の道にそむきたるは神人ふかくいやしみにくむへき事これをもてもしるへきや「感通感動はまつたく言靈の妙用なれは感通をねかはむとならはひとへに言靈あらむことをねかふへし「言靈」とは言のうちにこもりて活用の妙をもちたる物をいふなり萬葉集第十三卷　柿本神詠に〽志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在與曾とあるをおもふに言に靈ある時はその靈おのつからわか所思をたすけて　神人に通し不思議の幸をもうへき事わか國詠歌の詮たる所なり古今集序に〽ちからをもいれすしてあめつちをうこかし云々とかゝれたるはすなはち此言靈の妙用人の力のをよひにあらぬよしをのへられたるなり「さてその靈となるはいかなるものそといふに所欲はいとめかたく時宜はやゝふりかたくてせめて哥によみてひたふる心をなくさめたる心これなりさる心の言にとゝまれるなれは妙用あらむこと疑なき事也されは所欲を達せむかためによむ哥は同日の論にあらすその靈の言にあるとなきとは歌よむ志の時宜を全うせむか爲なると所欲を達せむか爲なるとのけちめなりすへて物ふたつうちあふはづみにおのつからなり出るものはかならす活て不測の妙用をたすもの也たとへは燧といふもの石とかねとをうちあはするはづみに火おのづからいづしかりとて石してもものはやけすかねしても物はやけす又酒といふものもとよねと水とをうちまじへたるはづみより氣生すしかりとてよねをかみても醉ふ事なし水をのみてもゑふ事なきか如しこの故に歌も公身にして私心なるかうちあふはづみに靈は出來て言語の道たえたる所を感通せしむる妙用はもたるへきなりこれひとへに所欲によりて時宜をやふる事はせじとする心よりなり出るものにし有れは所欲にまかせて爲にふるまはむことゆめ〳〵あるましき事也　「されは言靈はねかふへく感通はねかふへからす感通ねかふへからすといふは時宜をたつとぶ志うすくなるへきか故なり「時宜を貴ふ志うすけれは所欲

を達せむの志主と成て歌必私におつへしたゝいはまほしさをもせまほしさをも爲(ワザ)にはいたすへからす時宜にはしたかひ難さに哥とうたはゝその言に靈あらすといふ事なかるへし」これ言靈をねかふ道なり言に道あらは感通あらすといふ事なかるへし感通は必道ある事にてもとむとてもとめ得つへきにあらす人のこゝろのをよぶ所はたゝ言靈あらむことをねかふをかきりとすへし言靈あらむとするはひとへに爲(ワザ)にいでじとするにあり卽感通の道を開くわさにして感通をもとむるにはあらぬそかしゝかれとも感通得かたしとひたふるに思はゝ時宜の堪かたかるへしさりとて又感通得へしと思はゝ前にいふかことく時宜をたつとふ志おろかに成ぬへしやすきかと思へはかたくかたきかと思へはやすき事これ感通の本然たり所詮感通のかたきは身心の所置おろかなる所あれば也かたからぬは身心の所置ねもころなれはなりたとへは梅干といふものを人のくふをみるに我口たちまち酸氣生すこれ感通のちかきためし也さるはその人酸氣にたへて不言なる所の感通するなれはかへす／＼感通はいかにも堪かたき時宜を全うするに得へき事必せる物なりまことにいとおほつかなきことのことくにしてまたいとたのもしき事にはあらすや大和物語にいはゆるやまとの國なる女のへかせふけは澳つしら浪たつた山よはにや君かひとりこゆらむとよめるはあまり嫉妬をつゝしめる事のねもころさに男かへりてこと男やあるとうたかひつるはかりの人さまをはさる事にて女の身としてわか夫の

こと女にかよはむにたれかは不平におもはさらむされはすでにうらみむとせし折節も多かりつらむをさはかり心ふかき女なれはもしうらみはわか憤こそ發すへけれ男うとましくおもひはてゝつひにかへりすむこともあるましと思ひ念しつゝのみありけらししかるに其夜は夜中といひ山越する道をしかもたゝ一人こえゆく志のねもころさに非義とはわきまへなから猶今は恨も忍はむかたなうおほゆるより此歌になくさめて時宜を全うしたるにこそされと此歌よみても猶かなまりに水をいれて胸を冷したりて（と）みゆれは全く嫉情なくさみたるとにはあらねとさすかに其夜の嫉妬のいきほひくしけてまのあたり憤をいはむと思ひし心うちなくさみたりしにそ有へきかくのことく時宜をたつとひたりし心やかて言靈となりつるか故にかの試みむとてかくれゐたりし男きかせむとも思はぬ歌をは思ひかけす聞てふかく感したりしより河内にはたえてかよはす成にし也これもと男の河内かよひをとゝめむとてよめるにあらす男のかくれゐたるをしりてあらはこそあらめひとへに河内へゆきつと思ひつめてたゝひとりことになけかれたるなれは感通はもとむるに得へからぬことわりこれをもても思ひ得つへしされはひとへに愛のために畏をわすれす畏のために愛を思ひて身を時宜にのみおかむとつとむへき事也かしいにしへより歌に感動ありし例ことことくいふにいとまあらねと今ひとつふたつをいはゝ袋草子云紀貫之紀伊より上洛の時　蟻通の神祟らせたまひてにはかに馬ふしたりし時

へかきくもりあやめもしらぬおほ空にありとほしをはおもふへきかはとなけかれけれは馬の足やかてたちてつねよりもあしとくなりきとそ此歌わか心からの不義にはあらぬものをと思ふ一向心をなくさめ　神慮はしのき奉るましき時を全うせられたるか故に　神ふかくあはれみ給しもの也又同し草子に能因法師ひてりにあひて伊豫の國にてへあまの川苗代水にせきくたせ國まもります神ならは神となけかれけれは三日三夜まて雨ふりきとそこの哥民の渇死すへきをもかへりみ給はぬがうらめしき一向心をなくさめ　神慮は凡慮にはかるましき時を全うせられたるか故に　三嶋明神ふかくあはれみ給ひしものなりすへて心はひたふるなから時宜をおもむしてよむ歌は　神ふかくあはれみ給ふ事かくのことしある人予にとへらく此二首さる理もあるへけれと哥の表はたゝ所思のまゝを神に申されたりとみゆしかる時はたゞ私心のまゝの歌なるを　神さる私に幸したまはむやうなしいかゝ成元答ていはく歌の表にいてたる所は此二首にかきらすみな私情のまゝをいふかつねにてめつらしからぬ事也されは表につきていへはさる事なれと歌はすへて哥ぬしの身を祭してうたと思ひくらふる所に道は存するものなり言私にて身公なること歌道の本然なり公身私心のかたみにやむことをえさるさまをおもひ入るれは人たにあはれとはおほゆるをまして　神のいかゝは感し給はさらむとは申きかへすく\外よりは時身をせめ内よりはひたふる心身をせむるに歌ならてなにかはこれを

全うせむ時をやふりやふらぬは卽身をあやまりあやまらぬのさかひなれはいとも〳〵危きことそかしその危きをすくふはすなはち此道のいさをしなるに其心得うしなはれたるは世かはり時うつりて人のこゝろ次第に輕薄になり時宜を全うすれは　神人に感通すへきことわりをは迂遠の事とおもひ眼前の利をむさほりてかへりてその害ちかきをしらすなりぬるか故なりすてに古今集の序にもいへ今のよの中色につき人のこゝろはなになりにけるより云々とかゝれたるは卽これを歎かれたる也後世の哥はすへてわか欝情を利せむか爲はかりによむことゝなりにたれはそのならひにほたされて古人の眞言をもみあやまり我かよむ哥も眞をそむきおほかた此道の意趣をはうしなふましきこと也（時宜にかなへるは身公なり哥にうたへは心私なり身公にして心私なるをくはしく思はゝ外やぶりかたく内おさへかたき事其間にある事しるかるへしされは公かとみれは心私なり私かと見れは身公なりこの故に不測の感をひく也たとへは酒をこのむ人の過酒する人をいさめこゝろにくき人の不實なる人をうらむるはふかく心にしみて感服せらるゝかことし眞の妙用なほ言をもて述かたし）歌といふものなくはおさふへからぬ欝情なにゝかなくさまむやふりかたき時宜なにゝか全うせられむ欝情なくさますは人みな時宜をあやまつへし此故に歌道の德人の身心においてかきりなきものなりとはいふなりかへす〳〵公身私心のともにやむことをえぬことわりくはしく心えてわするへからす表にのみ目をとゝむれはやかて此道の本意にたかふへし上にもいふかことく歌おほよそおのか貪欲のすちをのみすゝろにいひ出たるものなるか故に眞言たるへき道つひにうしなはれたるなりそれはその詞を見その心を思ひてその歌ぬしの身におもひ

いれされはなり下の五級にいふか如く一の級は眞の當然たりといへとも實況にのそみて自然の姿となりいつるには所欲のすちの詞にかくれたるもあらはれたるもかはる事なくたゝ私心は公身をやふらむとし公身は私心をおさへむとするに公身はやふりかたく私心はおさへかたくてせめてうたふなれはかくれたるをしも哀ともいひかたくあらはれたるをしもいやしともいひかたし表の公私にはよらす歌とうたへは私心はせめてなくさみ身はからうして公に所置せらるゝ事歌のいさをしにしあれは歌の表にのみ目をとゝめて其歌ぬしの身にみいるゝ事なけれは此道の規矩準繩すへてたかひゆきてたゝいたつらなるもてなやみくさに落つへき也眞をたに準繩とせはほむるもそしるもたゝ歌の表にして言外にはやぶりかねたる時宜おのつからみえていとせちにあはれなるより理外の幸をもえつへし世人歌の表にまとへるか中にも戀の哥は歌人もひそかにこれをうたかひ哥よまぬ人は此道のそしりぐさとすけに歌のよみさますへて所欲のためなりと心えたる心よりおもはゝうたかはしきもことわりなり好色はことに慾甚しき物なれは後世のみならすむかし人も時宜の爲には欺かすして所欲を達せむの心にてよめる戀のうたもみゆ中昔のはしめさるさがなき戀の歌さかりに成けらし古今集の序にへ今のよの中色につき人の心はなになりにけるよりあたなる歌はかなき言のみいてくれは色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝなりてまめなる所にははなすゝきほにいたすへき事にもあ

らすなりにたりと貫之もなけかれきしかれともこれは戀の哥道ならすといはれたるにはあらす人情輕薄になりて時宜のためによむへき道を思はす所欲のための詠歌となれるをはふかくなけかれたるなり歌はたゝ眞ならむからには戀のうたも何の哥もかはる事あるましき也眞ならすはひとり戀の哥のみ道にそむかむやはひとへ心ならむには好色ならぬ歌とて道ありといはむやはされと人の惑ふ所においてはおほかたの所欲の中に好色はかりまとはるゝ物なきか故に古今集中にも戀の部はことに歌の數おほくなほ他の部のうちにも戀の歌あまたましれりこれをもて貫之の本意をみあやまるへからす貫之髄腦の自序に（此書ふるき印本世にみゆれと僞書なりといひつたへたりこれは古今集　勅撰の後また貫之一人に精撰の勅ありつるにて哥の數すへて三百六十首なりしかるに此書ゑらひはてられし時　帝崩したまひなほこの勅をつたへられつる兼輔の中納言さへうせられけれはせむかたなくてむなしくさしおかれけるよし此自序にみえたりかく奏覽をへさりしものなれは公ならぬか故にうたかひて僞書なりといふ歟またはなほまことに僞書かいつれにもあれ歌のゑらひさまかつ春夏秋冬戀雜なと配しあはせて出されたるやうもいと物々しうみえならひに自序の歌道をとかれたる心ばえ此道心えむにたよりある所々ありされは眞僞の論をはしはらくとりおきて今これを用うる也たとひ此書貫之ならすともその論正しからむにいかゝは捨へからむ）〽非唯春霞秋月潤艶流於言泉花色鳥聲鮮浮藻於詞露皆是以動天地感神祇厚人倫成孝敬上以風化下下以風刺上雖假誠文於綺靡之下然復取義於教誡之中者也とかゝれたるはひとへに眞をたつとひたる論なり表にかゝはりて論せはつひに眞のさかひにいたる事をうへからす歌をとくにも古人のたましひいかゝはみゆへからむ所詮眞ならすはよむもよまさるに劣りぬへし哥もと　神道にておさへもすかしもせらるへき所欲ならは無用にしてまことにのとめ

かたき所欲に用ありそののとめかたき所欲の中にも好色はかり心ひたふるなるものなけれは好色のうへの時宜はことに全うしかたき物なりされは戀の歌はむかしよりすくれて多きことわりにてうたかふへき事にはあらてかへりて此道の本然みつへきことなるをやむかし在五中將二条の后たゝ人にておはしけるにしのひてかよひ給ひける時たひかさなりけれはあるしその通路に夜ことに人をすゑてまもらせられけれはいけともえあはてかへり來て〽人しれぬわかかよひちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝむとなけきたまひしにあるしの后ゆるしたまひつと伊勢物語にみゆもと五條の后の御目をかすめてかよひ給ひしなれはまもらるゝもことわりなれはその關はやふりかたくされはとてさしも思ひ入つる志をは今はとておもひ絶なむわひしさはなくさめかたさにせめて歌とうたひてそのしひてもあはまほしき一向心をなくさめつひに關をもやふらすなり給へるなりされはあるしの后もあはれみてゆるさせ給ひしなりおほよそ堪かたき所欲に堪るほと感通も速なる物なれは好色のうへにてはかゝる感動よのつねなりしからは好色いさむへからぬ事かといふに色このむはもと惑なれはたえて惑はさらむにしく事あるましけれはいかにもして　神道におさへすかしてまどはじとのみつとむへしされとまとひといふものおのれまどへりとしりてまとふ事はいと稀なりおほくはしらす〳〵まとふなり此故にしかおほえすまとへる上にてみれは好色ならぬまとひも猶同し罪たるへしさ

りなから好色ならぬ惑と好色の惑とをくらへておもふに好色ならぬ惑は外にしてゝ(は)事に害すくなく内にしてはおもひもかへさるへし好色の惑は外にしては事に害多く内にしてはおもひかへさむ事いともく〳〵かたきものなり此故にこの道好色のうへにはことにいさをしあるになむ戀の歌の表にまとひて此道の本意をふかくたつねもしらぬ事いと淺ましきこと也されはおほかた戀の哥よむも猶一向心のなくさめかたさのせめてのわさなれは色好は道にあらす戀の歌は道の專門なりと知へし返々まとひて偏心となるか中に好色はかりせむすへなきはあらねはいにしへより聖といふきは賢しといふ人たに戀の歌は多し淨藏貴所かけさうしたる女の歌賀朝法師かぬしある女にけさうしたる哥なとさもおほやけなる撰集にのせられたるもさる人々のまとひけんはよの常の人の惑へるよりもなほおもひかへしかたき物なるを歌になくさめて時をやふられさりし心はえのあはれさにえらはれたるにて好色を公にしてもよしとの心にはあらす凡好色のみならすしかるへからすとしれる事にはまとはねと理をふくめる事にはまとふ事人の心のつねなれは惑へる人のはしめよりいかてか惑なりとは弁へてむやなにも〳〵論はまとはぬさきの事にてはやまとひて後はいかゝはせむされは惑はさらむさきにいかにもしてまとはさらむやうにこそたれも〳〵あらまほしけれ後撰集に〽人つまに心あやなくかけ橋のあやふき物は戀にそ有けるとよまれたるかことく戀の道はかりおそるへき物はなけれは人

々よくつゝしむへきことなりかしよく好色をつゝしめらむ人ならは哥道は不用なりもと惑たるか上にての哥道なるをこれを弁へさるより戀の哥よむ心はおもひしりかたきなりしかのみならす月花をよめる歌も惑ありてよめるなりとはしる人なき事元來哥道はまとはさらむには不用の道也といふ事をしらさるか故なりされはむかしより歌となりにたる戀はその人のおほえすまとひ來れる末なり末にして本を混するか故に此道心えかたきなりかへす〳〵表にのみ目をも心をもとゝむるはいといふかひなきわさなりかし表には所欲をよみ出內には時宜につゝしみたるたとへは醜女（シコメ）しも心さまかならすなつかしきか如し表につきて此道を論せは賢愚の別としたまひけむ事いかにしてか其心をえむ

古今集序にへ其はしめをおもへはかゝるへくなむあらぬいにしへの世々のみかと春の花のあした秋の月のよことにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ歌をたてまつらしめ給ふあるは花をこふとてたよりなき所にまとひあるは月を思ふとてしるへなき闇にたとれるこゝろこゝろをみたまひさかしおろかなりとしろしめしけむ云々とあるを思ふへし（後世にては此さかしおろかなりといふをは歌の巧拙のことゝおもへりさるはよしあしこそかゝれめこれは猶人からの賢愚を察し給ひし也）もし歌のうちみによらは誰をか賢したれをか愚なりとせむたゝ歌ぬしの身を察する所において賢愚はわかるゝものなり（賢愚を察すへきやうはその哥々の一向心と時宜との差別にありいかにもなくさめかたかるへき一向心をなくさめいかにもしたかひかたかるへき時宜にしたかへるを賢とすされはなくさめやすかるへき一向心したかひやすかるへき時宜なるをは愚とさたむへきなり）しか賢愚の別とさへなる事ひとへに表に目を

とゝむへからぬことわりいちしるき事にあらすや此心をわきまへしらすは戀の歌にかきらすおほかたの歌こと〳〵くうたかはしかるへき事なるに戀の歌のみ人うたかひをのこす事かへりてうたかはしき事なり表は所欲をなこりなくいふにて欝情なくさむへけれはいかにも〳〵非義非道のことの表に出るは此道の本意なるをこの心得のうしなはれたるもいと久しき事とおほゆるは大中臣能宣入道の宮の御賀に〽千とせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむといふ歌をよまれたりけるを　帝の御賀にはいかなる歌をかつかふまつるとて父頼基枕をもて能宣をうたれけりと袋草子にかゝれ世にも人よくしれる事也けに歌の表につきていはゝあまりにたつとひ過たりといふへけれと　帝の御賀によむへきほとの心の入道の宮には過當なりとおもへはこそ歌にはよまれたるなり哥によめは必言にはつゝしむ事うたよむつねなれはかくはいふなり入道の宮に相應の事を申すならは歌は無用の時なるをや此事頼基か折檻をは人みなことわりなりとおもへれと此道をよく弁へしらは能宣こそことわりなれとは思ひいたらるへしされはこそ親なから頼基は歌仙の名もなく能宣はその名後世までもたかき事うへなりとそおほゆるやとにかくに歌は時宜に戻れる欝情を托する物なりとしらは此道の心はやかてえらるへき事になむもし欝情いたく重なりて一首になくさみかたき時は慰まむまて幾十首をもよむへし又長歌にもよむへし古人長歌おほくまた一事を數首よまれたるは皆欝情なくさみかねたるか故なり後世は

かゝる用なりといふ事を弁へさるか故に長歌すくなくなりゆき又一事に數首をよむは詠草の式のことくおほえ宗匠たる人は一首よむへきものゝやうになれる事まことにいといふかひなき事なり一首にて欝情なくさまは一首たるへし猶なくさますは哥數よまるゝに任すへし長歌といへとも長短あるは全く欝情の深淺によれる事なりと知へし

神道

神道のをしへ廣大なる事筆端につくすへき事にあらすといへとも今其要をとりて片端をいふへしま
つ神道のむねとするは愼なり愼とは所思所欲をおろかに出さすよく時宜をかへり見るを云さてその
時宜をかへりみるへきやうをいかにといふに畏愛のふたつをもてわか所思を挍正す也以上の要言　神書の始末をこまかにおしていふにてひとつ／＼　神書の詞をひきていふにいとまあらねはくはしくまなはむ人はなほ　神書をもて此意をとひあきらむへし　畏とは身に禍の來へき事をかねておそるゝなり
愛とは身に福の來るへきことをたのしむ也人おほよそうまれ得たる性畏をもてつゝしまるゝもあり
中には畏をもておさふれはいよ／＼はげみて所欲いきほひつよくなるもありさる人は愛をもてすか
す時はおほえす愼まるゝもの也されは畏愛はすなはち剛柔にて人心を自在にする事此畏愛の道にま
さる事あるましき也　神書こと／＼く此大旨をふくみたれはいつかたをとりたてゝいふへくもあら
ねといと邇く心得らるへきは古事記上云へ如此言竟而御合生子淡道之穗之狹別島訓別云和氣下效此次
生伊豫之二名島此島者身一而有面四毎面有名故伊豫國謂愛上比賣此三字以音下效此也讚岐國
謂飯依比古粟國謂大宜都比賣此四字以音土佐國謂建依別次生隱伎之三子島亦名天之
忍許呂別許呂二字以音次生筑紫島此島亦身一而有面四毎面有名故筑紫國謂白日別豐國謂
豐日別肥國謂速日別日向國謂豐久士比泥別自久至泥以音熊曾國謂建日別曾字以音次生

伊伎島亦名謂天比登都柱自比至都以音訓天如天次生津島亦名謂天之狹手依比賣次生佐度島次生大倭豐秋津島亦名謂天御虚空豐秋津根別故因此八島先所生謂大八島國然後還坐之時生吉備兒島亦名謂建日方別次生小豆島亦名謂大野手上比賣次生大島亦名謂大多麻上流別自多至流以音次生女島亦名謂天一根訓天如天次生知訶島亦名謂天之忍男次生兩兒島亦名謂天兩屋自吉備兒島至天兩屋島并六島既生國竟更生神故生神名大事忍男神次生石土毘古神訓石云伊波亦毘古二字以音下效此次生石巣比賣神次生大戸日別神次生天之吹上男神次生大屋毘古神次生風木津別之忍男神訓風云加邪訓木以音次生海神名大綿津見神次生水戸神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神自大事忍男神至秋津比賣神并十神此速秋津日子速秋津比賣神二神因河海持別而生神名沫那藝神那藝二字以音下效此次沫那美神那美二字以音下效此次頬那藝神次頬那美神次天之水分神訓分云久麻理下效此次天之久比奢母智神自久以下五字以音下效此次國之久比奢母智神自沫那藝神至國之久比奢母智神并八神次風神名志那都比古神此神名以音次生木神名久久能智神此神名亦以音次生山神名大山上津見神次生野神名鹿野比賣神亦名謂野椎神自志那都比古神至野椎并四神此大山津見神野椎神二神因山野持別而生神名天之狹土神訓土云豆知下效此次國之狹土神次天之狹霧神次國之狹霧神次天之闇戸神次國之闇(戸)之神次大戸惑子神訓惑云麻刀比下效此次大戸惑女神自天之狹土神至大戸惑女神并八神次生神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船

次生大宜都比賣神 此神名以音 次生火之夜藝速男神 夜藝二字以音 亦名謂火之燒毗古神亦名謂火之迦具土神 加具二字以音 因生此子美蕃登 此三字以音 見灸而病臥在多具理迩 此四字以音 生神名金山毗古神 訓金云加那下效此 次金山毘賣神次於屎成神名波迩夜須毗古神 此神名以音 次波迩夜須毗賣神 此神名以音 次於屎成神神名彌都波能賣神次和久産巣日神此神之子謂豊宇氣毗賣神 自宇以下四字以音 故伊邪那美神者因生火神遂神避坐 自天鳥船至豊宇氣比賣神并八神 かくのことく國土をはしめ海河山野草木はいふにをよはす吐屎尿（タグリクソユバリ）まてみな此　伊邪那伎（マヽ）　伊邪那美神の御子にして今眼前にある所の物みなことことく今においで此神々しつまりおはしますなり 國土山川草木なとをうみ給へる事　神道の心をえぬ人は奇怪の事におもふ人あるへしこれは國土山川をやかてうみ出たまへりと心うるか故に奇怪なる也國土山川草木はもとよりありつるにてもあるへけれと神なけれはありてもなきにひとしきなりされは此二はしらの神このものともに　神をあらせたまへりし事をはうみませりとは書たるもの也萬の物此御時にはしめて活たりけれは生とかけるうへなるかなしかのみならす生とかゝれたる事　神道の本意これにいとしるき事なり　書はすへて表はかりに目をとゝめてはそのこゝろをえかたきものなれと　神書はことに表にまとふましき也すへて神といふ事を忘れすしてこゝろうれは本意はみゆへき也 されはこれらの　神たち人の眼前におはしましてて人ことにその情態をみそなはしまし〳〵これはよしかれはあしとおほしわけさせ給ひてそれとなく賞罰を給ふ事二六時中息む時なかるへし此故におのか心中にこれ欺き得たりとおもふ事も人こそ欺かるへけれ此萬物の　神慮をはいかゝは欺き得むかの賞罰をはいかゝはのかるへきされは人としておのか心中をよくかへりみかくつねにみそなはす所の　神々の御心にも恥さらむやうにふかく心を用うへき事なり此賞罰すなはちまつ（へ）にいふ所の提愛これ也賞罰は　神にあり提愛はわれにありしかるを人みつから賞罰せむ

の心ともすれは生するにひかれて畏愛の道をわするゝより愼おろかに成て言行をあやまつ事世にいと多く見をよふ事なりこれ全くかの　伊邪那岐神　伊邪那美神の　御子よろつのものにしつまりまして今に人の情態をしろしめすことをしらさるか故なりかく賞罰正しかるへき事なるか故に上篇哥道の弁に出せる　柿本神詠にへあしはらのみつほの國は神のまに言あけせぬ國とあるかことくたゝなに事もわか所思のすちを　神慮にまかせたてまつりて爲にはいたすましき事我　御國ふりにてまことにいとたのもしきことにはあらすやおほかたの決斷せでかなはぬ事なれともみつから所欲ある時はその決斷かならす非義におつへきものなれは萬事　神慮を規として決斷すれはすなはち畏愛の道にかなひて人の道ひとつもかくる事あるましき事なりとそおほゆかしこれによりて　神代のはしめより大占(ママ)とてうらなふことあり　伊邪那伎(ママ)神　伊邪那美神うみ給ふ御子よからぬか故に　天神の御もとにまいり給ひて　天神の命をこひ給ふに　天神布斗麻迩に卜相たまひてこれ女言を先たつる事のよからぬか故なりとのたまへる事占のはしめ也これひとへにおのか私心をもて事を決すなとの御教なるをや　神代紀中の一書とてあけ給へるかうちにへ大己貴命與二少彦名命一戮レ力一レ心經二營天下一復爲二顯見蒼生及畜産一則定二其療レ病之方一又爲レ攘二鳥獸昆虫之災異一則定二其禁厭之法一是以百姓至レ今咸蒙二恩頼一嘗大己貴命謂二少彦名命一曰吾等所造之國豈謂二善成一之乎少彦名命

對曰或有ㇾ所ㇾ成或有ㇾ不ㇾ成是談也蓋有二幽深之致一焉とあるをみれはもとこの國此　二はしらの神の御いさをしにてかくとゝなはりたるその經營のはしめにしも此御物語ありつるなれば此幽深の致をもて人々情態の則とあふきしたかひ奉るへしとの心にてかの一書の錄は蓋有幽深之致とはかゝれたるなるへしけにもと　神書は深き旨ある事いつことなきをわきて爰にしもしかゝれけむ事必目をとゝむへき事にあらすや此幽深の致實にそのことわり廣大にして言のをよひにあらねとまつその大意をいはゝ大己貴命御心にはやゝなれりとはおほせとみつから御心を決したまはすして　少彦名命に問はせたまひしは卽上にいふ所のことく御愼のふかきか故なりかつともに經營し給ふ　少彦名命にしも問はせたまひしは　少彦名命の御心に今ほど御怠慢ありては此後まことの成就おほつかなしとおほして此　命の御心を試させ給ふなりわか御心をみつから決せす　少彦名命の御心までをおほしやり給へる事まことに提愛いたれりといふへししかるに　少彦名命は　大己貴命の御心もし御勞煩に倦たまひてしかとはせたまふならは此後の經營心もとなしとおほして不成就をもて提を示し成就をもて愛を示しその怠らせたまはむ御心を諫たてまつり給ひつるなりすなはち此答にて御みつからも御油斷なき事明らかなれはきこしめしつる　大己貴命の御心いかにうれしく又いかにいよ〳〵御心すくよかに成給ひつらむとぞおほゆる也されはこそ此國の經營もめてたく成ぬるなるへけ

れそれより後　天孫にゆつり奉り給ひてその　天孫の　御裔いまにいたるまで天の下をしろしめしをさめさせ給ふ事ひとへに此御物語の中よりなり出たる事なれはおほよそ人ひとりの身心ををさむる爲のみにあらす國ををさめ家をとゝのへ萬世不易のいさをしを定むるもこと〱く提愛の中よりおこり來る事なるか故におのか所思所欲のまゝをためらひなく爲(ワザ)にいたす事　神のいやしみにくみ給ふ所也この御問も御答もいつれも時宜にかなへ給ひて御おのれおのれか御心はふかくつゝしみ給へりけに一時の心の所置にて萬世の後までをもあやまつへき事斗雞(トケイ)の上の錘(オモリ)を一きざみかけあやまれば終日時を告あやまつかことものなりあやふきかな　大己貴命の御問なかりせは　少彦名命の御答もあらましやかたみに眞をもて御心をあはせたまひし故につひに此國の成就仝かりつるにこそ

大己貴命此御問あるか故に御心まことに倦給ひての御私爲かと人おもふへけれとさにあらすこの　命は古事記にいふかごとくこの神の御兄弟八十神おはせともみな此　命のために此國をさけさせたまへりこれは八十神稻羽の八上比賣(ヤカミヒメ)を婚むとてともに稻羽におはす時此　大穴牟遲神に帒を負はせ從者(シリヘビト)として率(ヰ)ておはしぬ 氣多之前(ケタノサキ)といふ所にてあかはだかの菟(ウサギ)ふしたりしに 八十神汝此うしほを浴(アミ)て風のふく時高山の尾上にふせとのたまふその菟御をしへのまゝにふすにその塩かはくまゝに 其身の皮こと〱く風に吹さかるされは痛みくるしみ泣(イサチ)ふしたるに最後(ハテ)に來ませる　大穴牟遲神そのよしをとひ給ふ菟こたへて 僕(ヤツガレ)淤岐島にありて此國にわたらむとおもへとよしなけれは海の和迩を欺きてわれ汝と族(ヤカラ)の多少をはかりくらべむ 汝はその族のかぎり率(ヰ)て來りて此島より氣多前までつらなりふせわれその上をふみはしりつゝよみわたらむといふにあさむかれて列りふすさてその上をふみわたりて此地に下らむとする時汝は吾に欺かれぬといふにはしに伏したる和迩われをとらへて 我衣服を剝くこれによりて泣うれへたるにさきの

八十神の命をしへ給ふまゝにしけるにかくいたししといふされは　大穴牟遲神この菟に　此水門の水をもて汝か身をあらひその水門の蒲黄を敷ちらしてその上をふしまろはゝもとの膚のことくいえむとをしへ給ふその教へのことくしたるにその身本のことしこれ稻羽の素菟といふもの也　此菟を今に菟神といふ也さて此菟　大穴牟遲神にまうさく八十神はかならす八上比賣を得たまはし帒を負ふといへともいまし命得たまはむと　その言のことく八上比賣　大穴牟遲神に嫁むといふ此故に　八十神いかり給ひて　大穴牟遲神を殺さむとて伯伎國（ママ）の手間山にて　赤猪と稱して猪に似たる大石を火にて燒てまろはし落し　その後山に來ていりて大樹をきりふせおとしにかけ給ふ此時兩度死したまひしに其　御祖の命天にこひたまひて活給ふ事をえたまへりされより木國におはしけるに　八十神をひいたりて　矢を射給ふに木の股よりくゝりのかれてそれより　須佐能男命のいます根堅州國におはす又そこにても蛇の室蜈蚣と蜂との室なとに入れられてさいなまれ給ひつれとその妻須勢理毘賣命の志によりてのかれたまふ又野に鳴鏑を射いれてこれをとらしむとて　火をもてその野をやきめくらすに鼠來りて內者富良々々外者須々夫々といふに隨ひてそこを踏給へは落てかくれ入り給ふその間に火やけ過てりその鼠かの鳴鏑をくひもちてたてまつりつるを後に　須佐能男命に奉り給ふその後もなほさいなまれ給ひしに　須勢理毘賣の情によりてつひに生大刀生弓矢をえてつひに八十神ををひはらひてはしめて國つくり給ふと見ゆ又その後此國の主となり給ひて後　建御雷神をして天より　大穴牟遲神の御心をとはせ給ふに御子　八重言代主神にその御答をせさせたまひ今一はしらの御子　建御名方神力つよくまし〳〵けるに　建御雷神にをはれて服したまひけれはすなはち故なく此國を　天孫にたてまつり給ふなとみえたりかく稻羽におはしける時も帒持となりて惱り給はすたひ〳〵さいなまれ給へともいかり給はす此國さはかり功をつくしてつくり給ひしを　吝たまはす又菟をたすけ給ひし慈悲かつ八上比賣おのつから嫁きさま〳〵の艱難もみなのかるゝことを得給ひし德まことにはかりかたき所ましまし此國をゆつり奉り給ふにも御みつからの御心をもて奉りたまはすまつ　御子二柱にとひ又服せしめたまひつるなとすへてこと神の御爲ともにはことなる所おはします也此御子をまつ服せしめたまひしも卽後の患をかねて除き給ふにて　その御爲の畏愛嚴格なる事いといちしろしさはかり勢をつくさぬ物すら愛惜する事人情なるをすみやかに奉りたまへる御心のうちなとふかくおもひふかくかたふきてあふきたてまつるへき事なりかゝる　神におはしませはいかてかかの御間まとひ給ひての事ならむ畏愛をふかくおほしめして　少彦名命の御心をこゝろみたまひし事うたかひなき事になむ　されは人

々畏愛をもてよくわか所欲のすらを糺し時宜につゝしみて爲すへて眞ならむやうにのみつとむへき

事なりおほよそ爲は眞爲たるへしわざ眞爲ならすは人情に戻るへきふしなきさまがらのたくひはうちもふるまふへしそれたに猶時あるものなれはかりにも爲を輕々しくはすましき事也もし時宜を犯してふるまふ事あらはたとひ理はありとも必眞はうしなふへき也眞に似たる不眞あり不眞に似たる眞ありよくおもひてまかふへからす「眞はひとへに時宜をおもひする所より生するものなれは　公爲に似てまたたかへり公爲は正しけれとも時にたかふ事あるへしこれ眞爲にたかふ所なり神代紀上卷に　天照太神（ママ）月夜見尊をして葦原中國なる　保食神のさまをうかゝはせ給ふ時　保食神口より飯ならひに鰭廣鰭狹（これは魚のことなり）毛麁毛柔（これは獸のこと也）を出し百とりのとりのつくゑものに貯へてたてまつれるに口より吐れる物をもてわれに饗つへき事かはとて

月夜見尊いかりおほしめしやかて　御劔をぬいてうちころしそのさまをつぶさに申給ふ　天照太神甚いかり給ひて汝は惡神なり相見じとのたまひ夫より　月夜見尊と一日一夜をへたてゝすみ給ふとそけに口より吐れる物をは　天津神にたてまつりつる不敬のいたりなれはいきとほりたまひしも理なることなれとかの　保食神はその死て後も頂に牛馬　額上に粟　眉上に蠒　眼中に稗　腹中に稻　陰に麥をよひ大豆小豆なとなり出たりかはかり蒼生のとりくひて活へき物を出すへき神なりともおほしやり給はで理につきてほしいまゝに憤を發し給ひしなれば御爲眞をうしなへり此故に　天照太神御

中を隔給ひしものなり又同巻に　天照太神石窟(イハヤ)にこもりたまひし時　天鈿女命(アマノウズメノ)たくみに俳優(ワザヲキ)したまひけるをきこしめして磐戸(イハト)をほそめに明て御覧じけりその時　手力雄神(タチカラヲノ)　天照太神の御手をたまはりて引出し奉たまひし事ありこれ　天照太神の御心つからいでさせ給はむやうにこそすへけれしひて引出したてまつり給ひしはいと無禮(ナメ)しきことなれとその情葦原中國爲長夜(トコヨク)をふかくかなしめるよりの眞爲(マワザ)なれは　天照太神さる強爲(シヒワザ)をもとかめたまはてさなからながく世をてらしおはしますものなり公のことき不眞不公のことき眞ある事これをもてわきまへしるへし理あれとも不眞なるを咎め理なけれとも眞なれはあはれみ給ふ事神の御心なる事何のうたかひかあらむもろこしにても孔子父羊をぬすめるを子證したるを直しとはせす子は父のためにかくし父は子のためにかくすを直躬者とのたまひかくすはよからぬわさなれと父は子のため子は父のためにする時は眞爲となる事これひとへに時宜をたつとひたまふか故なり又曾子父にうたれたりしに痛をしのひて琴をひきたるを孔子のいさめたまひしなと父のこゝろをやすめむとしつるは孝に似たれともしころされたらむとき父の不慈を世に示さは大なる不孝たるへけれは孝に似て不眞なりこれ又時宜をたつとひたまふ故なり　これらをみてわか　神道のたかくとほしろきことをしりはかなき事なりともふかく心を用ゐてわか所思を愼しむへき事なりかく眞に似たる不眞不眞に似たる眞あれはよく提愛をもて糺すとも此けちめいとまとひやすきものなる事人心のさかなる事は古事記に　伊邪那美神　迦具土神をうみ給ふ時うせ給ひけれはともにつくりたまはむの國いまたつくりをはりたまはぬか故によひ

かへしたまはむとて黄泉國におはしける事ありこれつくり給ふ國のためにおはしつるなれとわか御妹にしてしかも黄泉までおはしましける事眞に似て不眞なりけるか故に黄泉よりかへりおはしまして禊秡したまひしなり　伊那那伎神禊秡をはしめたまひし事萬世の人情眞不眞のけちめわきかたき事をおほしめくみ給ひてのこと也されは人々みつから眞なりと思ふ爲もおほえす不眞に落たる事多かるへけれはおの〳〵此　伊邪那伎神の御をしへにしたかひて禊秡すへき事なり後世　神道者流禊秡をする事その本意此　神の御こゝろさしにたかへりこれ古事記禊秡の段をくはしく明らめさるか故也此故に予禊秡正式といふものを別にかけり志あらむ人はかならす禊秡すへし　神道をまなふもの禊秡をせされはわか身心に切ならす禊秡を修して心中おほえす眞不眞のけちめにまとひたる事をよく〳〵糺すへしすなはち畏愛のをしへ此內にこもれる事くはしく正式をみて知へし黄泉よりかへりたまはむとする時いとくるしきめにあひたまひ禊秡し給ひし後　日神　月神　建速須佐之男命をうみ給ひしこれかの畏愛にて禊秡の人として修すへきことをすゝめたまふ也されは平生情態をほしいまゝにせす萬物の　神にまかせたてまつりて爲をつゝしみもしやむことをえぬことあらはよく眞不眞を糺して爲にいづべしされと時宜ひとへならぬものなれはおほえす不眞に落たることもあるへけれはいくたひも禊秡を修してわか身心を洗ふへしおほかたの偏心これにて制せられぬことある

ましき事なれは　神道にて事たりぬへき事なれとひとへ心の今一きはいきほひしうねきは　神道をもて制しかたき事あれはこそ神ひしりも歌はよみおかせ給へれされともまた「神道をまなはされは詠哥せめてのわさとならさるか故に」よみても欝情なくさむほとの機關なし欝情なくさますはよまさるにひとしかるへし此故に　神道なけれは歌道もはかなわざ也哥道なけれは　神道も全からす神道は哥道をたすけ歌道は　神道をたすくいつれをかろくいつれを重しとせむ所詮　神道ありての哥道哥道ありての　神道と心うへき事也しかるを　神道者流の者は　神道をむねとして歌道のたすくる事をしらす哥道者流は歌をむねとして　神道の本たる事をしらすいと淺ましき事なりかしある人儒佛の道　神道に劣れりやととふ成元答へていはく劣る事さらになしたゝ三國の土風によりてそのをしへたる筋のことなるはかりなり我　御國は東漢土は中天竺は西なれはその土風おのつからその國々の人の心にかうふりたるか故にその人情にしたかひて教をたてられたるにていつれも人心を私になさむとやはをしへられたるこれをもてさとり知へき事也この國の人といへともうまれえてこのむ所好まぬ所あるものにて儒をかしこしと思はゝ儒をまなふへし佛かしこくは佛をまなふへし道に長するはおのかこのむ所による物なれはとにかくにわかかしこしと思ふ道によりてまなふへし成元かたくひは　神道をこのむとそいふへきまへにいふか如くいつれも勝劣あらむやうなきことなれ

は儒佛おとれりといふにはあらねと土風おのつから人のこゝろとなりたるものなれば神道の此國人の心に切なる事いふもさらなり成元とても儒のかたはしをもきゝ佛の一かたをもとひつる事ありされとも儒佛のをしへさまをはわか　御國ふりにとりあつかひてこそ此國にその功はあれとおほゆる也たとはゝ京と浪速と吉凶(凶)反したることあるか如しその土俗ならはいかゝはせむ冠も袍もいやしきものゝもたらむになにの用かあらむ人みな儒によれは儒にひかみ佛によれは佛にひかみて　神道哥道の此國人の情に切にしておのれ〳〵か修する所の儒佛の道もこれを本としてつとめもをしへもせむにその利する事いとすみやかなる事をわきまへぬは卽これまた上篇にいふ所のひとへ心なり儒書佛書をみる事　神書をみるかことくならは漢土西域はしらす此國人においてそのいさをしすみやかならむことは方言の人に通せさるをもてもしるへしかへす〳〵わか　神道歌道にひかめるにあらすたゝそのをしへさまをは此　御國ふりにせはいよ〳〵儒佛の道も人情に切ならむといふなりと申き又問しからは　神道をまなはむは　神書によるへきに　神書はいと纔なるものにて此人事の限なきにのりとするには不足なるへしと成元答へていはく　神書わつかなりといへともそのみやうおろかなるか故也　神の御ふるまひ一事に萬行を(マヽ)をさとしたまふもの也しかのみならす則をたのむ時は事に心を用うる事麁也心を用うる事麁なる時は　神ひしりのかしこきあとにはあれとも

時宜にたかふ事かならすあるへしされは人々事にあたりてはその事理をふかくたつね時宜にたかはさらむやうに心のいたらむ限りをつくしてふるまふ事　神道の教なり此故に　神書儒佛の書のことくそなはらさる也人情おほよそよる所あれはそれをたのみて心を用ゐさるものなり心をつくす時は賢者はいふに及はす愚者といふとも事（活）いけりされとも賢者は心をつくす所いたるへき所よくいたり愚者はいたるへき所まてはいたらぬけちめはあるへしさるは賢愚別ある事にてやむ事をえさる事のやうなれと眞のさかひにおいてはたとはゝ賢者は百歩にて眞をえ愚者は十歩にて眞をえるにてたゝひとしき事也これをいかにとなれは賢者は賢者の分量愚者は愚者の分量ありてその分量のかきりをつくすなれは眞においては勝劣なしとはいふ也かへす〱心のあらむかきりをつくすいさをし萬卷の書にまさるへき事　神道をよくまなひてさとるへしたゝ賢愚となくおの〱分量をつくし時宜にたかはさらむやうにとつとむるより外の事あるましき也

北邊隨腦 下篇

詠歌心得

哥の時

歌の時とは哥よまてかなはぬ時を云　神道をもて制せらるゝ所欲ならは歌の時にはあらすと知へし畏愛をもておさふれともすかせとも私心のいきほひつよくしてのとまりかたきを時とは心うへきなり歌に時といふもののある事をよくわきまへされは　神道にて制せらるへき私心をも歌にうたふへししかる時はもとつゝしむ心うすきか故なれは言に靈なし言に靈なけれは歌も詮なかるへし萬葉集第(十八)巻に田邊福麿諸兄のおとゝの使して丹後にくたりけるを守大伴家持卿これを饗應したまふその時福麿へなこの海に舟しましかせ(暫借)沖にいてゝ浪たちくやとみてかへりこむとよまれたるはめつらしく此丹後の海邊に來たりし事なれは此わたりを舟にのりて遊覧せまほしけれと主人の饗應の半にさる事をいはむは饗應をあかぬやうにあれはつゝしまれたりけれとふたゝひ丹後に來むこともはかりかたけれは猶その舟にて遊覧せまほしさのとめかたきか故にせめて歌にうたひてみつから欝情をな

くさめられたる也これいくたひもゆく國にてかゝる歌をよまは時にあらすといふへし福麿はまたこむ事期しかたかりしか故に歌の時となれるものなりこれをもてもよく／＼心うへき事也

詠歌と言語との差別

詠哥と言語との差別心えわかすはあるへからぬことなり世かはり時うつりてこそ歌の詞と言語とはこと物のやうに成にたれいにしへは歌にうたふも言語にいふもたゝひとつ詞なりきしかひとつ詞ならは歌によむへきを言語にいひてさてもありぬへきことわりにてことさらに歌によむにも及はすもとより哥も無益なるわさのやうなりしかるを哥といふもの

建速須佐之男命の出雲國須賀宮にて雲のたちのほるをみてよませ給ひし〽夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻基微尓夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁といふ御歌を祖として八千矛神高志國の沼河比賣か家にてよませ給ひし御歌ならひに沼河比賣か歌又須勢理毘賣の嫉妬し給ひし時出雲より倭國にのほりまさむとし給ひし時の同し　神の御歌ならひに須勢理毘賣の哥なと猶神代より哥いと多きことかならす言語にはその用たかふ所なくて叶はぬことならすやもと言語はひとり言にいふ事もあれとひとり言は言語の專門にあらすして彼我の間の情を通はすを要とす詠哥は　神にたてまつり人におくることもあれとそれは歌の專門にあらすしてわか欝情を托するを要とすこの故に言語には時やふれ

詠歌は時全し　言語には時やぶるといふは所欲をやかて言にいつるを云也時宜にあづからぬ言語は別の事なり詠哥には時全しとは所欲をやかてよみいでながら身は時宜に處したるをいふなり身を時宜に處せざれは詠哥とても猶時宜はやぶるへしされは詠哥言語ともに身たに時宜に處したれは時宜に妨なき事なれと言語には時やふれ詠哥には時全しといふはその事要とする所欝情を托すると彼我の間の情を通はすとのけちめあるか故にかくはいふ也　伊勢物語に紀有常貧しくして妻を離別するにおくるへき物あらさりけれは友たちにこはれたりしにその友よるの物まてを具して贈られけれは〽これや此天の羽衣うへしこそ君かみけしとたてまつりけれ〽秋やくる露やまかふとおもふまてあるは涙のふるにそ有けるといふ二首をもて謝せられたりすへて恩を謝するは言語の用なれとかはかりの篤情を謝せむには厚くいへは追從めきうすくいへは謝する心盡されはかく歌にはよまれたるなるへしむかし人は謝する事たに時宜を思ひて歌とよまれたりましてうらみいきとほりねかひほりすることをやされは哥は彼我の情を通はす事專要ならぬか故に言語にいふもひとつ詞なからもと身を時宜におかむか爲なれは時宜全きのみならすかへりて幸をうることもあるものなり言語は專要彼我の情をかよはすものなるか故に詠歌とひとつ詞なから身さへその言にたくひて時をやふる事ある物なれは時宜をあやまるのみならす所思つひにかなふ事あるましき也詞はひとつなれとも詠哥と言語その用たかふ事みるへし　詠哥の詞のうへといへともおなし哥おなし詞にてその意味雲泥なる事あるもの也たとへは冬の夜よひのほとにさむしとよむもふけてさむしとよむもそのこと葉はひとつ也　しかれともよひのほとのは　寒氣も淺かるへきものをとおもはるへけれはたれも哀とはきくましきなりふけてのはけにさも堪かたき寒氣ならむを歌に慰たらむ心みゆへけれはきく人みな哀とおほゆへきか如し哥道は　神道を基とすへき事これらをもても知へし堪らるへき時を哥によむ時は歌なからも猶言語にひとしかるへし　神道をまなはさる人はその堪へかたからむに堪ることをえぬか故に哥もまた道をうしなふ也　よひのほとに寒しとよむはふけなはかならす寒氣いたくまさり

ゆくへきに今よりえ堪ぬこゝろみゆへけれは道にそむく也これ　神道の必學ふへき所也　さいつころ此差別をある人にかたりしにその人われにとへらくもしゝからは言語のひとり言詠哥の法樂贈答はいかなる用そやひとり言ならむには言語をもてひとり言せむに人のこゝろにも障るましくやかてわか欝情もなくさみつへし又詠哥といへとも法樂し贈答せむにはいかてか　神人の心にあたらさらむと成元こたへてけにさる理なりしかれともまへに申つることく言語と詠哥は彼我の情をかよはすとわか欝情を托するとの専門たかへれはたとひ法樂し贈答すとも猶みな爲(ワザ)をつゝしむよりのわざにしてその志もと所思を達せむの心ならねは法樂贈答にかゝはる事にあらす言語とても志たにかくのことくば詠哥に劣る事はあるましき事にてひとへにその志の置所による事なりしかれとも詠哥の用をは言語にて達せむことかたき事ありそれをいかにといふに元來言語は無形なり詠哥は有形なり　形とは文字の數句の數一篇を首尾する所あるをいふ也長哥とても句數はかきりもなけれと短哥にひとしく上下かならす首尾すへきなり上古にはもしの數も定まらさりけれとそれたになほ言語のことく思ふまゝにはなき也すかたもさま〳〵なれとこれまた言語のことくはあらすこの故に詠哥は必形ありとはいふ也　すへて形なきものには靈とゝまる事なし形あるものには靈そのうちにとゝまりていつまても死せすたとへは宇治の網代木にいさよふ浪をみて〽人生れみな此浪のことくつひにはゆくへもしらす成なむあらかなしなとたゝことにうちなけきたらむに欝情なくさまぬにはあらねとしはしこそなくさみぬへけれその言形なきか故にその情やかて又我か身にたちかへり來りて時宜におくへき身をさらに責むへしこれをは〽ものゝふのやそう

ち河のあしろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも 柿本神詠也 とうたふ時は欝情此哥のうちにとゝまりて靈となり千載の後まても死せさるか故にわか身にありつる欝情は死し去りてさらにたちかへり我か身心をなやます事なかるへし我身のうちに爲(ワザ)を促(ウナガ)す欝情を殺し言のうちにその情をいか(活)して身をせめ時をやふらせむとするをまぬかれむにいかてか無形の言語そのいさをしあらむ歌にもあれ言語にもあれ詞(比)は心をうつす器なから無形なると有形なるとにてかゝるけちめはある事也と申き 上篇にいへる物むつかりする人の此喩こゝにおもひあはすへしこれ又有形ならてはなくさまむやは かへす〳〵詠歌の言語とかはる事よく〳〵おもひわかさる時は此道をあやまつへき事也萬葉集第一卷にへわかせこはかり庵つくらすかやなくは小まつかしたのかやをからさねとよめる歌なとはたゝ言語にいふへきをやかて歌とよめるやうなれとこれ額田王(ヌカタノオホキミ)の御哥にて女にしてをのこに指揮せむこと時宜にたかふか故に言をつゝしみて歌によませたまへるなりこれらを見てくはしくおもひわきまふへし

五級の事

歌のよみやういかなるをよしとすへきといふに五級をまつよくあきらむれはおのつから得意せらるへし五級は亾父成章歌となりいつる心詞の條理をあきらめてさためたるなりいはゆる一の上中下二の上中下三の上中下四の上中下五これなり 五に上中下なきはわくるに及はぬ級なれは也かく一しなに上中下をたつる事畢竟哥よみならはむ人の心えやすからむか爲はかりにてその品の正當た

るは上なり下はその級によみいたれりといふまてなるをいふ
中はすこしその級をよみふせたる力あるを云也としるへし　これは貫之か六くさにもあらす忠岑か十躰にもあらす心のふるまひ詞の用ゐざまおのつからかゝる級ある事をいふにてそのことわりいひつくしかたしといへともその大槩をいはゝ

一上　その時のさまをすくよかによみて外やふるへからす内おさふへからぬ情言外にあふれたるを云

ものゝふの八十うち河のあしろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも

沢田川袖つくはかり淺けれと久迩の宮人高はしわたす

一中　一上のことくにして少しあかぬ所うちましれるをいふされとも又一下よりは一上に近き所ある也

狛山になくほとゝきすいつみ川わたりをとほみこゝに通はす

一下　一上の心はえをしひてよみなしたるやうなるを云又一上のことくにしてよみふりたるをもいふへし

月よゝしよゝしと人につけやらはこてふに似たりまたすしもあらす

二上　心詞いたくうちふるまひたるをいとこともなけにうるはしくよみなしたるを世に云幽言これなり

君かうゑし一村薄むしのねの茂きのへともなりにけるかな

二中　二上のことくにしてすこしあかぬ所うちましれるをいふされと二下にくらふれは力つよき所ある也

二下　二上の心はえをよみふせたるさまの詞のうへにしるきを云

三上　させるふるまひはなけれと詞のつゝけから心のおたしさいはむかたなくうるはしきを云

三中　三上のことくにして少しあかぬ所うちましれるを云されとも三下にくらふれはよみなりたる所もある也

三下　三上の心はえをからうしてよみたるを云くはしくいはゝよからぬ所もありていとをさなきをいふ也

四上　おもふはかりの事をいひかねたるなり四以下は哥とならさる級なれは引歌に及はす

四中　三具の義を心えおやまりたるを云すへてものゝ義をよく弁へすしてよみあやまれるを云也

四下　落題放題を云

五　古歌の心をさなから犯し詞をさなから犯せるを云

そのおほよそをいふ事かくのことしもと此五級は哥よみすゝまむための専用にして實況にのそみてはいかなる級になり出むもはかりかたきものなりされはむかしより一の級にかきらす二の級なるも

三の級なるも感動ありし例いと多き事也すなはち〽あさか山かけさへみゆるの歌は一の級にして葛城王のいかりとゝまり〽ありとほしをはの歌は二の級にして馬のあしたち〽なはしろ水にせきくたせといふ哥は三のしなにして雨ふりにたりかく感動は級にかゝはらぬものなれは五級は無益のものゝことくなれと歌もと外やぶりかたく内おさへかたき時によむ物なれは哥のうへとてもなほつゝしめるを歌の本体といふへき也（後世餘情有心なといひてたつとふ事これかゝる理あるか故也言行をつゝしめるか詠哥なるをそれにたになほつゝしめるをもてこれを一の級とは定むるなり）されはつねに一の級をのみこひねかひてよむ事すなはち哥道の第一の心得也たとはゝ武術をならふに形（カタ）といふものをもてをしふるかことしその形といふものはもとその祖の妙手の必勝の理をきはめてさためおかれたる手なれはこれに熟せむに勝たすといふ事あるましき事也されとも形にのみ縛せらるれは必敗をとるへきかことく一の級無上なりといへともこれに縛せらるれはかへりてつくり物となるか故に一下はうるとも一上はよみうる事あるましき也よく習熟する時は機にのそみてもおのつから一上とも成出へしされとも身心活さらむは一の級とてたつとふへきにあらす身心の活たらむには二三の級とていやしむへきにあらす（哥は賢愚巧拙にかゝはらさる事こゝにおいてしるきことなりかし）もと此道愼をもて体とする物なれは二三いやしむへきにはあらねとたゝつねにこひねかふへきは一の級なりさてこのしな〳〵よみなせは何の級にもよみなさるゝものなれとおほかた人の生質（マヽ）なにとなく一のしななる人からもありまた二三

の級なるもありてその質によりてかく哥も五級にわかれいつる也二三も身心活たらむには感動ある事はかく人の生質によるゝの物なれは也されは一の級をねかふ事歌のうへのみにしもあらすおのつから人さまさへたちまさりゆくへきわさなるをや世に古歌を論し今の哥をも判するによしともあしとも定むる事おほくはわか好みひかめる所によるもの也いとおほやけならぬわさ也亾父成章つねに此五級によりて人を導かれたるたゝ歌をよみまさらせむとにしもあらすそのおのか生質をもかへりみよとてなりかつかの私の批判はせまほしくともしかたくおほゆるは此級をもて定むるわさなり哥ことの級ひかむ所なくいとおほやけにみゆる物なれはこれにまさる師はあるましき事也上にいふかことくもと此級人の生質によりておのつからたてるなれは哥のよしあしの論をしはしとりおきて人からの上にしておもはゝ一の一たる事よく思ひえらるへしかし

体の新古

体の事亾父成章上古より今の世までを六運にわかてりいはゆる〽上つ世〽中むかし〽中ころ〽近昔〽をとつ世〽今の世これなりさて今の世のさまをみるに古風よみ又は万葉体よみ當世哥よみなといひてかたみにそしりあふ也後の世の姿をよむものゝ古風をそしるは今のよの人の耳に入かたき事をしひてよむといふらむけにさる事なり又萬葉家古風よみの後の世の姿をみてはいやしむつかしなと

いふは詞の正義をうしなひ哥の本体をうしなひたれはこれをまたさる事なりこれをたゝすらへておもふにいつれも全きものにはあらすその故は實況にのそみてよまむにはしひて古風しひて後世によみなさむとする事いかなるひが心えそや歌はたゝ内おさふへからす外やふるへからぬをつゝしみて哥にかふる物なれは体の新古を論せむ事いといふかひなき也實況にのそみてはふるくもなり出へしあたらしくも成いつへしいかてそれにかゝつらはむやたゝこひねかふへきは一字一句無用のことなく又詞にしひてもてかさりたる事なくよく聞ゆるやうにあらむをよしとすへき事也萬葉体又中むかしの体なとよむ人もたゝその世のくせをまなひその世の詞をしひてよみいれたるまてにて上つ世中むかしの哥道に切なる所ある事を弁へす又今のよの体をよむ人はしひてふるき詞を嫌ひてあたらぬ詞をもよみのとかにいはるへき事をもさはいはす哥道をむねと心うへき事を弁へすしてすゝろに古風をよむものにきそひをる也たゝ〳〵無用なる詞をはふき慎を専らとしてゆめ〳〵体の新古にかゝつらふましき也慎をむねとすれはいはてあるへき事はいかにもしていはしと思ふへししかる時はおのつから聞えかたき事もなくなりていとのとかによまるへき也所詮哥道をわすれては古体たりとも新体たりともなにのかひかあらむ猶下にいふ所の表裏境五典等をよく心えて体の新古にかゝはるましき理をさとるへし

三具

亾父成章詞を三具にわかてりいはゆる挿頭（あはれいといかにさもなとの類なり）装（おもふみるさくゆくかへるなとの類なり）脚結（らむけりつゝかなをにのなとの類也）これなり此外はみな物の名なりいつれも抄あれはこゝにくはしくいふに及はす此三具いつれとてもその義を精しくせされは古歌をときわか哥よむにもおほつかなきか中に脚結はことに心をこめてまなひうへき事也それをいかにといふに挿頭装は物事の動止をさとすはかりの用にて心えやすし脚結はその詞その哥のわか神氣の用をうつす物なれはくはしくあきらめすむはあるへからす後世脚結にくらく成ゆきてたゝ句調を覺え例をもて脚結を用うる事いと危きわさ也たゝ一字にして無量の義をふくむ物にしてすへて哥一首は此脚結の用なり脚結の外は名挿頭装ともにみな脚結のひかれて變化す下にいふ所の表裏境をしる事すなはち此脚結をしるへとする事也表と裏との鎖（クサビ）となりて境を指すか故に脚結より裏境をおす事まことに幽室に燈をえたるか如し脚結ひとつ〳〵の義をくはしくまなふ事いと迂遠なるやうに人思ふへけれとたとはゝ〵のといふ脚結の義をくはしく心えおく時は千萬首ののもしみなその義なれば遅きかことくにしてその迅速なる事これにしくはなし（此義を明らむるは經緯にしかすされともみつからよみしりて心をうる事よくおもひえらるへけれはこれをまなはむために伊礼比母といふ書をつくれりこれをもてよみしり猶われにもとはむ人には脚結のうちあひさまなとをしへむにいとたよりある書なり）

經緯

北邊隨筆ニ云經緯ノ本ハ悉曇家ニハ阿字ナリオノレオモフニ五十ノ声ミナ口ヲヒラキテ後キコユ口ヲ閉ナガラ声アルハンナリ此ンノ声サナガラ口ヲヒラケバハシメテナリ出ルコヱハ字ナリコヽヲモテミレハ他域ノ言ハシラズワガ大御國ニシテハ五十ノコヱノ本ハ字ナルヿ疑ナシスベテ風土ニシタガヒテ同シカラザルモノナルヿイフモサラナレハ音トテモナホ他域ニタカフヿ必アルベシウタカフベカラズカク云所謂ハワガ大御國言スベテ下ニ字緯ノ音ヲ踏タルハ詞ノ正シキ也タトハヽオモフトイフ詞布ヲフミタルガ本ニテコノ布ノオモハヌオモヒオモヘオモホユナドカヨフハ變通也

經緯とは世にいふ五十韻なり竪十をたてといふ横五をぬきといふ也これをたてぬきといふ事縱横上下その義通して變化をなす事かきりなけれは也すへて名をも詞をも明らむる事例をもて推せはその義しらるへしといへとも精微に入てその本をしらむ事經緯にあらすはいかてか明らめうへからむわか熟(塾)此經緯をは志ふかき人にあらてはをしへさる事うつたへに秘むるにもあらす心の庬なる人はをしふとも心えむ事かたかるへきか故也まことに經緯の義かゝむとすれはその境にたかひさためむとすれはその變に應せすもろこしの聖の象をたてたまひつるけにことわりそかし名をしり詞をしる事經緯のつかさとる所といへとも名と三具はそも〳〵末なりおほよそ人情の變すへて此五十聲の變化に過さるものなれはよろつのまなひ事たゝ此經緯をいつへからす今くはしくいはまほしけれと上にいふか如くをしむにはあらすをよはねは也たゝその大様をいはゝまつ〳〵あかさたなはまやらわをの〳〵義あるにヿあいうえをのいつゝの義をかけて五十の聲義をなすにてもとはヿうくすつぬふむゆるうの十聲より轉しなれる也さてヿあはヿおとむかひヿいはヿえとむかひヿうはヿあいえおをふくめり又ヿあはヿわにむかひヿかはヿらにむか

ひ乁さは乁やにむかひ乁たは乁まにむかひ乁なは乁はにむかへりそのかたち天地ことわりにかなひてそのふくめる義たつぬるにつけて奥あるこゝちす志ふかゝらむ人は熟（塾）に來りてまなふへし世に經緯をとく事聞ゆれともよくわか　御國の詞に達せすしてはかならすたかふ所あるへきをやしかのみならす琴柱に膠するたくひを弁へぬ事かへりては人をまとはす種なるへし實に天地の御魂なれはふかく心をつゝしみてまなひしるへきことなりかし

よせ哥冠の事

古人はよせ哥（よにいふ序哥也）冠（よにいふ枕詞なり）いと多く後の世はいと少く冠なとはよめとも上下よくよせさらむはたしかならすとそいふなるこれもとよせ歌（うちよせといふは二句三句なとよれるなり一句のうちよせはすなはち冠詞にひとしきものなり）冠のもといかなる用なりといふ事を弁へさるか故也おほよそ歌愼よりよむものなるか故にうたの上も猶つゝしめるを本とする事前にいへるか如しされは内外のやむことをえさる勢たにみえなは少しにてもいはさらむか肝要の事也此故に古人末句にて内外の勢しるきは本句をよせとし二句たらぬはうちよせとし一句たらぬは冠としたる也此故によせも冠もその一首の意味にかゝはらぬ事をわ

マタミルト云詞見ラクミレハナトカヨフカ如クスベテ詞トイフ詞コノサタメナラヌハナシコレチアハセテオモヘハイヨ〳〵字ノ音ハ諸音ノ本源タルベシトハオボシキ也此ントイフコヱ音ハアリテ文字ナキガ故ニ乎迹美ナト音便ニシタカヒテカリ用ヒラレタリイハユル蟬丹波難波ナト脚結ノ良乎計乎ナトノコトシ萬葉集巻一ヘ三輪山乎然毛隱賀雲谷裳情有南畝可苦佐布倍思哉トイフ哥ノ畝ハ一本ニ武ニツクレリ字形ノ似タルカ故ニ誤レルナルベシアヤシムベカラズ宇治拾遺巻三ヘ今ハ昔小式部内侍ニ定頼中納言モノイヒワタリケリソレニ又トキノ關白カヨヒタマヒケリツボネニ入テフシタマヒタリケルヲ

シラザリケルニヤ中納言ヨリ來テタヽキケルヲツボネノ人カクトヤイヒタリケム沓ヲハキテ行ケルカスコシアユミノキテ經ヲハタトウヲアケテヨミタリケリ二コエバカリマテハ小式卩内侍キト耳ヲタツルヤウニシケレバコノ入テフシタマヘル人アヤシトオボシケルニスコシコヱ遠ウナルヤウニテ四コヱ五コヱハカリユキモヤラテヨミタリケル卄ウトイヒテウシロサマニコソフシカヘリタレコノイリフシタマヘル人サバカリタヘカタウハヅカシカリシヿコソナカリシカトノチニノタマヒケルトカヤトアル此ウトイヒテトイフ字ハンタルヘケレト文字ナキカ故ニウトハカヽレケム小式卩カ心ノウチニ定賴黃

ざとよめる物なりいにしへよせ歌冠なとは多きをもつて古人此道の愼を本とすへきことをふかくこひねかはれけむ事しるし京極黄門中院入道殿のもとめにまかせてかきたまへりし百首かうちに御みつからの哥いと多からむにへこぬ人をといふよせ哥をかき給ひ又柹本の神詠としてかきたまへるへあし引の山鳥のをの（これは人丸の哥にはあらねとまつその百首によりていふ也）といふ哥もよせ歌也これらをもてかの黄門の心をもさとり知へし歌はもとよまさらむにしくはなしされともよまては時宜に害あるへきか故にやむことをえすよむなれはいかにもしてことすくなならむか本意なれは古人よせ歌冠をしもよまれけむいとかしこきことなりかの無用をはふき不足を補ふへき事表裏境の下にいふをこゝにあはせて心うへし

表裏境

詞に表裏境といふ事ありこれは詞を治（キタ）ふの專用也もと此三ツはおのつからそなはれる物にて（表に裏境のおのつからそなはるといふはもと天あれは地ありて萬物その中に生育し男あれは女ありてその中に子を生するにその理同しされは物の名をつけ詞をつくりたるはしめもとかならす對する物ありてはしめたる也對するとは即混するにて混せさせじかための名詞なりたとへは松といふ名は柏にもあらす榊にもあらすとの心より名つけたる也さて柏榊の形容にもかはり又その壽千年なるなといふ境あるかことし世に柏も榊もなきものならは松と名つくるにも及はぬ理なれは詞といへとも混せさらむか爲なりされは裏はかならすあるへきことにて裏あれは必境はあるへき事しるへし）しらすい

門ノ声チキ、シリメデ、オモハズントイヒタリシハ音ハアリナガラ關白殿下ニハヾカリタル也サレハンハ未發既發ノ間ノコエニテ口ヲヒラケバヤガテ字トナルヿコノ書サマニテ思フベキナリコノ考ナリガ伯父ナリシ洪園ニカタリタリケルニンハ漢土ニモ文字ハナキニヤ爾雅ニ𠯈輪トナ◯カ、ル字アルハンノ字ナリトイハレキ

ひにいひても猶そなはれる物なるへけれとこれをしらさる時は裏境はいはてもありぬへきを弁へすしていひかつ境もたゝぬ事のいはるへしまことに裏境をしる力かきりなきものにて我か智の及はぬ所まて導かるゝなりされは古歌をとくにはとくその眞にいたりおのかよむ哥には用なき所をはふきたらぬ所を補ふ事これにしくわさあるましき也 不足を補ひ無用をはふく事哥をよむに第一の練磨也その不足無用の場のみつからみゆる事いとかたき事なれと此力をもて糺せはいととくみゆへしかの五級の一の級といふはたらぬ所無用の所一字もなきをいふ也されはよく／＼これを練磨する事哥をよむに第一のつとめにてそのいさをし言に述かたしおほよそ哥をよむ事のかたきは此たらぬを補ふ事のかたき也無用をはふく事はその物のみえたにすれはそれをはふくはいと易し補ふ事のかたきといふはたとはゝ三十一字のうち十字無用の所あれはのこり廿一字をもて一首とせむに補ふへき事あらは論なしもしいかなる事を設てもあしき時はその廿一字を引のへて三十一字とすへきなりこれ哥よむ事のかたき所也もし又いひのへむ事もたえてなからむときはよせうたうちよせ冠なとよむへきなり古人の哥のよみかたこれをもてさとり知へしすへて古哥には脚結多く後世のうたは脚結すくなきも無用をはふきたらぬを補ひいひのふるよみかたのかはり來にたれは也後世たけたかしといふ事をいふもみな此いひのふる所にある事也たゝ此無用を除き不足を補ひいひのふるかよみかた也といふ事をしれはかの新古の体もたけの長短もみな末也これみな裏境の力よりいつるなれはゆめ／＼かろ／＼しく思ふましき也 しかれともかくもとよりそなはれる物なれはこれにほたさるゝ時は却て眞をうしなふ事あるへし詞はたゝなり出むにまかすへしされと又あまりなり出むにまかすれは必ようなき所たらぬ所いてくへけれは表裏境しらすはあるへからす裏境の力熟する時はひとり詞のうへのみならすよろつの事にわたりて理をつくさむにいさをしかきりなかるへしすなはち前にいふ心の限をつくすには此力にまさる事あるましき也かの　大穴牟遲命に　少彦名命の答へたま

ひしも成にのみ心ありては事全からすとの御心にて成不成（成は即表なり不成は即裏なり）をもてこたへ給ひしもの也すなはち表裏境はこれにもとつきたるにてわたくしにいふことにあらさるをしるへしされは返々表にのみ目をも心をもとゝむへからすしかりとて表を捨よとにはあらす三つは具しあひたる物なれはいつれを輕しいつれを重しともいひかたしたゝ後世の人の表にのみもはらなるさかをはかりみよとなり世に古歌の餘情をとけるふみともをみるにその一首のおほかたをみとりてのわさなれはけにとおほゆるもみえわりなしとみゆるも多しこれ皆裏境をもて察せさるか故になれるなりかし（或人餘情とはやかて裏をいふかと問ふ成元答へていはく裏も境もおしつかねては餘情といふへしされとくはしくいへは裏境は詞にそなはれる物にて餘情とはいひかたしその表裏境を概すれはかならす情しらるへき也此情を本として五典はしらるゝなりされは此五典をは餘情とはいふへしとは申き裏境五典ともに詞にかくれたるものなれは餘情ともいはむに理なきにあらねと餘情のむねとする物は五典なる事よく〱弁ふへし）

五典

哥は必五典よりいつるもの也されは哥よむにはまつ此五典をくはしく心えて後うたはよむへき也五典よりなり出さる歌も表よく調たるは五典あるかことくにもみゆる物なれと實と不實は　神のみそなはす所にわかるゝ事なれはこと更にいふに及はすよむ人の愼不愼たるへし五典とは〽第一ひとへ心〽第二時宜〽第三ひたふる心〽第四詠哥〽第五得眞これなり（感通を第六とすこれを五典の外とするは自然のさかひにしてもとめてうへからぬものなれはなりもとむれは却てうしなふ是感通のことわりなりされはたゝ五典の外として思ひてもとむましきなり）

おほよそ人つねにおのか心のすゝめる事にはかならす偏心

ある物なれは第一に偏心をたつさてその偏心時宜にはかならすたかふ物なれは神の提愛の御教をもてをさめ時宜にかなへむとする事第二たるへきわさ也その偏心提愛をもてをさめえて時宜をあやまらすは哥は無用なるへけれとそのおもひしみたる事からことわりありて私ならすおほゆる時はほと〳〵時宜をかへりみさるへしこれ第三たる所謂にてすなはちこれを一向心といふされとも慎ふかき人はこの一向心をいかてをさめむとおもふにかのことわりあるにひかれていかにもをさめむ事いとかたししかりとて時宜はやふるへからねは私爲にかへてその一向心をは哥によみいつるより外の道なし此故に第四とす哥とよみいつる時はかの一向心なくさみいきほひくじけていふへからすすへからぬ時宜を全うせらるへけれは第五を得眞とす（此五典くはしくいへは第一は人身にある所のひとへ心にて哥となる種也第五は哥となりてつうへの道なれは哥に切なるは第二第三第四なりされとも第一を論し第五を具せされはこの道の本意にたかふと知へし）この五典詠哥の大規範にしてその意趣言をもてつくしかたしすへて此一部にいふ所の道義たゝ此五典につゝまれり五典をしりて以上の論を味はひ以上の論をしりて五典をあちはふへきなり

（校者云以下別紙細書挿入ナリ）

北邊隨筆ニ云ク、父云アカリテノ世ニハ人ノコヱ五十アリケラシソノ後フタツハヤウ〳〵ウセテアメツチノ哥ノ頃ハ四十八ニナリ父ソレカ父ヒトツウセタル世ニイロハノ哥ハイテキタリイロハノ哥四十七ノウチニ今ハヨツウセテ四十四ノミソアルカクノコトク音ノウセユクニシタカヒテカムナツカヒトイフコトイテキニタリカムナ女モジナドハイフカヒナキ女ワラハヘマテモコヽロエヤスクモ

ヲヒヤスカラムカ爲ニ設タルヲ今ハカムナカクヿタニナラヒアルヿノヤウニナリタルハ口ニイフ所ミタリカハシクトリテカムナモジサタメタル世トタカヒタレハ也世ウツリユカハ四十四ノウチ又ゾウセナンカクウセユクヿコトモシニハアラズア經ヤ經ワ經「五十韻ヲハ亾父經緯トイヘリ」コノミツノ十五音ノウチナリ今ハア經ハミナ殘リヤ經ニハイエウセテ三音アリワ經ニハヰノミノコリテヰウエヲ皆ウセタリイロハノ哥ノヰヤ經ノイウセテヰフタツニナリワ經ノウウセテア經ノウヒトツニナリヤ經ノエウセテア經ノエワ經ノヱフタツニナリアハセテ三モジウシナハレタルモ世スデニクダリタレバナリ今ハマタイロハ哥ノヰヱヲトモニウセタルカユヱニカムナツカヒトイフヿイテキサテノチハ口舌ニワカチタル物也トイフヿヲモシラヌヤウニナリテカムナヲツカフヰニサタムルモシノヤウニオモヘルカユヱニ明魏ハサル哥クチノ人ニオハシケレドモカムナツカヒハイルマシキヨシイハレタルハナケク、キヿナリタトヘハ今イクヨロヅヨヲヘテヤワアノ三音モジハカハレドモコヱハウセテアトナリヲヨノ二字モコヱウセタラム時明魏ニシタカハ、イニシヘヲシタヒコトヲサタメム人ナニ、ヨリテカ言ノコ、ロヲモワキマヘマシコトノ源ヲキハメズシテ流ヲシタカヒテ末ニオモムク人ハ明魏カヒカコトヲイヒ出ツベシヨクシラズハアルベカラズ此ミツヲウシナヘルノミナラズコヱノ輕重ヲウシナヘルヿ多キニヨリテイヨ〳〵假名ツカヒノヿシゲクナレリ輕重トハハヒフヘホノワヰウヱヲニマカフヿナリ「御杖云ハヒフヘホヲワヰウヱヲノ如クイフハイハユル清濁音也」コレラサヘイニシヘハサタカニ口舌ニワカチタルヲトナヘウシナヒテ後ハカムナニテサタムルコトトハナリニタリイニシヘ神樂催馬樂ナトヲウタフカ如クニヘコヒハ子火ト聞エテコヰトハイハズヘアフモ安婦トキコエテオウトハキコエサルベシコレラノマトヒナカリケルユヱニイニシヘハイフカヒナキワラハヘモシカ、ヌ女ナドノ口ニマカセテヨミタル哥モカムナノタカヒタルヿハナカリシ今ハイウソクノ人タニカムナツカヒヲマネヒキハメザレハタカフヿノオホキハ口ニナラハズシテ書ニナラフカ故ナリ枕草紙ニ〳〵エヌタキトイフ人ノ名アリカ、ル名ノ今ノ世ニアリテ名ノリタラハエハイツレノエゾトトヒ聞テ後ナラデハカムナニモ女モジニハカ、ルマシキヲソノ頃ハヤスラカニ口ニキコエタレハ疑ナカリシナリ今ノ世ノ人ノ名ニ治エ門アリ次エ門アリ京人ハタ、同シヤウニヨフ故ニシタシカラヌ人ハ消息ナトニモサタメカネテ次郎ノ次ヲツキタル人ニ治部ノ治ヲカキ治エ門ニ次エ門トカキタカヘテヤレトモソノ人モコト人カナトモアヤシマズミツカラ次治ナトサタメテカキタルヲミシリタル人ハシメテ疑ナクナルヿワツラハシクモ荒涼ニモオホユルヲ笠(筑)紫人ハヨク口ニワケヲ治ハチモジノ濁レル次ハシモシノ濁レル也トヨク聞ユルハゲニ笠(筑)紫ハミカドノモトツ御國ナルシルシナルベシ和名抄ニ諸國ノ郡名郷名ナトヲカケルニカムナツカヒタカヒタルアリコレハソノ國々ノ詞タミテイヒウシナヘルヲミセタルナリ今ノ人モ郷ノ詞ヒナノ詞カハレル故ニイフ所ミナ和

名抄ノタクヒニナレリカムナツカヒハ京極黃門ノサタメサセタマヒテ後ソノサタマチ〳〵ニシテオホツカナカリシヲチカキ世契沖カヨクイヒワキマヘタルニヨリハシメテコトサタマレレトイニシヘヨリ理ニツキテモシヲ定メラレシヿトノミ心得ラレケルニヤロ角ニワカツヘキヿトハイヘル人ナシ千慮ノ一失トイフベシマタア經ノオワ經ノヲチオキタカヘ來レルヲワキマヘタル人ナシ今紀伊基肆ノタクヒヲモテ嚼呹ヲオモヒ文モジアマリ反切ノヨシヲオモヒカツ催馬樂ノ譜ナトニモヲコソトノノ列ノモシヲ引声スルニ乎々トハカヽズシテ於々トノミカキタルニヲハジメテコレヲサタム後ノ人ヨクミサタメヨ「御杖云此オヲノ置所タカヘルヿモマタ他家ニ同説アリトゾ人ノ説ナハ亾父カク書ヘキヤウナシナホカノモシアマリノ説ナドモタヽモノヽハシニカキツケ置ナ今マテ世ニシメサヽリシカハ亾父カ説トハシレルヒトノナキナリケリ」木居ヲ戀ニヨセ藍ヲ逢ニヨセタルハモトヨリ誤ナレトサスカニ中古ノヒトノ誤ニテイニシヘノオモカケアリテヨセタルコヰアヰミナヰナリヰハカロク居チウヘノ齒ニアテ、イフヒノ輕音モイニシヘハ今ノヤウニマタクイトハ聞エズシテ居ヲ齒ニアテ、重クイヒタルベケレハヰヲヒニカヨハセタルハ今ノ人ノミタリカハシキニハイタクタウヒテシカルベキヿナリサレハヨヽノ先達モモチヒラレタリコレナラズトモヰヲヒニハオシテモチフルモ心ニクカルベシトイヘリ「御杖因ニ云コレラノ説ニヨリテゲニ假名ツカヒハ音ヲモテコソサタムヘカリケレトサトリテホノレリカヽリシヨリ經緯ニ心ヲイレテオモヒヨレルヿモアレトコヽニハモラシツ

百八一首燈

草稿

百人一首登裳新備

平安　富士谷成元　述

一天智天皇

秋の田の（春夏冬ノ田ニ對シタル也コノ三季ニ對スレハ秋ノ田ハコトニ捨オクベカラヌ境アリ）かりほのいほの（平生スム家ヲ裏ニ持テイヘル也コレハ重詞ナリ庵ニモ一生スマン爲ノ菴モアレハ借廬ノ菴トワケテイヘルナリ後世ハカヤウニイハデモキコユル事ノヤウナレド古ハスヘテ詞カヤウニソノ別コマカ也ツネノ家ニ對スレハ万事不自由ニ不弁ナル境アリ）苫を（苫）が（校者云「此字注すへし」トアリ）あらみ（藁ブキ板ブキ瓦ブキナトノ屋根ヲ裏ニ持タリコレラハ皆コマカニテ間ノ透ナキ事ヲ裏トセリ屋根ノ透ナキニ對スレハ至テワヒシキ境アリ）わか衣手は露にぬれつゝ（田中ノカリ菴ニテ田ヲ守ル我袖ニ對シテ田ナドモ守ラヌ人ノ袖ヲ心ニ持テイヘルナリ衣手トハ袖ノ事也袖トイフモ衣ノ手トイフ事ナリ衣ヲ古ハソトイヘリ〳〵御ぞ〳〵衣通姫ナトイヘルスナハチコレナリイツマデモ露ニヌル、アンジモナキヲ裏ニ持テイヘリ〳〵此つゝ一首ヲ活カシタリつゝハ事ノ同シ事ノツ、キテ終ナキ様子ヲイフ脚結ナレハ露ニヌレナカラワカ業ヲ守リ居ル事ヲ述タルナリ袖ノヌル、案ジモナキニ對スレハ誰ニテモジボ〳〵トシテ心ワルクイヤナル境アリ）

田の實のる秋になれは鳥鹿なとにくひあらされましとて田の中にたゝ秋ばかり番をするためのかり小屋をたてゝ夜晝そのなかに番をして居れば右のとほりたゝ當座の小屋ゆゑ屋根は苫をかけたるばかりなれは透あひおほくて露の洩らぬ間もなく始終袖をぬらされてさて〳〵かやうの難義なる事はなし百姓にてなき人はいふに及はす百姓にても田の番をするほとの身分にてなけね（ママ）ば田の番も人にさせなに事も自由なるつねの家のうちにすみて居れは藁ぶき瓦ぶきなどにて屋根のすきあひもなき故に露のもる事もなければ袖のぬれうかと思ふあんじもなく始終安閑とくらすならんしかれともわが家業わか身分からあるべきはづの事也とおもへはほかの人もうらやましからすたゝこれを大切につとむへき事なりと思ふとの心なりつゝの脚結にてこの術なさをのかれうともせすよくわか身の分量をうしなはさる所をみせたまへりたれあつて苫をいとひ樂をねかはぬものなからん身のほとをしりて苦にたのしめる心よく〳〵思ふへしこれは天智天皇百姓の身になりてよみたまへる御哥也古哥には織女にかはりてよめる歌もあり

みなその物の心をふかく思ひやるあまりに代りてよむ也此天皇の民をあはれみたまひしりにましまし〳〵ける事此一首にても知へし

二　持統天皇

夏來ルノ冠詞也

春過て 春ノマダ過ヌ間ヲ裏トセリ春ノ間ノヿヲ心ニ持テバ春ノ過タルガ惜シキ境アリ 夏き(ガ)たるらし(ヿツウナ) ツネノ本ニハきにけらしトアレト万葉夏來良之トアリテきにけらしトヨムマシキヿハ改觀抄ニクハシクイハレタリ夏ハイマダ來マジト思フ心ヲ裏トセリサレハ夏ノ來タルヿ思カケヌ心境トナレリ 但或人問テイフニハ春過トカ夏來ルトカ片方ナイハ、片方ハ裏ニ持テキコユヘケレハコレハ故アルヿカトイフ成元答テ云コレノミナラス万葉ニハ〽み冬つき春さりくれは〽ふゆすきて春はきぬらしナト多キヿ也イカニモイヘハサヤウノ物ナレト後世トチガヒテ詞ノ条理正シキ古ノヿナレハ理ナクテハカナフベカラズトニモイヒシ如ク春過てト斗ニテハ夏ノ來ルヿノ思カケヌ心ナク夏來たるらしト斗ニテハ春ノ尽タルガ惜シキ心ナケネハ(マヽ)コレラ皆ウヤウニ古ハワサト重ネタルヤウニ云タルモノ也 しろたへの 衣袖ナトノ冠辞ナリたへトハ布ノ古名ナリ白布ヲハ衣ニシタルガ本ナレハナリ冠辞ハ後世ニテハタトヘハ梓弓トヨメハいるはるをすナト縁ツヨカラネハヨムヘカラストイフハ大ニアヤマリナリコレハ一首ニワサト用ナキ詞ヲヨミイルヽガ主意ナレハカヘツテアマリ一首ノ用ニ立タルハイヤナルヿナリ哥トイフ物イハネハキコエスイヘハ餘情ヲ損ソシカレ𪜈三十一字ト定マレルヿナレハマンザラニイハズトモオカレズ一句二句足ラヌナリニモオカレヌ故ニイヒテ感通ヲ妨ケンヨリハトテワザ〳〵ト一首ニ無用ナル詞ヲ入レタル物ニテ此道ノ思半ニスクヘキ物也猶クハシクハ口授スヘシ 衣さらせり コレモ万葉ニ衣乾有トアルヲ今ノヨミヤウハ理ナキヿ也コトニてふトイフ詞古ノ心トモタカヘリカタ〳〵用ウヘカラヌヿ也横ナトニ衣ヲイレオキタルヲ裏トスサレハカビナドシテソノマヽハ着ガタキ境アリ あめのかく山 デあまのトヨムヿコレニカキラス理ナシのトイフ脚結名ヲウクル例也タトヒ装ナトニテモヤハリ体ニシテウクル也コレヲモツテシルヘシコレハ天皇ノオハシマス藤原宮ト方角ヲ以テ裏ニ持タマヘルナリサレハ宮中トチカヒテ香山ノアタリハ時ノウツルヲ早ク知タル心境トナレリ

まだ春なりとおもふて居たるうちにはや夏になりたる事とみえてかぐ山の近所なる家々のものともははやく時の來たる事をしりて去年より入置たる夏の着物ともをほしたるが此藤原の宮からみえるが今衣をはすものともは時のはやくうつるをは合点してゐれはこそかやうに着物をもほせはめい〳〵の家業もおこたるまし春はたゞ花の色に心をうつし鳥のねをきゝとれて何事をもせすうか〳〵とたのしみ居たるに思かけなう夏になりたるをおもへは四季はかやうにつか〳〵とうつりゆく物なれはたゞうか〳〵と月日をおくるへき事ならす春のうちをむさ〳〵とくらしたる事の殘念さよ年月はかやうにはやくうつりゆく物也といふ事を合点してゐねは家業もつとめも仕おくれになりてむだなる人にて一生をはるへしおそれつゝしむへき事やといふ心也常にしてかやうの御心つきたまふ時は政の御おこたりもあるへからすいと有かたき御哥なり

三　柿本人麿　此一首人麿の哥ならさる事契沖くはしくいはれたり

あしひきの　山のまくら詞なり公望トイフ人ノ日本紀私記ニ山行之時引ﾚ足故トカ、レタルコレ古キ説ナリシカレ圧コレヲ信用スヘクモオホエス只イカナルヿトモシラス山ノ冠辞也ト思フヘシ上ニモイフ如ク一首ノ心ヲ妨ヌヤウニワサト無益ノ詞ヲヨミ入ル、ヿナレハ心ハシラストモヿ足リヌヘシ　山鳥の尾のしたり尾の　山鳥ハ尾至ツテ長キ物ナレハ長キトイハン爲ニイヘルニテ一首ノ上ニ心ハナシシタリハ下垂ノ心ニテしたり柳ナトイフニ同シコレハヨセ哥トテイハヽ下句斗ノ哥ナリサレト文字ノ数タラネハ無益ノ物ヲ出シテ数ヲアハセタルモノ也古人ハヨセ哥多シ後世ハエヨマスコレ全古人ハ餘情ヲムネトシタルト後世ハ詞(マヽ)ノ上ヲミカクトノ別ヨリシカルモノ也ソノ故ハマテトモ人ノツレナク來ヌ心ナトヲイハヽ上句ハ十分出來ヌヘシシカレ圧ヒトリカネントイフニテ十分ニソノ心アレハイヘハ餘情ヲソコナフ故ニ上ヲハトントヨセ斗ニシタルモノ也　なか〱し夜を　短キ夜ヲ裏トセリサレハ短夜ニテサヘアルニマシテ明シカタカルヘキ心ヲ境トセリ　ひとりかもねん　●サテモ　ヨウカ　思フ人ト二人ネタキヲ裏トセリサレハ二人ネルニ對シテ待ワヒタルヒトリネノ苦シキ境アリ山鳥ハ雄雌ヘタテヽ獨ヌル物ナレハ上ノヨセヲ置レタルト古註ニアリナルホトサモアルヘシシカレ圧ソレニヨツテ上ヲオキタルト思ハヽ父理タカフヘシコレハ自ラニヨリタル也山鳥ニヨセネハ一首ノキコエヌニモアラス

此明かたき秋のよの夜寒なるにたヽわれはかりひとりねをせねばならぬ事かやこのよさむさもたへかたきにたヽひとりあかしかねて待ならんと推量する心あるならはいかにつれなき人なりとももはや來るへき事なりしかれともわかおもふほと人はおもはす人の心をわかおもふやうにはせられぬ物なるよといひたる心也恨めるやうにて詞に恨なけれはうらめるにあらすしかれともその人此哥を聞たらは身をきらるヽやうにこそあらめ人情なれは恨めしからぬ事はなき事なれとふかく詞のうちに心を引入れてわれはわれ人は人にてわかおもふやうに無理にする事なりかたき道を感したるあはれともいはむかたなし

四　山ノ邊ノ赤人

田子のうらに　往還ノ道筋ヲ裏ニ持タルナリソノ往還ニ對シテ思ヘハ田子ノ浦ハスクレタル所ナルヿ境トナレリ　うちいてゝみれは　ユクヘキ道外ニアル心ヲ持テ云ヘル也ソノユクヘキ道アルニ對スレハ心ヲ別ニ起シワザ〱ト來タル境アリ　ましろにそ　万葉カクノ如シ終ノ句モタカヘリ此句モしろたへにトハイハテのトナホシ玉ヘルヿイカ、ナル上ニ終ノ句意ヲ思ヘハけるトイフ脚結ニ赤人ノ感セラレタル所ハコモツテアルモノヲつゝトナホサバソノ作者ノ主意トハ外ノ物ニナル故ニ今ハヤハリ万葉ノ通リヲ用ルナリまハ眞ニテ白キカ内ニモ白キ心ナリコレハ山ノ色元來緑ナルヘキヿヲ裏トスサレハフト目ニモ心ニモトマレル境アリ　ふしのたかねに　カノ道筋ニ見來レル山々ヲ

裏トスサレハ外ノ山々トハ格
外ナルヿアル心境トナレリ雪のふりける（ガ）（ツテアルヿシヤ）
雪ノフルマジキ心ヲ裏トスサレハフルマシキ雪ナルニト思フニ對スレハ理屈ノ外ナ
ル心境トナレリ此一句乃裏境ヲ以テミレハ赤人ノコノ富士ヲ見ラレタル時ハ四五六
七八月ナトノ世上ニ雪ノ怪我ニモ
フルマシキ時節ナルヿ明白ナリ

かねて聞をよんだる所なれは田子のうらへたちよりて見たる所にふしの峯には眞白に雪がふりてある事よ此節の事なれは雪がふつてあらうとは夢にもしらす外の山の通りにふしも青々とあるべしと思ひゐたるがさて〳〵世には理屈にかゝはらぬ事のあるものかなこれなれは何事にてもその證據をも見ずにあてずいに理屈おしはせられぬものじやぞかのゆくへき道筋をゆき過てしまはゞかやうなる道理も合点のゆく事もあるまじきにようこそわざ〳〵たちよりてみたる事かなといふ心なり

五　猿丸大夫

おく山に　スヘテ世中ノ市住其外山里ナラヌ所ニ對シテイヘリサレハ人跡モタエ物スコクサヒシキ境アルナリ　もみぢふみわけ（散タル）（ヲ）（テ）　紅葉ノ散ラヌサキニ對シテイヘリサレハ紅葉ノ梢ニアル内ニハ深山トテモミニクル人モア
ルヘキニモハヤソノタノミモナキ心ヲ境トセリコレハ我フミワクル也鹿ニハアラズコノ一句モ後世ナラハ散タルモミヂヲフミワケ
トイハネハキコエヌヿ也ト思フヘシカヤウノヿ此一句ニテモ詞ノ用不用并ニ境ニテイハテモキコユルヿ安心ナルヿハシルヘシフミ
分トイフカラニハ梢ニアル
紅葉ナランヤウナケレハ也　なくしかのこゑきく時そ　鹿ノナク声モキコエヌ時刻ヲ裏トスサレハ鹿ノナカヌ時
トハ格別アハレモ催サレテ物サヒシサ一倍ナル境アリ　秋はかな
しき　秋ハ春夏冬ニ對シテ物ゴトニカナシク物ワヒシキ時節ナル境アリカナシキハカナシカラヌニ對シテ世ニカナシトイフハトルニ
モ足ラストイフ心ヲ境トセリその字トはノ字ト此哥ノ眼ナリコノ二字ニテ秋モ眞實カナシキハコノ時ナリトイフ心ヲサトシタ
ルモノ
ナリ

人のゆきゝもなく家なともなき山のおくへ來て紅葉もはやみにくる人もなく散しきたるをふみ分〳〵してみれは身もよもあられすさひしく心ぼそいに鹿のこゑまて物かなしげになくが聞ゆる時分の心もちは秋は全体かなしい時節なれともまことに秋のかなしいといふは今なりこれからみれは市の中に住て紅葉もいまた枝にさかりにてこのあはれけなる鹿のこゑなとも聞えぬ所にすみて秋はかなしき物也と思ひて朝ゆふなけきたりしは物の數にてもなしこれを思へはかなしき事も段々上のある事をしれは今まて堪かたきやうに思ひしこともさほとになくおもひしらるゝ物じやよといふ心なり

六　中納言家持

かさゝぎのわたせる橋に 淮南子ニ七月七日夜烏鵲塡河成橋トアルガ本文ニテ七夕ニカキルヘキヿナレト闇夜ノ空ノ黒キヲ思ヨセテツネニモヨムヿナリサレハ鵲ニモ橋ニモサセル詮ハナクテタヽ天ニトイフヲカヤウニ形容シテヨミタルモノナリコノ故ニコレハ地上ニ對シテイヘル也地上ニ對スレハ霜雨雪霰ナトモ地ヨリ先ニマヅ天ニ滿ルコトヲ境トシタルナリ おく霜の（ガ） コレモ實ニオクト云ニハアラス霜フラントスル時天白クナルヲハ形容シテオク霜トイハレタル也コレハ地上イマタ霜ヲ見サルヲ裏トスサレハ思カケヌ境アルナリ しろきを（イノ）みれは 地上霜ヲミスシテ黒キヲ裏トセリコレニ對スレハハツキリト目ニタチタル境アルナリ 夜そ（ガナニカシラズ）ふけにける（テシマウタヿ）（シヤ） 夜未更サルト思ヘル心ヲ裏トス未更トオモフニ對スレハネルヘキ時分ニネヌ境アリコノ哥ハ思フ人ヲ待フケタル哥ナルヘシ

こよひ來うといひたれは今やくと待てゐるにふと空をみたるに霜やかてふらうとみえて闇のよの空一面に白くなりたるをみれはこれは思の外よほともはや夜もふけてある事じやさてもくわか一途に人をまつ心から夜のかやうにふけたるをもしらさりける事のはかなさよこれをおもへはわが慾心をいちづにおもふ時はうかくとおきてゐてもはや寢てしまうへき時刻の來たる事もしらなんた事かなこれではいかやうの大事の事にも時をとりはづそうもしれずよくく心をつけねはならぬことなりと思へる心なりく戀の哥すへてかやうに道理におもひあたれは人にもまことの至極したる所しせんとあらはるゝなりされは何事にてもあれ誠至極すれは道の感おこるもの也されは慾も道にいる門也道も慾なければあらはれすこれ我國わか道のをしへなり

七 安倍仲麿

あまのはら（ヲ） 日本國ニ對シテ云ヘリサレハ故郷ニ遙ニシテイツカヘルヘキヿソト心ホソクカナシキ心境トナレリ天ノ原トハ只天ノヿ也ヒロヒロトシタル所ヲハスヘテ原トイフナリ万葉ニハ國原ナトモヨメリ貫之ノ土佐日記ニハコノ一句あをうなはらトアリコレ又對 ふりさけ（フリアヲムイテ）みれは 故郷ヲ思フ心ニ對シテイヘリサレハホトナク歸ルヘキ故郷ナレ𪜈海上トホク隔タレハ郷思ノ心ニコメテ居カタキ境アリふりさけハ万葉ニ振離振放振仰ナト書テ遠キ物ヲミルニハ後ヘソリカヘルヤウニシテミルヲ云也此間ニ月カ出タルガ此月ハトイフヿヲ略シタル心トミルヘシモ境モコレニ同シ かすがなる（ニアル） 春日ハ大和ニテスナハチ仲麿ノ故郷ナリコレハ今居ル諸越ノ明州ニ對シテイヘル也サレハ思ヘトモ故郷ノ見エサルナゲキ境トナリテコモレリ 三笠の山にいでし（出タ）月かも（カサテモ） 浪ノ上ヨリ出ルニ對シテイヘリ若カリシ時分故郷ニテ見ナラヒタルトハ月ノ出汐ノサマ別物ノヤウナルサマニツケテ同シ月ナラハセメテ旅情ヲモナクサムヘキニト思フ境アリ

もはや舟にのるべけれとも何里といふ事をもしらぬ海上いつ故郷へかへりつくへき事ともはかりかたきによつてせめての事にまつ日本の方の空をなかめやりたるにわかゝつた時分故郷にて月の出汐をみなれたにはおほきにちがひて浪の中から出くる月はこれは故郷の春日の三笠山から出たとやはり同し月か別の月かさてもく故郷のさまにはかはりたる事かないつかへるへきともはかりかたきことをおもへは外に故郷からの馴染とてもなしせめて月なりとも故郷にてみた月と同し月にてあるならは月をなりと

もわか心だよりにしたい事じやむかし故郷にてはたゝかほどの事ともしらす三笠山よりいつる月をばうか〳〵とみたりし事のはかなさよこれをおもへは人の身はいかやうのめにあはうもしれぬ事なれはつね無事なる時からちよとしたる物とてもおろそかにおもふへき事にてはあらすよといふ心なり

八　喜撰法師

わか庵は（世人ノ居住ニ對シテイヘリサレハ世人居所ニヨリテ住ヨキヿアルヤウニ思フヘケレ圧トノ心ヲ境ニモテリ）都のたつみ（デ）（都ヲハルカニハナレテ人倫絶タル世外ノ地ニ對シテイヘリサレハ都カラ格別遠方ニアモナキニトイフ心ヲ境トセリ）しかそすむ（コノヤウニナニカシラス）（ガ）（世人ノ推量ニ住ヨクハアルマシク思フニ對シテイヘリサレハ外カラ思フトハチカウタモノナルヲハ境トシテイヘル也）よを宇治山と（ソレニ）（此句世をうき物とトヨミタル心ナリ宇治山トイフヲ重ク世トイフヲ輕クミルヘカラス一首ノ大意ニタカフ也古人ノ説ニモウチ山ノ方ヲ主トシタル説アリ用ウベカラス宇治山ハ幸ソノ所ノ名ナレハウチヨセテイヘルマテニテ上ニモイフ如ク只世をうき物とトイフ心ト思フヘシ世ヲ主トシ山ヲ客トセサレハ喜撰ノ魂ヲ失フヘキヿナリコレハ世ノ安樂ニ思ハル、ニ對シテイヘルナリサレハ世ヲウキ物ト心ウルモ一概ナリ心ノ持ヤウニアルヿゾトイフ境アリ）人はいふなり（ワイ）（我ハサヤウニハ思ハストイフ心ヲ裏トセリサレハ人間一生ノ内ニワタルヿナレハ大事ノヿ也現世安穏ナレハ後世モ亦安穏ナルヘキ心ヲ境トセリ　コノ句古人モイハレタル如ク人はいへともトイフヘキ所ナリ　古今ノ序ニモ喜撰ノ哥ヲ評シテ　秋の月をみるにあかつきの雲にあへるか如しトハイハレタレ圧人はいへともトヨマハ只理ノ上ノ詞トナルヘシいふなりトヨメル心ハ今世人ノサヤウニイヒ居ルヲサナカラサシテイヘルナリ一首ノ餘情雲泥ナリサレハ詞ヲワサト髣髴タルヤウニスルハ　此道ノ邪路ニテ言ヲ巧ニスルトイフモノナレトコレハソレニハチカヒテタシカニイハ、コノ哥ノ感失ハルヘシフカク思フヘキヿ也）

手前が庵をこしらへてすむ所はさして都から格別とりはなれたといふほとの所にてもない都のつい巽にあたるうち山なれともかやうに世をや〳〵とのとかに住わたるにそれに世上は住にくいものじやと人かいふ事はいの市中に住居してさま〳〵の事にかゝはる故に色々とくつたくもある事なれはどこぞ人もこぬやうなる所へもいきて住ひしたらは世のういといふ事もあるまいにと人みなおもふ事じやけれどこのうち山とてもさほと世の外といふではなしこれをおもへは住所による事にてはなし佛も仰られたることとく人はみなわか苦にてわか苦をたすからうとする故にわか心の事は吟味もせすに世のなかをうらむ也さやうの心にてはたとひいかやうの所に庵をこしらへてすまひするとても世はすまひよきものじやと合点のゆく事はあるまいとよめるなり

九　小野小町

はなの色は物思ヒノ種ニ對シテイヘリサレハ皆ノ花ノ色ナレハ何カサシオイテアクマテモミルヘキ物ナル境ヲモテリうつりにけりな（ツテシマウタ丁ジヤナア）うつるハカハルヲ云コレハ色ノウルハシクサカリナルニムカヘテイヘル也サレハ至テヲシキ境アリにけりノ脚結ノ心物事ノナリ果タルガ思ガケナキ心也なトイフ脚結ハワカ思シメタル所ヲ出テワカ手ノトヽカヌ物ニナリタル丁ヲ嘆スル心也サレハコノ脚結ニテマタ色ナトモカハルコトモアルマイト思フテ居タル心ノ筋ヲアカクオトロキテ残念ナル心アル也いたつらに（ムザ\/ト）明暮花ヲミテ居タキ丁ヲ裏トスサレハフカク後悔シタル心ヲ境トセリわが身よにふるなかめせしまに（ヲシテヰタ間ニ）ワカ身ノ此世ニナキニ對シテイヘリサレハワカ身ノ世上ヲワタルニツケテハサリガタク捨オキガタキ義理ドモアルヨリ自然トワカ身ニカヽリ來ル丁ハ心ニカヽリテ氣モトケヤラズウツカリト案シ入テ居タル間ノ淺マシク據ナキ丁ナル丁ヲ境トセリなかめトハ物丁ノフカク氣ニカヽリテドコヲ見ルトモナクウツカリトシテ居ル丁ヲ云サテ春雨ノナガ\/ト降レハ花ノソコナハレルヨリなかめヲ霖ニヨセ經ルヲ降ルニヨセラレタルナリ

春とてもわつかの日數花とてもしはらくの盛なれは明くれみて居たき事なるになましひなるわか身のありて世上をわたるほとに何やかやさりかたき事とも身にかゝり來れはその事とも氣にかゝりてしせんとあんじ入られてうつかりとして居たあひだにかのわつかなる春の日をは花をもみすにむざ\/とくらしたる所に花はもはや色かはりはてたる事の残念さよしかれとも一向わか身がなきならば格別此からだのあるからは世上の義理もやまねはならぬ事にて春中花をみてくらす事もならぬもやはり人の道なるべしこれをおもへはわかおもふ通のことの無據義理にてしられぬも道理のうへの事にてよぎなきことゝおもひあきらむへき事じやとおもふといふ心なり

十　蟬丸

これやこの（ガウノ）未レ然ウチニソレヲフカク心ニ思ヒオキタルガソトソノ物ニサシムカフテカノ未然ニ思ヒオキタル丁ニ思ヒアタリナカラ決シカタキ時ニイフ詞ナリコレハムカフノ物ノ正面ヲハ裏ニ持テイフ心ナリサレハモシワガ思フ所ニ的中シタラハフカク嬉シカルヘキ境ヲ含メリゆくもかへるもゆくハカヘルヲ裏トシかへるハユクヲ裏トスサレハ裏ヲアラハシタルヤウナレトコレハ物事ヲツクサントスル時ハ裏マテモイフナリ此故ニゆくもかへるもカヘルモユクモトイフ心ナリ

ユクトカヘルトハコトノ外道ノチカウタル丁ナレトコレヲミレハ只同シ物ナルヨトノ心ヲ境トセリ

コノ故ニコヽヲトホル人ハ一人モノコラス皆モレヌコヽロヲハ境トシテイヘルナリわかれてはコノ句ヲ契沖ハ蟬丸ノ心ニ行カフ人ノミエスナルヲ別ルヽト思フ也イハレタレドスコシマハリ遠ナルヤウナリヤハリ行來ノ人ト人トガ蟬丸ノ眼前ニテユキチカフヲ別ルトイヘルナルヘシ下ノあふトイフモ同シコレハ逢アハトイフヲ裏トスコレ又下ニあふトイフ丁アレ圧上ノゆくもかへるもニ同シク丁ヲ尽シ概シテイヘルナリサレハ又必ワカルヽカ必ワカルヽニナモナキヨ（ママ）ト思フ心ヲ境トセリしるもしらぬもコレ又知ルハ知ラヌヲ裏トシしらぬハ知ルヲ裏トス上ト同シク概シタルナリシルトシラヌ

トハコトノ外ノ遠ナレト必會フヲミレハ近付モ近付ナラヌモワカレハナキヿナルヨト観シタル心ヲ境トセリ　あふ坂の關カ行アフヲ遇坂ノ名ニヨセタルナリコレハワカル、ヲ裏トシテアフモ必アフニテモナシ又ワカルレハ喜ヘキヿニモアラスト観シタル心ヲ境トセリあふ坂の關ト名ヲヨメルハ他ノ所々ニ對シテイヘルナリ知不知往還會離等ノヿニツキテあふ坂ハ都ヘ東北国ヨリノ喉ナレハ往來多キニツケテ観念ヲオコサシムルハ全アフ坂ノ功ナルヿヲヨロコヘル心ヲ境トセリ契沖ハあふ坂ノ關ハモト神功紀ニ忍熊王ト武内宿禰ト兩軍コ、ニテ行アヒテ戰ソニヨリテ遇坂ト名ツクトアルヲ以テアフ坂ノ名ハソノ本カクノ如クナレト蟬丸新意ヲオコシテ人々ノ往還ニシルシラヌ行アフヨリノ名歟トイハレタル也ト註セラレタルハ今少シ見所アサクコソオホユレコレハコノ哥ハ只これやこのあふ坂の關トハカリノ哥ナリソノ中へゆくもかへるも別てはしるもしらぬもトイフ二句ヲ挾タル哥ナリサレハ名ノヿニテハナシ蟬丸アフ坂へ來テコレカノ名高クキ、オキシあふ坂の關カト思ハレタルマテニテサテソノ土地ノサマ往來ニツケテ觀念セラル、ヿヲヨロコハレタルナリサテコソあふ坂ノ關ニ庵ヲムスハレケラシ唯名ハカリノヿニテハソコニ住ントマテハオモフマジクヤ

これかかの前かたから名たかく聞及ひたるあふ坂の關とはこゝの事かこゝは東国北國への咽なれは都へ出入する人おひたゝしきにつけて思ふに都より田舍へゆきたる人はまたかへり田舍より都へゆく人は又田舍へかへりかへりたるは又ゆき行たるは又かへりなとゆくかと思へはもとり定めなくあるにその人々たかひに近つきなるもあり近付にてないもあれとあふ坂にて行あひては別れわかれてはまた行あふをみれは近つきも近付にてなきもたゝかはることもなしこれによつてみれはゆくも行と定まりたる事もなしかへるもかへると定めたる事もなし近つきもわかるれはしらぬと同し事也近付にてなき人も行あへは近付同前になつかしく思はれあふかと思へはあふにてもなし別るゝかと思へはわかるゝにてもなしあふも別るゝも定めたる事なきはこれ人界の有様ぞと觀念しられる事かな土地のさまはかりの事ならすさて／＼うれしき所へ來たる事かなたゝ名たかく斗聞及ひてかやうの事まてあらうとは思はさりし事よこれを思へはいつかたにてもそこのけしきなとをたゝひとゝほりにみれはひとゝほりなれとよく／＼觀すれは格別の事ある物なるよといふ心也今昔物語第四に天笠の陁樓摩和尚五天笠にゆかぬ所なくめくりてその所々にてかろ／＼しくあなとり居る比丘ともの妙処をみあらはしつゝわか觀念をすゝめられけるも思ひあはされたり

十一參議篁

わたのはらコレハ隠岐國ニナカサレケル時ノ哥即古今集旅ノ部ノ詞書ニ隠岐の國になかされける時ふねにのりていてたつとて京なる人のもとにつかはしけるトアリコレハ難波ニテ舟ニノラレケル時ニヨマレタルナルヘシわたのはらハ海ノヿ也たノ字濁ルヘカラス万葉ニモ（校者云此傍ニ「古事記」トアリ）日本紀ナトニモ綿ト假名ニカケル所アリわたハ渡の下畧也川江湖ナトノ中ニモ渡リノ第一ナレハ打任セテ海ヲワタト云也万葉ニハつしまのわたりわたなかにナトモイヘリコレハ都ニ對シテイヘルナリサレハ都ヲ思ヘトカヒナク行末モ何ノ便モナク心ホソキ心モチヲ境トシタルナリ　八十嶋かけて隠岐マテノ海上ニアマタノ嶋々アリソレラノ嶋々ヲ過ユクベキヿヲ八十嶋かけてトハイヘル也隠岐マテノ海路ノ遠キヲ云コレハ都ヘコソ近ツク

ヤウニアラマホシキ心ヲ對トシテイヘルナリサレハイト、都ハルカニナリテ便サヘモシカタクナリユカンカナシサヲ境トス 舟ヲ漕出ぬと（シテシマウタト） 舟ノ隱岐ノ國ヘ着クヿヲ裏ニ持タリサレハコノ行末海路ハルカニ舟中ノヿナレハ安否生死モ斗カタキ心ヲ境トセリ 人にはつげよ（シラセテクレヨ） 人トハ都ニノコレル親屬親友ナトヲサシタルナルヘシコレハ京ヘ便ヲモセヌヿヲ裏トセリサレハ京ノ親屬ナトハイカナラント便ヲ待ツヘシト思ヒヤレルコ、ロヲ境トシテイヒタルナリコノ人にはトアルヲ古來ノ註ニモ只人にト斗ノ心ニ見テはノ字ヲ説タル人ナシ此字シカモ肝要ノ字ニテ一首ノ主意ヲ持タリコレハ行末ノ生死安否ハ斗カタク其上此後便宜ノアルナシモハカリカタケレハ京ノ親類ナトニハ只難波ヲ無事ニ漕出タリトバカリ告ヨソノ外ニイフヘキヿモナキカナシサヲトイフ心此はノ字ニコモレリはノ脚結ハスヘテ物事ノ落着ノソウヨリ外ハナキ様子ヲサトス心ナリヨク味フヘシ あまのつり舟（ニノリタル者ドモヨ） コレハ今流サル、身ニテ外ニ使ニツカフ人モアラネハソノ舟出スル近辺ニ漁スル者ドモヨセメテアハレト思ソテ告ヨトイヒタル也コトサラ 勅勘ヘ對シテモ私ニ親屬ナトヘ使ヲツカハスヘキヤウモナケレハ道理ニモカナヒテイト、アハレナル一句也古今ノ詞書ニハ上ニイヘル如ク京なる人のもとにつかはしけるトアレド此哥ハ舟出セントスル時オノツカラナゲキヨマレタル哥ニテヨマレタル後コトヅテニ幸ナル人アリテ歟或ハコノ哥ヲアハレミテ役人ノ内ニ京ヘ傳ヘラレタルナルヘシ（役） コノ一句ハモト便ハ使者ヲ以テスヘキヿヲ裏トスサレハ流人ノ使フ人サヘナクマコトニ心ホソクワヒシキ境アリ

京にのこりたる人とも我事をあんしてゐるへしと思へとも外につかふ人とてもなき流人の身なれは此なにはの浦に居るつり舟のものどもこの方をはあはれと思はゝ京へことづけをいふてくれよもし京の親類やなとにことつけをもしてくれるならは隱岐の國までの海上どこと目あてもなきうへにおほくの嶋々を過てゆくべきはるかなる行末なれは此のち便とてもしかたかるべく風をたよりの海上行さきわか生死安否もはかりがたけれどまづ無事にてなにはを漕出されたりとはかりいふてくれよその外にはいふてやるへき事もなき身の上となりたるかなしさよ無事なる時こそ未來のことゞもかうせうどうせうとたのしみにもしたりわか身もいつまでも安全なるへきものゝやうに思ひ親類朋友の音信も折につけつゝ心のまゝなれ今かやうの身となりては何事も心にまかせぬ事かなこれを思へは平生心のまゝにならぬとてさま〳〵としんきかりし事は冥加なき事なりけるよといふ心なり

十二 僧正遍昭

あまつかせ（ヨ） コノ哥ハ古今雜上ニ出テ五節の舞姫をみてよめる良岑宗貞とアリ遍照ガ出家セラレサリシ間ノ哥ナリ五節ノオコリノヿ改觀抄ニ委シコノ哥舞姫ヲハ天女ニトリナシテヨマレタル也天つかせハ天ノ方ニテ吹風ヲ云サレハ地上ノ風ニ對スサレト天ノ風ノカヲタノム心ナレハ下界ノ風ハ勿論人カノ及フ所ニアラサル心ヲ境トシタルナリ 雲のかよひ路ヲ コレハ空ノヿ也天女ノ往來ノ道トシテ天女ノ舞仕廻テ天上ヘカヘラウトスル路ヲ云也下界ノ路ニ對シテイヘリサレハ人ノソノ路ヘ出テト、ムヘキ路ナラヌヲ境トス ふきとぢよ（テクレヨ） 雲ヲ吹閉レハ路塞ガレハ也コレハ往來妨ナキヲ對トシテイヘルナリサレハ人間トシテソノ路ヲフサグベキ力ノナキヿヲ境トス をとめのすかた をとめト

ハ少キ女ヲ云也即天女ニ比シタリコレハツネノ人間ノ姿ニ對シタリサレハ人間ノ姿ハ又メクリ逢テミルヘキタノミモアリ天女ノ姿ハ再見ルヘキタノミナクチシキヿヲ境トセリ　しはしと(ナリ圧)ゝめむ長ク(ウホトニ)ト、メ置テ見タキニ對シテイヘル也サレトソレハアマリニ我マ、十分ナレハトノ心ヲ境トセリしはしトイフヿ風雲圧ニ浮タル物ナレハ久シク吹トツヘキニアラネハしはしトイフト契沖イハレタリ　詞ノ理ニオイテハソノ通リナリ　一首ノ意味ニオイテハ只本願ノ通リハアマリ慾フカケレハセメテトイフ心ニしはしトハヨメルナリト知ヘシ

天の方につきてたかく吹かせよと今天女舞しまひて天上へかへらんとするか殘念なるほとに何とそ天女のかへりのほる雲のかよひ路をは雲をふきためてふさいでくれよ下界の路をゆく人間とはちかふてわかでにゆきてとめることもせられす人間の力も及はぬ事なるうへにふたゝひめくりあふてみる事もあるましき天女の姿なれはなかくともいふまし何とそしはらくの間道をふさがば天女をとゝめてその姿をみようぞといふ心なりすへて五節の舞姫はよきむすめもちたるものは　うへの寵をえんとて出す事なれは宗貞その舞姫のうちに心をかけられたれどもたとひいひよりても力に及はぬ事とおもはれける故やかて天女になして天つかせの力をかりてたゝしはしなりともその姿をみば夫にておもひ出にせんといはれたる所あはれなる也わかかけたる心の誠のとほりをいへは事の理にたかひいはねは堪かたきによつてみつから慾を減してわか力の及はぬ所をよく弁られたるいかてかむすめも親も感せさらん

十三陽成院

つくはねの　コノ御哥ハ後撰戀三ニ出テつりとのゝみこにつかはしけるトアリ釣殿ノミコハ光孝天皇ノ御女綏子内親王なりコノ御哥ヨセ哥ナリ上ノ句ハ只山水ノ滴リツモリテ末ハ川トナリ淵トナルヿノ御タトヘニ出シ玉ヘルニテ別ノ心ナキ也

みねより(カラ)おつるみなの川(ノ如)　改觀抄ニ万葉第四ノ東歌ヲ引ていはれたる如くみねよりおつる水といひかけてみなの川とよませ給へる也みねよりとある心はその水の岑を滴るほとはまことにいさゝかの一滴なれは戀もはしめはたゝちよとかけたる心にたとへての給へる也もはや山の半又山の裾の所へいたつては水もよほとのかさになる也されは岑とのたまへるはきはめてわつかなるをさとしたまふ也

戀そ(カナニカシラス)つもりて　戀のいまだつもらざりしさきに對して云されはその間年月多くへてあはぬ事のくるしかりしことをさかひとせり（校者云「年月多くへてあはぬ」ノ右傍ニ「今更かはらぬさかひあり」トアリ）戀ツモルトハ戀シキヿノサマ〲ニ數多クナリユクヿ也

淵と(トイフヤウニ)なりける(ツタヿシヤ)　淵は深き事を云されは瀬に對して淺き事を裏とす　これはその戀淺かりしはしめかばかりふかくならん物ともおほしめさゝりし心を境としてのたまへるなり〽とノ字は雪とふる花とちるなとよむとノ字にてト云ヤウニトミエルヤウニト思フヤウニトキコエルヤウニトスルヤウニなといふ心なり〽けるハ上ニモいふ如く心のあたりにちがふてもとよりさやうにある事をおとろく心あるなり○我もふかさをしらぬ境ありモトハ知タル物モカヤウニ我モ知カタクナルヿヲ感シタル歟

つくはねといふ山の峯から落て來る水のやうにそのみねの所にてはたゝ一ト雫のやうなる水なれと次第〱に下へ來るにしたかふて末はとう〱みなの川といふやうなる川になるがわか釣殿のみこに心をかけたるはしめを思へはたゝかのみねの一雫のやうなりしが年月をすぐる間にあふ事もなきによつてだん〱に戀しさもつもりて今になつては淵のやうに底もしれぬほとのふかさ數となりたる事かなさて〱㝡初とはちがふてまことに今は辛抱もならぬほどくるしくなりて外に仕方もなくなりたる事よこれを思へは何事にても㝡初のうちはたゝちよとしたることにてもおなしことをは心に思ふて年月をかさぬれはおもひの外に仰山になる物かなとおほせられたる也なるほとよき事もはしめ纔なる志あれともつねにあらためすわすれすして年月になれは至極する也又慾も㝡初少しなれともつねに忘れされは後はつひにひるかへすへからぬやうになる物也これ物事のつねの道なる事を感したまへるなり多くの年月忘れたまはさりし事もそのほとのつれなさをもうらみなく戀つもりてのくるしさものたまはす年月をへての戀のふかさなれはかはるましき境もみえたゝ心ふかきとのたまふにあらすはしめは實に淺かりしをのたまへは僞らしきけなくまことに眞實の至といふへし

十四　河原左大臣

みちのくの　伊勢物語に出たるには第四の句これと同し古今戀四にはみたれんと思ふとあり心おほきにたかへりしかれとも今は伊勢物語にも此とほりにあれはふるくよりかやうにもいひたる事とおもふうへに詞に理たかふ事もなけれは此まゝにて

註す此哥は上貳句よせ哥なりそのうちに第二句は下の序也第一句は二ノ句の序なり

しのぶもぢずり　古説も改觀抄にも摺衣をむかし奥州信夫郡より出したる故なりといへりこれはくはしく吟味せぬ説とおもふなりもしまことにさやうならむ詞のいひやうも今少しかやうにはいふましき也　これはしのふもちすりとは忍草をもて摺たる衣のそのさま戻(モヂ)り乱れたれはもちすりといふにてみちのくのといふはかの國にて　信夫郡は山里なとことに名たかけれはしのふといふ事の冠辞におかれたるまてにてもちすりまてにかゝれる事にはあらじ　その故は後撰に〽戀しくはかたみにみよとふるさとのしのふ草してすれる也けりともよみてしのふすりはいつかたにてもしたる事なれは全く冠辞まて也　これは古今に〽つのくにのなにはおもはす山しろのとはにあひみん事をのみこそなと所の名によせて　上に國の名をかうふらせたる事これをみるへししのふすりは物也　これらは詞なれは此哥はまとはすしのふすりはみちのくより出すものと心うる事返々いふかひなし　詞のやうをもしらん人は　速に聞ゆへき事也コレハ誰故ニトイフ一句ヲヘタテヽ乱ルトイフ詞ニヨセタル也コノヨセヤウ古例多キヿ也

誰ゆゑに　わかおもふ人ゆゑなる事を裏とすされは外に心なきよしを境としたる也

みたれ初にし(テシマウタ)　みたるゝとは思みたるゝといふ事にて身につとむへき事も忘れかちに猶又身の分限をも思へともそれもわすられすへて理の通何事もせられぬやうにその人におもひこみたる事を云これは末みたれさるさきに對していふかやうの事ありとも　乱るゝ事はあらしと思ひしに　理をわするゝほとの事よく〱の事なるよしを境としてさとされたるなり

我ならなくに(デ・ロウリヤ)(デハナイノニ)　かやうによみつめたるなくにを〽かへらぬなくにといふ上へかへる所あるを〽かへるなくにといふこれをテハナイノニと聖すいつれもおなし詞なれはかはるやうはなき事なれとかへらぬ方はかへる

方のうちあひをかくしたるやうなる物にて此里言にていふとは聞えかたけれはデアロウカヤとも里したりコレハその人に我心うすしと人のおもふ心を裏とすされはたゝわか乱れはしめたるやうすにその以前をみくらへておしはかられよとわか理をたてす人の心にまかせたる境あり

たとひいかやうの事ありとも道理にはつれたる事はすまいとおもひしにいつのほとにやらふとおもひつきて道理もなにもわすれはてるやうになりそめたる事かなもとこれは誰ゆゑにじやぞ外の人にも心ありて心淺きやうにのたまへとも我かやうにみたれ初たる最初をおもひたまへこれを思へは誠一途なる時はつねに思ひこみてみたれたる事はすましと思ひし事もつひにみたれて道理をもわするゝほとになる物かなといふ心なり又はかほとまてその人ゆゑには行事もみたるゝほとおもひはしめて今にては猶更一途に忘れかたきも皆その人ゆゑなれと人はさほとにもおもはぬ物かなこれ當然の理なるにそれを惱るなとはさても〳〵淺はかなる事よといふ心なり

後ノ説可然歟

十五光孝天皇

君か爲　これは古今春上に出て仁和の帝みこにおはしましける時人にわかなたまひける御哥トアリ未時康ノ親王ト申シテ位ニ即玉ハサリシ時ノ事也君トハソノ人ヲサシ玉ヘリ君ヨリ臣ヲ君トサス事古來例多キ事也コレハ他人ノ爲トイフ事ヲ裏トスサレハ志ノ他ニフレヌヨシヲコトワリ玉フ境アリ

春の野に出て　他出もせすわか家に居るを裏とせりサレハ人情ニテ身ヲ逸スル事ハ好ム事ナレ氏ト云境アルナリ

わかなつむわか衣手に雪はふりつゝ　テソレナリニ　コレハ手ニテノワサヲセヌ人ハ手袖ノ内ニアル事ヲ裏トセリサレハ袖ノ内ニ手ヲ引入レオクトオカヌトハ寒氣ノ時分ハ大キニソノ寒暖ヲカフ物ナル事ヲハ境ニ持タル句ナリ雪ノフラヌ時トヲ對シテノ玉ヘリサレハ雪ノソラヌ時サヘアルニマシテ頻ニフリテ寒氣一倍ナル事ヲ境トシタマヘリ

春の野へたち出てわか菜をつめはまた春も淺けれはつむ手もつめたきにあまつさへ雪袖のうへへふりかゝり〳〵したれともやう〳〵摘來てそこもとにまいらするなり此ころの餘寒なれは家にこもりゐて火なとにもあたりさなくても袖の内え（へ）手を入てなにことをもせすして居れは寒さもすこしは凌よきにそのうへ雪さへすこしの絶まもなくふりかゝりたれは寒さはまことに堪かたく凍へはてつへき野のけしきなりけれとたゝそこもとの爲にとおもふ心ゆゑにてや一向そのさむさも格別に覺えすしてつみ來たりもしそこもとへとおもふ心なくは中々しはしもゐらるべき野にてはなかりしぞやこれをおもへは堪かたきほとの事なりとも心におもふすちの誠たしかなれは苦にもならぬ物かなしかれはなに事も苦しかるは物事に誠すくなき故にこそと思ふ也との心也

十六中納言行平

たちわかれ（イテシマウタラハ）いなはの山のみねにおふる いなはハ因幡ニイキナパトイフ心ヲヨセタル也行平卿因幡守ニナリテ下ラレケル時親屬ナトヘ留別ノ歌ナルヘシソノ人々ニイマタ立別レユカヌニ對シテ云サレハ
人ノ交ル間スヘテ去者日踈トイフ古語ノ如ク逢フ間ハ親シキモ忘ル、トモナクアハネハ踈遠ニナルモノ
ナルヿヲ境トシテイハレタル也第二第三ノ句ハヨセ也任国ノヿナレハ即いなはの山トヨセラレタルナリ　まつとし（サヘ）きかは（イタラハ）　待ト
松ニヨセタル也コレハ任トテ四ケ年ツ、諸国ヘ下サル、ソノ間我ヲモシ待ツトイフ便ヲ聞タラハト云心也待ツヿモナシト　今か（オツ、ケ）
イフ便ヲキイタラハト云裏ナレハモシサヤウノ便ナクハ即我ヲ忘レタルナリト知ルヘシトイフ心ヲ境トシテイヘルナリ
へりこん（モドッテコウ）　今ハオツ、ケト云心ナリ任国ヨリ京ヘカヘルヿ我マ、ニハナラネト四ケ年モ程ナキモノナレハ任ハテタラハ早速モドラウト云ナリコレハモハヤ歸ラズト云ヿ裏ナレハ人我ヲ待ツ心アリテコソカヘラン甲斐モアレサナクハナニノオモシロキヿモナキ京ヘハ任ハテツトモカヘルヿナクソノマ、ニ因幡ニトマラウゾトイフ境アリ

今そなたたちにわかれて因幡へいきつきたらはそのあとしはらくこそかなしかるへけれ去者日踈といふ通りについしぜんと忘るゝやうにならうもしれすと思へはかやうに因幡え（へ）ゆくもことの外心はそきがもしそなたたち我をまつといふ便をはあの方にて聞たらば四ケ年とても程なき事なれは早速もとり來るへしもしかの古語の通にまつといふ心もなき事を聞たらはなにのたのしみもなけれはおもしろからぬ田舍なから任はてゝもやはりあの方に居てかへるまいとおもふよとの心なりけにも五倫の交無事なる時こそ相應のしたしき事もあれ無據なかき留守なとになれは當座はわするゝまなくかなしくもあれと日をふれは自然とまきれて踈くおもふやうになる事あさましき事なりかやうによまれたるからには行平卿の心にさやうの薄情なき事明らか也ふかくつゝしむへきことなりされは平生の交りはあつきもあつしともいひかたしかやうの時こそまことにあつきはあらはるへき事なれはよく〳〵つねより心うへしかやうの時薄情あらはるれは此卿の如く人の心を失ふへしいふかひなき事ならすや

十七在原業平朝臣

ちはやふる　古今集秋下ニ出テ二条の后の東宮のみやす所と申ける時に御屏風にたつた川に紅葉なかれたるをかけりけるを題にてよめるトテ素性ノ哥アリテ其次ニアリ伊勢物語ニハ實事ノヤウニカキタレト古今ヲ實トスヘシちはやふるハイチハヤヒタルト云心也神ノ冠辭也クハシクハ哥袋冠ノ部ニイヘリ　神代（トイヘ𪜈）もきかす（ヌヿシヤ）　神代トハ人ノ代ヲ裏トスル詞ナレハ人代ニナリテハ今世トサホトカハリタルヿモナシ神代ニハサマ〴〵希有ノヿアルヿヲ境トシテイヘリサレハ此句希有ナルヿノ至極ヲツクシテマコトニ類モ例モ凡アルマシトイヘル心也　たつた川　コレハ外ノ名所ヲ裏トシテ云ナリサレハカヤウノ珍事コ、ニシモアルヲホメタル境アリ　から紅に（デ）　から紅トハモト紅花ハ韓ヨリワタリタル故ニイフナリサレハタ、からトイフニ心ナシコレハ余ノ色ニ對シテ云ナニ色トテモ珍ラシケレ𪜈別シテ紅ハ他ノ色ニスクレテウツクシキ境ヨリ云也水上ノ紅即散タル紅葉ヲ云ナリ　水く〻る（ヲ）とは（云ヿハ）　コレハ神代もきかすトイフ句ヘモドリテ一首ヲナムスフ也コ

レヲかへりつめト云古來ノ說皆泳ルトアレ𪜈カラ紅ヲハ水ガクヾリタリトテサホト珍ラシキヿニモアラスマシテ神代モキカスナトイフホトノヿニアラス亾父成章案ニ絞結今俗ニイフシボリノヿヲクヽシヅメト古來イヘハ水ヲクヽルトハ水ヲハクヽシ染ニシタルヿナルヘシトイヘリ此說マコトニ千年ヲ經テ初テ在中將ノ心ハアラハレケリトオホユルナリ　コノ句ハ絹ヲコソクヽリテ染ルヿナレトノ心ヲ裏トシテ本ヨリ体ナキ水ヲ絞結染ニシタルヿ奇異不可測ノヿナル心ヲ境トセリ　から紅にトイヘルにノ字モ古說ナラハから紅をトイフヘキ心也勿論をトイフヘキヲにトイハテ叶ハヌ処ハにトヨメル所モアルト語ヲ成サス（校者云「語ヲ成サス」ノ五字傍追記ナリ）亾父カ說ニテハにノ字モコトニ穩ナリ〽木葉みなから紅にくゝるとて霜のあとにもおきまさるかなコレ絞結ノ心ナリ

わきの所にてもある事か此風景何かすくれたる龍田川の水をはから紅にてしぼり染にそめたるといふ事はまことに不思議ともなにともいひかたし神代にはさま〴〵珍らしく奇異の事ともも多かれといまたかく龍田の川の水を紅にてくゝり染にしたるといふ事はきかぬ事なりしかも所といへはよそにすくれたる龍田川色といへは餘の色にてもある事か紅にてその物といへは絹紙なとにてもある事かかたちもなき水なりかた〴〵もつて不思議なる事よこれをおもへは後のよとても珍らしき事なしともいひかたし不思議なる事とてもあるまじともいひかたし何事にてもわか推量にて無シときはむる事はすましき事そとの心也

十八　藤原敏行朝臣

すみのえの岸による浪　コノ二句ハよるトイハン爲ノヨセ斗也住ノエノ岸ニハ浪名髙ケレハ取出ラレタル也　よるさへや（マデニ）●　晝バカリナルベキヿヲ裏トスサレハ物事一張一弛トテ少シハ隙モアルヘキニアマリユルシナキヿヲ歎ク境ナリ　夢のかよひ路（デ）　ワガネタル魂ノ思フ人ノ方ヘカヨフ路ヲ云現ニ思フ人ノ方ヘカヨフ路ヲ裏トスサレハ現ニテノヿハトテモ思ヒ絶タレトセメテ夢ニハ逢フヿモアルヘキ歎ヲ境トシタルナリ　人めよ（ヲヨケ）くらん（ルテアロウカ）　よくノくノ字清ムヘシ過ナトノ心ニハアラス除ノ心也菅家万葉集ニハスデニ斧ト云字ヲ假名ニカキ玉ヘリコレハ夢中ニハ人目ヲヨケテアヒカタキヿモアルマシキヿヲ裏トスサレハ現ニテ人目ヲヨケルヿハシヨウヿモナケレトヨモヤト思フ夢ニマデカクノ如キガアマリ不思議ナルホト逢カタキナケキヲ境トセリ人めをよくトハ人ノ見ルニヨリテ人ノ方ヘカヨフヿモ遠慮スルヲ云ナリ

よるまでに夢のうちにてのかよひ路にて人目を遠慮する事かして一夜も夢にさへあふ事もなき事や現にてかよひちの人目によりてあはれぬはしようこともないにせめては夢にはよもやあふ事もあるへしとたのしみたるにかくの如くあはれぬはまことにわか身はあふ事のどうあつてもならぬ約束ならんいかにも十分の事はなくともすこしのたのしみあらはたんのうもすへけれどまことに夢にまてあひかたきほとの中ならは實に緣なき事とおもふぞといふ心なりこれをみれはおもふ通の事にてはなくともなくさめあらはそれにて心をものとむへしそれまてもなきならはまことに宿因なき事也とあきらむるより外の事なき事なるへし

十九伊勢

なにはかたみしかき蘆の　ナニハハ蘆名高ケレハナリ難波ニカキリテ蘆ノ節ノマ短キニハアラス全体短キ物ナレハナリコレハ蘆のみしかきふしのまもトイフ語意ナリ本ヨリ節ノ間短ケレハミシカキトイハテモヨキ事ナレト短カキカ中ノ短カキトイフ心也短カキ中ニテノ長短ヲ對シテみしかきト云ヘル也コノ二句ハふしのまトイヒ下ニよトイハン爲ノヨセナリ　ふしのまも（トイヘ圧）　シハラクノ間ヲ裏トスサレハ長キ間ノ事ハトテモト思ヘ圧ノコヽロヲサカヒトセルナリ

あはで（ズニ）此よをすぐしてよとや（テシマヘヨトイフ事カ）　後世ニハ逢フヘキ契ヤアラント思心ヲ裏トスサレハ此世ノ内ノ心ホソクカナシサノ歎ヲ境トセリ〽トイフ事カト疑ヒ思フハ思フ人ノツレナキニツケテワカ宿因ヲハウタカヒ思フナリ

みしかき中にもみしかき間とてもあふ事かなはすしてそれなりに此一生をすぐしてしまへといふ事にて此やうに年月をかさねて戀ふれともあふ事なき事歟長き間ゆるりとあはん事はおもひあきらめたれともせめて短き内にもたゝちよとあふほとの事はありそふなものなるにこれはどうでも此身の因縁にてあるへしこのよにはたとひあはれすとも後のよにてはあふ事明白ならは此やうにて一生をすくしてもすこしは心ものとむへきにそれとてもはかりかたき事なれはつれなき人をうらめしくおもふもよしなき事たゝわか身の因果なるへしとの心なりこれをおもへは身にさたまれる宿業のある事なれはつれなしとみたりに人をのみつらしと思はむ事はいふかひなき事そかし

廿元良親王（モトヨシノミコ）

わひぬれは（テシマウタニヨッテ）　イマタ侘ヌトイフニモ至ラサリシサキヲ裏トスサレハコノ以前コソ義理ヲモ法ヲモ思ヒテ掛酌スル心モアリタレト云心ヲ境トセリコノ哥ハ後撰戀五ニ出テことといてきて後に京極のみやす所につかはしけるトアリ密通アラハレラ後ノ御哥ナリクハシクハ改觀抄ニイハレタリ　今はた（ハマタ）おなじ（オンナジ名シヤニヨッテ）なにはなる（ニアル）　今はたトハ今はまたトイフ詞ノまノ字ヲ畧タルナリなにはなるノなノ字名トイフ字ニヨセカケタルナリ契冲ノ説シカルヘカラスサラ澪標名ヽカケレハソノヨセニヤカテなにはなるト仰ラレタルナリコレハモハヤ密通ノ名タチテ制セラレ玉ヒシ事ヲ裏トスサレハ今ハモハヤ慎タリトテ立タル名ノキユルニモアラス一旦立タル名ノ事ナレハトノ心ヲ境トシ玉ヘル也　身をつくしても（ミナニシテナリ圧）　身ヲ皆ニスルホト苦勞ヲスルニ澪標トテ水ノ尺ヲ知ル杭トニカケタルナリ身ヲ尽スホトニナケレハトテモアハルマシキ事ヲ裏トスサレハトテモヲシカラヌ此身ナレハトノ心ヲ境トス　あはむ（アハウ）とそ（ト何カシラス）思（ゾ）　宇多法皇ノ寵妃ナリケレハ御怒ツヨクテトテモアフ事ハ叶ハヌ事ヲ裏トスサレハアハテハ活タルカヒナシト思定メ玉ヘル心ヲ境トシ玉ヘルナリ

此やうに事あらはれて御勘氣をかうふりあふ事もかさねてならぬ身となりこまりはてたる身のうへとなりたるからはもはや一旦たちたる名なれは此後又うき名たゝぬとてももとの身のうへになるへき我てもなし二度たつ名ももはや一度たちたるも同し事とおもふから此うへ御勘氣かさなりて此身をむなしくなすとても無理になりとも今一度はあひ奉りたくおもふなり義理も斟酌もかやうに事あらはれぬさきこそあれもはや此まゝにてあふ事なくはありてもかひなき此身なれはいきたりとて益もなけれは身を捨てもあひたくそんし候といふ心なり世の義をも理をも斟酌するは事のやふれぬうちの事なりその時よく愼ておもひあきらむるも道なから御息所の御ためには今まていひかはしたまふ事もいたつら事となりぬへししかれはわか身の害を恐れて人のまことをうしなふといふものなりかやうの大事の御中の事なれはさしも大切に忍ひたまひつらめともあらはれけんは是非なき事なるを誠を重んする御心よりたとひ此うへのおもき御勘氣にて身をほろほすとても今一度はあひて始末を全くせんとおほせる心まことにたれかこれに感せさらん石川五右衛門といひける盗人さしものしたゝかものなりけれはみたれたる世に身のなりいてん事はいとたやすきにおのれひとりをたのむぬす人ともいく千人ありしにそれらに誓たる事捨かたくてつひにはつみせられん事をしりなから猶ぬす人をする也とみつからいひけんもおもひあはされて心のほといとあはれなり

廿一素性法師

いま(オツヽケ)こむ(來ウ)といひ(トイフ)し(タ)はかり(バッカリ)に(デ)　コレハ素性ノ在俗ノ時ノ哥ナルヘシ今トハ夜フケタルヲ裏トスソノ下ハ結句來ウトイハズハヨカランニトノ心ヲ裏トスサレハ人ノ僞トモシラス眞實ニウケタルニツケテ言辭ハ大切ナル物ナルヿヲ感シタル境アリ

なか月の　一年十二ケ月ノ内ノコリ十一ヶ月ヲ裏トスサレハ八月九月ハ夜長キカ中ニモ至テ長キヿヲ境トセリのトイフ字ニ待遠ナルヿノイトヽナルヿヲ含メリ外の月ノ夜ニテモアルヿカトイフ心ニテのトイヒタルナレハナリのノ字ノ心委クハ書尽シカタシ口授スヘシ

あり明の月をまちいてつるかな　十六日以下ハ月空ニノコリテアリナカラ夜アクレハ有明ノ月トハイフヘケレトコレハ廿日ヨリ後ノ夜更テ出ル頃ヲイヘルナリコレ在明ノ内ニモ甚シキ頃ヲ云也　まちいてトハ待出ストイフホトノ心也　有明の月ハワカ思フ人ヲ裏トスサレハ人ヲコソ待得ヘキニ思ハヌ月ヲ待出シタヿヨトイフ心ヲ境トセリ　〽つるノ心ハ月ノ出ルマテハ唯ウカ〳〵ト人ヲ待ツト思ヒシニ月出テミレハ夜ヲフカシタルハ月ヲ待タルニテアリケルヿヲ月出テ後思ヒカヘシテイヘル心ナリ〽かなハ言語ハ行ヲ顧ルヘキヿナルヿニ思ヒヨラレシ今夜ノサマノ思ヒヨラサリシヿヲ感シタルナリ上ノ〽ばかりにトイフ詞ニ應シテムスヒタルモノ也

ほとなく參らうといはれたばづかりでもうくるか〳〵とおもふてゐたる間に全体まちもせぬ有明の月か山より出たるよこいなか月の長い夜に有明の月の出たほとなれはいかに待遠ならんとも人はおもはぬなるへし肝心の人は來すしておもひもよらぬ有明の月をは山から出るまてまちおほせたる事かなこれといふも人のたゝ一言はとなくゆかうといはれたはつかりにてみしかき夜にてもある事か此長い夜有明月の出るまてまちぼゝけになりたるなりこれをおもへは眞實にさやうに

赤染か哥考合すへし

思はぬ事を言へ出す時はかやうに人に無益の苦勞心痛をもさすることゝなるなれはよく〳〵心えにすへき事と知たりといふ心なり恨をもわすれ身の待とほにくるしかりしをも忘れて道を感したるいかにきゝたる人心くるしかりけんもろこしの聖言顧行行顧言とのたまひしもさる事にて哥をよみしりて自然と心身に及はすかなはぬ事はいひ出られぬやうにならんとたれも〳〵修行あるへき事なり此人素性か心になりておもはゝいかてかさやうに心つよき事はせられん言もわさもたゝわか身勝手にはかりする故にかゝる事出來る也此哥は〽ばかりにといふ詞眼なり

廿二文屋康秀

公任九品下上ノ哥也

ふくからに（トフクトハヤ）菅家万葉ニハうちふくにトアリ心カハラズトニハアラネト先凢ニハ同シ心ナリコレハイタク吹シキルヿヲ裏トシテイヘリサレハマタ格別ノ吹ヤウニテモナキニトノ心ヲ境トセリ　あきの草木のしをるれは（ガ）（レルニヨツテ）古今ノ序ニハ野への草木のトアリ六帖ニハなへて草木のトアリ萎折ル心ナリ他ノ季ノ草木ハシヲルヽヿモナキヿヲ裏トスサレハモシコレカシヲルヽヿナクハト云ヿヲ境トス（校者云本ニハ歌詞「しをるれは」及ビ廿詿追加書入ナリ今之ヲ本行ニ改メ入レタリ）うへ山かせをあらしといふらん（タノテアロウ）コレハ山ヨリ吹キコヌ風ヲ裏トスサレハ山風ハ他ノ風ニコトナル心ヲサカヒトスうへトハソノ含テ持タル道理ニ考アタリタル心ヲサトス詞ナリ暴ト嵐トニヨセタル也コレハアラシトモ名ヲツケヌサキニ對シタルナリサレハモトヨリ暴キ嵐ナレトモ其名モツカサルヘキニトイフ心ナリ

ちよとふくといふとはや秋の比の草木かこと〳〵くしなえ折れるによつて道理で山風をは暴いといふ心であらしと名をいふのであらうもし吹さかつてから草木かしをれるならは山風もあらしとはいはぬてあらうものを

廿三大江千里

三 月みれは 裏月ヲミズニ居レハ境月ミレハオモシロキ物ナル心　四 ちゝに物こそかなしけれ 五 裏三事ヤ五事ハカシイ（ママ）ヿモアル（校者云「四事ノ憂モ慰ヘキハツシヤニ」ト傍書アリ）境サホトカナシウモアルマシヤハツナル心　一 わか身ひとつの秋にはあらねと 二 裏ワカ身一分ニ來タル秋ノヤウニ思ヘト境秋ハ天下ノ人々ノ愁ヲヒクハツナル物ナルヿ

全体此方一分の爲に來る秋てはないけれど月をみるとそこらあたりの物か何十なん百となうかなしうなるか㋒かうわか身一分の爲に來る秋のやうにおもはれても月もみすに居る時ならは一事や二事はかなしい事もありかちの事じやけれど[illegible]いかに秋は物かなしい時節じやとておもしろいはづの月をみても氣はらしにもならぬぞ[illegible]これをおもへは何事でもかなしい事のあれはわか身一分はかりのやうにおもはれてまきれにもなるはづの物をみても氣はらしにならぬといふ事はさて〳〵愚な事やたれでも此通にか

なしい時節じやと合点すれ
はかうはないはづの事じや

廿四菅家

このたひは コレハ古今羇旅ニ出タリ宇多法皇ナラヘ御幸アリシ時御供奉ニテノ御哥也此度ト此旅トニヨセタルナリ ぬさもとりあへす 幣トハ旅立スル時ニ道祖神ナマツル爲ニ色々ノ絹紙ナトチ國堺ノ峠ニテ散ラス事也山ノ越口チタフゲト云ハコノタムケトイフ事チイヒ誤リテ名トナリタル也 たむけ山 奈良山ノ峠チ云必名所ニテモアラサルヘシ もみちの錦 錦ノヤウニミユル故ニ直ニモミチノ錦トイフナリ 神のまに／＼ まに／＼ハまゝにトイフ詞ノ本ナリ万葉ニ隨意トカケリ神ノ思召次第御氣マヽニ遊ハセトイフ心ナリ

㊟今度のたひたちは幣なとをこしらへて持てくるまもなかつたにこの手向山のもみち錦のやうに染たりこれを幣とおほしめされて神の御心まかせにうけさせられい㊟全体つねのたひたちには幣をこしらへ持て來てわさとも峠へ出てその五色の絹や紙なとをは此方から神へさし上るはつの事じやけれと㋚此旅立は外のたひ立と違ふて 法皇の御供しやによつて自由な事もしられす何かなしに御供して出て來たるがこの峠のもみちが錦のやうなは幸なるかな何とそこれを幣とおほしめして御受納ありてわたくしが如才でない心のうちを御推量あつて道の無事なやうにまもらせたまへ(補)これを思へはわか身の上をおもふてせねはならぬといふてする事どもゝ我身の自由な時の事じや勤向になるとそことところの事てはない物じや

廿五三條右大臣

名にしおはゝ 後撰戀三女のもとにつかはしけるト詞アリ あふ坂山の 逢トイフ「ニヨセタル也 さねかつら 五味といふものゝことなりこの實を五味子とて藥につかふもの也契沖かコノ詞の註あやまれり万葉にもさねしよの又さね／＼てなとよみたる詞にいひかけたるにてさは添たる文字にて寢るといふ事なり女と寢るによせたる也 人にしられでくるよしもかな ては濁るかよしくるは葛は長き物ゆゑ操(繰)取ルニ來るといふ事をよせたる也このくるは女の來るにあらす實方公の女の方へゆきたまふをくると仰られたる也かやうの事むかしは多き事也心を女の家に置てみるとわかゆくもくるなり古今にねぬ名はたゝしくるないとひそとよんだるもこれと同し心なり

㋔あふともさねとも名についてゐるが定ならはさても／＼とても人にしられすにそなたへゆく仕方があるやうにしてほしい事じや㋒名目とはちかふてとかくにあひもしにくう寢もしにくいは人のし

らぬやうにゆくしかたかない故しやが㋘名目かつくからはわさもきゝそふなことじやがあひにいくのもねにいくのも人がしつてはならぬものじやけれとそのやうな爲方はない事かしらぬ○これをおもへはおもふ通の事をせうとおもへとも何そはさしつかへのあるもので何事でも十分にはならぬ物じやそふな

廿六貞信公

をくら山（ノ拾遺雑秋亭子院大井川ニ御幸アリテ　主上ノ行幸アツテモヨカルヘキ所也ト　院宣アリケレハソノ由奏聞仕ラント仰ラレテヨミ給ヒシナリ）　みねのもみち葉心(ヨガ)あらは今(マア)ひとたびの御幸またなん（此なんは脚結抄に誂ノなんといひたるなん也世上にて願のなんといふは誤りなりねかひの心はなし人物にむかふてあつらふる心也）

㋔このをくら山のみねのもみち葉よもしその方心かある（校者云「思ひわけ」ト傍書アリ）ならは追付まあ一度行幸のあるをまつて居てくれよ㋒此山にもかきらすもみちにもかきらす惣体の木でも草でも人のやうに心はないはづのもののゆゑ今日の御幸には御慰にもなつたれどまゝ一度の行幸をも待て居ようと思ふやうな心はあるまい事しやけれとこ㋘ゝの景色から何から紅葉までもよそとは格別なによつて　院宣もある事でその趣を　主上へ申上たらは定めて近日のうち行幸あそはさるゝてあらうがその時分に此紅葉が散てしまふては景色もさほとになくて申上た事虚言(うそ)のやうになつては一向すまぬ事じやが此塩梅を推量して近日の行幸まで散らすに居てくれうかしらぬ㋕これをおもへは申上る事は申上

ても肝心のものがこちの心を斟酌(くみわけ)てくれぬはうか〳〵と申上らるゝ事ではない不斷人に物をいふのとてもあとでいよ〳〵詞とちかはぬやうに吟味した上でなくてはいふまじい事じやぞ

廿七中納言兼輔(闕書)

みかのはら 新古今戀一題しらすとて出たり わきてなかるゝ 此哥全体上の句は皆序なり上の句序なからその物の様子にたとへその物の心にたとへなとしたるはよせ哥といふかやうにたゝいつみ川いつみきと詞のいひかけ斗なるは打よせといふなりさて此一句は挟たるもの也みかの原のいつみ川とはかりいふに一句たらぬ故に入たる也泉は沸て流るゝもの故に又泉といふ事の序なりよせ哥はかやうなる事さへある物也 後世のよせ哥の心得大に違ひたり 前の人丸の哥の所にいひし事とあはせて考ふへし いつみ川いつみきとてか いづみといつみきとは清濁違ひたれともかやうの事は一向貪着せぬ事むかしよりの例也これもとより哥に無用なる事をわさとよする物なるゆゑに貪着せぬ也さきは脚結也里言タといふしといふ脚結もタといふ里言なれともしはその物事を目にふれ身にふれ耳にふれ來れる事ともの様子をつたひをつけてみする也きは此方のあたりのものはや定まりたる事をいひてむかふの人の心のあたりをうけていふ也 古言はかやうにくはしきものなり里言はかやうにあらきものなるをみるへし 戀しかるらん

㋔いつ見た事かあつたといふて此やうに戀しいであらうぞ㋒つひに一目も見た事のない女じやによつて戀し(ママ)はないはづの事じやが㋚見た事もあるやうに戀しさがたまらぬ事はい㋕これをおもへば理屈にはつれぬくらゐの事は皆淺はかな事でいたつて眞實なといふものは理屈にも葦權にもよつた事ではなく白身も合点のいかぬほとの物じや

廿八源宗于朝臣

三山さとは 古今冬ニ出テ冬の哥とてよめると詞書にあり 四冬そさひしさ五まさりける一人めも草も二かれぬとおもへは 草ハ枯(ママ)ルヿヲ云なり人目ノカル、トハ放離ナ

トノ字ナヨミテ物ヿノ間ノアキテ絶ントスル心ナリ

㋑そこらあたりの草も枯れ人も一向來ぬといふほとになつたぞと氣かついては山さとは冬になつては一倍さひしい事じや草㋒こそ枯れる事もあらうずれ人は一向往來せぬといふ事もあるまいによつて外の里では冬じやとて格別さひしうなる事もあるまいが草㋚もかれゝば勿論花や紅葉といふてもない故に氣なくさみになる事もないうへにそれにつけて春や秋なとは來た人なりともせめてちら〳〵と來るならはそれで又まきれにもならうずるにふたつとも心にまかせぬ故全体それでからがさひしい山里じやけれどつねは賑やかなと思はねはならぬ事しや㋕これを思へは難儀な時節にあはねはつね〳〵のたんなうも出來ぬ事じや慾に限はない故につね〳〵不足におもふて居たが心得ちがひであつたぞ

廿九凡河内躬恒

心あてにをらはやをらん（ヤハ疑ノやなり）初霜のおきまとはせる（此句霜ノ置テ菊ノ花カ葉ニ霜ノオイタノカト定ラレヌヤウニナリタルヲ又源氏物語ニハかきをおきまとはしてなヾト）（アレハ物ノ置所ヲ忘レテシレヌヲ云詞ニヨセタル也今モ置失ソナト云詞ナリ）しら菊の花

初霜かふつて置うしなふたやうになつた白菊の花は花やら葉の上じややらしれねとまづ胸つもりの所を折てみたらは花の所がをられうか㋒初霜のおかなんたうちは花は花葉は葉とわかれてある故

見さへすれは花の所をつい折られる事もしやとおもふて居たたが(ママ)まぎろしい物があると大抵心あたりはあつても思案にあたはぬやうになる事じやがこれを思へは惣体の事がさつはりと筋のたつてあるうちは何時かうせやうとまゝの事じやと手かるう思ふて居れどさあそのつもりの通にいかぬ事の出來た段になつてはあてすつほうで仕課せる事もおほつかなう思ふやうになる物しや

三十壬生忠岑

ありあけ(ノヤウニ)のつれなくみえし　古今戀三題しらすトアリ六帖にはくれとあはすといふ題の所え(へ)出たり古今にても前後あはすして歸れる哥ともの中にあり此有明トハ有明の月のことなり有明の月は夜の明るをもよそにして猶空たかくのこる物なれはつれなくみえしといへる也つれなしトイフハムカフノヿチソシラヌヤウスナヿチイフ詞也コレ女ノアハデカヘシタルチヨソヘテイヘルナリ　別よりあかつきはかりうきものはなし

有明の月が明るかともおもはずに殘つてあつたと同しやうに此時分まで待てもそしらぬ顔てあはなんだ故に是非なくもとつて來たかそれからこつち曉ほとくつたくな物はないと思ふが全体別といふ物は夜中(よなか)あふて居てわかれるかまことの別しやがそれでからが曉はくつたくなものじやがこれとあれとをくらべてみれはあふてわかれる曉は格別くつたくなはづもない事じやこれを思へは何事でも十分にないといふてくつたくをもする事じやけれどかういふ難儀なめにあふてみれはつねのくつたくは慾のふかい事であつた

卅一坂上是則

朝ぼらけ 古今冬ニ出テやまとの國にまかれる時に雪のふりけるをみてよめるトアリあさぼらけハ夜ノ明ハナレタ時分ヲ云万葉ニハ朝開（アサヒラキ）ト斗ヨミタルヲ後ニヨミカヘタルコトバナリ あり明の月とみるまでに までといふ御結こゝまでむかふまでなと俗語にいふも猶古語の心は含てあれと後世たゝ淺く心えて古語の義をさへ心えあやまれり これは大抵これほどといふ分量の仕切を越てこちらまで來たる心をいふ詞也 全体來るへき處まで來る事なれはまでとはいはすとも聞えたる事なり里言にこゝまでトイフモこゝまでは彼は來ましと思ふ心をふくみていふなれは古言と同しされはコレハアケヌサキニコソ月トモマカフヘケレト云心をふくみてまでといふ也 よしのゝ里に 古注コノ句ノ意味ヲ考ヘラレスヨソニカヘリタルヿアルヿナラテハソコノ名ヲイフ詮モナキヿナリコレハ吉野山近クテ都トハ雪モハヤクフル心ヲフクメテイヘルナリ ふれるしら雪

もはや夜は明はなれてあるにそれに有明の月のかけではないかと見そこなふほどに此よしのゝ里に雪かふつた事はい都なとてはまた雪のふる時分てもない故たとひ夜の明はなれぬうちでも月かしらぬとみえるやうなこともあるまいけれど此よしのは吉野山か近いゆゑ雪もはやうふる事しやのに都の格でまた雪はふるまいとおもふたゆゑ夜か明てからしやのにそれに有明の月のかけではないかと見そこなふ事しやこれをおもへは何事でも自身のつねに覺えた通りの事をよそへ引あてゝおもふとむかふに道理のある事も合点ゆかずとかくに手前の理屈へ引つけうとするゆゑつまらぬ理屈が出て無理おしになりそふな事じや

卅二 春道列樹 コノ哥ハ古今秋下にしかの山こえにてよめるトテ出タリ

山川に風のかけたるしからみは しからみといふ物は水ヲセキテ水勢ヲユルクスル爲ニ川中ヘ杭ヲウチソレニ竹柴ナトヲ横ニカラミツケタルモノヲ云 なかれもあへぬもみぢなりけり

㋑山川に風がかけた柵は流れてゐる間もなう散てくる紅葉じや㋺山川へ人かかけたしからみならは結句散てくるもみちも中には流ていてとまらぬのもあらう㋩此ははやい瀬しやに紅葉は風がちらす故にうらめしい物とおもふてゐたれと風が此やうにつよう吹かぬならは結句此やうに引つゝけには紅葉もちるまいによつて水にういた紅葉は直になかれてとまつてゐる事もあるまい㋥これをおもへは一途に物の爲方かわるいとおもふ事ではない結句その物がこつちの仕合になる事もある物じや

卅三紀友則 此哥は古今春下さくらの花のちるをみてよめるとあり

久かたの すへて天象の物の冠詞なり此事古來説々あれとも皆々おたやかならす天は地に對して久しき方といふ心歟とも又は久しく堅き故なりといふはふるき說なれとこれもそれをひさかたといへる詞つき心えかたし上にもいふ如く冠詞はたゝたらぬ所を補ふはかりなれはしひたる事をいはんよりはたゝ天象の冠詞也と斗知てゐるへき事也 ひかりのとけき 六帖には光さやけきトアリひかりとは日の光なりこれは久かたのといふ事を即日の事にしてよまれたる也玉はこのといひて道の事にいひあし引のといひて山の事とするに同し春は日長くなる故に日の光も何となくゆるりとみゆるを云也 春の日にしつ心なく しつ心とは鎮心にてしつまりをさまりたる心を云おもひわつらふしつ心かなとよみたる哥もありしつとしつかなる心を名つけてしつ心とはいふなり 花のちるらん これは片響のらんなり上にうちあひなき也これは上のうちあひをはふきたる（ママ）なりされは上に〜なとといふ詞を入て心うれは聞えやすきなり

㋑日かなかくなつたゆゑ日の光ものとこなうのんとりとみえる春の日じやにそれになせ花はかりはしつちりとした心もなういそかしそふに散事じやぞ㋺日の短い時は人の心も何となうせわしないものしやによつて花もそのはづとも思はれうが㋩なまじひに春はのんとりとした時分しやによつて同しやうな心にはならいで花のせはしうちるのが一倍をしい事じや㋥これを思へは何事てもこつちはい

かほとおもふても自然の道理のある物は理屈の通りにはいかぬ事じやそふな

卅四藤原興風古今雑上題しらすノ哥也

四たれをかも（サテモ）かは疑也もは詠のもなり脚結抄にくはし　しる五人にせん一たかさこの古今顕昭ノ注ニコレハ播广國ノ高砂トイフ所ノ尾上トイフ里ノ濱ヘニアル松ナイフ也惣して山を高砂とひをの上を尾上と（ママ）いふにあらすとありしかれはこれは播广のなるへし昔より久しく松ある所なれは也　二松もむかしの三友ならなくに

㊀此やうに年かよつたゆゑ高砂のをのへにある松が友たちにもなりそふなものじやけれとその松も昔からの友たちといふではないのにその外には心あたりもないがさても／＼これはだれをおれか近つきじやと思はふぞ㊁高砂の松は外の松とちかふて年久しい松で年恰好こそ似合しけれむかしからの近つきてないとはなしもあはぬ事じやが㊂年よつてはわかい人はみなうとましかるものしやゆゑとかく前から心をしつた同士で年恰好も同しくらゐな人がほしい事やしからば㊃せめてまへかたの事をはなしなりともせうのに友たちもなうなるとさて／＼心ほそいものしやそこれをおもへはたれても年のよらぬうちは元氣にまかせて何事でも一人だつてするけれどとかく前から心をしりあふた友たちはなけねはならぬものじやぞ

卅五紀貫之コノ哥ハ古今春上はつせにまうつることにやとりける人の家に久しくやとらてほとへて後にいたれりけれはかの家のあるしかくさたかになんやとりはあるといひいたして侍けれはそこにたてりけるうめの花ををりてよめるトアリ

人はいさ人トハ主ノ女ヲサシタル也いさはしらすといふ詞の上におく詞也むかしはいさといへは必下にしらすとよみたれと後世ははふきたるもある也心もしらすふるさとは初居タル所ヲ暫居スシテソコヲサス

ハ皆故郷トイヒツケタリ　花そむかしの香ににほひける

㋑人の心のうちはとうあるかしらぬが此まへかた居た所の梅の花は何かしらすむかしの通りの香で色もにほふてある事じや㋒人といふもの詞と心とはちかふ事もある物しやが非情の梅こそむかしをわすれてもしまひそふな物じやか㋚結句で人はむかしの事もわすれたやら合点のいかぬそふりじやけれとなんでも梅の花は此方をわすれすにまつてゐたやうすにみえる事じや㋛これを思へは惣体心と詞とはちかふやうにはすましい事じや詞にはとのやうに利口にもいはれる物じやゆゑ人ほど心のうちのしれぬものはないぞ

卅六清原深養父古今夏ニ月のおもしろかりける夜あかつきかたによめるトテ出タル哥也

夏のよはまたよひなからよひハタ、夜の事をもいひたれと父宵ノコヲモイヘリ万葉ニ初夜とかきてよひとよまれたり　あけぬるを雲のいつこにいつくいつこの事後世にてはいつことといふは何とやらん古めきたるやうなれはにやいつこといふへき所をもいつくとよむ事然へかゝす　いつこは何処の心にてころしいつくは何國の心にてせはしこの哥なとはいつくといはゝその所をつよくたつね知らんとする心となりてかなふへからすこれはたゝひろくとこもとにといふたるにてしひてそこに主意はなき也　月やとるらんやとるといふは行へきものゝそこにとまるをいふなり

㋔夏のよはまた宵のくちなりに明てしまふたのに月もとこへやらいてみえぬがこれは雲のどこらの所にとまつたのじやしらぬ㋒春の夜秋の夜冬のよなとはよひ夜中暁と次第にふけて明るが定まりの事で月も夜か明れは山へ入るかきはまつた事じやがたとひ㋚夜は短うあらうともせめてつねの通り

にじり〳〵と明るならは月をみるまがないといふてもたんのうもせられうに(訓)これをおもへは諸事おもふやうにならぬことも何ぞ一ツあきらめられる事かないとたんなうはしられぬ物しや

卅七文屋朝康 此哥後撰秋中に延喜の御時哥めしけれはトテ出タリ

しら露に風のふきしく 吹しくとは吹シキル也及重ナトノ字ナヨメリ吹アトカラハソキ〳〵スルナイフナリ數ノ心ニハアラス 秋のゝはつらぬきとめぬ玉そちりける

㊀草に露のおいてある所え(一)風が絶まもなうふく秋の野をみるに糸をとほしてつないだがとけたやうに玉が何かしらず散る事じや㋒露かおいてあつて風のたえまがあつた時は秋のゝの草の葉の細いのが糸のやうでそれてつないた玉のやうにみえてとふもいはれなんだが㋚露斗にかきらす風といふものは人のをしかる事もかまはず心なう吹て春の野山なとてはまそつと枝に置たい花をちらしなどする物で返々うらめしいものではあるぞ(訓)これをおもへは人のをしがりそふな物は人の氣にさはる事ても少しつゝの事ならはゆるしもせうがあまり心ないやうな事はなるたけ氣をつけて遠慮する事じやわいの

卅八右近 此哥ハ拾遺戀四ニ出テ題しらす也大和物語には男の忘れしとよろつのことをかけてちかひけれとわすれにける後にいひやりけるトアリ

わすらるゝ身をはおもはすちかひてし人のいのちのをしくもあるかな

(ゑ)人にわすれられたわか身の上は何とも思はぬか神かけて誓言しておかれた男の命がさても〳〵をしい事かな(筆)此やうに心かはりもせなんだ間は結句わか身の上をさま〳〵と思ふ事はあつたれと男の方は誓言をそむかれた事もない故に命のことなともなにともおもはなんだが(リ)全体をいへはかうわすれられたわか身の上は色々とおもひなけくはつの事しやのに誓言といふものはそむくと罰のあたる物ゆゑもし此やうにそむかれた男の命を神々がとらせられうかと男をうらむ段てもなう夫はかりがをしいはさても〳〵我身なから合点のいかぬ事じや(神)これをおもへはなんほう大切な人ても仕方かわるいとうらめしうないてはないけれと此やうに命にかゝるほとの事かあると中々わか身をかばふ段てはないやうになるものじや

卅九參議等 此哥ハ後撰戀一ニ出テ女につかはしけるトアり

あさちふの あさぢとハ茅萱ノセノヒクキチ云淺茅ノ生テアル野トイフ心ニテ野ノ冠辞也古來例多キ冠詞也 をのゝしのはら コレハ又しのトイヒカケン爲ノウチヨセナリサレハ二句序ナリ しのふれとあまりてなとか人の戀しき

(オ)人にしれぬやうにとこれほとかくしこらへてゐるのになせに心のうちからあまつて此やうに人か戀しい(ママ)しらぬ(ウ)全体人にしられては互の爲にわるい故になるたけかくさふ(ママ)おもふからは心のうちをあまつて出るほと人も戀しうはあるまいはつの事じやに(山)それにかうなるは人にしられまいと思ふ

のも自身の心人の（が）戀しいのも自身の心しやけれともかくさうと思ふてこらへる心よりは人の戀しい心の方がつよい事じやそふな㊁これをおもへは人にしれてはたかひの爲にならぬ故にかくさふとおもふのは尤な分別理屈でかくされゝは爲によいといふ事はしりつゝそうならぬのはさては理屈で人のうぶな心はおさへられぬ物じやぞ

四十 平兼盛（閼書） 拾遺戀一に天暦御時哥合にとて出たり

しのふれと色に出にけりわか戀は物やおもふと人のとふまで　色にいづるとは顔色なとにあらはれたるを云

㋑手前が人を戀しうおもふのはこれほと人にしれぬやうにとおもふてゐるのにそれに何そおもひ事があるかと人がたつねるほとにかほ色へ出た事てはあるぞ㋒外の人が戀をするにはかくさふとおもへは人の目にたつやうに顔色にも出るほとの事はないかしらぬが㋚そのやうにかくしとほされるならは至極の事じやにあらはれてはたかひの爲にならぬのにそれが人の目にまでたつやうになるはさて／＼難儀なもとかしい事や㊁これをおもへは何事でも心のうちにふかう思ふてゐる事（マヽ）かあるとかほ色におのつとみえる物でかくされぬ物じやがこれは我ばかりの事でもあるまい

四十一 壬生忠見 拾遺戀一すなはち上の（閼書）兼盛の哥と同時の哥合の哥にて これをさきに置てならへて出されたり

戀すてふ　こふはといふといふ事をつゝめたる詞也されは万葉にはとふともちふともかけりこれ正字なれと後世あやまりててふとかきならひたり　わか名はまたきたちにけり人しれすこ

二そおもひそめしか

㋔最初おもひついた時は何とぞ人にしれぬやうにせうとこそおもふてかゝつたがもうはやから戀をするといふうき名がたつてしまふた事てはあるぞ㋒全体かう思ひかゝるからは仕廻まて人にしれるやうな事はすまいとおもひ定めてゐる事しやによつて戀をしてゐるといふ氣もなく中々うき名のたつ時分てはないのに㋡仕舞まてしれぬやうにする段てはなうてかくさうと思ふた心ももはや人か戀しい心におされた事しやさふなさて〳〵どんな事をした事てはあるぞ㋡これをおもへは何事でも最初は利口そふに分別をして仕舞まて仕とげうとおもふてかゝつた事もうぶな心が出てくるといつまでもといふ段はおいてづい（逐）最初の分別はくつれてしまふものじやぞ

四二清原元輔　後拾遺戀四に出て心かはりて侍ける女にかはりてよめるトアリ

五ちぎりきなかたみに一　かたみには互にの心なれとたかひにむかふの人とかはり〳〵にする心也かたみには兩方一度にかゝつてしてゐる心なるかたかへり　二袖をしほりつゝ　下に波をいはん爲に袖のぬるゝ事をいへる也　三末のまつ山波こさしとは四　この故事は古今集大哥所陸奥哥に〽君を置てあたし心をわかもたは末のまつ山波もこえなんこれを本哥とす此本哥の心は末の松山を波のこえん事いつまでもあるましき事なるか故にわか異心をもつましき誓にさとしたるなり

㋔そなたもこちも涙でぬれる袖をしぼり〳〵末の松山を波がこえる事のないと同しやうに心のかはるといふ事はいつまでもすまいぞとたしかに約束したに違ひはなかつたなあ㋒全体涙のこぼれるは

との中でないならはかはるまいと約束したもかはるまいものでもないが○たれでも涙といふものはわさとこほされる物てもない故それほどの眞實てあつたのに今此やうに心かはりのしたのはさてはかはるまいと約束したはもしこつちの覺ちかひてはなかつたかしらぬ○これをおもへは何事でも最初は誓言までをするほと眞實があつてもいつまてもその通りてつゝく事はなりにくい事じやそふな

四三　權中納言敦忠　此哥は拾遺戀二に出て題しらす也

あひみての後の心にくらふれはむかしはものも(ママ)おもはさりけり

○此やうに思ふ人にあふてからの心もちにくらへてみるとあはなんだ前かたは結句くつたくはなかつたといふものしやが○仝体あふたうへての心もちは引あはしてみるとあはぬさきはくつたくなはつの事じやのにあふてからは人の心がかはらうか世間の人がしつてうき名をたてうかうき名かたつたらはあはれぬやうにならうかなとゝさまざまのくつたくが多いが仝体あはぬさきの心もちは戀しさかたまらすいつあはれうかと胸もたついてくつたくな物ゆゑ引あはしてみるにも及はぬ事しやけれと結句前かたの方かましなやうになつてきた事かな○これをおもへは何事てもくつたくな事かあるとこのくつたくになる事がおもふ通になつたらはさぞかし心もちかさつはりとせうと

おもふ物しやけれとそれかおもふ通になるとそれについて又くつたくが出來て結句最初のくつたくよりはくつたくが余慶になる物じやぞ

四四中納言朝忠

この哥は拾遺戀一天暦の御時哥合にとあり

あふことの絶てしなくは　此しの字古人も皆やすめ字とて注をもせられねとやすむなといふ事心えかたき事也やすめてかなはぬ事ならはかやうの所ならすともやすむへき事なりこれは此しの字を心えられぬ故の事也これはつかひやうこそかはれ去倫のしも同し心にかよふし也　脚結抄にはつかひかたのかはるをもてこれを之家のしといふこれは自身あふ事か絶てなきやうにしたしとおもふ心をやかてさして　此わかおもふやうにあふ事か絶てなきならはといふ心也　されはコノヤウニといふ里言にあたれり〻〵我にひとしき人しなけれはなとよめるも同し心也　しかれとも心淺き人は　詞の上はかりにてかげをみぬ故にコノヤウニといふ里言にはかなふへしともおもはすすへてしの字は今はみえぬ所になりたる物事をはその次第をさしてさとす詞也　これ声妙よりおとれる義なり

なか〳〵に人をも身をもうらみさらまし　ましとはあらましといふ装のあらといふ事を略したる脚結也　されは末の事のやうすを今よりはかりて決定しかたき事を思ふ心也

㋔人にあふといふ事か世間にとんとないならば此やうになまじひ人をも不足におもふたり我身をも不足におもふたりする事もあるまいが㋒全体人にあふといふ事が出來るゆゑ結句此やうに人も我も不足におもはれるのじや㋚しかしあふがいやなてはないゆゑあひたい〳〵とおもふてとうやらこうやらあふたもわがでにした事じやのにそれにたひ〳〵あはれなんだり少し仕方のわるいやうな事かあると人を不足に思ひ又まそつと人らしい人ならはこのやうな事はあるまいなとゝ我身をも不足におもふてさま〳〵とくつたくをするといふはさても〳〵らちもない事ではあるぞ㋕これをおも

へは何事でもわかのそみ事の出來るにまかせてするとそれについて結句ちちもないくつたくが出來るものしや

四五謙徳公此哥は拾遺戀五ニ出テ物いひける女の後につれなく侍りてさらにあはすはへりけれはトアリ

あはれともあはれといふは裴也万葉に呵怜の字をあはれともかなしともおもしろしともよみたり物事のふかく心にしみておもひはなたれぬほとなる事をいふ也今俗には哀傷なとの事ならてはいはぬ詞となれるは誤れりそれをもいふへし何事にもいふいふへき人はおもほえでおもほゆるといふ詞は里言思ハレルといふ詞なりされはおもほえでとはおもひあたりもなくてといふ心也身のいたつらになりぬへき哉

へし

㋵不便な事しやとなりともいふてくれそうな人はとんと外に心あたりもなしに我身がむざ〳〵とい（うて）ぬ死てしまひそうになつたが此やうなからだが又とあらうかせん㋒たい不便な事やといふ段ではなく眞實思ふてもくれそうな女があるによつて此からだもいつまでもすたれ物にはなるはつの事ではないにその㋡女にはかきらすせめて不便なといふてなりともくれる人が心あたりもあるならたとひすたれ物になつて死ぬるといふてもこれほど殘念にかなしもあるまい（ママ）㋻これをおもへは人といふものは詞ででも不便かるやうな人は一人もなしにすたれ物になつて死ぬるほどかなしい事はない

四六曾祢好忠この哥は新古今戀一に出て題しらす也

ゆらのとを好忠ハ丹後掾ナリケレハコレハ丹後ノ由良ヲ思ヨセラレタルナルヘシとはせと也せとはすへてわたりにくき物也されはここにて梶をたえたるつねの所にてよりもわひしき心をさとさんためなりわたる舟人かちをたえ以上三句よせ哥也このよせやうはこれをもて下の詞の心をたとへてさとしたるなりよせ哥の一体也かちをたえとは梶を折なとしたるを云梶は舟の第一の物にてこれなくてはゆかんとおもふ方へ舟かむかはぬなりゆくへも

しらぬへ（は方といふ字を万葉にかゝれたり野へ山へ春へなともみなこれに同し）戀のみちかな（戀の道とは戀のしかたといふ心也しかたハ定まりたる事に一人々みなそれをつたふてあとよりも（校者云一しでヒト傍書アリ）ゆく事をはすへて道といふ也すなはちありきてゆく道にたとへたる物也神道佛道儒道なとゝいふも同し心なれとそれはおもくつかひこれはかろくつかひたる物也）

(リ)ゆらのせとをわたる舟の船頭が楫を析なとして楫なしになつておもふ方へ舟のやりやうもなくその上つねの所でもある事か楫かあつてもわたりにくいせとじや故にまことに難儀至極なと同しやうに戀といふものはさても〳〵此行末かどうなる事じややら不安心なものかな(ヲ)全体戀しいと思ふ心かすわつたからはとうなりともしておもふ通りになつて行末も安心せらるゝやうになりそうな物しやのに(ヲ)まづ最初からその人にあはれうかあはれまいかもしれす又あふてからもその人眞實かあつても心かはりせうかもしれす又ふいと外の人へ心かうつらうやらもしれす又その人にそひとけられうやらもしれす又とのやうな邪广が入らうもしれすよく〳〵案してみれは惣体ゆくさきはとうならうやらとのやうなめにあはうかもしれぬ事で安心のならぬ事じや(ワ)これをおもへは戀の道はかりてもなく何事ても行さきの事に安心は出來ぬものじやぞ

四七惠慶法師（拾遺秋に出て河原院にてあれたるやとに秋來るといふ心を人々よみ侍けるにとある歌也河原院は融公の家也）

八重むくら（葎のいく重にもなるほとしけりたるをいふなり人のすむやとにては生てもとりのくるなりされはあれて人すまぬ宿にかきりて云也）しけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり

律㋑かいく重にもなるほとしけつてあるほとあれた宿じや故仝体がさひしいのにそれにくる人こそなけれ秋はやつはり來た事じやぞ㋺此やうにさひしい宿の事じやによつて人なりともくれは少しはさひしさもまきれうのに秋か來たによつていよ〳〵さひしいが仝体むかしはさしも融公か陸奥の塩かまの浦をうつさせられて京で名たかい家でしかも大臣といひ威勢もあつてことの外にきやかに人もおひたゝしく來たる所てあつたゆゑ秋じやとてさひしうもなかつたのに㋩それほとの家てあつたれと大臣がなくならせられてはだれがとりつくらふものもないがせめて人なりともくるならは少しはさひしさもまきれうのにその御時代に御恩をうけた人もあらうに一人もくる人もな（寛平寛和時代可考）く又それほと人も名たかういふた所しやけれとかうあれてはたれか一人來てみるものもなくなつたにその時分何の心もなう來た秋はやはり此やうにかはらす來て結句一倍さひしいけれとも秋にくらへてみれは人はさて〳〵薄情なものてはあるそ㋥これをおもへはたれても威勢があつてにきやかな所えは人もよる物じやが（ヘ）その人もなくなり年數もたつとみむきもせぬかその時追從のないものは結句いつまてもかはらぬ物しやはい

四八源重之 詞花戀上にいて〻冷泉院東宮と申ける時百首の哥たてまつるによめるトアル哥也

かせをいたみ（いたしとはきひしき心也みは里言にサニといふ心なりをノ字ハ天智帝の御製の所にくはしくいへり）いはうつ（ヲ）波の（ノヤウニ）（以上二句よせ哥也これ又たとへてみせたる也）おのれのみく

たけて くたけてとは思ひくたくる也心の分別かたまらすさま〱心をいたむる心なり ものをおもふ比かな

㋙風かきひしさに岩にうちあたる波のやうに戀しい心がつよさに此ほとからなんほううらんでもゆすつてもむかふは一向こちらにかまはすたゝ手前ばつかり心をくたいてとうせうかかうせうかと何かにくつたくをしてゐる事かな㋚全体これほと始終うらんたりあたつたりするからはなんほう氣つよいものでももはやすこしはこちと同しやうな心にもなつてくれる時分じやのに㋛もはや此やうに根つようくつたくをしても推量もしてくれぬはさても〱人は存の外氣つよいものじや㋞これをおもへは惣体むかふの氣つよいのはこつちから無理な事をもつてゆく故の事しやそうな

四九大中臣能宣 詞花戀上に出て題しらすの哥也

みかきもり 左右の衛門よりはしめて禁中の御門を守る衛府のもの丶惣名なり衛士は衛府の下官なれと猶惣名をもて冠詞としたる也 衛士のたく火ノヤウニの 衛士は毎夜御門に火をたきてまもる物なればかくいはれたる也以上二句よせ哥なりこれもそのさまをもてさとしたる物也衛士の火は毎夜をこたりなきものなれは思ひのひまなく夜もゆるに比したる也 よるはもえひるは消つゝ もゆるとは思ひのもゆるなり思ひのもゆるとは火のもゆるかことく物思ひにて心のうちのもたえるやうなるを云也消るとは消入るやうにくるしきをいふ 物をこそおもへ

㋔御門の番をする衛士のたく火と同しやうによるはおもひにたえかねてもたえあかしひるになると消入るやうになりまいにちまいはんおなし事をしてくつたくをこそすれ何のかひもない事や㋕全体よるはもえてもひるはまきれてさほとにもないか又ひるは消入るやうにあつてもよるは又ねられ

るかどちらぞくつたくの間もありそうな物じやかそれも何ぞそのかひてもある事ならは此やうに思ふはづの事しやのに㋚少しのすきまもなう夜はねられすひるはいきた心地もないがこれては命もつゞくまいが命もつゝかぬほとくつたくをしても人は何ともおもはぬがすこしは人か推量もしてくれるやうな事かあるならこれほと術なうはあるまいさても〳〵わけもない事や㋚これをおもへは人といふものはおろかなもので自身望事があると何のかひもない事に命もつゝかぬほとくつたくをするものじやなあ

五十 藤原義孝 後拾遺戀二に出てをんなのもとより帰りてつかはしけるとアル哥也コレハ逢かたくありし女にはしめてあひたる後朝の哥なり

君かためをしからさりし命さへ さへは里言と心たかへり後世は俗言に混したりこれは万葉にも副の字をかゝれたる心にて里言にマデガといふ心也里言にいふサヘハたゞにの心なりまかはすへからす此哥の心古注ども皆此さへの心をそへてみられさりける故一首の意味も行とゝかすこの哥をもても一言も大かたにみるましき事を知へしこれは人にあふて後の人の心なかくかはるなとおもふ心からもとあふにならはかへむとをしくもなかりしわかいのちまでかをしくなりたりといふなりすへてさへはかくの如く影にこれより重き事ありてそれに及はぬ物のそれと同しやうになるよりそれにそへていふ也たゞにはその重き物に軽きものゝ同しやうにあるにつけて重き物は勿論なるへしとおもひやれる心なり なかくもかなとおもひけるかな

㋣そなたの事ならは命にかへてなりともあひたいと思ふたかかうあふてからはそなたの心いつまでもかはらずにあつてほしいと思ふにつけて最初の量権とはちかふて㋚來てをしうもなかつた此方の命までか何とぞいつまでもつゝくやうにと思ふた事かな全体最初からもをしいと思ふたわか命な

らは今でもなかうあれかしとも思ふはつの事そうなくは父最初からあふのとならはをしうなかつた命の事じや故今となつても弥をしうないはつの事じやのに㋛最初のもそなたを思ふから命でも捨る氣今のもやつはりそなたをおもふから命までかをしうなつたのではあるけれと最初の量權はとうならうもしれぬ物しやぞ㋡これをおもへは何事でも物か十分になつた上ての分別は最初の分別とはちかふてくるものじやなあ

五一藤原實方朝臣此哥は後拾遺戀二に女にはしめていひつかはしけるトテ出タリ

一かくとたにえやは二（テサヘ）（テル）（トウモイハレヌ）いふきのさしも艸えやはいふとかけたる也いふきは下野也さしも艸は艾の事也さゝせもトイフモ同シ五　いふきのさしも艸はいふといひさしもといひもゆるといはん爲いひよせなり心なしさ

四しもしらしなもゆるおもひを

㋐此やうにおもふて居るといふはつかりの事でさへどうもいはれぬがまして心のうちのありたけは中々いふてきかされる事でない故にこれほともだえくるしんでゐる心のうちのくつたくをはそれほとにも人はしるまいなあ㋒仝（ママ）体とれほとの事てもいへはいはれるもので人にしらす事も自由にいふてきかされる物しやおもふて居たは心え違ひであつたか㋚とうぞいはれる事なら心のうちをありたけいふてこれほとまでにおもひこんだのをしらしたい物しや㋕これをおもへは口でいはれるほとの事は心の眞實か淺いのでまことに身もたえするほとの心のうちのありたけは中々いはれる事で

はないぞ

五二藤原道信朝臣 後拾遺戀二に出て女のもとより雪のふり侍りける日かへりてつかはしけるとある哥也此詞書ニ雪ノ事アルカラハ哥ニカケテミルヘキ事ナルチ古注ソノ沙汰ナシ

明ぬれはくるゝ物とはしりなから猶うらめしき なほといふ事後世里言のなほといふにまかひて心えたかひたり猶々といふ心にあらすそれはいとゝの心也これはその一筋をあらためぬ

心にて里言にやはりといふ心也直といふと同し義也 あさほらけかな

③夜か明てしまふやうになると又日かくれる事は相違のない物しやといふ事はよう合点してゐなりにやはり夜の明はなれたのが不足におもはれることかなそれに雪まてかふつて東もはやうしらんたやうな⑥全体夜か明たらは日の暮るといふ事はとんとない事ならははやう明たのも不足なはづじやのに明ると暮る物しやといふ事をしらぬ人かなんそのやうにたつたしはらくの昼の間のこらへじやうのないは全くそなたに逢たさゆゑの事じやけれとせめて雪なりとふらぬならは少しは明やうも遅からうかと思ふ故⑦一倍不足に思はれたがさても〳〵心といふものはつね〳〵の理屈知なから境出たる也とはかはつた物じやそこれを思へは人といふものは程なうよい事のあることをしりつゝ目前勝手のわるい事かあるとそれ斗を不足におもふてえうこらへてゐぬ物しやなあ 此哥の注契沖神に入られたり

五三右大將道綱母 此哥は拾遺戀四に出て入道攝政まかりたりけるに門を遅く明けれはたちわつらひぬといひて入侍けれはよみて出しけるトアリ

なけきつゝ なけゝゝといふ事後世はなく〳〵事のやうに心え誤れりこれは長息といふ事のつゝまりたる詞にて里言にトイキツク溜息チツクなといふ事にてふかく物の心にかゝりてせんかたなき時のさま也もろこしにて歎息といふすなはちこれ也

ひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものとかはしる
㋑ため息をつき〳〵たつたひとり寝るその夜の明るまでの間はとのやうにながいものじやと心えてござるぞ㋒今夜あなたをまたせましたのを御退屈なされて門をあけまする間を仰山になかいやうにおほしめすさうなが㋚とんと門をあけぬではなしその上今夜の御まちなされた間はかくへつの間でもなし又私はこれまて御出なされぬ夜はとてもあはれぬと思ふ故其うへつねよりも夜の明る間はけしからぬ長さでむねも一はいになりましたまたせておいてこぬのとまたせておいてしはらく明なんたのとを引くらへてよう物を量權して御らうぜ㋗これをおもへは人の爲かた斗に氣かついてわが仕かたには氣のつかぬ物じやなあとかく何事てもわか身に引くらへて思はねはならぬ事じやぞ

五四儀同三司母 この哥は新古今戀三に出て中關白かよひそめ侍りける比トアリ

（行末ケフ對シタリ）わすれしの（マイト云ソノ）ゆく末まては○（ソノ言ノカハラヌヿハ）かたけれはけふをかきりのいのちともかな（ともかなはといふやうなる事にあらまほしといふこゝろ也）

㋑いつまでも忘れまいとかたう約束なされたその行末までもその言葉のちかはぬやうにはありにくいならひしやによつて何とそけふかぎりの命といふやうになつてほしい事じや㋒全体最初からたれもちかへうとおもふて末の約束をする事でもないからいつ〳〵までもいきのばゝつて行末なかうかはらすに添たいは山々じやけれとも㋚しわすれられるやうな事にあふては心よう死なす後世も

あんしられる故たれとてもをしい命しやけれと今のうちに死たいとおもふのは人の心のうれしい
うちに死（ママ）うとおもふのじやこれを思へは難儀なめにあふてから死んでは長いきも悦ばしからぬ事
又何事も満足なうちに死ぬるは早う死ぬるもなけく事てもない事じやぞ

五五大納言公任 拾遺雑下にいてゝ大覺寺に人々あまたまかりけるにふるき瀧をみてよみ侍けるとある哥也千載にも又入たり

瀧のおとは絶てひさしくなりぬれと名こそなかれて なかれてはなからへてといふ詞を瀧の流によせてよめる也此例多き事也即らへをつゝめてれとなれる也末世といふをなかれての世といふも同しいつまでものこつてといふはとのこゝろ也 猶聞えけれ

瀧の水の音は今では絶てからも年數になつてしまふたけれとこの瀧のたかゝつた名は今までものこつてやつはり人が賞美する事をきく事かあるがしかしたゝ跡はつかりで瀧の流もはやないははかない事じや瀧にかきらす惣体の物が目前にある時は人もかれこれともてはやす事もあるけれともそれがないやうになるともう誰か一人いひ出すものもなくなる物しや（ならひ）のに此瀧は嵯峨の院（さか）の院は嵯峨の上皇の御所なりしを貞觀十八年二月廿五日大覺寺といふ寺になしたまひたる事菅家御集にその奏状ありされは此瀧は此上皇の御所なりし所につくらせて御覽しける故名高き也 御心をつくしてこしらへさせられた瀧じや故その風情も格別にあつたによつて今になつて跡ばつかりでも人かいひ出して殘念かるのは全く 上皇の御心ふかいによつてよその瀧よりは格別おもしろかつた故の事じやこれをおもへは人も一生ははかない物しや故せめてからたがないやうになつたあとでいつ／＼まで

も人のいひ出すほとよい名をのこしたい物じやなあ

五六和泉式部 後拾遺三にいて〻こゝち例ならす侍ける比人のもとにつかはしけるとある哥也 雜歟 病氣の事也 コレハ男ニモセヨ友ニモセヨ也スヘテ戀ノ哥ハ男女ニカキラヌヿソノ例オホキヿ也

あらざらん なからんといふ心也されと少したかへり心えおくへき事也なからんといへは今あるをおもはする詞也あらさらんは今ある所よりなき所へかけて思はする詞なるかたかへり 此よの外の あらんさらん（ママ） 此世の外とは後世來世の事也 ㋑おもひでに 思ひでにとは思ひ出す種にする事を云 今ひとたひのあふこともがな

わか身かないやうになつてからの後世で此世の事をおもひ出す種にとふぞそなたにま一度あふことがあるやうにしてほしい事や㋒此世でさま〲うれしかつた事とも〻あるけれとよう思案してみる所がこれより外には何事でも來世までもうれしうおもはれそふな事はないとおもふによつても㋓しこれなりにあはすに死んだらはこれか心のこりになつて思ひ出す種の段てはなうて迷ひの種になるてあらうとおもへはかなしい事しやこれ㋕をおもへは人は此世で何事でも心のこりな事はないやうにして死にたいものしやさすれは後世もうれしい事どもをおもひ出し安穏にあるてあらう

五七紫式部 新古今雜上にいて〻はやくよりわらは友たちに侍ける人の年比へてゆきあひたるかほのかにて七月十日比月にきほひて歸り侍けれはとて出たる哥也

めくりあひてみしや うたかひのやなり それともわかぬまに雲かくれにしよはの月かな

㋔月か西へ入て東へ出てくる間のやうに久々でめくりあふて顔をみたがみわすれてその人やらとくとみわけもしられなんだ間に十日比の月しやによつてまだ夜中じやのに雲にかくれたなりてつい

入て仕廻ふたやうにせはしなういんてしまはれた事かな㋒全体これはもはやめくりあふ事もあるまいかとおもふてゐたのにかうめつらしうあふた事しやによつてゆる／＼とはなしなともしたいのに㋷をさな顔はかはる物しやゆゑどうやらちかふたやうにおもふたほと久々ての事じや故幾日はなしてゐたといふてたんのうもすまいけれとせめては夜つ。ひとでも居られたら心ゆかしにもならうのに今夜の月と同しやうにさてもほいない事ではあつたぞ㋕これをおもへはたま／＼の事でさへおもふやうにはならぬ物じや故まして常住十分の事をせうと思ふは無理じやぞ

五八大貳三位（この哥は後拾遺戀に出てかれ／＼なる男のおほつかなくなといひたりけるによめるとありおほつかなくとは思ふ心のはれやらぬにて不滞ナル心ヲモ云也万葉欝悒をよめり忘たるやうなるをおとろかしおこせたるなり）

有馬山ゐなのさゝはら（二所ともに津國也古注に有馬山を男さゝはらを我風を男より物いひおこせたるにたとへたりといへれとそれまでもなかるへしたゝいてといふ事をへたてゝそよといはん爲斗の打よせ也さゝに風ふけはそよ／＼となるゆゑにいひかけたる也）風ふけはいてそよ人を（いでとはとりもつかぬほとの事をとり出ていふ時にまづいふ詞なりそよとは物事につけておもひあたりて同したるこゝろなり）わすれやはする（やはは里言にカヤといふ心也その理を人に思はする脚結也）

㋵そなたからおほつかないといふてつかはされたについてふいと心づいた所がいかにも此方も御同前になせ此やうに遠々しいのしやしらぬとぞんずるがこれは人をわすれたのかや思案していひきかして給はれ㋒これまでなせ遠々しいそと氣がつかなんたそなたをわすれて居たやうなけれど㋷そこに氣のつく所ではなくたゝわか身の人に捨られるやうなうまれつきがかなしうて不足をも申さず

それはかりに心をとめて居ましたのでござるがまづそなたの心のうちをよう思案して御覧ぜ○これを思へは何事もわか身の數ならぬ故の事しやとあきらめてゐると結句人は自身の事は思はすに疑ふものでさて〳〵せうこともない物じや

五九赤染衛門この哥は後拾遺戀二に出て中關白少將に侍ける時はらからなる人に物いひわたり侍けるにたのめてこさりけるつとめて女にかはりてよめるとありコレハ衛門か妹也

やすらはて　やすらふとはすへき事をもせすに見あはして居るを云猶豫の字をやすらふともたゆたふともよめり　ねなましものを　なは去倫のなとてテシマウといふほどの心也これはぬのかよひたるなりなたの心也

さよふけてかたふくまでの月をみしかな

㋑もしも來うかとみあはしてみずにはやうねて仕まふたらはよかつたのにうか〳〵と夜がふけてその上に西へかたふいたまで月をみた事かな㋒全体よもや〳〵とおもふてねすにまつてゐたによつてふかしてもかひのない夜をふかしそれはかりかみようとも思はぬ月を夜中みてゐたは不調法な事であつたけれとそうじやといふてきつと來うといはれたのにとそれはつかりが氣にかゝつてねられもせなんだが㋘とう〳〵みえなんだのは何そさしつかへかあつたかたゝしははしめからこぬつもりであつたのかしらぬ㋕これを思へはたとひ人ははしめからこぬつもりていふたのでも一旦そういはれたからは夜の明るまではまつてゐねはならぬ物しやはい

六十小式部内侍此哥は金葉雜上にいてゝ和泉式部保昌にくして丹後の國に侍りける比都に哥合のありけるに小式部内侍哥よみにとられて侍けるを中納言定頼つほねのかたにまうて來て哥はいかゝせさせたまふ丹後へは人つかはしけんや

つかひはまう一こすやいか、心もとなくおほすらんなとたはふれてたちけるをひきとゝめてよめるとて出たり 此内侍かあまり哥よくよむ故母の式Pかよみてやるならんと世上にて沙汰しける故の事なり

大江山 （これ今いふおいの坂也これをいひ誤れる也丹波丹後への道也） いく野のみちの （大江山も丹波これも同國にて丹波丹後の道なりサテ大幾ノ心カヽリタル白ラノ了也） とほければまたふみもみす （橋立を踏てもみぬと文もみぬとをかけたる也これつかひはこぬかなといひたる答也） 天のはしたて （母の式P丹後にゐれは丹後の名所をよめる也）

㊀母かゐる丹後へは丹波路の大江山やいく野をとほつていかねはならぬがその道のりが遠い故下られてからまたつひに文ものほされませぬ㋒仝体まちつと道のりが近いならばたひ〱母の文もみたうこされともさても〱㋚道のとほいと申すものはせうこともない事で母のなつかしう心ほそさを御推量御推量（マヽ）あれ （哥のことはたゝ聞ながしにして母の戀しきこと斗にて答たるもの也） ㋒これを思へは親のそはにゐる時は沢山におもふ物しやけれと此やうに遠方へ離れてゐる心になつたがよい事じやそ

六一伊勢大輔 （此哥は詞花春に出て一条院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるそのをり御前に侍りければ其花を題にて歌よめと仰ことありければとアリ）

いにしへのならの都の八重さくらけふこゝのへにゝほひぬるかな （八重九重とあるにこれは詞の上の事さしつかへにはならぬ也）

㊀まへかた（校者云此所ニ「まへかたといはいでもたれても聞ゆる事也これは境の出たる也さて下のけふといふ事にかけ合た所にては裏となつて裏か出たる也此一句は詞の道にかなはぬ也」ト追記アリ）奈良に都のあつた時分の八重櫻がけふ此内裏でうつくしいさかりをみるといふ事さても〱めつらしい事かな㋒仝体奈良の都はとつとむかしの事じや故その時分のさくらは今日此内裏（へ）などでみそうな事ではないはづじやにさほと㋚仰山ににきやかにあつた奈良の都は今此京えうつつて今てはとつと大昔とい

ふほとになつてその時分の人なとも一人もないのにはかないやうな櫻は結句今にむかしの通りにさいた事さて〳〵人の分別とはちかふた物しや㋐これをおもへは花なとをはかないなとゝおもふのは人の身のうへをしらぬといふものしやなあ

六二清少納言　後拾遺雜二に大納言行成物かたりなとして侍けるに内のものいみにこもれはとていそきかへりてつとめて鳥のこゑにもよほされてといひおこせて侍けれはよふかゝりけん鳥の函谷の關の事にやといひつかはしけるを立かへりこれはあふ坂のせきといへりけれはつかはしけるトテ出タル哥也

よをこめて　日のうちへ夜を入てといふ也朝ノ一ニ曉ヨリスル心也　鳥のそらねははかるとも　史記に孟嘗君秦の國にて讒言にあひて逃去らんとて夜ふかく函谷關にいたりけるに此關鶏なかねは戸をあけぬによりて孟嘗君にしたかひし客三千人のうちによく鶏のこゑをまねするものありてなくまねをしけるに外の鶏みな鳴て戸をひらきけれは孟嘗君やす〳〵と齊の國え（へ）かへりける事ありこれを本文としていへる也　鳥のそらねはかりまねをいふなりはかるは關守をたはかるなり猶此事くはしく枕草子にあるをみるへし　よに　よにとは此廣キ世ナレ氏といふ心也里言よもやよもやかしなといふに同し　あふさかの關はゆるさし

㋑秦の國にて孟甞君といふ人のつれられた人が函谷といふ關で鷄のなくまねしたやうにたとひよふかうとのやうなうそをついてたまさうとおもふてもこのひろい世界にもうつかりとあふ坂の關の戸をあけてそのやうな人にあふものはあるまい㋒奎体函谷の關守もちと人らしいものならはよふかい鳥のこゑにたまされて關の戸をあけてうつかりととほす事もすまいはつの事しやけれとそれと㋓はちかふて人のいふのをはすわにうけてうつかり心をゆるすと一生の身のをさまりにもなる事を仕そこなふてあとて後悔もする物じや故關の戸をあけてとほすまじい人をとほしたやうにあふま

しい人にあふ事を合点するものは此方にはかきらすたれもありそもない事じやぞ㋒これをおもへはうそをいふとまことゝははづかしいもので現在だれでも人が合点せぬものじやといふ事わか身ではつきりとしれた事じやなあ

六三左京大夫道雅 此哥は後拾遺戀三に伊勢の齋宮わたりよりのほりて侍ける人に忍ひてかよひける事をおほやけもきこしめしてまもりめなとつけさせ給ひてしのひにもかよはすなりにけれはよみはへりけるとて出たり

いまはたゝおもひたえなん 去倫のなん也テシマハウト訳ス とはかりを人づてならていふよしもかな

○いまてはもはやあなたの事はおもひ切てしまひませうといふ一言をとふぞ人たのみせずに申すやうな爲方なりともあつてほしい心になつたはさて／＼一通りの分別てはない分別か出た事ではあるぞ㋒全体是まてあらはれなんたうちは行末のお約束なとも直にはかり申した事てあつたが㋒公儀からの御番人なともあるほとの事しやのに此後もやはり思ひきらすにゐては大切なあなたの御爲にもわるいがかなしさに是非なうおもひあきらめ申上てわるい事はもはやなんにも申上まいによつてせめて今一度御めにかゝつてあきらめたわけなりとも申上たいさても／＼あてのちかふた事にはなつたぞ㋒これをおもへは何事もない時はいろ／＼手かるう心えてゐた事も何ぞさはりか出來ると平生の十分一もかなはぬやうになるものじやなあ

六四權中納言定頼 此哥は千載集冬に出てうちにまかりてはへりける時よめるとあり

（ママ）
六五朝ほらけうちの川霧 霧は秋の名こりにて冬もたつ事古哥にも例多き事也改観抄におほくひかれたり たえ〴〵にあらはれわたるせゝのあしろ木 冬川にあしろといふものをうちわたして氷魚といふうををとる也

㋔夜か明はなれるとうち川の霧かそこゝきれ〴〵になつて瀬の所いく所もあるあしろ木ともかたん〴〵はつきりとみえるやうになつてゆくぞ㋚仝体よんべ夜中に川のあたりをみたけれと霧か一面にたつてあつてあしろ木は一所もみえなんだが㋚今は霧も自然とはれてゆく故みたいとおもふたあしろ木ともか次第にみえてゆくのもみな夜か明はなれた故の事しや㋚時節さへくると邪广（魔）になつたものもとこへやらいておもふ通になるのにこれを思へは時節もこぬうちにわかおもふ事をせうと思ふたは不調法であつたはい

六六相摸 これは後拾遺戀四に出て永承六年内裏の哥合にとあり

うらみわひほさぬ袖たにある物を戀にくちなん、「去倫のなん也」名こそをしけれ

（校者云此間十一行説アリテ是ヲ抹ス）

㋔（校者云初㋚トアリテ㋔ト改メタリト見ユ）うらんてもつれないゆゑこまりはてゝ涙か常住落てほす間もないので袖がくさりそふなこれでさへいやじやのにとふてゆく〴〵は戀で身をはたしてしまはうその死んたあとで世にうたはれるこれほど残念な事はないぞ㋚仝体袖のかはかぬほとの事はあつてもおもひなほして又あふ事もあ

○可再考

るやうな中でそうしてうき名がたつのでも残念な事じやとおもふてゐたが（校者云以上六十三字朱筆訂正ノ説ナリ）袖てさへこらへにくかつたのにまして死んだあとまでもつれない男にかゝつてこかれ死をしやつたといやな名前（校者云以上五字朱筆）をつく（校者云以上三字朱筆訂正ノ説ヲ更ニ墨筆ニテ改メタリ）からみてはあふてたつ名はなんでもない事じや（校者云以上二十一字朱筆訂正ノ説ナリ）これをおもへは人におもひはなされて死るほとかなしいものはあるまい

六七大僧正行尊 金葉雑上に出て大みねにておもひかけすさくらの花の咲たりけるをみてよめるとて出たる哥也

諸ともに 此詞かたみにといふ心とまきれたり後撰にふるさとの野へみにゆくといふめるをいさ諸ともにわかなつみてんといへるをみるへし一事をは二人なと一同にするを諸ともにといふへし此哥は相互にといふ心なるへきをもろともにといふへきやうなし あはれとおもへ山さくら花より外にしる人もなし

不便

此方と同しやうにこつちをも又あはれなものじやとおもふてくれい山さくらよ此山中てしつてゐる人といふてはないたゝそちか花ばつかりじやほとに此方かそちをあはれとおもはぬならはそちも此方より外にはしる人はあるまい外に人もこす又不便とおもふ草木もない山中さて〳〵心ほそい事やこれをおもへは時と所にてつねはひとゝほりにみてゐた物も心たよりになる事じやそ

六八周防内侍 此哥は千載雑上にきさらきはかり月のあかき夜二条院にて人々あまたゐあかして物かたりしはへりけるに周防内侍よりふして枕もかなといふを聞て大納言忠家これをまくらにとてかひなをみすの下よりさし入れて侍けれはよみ上て出たり

春のよの夢はかり　はかりはコレハカリといふも又此はかりはホトといふ心なれと用るかたのかはるにて心は同し里言にハッカリといふも程をたてゝみするなり此ほとといふもそのほとをみとりていふ詞なりと知へし　なる

たまくらにかひなく　かひなといふ事をたち入られたりたちいれんとせられける故に此詞わろく　て一首をそこなひたりその故は上下の詞にてかひなき事は十分なる故也　たゝん名こそをしけれ

㋔春のよの夢のうちほとな間手枕をしてあなたと寢たらはねたかひもなう直にわかれてそうしてたつたうき名ほと殘念な事はない秋㋒のよやなとはなかいゆゑ夢のうちといふてもよつほと長うあらうによつてまんろ（マヽ）（校者云「路」ノ字ヲ書ケリ）くにもねてしつほりとはなしも出來そうしてたつたうき名ならはそれほと殘念にもあるまいが㋚あふ間もないくせにうき名かたつてはすきな事は出來すにいやな事はあるといふ物じや㋕これをおもへは惣体すこしは我勝手によい事かなくてはいやな事に辛抱はならぬ物じやなあ

六九三条院　此御製は後拾遺雜上に出て例ならすおはしまして位さらんとおほしめしける比月のあかゝりけるを御覽してとあり

心にもあらてうきよにながらへは（モシ本意デモホウ）（タラハ）　㋒本意ノ通リハ此病氣トイヒ世上モウイ故位ヲモユツヽテカラ安心シテ死ウト思フケレド㋚人ノ命トイフモノハ思フトホリニハ（校者云此所ニ「コノ思フ通リニハト追記アリ）シタケレド思ノ外ニイキルヿモアルモノシヤニヨツテ　こひしかるへきよはの月かな（ウアリソウナヿカナ）（が）　㋒思キルカラハ戀シイフヿ境ニ自然トアレハ心にもあらてトイフ御詞ハ境ノ出タル也ヅノ月シヤケレド㋚コノ禁中ノ月ノオモ（校者云此本意ハ外ニア）シロサハイ[illegible]よはトイフヿニウラナシ（間空白）ルヿシヤ故ウモナントモナイハ

何事ても本意の通りにもの事かいかぬと心のこりも後悔も出來てくる事てあらう　神ハアレト詞ニ神アラハレタリ

七十能因法師　此哥ハ後拾遺秋下に出て永承四年内裏の哥合にとあり

あらし。ふくみむろの山のもみち葉は（トイフハ）

㋒嵐のふかなんた間はみむろ山のもみちしやと思ふてゐたか㋚からちるやうになつては

たつたの川のにしきなりけり（デアルコシヤ）

㋒もとみむろ山の錦しやけれど（コノ龍田川ハ上ノ三諸山ヲ裏トスサレハ上ノミムロノ山トイフコ裏出タル也）㋚ぞんしもよらぬ所の道具になる事じやはい（たつたの川の錦ナトイヒタル処詞ニ巧アリサレハ神アリナカラオホヒタリ古今にわたらは錦なとあるを思ひてよまれたるにてはあれとも錦といはれすは神とゝまるへし口をしき事也）㋕これをおもへは物にさそはれるとこの物にならうやらしれぬ事じやなあ

七一良暹法師（此哥は後拾遺秋に出て題しらすとあり）

さひしさ（アンマリ）に宿をたち出て（イノデ）なかむれは（メテミタ所ガ）

㋒コレホドさびしうないならば宿のうちに居て何ぞをしても居ようけれど㋚もし外は此やうにもあるまいかとおもふてためしてみた所が（秋ノ夕クレハ物サヒシク堪カタキ境アル物ナレハさひしさにトイフ詞境出タルナリナクテモアリヌヘシ）

いつく（トコ）もおなし（モオンナジ）秋の夕くれ（ジヤハイ）　○

㋒こゝではちがふて秋の夕くれらしうないといふやうな事かありそうな物しやの（の）に㋚仝体秋の夕くれはそこへはいてこゝへは來ぬといふやうな物でもない故やつはりちかふた事もなうさひしいは（いつくも秋の夕くれトイハヽ同シキコハ境ニ十分也サレハおなしトイフ詞境出タリ）（補）何そこらへにくいやうな事かあると所をかへたらばのかれ

られうかと思ふて全体の事に氣のつかぬ物じやぞ

七二大納言經信此哥は金葉集秋師賢朝臣のうめ津の山里に人々まかりて田家の秋風といふ事をよめるトアリ

○夕されは(カタニナルト)門田のいな葉をとつれて(ニサキアンナイヲシテ)

あしのまろやに秋かせそ(カナニカシラスゾ)ふく

(ウ)まだひるてもある事か」またれる人音はせいで」

(サ)一倍さひしうなつたに」いちわるう耳について」

(ウ)よそに住てゐる人はこいで(サ)このひつそりとした所に結句あはれを催しをる事じや

(ウ)夕かたにならぬうちは門前の田のいな葉の音のするほど」

(サ)さうなうてさへ全体さひしい時分しやのにいちわるう」人音は聞えすに爰へ來いとも思はぬ風

かふいて一倍あはれを催しをる事しや

(ウ)此やうな家しやけれとも秋風もふかなんだ故」

(ウ)(校者云以下説ナク五行空白アリ)

(校者云此歌註全備セズ、墨滅改訂セル所多シ。今墨滅ナキ部分ヲ取出デテ綴集セリ。尙最後ノ(ウ)ノ次、此張版心上部ニ當ル所ニ「來ル」ノ二字アリ。接續不明ナレド記シテ參考ニ備フ。)

七三祐子内親王ノ家ノ紀伊金葉戀下堀川院の御時艶書合によめるトアリ俊忠卿ノ〽人しれぬ思ひありその浦風に浪のよるこそいはまほしけれトイフ哥ノ返シ也

一音にきくたかしの濱のあた波はかけしや　和泉

㋒音にも聞えぬほとのあた人ならはまだ實否をしらぬ事ゆゑうつかりとかけまいものてもないけれと

たかしハ高キトカケテ二三ノ句はよせなりかくるとは袖にかくる也あふ事をいふ

㋚現前後には心かはつてういめにあふはしれた事じや

此一句(十字)境出タルナリかけしやトイフハ袖ノヌル丶コカイヤナル故ナラスヤモシ上ノかけしやの句かけなはトアラハ此句裏境トモニ出來テかけしやトイフコノ句ノ境トナルヘシ

一袖のぬれもこそすれ(ナトモスレハワルイニ)（校者云此歌詞「の」以下八字ニ朱枠ヲ附シタリ）

なせといふに物思ひかたえぬといやしやによつてしや（校者云以上二十四字朱筆改訂ノ說ナリ）

㊗心のあだ〳〵しいのがしれぬ人にはうつかりと氣をゆるす事もありそうな事でおそろしい事じや

七四權中納言匡房　後拾遺春上うちのおほいまうち君の家にて人々酒たうへて哥よみけるに遙に山のさくらを望むといふ事をよめるトアリ

たかさこのをのへのさくらさきにけり(ガサイテシマウタコジヤ　コレハツネノ山ヲ高砂ト云也)

㋒そこのさくらのまたさかなんたうちは

㋚なにの心にかゝる事もなかつたれと

外山(前ノ方ノ山ノ)のかすみたゝ(ヨドウゾ)すもあらなん(ナトモアツテクレイ)（校者云此歌詞「外山の」ノ三字ニ朱枠ヲ附シタリ）

㋒むかふの山もはつきりとみえたのに外山ハ高砂ヲ裏トスレハ心ヨカラス外山ノトイフ1裏ノ出タル也

㋚此節にかきつていちわるう邪广をする事よ全体遠い花の事しやゆゑせめてうつすりと成ともみようのに

㋕十分の事をおもふのではないけれとそれさへおもふやうにはならぬ物しやなあトイフ神ヨリ生シタレトハ外山のトイフ疵アレハ大哥トハイヒカタシ

七五源ノ俊頼ノ朝臣千載戀二權中納言俊忠家に戀の十首の哥よめりける時祈不逢戀といへるこゝろをトアリ

（シンキニアツタソノ）うかりける人をはつせの山おろしよ　はつせのより以下初瀬に祈るにつけてのよせ哥也よはすへてその物の内へ入こみてわかとりするていふ心也山おろしの實をとらへてはけしといはんとてよといふ也

はげしかれ（ウアレ）とはいのらぬものを（ノ）（ニ）人ノはけしきトハツラクテヨリモツカレヌニタトヘタル也

㋒かやうにくつたくもなう人の心もとけるやうにとこそねかふたれ　うかりけるノ五言人心はけしく成て一倍うさの却てまさつたるをいふ心なれとも人をいのるとあるからにはうき人なる事も明らかなるへく又うさの却て一倍したる事はいのらぬものをといふに明らかなるへしこれは境の出たるなり　㋚とうやらこれは人の心をはけしうなされてよりつかれぬやうになされてたまはれといのつたやうな事じやこれをおもへはいかにわか力に及はぬとて無理な事をねかふたりとも佛もなされやうはないはづの事じや

七六藤原基俊千載雑上僧都光覺維摩會の講師の請をたひ〳〵もれにけれは前太政大臣にうらみ申けるをしめちか原とはへりけれと又の年もれにけれはつかはしけるとあり光覺權少僧都は基俊の子也興福寺の僧也

（ヤクソクシテナイタ）契りおきしさせもか（ニオイテアルヲハ）露を　させもはさしも草也たゝたのめしめちかはらのさしも草といふ哥の心をもつて太政大臣我よにあらんほとには我をたのむへしいつれにとり持すへしと仰られたるによりてさせもか

露を命とはよまれたるなり　命にて　あはれことしの秋もいぬめり

興福寺ニテノアルヿ也維摩會ハ十月也サレハ暮秋ニハモハヤ講師ノ御沙汰モアルヘキヿナレハナリ

㋒我をたのみにせいと仰られたる御約束かないならはもはやいきてゐるこゝろもなく此秋のくれていくのも結句夢中にてあらうのに㋚うれしうおもふはつかりてあふない命もつながつてうか〳〵としてゐた処がもうはや維摩會も近ついたに御沙汰もないがさて〳〵是非もない事これては大かた命もつゝくまいかしらぬ　恨ヲ申タルヤウナレト言上ニナク唯時至ラヌヿヲナゲキステタル也シカルニさせもか露を命にてト云トコロ詞ノ上ニ巧アリテ幽玄ニ近クナレリ大哥トハイフマシキ所コヽニアリ　㋕これをおもへは人のたのもしいのを一途にたのんでも肝心の時節の到來せぬ事には如才なうてもその人も爲方のない事じやわいの

七七法性寺入道前關白太政大臣　詞花雜下新院くらゐにおはしましゝ時海上眺望といふ事をよませたまひけるによめるトアリ

わたのはら　こき出て（ヘ舟ヲ出シテ）みれは久かたの（タ所ガ）雲井にまかふ　まかふとは目にちらつきてみわかぬ心也繽紛ナトノ字ヲヨメリ　沖津しら波

㋒これほとの海しやけれと磯からみた時は島山なとがむかふにあつてそれほとはてもないほとには思はれぬが㋚その小島なとを過ては一向にはてもしれぬ事じやはい㋕これをおもへはせはい所の事はひろい所へ（へ）は引あてられぬ物しやそ

七八崇德院　詞花戀上題しらす

瀬をはや（カ）み（サニ）　戀なツヨイニヨツテ　㋒瀬ノハヤキハ戀ノ類ナルニタトフ岩ニセカルヽハ人目或ハ物ヿサハリ妨アルヿヲタトフ　いはにせかるゝ（人ニ邪广セラレルケレト）瀧川の（ノヤウニ）　以上三句よせ也岩につきあたりて水が兩方へわれてくたくれと

も末にて平地へなかれ出ては又ひとつになる様子をたとへて仰られたる也水のゆるき所はたゝ岩にせかれるほとの事もなくたゝ静になかるゝものなり　われても　われてはわりなくしてトイフホトノ心ナリコノ證ハ改観抄にくはしく出たり㋒無理な事をもせぬ㋚どふでひとゝほりの事ていくまい故　末にあはむとぞ思ふ　㋒今ハ妨ガアツテアハレヌケレト㋚妨られたなりにしてはなかくゐらるゝ事ではない

㊉これをおもへは何事てもおもひたつた事に邪广か入れは是非なうやめるほとの事は眞實おもひこんたといふ物てはないはいな

七九源兼昌(闕畫)　金葉冬關路千鳥といへる事をよめるトアリ

あはち嶋　一本ニハあはちかたトモアリ別ノ心アルヘカラス㋒外ノ浦々ナトヲ裏トス㋚須广へいたつて近き心を境とす　かよふ千鳥のなくこゑに　㋒外ヘモカヨフ千鳥ハアレ圧声ノセヌ時モアルガ㋚近イ故シケウカヨフテナク声ガ一向ニ間カナイ　いく夜ねさめぬ　㋒今夜一夜ネサメシタガ㋚タツタ一夜テサヘカウ物スコウカナシイノニ　すまの關もり　㋒コヽニ泊ツテキル自身モウ明晩カラワキニネヤウガ㋚コヽヲ動カレヌ身ハサゾヤスゴカラウ

㊉これをおもへはすへての事が一度いやなめにあふとそれを仰山におもふてそこを通たう思ふ物じやけれとこれも通られる身分じやからおこつての事身分によつてはそこをはなれられぬ者もある事じやなあ

八十左京大夫顯輔　新古今秋上崇德院に百首の哥奉りける時にトアリ

秋かせに　㋒風ノナカツタ間㋚月ヲサツハリ見セルテアロウト思フ ヨウトタノシム　たなひく雲の絶まより　㋒アツウ雲ガ立フサカツテアツタ故㋚皆サツハリト吹ハラセヨカシトオモフタガ△たなひくはなひくといふにたの字を添たる也たの字はたもとほりたやすきたよるなとのた也心は書とりかたし五十音聲妙にて弁へし　もれ出る○月の影のさやけさ　㋒クマナウ晴テアル空ノ月テナケネハカケカサツハリトハアルマイト思

フタガ(サ)結句モトカラ晴ヌイタ
夜ノ月ヨリハ存ノ外見モノジヤ

(補)是を思へは何事でも最初から邪广もなにもないよりは邪广のある中でのうれしさは眞實うれしいものしやなあ

八一待賢門院堀川 千載戀三百首の哥たてまつりける時戀の心をよめるコレハ後朝戀ノ心ナリ

ながからん(ウアラウトホーモ)心もしらす(思ワケズニ ナシニ) (ウ)行末短ウカハツテ仕マフ心シヤト知レテアルデハナシ(サ)アレホド行末カケテ約束カタウシテイレタ男ノ一ジヤ故コノサキガタノシミニ思フテ居ネハナラヌ一シヤニ 黒かみの(冠詞なり) みたれて (ウ)オチツイテ居ルハヅノ一シヤノニ(サ)オチツイテキラレズ 今朝は物をこそおもへ (ウ)ヨンベ逢ノテウレシカツタケレト(サ)又アノヤウニアハレウカ心ガカハラウカトハツカリ思ハレルガサテ〳〵ワツケモナイ一ヤコノハヅノ一テハナイノニ

しかれとも朝は髪のみたるゝ物故によせられたる也なかゝらんといふも髪のよせなり

(補)是をおもへは行末難儀なめにあふ事かきつとしれてあるやうに落ついてゐるはつの事もくつたくするものじやぞなあ

八二後徳大寺左大臣 千載夏曉聞郭公といへる心をよみはへりけるトアリ

ほとゝきす(ガ) (ウ)外ノ鳥トハチガウテ(サ)一所テナイテヰヌモノシヤニヨツテ なきつる(イタソノ方)かたをなかむれは(メテミタ所ガ) (ウ)ナカメタトテナンノ役ニモタツマイカラジツトシテ居ヨウトハ思ナカラ(サ)モシモウ一声モソコラテナカウカト思フタ所ガ たゝ(タッタ)有明の月そ(ハッカリ何カシラス) のこれる(ツテアル) (ウ)ヨヒカラ待タカヒモナウ(サ)モウ一声ノ段カ行キ方サヘシレヌ一ジヤ

(補)これをおもへは何事でもせんど苦労をせねばたつた一事でもよい事はないもので苦労したほど十分な事もない物じやな

（校者云此次空白七行アリテ、此張裏面ニ移ル。裏面第二行ニ「天平勝寶（テンピヤフセウボウ）御修法（ミシホ）大職冠（タイシヨククハン）」トアリ。）

百人一首燈　上

百人一首ともしひ

おほむね

おほよそ、歌は、いとをしともうらめしとも思ふ心を、やがてよみいづるものゝやうに後世はおもへり、さるはさる情のまゝを言行（コトワザ）にいでゝも、その時のよろしきにだにたがはずは、哥によむまでもなく、やがていひ（言）もし（行）もしてやむべき事にあらずや、しか言行にいづとも害なからんに、なにのひがわざにか歌はよむべき、歌はたゞ、いとをしともうらめしともおぼゆる心の、さながら言行にいつべからぬ時、その言行にかへて、みづからその情の一向なるをなぐさむる道にしあれば、（後世は哥と言行とを混じておもへり）ひとへに時のよろしからんをのみむねとして、情は公私となくよく〳〵かへりみるべし、そのかへりみてものどめがたき、これをば哥の時といひ、さる時哥をよみてその一向なる情をなぐさめ、身を時のよろしきにおく、これを哥の道とはいふなり、我 神典、たゞ隠身をむねとする事（身を時のよろしきにおくとは、すなはち此隠身なり）なれば、哥道のむねをしらむにはよく 神典をみしるべしと、成元つねに人にいふも、神典の大旨、わがおもふ心を言行にいつまじきことむねなれば也、しかはあれど、それだにによく

せられなば、哥道は不用の道なるべけれど、心の一向ならんは、此道なくはなに〻かは身をかくすべき、（されば哥道ありて神典全く、神典あるが故に、哥道もたふとしとは知べし）されど我國の風俗を心もえぬ人は、それしかるべからずとしりたらんに、いかでかみづからあらためられざらんともおもふべけれど、しばらくさる理をとりおきて、みづから我心をかへりみ、平生の動止につけてよく思はゞ、人しれずおもひえらるべければ、今さらにいはむもなか〱なるべし、建速須佐之男命（タケハヤスサノヲノミコト）、日ノ神月ノ神の御はらからにおはしながら、なほ御心の宜しきに過るは、せんすべなくやおはしましけん、はじめて歌はよみはじめさせ給へり、さるは今の世をさへおぼしわたして、人々のさる心をなぐさめよとて、此道はひらかせ給へるにやとおもふに、いとも〱かしこき事なり

まへにいふごとく、その情、時によろしからぬを弁へてのどめられなば、歌道は不用たるべけれど、言行に出ずしてはのどめむことかたく、しかりとて言行にいづれば禍（ワザハヒ）かならず來るべきをいかゞせん、されば古人やむことをえず歌とよみいで〻、其のどめがたき情をなぐさめ、時宜に過べき身をかくされたる也、そのやむことをえぬより哥はよむなれば、哥もともとよまざるにしく事なき心ばえをもて、古人は哥のよみざま後世にはいたくたがへり、それをいかにといふに、もと言行のかはりによむ哥ながら、なほよまざるにしく事なきといふは、哥とてもいひいづる物にして、心にこむる

にはまさらざるが故に、哥のうへにもその情をあらはにのべられず、たゞそのいとをしともうらめしとも思ふ情の、よくうかふべき所をば、詞にのべられたり これしかのみならず、事の眞なるは、いかにいひとらんとしてもいひうかへらるゝ物にあらねば、そのいとをしうらめしとおもふ情の眞をは、そのみゆべき所をいひてさとしたるなり、後世に有心餘情などいふは、こゝをしもいふ事也、されどもこれをあしく心うれば、わざと詞をたくみにしてその情をかくす、なぞ〳〵のやうにおもはるべし、これ幽玄体などいふ物なり、いにしへの人のはさるいやしきよみざまにあらず、上にいふごとく、もと哥とてもよまぬにしく事なきつゝしみの心をむねとしてのことなり、又その眞のよみうかへられぬことをしりて、その情のよくみゆべき所をのみよまれしも、これまた私のことにあらず、哥もとのどめがたき情をなぐさむる道なれば、我心のうちにいける情、活（イキ）ながら哥にうつりとゞまらざれば、此道の功すくなきが故也、これらをもて古人の哥のよみ所、後世にいたくかはる事をしるべし、さらに詞の新古をいふにあらず、たゞこのよみ所にて此道のほいにたがふをいふ也 されば古哥は、いとをしと思ふ情よりなれる哥は、いとをしとはよみたらず、うらめしと思ふ情よりなれるは、うらめしとはよまれざりし也、この心をえて古哥をとかざれは、いかにとくともたゞかたはらなるべし、たとはゞ古今集に、〽かはづなく井手の山吹とよめる哥は、山吹をよめるやうなれども、橘家のむかしを戀たる哥なるがごとし

古よりの哥、おほよそ花に郭公に月に雪に戀に旅に賀に哀傷に、その情をのべられたる所、表はさま〴〵なれども、その道はたゞ一すぢにて、たゞ外をかし（犯）がたく、内のどめがたさのやむことをえぬわざにすぎず、此故に今この百首を注したる詞、たゞ一律（ヒトスヂ）なり、されども此注詞、いかなるよしともおもひえがたかるべきが故に、今その心ばえをのぶ

〽云々のあまりによまれたる哥なりといふは、此云々といふは、皆その哥々の表と情とをとける詞をいふなり、以下みなこの例にて、その哥々にときたる詞をあはせてみるべし

その情の、その時のよろしきに過たるを、みづからかへりみて、哥とよみ出られたるを云、これは此以下の注詞を引つかねたる也、されば此以下は、こゝをくはしくいふなりと知べし

〽その時その云々さの一向(ヒタフル)なるにまかせなば必云々といふは、そのはじめ、いとをしともうらめしとも思ふ情の、時に宜からざるをかへりみて、言行にいづべからぬことはよく弁へながら、その情ののどめがたさに、身をその一向なる勢にまかすれば必つひにその一向なるいきほひに内よりおされて、その情やがて言行にあらはるべきを云也

〽しか云々て云々なんはたいと云々かるべきが故にといふは、かの内の一向なるいきほひに身をまかせて、外言行にその情あらはるゝ時は、必禍身に來るべき未然を察し恐るゝ、その哥ぬしの心をのぶる也、但此おそりをしれば、なにごともあらためらるべきことのやうなれど、我心の内に、あらためがたくさする物必あるが故にて、その故に恐りはしりながら、なほあらためられぬ也、そのあらためさせぬ物はなにぞといふに、理なり、その理をたのむ所より、おそりをもふかく思はれぬなり、末に圏(マル)をもてへだてたる以下の注詞、すなはちその情を一向にする理をのべたるなれば、引あはせて心うべし、このおそりはありながら、情のどめがたきを、これを一向(ヒタフル)心とつねにいひならはせり 此名は源氏物語にいでゝ、ぬす人の心をいへり、げにぬす人といふもの、事あらはるればいのちをさへとるべきおそりはあればこそ、よるならで

は家にも入りこず、人のみるまへにてはえとらぬ也、しかるになほ人のものをぬすむ事、ひとへに、我ぬすみたるといふ事たにしられねば、とらはるゝこともなき理をたのめばなるべし、人々たゞおそれかへりみるべきは、このひたふるごゝろなりかし

〽かくこの哥とよみいでゝ、その云々さの一向なるをなぐさめといふは、こゝに哥をとはかゝで、哥とゝのみかけるは、哥ぬしのおそりより、ことさらによみいづる心ばえを云也かの一向心に身をまかせては、禍に落いるべきをおそり、言行にいづるかはりに哥によみいでゝ、その宜しきに過べき情をなぐさむるを云、古今集の序に、哥をいひてぞなぐさめける、又哥にのみぞ心をなぐさめけると、二所までかゝれたるは、此なぐさむるといふ事、この道のほいなるをさとしたる也、こゝに、人、めをとゞめよとてふた所までかゝれけんかし、此なぐさむるといふ事、輕く心うればこのほいおもひえがたし、まづ、なぐさむるといふは、もとなぐさめがたき心なるが故なり、後の世のごとく、さまでもなき情をのみ哥によむは、いかでかなぐさむるなとはいはまし、すべて詞は、裏をかけて心うべきこと、くはしくは附錄をみておもひあはすべしされば此道は、さる一向心をしひてあながちにおさへふするにはあらず、その情のまゝを、やがて言行にいでたる心地して哥をよむ故に、おのづからその人にむかひて、言をも行をもうち出たるやうにおもひなさるゝより、しらず〱内の一向なるいきほひくぢけゆくをば、此道の詮とはするなり、よく〱思ふべし

〽云々もせでやみたるなりとは、宜しきにたがふべき言行をば、いひもしもせでやまれたる、其哥ぬしの身のめでたさをのぶる也、さるはひとへに、歌によりてその一向なる心のいきほひもくぢけたる故にて、此道の肝要こゝにある事也、これ卽 神典の隱身なり、古今集序に、ち

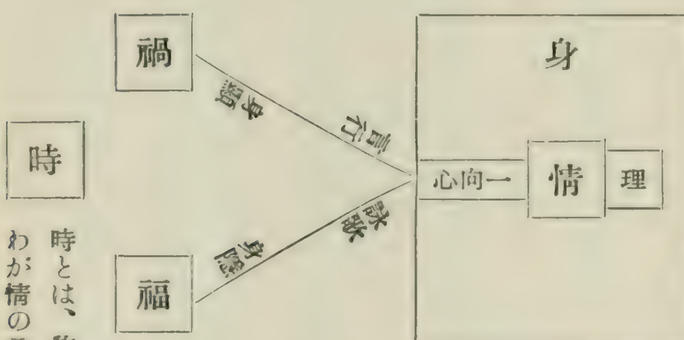
からをもいれずしてあめつちをうごかし、めにみえぬおに神をもあはれと思はせ、などいへるは、その哥ぬしの、さばかりおさふべからぬ一向心を哥になぐさめて、隠身せられたる故の事也、ゆめ〳〵哥の巧拙による事とはおもふまじきこと也、されば古哥をみるも、その歌ぬしの隠身せられたる所をみいれざれば詮なし、みづからよむも、こゝを詮として、哥は隠身のためによまざれば、たゞいたづら事なるべしかし

〽○おほよそ云々まじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このぬしのしか云々さは一向ながら猶云々ざりけん、いとも〳〵云々かしといふは、さる一向心を哥にのどめて、さばかり堪がたき時にしも身を隠されたるを見込みて、外より感ずる心をのぶるなり、これより、雨ふり、馬のあしたち、人のこと心やみ、いかりもなごむさいはひはいでくるぞかし、これかへす〳〵そのひとの隠身のゆゑにして、哥のうへの巧拙よりの福(サイハヒ)にあらず、（つねに隠身するに、その福はかりなかるべき）（神典のむねは、これらをもておもひあはすべし）後世たゞ哥ばかりに目をとゞめてその哥ぬしの身に心ををよぼさゞるは、いかなるひがごとぞや、古今集の序に、いにしへのよゝのみかど、春の花のあした秋の月のよごとに、さふらふ人々をめして、ことにつけつゝ哥を奉らしめ給ふ（中略）こゝろ〳〵をみ給ひ、さかしおろかなりとしろしめしけんともかゝれたるを、たゞ巧拙のことゝおもひて、隠身の旨

をのべられたるとは心をもえぬ、いとも／＼あさましき事也、かくしがたき時に身をかくされたる、その輕重をもて、その人の賢愚はしろしめしけんかし、さて又この理なればといふまでの詞、上にいふ所の、その情をしてのどめざらしむる種をいふなり、理といふ物、おほかた公に屬せるものなれば、人のまどひはこれよりおこる事疑なし、されば人々、私理としりてたのむものはすくなし、（これをたのむはいといふかひなききはにて、賢愚の論の外なりとしるべし）たゞおそるべきは理の公なる也、そが中にも至公なるは、いよ／＼まどひはつべし、古今集に、まめなれ

わが身の内にて、理のわが情をおす圖

わが情の、理におされてのどめられぬ圖



言行のかはりに、詠哥してわが身をかくせば、つひにさいはひをうべき圖、古來哥の感動のかたちなり

言行に情のまゝを出して、わが身をかくす事をえざればつひに禍にしづむべき圖

時とは、物にふれ事にあたる實況にして、わが情の言行にいだしがたき時なるを云

ど何ぞはよけくとよめる歌、理の公なるをたのみたりし人のおどろきたるなるをや、しかおほやけなる理、その情を内よりおす時は、つひに禍のうちに身をしづむべし、あなかしこや〳〵今以上の注詞心えやすからんがために、圖をもて此道の大旨をさとす

この圖をよくあぢはゝば、この道の本意はおもひえらるべし

わか父成章はいとはやくうしなひて、なにの心ばえも口づからは聞かざりしに、をぢなりし成均、たゞおほやうに聞おかれたりしは、哥に道あり、題詠はたゞその階梯也といはれつるよしをかたられしかば、それよりげにと思ひなりて、ふる哥どもをもふかくみいれ、みづからもよみ試みて、この道はたどりあたれりし也、さるははやくおもひしりしかど、まのあたり哥をとくはこれがはじめ也、それも此年比、いかで〳〵とわするゝまなくはありしかど、活動したる心のさまを书とるわざなれば、いかにも〳〵かきとりかねたりしなり、つばらにかゝむとすれば、こちたくて眞をうしなひ、ことそげば、たらはずて眞うつりがたし、されども成元が心ひとつにこめあへずして、いかで建速須佐之男命の御心をきてのべて、世中の一向心をなぐさめむと、この年比この百首にかゝづらひて、注の詞をさま〳〵にかき試み、おほよそはじめより草稿五百かへりばかりに及べり、さるは十首二十首にしてあらため、又は五十首七十首にてもとにかへりき、これそのかき試みたりし注詞

の正しからざりしが故に、哥によりてさはり出きしが故に、しかいくかへりももとにのみかへられし也、さりければ、いくたびとなく筆を捨てうちなげきしかど、口をしさには又とり出つゝ、そのさはりいでくる哥ごとに、をしへられてはかきあらためもていきて、つひに此注詞はえたりし也、これさらにわがふきがたり（耽語）するにあらず、此注詞ののりのかくさだまれりしは、成元がわたくし心もてかけるにはあらで、ひとへにふる哥どもにをしへられつゝさだまりたることを、世につげまほしさに、やむことをえずはしたなげにいふなり、このよしうち〳〵になげきしを、我かみの君あはれみ給ひて、世にひろくせよとありしかばなん、つひに此さうしはなりぬるにてぞ有ける

此百首、京極黄門の、さのみ一人一首とおぼしゝを撰出させ給へるにはあらざるべけれど、御心ゆかずおぼさむをかゝせ給はむやうもなければ、いづれも金玉たるべき事也、しかるに今此道をたてゝいふには、題詠のかぎりは、みな此道のほいならねば、そのしるしなきは、やむことをえずまことならぬよしをしるせり、題といへども、業平朝臣のからくれなゐに水くゝるとはとよませ給へるなどは、題におもひよせて、實況の一向心をなぐさめ給へるなれば、それらは猶まことの哥なりとす、しからば餘の題詠も、いかなる實況の情をおもひよせられけんもはかりがたければなほまことならずと定めむは、めざましくひがひがしかるべき事なれど、その撰集のこと昔、あるは、物にみ

えたる事など、その題におもひよせられたりし證あるは、なほまことの哥とするをもて、今まことならずと定めし哥は、さる證なき故なる事をしるべし、題とても、落花をよめるなどあるは、まことにもあるべければまことゝし、旅宿逢戀といふ事をなどあるば、まことならずとさだめたり、これ皆その證のありなしによれる也、題しらずとあるは、多くはその實事をかくしたる物なり、哥合はまことならぬ事疑なし、それもよみおかれたるまことの哥もやと思へど、これも證なきはいかゞせん、哥たてまつれと仰られし時のも、よみて奉れるとあらばまことならざるべし（これも實況の情を思ひよせられたるもはかりがたけれど、證なきは不眞とす）そが中にも、たゞよみてともかゝれぬは、よみおきなるべければまことゝす（これも題詠のよみおきならば不眞なれど、それとても證なきは、まづこと書のやうをもてまことゝす）又艶書合などの類は、不眞なるべけれど、人と人とのよみかはしたるなれば、もし人しれぬ情もやとてまことゝす、これらの心をえて、今まことならずとさだむるも、さらに私にさだむるにもあらず、題詠は後のよの物とていやしむにもあらぬを知るべし、題詠といふもの、もと實況の一向心をのどむる時の階梯とはいへども、かの業平朝臣の哥のやうに、わがなにゝもあれその時一向なる心をば、その題におもひよせてのみよみならはゞ、實況の哥にたがふ事はあるまじきなり、されど又、まことは實況にさしあたれる一向心もなけれど、その題によりて、さる一向心のさまを設なしてよむは、ことわりこそ此道の理なれ、その事身にさしかゝりたる

事ならねば、實況にさしかゝりたる情あるとは、その功ことなるをや、この題詠のよみかたも、後世の題詠とは又たがひて、猶この道のすぢなり、これをばわが父階梯とはいはれたるなり、後世の題詠は、たゞ詩の詠物などいふものゝごとく、その題をよみふする事をむねとす、これはまことに此道にたがへるいやしきわざなり、されば一首とても、わが實況にさしかゝりたる一向心なくとも、あるがことく心にまうけてのみ題をよむべし、後世は哥の詞たどく〳〵しくなり、かつはよまむやうもはじめよりはしられざるべければ、題といふ事いできにたるなり、げに哥は隱身のためなれば、よきあしきは論にをよばねども、父成章が、つねに哥を五級としてをしへられし、その一の哥こそまことに此道のほい、すなはち上にいはゆる古人のよみ所といふ所なれば、つねに題によりて、なくともあらんやうに一向心をとりいでゝよみならふべし、これは今此注には不用の事なれど、題詠の哥のこゝろをえむにたよりあらせんとていふ也 しかれば、業平朝臣が哥のやうなるなどは、後世の題詠とはさかひことなり、まへにいへる井手の山吹ちりにけりといふ哥などおもひあはすべし、題はありながら題はかへりてよそとしたるなれば後世の題詠などはまことならぬ事疑なし、その證は、よゝの先達の哥のよみかたをいはれたるにて思ふべし、これを思ふに、寛平ノ哥合をおやとして、されどこれは、たゞ哥をあはせたる斗にて、判の詞などはなきなり よゝにさかりになれりしより、此道のほいはうしなはれつとおぼしき也、これをいかにといふに、よゝの先達のをしへ、たゞ哥のうへのことをのみいはれたり、この黄門もさばかりの哥仙にはおはしけれど、此百首にも題詠いと多く入れたまへりしは、なほそのよゝのをしへにしたがひ給へりけんことしるし、後のよになりては、いよ〳〵よゝの判詞の論をば、たゞまもりにまもられたるより、今此道をとけば、から國のことをいふらんやうに人おもひなれり、さすがに此黄門、近來秀歌といふものに、ちかくは亾父卿、すなはち此道をならひ侍ける基俊と申ける人、このともがら、すゑのよのいやし

き姿をはなれて、つねにふるき哥をこひねがへり、この人々の思ひ入て、すがたすぐれたる哥は、たかきよにも思ひ及ひてやはべらん云々とかゝせ給へり、されども此御詞にも、たゞすがたとのみ仰られたるをみるべし、さすがにたかき世の哥どもは、すぐれておぼしけんは、此ふるき哥を云々にしるし今のよにも、ふるき世の哥をのみこひねがふ人世にたま／＼みゆれど、それも猶此黄門の御詞をのがるゝ事あたはざるをや、たゞ哥は、かくしがたき時にしも身をかくさむための道なれば、すがた詞にかゝはるは、いといやしきつとめなるべし、この故に、修行を第一と心得、稽古を第二と心うれば、卽この百首も、よゝにそのよみざまもかはり、やう／＼此道のほいうしなはれゆきしさまも、おのづからみしられつべき也稽古と修行をことにあらせんとて、こゝにはたゞ道のこゝろをとき、附錄に哥の表の心はゆづれり持統帝の大御哥〽夏きにけらしを、夏きたるらしとし〽衣ほすてふを、衣ほしたりとしたる事也、これは〽にけらしには〽たるらしの方、一首にせちに、〽てふの心はかなはぬが故也、てふの心の事は、なほ附錄にいへるをみるべしは萬葉集によりてあらため、山部赤人のも〽ましろにぞ〽雪のふりけるとあらためたるを云同し集によりてあらためたり、又河原のおとゞの御哥は〽みだれんと思ふとあらためし事也古今集によりてあらためき、これたゞふるきをこのみて、黄門の御筆いれさせ給へるをいむにあらず、哥の心に切なるをとり、正しからんによれる也、又貞信公の御哥榮花物語には、もみぢの色もとあり、これもと〽みねのといふ詞詮なきやうなれど、この色といふ事もまた詮ありともおぼえねば〽みねのとあるにしたがへり文屋康秀が哥〽野べのくさ木のと古今集にはあり、野べといはゞ野花の事はしるかるべくはおぼしけれど〽秋のとあるも、花紅葉のことよく心えらるべければ〽秋のにしたがへりなどは、黄門のにしたがへり、これをなすらへて私ならぬをしるべし

哥の右に、片かんなしてつけたるは里言なり、附錄にくはしくはいひ置たれど、まづ哥の表のはやく心えられんがためなり、左に圈をつけたるは、冠詞、よせ、うちよせのたぐひなり、これは一首に用なき詞なる事を示すなり、さればはぶきて心うべきなり、すべて冠もよせも、餘情をさまたぐべき詞にかへたるものなれば、かならす冠よせなどある哥は、餘情ふかきもの也、さるはもと、いへば餘情をさまたげ、いはではもじの數たらぬがゆゑに、わざと用なき詞をもて、もじの數をあはせたるなり、これまたまへにいふが如く、哥とてもいはむは然るべからぬ道、かつは心の眞なるはもはら餘情をたつとぶべきによりて、古人はことに多くよせ冠などを用ゐられたり、後世よせ冠などのやう〳〵すくなくなりもて來にたるも、哥のよみ所むかしにたがへるしるし也、此黄門、この百首に、御みづからの哥をいれ給へる、御哥も多きに、よせ哥をしもいれさせ給へるは、いと見どころある事なりかし

今この詞注、哥のおもてになきことゞもをのべたれば、ゆくりなくみん人おもふべし、さらにわたくしにみとりたるにもあらず、その哥ごとに、詞の表に裏をかけ、その表裏のさかひの心をみ、これをおもひゆづらひてかけるなり、されば附錄は不用のことゝおもへども、これにそへてその注詞○いづる所をさとすなり、みむ人うたがはしくは、附錄をこれにならべておもひしるべし

文化元年四月上浣

たひらにすむ富士谷成元しるす

百人一首燈　上巻

藤原成元　謹述

天智天皇

あきの田のかりほの庵のとまを(ガ)あらみ(サニ)わがころも手は露に(デ)ぬれつゝ(テソレナリニ)

秋の田を鳥鹿やあらさむと、よるひるめがれずまもるにつけて、しばしのほす間もなく袖のぬるゝを、猶わびしげもみえぬが、いといとをしさのあまりに(は)あそばしゝ大御哥なり、いにしへかく人にかはりてよむは、それが心をふかく感じ、せちにおもひとるあまりに、やがてその人になりかへりてのわざにて、後世代詠のたぐひにはあらず、さればかくかはりてよめる哥は、みなまことの哥のつらとす、げにしかりとは、まことの哥よみしれらん人ぞおもひしるべき、この故に此大御哥も、たゞ農人の哥としてよませ給ひしなれど、今はなほ此みかどの大御心ばえにしたがひて注せり、うたがふべからず　其時そのいとをしさの一向(ヒタフル)なるにまかせ給はゞ、必これをいたはらせ給ふべし、しかこれをいたはらせ給ひて、そのほどに田あれ、としをもうしなひなん、はたいと大御心(ママ)ぐるしくおぼしめしゝがゆゑに、今此大御哥とよみいでさせたまひて、そのいとをしくおぼす大御心のひたふるなるをなぐさめさせ給ひ、いたはりもし給はでやませたまひし也○おほよそ、人をたしなめむこそさがなかるべけれ、人のくるしげなるをいた

はらんは、さかしらともいふまじきことわりなれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このみかどの、しかいとをしくおぼす大御心は一向におはしながら、猶この者をもいたはらせ給はざりけん、うべこそ近江宮のいみじくおはしましけれ、おほかたよのありさまをみあつむるに、かゝる一向心にまかせて、かへりてその者のあた(仇)なる事を弁へず、言行をあやまる事多し、人の上(カミ)なる人は、ことに此一向心をなぐさむへき也

持統天皇

春(ガ)すきて夏きたるらし(ガテアルコツウナ)しろたへのころもほしたり(ガテアルツ)あめのかぐやま(ニ)

氣侯(候)いまだ春なるに、それをもたのまずして、今よりころもをほせるものゝあるがいとゆくりなさのあまりにあそばしゝ大御哥なり、そのとき其ゆくりなさの一向なる大御心にまかせ給はゞ、かならずそのともがらをあはめられ給ふべし、しかそのともからをあはめ給ひて、いよ〳〵御おこたりとなりなん、はたいとゆゝしくおぼしめしゝが故に、かくこの大御哥とよみ出させたまひて、そのゆくりなくおぼす大御心のひたふるなるをなぐさめさせ給ひ、その輩をもあはめ給はでやませ給ひしなり○おほよそ、心えがたきことを、さながらにあらんこそいふかひなかるべけれ、ゆくりなきことの故は、たづねむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このみかどの、しかゆくりなくおぼす大御心はひたふるにおはしながら、なほそのともが

らをもあはめさせたまはざりけん、いたり深しなどはかけまくもかしこしかし大かたものゝかまへも、おくれざらんにます事なければ、いまだ春の如き時氣ならむには、心いられのごとくおぼゆべし、しかるにその御まどひもなく、御みづからの御おこたりをかへりみ給ひけん、此みかどの大御心もちゐのほど、かしこくともおもひしりたてまつるべし、ことにそのいやしきものゝうへを感じおぼしめしけんをや

柿本人麿

あしびきの山どりのをのしだりをのなが〳〵しよをひとりかもねむ

かく明しかぬべき夜とは思ひもしるべきに、さる心しらひもせで人のとひこねば、くるしくともひとりねんより外なくなれるが、いとわびしさの餘りによまれたる哥也、其時其侘しさの一向なるにまかせられなば、必その人をあらはにうらむべし、しかあらはにうらみてうとみ果られたらん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみ出て其侘しさの一向なるをなぐさめ、あらはにもうらみでやまれたる也〇おほよそ、おしなへたるつらさにこそはしたなかるべけれ、かく長きよをも心しらひせぬは、うらみむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必思ひまどふべきに、此ぬしの、しか侘しさは一向ながら、猶あらはにもうらまれざりけん、いとも〳〵なつかしき心ざま也かしおほかた女こそ男をまて、女より男の方へいかむやはとおぼゆれど、なほそれもひとしへにはいひがたかるべし、題いできて後はたのまれねど、かみつよにも猶例はみゆめり、その實况をみぬ事は、理をもてはおしがたかるべし

山部赤人

たごのうらにうちいでゝみればましろにぞふじのたかねに雪のふりける

この浦に來てみるに、今冬にもあらぬに、ふじのねには雪いと深くふりつみたるが、いとゆくりなさの餘りによまれたる也、其時其ゆくりなさの一向なるにまかせられなば、必いたくあやしまるべし、しかあやしみてひが〳〵しからん、はたいと心うかるべきが故に、ふじのねには、ふるべき故にふるを、よその例をもてあやしむは、ひがめりといふべきをや かく此哥とよみ出て、其ゆくりなさの一向なるをなぐさめ、ふかくもあやしまでやまれたる也○おほよそ、すゞろにあやしまむこそはしたなかるべけれ、常にたがひてふれる雪は、あやしまむもひが〳〵しかるまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、此ぬしの、しかゆくりなさは一向ながら、なほふかくもあやしまれざりけん、いとも〳〵いたりふかきこゝろなりかし

猿丸大夫

おく山にもみぢふみわけなくしかのこゑきくときぞあきはかなしき

秋は大かたかなしけれど、つねは猶なぐさむかたもありきとは、この奥山にて、ちれるもみぢをふみわけて、鹿のこゑをさへきくにおもひしられつる今ぞまことに秋思のかぎりなる心ばえなり、

しか秋思かぎりなる時のわびしさ一向なるをばなぐさめられたる哥のやうなれど、これは古今集にいでゝ、是貞のみこの家のうた合の哥なれば、まことの哥にはあらず　すべて、哥合の哥、其ほか題にてよめる哥、又哥たてまつれと仰られし時の哥、又屏風の哥などは、皆しひてかたふきいでたる物なれば、まことの哥にあらず、それも題ありながらその時その所の情にかなひたらんは、なほまことなるべし、又哥たてまつれと仰られし時奉れるに、まことの哥のよみおきにてあるべきは、これはまことの哥のつらにいれたり、題しらずとて出たるは、おほくはまことの哥なるべければ、これもまことの哥とせり、題詠も、心に此道のこゝろをえてかりに設てよみたらんは、まことの哥にかはる事あらざるべき理なれど、なほ時にあたりての情とは、死活のけぢめあるべきにこそ、されば題詠は、哥の詞のやう／＼たど／＼しくなれる世よりはじまれる事にて、所詮詞をとゝのへならはむのためまでなりと知べし、この外は、なほその人その時その所、またはことがきのやうをも心えて、まことかあらぬかはさだめたり、すゑ／＼の哥ども、みなこの心をえてみるべし

中納言家持

かさゝぎのわたせるはしにおくしもの（ガ）しろきを（イノ）みればよぞ（ガナニカシラズ）ふけにける（テシマウタヿジヤ）

しのびたる中にて、からうしてめづらしくあふべき夜なれば、いそぎいでつとおもひしに、はやあふほどもあるまじくいたくふけにたるが、いとねたさのあまりによみ給へる哥なり　かさゝぎのはしの事に附錄をみて心うべし　その時其ねたさの一向なるにまかせられなば、かならずはかなくては歸らじとおもひなりつべし、しかはかなくてはかへらじとて、かへさを人のみつけたらん、はたいとわびしかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのねたさの一向なるをなぐさめ、はかなくてはかへらじとも思ひならでやみ給ひし也○おほよそ、あふ事やすき中ならばこそ、うたてもあるべけれ、から

うしてあふには、はかなくてはかへらじと思はむも、わりなかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此卿の、しかねたさは一向ながら、猶はかなくてはかへらじとも思ひなり給はざりけん、いとも〳〵めでたき心也かし

安倍仲麿

あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでしつきかも

唐土の明州といふ所の海邊にて、友とたのむべきものもなきに、月さへ波よりいでゝ、ふるさとにみしとはこと物のやうなるが、いとこゝろぼそさのあまりによまれたる哥なり、其とき其心細さの一向なるにまかせられなば、必うちもなかれつべし、しかうちもなきて、から人どものをゝしからずと思ひたらん（これは仲麿歸朝のときの事にて、から人の、うまのはなむけにこゝまで來つどへること、古今集のことがきにみえたり）はたいとおもなかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、その心ぼそさの一向なるをなぐさめ、うちだになかでやまれたる也○おほよそ、念じもすべからんこゝろぼそさにこそいふかひなかるべけれ、から國にての心ぼそさには、うちなかむもひがことなるまじき理なれば、誰も〳〵必思ひ惑ふべきに、此ぬしの、しか心ぼそさは一向ながら、猶うちだになかれざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かし

喜撰法師

わがいほはみやこのたつみしか（デコノヤウニナニカシラズ）ぞすむよを（ニソレニ）うぢ山とひとはいふ（ワイ）なり

かくめやすくてすむ世なるを、うきものに世の人はいふが、いともどかしさのあまりによまれたる哥也、其時共もどかしさの一向なるにまかせられなば、かならず人をさとさるべし、しか人をさとしてその人のうべ（諾）なはさらん、はたいときどほろしかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのもどかしさの一向なるをなぐさめ、人はさとしもせでやまれたるなり（うぢ山とは、たゞうしといはむまでにて、山の字には用なき事、附錄にのべたるをみるべし、これはたゞ、そのすまれたる所の名なれば思ひよせられたる也）○おほよそ、人の爲あしからん事をしへむこそさがなかるべけれ、その惑をひらくべきすぢは、さとさむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此大とこの、しかもどかしさは一向ながら、猶人はさとしもせられざりけん、いとも〳〵ふかき心もちゐ也かし

小野小町

はなの色はうつりにけり（ツテシマウタヿジヤナア）な　いたづら（ムザムザト）に我身（ノ）よにふるながめせしまに（チシテキタマニ）

あくまでも明くれみてむと思ひし花のうつろへるをみれば、おもひて益なきわが身のうへをのみおもひしみて日をへしが、いとくやしさの餘りによまれたる哥也、その時共くやしさの一向なるにまかせられなば、必たどりなき身のおもひすてらる（自棄）べし、しかわが身を思ひすてゝ、今より後

もかゝるおこたりのあらたまらざらん。はたいとあさましかるべきが故に、かくこの哥とよみ出て、そのくやしさの一向なるをなぐさめ、たどりなき身もおもひすてずてやまれたる也（むかし人は、かく悔るをも、一向ならんは哥になぐさめられたる、心もちゐの程思ふべし）○おほよそ、いふかひなき身のほどを、おもひもしらざらんこそ無下なるべけれ、たどりなき身をおもひすてむは、ひがことゝもいふまじき理なれば、たれもたれも必思ひまどふべきに此おもとの、しかくやしさは一向ながら、なほ我身はおもひもすてられざりけん、いとも〱あはれなる心ざま也かし

蟬（ガ）丸

これやこのゆくもかへるもわかれつゝ（ワカレシテハ）しるもしらぬもあふさかのせき。（ト云心カ）

此關の名のよしは、忍熊王（オシクマノオホキミ）そむきたまへりしを、武内宿祢してうちにつかはされし時、軍こゝにゆきあひてたゝかひしよりの名なる事、神功の御紀にみえて、世にもいちじろき事なるに、今こゝにいほりしてみれば、ゆくもかへるもしるもしらぬも、わかれてはまたゆきあひ〱するによりてつけたる名のやうなるが、いとふさ（相當）はしげさのあまりによまれたる歌なり、其ときそのふさはしげさの一向なるにまかせられなば、必古來の名の義（コヽロ）はおもひすてらるべし、しか古來の名義を思ひすてゝ、かろ〴〵しき名にながれなん、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみい

でゝ、其ふさはしげさの一向なるをなぐさめ、古來の名義は思ひもすてずてやまれたる也○おほよそ、すゞろに古義をしのがむこそおこなるべけれ、それにまさりたることあらんには、古義をすてむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此ぬしの、しかふさはしげさは一向ながら、猶古義をも思ひすてられざりけん、いとも〳〵つゝしめる心なりかし

參議篁

わたのはら八十嶋かけてこき出ぬと　人にはつげよ　あまのつりぶね

隱岐のくにゝながされてゆくを、京なるものどものおもふらんほどもいとをしければ、行末のことはしらず、まづ今この浪速はつゝがなく舟出せりとだに、告やらまほしさのあまりによまれたる哥なり、其とき其告やらまほしさの一向なるにまかせられなば、必ことさらに使をもやらるべし、しかことさらに使をやりて、さらに勘事をかさねなん、はたいとゆゝしかるべきが故に、かく此哥とよみて、その告やらまほしさの一向なるをなぐさめ、使をもやらでやまれたる也○おほよそ、こゝをのがれも去らんこそいみじかるべけれ、たゞはかなきつかひをもやらんは、とがともなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此卿の、しか告やらまほしさは一向ながら、猶つかひをもやられざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かし（水鏡に、遣唐使のふねのあらそひより、病を称し、世

道詠といふものをつくりていきどほりをのべられしを、嵯峨の上皇御覽じて、大にいからせたまひ、配流せさせたまへるよしみえたり、一時のいきどほりに、かゝる罪にあたり給ひけんは、たどりなかりしに似たり、されど此時に心もをさまりたりけん、かゝる哥をもよみ給ひしいとあはれなり、されば、承和七年四月にめしかへされて、六月に京に入たまひしよしみえたれば、このはじめをはりをよくかうがへて、たれも〳〵みづから心をかへりみるべき事也

僧正遍照

あまつかぜくものかよひ路ふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

五節の舞姫のうちに、いとせちにおぼゆるがあれど、皆うへにとこゝろざしていだしたつるむすめどもなれば、引とゞめてもみむことはしばしもかなはぬが、いと口をしさのあまりによまれたる哥なり（これ在俗にて、良岑宗貞といひしときの事なるべし）そのとき其口をしさの一向なるにまかせられなば、必ひがわざもせらるべし、しかひがわざしてはしたなめられたらん、はたいとわびしかるべきがゆゑに、かく此うたとよみいでゝ、その口をしさの一向なるをなぐさめ、ひがわざもせでやまれたる也○おほよそ、帝のめしいれたらんにこそさがなかるべけれ、いまだ御けしきなどもなき舞姫なれば、とゞめむもあさましかるまじきことわりなれば、誰も〳〵必おもひまどふべきに、此少將の、しか口をしさは一向ながら、猶ひがわざもせられざりけん、いとも〳〵めでたき心ざま也かし（さばかりの色ごのみなりしに、仁明帝の崩御のとき、やがて薙髪せられしさま、心のほどもみゆかし、うべこそ後にその徳とほしろくて、いとめでたくおはしけんとはおぼゆれ）

陽成院

○つくば（カラ）ねのみねよりおつるみなの川。（ノ如ク）こひぞ（ガナニカシ(ラ)ズ）つもりてふちと（ト云ホドニ）なりける（ツタコジヤ）

釣殿のみこに御志はふかくおはしけれど、猶おぼしつゝみてのみおはしゝ程に、今は戀のつもり〳〵て、おもほえずふちのごとくなれるが、いとくるしくおはしゝあまりにあそばしゝ大御哥なり、その時其苦しさの一向なる大御心に任せたまはゞ、必かくとも告やらせたまふべし、しかつげやらせたまひてはしたなまれさせ給はむ、はたいと御心うくおぼしめしゝが故に、かく此大御哥とよみいでさせたまひて、そのくるしくおぼす大御心の一向なるをなぐさめさせ給ひ、ことさらにかくとも告やらせたまはでやませ給ひし也○おほよそ、あさきこゝろざしならんにこそいふかひなかるべけれ、くるしきまでおもふ心は、つげむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此みかどの、しかくるしくおぼす大御心は一向ながら、猶つげもやらせ給はざりけん、いとも〳〵ふかき大御心ざまなりかし

河原左大臣

○みちのくのしのぶもちずりたれゆゑにみだれむとおもふわれならなくに（デハナイノニ）

此女なくは、よにみだれむとは思はず、いとすくよかなるべきに、かくこの女にしもうちおろけ（失意）たるは、おほろけのこゝろざしにはあらぬものを、なほたのまれぬものにこの女のいふが、いと

もどかしさのあまりによみ給へる哥也、其ときそのもどかしさの一向なるにまかせ給はゞ、必これをことわらるべし、しかことわりてさかしらにおこがましうおもはれん、はたいとゆゝしかるべきが故に、かくこの哥とよみ出たまひて、そのもどかしさの一向なるをなぐさめ、かばかりおほろけならぬ心のほども、ことわり給はでやみ給ひし也○おほよそ、まめならぬ心のほどを、言にかざりていはむこそさがなかるべけれ、まことにせちなる心の程は、いひことわらむもさかしらなるまじき理なれば、たれも〳〵必思ひまどふべきに、此おとゞの、しかもどかしさは一向ながら、猶ことわりもし給はざりけん、いとも〳〵めでたき御心也かし

光孝天皇

君がため(ニ)春の野にいでゝわかなつ(チ)むわがころもでに雪はふりつゝ(テソレナリニ)

この人にわざはひあらせじとて、春あさき野にいでまし〵御袖に、雪たえまなくふりかゝりて、いみじかりし寒さを忍ばせたまひし大御志の、切なるほどもしられざるべきが、いとあへなさのあまりにあそばしゝ大御哥なり、（これはいまだみこにおはしましゝ時、人にわか菜たまひしときの御哥なるよし、古今集のことがきにみえたり）そのとき其あへなさの一向なる大御心にまかせ給はゞ、必さばかりの大御志とのたまひやらせ給ふべし、しかのたまひやらせたまひて、ふき(耽)〴〵しくおもはれむ、はたいとあは〳〵しかるべくおぼしめしゝが故に、

かく此大御歌とよみいでゝそのあへなくおぼす大御心の一向なるをなぐさめさせたまひ、さばかりの大御志のほども、いひやらせたまはでやませたまひし也○おほよそ、さもあらぬことをふき〳〵しくいはむこそおこがましかるべけれ、まことにふかき志は、告むもふきがましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このみかどの、しかあへなくおぼす大御心は一向ながら、なほつげもやらせ給はざりけん、いとも〳〵とほしろき大御心なりかし

中納言行平

たちわかれいなばの山のみねにおふるまつとしきかば今かへりこむ

去者日疎といふならひにて、したしかりし人も、此因幡の任四ヶ年のほどには心もかはらんが、いと心もとなさのあまりによみ給へる歌なり、其ときそのこゝろもとなさの一向なるにまかせられなば、この任にくだらんことのいなまるべし、しかくだらんことをいなひて、おほやけにそむきたらん、はたいとかしこかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、その心もとなさの一向なるをなぐさめ、任にくだらむことをもいなまでやみ給へるなり○おほよそ、なにの命をもいなまむこそさがなかるべけれ、たゞひと事この任をばいなみたらんは、勘事もあるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此卿の、しかこゝろもとなさは一向ながら、猶この任をもい

なみ給はざりけん、いとも〳〵めでたき心ざまなりかし この卿は、奨學院をもたてたまひしばかりの御たばかりなりしがうへに、かゝる心ざまにもおはしゝを、罪にあたりて須磨に左迁せられ給ひき、おほろけの人よくかへりみるへし

在原業平朝臣

○○○○○ちはやぶる神よもきかずたつた川からくれなゐに水くゝるとは

神よには奇異の事ども多かれどなほきかぬばかり、この龍田川にて、からくれなゐもて水をくゝり染にしたるが、おもほえず東宮にめしいれられたるにおもひよせられて、いとあさましさのあまりによみ給へる哥なり 古今には、二条の后の東宮のみやす所と聞えける時、御屏風の画をよみ給へるよしことがきあり、伊勢物語には、みこたちのせうえうし給ふ所にまうでゝ、龍田川のほとりにてよめるよしなり、この物語によれば、まことの哥うたがひなけれど、かのものがたりは、あらぬことにかきなしたる所もあれば、これもまことにやあらずやさだめがたし、屏風の哥は、すべて画をだいとしてよむ物なれば、まことならぬことをいふもさらなれど、これは二条后の御屏風なれば、おもひよられけんことうつなければ、まことの歌とさだめたり、かの神よのこともおもひいづらめとよみ給へりしも、猶后のことをよみ給へるなれば、事にふれて心をのみなぐさめ給ひしことみるべし、ことにこれは、ことがきに、二条后のとしもかゝれたる、これかれをおもはえてかくはいふ也 その時其あさましさの一向なるにまかせられなば、必さるまじきわざもせらるべし、しかさるまじきわざをして、はしたなきこともいできたらん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのあさましさのひたふるなるをなぐさめ、さるまじきわざをもせでやみ給ひし也○おほよそ人もしらざらん中にてこそはしたなかるべけれ、後はゆるされたりしほどの中なれば、 はじめはまもりめなどつけられたりけれど、後にはゆるされたりしこと、伊勢物語にみえたり すこしひがわざし

たらんもめざましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この朝臣の、しかあさましさは一向ながら、猶さるまじきわざもし給はざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かしかく題詠にしてまことなるは、だいはだいにてその事實なれば也、されば、すゑ〳〵の題詠どもの中にも、もしまことのもあらんかとおほつかなけれど、まさしきしるしなきは、まづまことならぬにさだめおけり、今のよにして題詠せんに、めのまへの實事にかなひたらむは、おなし題詠のつらにはおきがたければ、よくこのこゝろをえてよむべきこと也

藤原敏行朝臣

すみのえのきしによる浪よるさへ(マデ)や・ゆめのかよひぢ(デ)ひとめ(ヲ)よくらむ(ケルノデアロウカ)

うつゝにはさもあるべきことなれど、人につゝむこゝろのせちなるけにや、夢にさへあひがたきわりなさをよまれたるなり、しかわりなさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは古今集にいでゝ、寛平の御ときの后宮の哥合の歌なれば、まことの哥にあらず

伊勢

なにはがたみじかきあしのふしのまも(ホドモ)あはで(ズニ)このよをすぐしてよとや(テシマヘトイフコカ)

おもふばかりあひみむこそかたかるべけれ、みじかきがうちにもみじかきほどばかりはとひもくべきに、さばかりだにくることもなきは、かくながらあはでしねとおもふ男の心とおぼえて、いとあさましさのあまりによまれたる歌なり、其ときそのあさましさの一向なるにまかせられなば、

必このなさけなさをうらみつべし、しかうらみて、いよ〳〵うときものにおもはれなん、はたいとかなしかるべきがゆゑに、かくこの哥とよみいでゝ、そのあさましさの一向なるをなぐさめ、人もうらみでやまれたる也○おほよそ、おしなへたるつらさにこそさかなかるべけれ、かくなさけなき人は、うらみむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必思ひまどふべきに、此おもとの、しかあさましさは一向ながら、なほ人をもうらみられざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かし

元良親王

わびぬれば今はたおなじなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ
（テシマウタニヨツテ　デハマタ　名　ナリモ　ウ　ナニカシラズ）

宇多ノ法皇の御寵妃、京極のみやすん所に、密通ことあらはれて、勘事をかうふり給ひ、いかにおぼせども、あひみたまふべきよしのなくなりぬるが、いとわびしさのあまりによませ給へるなり、其ときわびしさのひたふるなるにまかせ給はゞ、かならず勘事を犯しておはしつべし、しか勘事をかし給ひて、みやすん所の御ためさへあさましき事もいできなん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此御哥とよみいで給ひて、其侘しさのひたふるなるをなぐさめ給ひ、勘事はをかし給はでやみ給ひしなり○おほよそ、けがれたる名のきえばこそうたてあるべけれ、一旦名をけ

がせる身は、さらにさがなわざせんも、めざましかるまじき理なれば、誰もたれも必おもひまどふべきに、此みこのしかわびしさはひたふるにおはしながら、なほ勘事はをかしもし給はざりけん、いとも〳〵あはれなる御心ざま也かし

素性法師

今（イマ）こむ（ウ）といひし（フタ）はかりに（バツカリテ）長月のありあけのつきをまち出つるかな（タコトカナ）

やがてもくべくいひし言の、いつはりとはみえざりしかば、かゝりとはしらで、このながきよを、有明の月のいづるまでいたづらにまちしが、いとねたさの餘りによまれたる哥なり（これは、在俗にて左近將監なりしほどの事なるべし）そのとき共ねたさの一向なるにまかせられなば、必くね〳〵しううらみやらるべし、しかうらみやりて、はしたなうおもはれむ、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのねたさの一向なるをなぐさめ、うらみもやらでやまれたるなり○おほよそ、たしかにもたのめぬ人にこそはしたなかるべけれ、たゞ今もこむやうにいひての僞は、うらみむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに此ぬしの、しかねたさは一向ながら、猶うらみもやられざりけんいとも〳〵めでたきこゝろざまなりかし

文屋康秀

ふくからに（トイフトハヤ）　あきのくさ木のしをるれば（ガ　レルニヨッテ）　うべ（ドウリデ）山かぜをあらし（暴）といふらん（デアロウ）

風といふ風がなかに、山かぜをしもあらしと名づけたるは、さのみはなどかとのみおもひしに、今かくなつかしく花さき色どる草木どもを、さがなくふきそこなふがいとにくさに、さる名もことわりとおぼゆる心ばえ也、しかそのにくさのひたふるなるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは古今集にいでゝ、是貞のみこの家の哥合の歌なれば、まことの哥にはあらす　これらはよみざまさへまことの哥とはみえず、まことならねども、まことめきてよめる哥もあるものなれど、實事にあたりてよめるは、かざりたるやうなる詞つきなるも、さすがにけぢめはみゆかし

大江千里

月みればちゞにもの　こそ（ガナニヨリモ）　かなしけれ（イヿジヤ）わが身ひとつのあきには（デ）あらねど（ナイケレド）

月みれば、心のすむまゝに、數なくものゝかなしうなるも、大かたわが身ひとつのために來し秋にてはなきに、さるわきまへもせられぬわが心の、ことわりなさを、みづからもどかしくおぼゆる心ばえなり、しかみづからもどかしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは古今集にいでゝ、是貞のみこの家の哥合の歌なれば、まことの哥にはあらず　これらもよみざままことしからぬことばつきなり

菅家

此たびはぬさもとりあへず（ヅテキルマモナカツタ故）　たむけ山（ノ）もみぢのにしき（チ）かみのまにまに（御心マカセニシタマヽ）

朱雀院ならへおはしまし〻時、御ともつかふまつり給へるなれば、道のつ〻がなからんいのりに、神に奉り給ふべき幣も、わたくしの旅のやうにとりと〻のへさせたまふ御いとまもなかりしかば、せめて此山の紅葉ぬさに似たるを、やがて幣とおぼしなしてうけ給へかしとはおほせど、神のおぼさむところのいとかしこさのあまりによませたまへるなり、其ときそのかしこさの一向なるにまかせ給はゞ、かならずとみに幣をもと〻のへ給ふべし、しかとみにと〻のへさせたまひて、しばしも供奉のおろかならん、はたいとかしこまりふかくおほし〻が故に、かくこの御哥とよみ出させ給ひて、そのかしこさの一向なるをなぐさめ給ひ、ぬさはとみにもてうじ給はでやみ給ひしなり　神に非礼なるをかしこみおぼす事は、いとめでたき御心なれど、そのみなもとをたづねいたれば、たゞ御みづから御身のために、道の恙あらんことをおそりおぼすに歸するなり、されば非礼をかしこむはさる事なれど、供奉のおろかならんにはかへがたくおぼし〻事、うべなどいはむもことさらびたり　○おほよそ、はかなきわたくし事によりて、おほやけにたがはむこそいふかひなかるべけれ、神に非禮あらじとてのいとまは、しばし闕(カ)むもまさなかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此おとゞの、(ママ)しかしこさは一向ながら、なほとみに幣をもてうじ給はざりけん、いとも〳〵おほろかならぬ御心もちゐなるにつけても、今かく神といつかれおはしまし、世こぞりてあふぎたてまつるも、うべなりとぞおぼゆるや

三條右大臣

名にしおはゞあふさか山のさねかづらひとにしられでくるよしもがな

せちにあはまほしくおぼせど、忍びありきは、かろびたる名にもたちぬべきが、いとわびしさの餘りによませ給へる也大臣にしてしのびありきし給はむは、いとかろ〴〵しくはしたなかるべきこと也、されば源氏物語帚木ノ巻のはじめに、ひかる君の事をいへる、おもひあはすべし、此故に、せちにあはまほしながら、えおはさゞりけるなり、これによりてくるよしも哉とはよませ給へるを、女のかたよりこむよしなくやおもはれけん、契沖もくるは操(繰)の心にとかれたり、すこしおもひいたられざりけりとおぼしき也、これは、みづからはいかにおぼせどもおはしがたければ、いかで我御かたへくるよしもあれ、それも人のしりては詮なければ、人にしられずしてしかも女のかたよりこなたへ來よかしと、いとふくつけくおほせられたるものなり其ときそのわびしさの一向なるにまかせ給はゞ、必忍びて我方に來よといひやりたまふべし、しかいひやりたまひて、女のねたくおもひたらん、はたいとをしかるべきが故に女のねたくおもふとは、我あはまほしくは我よりおはすべきを、かなたよりこよとおほせらるゝがわりなければなりかく此哥とよませ給ひて、そのわびしさの一向なるをなぐさめ給ひ、女にこよともいひやり給はでやみ給ひしなり○おほよそ、かろき身にして人をよびよせむこそなめしかるべけれ、かろからぬ身にては、人をよびよせむもひがことなるまじき理なれば、やごとなからんきはにしては、必おぼしまどふべきに、此おとゞの、しか佗しさは一向ながら、猶しひてこよとも仰られざりけん、いともく〵めでたき御心ざま也かし

貞信公

をぐら山みねのもみぢ葉こゝろあらば今一たびのみゆきまたなむ

小倉山のもみぢの、今上行幸したまはむ日まで、ちらではありがたかるべきが、いとわびしさのあまりによませ給へるなり亭子院大井川に御幸ありて、行幸もありぬべき所なりとおほせたまふにことのよし奏せむと申てと拾遺集にあり そのとぎ（ママ）共わびしさの一向なるにまかせ給はゞ、必奏聞しがたくおぼして今の院宣をいなみたてまつり給ふべし、しか院宣をいなみ奉りて院の御けしきあしからん、はたいとかしこかるべくおぼしゝが故にかく此哥とよみいで給ひて、そのわびしさの一向なるをなぐさめ給ひ、院宣をもいなみ給はでやみたまひしなり○おほよそ、我ちからにをよばむことをいなまむこそさがなかるべけれ、かく非情のものゝ、わが力にも及ばぬ故をもていなみたてまつらんは、わたくしありともいふまじき理なれば、誰も〳〵必思ひまどふべきに、此おとゞの、しかわびしさはひたふるながら、猶院宣をもいなみ給はざりけん、いとも〳〵いたりふかき御心也かし されども猶、行幸の日まで紅葉のあらざらんには、今上の御けしき、またいとかしこかるべくおぼしゝにや、奏聞も口づからに申給はで、此哥をもて奏したまひしよし、大和物語にみえたり、はじめをはりかばかり御こゝろを用ゐさせ給へる、いといみじきことゞもなり、たれも〳〵たゞかくこそあらまほしきことには有けれ

中納言兼輔

○みかのはらわきてながるゝいづみ川いつみき（タ）とて（イフテ・）かこひしかるらむ（ウアルコトジヤゾ）

一ト目だにみしうへこそあらめ、たゞきゝのみわたる女をしもかくこふるが、いとわりなさのあまりによみ給へる哥也、その時そのわりなさの一向なるにまかせられなば、必わりなきかいま見を（覗其私屛）

もせらるべし、しかわりなきかいま見して、女のためいとをしからん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのわりなさの一向なるをなぐさめ、かいまみなどもせでやみ給ひし也○おほよそ、はぢみせむとてのかいま見こそはしたなかるべけれ、戀しさのかいまみは、いとをしともいふまじき理なれば、たれも〳〵必おもひ惑ふべきに、この卿の、しかわりなさは一向ながら、なほしひたるかいまみもし給はざりけん、いとも〳〵めでたき心ざま也かし

源宗于朝臣

山ざとは冬ぞ(ガナニカシラズ)さびしさ(ハ)まさりける(ヅタコトジヤ)　人めもくさもかれぬ(テシマウタ)　とおもへば

山里はいつはあれど、冬しもさびしさの限なりとは、人めも草もかれたるにておもひしられたるこゝろばえ也、しかさびしさの限にあへるわびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは古今集にいでゝ、冬の哥とてよめるとあれば、まことならぬ歌なり　冬の哥とてとかゝれたるは、まことならぬしるしなり、同じ集に、二条の后の春のはじめの御哥、又は、秋たちける日よめるなどかゝれたるは、まことの哥なるをみせたる書ざま也、これをもてこのことがきの心をうべし、これらも詞つきまことめかぬよみざま也、この朝臣、宇多院にて、來てみれどこゝろもゆかずふるさとはむかしながらの花はさけどもとよまれたる、大和物語にみえたり、此詞つきをくらべて思ひしるべし

凡河内躬恒

こゝろあてに(デ)をらば(ヅタラバ)やをらん(レウカ)　はつ霜の(ガ)おきまどはせる(シテキル)しらぎくのはな(ハ)

心あてにをるともいかゞあらん、初霜のおきて、この白菊のいづら花ともしられずおほつかなきが、いとねたさのあまりによまれたる哥なり、そのときそのねたさの一向なるにまかせられなば、必まづすゞろにをりこゝろまるべし、しかすゞろにをり試みて、いたづらなる枝をゝりやつしたらん いたづらなるとは、花にはあらぬ枝をいふなり はたいと口をしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、その霜のねたさ一向なるをなぐさめ、すゞろにはをりもこゝろまでやまれたる也○おほよそ、こゝろとをりやつさむこそうたてあるべけれ、あやまりてをりもやつしたらむは、とがともいふまじき理なれば、誰も〳〵必おもひまどふべきに、このぬしの、しかねたさは一向ながら、猶をりもこゝろまれざりけん、いともく〳〵めでたき心ざま也かし

壬生忠岑

あり明の ノ月ノ如ク つれなくみえしわかれ タ より カラ あかつきばかりうきものはなし イ

○○○○忍びたる中なれば、からうしてよふかくいきたるに、あはずしてかへしゝより これはあはでかへりし哥なる事、契冲があげつらへる がごとし、古今集のならびのみならず、この哥の本句のことばづかひのやう、あひていぬ別にあらぬ事、附録にいへるをみるべし 曉をさへうきものにおもひはてらるゝが、いとわりなさのあまりによまれたる哥なり、そのとき共わりなさのひたふるなるにまかせられなば、必このつれなさのうらみやらるべし、しかうらみやりてはしたなきものにおもはれん、はたいと

心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、其わりなさの一向なるをなぐさめ、うらみはいひもやらでやまれたる也○おほよそ、おしなへたるつらさならばこそはしたなかるべけれ、からうして夜深くいきたるに情しらぬは、うらみむもめざましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此ぬしの、しかわりなさは一向ながら、猶うらみをもいひやられざりけん、いとも〳〵なつかしき心ざまなりかし　京極黄門、この哥をば、これほどの哥ひとつよみ出たらん、このよのおもひでにはべるべしとはおほせられたれど、本句と末句と詞のすぢたがへり、そのやうは附錄をみてしるべし、上の仲麿の哥なども、さばかり名たゝる哥ながら、本末の詞のすぢたがひたり、これら皆よに名たかき哥どもなれば、めもとまらぬ也、されどかうやうの事も、哥まことならんには害なき事なれど、この黄門のかくのたまへれば、稽古のうへのまどひともならんとておどろかす也

坂上是則

あさぼらけあり明の月とみるまでによし野のさとにふれるしらゆき

いづこにもまだふり初ぬころほひなれば　古今集に、やまとの國にまかれる時に、雪のふりけるをみてよめるとあり、これをもて今注する所の心をうべし、此本句の心、もとよりこのことがきの故なり　朝ぼらけにだに猶月のかげかとみるばかり、この里にしもいとはやくふれる雪が、いとめづらしさの餘りによまれたる歌なり、そのときそのめづらしさの一向なるにまかせられなば、必このさとなつかしくて、ひさしくこゝにとまらるべし、しかひさしくこゝにとまりてはしたなまれたらん、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみ出てそのめづらしさの一向なるをなぐさめ、

ひさしくもとまらでやまれたる也○おほよそ、ひたふるにかへらざらむこそめざましかるべけれ、しばしとまらむは、無下なるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此ぬしの、しかめづらしさは一向ながら、なほ久しくもとまられざりけん、いとも〳〵つゝしめる心なりかし こゝに里言をそへたるがごとく、ふれる雪かなとよむべきを、本句月とまがふ心なれば、しら雪といはむがよしとおもはえて、哉をはぶかれたるものなり、されど本句のこゝろにて、雪は白き境にてよまれけんとはしるかるべければ、猶かなとあらんぞ、哥のこゝろもよくえらるべきをや、この頃哥さかりにて、おのが手のきくまゝに、かやうの詞づくりにいたく心を用ゐられしにこそ、かみつよは哥の表にはおろかなるやうなれど、たゞ哥はこゝろをなぐさむる事事要なれば、中むかしははやよみざまもかはりたる事、これらをもてしるべし

春道列樹

山がは(デ)にかぜの(ガ)かけたる(テオイタ) しがらみはながれもあへぬ(テヰルマモナイ)もみぢなりけり(デアルコトジヤ)

しがらみは竹木もてこそかくれ、山河に これは滋賀の山越にてよまれたるよし、古今集にみえたり かぜのかけおける柵は、人のかくるにはやうかはりて、紅葉をいたくふきおとし、やがて其もみぢして柵としたる故に、竹木してせきとむるよりも、かへりてこゝろからえながれやらぬたくみの、いとゆくりなさのあまりによまれたる歌なり、其時そのゆくりなさの一向なるにまかせられなば、必なほよのつねのごとく、竹木してかけむをめやすしとおもひはつべし、しかめやすしとおもひはてゝ、自然のさかひにこゝろのいたらざらん、はたいといふかひなかるべきが故に 人力をたのみて、造化のくしびなるにしたがはざらんはげにおろかにいふかひなきことにこそ かく此

哥とよみいでゝ、そのゆくりなさの一向なるをなぐさめ竹木にもひがまでやまれたる也〇おほよそ、なにごともめやすからぬこそめざましかるべけれ、たゞめやすきにしたがはむは、ひがことなるまじき理なれば、誰もたれも必おもひまどふべきに、このぬしの、しかゆくりなさは一向ながら、猶竹木にもひがまれざりけん、いともく〳〵ふかき心もちゐ也かし

紀　友　則

ひさかたのひかりのどけき春の日に。しづごゝろなくはなのちるらむ

かばかりめでをしむを、つれなくてちる花のあはたゝしげなるが、いとねたさのあまりによまれたる哥也、そのとき共ねたさの一向なるにまかせられなば、必春の氣にあひながらのどかならぬわりなさのもどかれぬべし、しかわりなさをもどきてあへなからん、はたいとなげきくはゝるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、其ねたさの一向なるをなぐさめ、花のこゝろのわりなさはもどきもせでやまれたる也〇おほよそ、さるべきすぢあるものをはしたためむこそおこなるべけれ、こゝろとわりなきは、もどかむもひがことなるまじき理なれば、たれもく〳〵必おもひまどふべきに、此ぬしの、しかねたさはひたふるながら、なほわりなさはもどきもせられざりけん、いともく〳〵なつかしき心ざま也かし

藤原興風

たれをかもしる人にせむ（ウゾサテモ）　たかさごのまつも（トイヘモ）　むかしの友ならなくに（デハナイノニ）

わが身いたく老にたれば、今はむかしの友ひとりものこらず、せめては高砂の松なれど、それもたゞ年のふるきまでにて、むかしよりまじはれりし人のつらにはしがたきが、いとこゝろぼそさのあまりによまれたる歌なり、その時その心細さの一向なるにまかせられなば、必うちもなきつべし、しかうちなきてなほかひなからん、はたいとゞ歎そはるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのこゝろぼそさの一向なるをなぐさめ、うちもなかでやまれたる也○おほよそ、せむすべもあらんにこそいふかひなかるべけれ、老はてゝのこゝろぼそさは、なきたらむもあさましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此ぬしの、しかこゝろ細さは一向ながら、猶うちもなかれざりけん、いとも〳〵哀なる心なりかし

紀貫之

人はいさ（ドウアルカ）　こゝろもしらすふるさとは（ヌガ）　はなそ（ハナニカシラズ）　むかしの（ノトホリデ）　香にゝほひける（フテヰルヿジヤ）

泊瀬にまうでしごとに、やどれりし宿のあるじなれば、いとしたしかりしに、程へてきてみれば、みづからはとみにもいでずて、我久しくこざりしをば、人してうらみいだしたる心のうち、むか

しにはあらずおぼゆるに、そこにたてる梅は、はやくみしにかはらず咲にほひたるが、いとあへなさのあまりによまれたる也、其とき其あへなさの一向なるにまかせられなば、かならずかくうとげにもてなさるゝをふかくうらむべし、しかうらみてはしたまれ(マヽ)たらん、はたいとこゝろうかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのあへなさの一向なるをなくざ(ぐさ)め、あるじもうらみでやまれたる也○おほよそ、さばかりしたしくもあらざりし人にてこそはしたなかるべけれ、年比したしくせし人の今さらうとげにもてなすは、うらみむもひがことなるまじき理なればたれも〳〵必おもひまどふべきに、このぬしの、しかあへなさは一向ながら、猶うらみなどもせられざりけん、いとも〳〵めでたき心なりかし

清原深養父

夏のよはまだよひながら(ナリニ)あけぬるを(テシマウタノニ)雲のいづこ(ドコ)につき(ガ)やとるらん(ツタデアロウゾ)

まだ宵のまとおもふほどに、やがて夜あけて、あへなう月のかくれぬるが、いと口をしさのあまりによまれたる哥也、そのとき其口をしさの一向なるにまかせられなば、必月のゆくへのしひてもたづねらるべし、しか月の行方をたづねてかひなからん、はたいとゞなげかしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのくちをしさの一向なるをなぐさめ、月のゆくへはしひてもたづねで

やまれたる也○おほよそ、もとよりありなしのおほつかなからんにこそはかなかるべけれ、山に入るべき月の、さはあらでみえずなりぬるは、たづねむもひがわざなるまじきことわりなれば、たれも〱必おもひまどふべきに、このぬしの、しか口をしさは一向ながら、なほ月の行方をしひてもたづねられざりけん、（月のゆくへをしひてたづぬるは、猶みまほしき也）いとも〱のどかなる心もちゐ也かし

文屋朝康

しら露にかぜの（ガ）ふきしく（シキル）あきのゝはつらぬきとめぬたまぞ（ガナニカシラズ）ちりける（ルヿジャ）

秋の野の草葉、露をぬきとめたりとみしも、ふきしきる風のためにみだされて、ぬきとめもはてぬが、いと口をしさの餘りによまれたる歌なり（この哥は、後撰集にいでゝ、延喜の御とき哥めしければとあり、おほよそ哥をめすにたてまつるは、ことさらによみてたてまつられしことゝおぼえて、よみてたてまつれるなどかゝれたることがきもみゆ、されどこれらは、よみおかれたるをやたてまつられたりけん、よみてともかゝれず、よみおきといへども、題詠のもあるべきなれば、よみて奉れるとはかゝずとて、まことの哥ともさだめがたけれど、まことならぬしるしもみえぬは、まづまことの哥として注する也）其ときそのくちをしさの一向なるにまかせられなば、かならずふきしく風のうらみらるべし、しかうらみて、危ふきをたのみし心みえならん（ママ）、はたいとこゝろうかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、その口をしさの一向なるをなぐさめ、ふきしく風もうらみでやまれたる也○おほよそ、おしなへたるさがなさにこそはしたなかるべけれ、ぬきとめたりし露をば心なくふきみだす風は、うらみむもひがことなるまじき理なれば、たれも〱必お

もひまどふべきに、此ぬしのしか口をしさは一向ながら、猶ふきしく風もうらみられざりけん、いとも〱なつかしき心ざま也かし

右近

わすらるゝ身をばおもはず。（ソレヨリモ）誓ひて（フテ）し（オイタ）　ひとのいのちの（ガ）をしくも（サテモ）　あるかな（ヿカナ）

わすられし身のかなしさはいふもさらなれど、猶それよりも、誓にそむきし男の命のかならずたえむが、いとかなしさのあまりによまれたる哥なり、その時そのかなしさの一向なるにまかせられなば、かならずかくせちなる心のつげやらるべし、しか告やりてまことならずおもはれむ、はたいとなか〱なるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのかなしさの一向なるをなぐさめ、せちなる心もつげやらでやまれたる也　げにわすられし悲しさもさる事なれど、男のいのちのたえむは、またおもひなほさるゝ時もあらんかとのたのみもあるまじければ、さぞおもはれけんかし、しかはあれど、さる心也とつげたらんには、このわすられたるがかなしさに、かくいふならんと、をとこのおもふべきことなれば、しか哥になぐさめて告やられざりし、はたいとふかきたどりなりや　○おほよそ、わたくしざまなる事をつげむこそおこなるべけれ、わが身をおきて人をかなしむ心は、つげむもめざましかるまじき理なればたれも〱必思ひ惑ふべきに、此おもとの、しか悲しさは一向ながら、なほ心のほども告やられざりけん、いとも〱なつかしき心ざま也かし

參議等

あさぢふのをのゝしのはらしのぶれどあまりてなどかひとのこひしき

忍ばむのこゝろひとへにふかければ、さてあるべきに、しのびあへずこひしさのあまるが、いとわりなさの餘りによまれたる哥なり これは後撰集にいでゝ、女につかはしけるとあり、はじめたる女におくられし哥なるべし 其とき其わりなさの一向なるにまかせられなば、必かばかりの志とつげやりてまことしからずおもはれん、はたいとなか〳〵なるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのわりなさの一向なるをなぐさめ、志のほどは告もやらでやまれたる也○おほよそ、あさき心のほどをかざりていはむこそおこなるべけれ、まことにふかきこゝろざしは、つげむもなか〳〵なるまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、此朝臣の、しかわりなさは一向ながら、猶さる志のほども告られざりけん、いとも〳〵深き心もちゐる也かし

平　兼盛（閑書）

しのぶれどいろにいでにけりわがこひはものやおもふとひとのとふまで

ふかくしのびてあるを、なほおもほえず色にいでけらし、物思ひてやをると人のとふよと、こゝろぐるしく侘しき心ばえ也、しか心ぐるしさの一向なるをなぐさめられし哥のやうなれど、これは拾遺集にいでゝ、天暦の御時の哥合にとあれば、まことの哥にはあらず されど此哥などは、もしかゝる心ぐるしさのありて、よみ

おかれし哥をやいだされけんとおぼゆるまで、いとあはれにめでたくよまれたる哥なり、かゝる哥をまことにならずとさだむるは、いとをしげなれど、たしかなるしるしもなきをいかゞせん、かうやうなるは、まことの哥もはづかしからぬ事也、されど哥のよしあしによる事にはあらで、時にあたり事にふれ、まのあたりなぐさめがたき心をなぐさむるが、此道の專要なれば、よく〳〵心すべき事也

壬生忠見

戀す（チル）てふ（トイフ）わが名はまだき（ハヤカラ）たちにけり（ヅテシマウタヿジヤ）人しれずこそ（ナニヨリモ）おもひそめしか（タヿジヤガ）

わが戀すといふ名の、かくおもほえずはやくたちぬるは、所詮人をおもふ心のふかきゆゑなるべし、さるはたゞ、人しれず心ひとつにおもひそめたるにて、かくあらはるべき程もなきに、といとわりなく心ぐるしき心ばえ也、しかわりなさの一向なるをなぐさめられし哥のやうなれど、(ママ)これ又兼盛の哥と同じ歌合の哥にて、同じ拾遺集にのせられたり、さればまことの哥にはあらぬなり、この哥もいとめでたくよまれて、いとまことしやかなれど、かく哥合の歌ならんからには、なほいかゞはせんは

清原元輔

ちぎりきな（ヅテオイタナア）かたみに袖をしぼりつゝ（テソレナリニ）すゑのまつやまなみ（ニ）こさじ（スマイ）とは

はやくちぎりおきしは、たがひに切なる涙をながしつゝ、あだし心はもつまじと、すゑの松山をさへかけしに君をおきてあだし心をわがもたば末の松山なみもこえなんといふ哥を本哥としたる也、すゑのまつ山を波のこゆるといふ事はなき事なれど、さる事はたとひありともかはらじとの心にて、かたく契りしことを云也今はさる契もかけざりし中のやうになれるが、いとかたはらいたさのあまりによまれたる哥也、

これは後拾遺集にいでゝ、心かはりてはべりける女に、人にかはりてとあり、かはりてよむ事は、天智帝の大御哥にいへるが如し、さればこれもまことの哥として注せり しかいとかたはらいたくおぼゆる心一向なるにまかせられなば必この男をすゝめて女をうらますべし、しか女をうらませて、わがすゝめたりときかむ、はたいと心ぐるしくうたてあるべきが故に、かくこの哥とかはりよみて、そのかたはらいたくおぼゆる心の一向なるをなぐさめ、女もうらませでやまれたるなり○おほよそ、すぢなくさるまじき事をすゝめむこそうたてあるべけれ、人のうへにてだに、かたはらいたきまであだなる女は、すゝめてうらませんもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに此ぬしの、しかかたはらいたさは一向ながら、女をうらませもせられざりけん、いとも〳〵よういある心也かし

權中納言敦忠

あひみてのゝちのこゝろにくらぶればむかしはものも（ナドモ） おもはざりけり（ズニキタヿジャ）

あはざりしほどは、あひみばいかに心ゆかましとのみおもひしに、今と成てみれば、かへりてあはざりしほとの歎は、いとかろかりけりとおぼゆるまで、あはましさののどめがたさのあまりによませ給へる也 これは拾遺集には、だいしらずとていでゝ、六帖には、後のあしたの哥の中にいれり、げに後朝の哥にてあるべし 其とき其のどめがたさの一向なるにまかせたまはゞ、必ゆふぐれをもまたで立かへりいかるべし、しか立かへりいきて人めにもたち

なん、はたいとゆゝしかるべきが故に、かく此歌とよみ出給ひて、そののどめがたさの一向なるをなぐさめ、たちかへりもいかでやみ給ひし也○おほよそ、いくまじき所にいかむこそめざましかるべけれ、此夕ぐれには必いくべきを、すこしはやくいかむは、ことにもあるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきにこの卿のしかのどめがたさはひたふるなから猶たちかへりもいき給はざりけんいとも〳〵めでたき心ざま也かし

百人一首燈　上卷　終

百人一首燈　下

百人一首燈 下卷

藤原成元 謹述

中納言朝忠

あふことの（ガ）たえてしなくは（サヘイコナラバ） なか〳〵に（ナマジイニ）人をも身をもうらみざらまし（ズニキヨウゾ）

あふといふ事のあるが故に、よしなき人をも身をもうらみらるゝが、いとあやなきこと、あはまほしき心にまかせてあはれなば、かゝるあやなきわざもすまじきにと、おもひあまりてよみ給へる心ばえなり、しかあやなさの一向なる心をなぐさめ給ひし歌のやうなれど、これは拾遺集にいでゝ、天暦の御時の哥合の哥なれば、まことの哥にはあらず されどこれらは、いとめでたくよみ給ひて、いとせちに聞え、まことならぬ哥のやうにはおぼえぬよみざまなり、中むかしの人は、まことならぬ哥あはせの哥をもかやうによみなさるゝ事、ひとへに哥よみのさかりなりしゆゑなるべし、兼盛が哥にいふがごとく、この哥なども、さる事ありておもひあまりたまひてのよみおきにやとおぼゆかし（頭書）

謙徳公

あはれとも（ナドモ）いふべき人は（ヒソウナ）おもほえで（ヒアタライデ） 身の（ガ）いたづらになりぬべきかな（ツテシマイソウナコカナ）

あはれといはむ人のあらばこそ、こひしなむもせめておもひ出はあらめ、我はさるおもひ出もな

きものから戀しぬべきが、いとあへなくおぼすあまりによませたまへるなり（ものおほせられし女の、後につれなくて、さらにあはざりしによみ給ひしよし、拾遺集にみえたり）其時そのあへなさの一向なるにまかせ給はゞ、必このつれなくなれりしを、いたくうらみつかはし給ふべし、しかうらみつかはされて、いよ〳〵うとまむ、はたいとなか〳〵なるべくおぼしゝが故に、かく此哥とよみいで給ひて、そのあへなさの一向なるをなぐさめ、女もうらみずてやみ給ひしなり○おほよそ、はじめよりつれなきにこそはしたなかるべけれ、さらにつれなくなれるは、うらみむこと〳〵しかるまじき理なれば、誰も〳〵必おもひまどふべきに、此おとゞの、しかあへなさは一向ながら、猶うらみもつかはされざりけむ、いとも〳〵めでたき御心なりかし

曾祢好忠

ゆらのとをわたるふな人かぢをたえ。（タル如ク）ゆくへもしらぬこひの道かな（デモアルヿカナ）

なにの道とても、ゆかむやうのしられぬことはなきに、いかにせばか人の心もとくべきと、たづきもしられぬ道は戀の道にて、おほかたの道のつらにはあらぬが、いとわびしさのあまりによまれたる哥なり、そのとき其侘しさの一向なるにまかせなば、必このつれなき女をふかくうらむべし、しかふかくうらみてははしたなまれん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみいで

ゝ、そのわびしさの一向なるをなぐさめ、女もうらみでやまれたるなり○おほよそ、おしなへたるつらさにこそはしたなかるべけれ、たえてつきなくもてなす女は、うらみんもめざま（し）じかるまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、此ぬしの、しかわびしさは一向ながら、猶をんなもうらみられざりけん、いとも〳〵なつかしきこゝろざま也かし

惠慶法師

八重むぐら（ガ）しげれる（ツテキル）やどのさびしきに（イノニソレニ）人こそ（ハナニヨリモ）みえねあきはきにけり（テシマウタヿジヤ）

融のおとゞ世におはしゝ時は、さばかり時めき、人も數なく來つどひたるべきに、さるおもかげもなくあれはてゝ物さびしきに、人はみえずして、いとゞ物うさをそふる秋さへ來たるが、いとすさまじさのあまりによまれたる哥也（これは拾遺集にいでゝ、河原院にて、あれたる宿に秋來るといふこゝろを、人々よみけるにとあり、されば題詠にはあれど、やがてこの院のいにしへをおもはれけん心を、此だいによせてよまれたるなれば、猶まことの哥なり、この比は、題といへどもその所にかなはむをぞいだされけらし、經信卿の哥なども、この哥にひとしきなり）その時そのすさまじさの一向なるにまかせられなば、必ふたゝび時めかさむとせらるべし（すべてしひて時めかさむとすれば、かひなき物からふくつけき名をとるべきこと也、たれも〳〵心あるべきことなり）しかときめかさむとしてそのかひなからん、はたいとなげかしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのすさまじさの一向なるをなぐさめ、しひて時めかさむともせでやまれたる也○おほよそ、ものをそこなはむこそさがなかるべけれ、むかしにかへし時めかさむとするは、

ひがわざともいふまじき理なれば、たれも〳〵、かならず思ひまどふべきに、此大とこの、しかすさまじさは一向ながら、猶しひて時めかさむともせられざりけん、いとも〳〵ふかき心もちゐ也かし　時めかさむの企は、たれとてもしかるべからぬが中に、法師の身にしては、いとゞさるまじきわざなりかし

源　重之

○かぜを（ガ）いたみ（ヒドサニ）いはうつ（チ）浪の（ノ如ク）おのれのみくだけてものをおもふころかな（デモアルコカナ）

おもへども〳〵、女はたゞひたふるにつれなきに、なほ心をちゞにくだきてものおもひわたるが、われながらわりなくもどかしくおぼゆるこゝろばえ也、しか我ながらもどかしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは詞花集にいでゝ、冷泉院東宮と申ける時、百首のうたたてまつりけるによめるとあれば、まことならぬ哥なり　おほかた哥仙たちのよき哥といひおかれたる哥は、まことならぬもいとせちにおぼえあはれにみゆる哥どもなり、これをもてもまことならぬはしかるべからぬことをわきまへ知べし、さる哥仙たちののりとせられしは、みないにしへのまことの哥なるをや

大中臣能宣朝臣

○みかきもり衛士のたく火の（ノ如ク）よるはもえひるはきえつゝ（テソレナリニ）ものをこそ（ナニヨリモ）おもへ

さるかひもあらむにはさも有ぬべし、よるはもえひるは消つゝ、ひまなくものおもひわたれども、なにのかひもあらぬが、いとあへなさの餘りによまれたる哥也、そのとき共あへなさの一向なる

にまかせられなば、かならずこの女のうらみらるべし、しかうらみていよ〳〵うとまれたらん、はたいとなか〳〵なるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのあへなさの一向なるをなぐさめ、女もうらみでやまれたる也○おほよそ、おしなへたらんつらさにこそはしたなかるべけれ、かばかり思ふをもあはれしらぬ女は、うらみむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この朝臣の、しかあへなさは一向ながら、猶女もうらみられざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かし

藤原義孝

君がためをしからざりし（ウナカツタ）いのちさへ（マデチ）ながくもかなと（ナドモアツテホシイト）おもひけるかな（フタヿデハアルコトカナ）

きのふまでは、あふにかへむはをしからずおもひしかど、あひみては、行末ながくあひみまほしくおもふにつけて、しかおもひし命をさへ、今はたをしくなれりしこと、よく〳〵おもへばいとおもなさ（無面目）のあまりに讀たまひし哥也（これは後拾遺集にいでゝ、女のもとよりかへりてつかはしけるとあり、後朝の哥なり）そのときそのおもなさの一向なるにまかせられなば、必わたくしにかふるみさほにはあらぬよしをいひことわらるべし、しかいひことわりていよ〳〵あさましくおもはれむ、はたいとなか〳〵なるべきが故に、かくこの哥とよみて、そのおもなさの一向なるをなぐさめ給ひ、いひもことわらでやみ給ひし也○おほよ

そ、わたくしにかふる操をいひことわらむこそあさましかるべけれ、この女にふかき志よりかふる操の、わたくしならぬよしは、いひことわらむも、いふかひなかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この少將の、しかおもなさは一向ながら、猶いひもことわり給はざりけん、いとも〳〵哀なる心ざま也かし

藤原實方朝臣

かく(ツイカウ)とだに(デモ)え(ドウモ)やはいぶきの(イハレヌカラ)さしもぐささしも(サウトモ)しらじな(ルマイナア)もゆるおもひを

かゝりともいはるゝばかりの思ならば、とくもいひてんを、なか〳〵いふべくもあらぬゆゑに、今までもいはぬを、女はさりともしるまじきが、いともどかしさの餘りによまれたる哥なり（女にはじめていひつかはしけると、後拾遺集にみえたり）そのとき其もどかしさのひたふるなるにまかせられなば、かならずふかき志のほどをまねびやらるべし、しかまねびやりてまことしからずおもはれん、はたいとなか〳〵なるべきがゆゑに、かく此哥とよみ出て、そのもどかしさの一向なるをなぐさめ、志のほどもまねびやらでやまれたるなり○おほよそ、あさき心をふかげにまねばむこそおこなるべけれ、ふかき心のまゝをまねばむは、ひがことゝもいふまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、この朝臣の、しかもどかしさは一向ながら、猶かたはしもまねび出られざりけん、いとも

〳〵めでたき心ざま也かし

藤原道信朝臣

あけぬればくるゝ(テシマヘバ)物(ジヤ) とはしりながら(ナリニ)なほ(ヤツパリ)うらめしき(イ)朝ぼらけかな(デハアルヿカナ)

あくればくるゝが常なれば、くれなばゆかむをなぐさめにて、別のうさもしのぶべきに、まのあたりわかるゝことの悲しさに、明ればくるゝ理はたのみながら、暮しが明るはふかくうらめしきが、我ながらいとわりなさのあまりによまれたる哥也、(これは後朝のうたなり)其とき其わりなさの一向なるにまかせられなば、必たちかへり女の家にいかる(往)べし、しか立かへりいきてはしたなくおもはん、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのわりなさの一向なるをなぐさめ、立かへりもいかでやみ給ひしなり○おほよそ、うとくせんこそさがなかるべけれ、今かへりて又立かへりもいかむは、心しらはむにもをよぶまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此朝臣の、しかわりなさは一向ながら、なほたちかへりもいき給はざりけん、いとも〳〵めでたき心なりかし

右大将道綱母

なげきつゝ(ナゲキ〳〵)ひとりぬるよのあくるまはいかに(ドノヤウニ)ひさしき(イ)ものとかはしる(ゾイ)

とはせたまはぬよの明る間は、いかばかりわびしからんとの御心しらひもし給はず、たゞしばし戸を明る事のおそかりしをば、たちわづらひぬなどことぐ〳〵しくいひ入れ給ふが（これは入道攝政兼家公なり（頭書））いとねたさのあまりによまれたる哥なり、其とき其ねたさの一向なるにまかせられなば、必入道殿を詰（ナジ）りたてまつらるべし、しかなじりたてまつりてはしたなくおぼしたらん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのねたさの一向なるをなぐさめ、なじりもたてまつらでやまれたる也○おほよそ、おしなへたる心なさにこそめざましかるべけれ、おのがうへのことのみいひて、人のわびしさはおもひやりなき人は、なじらむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此おもとの、しかねたさは一向ながら、なほなじりもたてまつられざりけん、いとも〳〵めでたきこゝろざま也かし

儀同三司母

わすれじの（マイト云ヿガ）　ゆくすゑまではかたければ（イニヨッテ）けふをかぎりのいのちともがな（ナドモシテホシイヿカナ）

中關白かよひそめたまひて、いとあはれにまめ〳〵しく契りのたまはすれど、大かたさる心の、ゆく末までもかはらであらんはかたき世のならひなれば、さる悲しきめみたらむよりは、今このうれしきほどに、死なばやとおもふまで、ちぎりの末がいとおぼつかなさのあまりによまれたる

哥なり、その時そのおほつかなさの一向なるにまかせられなば、かならずたのみがたさのいひやらるべし、しかいひやりてあさましうおぼさん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのおほつかなさの一向なるをなぐさめ、たのみがたさもいひやらでやまれたるなり○おほよそ、人のこゝろをうたがふにこそいとをしかるべけれ契の末たがはざらんやうにあらまほしさは、いひやらんもあさましかるまじき理なれば、誰もたれもかならずおもひまどふべきに、このおもとの、しかおほつかなさは一向ながら、なほたのみがたさもいひやられざりけん、いとも〳〵あはれなる心なりかし

大納言公任

たきの音はたえてひさしくなりぬれど（ツテシマウタケレド）　名こそ（ハナニヨリモ）ながれてなほ（ヤツパリ）きこえけれ（ルヿジヤガ）

たえてひさしくなれる物は、その名さへおのづからうするならひなるに　さしもむかし、法皇の（嵯峨法皇なり、大覺寺はすなはち此法皇のおはしましゝ所なり、そのあとのいとふりにたるをみて○哥なるよし、拾遺集にみえたり）御心をこめてつくらせたまひし所の瀧なれは、さるならひにもこえて、今にその名のたかく聞ゆるに、わが身は後のよにこの瀧のごとく名だにのこらざるべきが、いとはかなさのあまりによませ給へる哥なり、その時そのはかなさの一向なるにまかせられなば、必身をようなきものにおぼしすてつべし、しかおぼし捨ていよ〳〵あさまし

からん、はたいと口をしかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのはかなさの一向なるをなぐさめ、身をおぼしも捨でやみ給ひし也○おほよそ、みづからおもひあがらんこそめざましかるべけれ、わがはかなさをおもひしりたらんはいふかひなしともいふまじき理なれば、たれも〱かならずおもひまどふべきに、此卿の、しかはかなさは一向ながら、猶身はおぼしもすてられざりけん、いとも〱めでたき心ざま也かし（かゝりければ、なにごとをも心をいれてぞおはしけらし、御堂殿の、大井川にて詩哥の舟をうかへ給ひて、四條大納言は、いづれの舟にのらるべきやとゝはせ給ひし名誉、なほ朗詠などの作、いまによのことぐさ也）

和泉式部

あらざらむ（ナクナラウ）このよの外のおもひでにいま（マア）ひとたびのあふよしもがな（ナドモアヅテホシイコカ）

かくながら死なんは、後のよのさはりなるべきに、なほひとたびもあはでしぬべきが、いとかなしさのあまりによまれたる歌なり（こゝちれいならずはべりける比、人のもとにつかはしけると、後拾遺集にみえたり）そのとき其かなしさの一向なるにまかせられなば、必しひてもよびにやらるべし、しかこの人をよびにやりてなめしく（無礼）おもはれん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、その悲しさの一向なるをなぐさめ、よびにもやらでやまれたる也○おほよそ、わがゆかれもすべき身ならばこそなめしかるべけれ、今はとおぼゆる病にふしては、人をよびよせむもさすがなるまじき理なれば、たれも〱必

おもひまどふべきに、このおもとの、しか悲しさはひたふるながら、猶人はよびにもやられざりけん、いとも〳〵あはれなる心づかひ也かし　紫式部が日記をみしに、人の哥のことゞもこれかれいはれたる中に、和泉式ﾛは實のえたる哥よみにこそはべらざンめれ、くちにまかせたることゞもに、かならず目とまることゞもよみうかへはべりとかゝれたるをおもふに、はやその比まことの哥よりも、哥のおもてをきそひけん事しるし、和泉式ﾛは、ひとりこの道のこゝろをやえられたりけん、すべて哥のよみざまことをこひねがはれしとおぼゆ、むらさき式ﾛはふみかくことこそたぐひなかりけれ、哥はこの式部にはいたくおとれるをや

紫　式　部

めぐりあひてみしや（タカ）それ（カ）。ともわかぬまに雲がくれにし（テシマウタ）よはの月かな（デモアルﾌカナ）

わらは友だちに年へてゆきあへりしかば、かほもさだかにみさだめぬを、をりしもあれ月の雲がくるゝとゝもに、あはたゝしくわかれぬれば、年比のことゞもゝかたらはざりしが、いとあへなさのあまりによまれたる歌なり、其時そのあへなさの一向なるにまかせられなば、必しひても引とゞめらるべし、しかしひて引とゞめてめざましうおもはれん、はたいと心うかるべきが故に、かくこの哥とよみ出て、そのあへなさの一向なるをなぐさめ、ひきもとゞめでやまれたる也○おほよそ、つねにもあひみる中ならばこそおこがましかるべけれ、わらはのほどより年比あはで、かくゆくりなく（不意）ゆきあひし人は引とゞめむもめざましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このおもとの、しかあへなさは一向ながら、なほひきもとゞめられざりけん、いとも

〳〵ふかきこゝろもちゐなりかし

大貳三位

ありま山ゐなのさゝはらかぜふけばいでそよ人をわすれやはする

男の、おのれかれ〴〵なるはいはで、ひとへにわがわすれたるがごといふが、いとねたさのあまりによまれたる哥なり、其とき其ねたさの一向なるにまかせられなば、必そのとがを糺さるべし、しかそのとがをたゞしてこち〴〵しく思はれん、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみ出て、そのねたさの一向なるをなぐさめ、そのとがもたゞさでやまれたる也○おほよそ、ことさらに人のとがをたゞさむこそうたてもあるべけれ、おのがとがをいひまぎらさむとする人は、糺さむもひがことなるまじきことわりなれば、誰も〳〵必おもひまどふべきに、このおもとの、しかねたさは一向ながら、なほとがをもたゞされざりけん、いとも〳〵めでたきこゝろざま也かし

赤染衛門

やすらはでねなましものをさよふけてかたふくまでのつきをみしかな

さばかりたのめたまひしゆゑに、さりともとやすらひて、つひに月のかたふくまでまたせ給ひしが、わが身のうへならねども、いとねたうかたはらいたさの餘りにかはりよめる歌なり　これは、はらからなる

女に、中關白たのめて來たまはざりしつとめて、その女にかはりてよめるよし、後拾遺集にみえたり、かはりてよむ哥の事は、天智帝の大御哥、元輔が哥などのところにくはしくいへるがごとく、まことの哥なり　其時其かたはらいたさの一向なるにまかせられなば、必このはらからをしていたくうらますべし、しかうらませて、關白殿の此女をはしたなくおぼしなりたらんに、もとわがすゝめによりてかくなりぬなどおもはれん、はたいとをしく心ぐるしかるべきが故に、かく此哥とかはりよみてそのかたはらいたさの一向なるをなぐさめ、此はらからをしてうらませもせでやまれたる也○おほよそ、よしなき人をうらませんこそうたてもあるべけれ、かく人のうへながらねたきまで僞りたる人は、うらませむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このおもとの、しかかたはらいたさは一向ながら、猶このはらからをしてうらませもせられざりけん、いとも〳〵めでたきこゝろづかひなりかし

小式部内侍

おほえ山いく野のみちのとほければまだふみもみずあまのはしだて

これまで母の和泉式卩、ひとたびもよみてとらせられつることもなきに、定頼卿のさもいふかひなげにのたまふが、いといきどほろしさのあまりによまれたる歌なり　金葉集に、和泉式卩、保昌にぐして丹後のくにゝはべりける比、都に哥合のありけるに、小式卩内侍哥よみにとられてはべりけるを、中納言定頼、つぼねのかたにまうできて、哥はいかゞせさせ給ふ、丹後へは人つかはしけんや、つかひはまうでこずや、いかにこゝろもとなく、おぼすらんなどたはふれてたちけるを、引とゞめて

よめるとあり、小式部あまりに哥よくよみければ母のよみてとらするならむと、みな人うたがひつとみえたり、もとよりさにもあらで、さばかり哥よむちからもあるを、たはふれとはいひながら、かゝることをきかれけんこゝち、いかばかりかはねたかりけんそのとき其いきどほろしさの一向なるにまかせられなば、かならずこの虚名をいひことわらるべし、しかいひことわりてなほまことしからずおもはれん、はたいとねたさくはゝるべきか故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのいきどほろしさの一向なるをなぐさめ、いひもことわらでやまれたる也〇おほよそ、はらぎたなくていひまぎらさむこそおこなるべけれ、露ばかりもしかあらぬことは、いひことわらんもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此おもとの、しかいきどほろしさは一向ながら、なほなき名もいひことわられざりけんいとも〳〵めでたき心ざま也かしこの哥もと、いきどほりをなぐさめられたる哥なれど、表はたゞ、そこのおほせらるゝごとく、遠き所のことなれば、母よりはいまだふみもまいらず、いと心もとなうはべりとばかりいはれたるやう也、これかみつ世の人の哥のよみ所なり、成元が、かみつよをたふとび、この道をのぶる事、詞のふるめかしきをこのむにはあらず、これらは中比の哥にして、道もいにしへにたがはず、よみ所もかみつよにたがはず、しかも詞はふるめかしくもあらぬをみるべし、まことの哥にして、よみ所もかゝる哥、まことにいとまれなるもの也、さらに詞の新古をいふにあらず、哥のよしあしをいふにもあらず、まことの哥にして、よみ所かくだにあらば、いつのよの哥をかおとれりとはいふべき

伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重ざくら　けふこゝのへににほひぬるかな

今はふりぬる都のさくらなれば、すさむる人もあらざゝめるを、けふこのおまへに來て、かく時にあひぬる此さくらの心の、いかにうれしくおもだゝしかるらんと、いとうらやましさのあまり

によまれたる哥なり　この哥は詞花集にいでゝ、一条院の御時、ならの八重ざくらを人の奉りける、其をりおまへにはべりければ、その花をだいにて哥よめとおほせごとありければとあり、さればまことの哥にはあらぬやうなれど、宮づかへするものゝこゝろのつねにて、いかでさいはひをえてしがなとのみおもふものなれば、このおほせごとにつけて、こゝろをなぐさめられたりとみゆ、おほせごとゝいひ、題ありといひ、まことならずと人やみんとて、つばらにことわる也
そのとき其うらやましさの一向なるにまかせられなば、必しひて御けしきをもとりつべし、しかしひて御けしきとりて、あさましくおぼしめされん、はたいとなか〳〵なるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、その時めくがうらやましさの一向なるをなぐさめ、しひては御けしきをもとらでやまれたるなり○おほよそ、ことさらにへつらひなどせんこそめざましかるべけれ、御けしきにかなはんやうにみやづかへせんは、おこなりともいふまじきことわりなれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此おもとの、しか此さくらが時をえしうらやましさは一向ながら、猶しひては御けしきをもとられざりけん、いとも〳〵めでたき心づかひ也かし

清少納言

よをこめて鳥のそらねははかる（デダマス）ともよに（ヨモヤ）あふさかのせきはゆるさじ（スマイ）

よふかく歸り給ひしを、心あさくはおもはれじと、かの函谷（カンコク）の關にならひ、鳥のねにことよせてわれをはからむとし給ふが、いとねたさのあまりによまれたる歌なり　行成卿よふかくかへり給ひて、鳥のねにもよほされてといひおこせ給ひし時の哥なり、後拾遺のこと書をみるべし　そのとき其ねたさの一向なるにまかせられなば、必その罪を糺（タヾ）さるべし、し

かその罪をたゞしてこゝち〴〵しくおぼさん、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのねたさの一向なるをなぐさめ、罪もたゞさでやまれたる也○おほよそ、まこと僞さだかならぬにこそはしたなかるべけれ、かくしるき僞は、たゞさむにためらふべくもあらぬ理なれば、誰も〳〵必おもひまどふべきに、このおもとの、しかねたさは一向ながら、なほ僞はたゞしもせられざりけん、いとも〳〵なつかしき心ざま也かし

左京大夫道雅

今はたゞおもひたえなん（テシマハウ）とばかりを人づてならで（デナシニ）いふよしもがな（ナドモアッテホシイヿカナ）

齋宮密通のことあらはれて、今はおもひ絶むより外なきに、それをだにせめては口づからいひて、おもひ出にせまほしけれど、なほさばかりのこともかなはずなりぬるが、いとわびしさのあまりによみ給へる哥なり、そのとき其侘しさの一向なるにまかせ給はゞ、かならずひがわざもせらるべし、しかひがわざして、齋宮の御ためさへいとゞあしからん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのわびしさの一向なるをなぐさめ、ひがわざもせでやみ給ひしなり○おほよそ、おしなへたらんわびしさにこそさがなかるべけれ、かばかりたえて侘しからむには、ひがわざせんもさすがなるまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、こ

の卿の、しかわびしさは一向ながら、猶ひがわざもし給はざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざまなりかし　袋中子に、道雅の三位はいと哥仙にもおはさゞりけれど、齋宮にかよひたまひしほどのは秀哥おほかりしよしみえたり、これこの道のまさしきすぢなれば也、哥まことなりとて、哥のよくよまるゝにはあらねど、よむべき道ありてよめる哥なれば、そのまことに感ぜらるゝゆゑに、秀哥とも沙汰せらるゝなり、哥のおもてにていはゞ、これほどの哥は、まことならぬにいくらもあるべし、たゞまことにうちわびたるあまりに、やむごとなくよまるゝは、かたふきいだす哥のたぐひにはあらぬものなり、これらをもても、此道の心をもえ、哥のまことならぬとまことなるとのけぢめをも、よく〳〵おもひしるべし

權中納言定頼

あさぼらけ　うぢのかは霧たえ〴〵にあらはれわたる瀬々のあじろ木

よのあくるをまちえて、うぢ川にうち出てみるに、川霧ふかく立こめ、さしもみむと思ひつる網代もみえで、いとあへなかりしが、やう〳〵霧のたえまいで來て、瀬々のあじろのみえわたりゆくが、いとおもしろさのあまりによませ給へる歌なり　これは千載集にいでゝ、うぢにまかりてはべりける時よめるとあり、さるはあじろをみにおはしけんとて、かくは注するなり　そのとき其おもしろさの一向なるにまかせ給はゞ、必こゝにひさしくとまらるべし、しかひさしくとまり給ひて、父卿もおほつかなくおぼさん、はたいと心ぐるしかるべきが故に、榮花物語に、この卿は父に孝ありしよししるされたれば、父卿のことのおほつかなくてこそとてかくはいふ也　かくこの哥とよみいでゝ、そのおもしろさの一向なるをなぐさめ給ひ、ひさしくもとまらでやみ給ひしなり○おほよそ、さるまじき所に長居せんこそあさましかるべけれ、かゝる所には、ひさしくとまらむも無下なるまじきことわりなれば、誰も〳〵かな

らずおもひまどふべきに、この卿の、しかおもしろさは一向ながら、猶ひさしくもとまり給はざりけん、いとも／＼めでたき心なりかし　かばかりの人なるに、小式部に、哥の事をたはふれ給ひて人わろかりしをや、されば、ましておしなへたらん人は、ふかきがうへにもふかくこゝろを用うべき事なり

相模

うらみわび(テ)ほさぬ袖だに(サヘ)あるもの(ノ)を(ニ)こひにく(デ)ちなむ(テシマハウ)名こそ(ガナニヨリモ)をしけれ(イコジヤ)

つれなき人のうらめしさに、なみだに朽(朽)ぬべき袖だにあるを、名をさへ戀ゆゑにくたしなんが、いとあさましくわびしきこゝろばえなり、しかあさましさの一向なるをなぐさめられたる歌のやうなれど、これは後拾遺集にいでゝ、永承六年内裡の哥合の歌なれば、まことならぬ哥なり、この哥左にて勝たるよし、榮花物語にみゆめれど、いかゞはせんは　のちの世にては、哥合の判をもて哥よむのりとする事、いとも／＼心えぬこと也、哥合といふ物は、たゞかちまけの沙汰のみもはらなれば、つねの哥ののりとはすべからぬことをや、かゝる詞はきゝよからず、さる詞はよむべからずなど聞ゆるも、みな堪能の人の判詞なること多し、かちまけをもはらとせん時は、げにさもあるべきことなれど、それは哥合のうへのことゝおもひわきてこそあらまほしけれまことの哥ならんには、なにの詞かはいふまじからん、なほかゝるよしは、おほむねをあはせてこゝろえわくべし

大僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山ざくらは(ヨ)なよりほかにしるひとも(ナドモ)なし(イホドニ)

大峯にて、み山木どもの中に、ゆくりなきさくらのさきたるをみ給ひて、このさくらだに、わが

おもふごとくわれを又あはれともおもはずは、さらぬだにわびしきこの山中の、いとゞたつきもなかるべきが、いと心ぼそさのあまりによませ給へる哥なり、その時其心ぼそさの一向なるにまかせ給はゞ必おこなひさしても出給ふべし、しかおこなひさし給ひて罷えたまはむ、はたいとかしこかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝそのこゝろ細さの一向なるをなぐさめ給ひ、おこなひさしてもいで給はでやみ給ひしなり○おほよそ、おしなへたるこゝろぼそさにこそむげなるべけれ、かゝる山中の心細さには、かへりいでむもさすがなるまじきことわりなればたれも〳〵必おもひ惑ふべきに、この僧正の、しかこゝろぼそさは一向ながら、なほおこひさしてもいで給はざりけん、いとも〳〵めでたき御こゝろもちゐ也かし（うべこそよゝの護持まいらせたまひて、いとたふとくおはしましけれ）

周防内侍

春のよのゆめばかりなる（ホドナ）たまくらにかひなく（デ）たゝむ（ウ）名こそ（ガナニヨリモ）をしけれ（イコジヤ）

まくらもがなといひしを聞て、これをとて、みすの下よりかひなをさしいれたまへる、（これは大納言忠家なり、くはしくは千載集のことがきをみるべし）まめやかなるやうにてあだ〳〵しきふるまひなるが、いとねたさのあまりによみたまへる歌なり、その時そのねたさのひたふるなるにまかせられなば、かならずあらはにこれをいなまるべし、しかあらはにこれをいなみてはしたなめられん、はたいと心うかるべきが故に、

かくこの哥とよみいで給ひて、（すなはちこの哥のよみざま、此大納言のあだ〳〵しきふるまひをにくみて、これをいなみたまへるこゝろばえなり）其ねたさの一向なるをなぐさめ、あらはにもいなみずてやみたまへるなり○おほよそ、まめやかなる志をいなまむこそあさましかるべけれ、さしもあだめきすき〴〵しげなる志は、あらはにいなまむもめざましかるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この内侍の、しかねたさはひたふるながら、なほあらはにはいなみ給はざりけん、いとも〳〵なつかしきこゝろざまなりかし

三條院

こゝろにもあらでうき世にながらへば（タラバ）こひしかるべき（ウアリソウナ）よはの月かな（デモアルヿカナ）

御不豫いみじければ、とても世にながくもおはしますまじくおぼしなりて、御位をさらむとおぼしをきてたれど、もしおぼしかけず大御命もながらへさせ給はゞ、この禁中のこよひの月のもと、いかにこひしくおぼし出られんと、いとなごりをしさのあまりにあそばしゝ大御哥なり（御位さらせ給ひてより、御目を御覧ぜざりけん、この大御哥は前兆めきてきこゆ）その時其なごりをしくおぼす大御心の一向なるにまかせたまはば、必御位におぼしとまらせたまふべし、しかおぼしとまらせ給ひて世のなかのなげきならん、（御不豫にのみおはしませば、なにごとも大御心ならずおこたらせたまふべければ、かくはいふなり）はたいと大御心ぐるしくおぼしめしゝが故に、かく此大御哥とよみ出させ給ひて、そのなごりをしくおぼす大御心のひたふるなるをなぐさめさせ給ひ、御位にもお

ぼしとまらでやませたまひし也○おほよそ、人よりしりぞけむをすまはむこそおこなるべけれ、大御心づからさらんとおぼしなりし御位におぼしとまらむは、わりなしともいふまじき理なればいづれも〱必おぼしまどふべきことわりなるに、この帝の、しかなごりをしくおぼす大御心は一向ながら、猶御位にはおぼしもとまりたまはざりけん、かけまくもかしこき大御心也かし

能因法師

あらしふくみむろの山のもみぢ葉はたつたの川のにしきなりけり（デアルコトジヤ）

あらしのふく三諸山にてみれば、たゞみだれてちる紅葉なれど、龍田川にてはひとへに錦とみゆるがいとこゝろえかたきこゝろばえなり　これは、おなじものといへども、そのみる所によりては、あやまたるべきことを思はれたるなり、題詠とても、かくまことの哥のごとくこゝろしてよむべし　それしか心えがたさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは後拾遺集にいでゝ、永承四年内裏の哥合の歌なれば、まことの哥にはあらず　この大とこは、白河の關の哥をよみて、奥州下向のよしを風聞したるなど、哥はまことならぬは道なしといふこゝろは、ふかくえられたりけんかし、さればこそ、なはしろ水にせきくだせとよみて、雨もふりけらしかくこの道をわきまへられたりし人なれば、この哥などは、いとめでたくよみえられたりけれど、みづからはさしもおもはれざりけん事、かの白河の關の哥のゆゑをもてみれば、いとしるきなり、すべて題詠は、たゞまことなる哥よまむのいとなみばかりなれば、此哥のことく、たぐひなくいできたるも、心あらん人はおもふ所もあるべし、されども題詠はもと階梯なれば、よみならはむにはかやうにうるはしくこゝろを用うべきながら、此哥などは、詞づくりのめでたき也と知べし、かのなはしろ水にといふ哥は、これらをくらぶれば、いたくおとりざまなるやうなれど、さる感動のありけんこと、かへす〱おほかたこの道は、ことばづくりのめでたきに

はよらざる事をよく弁ふべし

良暹法師

さびしさにやどをたちいでゝながむればいづくもおなじあきのゆふぐれ

さびしさのなぐさむやとて、宿をいでゝみるに猶いづくもひとつ秋の夕暮なれば、なぐさむべきよしもなきが、いとわびしさの餘りによまれたる哥なり、そのとき其わびしさの一向なるにまかせられなば、必うちもなかれつべし、しかうちなきて猶なぐさまざらん、はたいとあへなかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、其わびしさの一向なるをなぐさめ、うちもなかずてやまれたる也○おほよそ、なぐさむかたもあらむにこそいふかひなかるべけれ、かくせんすべのたえてなからんには、うちなかんもむげなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この大との、しかわびしさは一向ながら、なほうちもなかれざりけん、いとも〳〵あはれなる心ざま也かし

大納言經信

ゆふされば門田のいな葉音づれてあしのまろやにあきかぜぞふく

ひるまはさすが人めもみゆれど、夕暮になれば、門田の稲葉に秋風のみ音づるゝが、いとさびし

さのあまりによみ給へゝる哥なり、これは金葉集に出て、師賢ノ朝臣のうめづの山ざとに人々まかりて、田家ノ秋風といふ事をよめるとあり、されば是は題詠なれど、惠慶法師の哥にていへるがごとく、時所によりていだされたる題とおぼゆれば、だいにこそよらせたまへれ、情はなほまことなりかし その時そのさびしさの一向なるにまかせ給はゞ、必うちもなかれ給ふべし、しか打なき給ひて猶なぐさまざらん、はたいとあへなかるべきが故に、かくこの哥とよみいでゝ、そのさびしさの一向なるをなぐさめ給ひ、うちもなかずてやみ給ひしなり○おほよそ、おしなへたるさびしさにこそいふかひなかるべけれ、かゝる山べのさとの秋の夕ぐれは、うちなかむもさすがなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、此卿の、しかさびしさは一向ながら、なほうちもなき給はざりけん、いとも〳〵哀なる御心なりかし

祐子内親王ノ家ノ紀伊

音にきくたかしの濱のあだなみはかけじや（マイヤノ）袖（ガ）のぬれもこそすれ（ナドモスレバワルイニ）

音にたかく聞えてあだなりといふ人なれば、ゆく末かならずうきめみるべきに、いとまめやかにのたまふが、いと心ぐるしさのあまりによまれたる哥なり、これは金葉集にいでゝ、堀川院の御とき、艶書合によめる、中納言俊忠、人しれぬおもひありそのうら風に浪のよるこそいはまほしけれ、返し、此哥也、艶書合は、おほせごとにて、かきかはしよみかはされたるなれば、まことならずとはいへども、この仰ごとにつけて、おもふこゝろをなぐさめられけんもはかりがたければ、なほまことの哥として注せり そのとき其心ぐるしさの一向なるにまかせられなば、必あらはにうちいなまるべし、しかあらはにいなみてははしたなくおぼさむ、はたいと心うかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、その心

ぐるしさの一向なるをなぐさめ、あらはにもいなまでやまれたる也○おほよそ、おしなへたるあだ〳〵しさをこそいとをしくもあるべけれ、かく名だかく聞ゆるあだ人は、いなまむもひがことなるまじきことわりなれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、このおもとの、しかこゝろぐるしさはひたふるながら、なほあらはにもいなまれざりけん、いとも〳〵なつかしきこゝろざまなりかし

權中納言匡房

たかさごのをのへのさくらさきにけり（ガイテシマウタヿジヤ）　外山のかすみたゝずもあらなん（ニナドモアッテクレイ）

○○○○○

をのへのさくら咲にたれば、とほながらさやかにみまほしきを、外山にたてる霞のいとふかくて、はなをへだてたるが、いとねたさのあまりによみ給へる哥なり、これは後拾遺集にいでゝ、うちのおほいまうちぎみの家にて、人々さけたうべて哥よみはべりけるに、遙に山の櫻を望むといふ事をよめるとあれば、題詠なれど、このことがきのかきざまをおもへば、この時はるかに山のさくらのみえしより、此だいをまうけられて、人々よみ給へりとおぼしければ、まことの哥として注せるなり　その時其ねたさの一向なるにまかせ給はゞ、必よしなく霞のうらみはてらるべし、しか霞をうらみはてゝ、かへりてわがわりなきに成なん、はたいと中〳〵なるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのねたさの一向なるをなぐさめ給ひ、霞はうらみもはてゞやみ給ひしなり○おほよそ、とがなからんをうらみはてむこそさがなかるべけれ、かばかり人のみまくほりするさくらをかくす霞は、

うらみはてむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、この卿の、しかねたさは一向ながら、なほうらみもはて給はざりけん、いとも〳〵めでたき御心ざまなりかし

源俊頼朝臣

うかりける人をはつ瀬の山おろしよはげしかれとはいのらぬものを

これまでいと心づよくて和まぬ人なれば、おもひなほれとこそ泊瀬にはねぎたてまつりつれ、そのうへ今一きははげしくなれといのり申つるがごとく、いとゞつらさのまさりたるが、いとわびしさに、この山の菩薩の御心さへ、つらくおぼゆるまでなれるこゝろばえなり、しかわびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集にいでゝ、権中納言俊忠の家に、戀の十首の歌よみはべりける時、祈不逢戀といへる心をとあれば、まさしくまことの哥にはあらず　まへにもいへるがごとく、題詠とても實事にあたりてよみたらんは、なほまことの哥なるべけれど、かうやうなるは、たしかなるしるしもなければ、まことならずとはさだむる也、この朝臣は、人よりことにいにしへをねがはれたる哥のよみざまなれば、いかでかまことならぬをみづからはよしとおもはるべき、さばかりの哥仙なれば、いみじき哥多く聞ゆるを、定家卿、こゝにもこの哥をいれ給ひ、近來秀哥といふものにも、この哥をいたくめで給へる、心えがたき事也

藤原基俊

ちぎりおきしさせもが露をいのちにて　あはれことしのあきもいぬめり

法性寺のおほきおとゞ（忠通公なり）に、わが子の僧都光覺が、維摩會の講師の請、たひ〳〵もれたるをうらみ申けるに、しめぢが原と（われよのなかにあらんかぎりはといふ觀音の御哥によりて、たのめと仰られたる也）おほせられしを、うちたのみてありしが、れい九月に講師の沙汰ある事なるに、ことしも又もれつとおぼえて、秋もはやくれゆくが、いとわびしさのあまりによまれたる哥なり、（これらはまことの哥の中にも、いといたくあはれふかくこそ）その時その侘しさの一向なるにまかせられなば、必このおほきおとゞをば、あらはにうらみそし（殺）奉らるべし、しかうらみそしたてまつりてなめしからん、（無礼）はたいとかしこかるべきがゆゑに、かくこの哥とよみ出て、そのわびしさの一向なるをなぐさめ、あらはにはうらみもそしたてまつらでやまれたる也。おほよそ、一時のいきどほりをいはむこそはしたなかるべけれ、かくたひ〳〵あへなかりしは、あらはにうらみそせんもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このぬしの、しかわびしさは一向ながら、なほあらはにはうらみもそしたてまつられざりけん、いとも〳〵あはれふかき心ざま也かし

法性寺入道前關白太政大臣

わたのはらこぎいでゝみれば久かたの雲ゐにまがふ。おきつしらなみ

うなばらに舟漕いでゝみるに、たゞ大そらと浪とひとつにて、ゆく末のたづきもしられず、いと

心ぼそき御こゝろばえなり　此御哥、たゞ眺望ばかりの事にのみ古來とき來たれど、うち出てみればとあらばこそあれ、こぎいでゝみればとあるは、こゝろあるべきことなれば、今かくはいふなり、なほ附錄をあはせてみるべし　しかこゝろぼそさの一向なるをなぐさめさせ給へりし御哥のやうなれど、これは詞花集に次いでゝ、新院位におはしましゝ時、海上ノ眺望といふ事をよませ給ひけるによめるとあれば、うつなくまことならぬ御哥なり

崇德院

せをはやみいはにせかるゝたき川の　われてもすゑにあはむとぞ思ふ

○ふかく大御心をつくし給へども、あさましきまでこゝろづよき女なれば、今はおぼし捨させ給はむより外なきが、いとわびしさの餘りにあそばしゝ大御哥也、其時其侘しくおぼす大御心の一向なるにまかせ給はゞ、必世ははかなきものにおぼしはてつべし、しか世をはかなき物におぼしはてゝ、いみじき事もいでこん、はたいと御心ぐるしくおぼしめしゝが故に、かく此大御哥とよみ出させ給ひて、そのおぼし捨がたくおぼす大御心の一向なるをなぐさめさせ給ひ、世をはかなくもおぼしはてゞやませ給ひしなり○おほよそ、おしなへたるわびしさにこそ無下なるべけれ、かばかり大御心をつくし給ふに、猶心とけぬわびしさには、世をはかなくおぼしはてむもさすがなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、この帝のしかわびしくおぼす大御心は一

向におはしながら、猶よをはかなくもおぼしはてさせ給はざりけん、いとも／＼めでたしとは、なか／＼かしこき大御心なりかし

源（關路）兼昌

あはぢしまかよふ千鳥のなくこゑにいく夜ねざめぬすまのせきもり

すまのわたりに旅ねしたるに、千鳥の物がなしげになくこゑにめをさまされて、いといひしらずあはれなれば、この關守は、よる／＼かくめをさまさるらん侘しさ、いかばかりならんと、あはれにおもひやられたる心ばえなり、しかね覺のわびしさ一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは金葉集にいでゝ、關路ノ千鳥といへる事をよめるとあれば、まことならぬ哥也

左京大夫顯輔

秋かぜにたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ

月はくまなきこそあはれなれとかねておもひしに、秋かぜのふきたなびかす雲のひまよりもるゝ月は、雲にはやさるゝ心のなしにて、くまなきよりもひとときはかげさやかにて、おもほえずいとあはれなる心ばえなり、しかゆくりなさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは新古今集にいでゝ、崇德院に百首の歌たてまつりける時とあれば、まことの歌にあらず　されどこの哥は、いと

まことしやかにめでたし、もし百首のうちの題ながら、そのをりにかゝる雲間の月をみてこそとはおほゆれど、さるしるしもなければいかゞはせんは

待賢門院堀河

ながゝらんこゝろもしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ

男のこゝろはながくもあるべけれど、さるわきまへもしあへず、けさの別のかなしさに、たゞかくながらもわかれはてしものゝやうに、すゞろにものゝおもはるゝが、我ながらいとわりなくおぼゆる心ばえ也、しか別れし悲しさ一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集にいでゝ、百首の歌奉りける時、戀の心をよめるとあれば、まことの哥にあらず

後徳大寺左大臣

ほとゝぎすなきつるかたをながむればたゞあり明のつきぞのこれる

たゞ一聲なきしなごりのおほつかなさに、いづかたにかゆきけんとながむる空に、有明の月のみのこりて、ほとゝぎすはゆきがたもなきあへなさをよませたまへる也、しかあへなさの一向なるをなぐさめさせ給ひし御哥のやうなれど、これは千載集にいでゝ、曉聞郭公といへる心をよみはべりけるとあれば、まことならぬ御哥なり されどこれもいとまことしやかなり、此題の折にかなへりししるしもなきぞ口をしきや

道因法師

おもひわび　さても（タニツレテ）いのちはあるものを（ジヤノニ）うきにたへぬはなみだなりけり（デハアルコトジヤゾ）

かばかりおもひわぶるには、命はたふ（堪）まじかるべきを、それはかへりてさもなきに、涙のうきに堪ずしてもろくこぼるゝが、我ながらいとわりなさのあまりによまれたる哥なり、（これは千載集にいでゝ題しらず也）道因は、従五位ノ下右馬ノ助敦頼といひし人なり、しか在俗のとき、つれなかりし女に思ひ侘てぞよまれけんかしその時其わりなさの一向なるにまかせられなば、必このつらき女のうらみらるべし、しかうらみていよ〳〵うとまれなん、はたいとわびしかるべきが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのわりなさの一向なるをなぐさめ、女もうらみでやまれたる也

○おほよそ、おしなへたるつらさにこそはしたなかるべけれ、かくたぐひなくつらき女は、うらみむもさすがなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきにこのぬしの、しかわりなさは一向ながら、猶女をもうらみられざりけん、いとも〳〵なつかしき心ざま也かし

皇大后宮（ママ）太夫ノ（ママ）俊成

よのなかよ　道こそ（ハナニヨリモ）　なけれ（イツデアツタレ）　おもひいるゝ　山（コノ）のおくにも（デ）　しかぞ（コノヤウニナニカシラズ）　なくなる（ワイ）

世中も、のかれだにせばうさもあらじとおもひしに、なほのがるべき道はなきにこそ、この山の奥にもしかなくからは、（鹿に尓（シカ）といふ事をよせ給へる也）かくおもひ入しもかひなくいとわびしき心ばえなり、しかわびしさの一向なるをなぐさめ給ひし哥のやうなれど、これは千載集にいりて、述懐の百首の哥

よみはべりける時、鹿の哥とてよめるとあれば、まことの歌にはあらず　これは百首の中といへども、述懐の百首なれば、なべての題詠とはひとしからねども、おもひいる山の奥とあるぞ、實況とはいひがたきしるしなるべき、この卿は、こと人には同じからねば、此哥をしもかきたまはすともと、いとも／＼くちをし

藤原清輔朝臣

ながらへば（タラバ）また此ごろ（ガ）やしのばれん（レルデアロウカイ）　うしとみしよ（タ）ぞ　いまは（ガナニカシラズ）こひしき（イゾ）

かくてありへば、かならず又この比の忍ばるべく、さしもうしとみつゝ過こし世の、今と成てはかく戀しければ、今いかにうくとも、さのみはなげくまじきことわりに、いとまつろひ（順）がたさのあまりによまれたる哥也、その時其まつろひがたさの一向なるにまかせられなば、必すゞろに今の世のなげかるべし、しかすゞろに今のよをなげきて、猶なぐさむ方もなからん、はたいと物ぐるほしかるべきがゆゑに、かくこの哥とよみ出て、そのまつろひがたさの一向なるをなぐさめ、すゞろにもなけかでやまれたる也○おほよそ、おしなへたるうさにこそ無下なるべけれ、かくなぐさめむよしなきには、すゞろになげかむもさすがなるまじき理なれば、たれも／＼必おもひまどふべきに、此朝臣の、しかまつろひがたさはひたふるながら、猶すゞろにも今をなげかれざりけん、いとも／＼めでたき心づかひなりかし

俊惠法師

よもすがらものおもふころはあけやらぬ閨のひまさへつれなかりけり

よもすがら物思へばいとくるしければ、夜だにとく明よとおもふに、大かた人のつれなきのみならず、夜さへつれなく明やらぬが、いとくるしく侘しき心ばえなり、しかわびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集にいでゝ、戀の哥とてよめるとあり、在俗のときの哥かともおもへど、かやうのこと書は題詠の例なれば、これもまことならぬ哥なるべし　この大とこも、いといみじき哥よみなれば、この哥なども、まことにふかくおもひいられてあはれながら、なほこれならずともとおもふに、いとくちをし

西行法師

なげゝとて月やはものをおもはする。かこちがほなるわがなみだかな

人こそわれに物思はすれ、月はなにの心もなきに、月みれば心すみて物がなしくなるより、月のとがのごと、月にむかひてこぼるゝ涙の、我ながらいとわりなくおぼゆる心ばえなり、しかわりなさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、千載集にいでゝ、月ノ前ノ戀といへる心をよめるとあれば、まことならぬ哥にて、在俗の時の哥にはあらざるべし　この大とこなどは、ことに此世にはすぐれたりしこと、八雲御抄などにもみえたり、げによみざま、もはらいにしへのまことをこひねがはれたり、しかるをこの題詠をしもかゝせたまへるいと口をし

寂蓮法師

むらさめのつゆもまだひぬまきの葉にきりたちのぼるあきの夕ぐれ。

一トむらふり過る雨なれば、露もいとゝくかはくべきに、それだにとくはかはかぬばかりなる深山なるに、霧さへたちのぼりて、しめりはてたる秋のゆふぐれの、えもいはずうらさびしきこゝろばえ也、しかうらさびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは新古今集にいでゝ、五十首の哥たてまつりける時とあれば、まことの哥にはあらず これは、後のよに三夕などいひて、めでくつがへる哥なり、げにいと幽玄にあはれなれど、まことの哥にあらぬをや、ことにかやうなる歌は、題詠をよみぬきたる人の、詞づくりのたくみなるよりなりおほせたる哥なれば、なへての人のをよぶべきことにはあらねど、たとひ題詠とても、かゝるすぢをむねとこゝろえたらんには、この道のほい、つひにこゝろえむ世あるまじきなり

皇嘉門院別當

なには江のあしのかりねのひとよゆゑ身をつくしてやこひわたるべき

なにはにて、たゞ一夜かりねせし人なれば、もとよりおほつかなきことにてはかなきを、それがわすれがたくて、かく身をつくすまでこひわたるが、いとあへなうわびしき心ばえなり、しかわびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集にいでゝ、攝政、右大臣の時、家の哥合に、旅宿ニ逢戀といへる心をよめるとあれば、うつなくまことならぬ哥なり よみがたき題なれば、かくのどかによみなされたるこそいみじけれ、この道のほいには、なにかはいみじかるべき、此ころかうやうのことをかしこき事にせられたる沙汰、ものにもみゆれば、なほさるすぢをばめでたまひしにや、千載にもいり、こゝにもとりいでさせ給へり

式子內親王

たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする

命も今のほどにたえなば絶はてゝよ、もしながらへば、忍ぶる心つひによわりて、必色にも顯はれつべし、さてはいとゆゝしきこともいでくべければ、おのが御心ながら、しのび給はむことのよわらざらんことは、いとおぼつかなくおぼししづませ給へる御心ばえなり、しかおほつかなさの一向なるをなぐさめさせ給ひし御哥のやうなれど、これは新古今集にいでゝ、百首の哥の中に、忍戀のこゝろをとあれば、まことならぬ御哥なり（されど、いとも〳〵あはれによみなさせ給へれば、もし百首の中ながら、その比の御身のうへに、かゝる御しのびごとやおはしましけんともおぼゆれど、しるしなきをいかゞはせんは）

殷富門院大輔

みせばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれしいろはかはらず

みせつる事もなきゆゑに、かくともしらぬはことはりながら、雄嶋にすみてあさりする蜑が袖も、ぬれにぬるゝことはひとしけれど、それはなほわが袖のごとく色はかはらぬを、かばかりの思ひとも人のしらぬ故に、かくつれなくのみあめれど、みせむもはしたなさに、いといたう思ひわびたる心ばえなり、しかわびしさの一向なるをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集にい

でゝ、哥合しはべりける時、戀の歌とてよめるとあれば、まことの哥にあらず

後京極攝政前大政大臣

きりぎりすなくや霜よのさむしろにころもかたしきひとりかもねむ

秋ふかき霜よの床の、いとすさまじくてあかさむやうもなきに、つれなくとはぬ人はいとうらめしながら、うらみむもはしたなきが故に、衣をかたしきて、たゞひとりねむより外なきことかと、その人のいとうらめしき御心ばえなり、しかうらめしさの一向なるをなぐさめ給へりし御哥のやうなれど、これは新古今集にいでゝ、百首のうたたてまつりし時とあれば、まことならぬ御哥なるべし　このおとゞは、まことに天性の堪能におはしければ、この御哥なども、まことならずこそあれ、いといみじき御よみざまなり、されどもさばかりの堪能におはしましゝを、たとひ表はかばかりならずともと、いとも〳〵くちをしとは猶おろか也

二條院讃岐

わが袖はしほひにみえぬ沖のいしの人こそしらねかはくまもなし

わが袖のけしきは人こそしらね、かはく間はしばらくもなきばかり物思ひわたれども、かゝりといはむは中々なれば、いたくおもひわびたる心ばえ也、しかわびしさをなぐさめられたる哥のやうなれど、これは千載集に出て、寄石戀といへるこゝろをとあれば、まことの哥にはあらず　これらいとめでたきに、なか〳〵くちをし

（闕畫）鎌倉右大臣

よのなかはつねにもがもな（ナドモアツテホシイナア）　なぎさ（チ）こぐあまのをぶねの（ガ）つなでかなしも（イソサテモ）

世中の常なきといふ事なからましかは、いつまでもかくてみましものをとおぼすまで、なぎさ漕ゆくあま小舟の、綱手ひきはえてゆくけしきが、いとおかしさのあまりによませたまへる也このつなでかなしもといふ詞は、みちのくはいづくはあれどゝいふ古哥によらせ給へり、されどこれは、（闕畫）鎌倉のうみづらのけしきのおかしさによませ給へるにて、やがて陸奥にすがりたまへるにはあらず、さてこの詞、たゞつなでのみおもしろしとの心にあらず、すべて古人は、一をもて十をさとし、かたはしをいひて中をさとす事つねなり、かみつよの哥どもをば、くはしくみしらん人ぞおもひしるべき、大かた物事の活たるさまは、詞にのぶべきよしなきものなれば、いにしへの人は、すべて此こゝろをえて哥はよみたり、上の小式部内侍の哥の下にいはゆる、かみつよのよみ所といふはこれなり、さればこれらも、この舟の、つなで引はえてゆくさまをもて、その海邊のおもしろさをさとし給ふなり、なほ心うべきは、舟のつなでは、さのみおかしとめでかなしむべきばかりの物にあらぬを、それをしもかなしとのたまひたれば、ましておかしかるべきものゝかなしさは、いかばかりならんとおもはるゝやうによみ給へるなり、すなはちかの本哥にも、上にいづくはあれどゝいはゞ、下は塩がまの浦とばかりうくべきに、つなでかなしもとよみつめられたるをも、よく／＼思ひあはすべし、とにかくに、これひとへに古人のよみ所なり、よみ所しらぬめには、ことやうにこそとて今くはしくいふ也　そのとき共おかしさの一向なるにまかせ給はゞ、かならずひさしくその海邊にとまり給ふべし、しか久しくとまり給ひて、なにごともはしたなからん、はたいとゆゝしかるべくおぼしゝが故に、かく此哥とよみいで給ひて、そのおかしさの一向なるをなぐさめたまひ、久しくもとまらでやませたまひて也○おほよそ、さるまじき所に長ゐしたらんこそさがなかるべけれ、けしきおかしき所には、ひさしくとまらむもむげなるまじき理なれば、たれも／＼必おもひまどふべきに、このおとゞの、しかおかしさは一向な

がら、猶ひさしくもとまり給はざりけん、いとも〳〵めでたき御こゝろざま也かし

參議雅經

みよし野の山のあきかぜさよふけてふるさとさむくころもうつなり

よし野山をふきおろすかぜの、よそよりことにさむきに、しかもさよふけて、このふるさと人の衣うつをきゝて、いかによさむもくるしかるらんをと、いとあはれにいとをしくおもひやられ給ひし心ばえ也（此さむくといふ詞ぞ、少し心ゆかすおぼゆる、この卿は、大かた人にたがへる御口つきにてぞおはしゝ、これらもふるさとさむみとあるべき也）しかいとをしさの一向なるをなぐさめ給ひし哥のやうなれど、これは新古今集にいでゝ、擣衣の心をとあれば、まことならぬ歌なり

前大僧正慈圓

おほけなくうき世のたみにおほふかなわがたつ杣にすみ染のそで

いかめしく、うき世の民におほひ給ふ袖の、いとはづかしさのあまりによませ給へるなり、（天台座主になりて、天が下のものゝ二世安樂をいのらせ給ふことをば、おほふ袖とはよみ給へる也）その時其はづかしさの一向なるにまかせ給はゞ、必座主をもいなみ給ふべし、しか座主をばいなみ給ひて、うへの御けしきにも佛意にもそむき給はん、はたいとかしこくおぼしゝが故に、この御哥とよみ出給ひて、その恥かしさの一向なるをなぐさめ給ひ、

座主をもいなまでやませ給ひしなり○おほよそ、わが徳のいたりてありながら、いなまむこそおこなるべけれ、法徳いたらざる身には、過分の任をいなまむも、めざましかるまじき理なれば、たれも〳〵必思ひまどふべきに、この僧正の、しかはづかしさは一向ながら、なほ座主をもいなみたまはざりけん、いとも〳〵めでたき御心づかひなりかし

入道前太政大臣

はなさそ（チ）ふあらしの庭のゆきならで（デナシニ）ふりゆくものはわが身なりけり（テハアルコトジヤゾ）

さばかりさかりなりし花も、あらしふく庭には、雪とふりゆくがいとをしきに、その雪ならぬわが身も、ありしさかりはすぎて、同じごとふりゆくことの、いとかなしさのあまりによませ給へる御哥なり、これは新勅撰に入て、落花をよみはべりけるとあり、さるはまことにやあらん、まことならずやあらん、わきがたきことがきのさまなり、落花のこゝろを、又落花といふ事をなどあるは、うつなく題詠なれど、これはまことの哥にもぞあるべきとてなん、此本句の御詞づくり、まことの哥にはすこしこゝろゆかねど、此比の詞のつくりざまなればいかゞはせん、そのときそのかなしさの一向なるにまかせ給はゞ、必おいらくのふかくいとはれ給ふべし、しかも老らくをいとひ給ひて、さるかひもなからん、はたいとなげきくはゝるべくおぼししが故に、かく此哥とよみいでゝ、そのかなしさの一向なるをなぐさめ給ひ、老らくもふかくいとはでやみ給ひしなり○おほよそ、さるまじきものをいとはむこそひが〳〵しかるべけれ、ふたゝびとりかへされぬ齢は、いとはむもさすがなるまじき

理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このおほきおとゞの、しかかなしさは一向ながら、猶老らくはふかくもいとひ給はざりけん、いとも〳〵あはれなる御心もちゐ也かし

權中納言定家

こぬ人をまつほのうらのゆふなぎにやくやもしほの身もこがれつゝ

くべからん人をまつにこそあらめ、大かたくまじき人をしもまつ故に、身もこがれ〳〵のみしていとくるしきに、なほまちもたえがたきが、いとわりなくわびしきこゝろばえなり、しかわりなさの一向なるをなぐさめ給へりし御哥のやうなれど、これは新勅撰集にみづからいれさせ給ひて、建保六年内裏ノ歌合にとかゝせたまへれば、まことならぬ御哥なり　されども此哥の御よみざま、まことにいはむかたなくめでたくこそ、これまことの御哥にだにあらはと、かへすがへす口をしくぞおぼゆるや、はじめのいことのやう(ママ)、よせのいとおほきさま、げに〳〵まことならぬ御哥とはおぼえぬばかりにこそ、しか新勅撰にもいれさせ給ひ、こゝにもみづからかゝせたまへるは、このとき、かゝる御なげきのありてにやともおぼゆれど、さるしるしもなきをいかゞはせん、これまことならねど、此御哥をしもかゝせ給ひ、人丸が哥もさるよせ哥をしもとりいでさせ給ひしなど、この卿のめでたき御こゝろみえになん

從二位家隆

かぜそよぐならの小川のゆふぐれはみそぎぞなつのしるしなりける

かぜそよぐ楢のをがはの夕ぐれは、たゞ御祓するばかりが夏といふしるしにて、すべて秋のこゝちして、すゞしさいはむかたなき心ばえなり、しかすゞしさの一向なるをなぐさめたまへる御哥

のやうなれど、これは新勅撰集にいりて、寛喜元年女御入内の御屛風にとあれば、まことの哥にはあらず家隆は末代の人丸にて候なりと、後京極殿の奏し給へりしよし、古今著聞にみゆ、げにまことにあらひあげたるやうにて、いふべきやうなくめでたき御よみざまなり、これら屛風の哥にして、吟するにすゞしきばかりなるは、ひとへに堪能のなす所なるを、これまことなる哥ならば、さらにいかばかりかはとぞおぼゆかし

後鳥羽院

人もをし。ひともうらめし。あぢきなく世をおもふゆゑにものおもふ身は

この御とき、北條といひしをのこ、いわけなき將軍をあづまに申くだし、王威をかろしめたてまつり、さがなきまつりごとゞもありて、王道おとろへ、世の安からぬことの、いと御心ぐるしさのあまりにあそばしゝ大御哥なり、そのとき其御心ぐるしくおぼしめす大御心の一向なるにまかせ給はゞ、必かのをのこを追討もせさせ給ふべし、しか追討せさせ給ひて、おほくの人をそこなはせ給はむ、はたいとゆゝしうおぼしめしゝが故に、かくこの大御哥とよみ出させたまひて、その御こゝろぐるしくおぼす大御心の一向なるをなぐさめさせ給ひ、追討をもせさせ給はでやませ給ひしなり○おほよそ、おしなべたるさがなさにこそめざましかるべけれ、まつりごとをみだり、あめがしたをくるしむる者は、うたむもひがことなるまじき理なれば、たれも〳〵必おもひまどふべきに、このみかどの、しか御心ぐるしさはひたふるにおはしましながら、なほ追討をもせさ

せたまはざりけん、まことにありがたき大御心づかひにおはしましきかし つひにかのをのこのさがなさまさりはてゝ、隠岐國にうつしたてまつりし、いまになみだもさしくまるゝから、大御心のうちいかにおはしましけん、この大御哥をあはせておもふに、追討したまはむにそこなはれん、おほくの人のうれへにかはらせたまひて、さるあさましき國にうつろひおはしましけむ、かけまくもかたじけなきことゞもなりや、さばかり心のまゝになし奉りつれど、つひにあまつ神々のゆるさせ給はで、かのをのこは、そのはて世のしる所なりかし

順徳院

もゝしきやふるき軒端のしのぶにもなほあまりあるむかしなりけり

これまたおなじをのこがさがなきによりて、王道さかりなりしむかしのいと忍ばしうおぼしめしゝあまりにあそばしゝ大御哥なり、これはもゝしきやとあそばしたれば、承久三年、佐渡にうつされさせたまひしよりさきの大御哥なるべし そのとき其むかし忍ばしくおぼす大御心の一向なるにまかせ給はゞ、かならずやがても追討をおほせ給ふべし、しか追討をおほせ給ひて、いよ〳〵あめがしたのみだれとならん、はたいとゆゝしうおぼしめしゝが故に、かく此大御哥とよみいでさせたまひて、その昔しのばしさのひたふるなるをなぐさめさせ給ひ、やがても追討をおほせ給はでやませ給ひしなり○おほよそ、おしなへたるさがなさにこそめざましかるべけれ、かばかり王道をみだるさがなをのこは、うたむもひがことなるまじきことわりなれば、たれも〳〵かならずおもひまどふべきに、この帝の、しかむかしの忍ばしさは一向におはしましながら、なほやがても追討したまはざりけん、いとも〳〵ふかき大御心もちゐ也か

し　されどつひに承久のみだれおこれりしは、まことにさがなさもいたり、かつは一時のくるしみにもかへがたくおぼしなりにけるにか、佐渡にうつし奉りしなど、かくよゝのみかとをはふらせたてまつりけん罪、いづこにかのがるゝ所あらんとぞおぼゆるや、このふたつの大御哥につきて、おもふ所もあれど、いまはさてもらしつ

この百首、はじめにはをさまれるよの大御哥をいだし給ひ、をはりにはみだれたるよの大御哥をしもかゝせ給へるは、黄門のふかき御心ありてのことゝおぼゆ、八雲御抄に、天智帝の大御哥をも、王道おとろへたるをよませ給へりとあそばしゝは、いかにぞや、おほよそ治亂は、いとゆゝしきことなれば、しかはじめをはりにおかせ給ひけんとぞおぼゆる、ふかくおもふ所はあれど、くはしくはかきとりがたければ、なかなかなることをやはとてなん

百人一首燈　下卷　終

文化元年甲子冬

發行所

京都寺町松原下ル町
勝村治右衛門

同　寺町五條上ル町
葛西市郎兵衛

同　三條堺町西入町
出雲寺文治郎

神樂催馬樂燈

全

神樂燈序

ちはやふる神樂のいはやと（岩窟）に神あそひまし〳〵しおほみ時よりつたはりきつる上つ世のことくさのよゝにうつろひてかくらといふうたひものとりもののひきものふきものはうしとりよろひていとかう〳〵しそか中にことの葉くさのさとりかたきふし〳〵おほかめるをおほに見すくしきにたなる世のならはしのいきつかしさにやいまはむかし北邊のうしの其世にかくろひて霜夜のやみにまきれあらせしとまたゝくともし火かゝけつゝてらされしいたつきはやあなたふとこのともし火かゝけつくらむひとのあらましにこゝろすへきはむかしひとの御火しろくたけとあとらへられしはかくらの幽玄のためならすや

福田美楯しるす

神樂催馬樂燈

平安　北邊二世　中臣御杖著

大旨

おほよそ神樂は越前角鹿氣比宮におこれるにや少納言通憲公ヘ神樂本體氣比宮神樂可尋之とみえたる心にくき事なり體源抄云神樂譜ヘ貞觀御時神宴之日被撰定神樂哥若是清著堂御神樂歟云々又云ヘ次朱雀院御時貞信公攝政之間被始御神樂云々又云ヘ朝倉は越前國風俗也筑前誤歟延喜年中に神樂にくはへらる仍朝倉其駒は風俗拍子を打也又云催馬樂笛譜は藤原忠房依延喜聖主之勅譜を作る箏琵琶には中務大輔信明博雅二男譜を作る也云々又云其駒はもと風俗なり然るを一條院御時朝倉其駒は神樂の無下に尾もなきやうなるにとて神樂にうたひ具する也當時は神樂なれとも本體は風俗と習ふ也云々これらをもてなほ今わたくしに考ふるにおほよそ神樂催馬樂の哥は久迩長岡此京のはしめの程の物なりとおほしき也そか中には寧樂以往の哥をとられたるもありまた寧樂人の遷り來てよめるもましれりとみゆ今かくいふゆゑは

神樂篠　此篠はいづこのさゝそ舍人等か腰にさかれるとも岡のさゝ
同杓(杓)　大原やせかゐの水をひさこもて鳥はなくともあそひてゆかむ
催馬樂沢田川　沢田川袖つくはかり淺けれとくにの宮人高はしわたす
同山城　山しろのとはのわたりの爪(瓜)つくり中略なりやしなまし爪(瓜)たつまてに
同難波海　なむはの海漕もてのほる中略今すこしのほれ山崎までに
この沢田川にはあらはに久迩とみえとも岡大原山崎なと皆久迩長岡に近き所々なるをおもふへくまた
催淺綠　淺綠こひはなた中略新京朱雀のしたり柳下略
これはあきらかに此京の朱雀なりまた
催藤生野　藤生野のかたちか原にしめはやしいつきいはひしるく時にあへるも
此香達は山城綴喜郡なりこれらをもて考ふへししかのみならす詞のうへにも久迩以來の所作なるかしるき事とも多し
神弓　よも山のまほりにたのむ梓弓神のたからに今しつるかな
同鉾　よも山の人のまほりにする鉾を神のみまへにいはひつるかな

催夏引　夏引のしら糸中略かたくなにものいふをみなかな下略

これらのかな奈良以往にはかもとのみ讀たりけれはこれらみな久迩以後の人の所作あきらか也また

神榊　霜八度おけともかれぬ榊葉のたちさかゆへき神のきねかも

催鷹山　たか山にたかをはなちあけて中略あへるせなかも

同鈴之川　すゝか川八十瀨のたきを皆人のめつるもしるく時にあへるかも

これらのかもは寧樂以往の例なれは寧樂人のうつり來けるかよめるにもあるへしまた

神篠　さゝのはに雪降つもる冬の夜に豊のあそひをするかたのしさ

同劔　おきつきにすめ神たちをいはひこし心は今そたのしかりける

催美濃山　みの山にしゝに生たる玉かしはとよのあかりにあふかたのしさ

同逢路　あふみちのしのゝをふゝきはやひかすこもち待やせぬらんしのゝをふゝき

同更衣　衣かへせんやさきんたちやわかきぬはのはらしのはら萩の花すりや下略

これらたのししのはらしのはらなと寧樂以往にはたぬししぬぬはらしぬはらなとみな奴を用ふる例なれはこれ寧樂以後の所作なるしるしなりまた

神幣　みてくらはあかにはあらす天にますとよをか姫の宮のみてくら

同杖　此杖はいつこの杖そあめにますとよをか姫の宮のつゑ也
同鉾　このほこはいつくのほこそ天にます豊をかひめの宮のほこなり
同薦枕　こも枕たかせのよとに中畧天にます豊をか姫の贄人そ下略
この豊をか姫と申す御名寧樂以往のものには見えぬ御名なり又
神盃　盃のねたさうれたさや中略よかれするいと／＼ねたし
同吉々利々　あかほしは明星はくはやこゝなりや上下畧
同得錢子　われこそはみれはやうれたさ上下畧
同何爲　いかにせんをしのかも鳥いてゝゆかはおやはありくとさいなめと下畧
此ねたしうれたしよかれくはやいてゝゆかは ふるくはいなは とのみよめり なとの類みな久迩以來の詞なり又
神弓立　たくほのけいそうら崎にかほりあふ上下畧
催大路　あをやきかしなひをみれは上下畧
同道口　みちのくちたけふのこふにわれはありとおやにまた(う)したへ下畧
同老鼠　ほうしにまうさんしにしまうせ上畧
同葦垣　たれか此事をおやにまうよこしまうしゝ上中畧　此家のおとよめおやにまうよこしけらし

中畧われはまうよこしまうさす

同我門　あやめのこほりの大領のまなむすめといへおとむすめといへ上畧

同酒飲　さけをたうへてたへゑうてたふとこりんそまうてくる下畧

これらは假名つかひ今世のさためなりこれは後人のかきたるゆゑにもあるへしまた

神早哥　近衛の御門に巾子おといつ上下畧

同高砂　けささいたるはつ花にあはまし物をさゆり花の上畧

同東屋　おしひらいてきませわれやひとつま下畧

同我門乎　わかかとを止散加宇散ねるをのこ下畧

催刺楠　さしくしはとうまりなゝつありしか中畧あしたとりようさりとり下畧

同石川　いしかはのこまうとにおひをとられて下畧

同淺綠　あさみとりこいはなたそめかけたりとみるまてに下畧

同酒飲　さけをたうへてたへゑうてたふとこりんそまうてくる下畧

同難波海　なむはの海こきもてのほる小舟大ふね下畧

これらは言便のまゝにかけり後の物かたり文なとにこそかくはあれ哥にはのちともよまぬことな

りまして寧樂以往をや又

神千歳　千歳〳〵千歳やちとせの千歳や万歳〳〵万歳やよろつよの万歳

同早哥　近衛の御門に巾子おといつ上下略をみなのさえは下略

同得錢子　得錢子かねやなるしもゆふひはを下略

（催）同大芹　前盤三多のきのゆしのきの盤むしかめのとう犀角のひやうさいとさい兩面かすめうけたるきりとほしわなはめ（か）盤木五六かへしの一六のさい四三さいや

同老鼠　ほうしにまうせ師にまうせ上略

同葦垣　あめつちの神もそうしたへわれはまうよこしまうさす上下略

同我家　わいへんは戸はり帳もたれたるを下略

同淺綠　玉ひかる下ひかる新京朱雀のしたり柳上下略

これらは皆字音のまゝをよめり萬葉集中にも男餓鬼め餓鬼双六乃佐叡なとの類はあれともとより公なる哥にはあらさるかうへにいとかみつよの哥にはあらす家持延暦までも有し人なれはおもひ見るへしかく字音のまゝを哥によむ事さらに寧樂以往のものとはおほえぬことなり

神吉々利々　吉々利々千歳榮白衆等聽説晨（晨）朝清淨偈也

あかほしは明星は下畧

これは佛語のまゝを用ひられたりこと更神樂にかゝる佛語をうたふ事かみつよのてふりにあらさる

を思ふへしされは體源抄にも神樂に難義ありとてこの哥のことをいへり又

催我家　わいへはとはり帳をもたれたるを下畧

このわいへはわか家といふにてしからは賀伊をつゝめてわぎへといはむそたゝしかるへき寧樂以往

にはわきへとのみよめりわきもこの類なりまた

神篠　さゝのはに雪ふりつもる冬の夜に豊のあそひをするかたのしさ

同弓　梓弓春くることにすへ神のとよのあそひにあはむとそ思

同竈殿哥　とよへついはあそひすらし下畧

このあそひといふ事皆遊宴の管絃合奏をいふ寧樂以往にはたゝ逸遊のことにのみあそふとはいひて

管絃のうへにはいへる事なしこれ又久迩以來のわさなる事あきらか也なほ哥ともの中には寧樂人の

久迩長岡此京なとにうつり來たるか寧樂以往の詞をうちましへてよみたるならんとおほしきもあり

いはゆる

催東屋　あつまやのまやのあまりのその雨そゝきわれたちぬれぬとの戸ひらかせ中畧　おしひらい

ていてきませせわれや入つま

此哥ひらかせといふは上古の詞なりひらいてなど音便もていふは久迩以來のわさなり又

催我門　あやめの郡の大領のまなむすめといへおとむすめといへ上略

此哥大領なと字音を用ひたるにまなおとなといふは上古のことはなり又

催美濃山　みの山にしゝに生たる玉柏とよのあかりにあふかたのしさ

此哥しゝにといふは上古の詞也たのしといふは寧樂以後の詞なるなと寧樂以前寧樂以後あひ混したるをみるへしこの美濃山の哥は古今六帖に出て第二の句しけりかさなるとありて大伴黒主か哥なり梁塵抄には此哥を承嘉(和)帝の大掌(嘗)會の悠起の風俗哥也とありしかれは第二の句は六帖なるかもとなるをなほされたる詞なるへし又

催美作　みまさかやくめのさら山更々に我名はたてし万代までに

此哥は古今集大歌所にいてゝ水尾のみかとのおほんへのみまさかの哥とみゆまへに引たりし大伴黒主か美濃山の哥とこれともまさしく大掌(嘗)の歌なれはそのよめる時さへあきらか也また

催葛城　かつらきの寺の前なるやとよらの寺のにしなるや下略

此哥はまさしく光仁紀にみえたる童謡なりまたまさしく萬葉集中の古哥をなほして用ひられたるあ

りいはゆる
神酒殿哥　には鳥はかけろと鳴ぬ起よ〳〵わかひと夜妻人もこそあれ（マヽ）
催我駒　いてあか駒はやく行こせまつち山まつらん人をゆきてはやみん
これらなりまたやかて寧樂以往の哥なりとみゆるもましれり櫻人なとの類これなり詞にも寧樂以往にかきれるを用ひられたるもいとおほし　神樂宮人によろしも　同階香取にまかせ　同篠波にいとこせ　同総角にすらといふ詞催馬樂此殿西にもありこれらの詞をよまれたる古哥をはやかて用ひられたるにや又は寧樂人のこの國にてよめるにや以上の哥ともの時代を考るにかならす久迩以來の所作なる事明らかなるをやおほかた神樂催馬樂のふたつの哥のすかたを思ふに神樂はおほくは此京になりてのちのひとの口つきしるし催馬樂にはふるき哥多くみゆ體源抄云風俗は諸國の古風を集むる也故に諸國の風俗多在催馬樂中事也とあるかことく催馬樂には諸國の風俗のふるきをあつめられたるか多き故なるへしくはしくはその哥々の下にあけつらへれとこゝにはその大旨をのへて時代をさとせる也神樂なといへはその濫觴のふるきによりて此哥さへかみつよの物のことくいふかひなき人はおもふへけれはことわりおく也

文化十二年乙亥臘月念六　　御杖識

神樂目錄

庭火

（宸）
震筆本にはなしその餘諸本多分有之

採物

北院御室御撰絲管抄には取の字を用ひたまへり

榊

幣

內侍所御神樂式には幣以下八首なくて韓神次之

杖

篠

弓

劔

絲管抄には劔なし

鉾

杓　片折諸擧

(拾)捨芥抄神樂部　片折諸擧の四字あり絲管抄には有片折諸擧とみえたり

葛

絲管抄には葛なし

韓神

躰源抄云神樂證本之韓神取物外也御神樂式には此韓神の次にふたゝひ阿知女の本末ありてそれより大前張すへてなくて小前張の薦枕につゝけり

大前張

(宸)震筆本には宮人　由不志天　前張の外は載せたまはす御神樂式にはまへにいへるかことくすへてなし絲(ママ)菅抄は(宸)震筆本に同し

大宮人

(拾)捨芥抄如此あり絲菅抄梁塵抄等大の字なし

何尓波形

拾芥抄如此梁塵抄には難波形とみゆ

木綿四手

(宸)震筆本由不志天とあり梁塵抄には木綿志天とみゆ

前張

階香取

面白　梁塵抄此一首を脱せり

井奈野

和支母子

拾芥抄如此梁塵抄には脇母子とあり

小前張

(宸)震筆本　蟋蟀までを小前張とし千歳早哥二首を雜歌としたまへり絲管抄もこれに同し

薦枕

閑野小菅

(宸)震筆本には志都野とありて小菅の字なし絲管抄これに同し御神樂式にはこの閑野儀等の二首

なくて篠波につゝきそれより下殖春総角大宮湊田埜の五首なくして千歳につゝけり
礒等崎
（宸）
震筆本絲管抄等崎の字なし躰源抄云籠中抄にはさき（前）の字を用ぬ
篠波
殖春
躰源抄云一本槻の字を用ふ
總角
絲管抄には角総とかけり籠中抄には上巻とみゆ
大宮
湊田
埜
絲管抄如此（宸）震筆本蟋蟀の字を用ひたまへり
千歳
早歌

まへにいふかことく震(宸)筆本絲管抄この千歳早歌は雑歌のうちに入れらる拾芥抄にかくのことく小前張につらねられたれともこれは雑哥とし給(ひ)へたる正しかるへし

星歌

震(宸)筆本絲管抄歌の字なし震(宸)筆本にはこゝに雑哥と標したまひて上の千歳早哥をのせ給ひさて星と標して吉々利々得錢子木綿作晝目弓立朝闇其駒以上七首とせらる絲管抄是に同し御神樂式には千歳早歌星三首朝倉其駒と次第して晝(晝)目弓立の二首脱せり

吉々利々

震(宸)筆本利の字一字なし躰源抄に或本利々の二字なしともあり絲管抄は拾芥等の諸抄におなしく吉々利々とあり

得錢子

木綿作

雑歌

震(宸)筆絲管兩本まへにいふかことく此標まへに出たり

晝目

湯立

(宸)震筆本には弓立とかゝせたまへり

竈殿

(宸)震筆本これより以下三首を載せたまはす躰源抄云一本殿の下歌の字あり

酒殿

これも殿の下歌の字ある本あり

神擧　梁塵抄此一首を脫せり

朝藏

(宸)震本本闇の字を用ひたまへり簾中抄同之

其駒

簾中抄には此外に鸕鷀あり

神樂燈卷之一

平安　富士谷御杖

○神樂名義

おほかた神樂といふもしを加具良とよむ事その名義心得かたき事也神嘘樂の義なりと似閑翁はいひ士清翁はかんらくといふ音便なるへしととかれたれとをたしくもあらすよゝの先達もおもひよられたる事もなきにや說も聞えすしかるにわか友隆璉云親長(卿)記云文明十七年四月二日詣吉田社頭予今無造營可參齋場所云々件齋場所自御臺近日再興造營神樂岡上人々群參六角神殿也勸請諸神此外神宮內外別御座又諸國諸社在列とみえたる文明は今より三百年はかりいにしへなれと此時再興ありけるよしなれはふるく諸神をいつかれたりし所なるへし神樂岡といふ名は日本後紀延曆二十年幸神樂岡（類國卅二桓武天皇延曆十三年十月戊寅遊獵於康樂岡）とみえ類聚國史には康樂岡ともかゝれたれはふるき名にてその加具良岡とは神座岡(カミクラナカ)の義なるへしこゝの神座をは神樂と書なしてかの岡の名とせられけるより神樂は加具良とよむへく心えなしてその名義をもたつねすつひに加具良とはいひなりぬるなるへしといへり此

說いたれりといふへしとそおほゆるその故はもと神樂は神遊とそいひけらし古今集大哥所に神あそひの歌とみえまた躰源抄にも時助子時忠これを傳へて堪能なりけれは堀川天皇階下にめしてうけならひ給ひて常にこの神遊ありけりとも見ゆされは神遊神樂のもしにかゝはらす神阿曾毘と唱ふへき事なり忠見集に水のほとりにかくらする　みなかみの心なかれてゆく水にいとゝなこしのかくらおもしろといふ哥もあれはその比はや神樂ともいひけるにこそ阿曾毘といふ事もと古はたゝ讌飲郭外なとの逸遊をのみいへるを久迩以後は阿曾毘といふは必管絃の遊を云こととなれゝは阿そ毘といふもいと古き名にはあらねともとこの神樂哥大旨にとけるかことく久迩以後の所作うたかひなけれは神遊とゝなへけるかもとの名なるへくおほしき也神樂と云もしは神遊といはむをはからめかしてかけるもしなるへし萬葉集卷二に　神樂浪乃大山守者　神樂波之志賀左射礼浪また卷一に　樂浪乃大津宮尓なと見えなほ　神樂聲浪とも見えたり家持も延暦中に卒せりし人なれは神遊の哥なりとてかくかゝれたるにこそしかれとも神樂の濫觴は天石屋戸のまへなる俳優におこれる事なれは今つたはれる神樂哥こそあれそれよりいにしへにも神樂は有けるなるへけれはうたひ物の有無はしらすかの俳優をは神樂とかゝれたるにやそこはさたかにしりかたしこの萬葉集に神樂の字をかゝれたるいつれも左々といふことの假字なれは採物に篠といふ哥あるか故にかゝれたりと古說なりしかれともかる

へき物こそあれ篠にかきれるはいと心えかたきこと也されは隆璉か考に神樂の今の哥よりさきの古唱のうちにかならす乞々といふことの多かりしか故にかゝれたるなるへし乞々と云はをせさゝとあるに同しく怡悱和なとやうにすゝめおこつる心也この言葉神樂にふかき心あるへし篠を用ふるも鈿女命の手草にとれるよりおこれれとその意かならすこの心なるへしといへりこれいとめてたく聞ゆをせさゝとは神功紀の御哥に　虚能弥企破和餓弥企那羅儒（中略）阿佐孺場（塢）齊佐々とあるこれなり今隆璉か神樂にふるき故ある詞なるへしといへるは古事記上卷神書天石屋戸之件云　天宇受賣命手次繫天香山之天之日影而爲鬘天之眞（拆）折而手草結天香山之小竹葉而於天之石屋戸伏汙氣而踏登杼呂許志爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於番登也云々　神代卷に俳優とある遠岐は卽古事記同卷に共遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劔とある遠岐にて日本紀に招といふ字をあてられたる心なり後世にもはしたかのをき餌にせむとかまへたるおしあゆかすな鼠とるへくといふ哥拾遺集物名（をしあゆ）にあり此をき餌も鷹の餌にひかれてこむやうにかまふるを云今のよにを鳥とてその同し鳥のよりこむためにする此を鳥ももとはをき鳥を畧せる名なるへしくはしくは下の主意をとける所にいふへけれともと此俳優の濫觴をおもふに天照大御神の天石屋にこもりませるを遠岐奉らむかためより外の事なけれは遠岐たてまつりて石屋戸を出まさむことをいそかし奉る心を表して小竹葉を手草にし玉へるなれは隆璉か考のこと

くた々は神樂に肝要のものなるか故に萬葉集にしかか〻れたる必定なるへしうたひ物のこともけに今の神樂の哥ともよりさきにうたひける哥もありけにおほゆるはまへに引たる神功紀の御哥は皇太后宴太子於大殿皇太后擧觴以壽于太子因以歌曰とて御歌有さて武内宿祢爲太子荅哥之曰許能弥企塢伽弥簸武比等破曽能苑豆弥于輸耶多氐氐于多比苑々伽弥簸枳伽茖許能弥企能阿椰耶于多娜濃芝作沙（古事記には枳沙とあり）これをもてみるに必うたひ物は有けむつたはらさりしはいと口をしき事也後世のことく式なともさたまりたりしにはあらてた〻時にのそみてうたひけるにこそとおほしけれは傳はらさりけるなるへしされは神樂といふもしはかの日本後紀にみえたる神樂岡をはしめとすへくやまたは萬葉集に家持かかきはしめられけるにや拾遺集には神樂哥とか〻れたりかへす〳〵もしにか〻はらす神阿曽毘(毘)ととなふへき事なり又神哥ととなふる物ありこれはまた一種なるへし古今著聞集第六云　侍從大納言成通(通)雲林院にて鞠をけられけるに雨俄に降たりけれははしかくしのまに立いりて階にしりをかけてしは〳〵(し)はれまをまたれけるほとに。雨ふれは軒の玉水つふ〳〵といは〻やものを心ゆくまてといふ神哥を口すさまれける程に格子を中よりおしあけて女房の声にて此程これに候人のもの〻氣わつらひなして候か只今の御声を承りてあくひして氣色かはりてみえ候に今すこし候なんやとす〻めけれは沓をぬきて堂のうちに入て几帳のほかにゐて。いつれの佛の願よりも云々とあるこれ

也躰源抄に神歌はむかしはつゝめてみしかくうたひける也今のよにてかくなりにたり敎家はさその
たまひける顯仲云神哥は前句末哥終に籠さまに次句をいたすなりとみゆれはかならす神遊(あそひ)にはあらす一種のものとみえたり神哥といふ名によりてもし神遊に混しおもふひともあらんかとてこの因にことわりおく也

○神樂被行處

內侍所御神樂は　十二月吉日を撰て行はるゝよし躰源抄に見えたりおなし抄に　多資忠云內侍所乃神樂四月に行はるゝ時夏神樂の作法を用と云々夏神樂とは庭火に唱ふ哥のある也夏神樂は四月にかきらぬ事にや同抄云或記云　夏神樂には不燈火を云而ルニ長和四年壬六月廿三日內侍所の御神樂なり內侍所西面の庇中に庭火をたくと云々是左近將曹重胤か依有所申燒之云々とあれは六月にも行はれしとみえたり清暑堂御神樂は大掌(嘗)會の時おこなはるゝ也（或秘記云清暑堂は豐樂院のうちにあり今無基跡とみえたり）日本紀竟宴にも行はれたり同抄云　私記云日本紀竟宴は一代一度行らるゝなり近來此儀なし和哥講後御遊を始とする時先神樂哥一曲を哥ひて然後に樂を奏する也とあり宮外には石淸水臨時祭加茂臨時祭に行はる同抄云　資忠記云石淸水臨時祭神樂は天明をもて期として遊なり夜尙ふかけれは折かへして哥ふ也天明〇取御也　て馳駁馬故なり但星以下哥未必哥之也とみえ又加茂臨時祭は十一月下酉にあり公卿殿上人の

裝束石清水におなし但還立の御神樂そおこなはる清涼殿の東庭に座をしきて此事あるへしとありその外諸社にもおこなはれけるなるへし　備前國の廳官笠吉時語て云敎家備前國司たりし時吉備津宮の霜月の御神樂に敎家少美衣を着して參詣夜に入ていまた神樂を奏せさる間に時資西國より上路の次に敎家の在よしを聞て參入敎家殊に感嘆を成しみつから庭中に下居相具して神樂を奏するに時資庭燎を哥ふに後山より風吹て村雲飛霰殊に降る萬人皆垂感涙件霰只社頭計に降て社頭の外には天晴て全以不降之神感掲焉歟とみえたりまたわたくしにも神樂はおこなはれけるにや　私談云宇治殿東三条にて神樂したまひけるに下野公親此道に長したる聞えありけり多時助又家風を傳へたるものなりめしあはせて聞しめすへしと人々申ければ公親本拍子時助末拍子とりけりなと躰源抄中にみえたりこれらをおもふに後世哥に里かくらなとよめるは宮にむかへて里といふにて宮外にての神遊といふ名なるへし

○神樂興廢

神樂のおこれるはまへに引たる神書天石屋戸の件を濫觴とすかみつ世には神書のやうをまねひてこそ俳優せられたりけめまへにいへるかことくそのうたひ物は傳はらねはいかにともいふへくもあらすおもふに後世のことく式なとさたまりてありしにはあらさるへしいつの御世に今の神遊哥はそな

はり式なともさたまりきとはさたかにはしられねと大旨に云へるる(か)ことく久迩長岡此京のはしめの間の所作ともなるへし江次第内侍所御神樂事云　自一條院御時始十二月有御神樂とあるは十二月に行はれし始をいふなるへし大旨に引置たる神樂譜には貞觀御時被撰定のよしみえ朱雀院御時貞信公被始御神樂とあるを見れは清和帝の御代に神樂哥ともは撰はせたまひ式なとのまたくそなはりたるは朱雀帝の御世にこそとおほしき也しかれともそれもなほ今傳はれる所は一条院御時にこそさためさせたまへりけらし朝倉其駒なとはその御代にくはへられたりとそしかのみならす堀河院多近方に神樂は傳へさせたまひ御宸(寢)筆神樂譜を近方にたまひ多朝臣久時同子久泰まて持早といひ又神樂の曲はすてに絶ぬへかりける事を御門の（一条院なり）御口よりつたへ給ひけるめてたかりける事なりとも躰源抄にみえたりしかれともその宸筆本もなほ今のよにつたはれるとは數いとすくなけれは此御代より後にもなほくはゝりけるなるへし（目録にくはし）かゝれは一条院御時はすてによに神樂たえぬへかりしとあるはそのまゝへ神樂もしはらく衰へたりけむとおほししかれはかの貞信公御神樂をはしめたまへりとある朱雀帝の御時より一条院の御時まてはわつかに五六ケ年のほと有にその間ほと／＼絶ぬへくなれるにこそかの宸(寢)筆本の哥數すくなきと御神樂式の哥數すくなきとをくらへておもふに宸(寢)筆本なるはいまたくはゝらさりしかありける故なり御神樂式なるは其闕たるかきりはうしなはれたるなる

へし一条院御時より後にくはゝりたる哥もみゆれはまたさかりなりし時も有けるかそのゝちまた今のよのことく傳をうしなへるにこそかく興廢ありける事いはてもありぬへき事なれと哥をとかむにその時代のさまも見しらるへけれはおほかたのやうをいふ也

○神樂主意

神樂の濫觴はまへにいへるかことく天之石屋戸のまへの俳優これなり石屋戸をさしこもりましゝ天照大御神乎遠岐たてまつらむか爲なりそのをき奉らせて叶はさる所以を如何にと云に建速須佐之男命の御勝佐備耳阿離ち溝埋なとさま〳〵の惡態をしたまへるかうへに天照大御神のましま す忌服屋の頂を穿ち天斑(斑)馬を逆剝にはきておとし入れたまひしかはその天衣織女捘(梭)に陰をつきてみうせぬかれ天照大御神見かしこみ給ひて天石屋戸を閇ちてさしこもりましけれは高天原皆暗葦原中国悉闇因此而常夜徃於是萬神之声者挾(狹)蠅那須皆滿萬妖悉發とあるかことく天照大御神石屋にこもります時は萬妖悉發におよふか故に必人とありては天子より庶人まてもかならす天照大御神はをき奉るへき所以なりされはかみにいへるかことく神樂は宮中にかきらす宮外わたくしにもおこなはれけるなり後世になりてはすへてなに事も儀式のみのこりたるか故に神樂なとも宮中にかきれることのやうに心えたるによりわたくしに神樂なとせむはかの八佾(佾)舞於庭といふ類におほえてかしこくおほゆるは

なか〳〵なり此天照大御神はをきたてまつらて叶はぬ事公私のけちめあるへき事にあらさるしるしは毎年正月はしめには民家までもしめ引わたすは卽石屋戸之件なる尻久米繩なり門㭭とてたつるは根許士にこしゝ五百津眞賢木なりかくのことく年首には石屋戸之件をまねふ事いつよりの風俗ともしらねとこれ神樂の主意もひとしきをもつておもふへし此勝佐備をはしめ石屋許母里天宇受賣命のわさをきなとの事その義ふかくとほしろくしていひつくすへきにあらねはくはしくは古事記燈にゆつりてその要を摘ていふへし速須佐之男命　僕者無邪心とも又　我心淸明とものり給へるこれ卽勝佐備の根とはなれる也おほかた心にいさゝかも邪なる所なき時はおのつからおのれ人に恥すとおもふ所よりいつる言行これを勝佐備と云也天照大御神と申奉るは大かた人のあしからすよからむやうにのみ見直し給ふ神にましませとも勝佐備には見直しあへ給はすして見はなちすてさせ給ふこれをは石屋許母狸とはいふなり人としては貴きも賤しきもかなたより見直さるゝ所なき時はいひといひしとする言行悉くあしき方におつるこれをは常夜徃とはいふなりしかる時は萬妖必おこりてともかくもせんすへなくなりぬへき事いふもさらなり神功紀云　適是時也晝暗如夜已經多日時人曰常夜行之也皇后問紀直祖豐耳曰是恠何由矣時有一老父曰傳聞如是恠謂阿豆那比之罪也問何謂也對曰二社祝者共合葬歟因以令推問巷里有一人曰小竹祝与天野祝共爲善友小竹祝逢病而死之天野祝血泣曰吾也生

爲交友何死之無同穴乎則伏屍側而自死仍合葬焉蓋是之乎乃開墓視之實也故吏改棺槨各異處以埋之則日暉炳燦日夜有別とみゆる常夜行は則神書の常夜徃に同義にて二祝合葬のゆゑに晝如夜といふ事あるへき理ともおほえぬはこれひとへに阿豆那比之罪をことわりたまへる文なり此阿豆那比とは日本紀萬葉集等に　安登毛布とあると同し詞にて（紀に誘の字をあてられたり）ものゝひとつになりてゆくかたちをいふなり後世　あつまるといふあつもこれに同しされは阿豆那比之罪とは異処たるへきものを一処になせる罪をいふにて即神夫（書カ）第一の規摸天地初發紀には開闢といふこれなり天地は即よにあらゆる尊卑の本源なれはそのあらゆる尊卑を混するはやかて天地を混するなれはそれをは渾沌といひこゝに阿豆那比之罪共いふ也けりおほかた人みな天地をよくわかつ事なく多くは阿豆那比之罪あるものなれはしらす〱勝佐備となりて天照大御神をして石屋にこもらせ奉るものなれは遠岐たてまつらん事は人といふ人の肝要のつとめならすや庶人はそのあつかる所せはけれはなほさてもありぬへけれと天下しろしめすにはこれまことに一大事なるか故に內侍所御神樂ならひに清著堂御神樂等おほやけにも一大事にはおはしますなりとしるへしこれ神樂の主意なるをもとより神書の教旨うしなはれて久しけれはこの大意をもうしなひてたゝ式のみつたはりかはかりの一大事そとは人しらすなりにたるこそ心くるしけれなほ哥の下にもこの旨趣はとくへけれはこゝにはたゝその要をのみいふなり

庭燎

內侍所御神樂式云　衛士燒庭燎（注曰日本紀神代卷云火處燒覆槽）刻限出御次御鈴三度初中終次人長榊副輪而持進軾前足拍子三左右　踏而以左足蹴軾北方行立（注曰綾綺殿額間西砌立鉄輪燒庭燎）同書贅（鼇）頭目云釋日本紀　温明殿第三間西砌燒庭燎雲圖抄庭燎摠十八筒（筒）処　又云　仰主殿寮御火白奉仕次仰掃部寮給軾次召和琴其人着軾引之仰云本乃方候最上着次召笛本方候次召篳篥末方候次召御歌本方候人召御歌可奉仕者本方候次云人長退人人皆着座次衛府召人着座次神樂各借陪從五位笏二枚打之次賢木御幣韓神了人長起舞云々　御幣詠今無又云　人長立庭燎前行事人長云主殿寮御火白仕礼なとみゆ庭燎の字は詩經彤弓庭燎之光とみえ禮記月令にも　季冬命曲（ママ）監収秩薪柴以共郊廟及百祀之薪燎といひ又郊（ママ）持にも庭燎之百由齊桓公始也集注云　庭燎者庭中設炬火以照來朝之臣夜入名また大戴礼云　天子百燎これらのからふみを引て加漢庭燎を設る意別也と似閑翁はいへりされともとよりから國の庭燎をまねひたるにはあらすかの常夜となれりし石屋戸のまへにて火處燒と神代卷にあるを本源として今も夜の暗けれは庭火をたかるゝ事もはらその常夜の儀をそなへらるゝなりとしるへしされは神樂は宮中をはしめいつかたにも夜のみ行はるゝはみな常夜をおもはせたるにてかならす庭燎はたかるゝなり日本紀私記云　此時日神深隱天下常暗擧燭行事謂之火処燒此大著八處燒

隆曉云八処云々火處ノ火ヲ見誤テ注セラレタルナルヘシ

之不言大燒殊加處燒者將明其有八処耳ともみえたるをやまへに引おける躰源抄の說に夏神樂には庭火を燒すといふ事いとおほつかなき事也　長和四年壬六月廿三日内侍所の御神樂に庭火を燒かれしは左近將曹重胤か申す處有しによりて也とあるこの重胤か申せしはいかなる故そとはしらねと庭火は夏冬にかはるへき主意の物ならす常夜をさとす爲の物なれは神樂にはかならす燒へき要訣をこそ申されけめと重胤か心さまおもひやらるゝ事なり續日本紀云聖武天皇天平三年春正月庚戌朔乙亥神祇官奏庭火御竈四時祭祀永爲常例又類聚國史第十六神祇部云貞觀九年正月廿六日丁卯授内膳司從五位上庭火皇神從四位下なとみゆその意味おもふへし

深山尒波霰降羅志外山奈留正木乃加豆羅色豆幾尒介理

此哥は奥に採物哥葛の末の哥なりされはこゝにて此哥をうたふへきゆゑはあるましき事なれと諸抄にもなほ此哥こゝにありてことに庭燎曲とさへとなへられける事いとも〳〵不審のことなり御神樂式云次庭燎本哥所作終着座（神代始天兒屋根命）深山尒波一段霰一段降羅志一段外山奈留一段已上四段末哥詞又同之次人長立還軾前以右足蹴軾南方行立　次庭燎末哥所作終着座（神代始天太玉命）次人長着座（已上是迄庭燎作法也）とあるをみれは此一首を本末としてうたはるゝなるへし躰源抄云凡神樂の人長には甚深の作法ある也秘記にみえたり庭燎の諸哥は唱ふ所のある也人長の詞に隨てうたふなりもろ哥つか

まつれといふ也又一首なから哥ひ終(る)に事ありこれも人長の詞に隨ふなり此作法今世には知人まれなりとみえ又同抄に夏神樂とは庭火にうたふ哥のあるなりとあるを見れはもと此哥は夏〱神樂にのみうたひて冬はうたはさりしにやそれも夏は必うたふへしといふ故實にもあらし此躰源抄人長には甚深の作法ありといひ諸哥は人長の詞に隨ふとあるを思ふに此哥は本句はかりをうたひし事にて人長の心にてもろ〱うたつかうまつれといふ時末句をもうたふとみえたり此二筒(箇)條の意味によれはいつの御世にたれ人長たりし時にかそれはしらねと人長の心にてふとこの採物の葛の哥をこゝにてうたはせけるか一向うたなきよりは風情ありておもしろかりけるより例になりてかく庭燎曲とさへいひなりぬるなるへしその人長のうたはせはしめたりしか夏神樂の時なりけるか故に夏神樂にのみうたふを故實とするなるへし片哥にうたふ事もたゝ人長の心にしたかひてしかせしか傳はりけるによりこれもおもふにもと爰にうたふましき哥をうたふ事なるか故にわさと諸哥にはうたはぬにこそとそおほゆるかくおしはかりにいふ事式ともなりたることを破るか如くにていとわたくしなるわさなれとかやうにおもひよれる本は宸筆本に此庭燎といふ事なきか故也此宸筆本いとも〱めてたくおほゆるはもと庭燎はまへにとけるかことく常夜をしめすためにたかるゝにて神樂譜に庭燎と記すへきことにはあらす諸本には庭燎といふ事のあるは此深山にはの歌あるかゆ

ゑなれはそれはしかるへき事なり寢(寢)筆本には此哥なきか故に庭燎ともかゝせ給はぬにこそこの寢筆本によりて思ふに一條院の御時まてはこゝにて此哥をうたふ事なかりし事は明らかならすやされは一條院御時より後いつれの御時の人長か此歌をうたはせけむそのをりはをかしくもありけめと一時のことならはこそあらめかく法則ともなりぬるはいとも〱心得ぬ事也此故に寢筆本によりて今はこゝに此歌を注せす奥の葛の條にて注せり　注秘抄に　みやまにはあられふるの哥は古今集中大哥所の中に神あそひの哥とてのせ侍るこれは後のよの人のよめるを庭火の曲と名つけてうたひ侍る也とあるも此哥をこゝにうたふ事古式にあらさるしるしなるへししかれとも今は式となりて必うたふへきに成ぬる世なれはその式は式としてもとこゝにこの哥うたふへからぬ理はおもひおくへき也

阿知女作法

此阿知女注秘抄には鈿女の通音なるへしとみゆ神代卷に天鈿女命と見え古事記神書には天宇受賣命とあり宇と阿と同音なれは通ふへけれと受と知は左經多經と（亡父成章五十韻をは經緯といひつけたり）たかへるか上に緯も亦宇緯と以緯とたかへれはこれを通ふとはいふへからす受か士とかよひその士かまた知とかよへりともいふへけれと經緯はもと天地間自然にそなはれるものにて變通反切等もいとやことなき

理をもてしかるものなれはしか私にはとりなすへからぬことなりされは此名の事いとも〳〵難義なり諸本をみるにいつれも〳〵阿知女とのみありてうたかはしかるへき事もみえねは誤字かともいふへからすしかれともこれを宇受賣の通音ならむとせられしはやことなき事にて體源抄に神樂の召人をは神書石屋戸之件なる諸神に配したる事有そこに本末の哥人をは天兒屋根命布刀玉命に配し人長をは天宇受賣命に配せられたりその所由はしらねとけにさる事にて神書石屋戸之件なる諸神のうち宇受賣命は天照大御神ををきたてまつる主神にます事その件にあきらか也日本紀私記云天書第二曰使天鈿女爲師主頭着蘿鬘身着手繦云々とも見えたりされは神樂の人長はまへに引たるかことく人長の詞に隨ふともあれは召人かなかの主たる事人長と云名にもしるくなほ大神景道家口記内侍所御神樂畧次第之内にも人長有作法といふ事あまたゝひかゝれたるその作法と云ふ字やかてこの阿知女作法に應すへけれは阿知の宇受にかよはむ事はいとおほつかなけれとこれは必宇受賣命の事にてあるへくおほゆる也なほ於介といふも古語拾遺に此神の手草にもちたまへるよしみゆれは（此本文は下の於介の下に引けり）かた〳〵宇受賣なるへしまたおもひよせらるゝは旧事記に猿女君等主其神樂擧其言云々とみゆる（此書はうけかたき事とも多かる事本居宣長翁つはらにときおかれたり實いとおほつかなきものなれとかならすよる所はありてさてさま〳〵に附會せられたるなるへけれはその附會とおほしき所々をこそあれさるへき所々はすつへくもおほえすすへて古書はおほつかなきものもなほかくえらひてみるへき事肝要たるへし）この猿女はすなはち宇受賣命の裔なり古事記神書云

故尓詔天宇受賣命此立御前所仕奉猨田毘古大神を専所顯申之汝送奉亦其神御名者汝負仕奉是以猨女君等負其猨田毘古之男神名而呼猨女君之事是也とあるこれ也されは今しひて思ふに宇受をつゝむれは宇一音となるそれをは阿にかよはし知は津のかよへるにて宇受津女といふ義にやされとこれも津といふ事穏しくもおほら（え）す所詮は猶古注のことく宇受女のかよへるにて後世音の事正しからすなれる世に阿知女とはあやまりかよはしけんかとそおほしき後世には音をあやまりかよはせる事もあり猶たつねは例もあるへけれと　てふといふ脚結（脚結とはよにいふてにをはなり亡父つねに脚結といはせたり）かみつよには止布とも知布ともいふもと止以布を反切したるなれは知布といふかまさしく（止伊の反知なればなり）止布といふは伊をはふける也しかるを後世にては天布とのみかけるこれ也かゝる例にて士といふへきを知にかよはせていひなりけるにやまた思ふにまへに引おける神功紀の　阿豆那比之罪といふ事　阿は即此阿にて知は此豆のかよへる也那備をつゝむれは祢となる横通して女といへるにやしからは阿知女は阿豆那比の義なるへし以上の義ともをおもふに此阿豆那比の義とせんは経緯におきて正しくもおほゆれはまつこれによりていはゝ庭燎の下にとけるかことく阿豆那比は尊卑をはわかぬ罪にてその阿豆那比によりて天照大御神も石屋にこもりませるなれはこの阿知女とは天照大御神をさきたてまつらんとする宮（主カ）をさすなるへしかしこけれと宮中にて行はるゝ時は主上をさし奉るへし里

にもこれに准し知るへしよに願主なといふほとの心としるへし作法とはもろ〳〵のしわさをつかねていふ詞也まへにいへるかことく神樂の人長は甚深の作法あるものゝよしみえすへて人長の心にしたかふよしなれは人長は即主上に代り奉りて作法をふるまふなるへしとおほしきさてこの阿知女作法といふ事　阿知女於ゝゝゝを本とし於介於ゝゝゝを末とせられたるをみれは下の哥ともの例なりとはみゆれとももとより阿知女作法と標せられたるを思ふに下の歌ともの例にはあらしなほかくおもふゆゑは神樂弖立に本伊勢嶋也安万乃刀祢等加多久保乃介於介ゝゝ末多久保乃介伊曽良加崎尓加保里安布於介ゝゝ本　於保君乃由支止留山乃稚櫻於介ゝゝ末和加櫻止里尓我由久也船加知棹比止加世於介ゝゝと見え催馬樂にも飛鳥井　安次加爲尓也止利波須戸之也於介可介毛与之下畧また青柳　安乎也支乎加多以止尓与利天也於介也宇久比春乃於介也宇久比春乃奴不止以不可左波於介也宇女乃波名加左也また伊勢年中行事鎭魂哥にも　あちめ、一度おおお三度あめつたに、をゆらかすは、さにらかす、かみわかも、かみゆるは、きねにきかう、きゆらならは、あちめ一度おおお三度いそのかみ、ふるやしろの、たちもかと、ねかふは（そカ）のこに、そのたてまつる、あちめ、一度おおお三度さつをらか、もたきそまゆみ、おくやまに、みかりすらしも、ゆみのはすみゆ、あちめ一度おおおのほります、豊ひるひめか、みたまほす、もとはかなほこ、すゑは――（本ノマヽ）ほこ、あちめ一度

おおお三度みづやまに、ありたてる、ちかさを、いまさかえては、いつかさかえむ、あちめ一度おおお三度わきもこか、あなしの山の山山もと、本ノマヽひともみるかに、みやまかつらせよ、たまはこに、ゆふとりしてゝ、たまちとらせよ、みたまかり、ひ歟をまかりましみかみは、た歟いまそきませる、みたまみに、いましゝかみは、いまそきませる、たまはこもちて、せりくるさ歟みたま、たまかへむすし歟なや次〻ひとふたみよいつむなゝやこゝのたりやまた東舞にも於〻〻〻へ於介夜於〻〻〻といふ事哥の詞の間にありこれらみな哥の詞の間に於介また阿知女於〻〻〻とあるをおもふにこの阿知女於〻〻於介於〻〻〻〻の詞はこゝにてのみいふ詞にはあらて奥にも哥の間にてもこれを唱ふる詞なる事しるしまつ神樂哥のはしめなれはこゝにてもかく唱ふるなるへしされはこれは哥にはあらてたゝ唱ふる詞なるへきを本末にわかれたるは後世の所爲歟または本哥人末哥人のこれをわけて唱ふるか故なるへしおほかた阿知女はまへにいふかことく神樂を行ふ主の事にて人長その主にかはるなれはこの詞は神樂におきて肝要の詞なるか故に奥にも所々となふるにてこゝにもまつ此作法のあるなるへしかへすへく作法と標せられたるは哥にはあらさる事思ふへきなり資忠記神樂作法云

御前次第十一月丁酉加茂臨時祭等云々掃(部)頭寮儲座於東庭主殿寮供庭燎人長云音高二度次振舞二度次　今夕乃夜乃御神態ワサ乃人乃長作官位姓名懸多利云々とあるは加茂臨時祭還立の御神樂のことなれと人長のお

もき事みつへしかへす〳〵宮人におきてはかしこけれと主上にかはり奉る人なる事これかれをあはせておもひしるへし

本

阿知女　於於於於

阿知女はまへにいへるかことく阿豆那比の通約にて阿豆那比の罪ある主をさしたる名なり神樂を行ひて天石屋にこもりませる天照大御神をきたてまつる事もはら阿豆那比の罪をとかむかためなれはなり〇於於於於とは内侍所御神樂式云　於ゝ御先聲也雄ゝ應ゝ口决とありしかれは主上出御の御先を追ふこゑにて阿知女は卽主上をさしたてまつるなれは阿知女於ゝゝゝとはいふなるへし此故に下の哥とものはしめに此詞はあるにこそかの鎭魂哥にあちめ一度おおお三度とあるは伊勢にての事なれと主上出御のかたちをなす爲なるへし御神樂式云　刻限出御云々とあるを思ふへし此式なとは後世にいてきたる物なれはあらはにかく出御なとかゝれたれとしかあらはにはかゝすして　阿知女於ゝゝゝといふをもて主上出御をおのつからおもはせたる上古の詞なる事しるし雄ゝ應ゝはともに假名たかへり後世の所爲なるへし

末

於介　阿知女　於於於於

於介とは古語拾遺云　其後素盞嗚神奉爲日神行甚無狀（中略）于時天照大神赫怒入于天石窟閉磐戸而幽居焉尓乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔措凡厥庶事燎火而辨高皇産靈神會八十萬神於天八湍（ヤス）河原議奉謝（イノリマツラン）之方（中略）又令天鈿女命以眞辟葛爲鬘以蘿葛爲手襁以竹葉飫憩木葉爲手草手持着鐸之矛而於石窟戸前覆誓槽（古語宇氣布祢約誓之意）擧庭燎巧作俳優相与歌舞（中略）當此之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相与称曰阿波礼（言天晴也）阿那於母志呂（古語事之甚切皆称阿那言衆面明白也）阿那多能志（言伸手而舞今指樂事謂之多能志此意也）阿那佐夜憩（竹葉之声也）飫憩（木名也振其葉之調也）云々　この鈿女命の手草にもちたまへる飫憩といふ木の事なりと古説なりもとこの古語拾遺は齊（齋）部廣成か所作大同二年二月十三日と奥書にあり中臣齊（齋）部は天兒屋根命布刀玉命の裔なるに中臣はさかりに齊（齋）部はおとろへて廣成そのとしは五位下たりしかは憤りてつくれるもの也と和學通にいへるけにしかりされはもはらその憤を訴へむかためかゝれたるなれはうけかたき事ともゝ多かり此飫憩木葉といふことももろ〳〵の神書ともにもみえぬ事にておそらくは私言なるへし自注に　覆誓槽古語宇氣布祢約誓之意また　阿波礼言天晴また　阿那於茂志呂古語事之甚切皆称阿那言衆面明白也又阿那多能志（言伸手而今指樂事）謂之多能志此意也また　阿那佐夜憩竹葉之声也なといつれも〳〵その義古意にたかへり　うけふせと神代卷にみえたるは虚筒（ウツケ）をふするを云也　阿波礼も何

蛉(怜)の義也　おもしろはなほあはれなる意也　多能志は古は多奴志とのみいひてたゝ樂(タヌシ)き義なり　さやけは萬葉にも清の字をあてられたるかことく清潔なる心也かくのことく義みな上古にたかへれは飫憩を振其葉之調也とあるもうけかたしこの飫憩を手草にし給へる事より所もありてかゝれたるにはあるへけれと他の神書ともになきをおもへはうたかはしくことにかく私意とも多かるをもたつねす古來この古語拾遺にしたかひ來れる事いとおほつかなしされは思ふに此神樂に　於介　阿知女於ゝゝゝとあるはかへりて寧樂以往の詞のつたはりたるにこそとおほしき事上にあけつらへるかことくなれはかへりて此神樂の方はさきにてこれにかくあるによられて古語拾遺に飫憩をそのせられけらしとそおほしき大同二年の所作なれは此神樂の於介より必さきともいふへからぬをやされは此於介をはわか友隆璉云仁賢天皇の御名を億(オ)計と申し顯宗天皇の御名を弘計と申しゝは大筒小筒なとの義にやあらむ大碓尊小碓尊なとの例なるへしされは此億計は御名なれは大筒なとの心なるへくこの於介は巨大(オホケ)の義なるへし(おほきのきをけにかよはしたるなり)といへり此説を逐ひて考ふるに於介は卽隆璉か說のことく　大(オホケ)なり此おほけは萬葉集卷六　丈夫之去跡云道曾凡(オホロ)可尓念而行勿丈夫之伴とよめる　凡可に同しかるへし(後世おほろけといふ詞のもとなりおのれか隨筆巨豆美にくはしくいへり)此呂をはふき可をけにかよはしたる詞とするへしされはおほけとは物のとりとむる所なくおほつかなきさまをいふ詞なりこれ卽かの常夜往

て物のあやめもわかぬをなけく心なるへし阿知女といふにむかへておもへはかならす常夜をなけく義なりとはしるきなり　阿知女於ゝゝはふたゝひいふにて義はまへにおなしおほよそ同し事をふたゝひいふはその事の一たひにてこゝろゆかさる時のわさなり萬葉集卷一朝も吉木人乏母亦打山行來跡見良武樹人友師母なとやうの例ひくにいとまあらすされはかくふたゝひ阿知女於ゝゝといふはかへす／＼いへるかことく人としてはたゝ阿豆那比の罪をとかむ事肝要なるよしをしめし表はたゝ主上出御の御さき声をうちかへして庭上の人を懇に肅(ツヽシ)ましむるよしにいひなしたるなり○以上とく所のこの詞の意もはら阿豆那比主の常夜をなけき給ふ御心ふかきを人々にもしらせむことをむねとせる詞なれはこれは作法にて哥にはあらさるへき事おもふへしされは神樂哥は採物をはしめとし大前張小前張雜哥星と心うへき也御神樂式云　乞末方三度拍子之義也とありて次本方於介次三度拍子次笛音取但和琴篳篥(ヒチリキ)無之とみゆ本をは今一度うたふにこそこれ返返ねもころにするなるへし

採物歌

採物とは手にこれらのくさ／＼をもてはなり榊は神代卷云堀天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸八坂瓊之五百筒(箇)御統中枝掛八咫鏡下枝掛青和幣白和幣相與致其禱云々古事記もこれに同しくて　此種々

物者布刀玉命布刀御幣登取持而云々とあり　幣はもと御手座の義にてなにゝもあれ手して捧るをいふ名なり座とは神書に古事記千座置戸といひ祝詞に千座置座なといひて物を置すゑるものを云後世臺といふかことしされはこれは一くさとして幣とはいふへからぬ名なれとかの榊の枝にかけられたるくさ／＼の物をおしこめにいふなるへし　杖とは古事記神書に　故於投棄御杖所成神名衝立船戸神とみえまた倭姫命世記に　尓時姪倭比賣命事依奉利御杖代止宣氐従此倭姫命奉戴天照大神而行幸云々なとあるによりてなるへし　篠とは古事記神書に手草結天香山之小竹葉而云々古語拾遺にも　以竹葉飲憩木葉爲手草なとあるによりてなるへし　弓とは神代卷に　天梔弓をはしめ古事記に天之麻迦古弓また　生弓矢なとあるによりてなるへし　劔とは神代卷をはしめ十握劔あまた所にみえ古事記神書には　神度劔なとありしかれともこゝの哥とも皆太刀とよめるのみなれは劔とはかゝれたれとも太刀とよますへきなるへしされと劔はもと都留岐とよむへきもしなれは多知とはよむへからさる事なれと諸本劔とかゝれたれはやむことなきことなり　鉾とは神代卷に　手持茅纒之矛と見え　古語拾遺には　手持着鐸之矛とありこの着鐸の矛とは　古事記神書　賜天沼矛而言依賜也とある沼矛に同し鐸は顯宗記（ママ）の大御歌に　奴底とよませたまへるそこの鐸の字を用ひられたり鐸の字は用ひられたれとも奴とも奴底とも奴里底ともいふは皆鈴の事也くはしくは古事記燈にいへり

この外神書に矛はいと多くみゆ　杓(杓)とは古事記神書に天之久比奢母智神次國之久比奢母智神あり
この久比奢は汲杓(杓)の義なるへしと宣長翁古事記傳にとかれたりこれなるへし非は　天眞名井なと
神書にみえたり　葛とは神代卷には　以天香山之眞坂樹爲鬘以蘿爲手繦とみえ古事記神書には　手
次繫天香山之天之日影而爲鬘天之眞栃とあり古語拾遺には　以眞辟葛爲鬘以蘿爲手繦とみえたり
葛とはかゝれたれと神書みなかくのことく鬘の字を用ひられたりされとその鬘に眞栃葛をするか
故にこれはその鬘にする物をもて葛とはかゝれたるなりくはしくいはゝ葛は　首葛　眞辟葛なと都
良といふを本とす都良は蔓(マヽ)の字の義にて後世都留といふこれ也加豆良とは髮葛の義なるへければ
蔓草(ツラクサ)をは加豆良とはいふましけれとふるくも加豆良といひ來れゝは髮豆良にかくるより蔓草にう
つしていふなるへし　韓神は目錄にいへるかことく體源抄に神樂證本に韓神は取物の外なりとあ
るそ正しかるへき以上採物のいつる所みな神書なりもと神樂はもはら石屋戶の件をむねとする事
なれはこの一件中の物にかきるへきことのことくなれと諸件に出たる物ともを取らるゝはゆゑあ
る事なりその所謂はおほよそ神書の大意は天照大御神月讀命建速須佐之男命　祕秘の卒業にうま
れ給ひて　此時伊邪那岐命大歡喜詔吾者生々子而生終得三貴子とありてこの三貴(マヽ)に止まれる事な
りこの三貴子速須佐之男命は出雲國にすみたまひ月讀命は天照大御神の御魂とし給ふよしともに

古事記神書にみえたれは天照大御神たに石屋にこもりまさねは二神はおのつから具足する事なりこゝをもて神書にも天照大御神のみむねとあかめ給ひ萬葉集中にも　高光日之御子なと多くよまれ今の世となりて天照大御神をしもこと更にあかめさせ給ふはまへにいへるかことく三貴子といへともまつ　天照大御神（禊祓の件此三神次第し給へる事もはら今いふ所をさとしたまへるなり）おはしまさすしては二神もそなはり給ふましきか故なりかはかりとほしろくまします天照大御神におはしますか故に阿豆那比によりて天石屋にこもります時は世みな常夜ゆけるかことくなりぬへけれは天照大御神ををき奉らむことは貴賤にかゝはらす一大事にて神書一部の大意すなはちこゝにとゝまれり此故にこの採物石屋戸之件なるものにかきらす神典中に出たるものともをとらるゝなりされはかく神書中の物ともを採物とせらるゝ事その意味深長なりよく〱思ひあきらむへくこれによりて神書の教旨をもさかのほりておもふへきなり

榊

榊といふ字は字書ともにもみえぬ字なれはわか御國にてつくれる字なりかうやうの類いと多し神代卷には　眞坂樹とかゝれたり古事記に　眞賢木とありこれともに假字にて神代卷一書に榮樹とあるそ正字なるへきかくいふゆゑは佐可木は佐可衣木の畧なるへけれは也いま世に佐可木といひて

一種ありて神前にもおしなへてそれを用ふることゝなれるはたかその木と定めていつの世に用ひそめけむ今新年ことに根こしたる（根なからほりたるをいふ）小松を門々にたつるはまへにもいへるかことく他域になき風俗なれはうたかひなく石屋戸之件をして民間までもまねはしめられし遺俗なりしかるに今いふ榊にかきれる事ならは今も猶必榊をこそたてめされとかくいはゝしからは松をのみ今たつるはいかにそといはん人もあらめと此流俗のはしめは松にもあれなにの木にもあれさかえたらん木を根こしにしてたてよと令せられけんを小松は山へにいと多かる物なるか故に小松を引たりしかつひにならひとなりぬるなるへし後世には子日なといひて小松をしも引きにいつるももとは石屋戸之件をまねひて天照大御神ををき奉らむかためなるに他域の説なと混しはてゝ松は久しくさかゆる木なれは壽をねかふ爲にするわさ也とこゝろえはてたるおそらくはわか大御國の古意にはあらしかく古意をうしなひつるより今新年ことに松をたつるはたゝ壽をねかふ爲とのみ心えたるは口をしき事也古事記神書に　我之女二竝立奉由者使石長比賣者天神御子之命雖雨零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜昆（毘）賣者如木花之榮榮坐宇氣比氐貢進と見ゆるかことくいや遠長にあらんことは神典の御敎のさちとする所なれはおのつからねかひもかなふへきことなれと松によれる事にはあらすされはかく今松を用ふるをもておもふに榊とはなにの木とかきれるにはあらす

榮へたらむ木は皆榊とはいふへくおほゆる也流俗によりて事を定むるはたしかならさる事のやうなれとかへりて流俗には古意自然につたはれるものなれは榊は榮樹なる事明らかなりおほかた榮樹を根こしにすとは利口の根を斷へきさとしなり利口の根を斷はひたすら天照大御神をたのみ奉る心を表する也くはしくは古事記燈にゆつりていはす

本　御神樂式にはすへて本方末方とあり本をうたふ人末をうたふ人をわかちていふ也本末といふ事おほかた哥にあつかる事とはおほは(え)すたゝ本方末方と方をわけてうたふ差別をしるされたるなるへしかくおほゆるゆゑは上の　深山尓波の哥なとは一首を本末とわかたれたりまた一首つゝを本末ともせられ又一首つゝふたゝひも本末とせられたるなは　深山尓波の哥庭燎の時は一首を本末とせられたるに奥の葛の下にて　まきもくの哥一首を本としこの深山尓波の哥一首を末とせられたるにてもたゝうたふうたをわくるしるしはかりにて哥にかゝはりたる事にあらさるをしるへし下皆倣之

榊葉乃香乎加倶波志美覓來禮波八十氏人曾滿登比世利介留

㊀御神樂式云　次榊本方歌とありて眞名これに同し　香乎をは香於とかゝれしは必あやまり也滿登比の比一本爲に作にしたかふへし此哥は拾遺集神樂哥に出て一字不違又空穗物語に終句

またゐしにけりとあり四の句一本には大宮人とあり　加俱波之とは神武紀の大御歌に　伊殊區波辞とみえ萬葉集中に　名細花細なとある區波辞に同しくくはしとは古事記上卷に　佐加志賣遠阿理登岐加志氏久波志賣遠阿理登伎許志氏云々とある久波志の義にて同書に　美登能麻具波比といひその外神名にも大山咋　羽山咋　飽咋なとあるも皆同義なり　くふとは喰ふ事にはあらす俗にクハユルといふ心なり萬葉集に　青柳の枝くひもちて鶯なくもとよめるに思ふへしされは物をくはへたるかことくその物のわか情にかなひてはなれぬほとの心を形容する詞也今俗にかうはしといふは音便なり　乎といひ美とうちあはする脚結は風をいたみわたりを遠みなとかならすうちあへる例にて美はもと牟のかよへる詞也かなしむあはれむなとこれ也此故に俗にカルといふ詞にあたりて香をかくはしかりといふほとの心なりかくカルといふ詞なるか故に上をは必をとはいふなり（をといはすして美とよむも亦つねなり亡父此美を譯してサニといふ義とす脚結抄に委けによくかなへる言なり今とく所の義をこゝろえてあてられたる俗言也）此榊葉の香といふ事今よにいふ榊葉も香くはしきものにもあらすなにの木にかあらん香くはしき木なりしなるへしこれらにつけてもまへにあけつらへるかことくなにの木となくたゝ榮樹なるよしをも思ふへし　覓來礼波とは止米は卽此字のことくもとむる義なり遠く香くはしかりしかはその香につきてありかをとめ來れはとの心也　八十氏人とはおほくの氏なる人といふなり萬葉集に八十

作雄とあるも同し神樂につとへる人々をさしていふなり　曾とはすへてその一筋より外へきく人の心のふれぬやうになす脚結なりされはこれはその圓居せる八十氏人の天照大御神ををきたてまつる心の殊勝なるを思ひわか心おくれたるを思はせたる也としるへし　まとゐは圓居也必圓ならねとも人多くあつまりをるをいふ詞也　せりとはするをかよはせたる詞なりすへての詞かく衣緯にかよはせるは物事の今しかなりたるにはあらて以前にしかなりたるか今あるよしをいふなりたとはゝ　ふれる白雪なといふは以前ふりたる雪の今あることをいふかことくこれも以前より圓居せる人のさなから今をるをいふなりけるといふ脚結はすへてかけてもおもひよらさりし事をさとす詞也されは遠くありて榊葉の香のかくはしさにその香のありかをもとめ來てみれはこゝに八十氏人のまとゐしてあるへしとはおもひもよらさりしよとの心をよめる也その下にいへるかことくけると云詞も即曾にうちあひてもはらわか心おくれたるもてその八十氏人の心の殊勝なるをおもはせたる歌なり今更いふにおよはぬ事なから曾介留なとは哥よみとよむはかりの人のつねに用ふる脚結なれとかはかりの義を含める物なれは大かた脚結はおろかに見すくすましき事おもふへし

○此歌もはらおのか阿豆那比の罪をかへりみて天照大御神を招奉るへしと人々を勸むる心なり

これを靈として圓居せる八十氏人のすくれ心つかさりしわかおろかなることを言とせる古人の言さまおもふへし此哥拾遺集空穂物語等にいてたれは此京人の哥とはみゆれと承和貞觀をくたらさる哥なるへけれはさすかに此道のほいありてみゆるをや

○おのれ別に眞言辯あれと今とく所を心えむかためにその要を指てわか大御國ふりをいふへしそも〳〵すめら御國のとほしろくかしこき御てふりはもはら神書にときなれたれとそれは古事記燈にゆつりていはす　萬葉集卷十三に（長哥上畧）蜻島倭之國者神柄跡言擧不爲國雖然吾者事上爲また同卷に（長哥下畧）葦原水穂國者神在隨事擧不爲國雖然辞擧叙吾爲ともあるかことく大かたわか所思はかなたより成り來らむことをむねとすこれをは　神柄跡とも　神在隨ともいふ也されは何事もわか所思をはわれより言擧すへき事にあらすとさためたまへる御國ふり也との心を　言擧不爲國とはよまれたる也しかれとも事からによりてはかなたより成り來るをも待かたき時ありしかる時はたとはゝ喜怒愛樂の情に直に言をつけすおもはぬすちの言にしてその情のかなたにて自通すへき言を案し出てつくるこれを言靈の道といふなりこゝにおいておよひ及はぬけちめはわかるゝ也かくおもはぬすちに言をつくる時は實はありなから情を直にいはさるか故にいひなからも猶言擧せぬといふにかなふへしこれをは景行紀に眞言とあり（わか御國言に麻古登といふはこの眞言のことにて言のうへにていふ詞なりしおる）

を此麻古登といふにからもしの誠實餝なといふもしをあてられけるより麻古登といふは誠信なとの字の義と心うるはいたくあやまれり言は事をやふる基なれは眞言をもてむねとをしへたまへりけんくはしくは眞言集にいへり（校者云「集」ミセケチヲ附シ「弁カ」ト傍書ス）その下文
に　物言如思尒而勿言とあるこの物言如思とはまへにいへるかことく情を直に言とする也尒而
勿言とはしか情を直に言とするは物いふにあらす物いはぬといふへきもの也との義なりこれは
景行帝の御はらから品牟都和氣命の御事を申すにて是御子八拳鬚至于心前眞言登波受とはある
也これをはまことにものおほせられさりけることのやうに心うるはいと稚しもしからはいかてか物言如思とはいはれむよく〳〵おもふへきなりかく言みな眞言となる時はかの情その
言のうちに靈となりてわれより乞はさるに事なりねかはさるに事成るこれをは言靈のさきはふ
とも又言靈のたすくるともいふなり萬葉集卷五に長哥上下略　虚見津倭國者皇神能伊都久志吉國言靈
能佐吉播布國とよみ同集卷十三に　志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福乞曾　事は言の假字なり
また續日本後紀の哥に　言靈當國ともよめるこれ也神武紀に　次諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起
乎茲とあるかことく　平生の言語詠哥ともにこの御國ふりさたまれるは此帝の御時なる事みつ
へし倒の字の意は卽まへにいへるかことくおもふすちを言とせすして思はぬすちを言とするを
云也思ふと思はぬとを倒とはいふ也としるへし志貴嶋の道といふも卽この倒語の道をいふなり
しかれともことわりたゝしからぬ事からこそあれいさゝか私なからん事はいかゝはさはいはむ
と人みなおもふへしたとひ忠誠仁慈の言たりとも我より言擧すましき事は神典につまひらかな

りさる言をつかふを勝佐備とはいふなりとしるへしされはこの哥なとの神樂を勤るはいはゆる勸善なれはかゝるへき事にはあらぬをかくおのかおろかにして八十氏人の神樂するに驚悟りたるによみなしたるひとへに神在隨言擧不爲國の御てふりなるそかし此次下にとく所みなこの心を得てみるへし

末

神籬乃御室濃山乃榊葉畔神乃御前尓繁逢仁介理

(哥)此哥御神樂式に出たるは一字無異古今集大哥所神あそひの哥とてのせられたるも一字不違

○神籬とは神社のめくる(り)なる御垣を云　いかきとよめるもこれなり日本紀崇神紀云　故以天照大神託豊鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬(神籬此云比莽呂岐)と見ゆれは　比毛呂岐乃ともよむへけれと古今集に出たるも　加美賀伎(伎)乃とみえ御神樂式又似閑翁かえられたる眞名書本にもおなしく傍訓をつけられたれはそれに一定なるへし御室とは此次の或說とてのせられたる二首の本の方の哥に　神の御室にともあれは御室は卽御社をいふなりしかれとも御室濃山といふは大和國(磯城)郡なる三諸山の事なるへし此山には大三輪神をしつめまつられし山なり神代卷一書云　是時大巳貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也大巳貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲

何處住耶對曰吾欲住於日本國之三諸山故卽營宮彼處使就而居此大三輪之神也とあるこれなりおなし一書に大國主神亦名大物主神亦号國作大巳貴命云々ともあれは卽これ大巳貴神にましますなりされは神籬のとは神籬ある三諸の山といふ心に冠らせられたるなるへし此冠らせさま寧樂以徃の人のせぬ事なり必定此京人の所作なり〇榊葉畔とは三諸山にたてりし榊をいふなり畔といふ脚結はおほかたは是はかゝりそれはしかりなとその物のかたをわくる詞也しかれともくはしくいへはすこしおとろけるほとの心ある脚結なりたとはゝ手にもたる物とりおとせるやうの時またかならすせて叶はぬ事をうちわすれたる時なとおもはすはといふをおもふへしされはこの御室山の榊葉の神の御前にしけれるよしをは畔とはいへるなからしけりあふまて神の御前に根こし來れることをおとろける心ありと心うへし〇神乃御前尓とは神とはいつくにもあれむねとは天照大御神をさしたてまつるへし諸社にて行はるゝ神樂はその神の御前にての事なれとまへに返々いへるかことく神樂は天照大御神ををき奉にかきれる事なれはかくはいふなり　尓とはかの三室山と處をむかへほか(テカ)之(云カ)類（校者云、「ほか之」ノ三字ミセケチヲ附シタリ）なり尓といふ脚結すへてそこにこゝになとたゝその處をすゑていふ詞なからそこを處とはすましき所を處としたる事にあらては尓もしの本意にはあらさる也されは三諸山の榊の神の御前にしけりあふへき事をはたれも皆おもふましけれは尓とはい

ふなり○繁逢仁介理とは神書なる榊はたゝ根こしにこしてかの種々のものを繁てみてくらとせるよしなれとかくしけりあふなとよめるをみれは根こしたる榊を神前に植る事とはなりけるにこそ　仁介理の仁は去倫の奴のかよへるにて（去倫とは亡父か脚結抄の部立の名也よにいふ早のぬ也くはしくは抄を見てしるへし）しかあらさりし程よりかけていふ詞なり介理はまへにいふに同しされは神前に繁茂するまていと多く榊のあるをおとろける心也繁るといふは一木にもいへと逢といへるは數多の木なるゆゑなり以上の詞をあはせて思ふにこれはまへの哥にはたかひて以往に人々の俳優したるを感しおのれか怠を悔おとろける心によめる哥也前の本の哥はまさかりに神樂する人の多きうへにてよめり此哥は以往に神樂せし人の多きを榊のしけりあふにてしれる心なりとしるへしされは今俳優する人多かるを見て悔るより以往に俳優せし人の多かりしを見て悔おとろくは驚悟のひときは厚き也この故に本末と連續せる也すへて輕重厚薄ははしめて輕薄なるか後は重厚なるものなれはかく次第せられたる心おもひしるへし

(灵)これまたもはら俳優に心なくしておのか力をたのむ人をおとろかして神樂を勸むる心なり本末二首ともにみつから怠を悔たるによみふせられたる哥なれとともに神樂は人の一大事なる事をおもはせたるにてしかも眼前きしかたをさへきはめたる勸進のいたれる物也としるへし

本　咸（或カ）説（校者云「咸」字ミセケチヲ附シタリ）
以（似）閑翁か眞名書の本にかくのことくありて本末二首有ともに或説の哥とみえたり御神樂式にはまへの本末二首はかりにてこの二首なししかれとも此本なる　榊葉尓の哥は拾遺集にいて（マヽ）末なる　霜八度の哥は古今集に出たれは或説といふもふるき事にて御神樂式にははふかれるか又傳はらぬにもあるへし梁塵抄にも此二首あり

榊葉尓由布止理志天天多我世尓加神乃御室尓祝比曾女介牟

㊂此哥捨（拾）遺集に出たるには二の句ゆふしてかけて四の句神のみまへにとあり梁塵抄には尓をはをとあり○由布は木綿なり木綿をしも用ひらるゝ事は古事記燈神書に委いへり○止里とはすへて手して物するいきほひをあらする詞也しかれともそれより轉用したるもあれとこれらは手してする事をいふなり○志天天とは古事記神書に於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而（訓垂云志殿）とあるこれ也しかるに拾遺集に　ゆふしてとあるはしてといふ詞をやかて名になしていふなりふるくはいはぬ事也これらをはしめとはいふへき後世にはつねにゆふしてとよむ事とはなりにたり此ふたつをくらふれは由布止理志天天といはむそ正しかるへき拾遺集のはその比なほされたる詞なる事うたかひなし○たかよにかとはいつのよにかといふ心なり榊葉にゆふとりしてゝ神にた

てまつられしは神書ともにしるきをいつの世よりともしられぬことのことくかくよまれたるはもはら榊葉をねこしにこして木綿なととりして〻幣とすることをはしめたまひし神のかしこさをおもはせむかためなる也しるき事をもわさとかくおほつかなくなしていふは必かうやうの故ある詞也としるへし加とはうたかひの詞なるかうちにもおもふはかなりとふはやなりと委亡父脚結抄に弁しおけりされはやにはたかひて必そのたしかなる所をしりえむといふ脚結也としるへし○神乃御室尓とは御室はまへにいへるかことく神社をいふ也尓もし梁塵抄にはをとみゆ尓と袁は一首の意いたくたかふへし袁と云時は神社をいはふ心となり尓といふ時は神前にしていはふ心となりぬへけれは神樂の本意石屋戸の件をまねふわさなれは神社をいはふにはあらて神前にいはふ義なるか故に尓の方そ神樂には切なるへき拾遺集にも尓とあれは袁はいはふといふ詞にひかれて後になほされたるにやあらん○いはふとは神代卷に奉斉(齋)二字をいはひまつらむとよみ又齋主神号斉(齋)之大人八字をいはひぬしのかみをいはひのうしとまをすとよみ崇神紀に　祭祀二字をいはひまつるとよみ推古紀には此二字をいはひこと共よめり垂仁紀に齋宮二字をいはひのみやとよみ欽明紀に祭拜二字をいはひたまふとよみ天武紀に幣帛二字をいはひのみてくらとよまれたるかことく齋きよまはるをいふ詞也後世心にては袁といはてはうちあはぬ詞のこと

くおほゆへけれとさる詞にはあらさる事おもふへしこれは即日神をきたてまつることをおもはせていはふとはよまれたる也介牟とはすへて既往のことをうたかふ脚結なり此哥は榊葉に木綿をとりしてて神の御まへにいはひてたてまつるわさの人におきてかはかりのかしこきわさはなきか故に此わさをなしはしめけんはたか世の人そと共はしめたらん人のしらまほしきによみなされたる也

(義)もしこの神遊をはしめたらん人なかりせはよにあつなひの罪をとくへき道なからまし人みなその恩をおもへとの心をはかくはよめる也としるへし

末

霜八度於介止毛加礼奴榊葉乃多知左加由倍支神乃幾祢加毛

(言)古今集に出たるには二の句おけとかれせぬとあり　梁塵抄もまたしかりいつれにてもありぬへけれと　おけともかれぬの方ふるくみゆれは　かれせぬ後になほされたるにこそ　○　八度とはかならす八度にかきれるにはあらす神書に八の字をおほく用ひられしみなかそふる所をきはめられたる也いはゆる頭胸腹陰左右手足これなりくはしくは古事記燈にいへりこの故に數のきはまれるはかりあまたゝひなるよしを思はせて八度とはいふ也としるへし○於介止毛加禮奴とは

榊の常葉なるをいふ也おけとかれせぬといふはせぬはたゝ枯ぬといふへき所にかくいふ也しかれともその不枯に力をあらせていはむとする時の用なり○神乃幾袮とは續日本紀卅一光仁紀云御太政官院行大掌(嘗)之事中略參議從三位式部卿石上朝臣宅嗣立神稲杵云々とみえ千載集に　同し御時平治元年大掌(嘗)會主基方稲春哥丹波國雲田村をよめる刑部卿範兼　あめつちのきはめもしらぬ御代なれは雲田のむらのいねをこそつめ新古今集に　仁安元年大掌(嘗)會悠紀哥たてまつりけるに稲春哥皇后宮大夫俊成　あふみのやさかたのいねをかけつみて道ある御代のはしめにそつく同集に　仁安元年大掌(嘗)會主基方稲春哥丹波國雲田村をよめる權中納言兼光　かみ代よりけふのためとや八束穗になかたのいねのしなひそめけんこれらをあはせておもふに神のきねとは此神供の御稲をつく杵なるへし拾遺集に　延長四年八月廿四日民部卿清貫か六十賀中納言恒佐宴し侍ける時の屏風にかくらする所のうた貫之あし引の山のさか木葉ときはなるかけにさかゆる神のきねかな（家集にはかけにさかゆる神のきねかもとあり）これはこの哥をまねひてよまれたるなるへし此陰にのにもしにくらへておもふに　榊葉乃の乃もしはよせの乃にて榊葉のことくさかゆへき神のきねかもといふにて加毛は疑の加毛なるへし貫之か哥のにもしもこれにおなしく榊葉のときはなる陰のことくに（よせのになり）との心にてよめるにこそこれかれをおもへ

六帖
〽足引の山のさかきのときはなるかけにさかゆる神のきねかも
〽榊葉の常磐にしあれはなかけくに命たもてる神のきねかも

は此哥はいつの御代かはしらす必大掌(嘗)會の稲舂哥なるへし神のきねのさかゆとは卽大掌(嘗)をはきたてまつりてかくはいへるなり神の御稲のつく杵のさかえてなかく久しからは主上の御治世はかきりなくおはしますへけれはなり

(人)此哥はひとへに主上の寶筭とはなかくおはしまして御世ひさしくしろしめさむことをねかへる心をは神の杵によせてかくはよみふせたる也前にもいへるかことくこれは必大嘗の哥なるへけれは靈もかく神樂の主意にはあらすかしもとより此本末は或説とあれはいかなるゆゑかはしらねと榊のはしめの本末の外にまたうたふへき事ありて此二首をとられけるにやあらむ古今集もこの哥をのせられけれは私ならぬことゝはみゆれと神のきねなと神書にもより所なきをやかれおもふにこの本末は大嘗會の時清暑堂御神樂にうたひけむ哥なるを或説とてのせられたるにこそ江次第十五大掌(嘗)會條下云　次唱神樂哥（先和琴　次笛　次篳篥　次拍子　次取物　賢木　幣　杓　韓神）とあるこれ也されはこの本の歌も猶その時の本なるへし

幣

みてくらは上にいへるかことく手を坐として物さゝくるをいふなりされはそのさゝけ物をはやかてみてくらとはいふ也としるへし御神樂式には此幣の歌なし

本

幣波我尓波安良須天尓万須豊遠加姫乃美也乃美天具良

㊂此哥は拾遺集に出たり○幣波の波もし義はまへにいへるかことしもとこのさゝくる幣は我物そとおもへりしかさにはあらさるよしを思ひしりてその落ゐを下にいはんか爲なり我尓波とは我か幣にはといふを略ける也○天尓万須豊遠加姫これは天照大御神を申すと古説なりける神樂は日神をきたてまつるわさなれは必これ日神の御名なるへけれと神書をはしめ古書ともにみえぬ御名也されはこの神名の義をおもふに豊はいと多く神名にかゝふらせたる詞にてその義豊稔にあへる人の心をもて神德を思はせむか爲也遠加は遠伎(ママ)のかよへるにて招奉る義にてやたゝへられけむ返々いへるかことく日神は人々遠伎たてまつるへき神におはしますか故の御名にこそ姫とは女神にましませはなり此三四五の句は卽初句の波もしの落居をいふにてひとへにこの一首の意は幣はわか幣にはあらすしてもとより日神の宮の幣なりとおもひしれりし心によみふせたる也されはわか幣にてわかたてまつるとおもひしはあやまれりと思ひし心なりとしるへし

㊇これは日神に幣たてまつるへきことをすゝめたる心也もと神に幣たてまつらんはあらはに

すゝめたり共さてありぬへきことのことくなれと前にいへるかことくたとひその人の爲よかるへく我にいさゝか私なき事とてもあらはにいひては人の心に通徹すましけれはもと幣はわか幣にはあらすしてもとより日神の幣なりとおもへとの心によみふせたる也もとより日神の幣ならはたてまつるへき事いふもさらなれはおのつからすゝむる心となる事よく思ふへしおほかた神昔石屋戸之件に幣たてまつる事をとかれたるくはしくは古事記燈にいへるをみるへしその大意はひとへにわか方をはしめとすましき御教なり他域の教ともにたかふ所はもはらこゝにありけにおのれより端をおこせる事の成りて久しきためしこゝに古今になき事也大業を成して子孫に長くつたへられたる人はおのつからわか御教にかなひてもはらかなたより起を取れりよく／＼思ひしるへき事なりまへの榊の本末二首（これは或説二首をのそきていふなり）もはら人に神樂をすゝめられたる言靈にて此幣の哥をそれに次（ツイテ）られたるは日神をきたてまつるはしめまつわれより事の端をおこすことをせしと決する事肝要なるか故なりいかはかりをきたてまつらんとすとも端を我よりおこさむとする心あらは益なかるへしこゝをもて榊幣の次序をおもふへし

末

幣尒奈良萬志物乎皇神乃御手尒止良礼天奈豆左波畱倍幾

○これまた拾遺集に出て終句 なつさはましをとありこの拾遺集のは論なし へきといふはいかにあやまり傳へられたりけんかうやうの格はへくといふを常とす梁塵注秘抄にはなつさはるへくとあるを正しとすへし○幣尓奈良万志物乎とはわか身の幣にならまほしきをいふ也物をといふはすへてしかせむと思へとしかせられぬよしをなけく詞なり○皇神とは廣くさし奉るたゝへなからこゝはなほ日神をさしたてまつれる也皇の字はもとかりてあてたるもしにてすへて統る心なり此故に天子をすめらきすめろきなと申たてまつる也神をすへ神と申すは諸神をすへさせ給ふ御たまのおはしますを申す也としるへし神代卷に 五百箇(脩)御統とかゝれたる須麻流は卽須夫流と同し詞なり須弁とも須女ともいふは通音なれは也奈倍天奈女天なとかよはしていふにおなし○御手尓止良礼天とはたてまつりてのうへをいふ也神にましませはもとより御手にとらせたまはむ事あらんともなけれとたてまつれる幣なれは御手にもとらせたまはむ事にしてよめる也人事のうへになして言をつくる事神書の書法つねにかくのことし無形のうへは象る事かたきか故に人事をもてかたとらるゝなりとしるへし○奈豆左波留倍久とはなつさふといふ詞は上古よりいふ詞なり萬葉集卷六 海原之遠渡乎遊士之遊乎將見登魚津左比曾來之 同集卷九 暇有者魚津柴比渡向峯之櫻花毛折末思物緒なと猶例いと多し 此詞季吟翁はなれそふ心なりとい

ひ契沖あさりは携の義也といはれたり宣長翁は　此詞集中皆水にうかひ水をわたる事なと水にのみつけていへるに此卷九の哥のみ水のよしなく聞ゆれと長哥に瀧のうへのとあれはこゝも瀧川をわたる事なるへし中古物語文なとに人になれむつふ事にいへるはいたくうつりたる也といはれたりもと奈豆牟といふ詞は古事記神書に　堅庭者於向股踏那豆美如沫雪蹶散而云々　とあるをはしめにて　紀の哥に（校者云此間空白ナリ）　とあるを思ふになにゝもあれものゝ内へふみこみてのきかたきやうのかたちをいふ詞也左不とはそへていふにて奈豆は即この奈豆牟の奈豆なるへしされは宣長翁か水によれる詞とみられけんもこゝより起れる詞なれはけにさもあるへししかれとももと此詞を思ふに物にもあれ人にもあれふかくふみこみてのきかたき心をいふ詞なるへけれは水にもなにゝもいふ詞なるへしすてに神書なるは堅庭にふみ入たるをいへり人になれむつふもなほこの義をもて形容するなり左不良不不なといふ詞をそふるはすへてそのわさのつゝくかたちをいふなりたとはゝかへらふといふはたゝ一たひかへる事にはあらすなからふといふはたゝ一たひなかるゝ事にあらさるかことくこれもなつみ〳〵てのみあるさまを奈豆左不とはいふなるへし日神の御手にとりたまひてふかく（ママ）愛翫せらるゝことを奈豆左波留とはよめる也倍久とはすへてしかなりぬへきことをあらますに用ふる脚結なりおほかたかく哥の終に用

ひたるはかへりつめ上にかへりて落る哥のすかたをいふ也のことく心うへし皇神の御手にとられて愛翫せらるへきやうにと思ふから幣にわか身をなさまほしくおもへと幣にならんことのかたきよとよめるこゝろなりとしるへし所詮はわか奉る幣の皇神の御手になつさはるゝをうらやみたる心によみふせたる也拾(遺)遺集のなつさはましをはなつさはんと思ふにあたはぬよしをいふ也かくいふ時は上のならまし物をといふを三四五の句に今ひとたひくはしくいへる心となる也されはまし物をましをのふたつ下のましをは上のまし物をの中へいれ子といふかことくこもる也としるへしいつれにてもありぬへきか中に拾遺集のはその世になほされたるなるへけれはなつさはるへくといふ方たしかに聞ゆる也ことに取られてといへる禮なつさはるといへるともに被のこゝろにて取らるゝもなつさふもみな皇神の御心となれは自然なりなつさはましをと云はこなたよりなつさふ心となるか故におとるといはゝ劣るへきにや

㊋これは幣たてまつらは日神の厚くうけさせ給ふらん事をふかくおもふへしと幣たてまつる人の親切ならん事をさとさるゝ心なりもとより幣にならんことの叶ふへき事にもあらぬを御手にとられてなつさはるゝことをうらやみたるに言をつけられたる古人の手段といふへしけに大かた幣たてまつるをよきわさと心えてさゝくる人ありともまことに日神の御心からうけたまはむ

ことをふかく思はすは奉れるも猶むなしかるへけれは上の哥に此哥を次かれたる親切おもふへしかく日神のうけたまはむことはもはらおのれより端を起さぬ心のあつきにあるへしすこしもおのか力あり勢あるきはゝ端をかなたにとらむとする心かならす決しかたき物なりこれ日神のうけ給はぬ所なれは人々よく〳〵此哥の心をおもふへき也

大祓燈　全

北邊御杖大人著

大祓燈

須賀室藏梓

大祓祝詞

中臣祓詞とも云
毎朝となへて幸を得へし

本文

たかまのはらに、かむづまります、すめむつかむろぎかむろみの、みこともちて、やほよろづのかみたちを、かむつどへつどへたまひ、かむはかりはかりたまひて、わがすめみまのみことは、とよあしはらのみづほのくにを、やすくにとたひらけく、しろしめせとことよさしまつりき、かくよさしまつりしくにぬちに、あらぶるかむたちをば、かむとはしにとはしたまひ、かむはらひにはらひたまひて、こと〻ひしいはねきねたち、くさのかきはをもことやめて、あめのいはくらはなれ、あめのやへぐもを、いづのちわきにちわきて、あまくだしよさしまつりき、かくよさしまつりしよも

のくになかと、おほやまとひたかみのくにを、やすくにとさだめまつりて、したついはねにみやはしらふとしきたて、たかまのはらにちぎたかしりて、すめみまのみことの、みづのみあらかつかへまつりて、あめのみかげひのみかげとかくりまして、やすくにとたひらけく、しろしめさむくにぬちに、なりいでむあめのますひとらが、あやまちおかしけむ、くさ〲のつみごとは、あまつつみとは、あはなち、みぞうめ、ひはなち、しきまき、くしさし、いきはぎ、さかはぎ、くそべ、こゝだくのつみを、あまつつみとのりわけて、くにつつみとは、いきはだゝち、しにはだたち、しらひと、こくみ、おのがはゝおかすつみ、おのがこおかすつみ（マヽ）はゝとことおかすつみ、ことはゝとおかすつみ、けものおかすつみ、はふむしのわざはひ、たかつかみのわざはひ、たかつとりのわざはひ、けものたふし、まじものせるつみ、こゝだくのつみいてむ、かくいでば　あまつのりごともて、おほなかとみ、

あまつかなぎを、もとうちきり、すゑうちたちて、ちくらのおきくらに、おきたらはして、あまつすがそを、もとかりたち、すゑかりきりて、やつはりにとりさきて、あまつのりとのふとのりごとをのれ、かくのらば、あまつかみは、あまのいはとをおしひらきて、あまのやへぐもを、いづのちわきにちわきてきこしめさむ、くにつかみは、たかやまのすゑ、ひきやまのすゑにのぼりまして、たかやまのいほり、ひきやまのいほりを、かきわけてきこしめさむ、かくきこしめしてば、すめみまのみことの、みかどをはじめて、あめのした、よものくにゝは、つみといふつみはあらじと、しなどのかぜの、あまのやへぐもを、ふきはなつことのごとく、あしたのみきり、ゆふへのみきりを、あさかせゆふかせの、ふきはらふことのごとく、おほつべにをるおほぶねを、へときはなち、ともときはなち、おほうなばらに、おしはなつことのごとく、をちかたのしげきがもとを、やきがまの

とがまもちて、うちはらふことのごとく、のこれるつみはあらじと、はらひたまへきよめたまふことを、たかやまのすゑ、ひきやまのすゑより、さくなだりにおちたぎつ、はやかはのせにます、せおりつひめといふかみ、おほうなばらにもちいでなむ、かくもちいでゆかば、あらしほのしほのやほぢの、やしほぢのしほのやほあひにます、はやあきつひめといふかみ、もちかゞのみてむ、かくかゞのみてば、いぶきどにます、いぶきどぬしといふかみ、ねのくにそこのくにゝいぶきはなちてむ、かくいぶきはなちてば、ねのくにそこのくにゝます、はやさすらひめといふかみ、さすらひうしなひてむ、かくうしなひてば、すめらがみかどにつかへまつる、つかさ〴〵ひとたちをは、(ママ)じめて、あめのしたよもには、けふよりはじめて、つみといふつみはあらじと、たかまのはらに、みゝふりたて、きくものとうまひきたてゝ、ことしみなづきつごもりの日のゆふひのくだちのおほはらひに、

はらひたまへきよめたまふことを、もろもろきこしめせとのりたまふ、

杖	裳	褌	左手纒
帯	衣	冠	右手纒

身ニツケル物、手ニ持タル物ヲ、ミナ〳〵ハラヒ捨ルマネビヲ、紙ニカキテ流ス
又ヒタヒヲヌラシテ、身ヲソヽグマネビヲスル
祓ノノリトゴトヲ、中臣高声ニヨミアグル

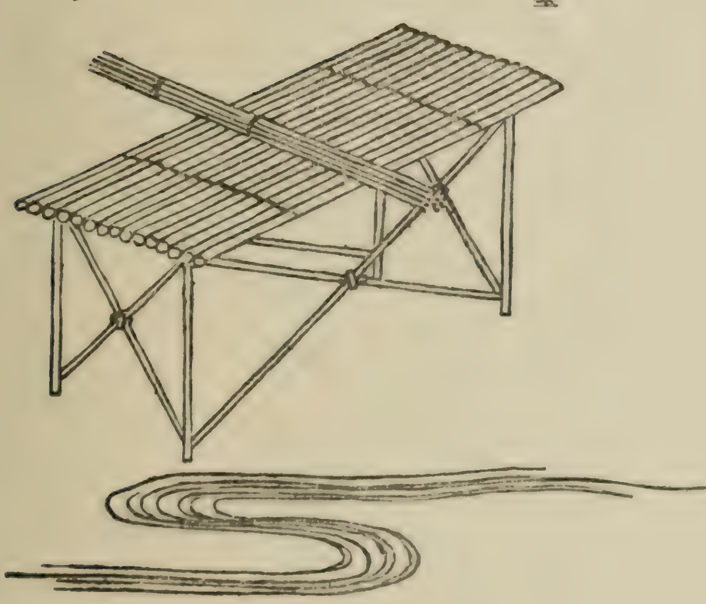
ハラヒツモノ



紙ニテカヤウノ物ヲシ、我心ノタヨリ、心ノタノミニナシ、ヿヲ、心デ此中ヘコメオキ、息フキカケツナデタリシテ、オキクラノ臺ノウヘニ乗スル時、忌部スガソニテ、ハラヒテ後、コレヲモ川ヘ流スナリ

シモト臺

スガソ



（マヽ）
拔の儀式圖說等者、上古の趣を形容するのみ、此外後世さま〲附會の說あれど取用へからす

○天津神國津神とは、天地の神の如くなれとも人間にも神氣ある也、我神氣を天津神といひ、向ふの人の神氣を國津神と取べし、我を天といひ、彼を地といふは、元　神武天皇の御心法にて、世々天子の御敎なれは、上樣を天とし、萬民を地となされたる也、それを下々へ取直して御をしへを用る也、然れば人有て後、天地の名もあるなれば、人にも神氣なくては叶はす、我と人との間に寄妙の（マヽ）はたらきあるを、神とはいふとしるべし、諸社に祭る所は、天津神地津祇を勸請せるなれば信し崇ふべし、信するに應じて其感應も効し、我人の神氣も同じ天地の神なれば、おろそかにすべからす、みだるべからず

六月晦大祓

十二月晦日モ同シ、中臣祓詞トモ云
名越祓トモ云、名越ハ和ナリ、人心ヲ
和スヿナリ

前文九十一字アレトモコヽニ用ナケレハ省ク

高天原尓神留坐 高天原トハ、天地ヲ開ク事ナリ我ハ天ニシテ、彼ガ心ヲ心トシ地トスルナレバ、彼モ又我心ヲ天トシテ、我身ヲ地トシ囯トス、斯シテ互ニ助ケ合ヲ天地ヲ開クトハイフナリ、本天地昇降ノ氣ノ中ヨリソノ氣ヲウケ継テ出仕シタル此身ナレハ、彼ト我トノ組合ヲ放レテハ一日モ立ツヿ能ハズ、一分ノ力ワザハ物事成就セズ、是恐多クモ上ハ民ヲアハレミ玉ヒ、下ハ我業ヲツトメテ、上ヘノ納リヨキ事ヲ思ヒ、ワヅカノ暮シニテモ、主従、親子、互ノ持合、スナハチ天地ト同シク實ニ長久ノ道ナリ、然ルニコノ扶助合中カラ妙ナル工夫ノ出クルヲ神トハ云ナリ、元來高天原トハ外側ナレトモ内ヲフクミ、幽ナレトモ顕ヲ兼昼ナレトモ夜ヲタモチタリ、スベテイヘバ目ニモカヽリソノ事ノキコエモスルヿナリ、畢竟ハ我體ト心トノヿトスベシソノ高天原ニ坐ス神トハ、見エズ聞エズシテ妙用アルヲイフ、又古事記ノ初段ニトケル三神ニシテ、幽顕モ兼備リタル至極ノ神氣ナリ〇ツマリマスハ、集リマスト云心ナリ、今鎮坐ト云ニ同シ、物シラヌ陰陽師ナトハ、神トヾマリマスト云ナリ、止リタル神ハ死物ノ如シ、マコトノ神ハトヽマル事ハナキナリ、我ニモ彼ニモ神集リマスト心得ヘシ

皇親神漏伎神漏美

命以天スメハ、スベテナリ、人ト我トムツビシタシムヲ、スベムツトハ云、ロハ等ナリ、神等ノウチ、伎ト美トハ君ナリ幽顕ヲ兼備ヘタル名ナリ、伊邪那伎伊邪那美ノ神ト同シク、神氣ノ中ニ、初ノ君ト云ガ如シ、ミコトモチテトハ、其君ノ仰付ラル、ミコトノリ也、幽カ顕カ、片一方ナル所ニハイマサヌ神ナリ

八百萬神等乎神集集賜比

神議議賜氏八百萬神トハ、普ク世間ノ人ナリ、神集ハ、心ノ内ニテ集メテ、神議リト、目ニ見エヌ所ニテ議勘ヘテ見レハ、皆名ノ欲ト、利ノ欲トノナキハアラズ、名ノ欲トハ、善事ヲスル名聞ノ欲ナリ、利欲トハ、身勝手ヲスルモロ〳〵ノ悪事ナリ、是ヲ名利トモ、是非トモ、善悪トモ云ナリ

我皇孫之命波豊葦原乃水穂之國乎安國止平久所知食止事依奉岐

我トハ、シタシミイフ詞ニテ、我國、我朝ナト、云類ナリ、マヅ詞ノ表ニテ云時ハ、天ニ坐ス御先祖ノ神カ、今ノ天子様ニ、此日本ヲ平ラケクタモチ玉ヘト言葉ヲヨセタマフト也、コノ詞ノウチ、裏ハタトハヾ、下々ナラバ、家一軒ノ主ガ、先祖カラノ家相續シテ居ルゴトクナリ

如此依志奉志國中尓荒振神等乎波

国中トハ、知音、知巳(マヽ)ノ中ナリ、荒フル神タチトハ、中ノワルイ踈遠ナ人、寄ツカヌ人、ケ様ノ人ノ名利ノ欲ヲ、思ヒヨラヌ陰カラタスケテ、彼ガ望ノ達スルヤウニスルガ神道ナレバ、此荒フル神ヲ目當ニスルナリ、彼ガ欲ヲ活シテ育ルユヱ、難義來ラズ、国タヒラカナリ

神問志尓

問志賜　神問シトハ、詞ニテ問ハズシテ、心ニテトフナリ、推察ノゴトシ、○神問シニスレバ荒ブル神ナシ

神掃尓掃賜比氐　彼カ隠シテ居ル望ノ欲ヲ、考ヘテ知レタル時アリ、又我ニモ、言ニイハレヌ望ノ大事アリ、ソノ所ニ於テ、我頼ミニ思ヒ置シ事其ヲ、サツハリト肩惜ミナシニ、心ノ内ニテハラヒステ何モカモ止メニシテ、推察シタル彼ガ欲ヲ、カゲカラ達シテヤレハ彼ガ心ノウチニ深ク徹スルユヱ、其恩ヲ思ヒテ又我望ノ事ガ我難義ヲ、陰ニナリテ為ヨキヤウニシキタル也

語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氐　言問草木石根トハ、カケモカマハヌ世間ノ人ガ、何ノカノト評判スルモノナレモ、神問ニシテ、神ハラヒスル、陰デノ助ケ合ユヱ、アノ人トアノ人トハ、殊ノ外中ガ好過ルト世間ノ人モイハズ、又助ケ合ヤウナ顔モセヌユヱ、傍カラ何トモイハヌヲ言止テトハ云ナリ

天之磐座放　天ハ我ナリ、石倉トハ動カヌタトヘナリ、我今マデ斯ガヨイト思ヒツメタル理屈ヲ放レ捨テ見ルヿナリ

天之八重雲乎　八欲ニ應ジテ、好ヤウニ、彼カライタシ來ルモ、我カラ彼ヘ遣ルモ、同ジク八重雲トイフ

伊頭乃千別尓千別氐　イヅトハ威ノアルヿ、又キツハリトシタヿニテ、チハ道ナリ、名欲四ツ、利欲四ツ、其中デモ殊ニ重ンズル欲ノ筋道ヲキツト分テ、タスケテヤルナリ

天降依佐志奉支　彼ガイヒ出シタル欲ノ、其ハシヲチラリト見付テ、其義ヲ叶ヘヤラント思フ神氣ヲ天降依ザストイフ

如此久依佐志奉志四方之國

中登国中トハ體ノ事ニテ、ヨサシマツルトハ斯シタガヨイト、神心カラ體ニイヒ付ケ玉フ意大倭日高見之國平彼モ、我モ、長久ニセント思ヒ立タル、
俊傑ノ居ルヘキ所ノ名ナリ、大和ハ人皇ノ初リ　神武天皇ノ、都シ玉ヒシ所ナレバナリ、日高見モ同シ訳ト心得テヨシ安國止定奉氐斯スレバ心身共ニ安ク定ル下津
磐根尓宮柱太敷立彼ガ欲ノ奥ノ動カヌ所ヲ、下津石根ト云、宮柱古昔ハ堀込ニテ、彼ガ地ノ中ヘ、太ク我ガ方ヨリ行届クヤウニテ高天原尓千
木高知氐千木ハ氷椽ト同シ事ニテ、垂木ノ餘リ屋根ノ上ヘ出テ、今モ神社ノ棟ニソノ形ノコレリ、是ハ下ヨリ天ノ我方ヘ、彼ヨリ行届クヤウニスルナリ、此ノ氷椽ト柱トガ、則彼ト
我トノ組合ヲタトヘタル也皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐ミヅノ御アラカトハ、美麗御殿ナリ、上様ノ御殿ヲイフ、祓ヲスルハ欲ヲ出サズ
ニ、外ノキレイナルヲ云天之御陰日之御陰止隠坐氐安國止平氣久所知食武天モ、日モ、外側ノ表ムキ明ラ
カナル天照大御神也、蔭ト隠坐トハ、内ウラノクラキ、月弓命ナリ故ニ、内ト外、明ラカト暗キ
ト、夜ト昼ト、是ガ則天ト地ト也、彼ノ月弓ノ命ヲ、我明ラカニテタスケ、我クラキ所ヲ、彼ノ天
照大御神カラ助ケ合、仍テ幽ト顕トノ備リタル天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇々藝命トモ申
スナリ、斯ノ如クスレバ、安國ト平ラカニ成ベキマヽ、始ヨリ説タル通リニセヨトノ御教ナリ○コ

國中尓成出武

レマデヲバ、祓ノ序文ト見ルヘシ、祓ハ善惡トモニハラヒ捨ルナリ、ハラヒ玉ヘハ善ハラヒ也キヨメタマヘハ惡ハラヒナリ、惡解除善解除ノヿ履中紀ニ見

過犯家牟雑雑罪

天之益人等我 國中ニト云迄ニテ句ヲ切テヨムベシ、益人トハ、天ノ下ノアマタノ人ナリ、死ルヨリモ生ル、ガ多ケレバ益人ト云

事波 明ガ好ハ、内外共ニ立派ニシタガリ、欲ノ深キハ、内外共ニ身勝手ヲシテ、内外ノ分チナク、彼ト我トノ行違工合ヲシラヌユヱ、様々ノ罪出來ルトナリ、コレヲ混沌未分ノ人トハ云トシルベシ

天津罪止 善ト思フ方ノ罪ナリ、コレ幽欲也、表ニツキテ顕ノ害生スル事ナリ、

畔放 アハ今云アゼ也、田ト田トノ境、又水ヲ貯置用意ナルヲ、取放チテ破レニ及ハシム

溝埋 田ニカクル水筋ヲ埋ルナリ

樋放 樋ハ水ノ出シ入ノ手當、コレヲモ取ハナツナリ

頻蒔 種ヲシゲク蒔トキハ子ナラズ

串刺 惡キ田ノ中ニハ串ノ如キモノ有テ足ヲバ疾ムルナリ、上田ニモ其如クセント、竹串ヲサスヿナリ○天津罪ニ、田ノヿヲ云タルハ、田ハ食物ノ本也、大切ノ神事ハ皆食物ノ事也、大嘗會、新嘗會、神今食、其外ノ神事皆食物ニ關係ス、祈年祭ノ白猪、春日ノ社ノ御祭ニ、鹽鯛、酒、兎、狸、ナド奉ルカ如シ、食物ハ人命ヲ養フ大切ノモノニシテ、彼ノ地中ヨリ生シテ、我心ニ叶フヤウニシテ來ルモノ故ナリ、民ノ心カラ上様ノ心ニ叶フヤウニシテ來ルユヱ、天位ヲモ継セ玉フ也、下々ニテイヘバ、手代ガ實体ニ働ク故主人モ立ツ也其本ナル田ヲ斯ノ如ク損スル時ハ、彼ト我トノ中アシクナルト也

生剝逆剝 働キ

プリヲ見テカラ、賃ヲ遣ント云ハ順ノ様ナレドモ、神道ニテハ、マヅ彼ガ望ム所ノ叶フヤウニ、先ニ究レバ、催促セザレドモ、オノヅカラ彼如才ナク働クモノナリ、小兒ニ灸スウルガ如シ、コレヲ我道ノ順トス、此順ナラヌヲ逆剥ノ罪ト云イキハギノサカハギナリ一事ヲ云詞ナリ○**屎戸**ヘハ辺ナリ、又竈ナリ、食物ハ彼我ノ間ノ和合ナルヲ、其場所ヲ屎所ト穢スコナリ、人才ノ器用ノ用ヒ所ヲ失フ事ナリ

許々太久乃罪乎巨多ノ罪ト云コニテ、コノ外ニモアマタ有ト也

天津罪止法別氣氐天津罪ハ素盞鳴尊天ニテ犯シ玉ヒシ罪ナリ、法ハ詔ナリ、詔ワケトハ、神ヨリ命シ玉フコ也、国津罪ニハ此文ナシ意味考知ヘシ

國津罪止ハ惡キコト思ヒナカラ犯ス罪ナリ、頭欲ナリ、裏ニツキテ幽ヨリ害生ス

生膚斷彼ガ斯シテモラヒタイト思フコヲ、推量シナガラ、我身勝手ニ引付テ、彼ガ望ヲ斷裁ヲ生肌斷ト云

死膚斷彼ヨリ詞ニ出シテ、斯シテ下サレタシト、表向ニ致來ルモ、我身勝手ニ引付テ、彼ガ望ヲ斷裁ヲ、死ハダタツトハイフ

白人古久美白人トハ、白肌トテ、白歴瘍ノコナリ、身勝手ノ外ヘ顕レタルハ、瘍ノ病ノ如シ、古久美トハ、瘜肉トテ、腫物、瘤ノ類ナリ、身勝手ヲ突出シタルハ、腫テモリ揚リタルカ如シ○白人ハ、癡人、コクミハ、頭欲ノワタカマリ也

巳母犯罪母トハ、此身ヲ產出シ養フノ名ナリ、主人カ親カ、商人職人ナラバ得意サキ、又旦那ト云ガゴトシ、其目上ノ方ヘ對シテ身勝手ヲナス、

是母ヲ犯ス罪

已子犯罪　子トハ、我手ニテ養ヒ置モノ、名也、家來カ、妹、弟、商人職人ナラバ、下職買サキ等ノ類ヒノ如シ、ソノ目下ノ方ヘ對シテ身勝手ヲナス、是子ヲ犯ス罪ナリ

母與子犯罪　目上ノ方ヘモ、目下ノ方ヘモ身勝手ヲ、ナスヿナリ

子與母犯罪　目下ノ方デスル我マヽヲ目上ノ方デ致シ、目上ノ方デスル身勝手ヲ目下ノ方デナス也、タトヘバ目下ノ方ナラバ理屈詰ニ、押ヘツケテ取批ルベキヲ、目上ノ方ヘ持行、諂ラヒ僞リテ取掠ルノ類、又目上ノ方ナラバ、我賢トシテ我ヲ用ヒ玉フヲ功ニキテ威勢ヲフベキヲ、目下ノ方ニテ我ヲ用ヒヌモノニハ格別ノ讐ヲナスノ類ヒナリ

畜犯罪　畜トハ、人家ニ養ヒテ用ヲナス馬牛雞犬ノ類ナリ、コレラノ情態ヲ推知セズシテ我身勝手ニテ征促ルヿナリ

昆蟲乃災　ハフ虫トハ、呉公、蛇ノ類ヒ、神典ニ八俣遠呂智ヲ解ガ如ク、名欲、利欲等、身勝手ノ固リノ顕レタル象ナリ、仍テ災ノ來ルコト疑ヒナシ

高津神乃災　高津神ハ高木神ナリ、譽ラレタイノ身勝手ニハ、イツモ高木神ノ矢ニ中テ死ル也

高津鳥乃災　雉子ナリ、人ニ對シテアタリ障リ構ハズニ、ケン／＼トモノヲ言ヘバ忽射殺サルヽ災アリ

畜仆志　畜ハ前ニ注ス仆スハ殺スコトナリ

蟲物爲罪　マジ物トハ兕モノ也、西国、四国ノ邊ニアル狗神遣ノ類ヒニテ、人ノ目ヲチラツカシテ、吾ガ得手勝手ヲスル罪ナリ、此タグヒ今世ニ多シ

許々太久乃罪出武　スベテ此国津罪ハ、道理ハヅレノ身勝手バカリ擧タリ、災來ルヿ疑ナシ

如此出波天津宣事以氐神ノ御心ノ仰付ラレニテ、祓スベシトナリ**大中臣**右ノ如ク神道ヲ下々ヘ教ヘ導キ、又御政道ノ、禁制、法度ヿ、刑罪等ヲ司ル重キ役目ニテ、今ノ藤原家ノ御先祖ナリ、則チ天津ノリゴトトハ、悉クイヒ付ケネドモ、褒賞ヲ與ヘ、刑罰ヲ加フルヿ、實ニ明白ナリ○官ノ中臣ト、氏ノ中臣トノ差別アリ、中ツ臣ト云ヲ、中トミト約メテ云、善祓悪祓ヲシテ、中ヲ持テ君ニ仕ヘ、下ニ及ホスヲ中臣ト云**天津金木乎**是ヨリソノ宣事ノ仕様ヲ云、金木トハ細キ柴ノゴトキ木也、又若木ヲカナ木ト云、カネテ木ニナルヘキ細柴ナレバ、豫木ト云心也、天津トハ、屈曲ナシニ、正直ナルヿナリ**本打切末打斷氐**其若木ノ、足ラハヌモ、行過タルモ、切タチテ、幽顕ニ傾カズ、中ヲトル**千座置座尓置足波志氐**ソノ若木ヲ並ヘテ臺ヲスル也、圖前ニ出ス千座ハ多キヿ也、彼ガアマタノ欲ヲ引受ル臺也、ソノ臺ノウヘニ、十分置居ルナリ**天津菅曾乎本苅斷末苅切氐**菅ハ、スガ〳〵シキトイフヿニテ、心ノサツハリトシタルガ如シ、又菅ハソゲ也割テ用ルユヱ、スガソト云、コレモ割ハ味フ心ナリ**八針尓取辟氐**菅ヲサクニハ針ニテスレバ斯イフ也、彼ガ八欲ヲサキワリテ我臺ニ乗セ引ウケテ、悉ク彼欲ヲ我身勝手ニ傾カズシテ達シヤレバ、サツハリト拂フナリ**天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼**天津祝詞トハ、神ノ心ノイヒ付ナリ太詔言トハ、善悪共ニ我腹ノ内ニ收メテ、彼ガ欲ノ、ドノヤウナ筋

ヲモ達シテ見セント飲込ガ如シ

如此久乃良波斯ノ如ク心得ナバ　天津神波幽神ニテ、ワガ神氣ナリ　天磐門乎押披氐天ハ幽也、磐門ハ動カヌ戸ナリ　天之八重雲乎前ニ注ス　伊頭乃千別尓千別氐所聞食武別トハ、能徹スル義也　國津神波彼ガ方ノ神氣ナリ　高山之末短山之末尓上坐氐高低ノ山ハ、彼ガ名利ノ二欲、又深キ淺キ欲ナリ、其所ヘ上リマシテトハ、其欲ヲ出サラ〳〵トスル也、其欲ノ筋ヲ、イヅノチワキト、キツト筋ヲ分テ徹スルヤウニ、神言トテ、天津祝詞ノ、太祝言ヲ以テ、陰カラ聞カスルナリ、顕ハニ言ヘバ、手柄ラシウ成テ、人ニ譽ラルヽ故、拂フコトヲ忘レテ常夜ヘユクナリ、油斷スベカラズ　高山之伊穂理短山之伊穂理乎掻別氐イホリハ、息アラハル、ト云ヿニテ、地ヨリ立ノボル霧ノ如シ、天ノ雲ト、国ノ霧ト、對ニ書タルナリ、彼我共ニイハズニスル故、何ヤラモヤ〳〵ト烟ノ如キ中ヲ掻別テ聞スルト也　所聞食武アラハニイヘバ、傍ニ合点セヌ者アリ、無言デキカセテハ、国津神モ、天津神モ兩方トモキコシメス也

○是神武紀ニ所謂諷歌倒語ナリ

如此所聞食氐波皇御孫之命乃朝廷乎始氐 天津ノ方、是幽也 天下四方國尓波 国津ノ方、是顕也、罪止云布罪波不在止 彼ヨリモ、我ヨリモ、名利ノ二欲ヲ達シテ、皆中ヨシニナル故、無罪トナル 科戸之風乃 風神級長戸邊命ヲ略シテ、シナドノ風ト云 天之八重雲乎吹放事之如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久 科戸ノ風トイフヨリ下ハ天津ノ方、則幽也 大津邊尓居大船乎舳解放艫解放氐 舳ハ船首 艫ハ船尾 大海原尓押放事之如久 津ノベト云ヨリ下ハ国津ノ方、即顕也 彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氐打掃事之如久 ヲチ方ハ遠方ナリ、ヤキ鎌ノトガマハ、燒ノヨキ、ヨクキル、鎌ナリ、此所モ又国津ノ方 遺罪波不在止 我腹ノ内ノ二欲ヲ出スヿハナラズ、如何セムト困タガ、我欲ガ則人ノ爲ニナルト思ヘバ、何デモ無事也、人ノ爲ヲスレバ、イツデモ我ガ爲ニナル、君ヲ思フモ身ヲ思フト云俗語ニ叶ヘド、身ヲ思フヿガ深ク强クナケレバ、君ヲ思フヿガ淺クテ弱クナルナリ 祓給淸給事乎 ハライハ幽ニテ善祓也、キヨメハ顕ニテ惡祓也、事ヲヨク祓淸メテ、天理人欲サリシヿヲ、給トイフ

高山之末短山之末與利佐久那太理尓落多岐都 佐久ハ狭ク也、那太理ハナタレ、多岐都ハ瀧津也、逆垂ニ落沸也、山ハ欲ヲ突出タル形ノタトヘナレバ、祓ヲスレバ欲ノ方ガ、海ノ方へ逆落ニ下ルカタチ、欲ヲ欲デナイト思フ故、詞ニ出シ、又其行ヒヲ爲ルデ罪トナル、欲ヲ欲ト知レバ罪ハナキ也、コヽハ欲ヲダン〳〵外へ出サヌヤウニナル貌 速川之瀬坐須瀬織津比咩止云神 セオリハ瀬下ナリ、段々海へ下ル道スヂ 大海原尓持出奈武 段々流レ下リテ海ノ沖へ持出ス

如此持出往波荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會尓坐須 八百道、八百會、ミナ八欲ノ根元ニテ、海中ノ道ナリ、カク潮ヲイクツモ重ネテイヒタルハ、澳ノ方ヲカケテ云 速開津比咩止云神 水戸神ナリ、川ヨリ海へ入口ノ早ク開クト云ヿニテ早開ナリ、姫トハ、受ル方ノ名ナリ、受ルトハ、彼ノ色々ノ欲望ガ、段々ト流ニ隨ヒ大海ニユク所 持可可呑氏武 ガブ〳〵ト飲ナリ、サツハリト無ナル

如此久可可呑氏波氣吹戸尓坐須氣吹戸主止云神 呑テ後息吹カタチヲイブキト云 根之國底之

國尓氣吹放氏牟心ノ根、欲ノ底モ吹放テシマフ

如此久氣吹放氏波根之國底之國尓坐速佐須良比咩登云神持佐須良比失氏牟 サスラヒハ流離ナリ、サスラヒ失フハ、海ノ奥底、則心ノ根ニアル欲モ、スツハリトナクナル

如此久失氏波天皇我朝廷尓仕奉留官官人等乎始氏天下四方尓波自今日始氏罪止云布罪波不在止高天原尓耳振立聞物止馬牽立氏 馬ハヨク物ヲ聞モノナレバ、此祓ノ詞ヲ能キクタトヘニ出シタリ○高天ノ原ヘ聞カスルナリ

今年六月晦日夕日之降乃大祓尓祓給比淸給事乎 十二月晦日ニモ祓ヲスル也、正月朔日カラト、七月朔日カラト、半季ツヽ改ル

諸聞食止宣 貴賤ノ隔ナク誰々モナリ初ハキコシメサムコヽハキコシメセ也ノリ玉フハ神ノ命ヲモチテ大八洲シロシメス 天子様ノ仰ラルルヿナリ

四毛國卜部等大川道尓持退出氐祓却止宣

コノ所ニモ種々ノ説ハアレトモ心術ニ易ナケレバ省キヌ

いはまくもあやにかしこき大祓の注さく世にいとおほかめれと詞の考證故實をのみしるしあるはしとけなきふみもおほかりこは北邊のうしのをしへ子にさとされしきゝかきなるをとし比文庫のうちにつみおきたなるを櫻にちりはめて世にひろくし侍るになむ此燈よ光さやかにかゝけあけて世にてらしなは天の八衢たとりなく祭政一致の

大みことのりのかたはしをたに心えなむよすかとはならさらめや

赤松祐以謹てしるす

明治六年十二月刻成

須賀室藏

京都書林　鈴村德兵衛

乙葉宗兵衛

昭和十二年三月二十一日 印刷
昭和十二年三月二十五日 發行

東京市品川區上大崎長者丸二八四
國民精神文化研究所
電話高輪(44)二九〇一
二九〇八
二二六〇

（東京・早稻田 株式會社康文社印刷所印刷）